私に云ふ、對中掛りといふは、敵・味方互ひに相備へて、敵は味方かかり來の亂れなんとするを待ち、味方は敵のかかるを待ちて、敵・味方相對したる時、潛かに相圖定めて、遊兵・後軍の内より二三手ばかり、敵により所に依りて、左右より備へを遁ましめ、敵の前備への方へ出だすべし、敵動かずと云ふ事なし。動く時は、前より直に戰ひを始め、勝ちを一時に決すべし、不勝といふ事なし。是れは大軍に計り限らず、たとへ小勢に備へたるといふとも、敵・味方對の備成る時は此の備へを用ふべし」

たいちゅう・たいふ 〔大中大夫〕（名）從四位上の唐名。拾芥抄中左「從四位上、大中大夫」

だいちゅうどうじ 〔大中童子〕（名）大童子と中童子と。おほわらはと中わらはと。大鏡「かん了の法師原・大中童子など、あはせて七八十人許りに」

だいちゅうふ 〔大中風〕（名）手おもき中風。東鑑「廿三、延應元年、平朝臣義村卒。頓死、大中風」

だいちゅん 〔大椿〕（名）下文の莊子より出でて、長壽なるにいふ語。椿壽。莊子逍遙「上古有大椿者、以八千歲爲春、以八千歲爲秋」

たいちょ 〔大著〕（名）大いなる著述。大規模の著作。すぐれてよき著述。

だいぢょ 〔大女〕（名）成人したる女子。東女中袖鏡「大女になる故に」

たいぢる 退治（他動）退治す。討ち平ぐ。

たいちん 〔對陣〕相對して陣取ること。信長譜「秀吉及び荒木攝津守隔谷與輝元、對陣」甲陽軍鑑「十二信長信玄には出向かふまじき事口惜しく候、あはれ信長對陣あれかしと被仰」宋史「方元慶江、進世忠與之對陣、以明暇示之」

たいぢん 〔滯陣〕一所に長く陣取ること。

たいぢん 〔退陣〕（名）一陣營を後方に引くこと。退きて陣すること。二軍隊を引き上ぐること。軍勢をまとめて退くこと。ぢんばらひ。退軍。清正記「秀吉公十二萬の勢を段段に備へ、夜の内にくり引にひかせ給ふ中略堀尾・加藤も退陣せんとせしに」三陣屋を立ち去ること。陣屋をまかり出づること。

だいちん 〔大鎮〕（名）一次條の略。東鑑「廿三、文暦元年八月八日、於新造精舍、被行拜謝祭等（大鎮）」二多く尼寺に置く僧職。鎮の一。其の職務大別當に同じといふ。玄蕃寮式「凡僧正、從僧五人中略法華寺大鎮、各從僧一人、沙彌一人、童子二人、三綱・少鎮、沙彌一人、童子二人、並用本寺物、供之」續紫三代格「三、天長元年十一月廿七日太政官符、右檢案內、中略今綱所從僕僧員、諸寺雜職、剩又大・中・少鎮、檢挍・目代等之類、其數殺雖」

だいちん・まつり 〔大鎮祭〕（名）陰陽家にて行ふ祭の一。

だいづ 〔黄大豆〕（名）【植】豆科、大豆屬の一年生草本。莖の高さ二三尺。葉は三箇の小葉より成れる羽狀複葉にして、莖と共に毛茸を密生す。夏日、葉腋に白色或ひは帶紫紅色の小蝶形花を開く。果實は莢にして毛を有す。種子は食用に供し、又、味噌・醬油・豆腐等の製造の料とし、莖葉を肥料、又は家畜の飼料とす。我が國諸方に栽培せらる。あきまめ。おほまめ。まめ。庭訓往來「三月、畠事、蕎麥・大豆・小豆・大角豆」

だいつう 〔大通〕（名）一人情に精通して物に拘泥せざること。又、其の人。淮南子「聖人無屈奇之服、無瑰異之行、服不視、行不觀、言不議、通而不識、窮而不憫、榮而不顯、隱而不窮、異而不見怪、容而與衆同、無以名之、此之謂大通」二遊興の道に精通すること。又、其の人。極めたる通人。

だいつうちしょうぶつ 〔大通智勝佛〕（名）佛語。法華經中に見ゆる佛の名。釋迦如來誕生會「我れは大通知勝佛、劫成世界の契りを造べず、阿羅羅仙人と現じ來れり」法華經化城「佛告諸比丘、乃往過去、無量無邊不可思議阿僧祇劫、爾時有佛、名大通智勝」

たいづき 〔隊附〕（名）軍隊に附屬せること。軍隊の實地の勤務に服すること。

たいづきかし 〔隊附下士〕（名）隊附勤務の下士。

たいづきさんむ 〔隊附勤務〕（名）軍隊に附屬して實地の勤務に服すること。隊附服務。陸軍大學校條例「第三、毎年八月より十月に亘り學生を各兵種の部隊に派遣し隊附勤務を爲さしむ隊附勤務は通常秋季演習を以て終りとす」

たいづきしゃうかう 〔隊附將校〕（名）隊附勤務の將校。

たいづきふくむ 〔隊附服務〕（名）たいづきさん（隊附勤務）に同じ。

だいづぐみ 〔第附〕（名）【植】あきぐみ（秋茱萸）の異名。

だいづけ 〔第附〕（名）かげとみ（影富）に同じ。寛天見聞記「谷中感應寺、目黑不動、湯島天神にて富興行あり中略おはなしおはなしと云ひて、一の富の番のみ書き付けて賣りありく事、市中竪横數十人に及べり。是れは富の札を買ひたる者の爲めにあらず、第付にして、一の富を當て物として、一錢・二錢を賭けにす、一文を八文にして取る割合にて、大欲の輩は大金を賭するも有り」

だいづけ 〔代附〕（名）商品に其の代價を付けしるすこと。ねだんづけ。世間手代氣質「だいづけを板行にして、背く得意方にくればれば」

だいづたか 〔大豆高〕（名）刈生の畑の年貢高。通常、大豆を納むるよりいふ。地方凡例錄「苅生畑は甲州郡內領に此の唱へあり中略高反別ありて、年貢は多分大豆を納むるに付き、村方にては大豆高とも云ふ」

だいつらだてん 〔提頭賴吒天〕（名）佛語。ぢこくてんわう（持國天王）の異稱。

たいてい 〔太弟〕（名）皇嗣たる天皇の御弟。皇太弟。皇年代略記「正治二年、号「立太弟」承元四年十一月廿五日、西園寺公經、受禪」

たいてい 〔苦底〕（名）こけのした（苔下）に同じ。こけ（苔）の條を見よ。謠「長「形をもとむれば、苔底が朽骨」

たいてい 〔台鼎〕（名）（三台星と三足の鼎との義にて、共に三公に譬へていふ）三公の稱。台槐。後漢書「位登台鼎」

たいてい 〔退廷〕朝廷又は法廷より退出すること。まかでること。刑事訴訟法「第百八十七、裁判長より退廷又は拘留を命せられたるとき」

たいてい 〔大底・大抵〕一おほかた。おほよそ。大概。大都。東鑑「四、文暦二年、西國者大底見之歟」史記「其治大抵、盡放溫舒」同「大抵盡武以不道」二ひととほり。なみなみ。普通。傾城島原蛙合戰「定めなき世の習ひとも、大體の事かいの」浮世親仁形氣「鬢ひげ白髮なる口から、大人げないといふは、たいていのこと」

だいていがく 〔大提學〕（名）經學院の職員。朝鮮總督の指揮監督を承け院務を總理するもの。經學院規程「第四、祭祀は朝鮮總督の指揮を承け大提學之を行ひ」同「第五、大提學は朝鮮總督の命を承け院務を總理す」

たいてう 〔大潮〕（名）おほしほ（大潮）に同じ。宋史「海潮、必盤越流注」

たいてう 〔退潮〕（名）ひきしほ。さげしほ。ひしほ。おちしほ。干潮。落潮。

たいてう 〔退朝〕朝廷、又は役所より退出すること。國語「公父文伯退朝、朝、其母」舊唐書「負、扆當陽、雖受宗枝之敬、退、朝私謁、仍用家人之禮」

だいてう 〔大鳥〕（名）大いなる鳥。史記「國中有大鳥」

たいてき 〔大敵〕（名）大勢の敵。極めて強き敵。逆歩色葉「大敵、甲陽軍鑑「大敵とは國五箇國・十箇國も持ちたる大將の事なり」史記「小敵之堅、大敵之禽也」

（諺）大敵を欺き、小敵を畏れよ 大敵と見れば計略を以て欺くべく、小敵と見るも侮りて油斷すること勿れ。太平記「大敵を見ては欺き、小勢を見ては畏れよと申す事是れ也」

（諺）大敵を見て懼るべからず 大敵を見るも、おぢおそるること勿れ。

たいてき 〔對敵〕一敵軍に當たること。敵に向かふこと。敵對。隋書「臨陣對敵、應變無方、號爲良將」二敵と對陣すること。敵軍と相對すること。魏志「今與人敵、當不動如山」三ひあて。今與。對手。

たいてつぶ 〔堆壘〕堆積く壘みあがること。又、うづたかく壘みあがること。堆積。糖霜譜「凡霜中略堆壘如假山者爲上」

たいてん 〔大典〕（名）一重大なる典禮。大いなる儀式。二重大なる法典。大法。大日本帝國憲法發布勅語「此の不磨の大典を宣布す」三古昔、太宰府の主典の上位。職員令「太宰府中略大典二人、掌受付上」

たいてん 〔對點〕（名）【數】球の直徑の兩端。

たいてん 〔戴天〕天を戴くこと。即ち、天が下に生存すること。「不俱戴天」禮記「曲禮」父之讐、弗與共戴天」

たいてん 〔退轉〕一移りかはりてわるくなること。あともどり。變遷。流轉。盛衰記「問答講」とて、今に退轉なし」同「堂堂の行法も悉く退轉す」狂言「此の三つの寶を取って歸らせられた。程久しい事なれば、蓑と笠とは退轉致す」涅槃經「心无退轉、即便前進」二零落して他に移轉すること。

たいでん 〔帶電〕【理】物體が電氣を帶び居ること。絹にて摩りたる硝子棒は輕體を吸引する性を表はす、此のとき硝子は摩擦によりて帶電したりといふ。發電。

だいてん 〔大篆〕（名）漢字の一體。支那、周の宣王の時、太史籀の創作せしものと。漢書「藝文志、周宣王大史、作大篆十五篇」

だいてん 〔大殿〕（名）だいごくでん（大極殿）の異稱。

だいてん 〔大典醫〕（名）明治二年八月二十日宮內省に置かれたる典醫の最上級。初め奏任なりしが、同五年八月二十日勅任官とし、同八年一月二十日廢せられたり。明治二年七月八日職員令「大典醫」

だいてんぐ 〔大天狗〕（名）一大いなる天狗。すぐれたる天狗。太平記「十八、高野不動、我慢・邪慢の大天狗共、如何にして人の心中に依託して、不退の行學を妨げんとしけれども」二極めて高慢なること。又、其の人。

たいでんたい 〔帶電體〕（名）【理】電氣を帶びたる物體。發電體。

だいてんもく 〔臺天目〕（名）臺に載せたる天目茶碗。臺子しきしやうの時、飾り樣の事「臺天目の習」茶道綾有傳「臺子、臺天目にて茶を飲むには、上客は臺ともに取りていただき、臺と天目との間にふくさ有るべし」

だいてんやく 〔大典鑰〕（名）典鑰の上位。職員令「中務省中略大典鑰二人」

だいてん・らく 〔大天樂〕（名）雅樂の道調曲の一。和名「道調曲の、大天樂」

たいと 〔泰斗〕（名）たいざん（泰山）の條を見よ。

たいと 〔大都〕一大なる都會。大都會。左傳「先王之制、大都不過參國之一」二おほかた。おほよそ。おほづ。大概。概略。大抵。下學集「大都」柳宗元文「今已三十七矣、長來憂日月益促、歲歲更甚、大都不過數十寒暑、則無此身矣」

たいど 〔堆土〕（名）うづたかく積みかさねたる土。又、うづたかく積みかさなりたる土。堆積土。

たいど 〔大度〕（名）度量の大いなること。胸のひろきこと。大量。史記「帶有大度、不事家人生產作業」

たいど 〔態度〕（名）一身ぶり。なりふり。やうす。かたち。すがた。姿態。列子「動作應度、無似物失者」荀子「容貌周旋、趨退趨行、由禮則雅」二身體のそなへ。からだのかまへ。みがまへ。三しうち。しかた。舉動。

だいど 〔代度〕（名）佛語。還俗の僧に代はるため、又は賤者の貴者に代はりて其の冥福を祈るために得度すること。又、其のもの。續紀「天寶元年、令僧辨紀還俗、代度一人」同「天平寶字元年、勅僧惠耀・信成、東樓、並還俗復本姓、代度各一人」

たいとう 〔大統〕（名）皇位の御系統。天つ日嗣。皇統。皇室典範「第三十、天皇支系より入て大統を承くるとき」後漢書「光武紀、春秋之義、立子以貴、東海王陽、皇后之子、宜承大統」

たいとう 〔苦磴〕（名）苔のむしたる石境。孟浩然詩「鈎磯平可望、苦磴滑難步」

たいとう 〔擡頭〕一頭をもたぐること。開天遺事「若立、身矮屋之下、使人擡頭不得」二上表などに、高貴の人に係る敬語を、普通の行よりも高く上に出だして書くこと。明律附解「第一擡頭、第二擡頭」

たいとう 〔對等〕雙方相均しきこと。對對。

だいどう 〔大同〕一大體同樣なること。莊子「天下、萬事畢同畢異、此之謂大同小異」二大勢の合同。

だいどう せいい 〔大同小異〕大體は同樣にして、小部分のみ異なること。莊子「天下、萬事畢同畢異、此之謂大同小異」

だいとうさい 〔大頭菜〕（名）【植】かぶら（蕪菁）に同じ。

だいどうじ 〔大童子〕（名）一年たけたる童子。宇津保「國譲」わかほふし十人、大どうじ卅人ばかり」榮華「初花」花山院の御事中略御供に、大どうじのおほきやかに年ねびたる四十人」二僧家にて召し使ふ童子にて、上童子の下、中童子の上にあるもの。宇治拾遺「うへわらは大童子にも劣りたり」著聞「大童子・法師ばら走りよ

り」發心集三「その僧都のもとに、年ごろ使ふ大童子ありけり」醍醐寺雜事記九「同寺大童「中童子四人、中大童子二人、大童子四人」

たいとう-でうやく 〔對等條約〕（名）〔法〕ごけいでうやく（互惠條約）に同じ。

だい-どうみやく 〔大動脈〕（名）〔醫〕次條の略。

だいどうみやく-かん 〔大動脈幹〕（名）〔醫〕心臟左室の大動脈口より出で、右上方に向かひて走り、彎曲して大動脈弓を形成し、胸椎體の左方に沿ひて下向し、分かれて左右の總腸骨動脈となるもの。

だいどうみやく-ぎゃう 〔大動脈弓〕（名）〔醫〕大動脈が上行してまた下行する分岐部。胸骨の後方に於て前右方より後左方に彎曲し、氣管・食道の前方にあり。

だい-とうりゃう 〔大統領〕（英 President）（名）共和政體を採る民主國にて、國民より選擧せられ、一定の年限間、其の國に於ける全般の行政を統轄する最高機關。明治七年七月二十五日太政官達第五十八號「締盟各國君主の稱號原語各種有之候處中華共和政治即ち米利堅佛蘭西西班牙瑞西秘魯等の如きは大統領と稱すへきこと」

だいとう-れき 〔大統曆〕（名）貞享元年四月二十九日宣明曆を廢してより、同年十一月二十八日まで用ひられたる曆。支那、明の太祖洪武十七年、漏刻博士元統の造りたるもの。貞享曆「貞享元年、權右中辨藤原朝臣晴光傳宣左大臣宣、奉勅、貞觀以降所被用曆、及二數百年、依二天推步差、修二宣明曆、可用二大統曆、伊二陰陽曆道等博士二者」

だい-どぎべ 〔大解部〕（名）ときべ（解部）を見よ。明治二年七月八日職員令「大解部」

たいとく 〔大德〕（名）大いなる道德、又は恩德。易經繫辭「天地之大德曰二生」詩經小雅「忘二我大德、思二我小怨」書經泰誓「不二矜二細行、終累二大德」

（諺）**大德は小怨をほろぼす** 恩德廣大なれば、僅小の怨恨は消滅す。

たいとく 〔體得〕（名）會得（えとく）すること。がてんすること。

たいどく 〔胎毒〕（名）小兒が母の胎内に在るときに受けたりといふ梅毒。脳物を發生す。

たいどく 〔體讀〕文字以外に、能く其の文書の眞意を體して讀むこと。轉じて、總ての僧の稱。だいとこ。字津保藤原「比叡の山に總持院の十禪師なる大とくのいふやう」大和物語「其の名をなん駿蓮大とくといひて、後までもきぶらひけり」枕草子「於中大國中有二大德比丘二」

だいどく 〔大德〕（名）一高德の僧。二かねもち。うとく。富有。

だいどく 〔大毒〕（名）非常に毒になること。

だいどくがく 〔大督學〕（名）明治五年九月十三日に置き、同十年一月十二日に廢せられたる督學の最上級。明治五年九月太政官布告二百六十二號「文部省中編輯寮被二廢、大中少督學被二置候事。大督學四等」

だいどく-くだし 〔胎毒下〕（名）小兒の胎毒を下だして治療する功ありといふ飲藥。

だい-とくげふせい 〔大得業生〕（名）一とくげふせい（得業生）を見よ。明治二年七月八日職員令「大得業生」二とくげふせい（得業生）を見よ。明治三年八月七日太政官御沙汰「大得業生、相當正八位」三明治四年八月二十四日工部省に置かれたる最上級の得業生。翌月二日大手と改稱せられたり。法令全書明治四年八月二十四日工部省相當表「大得業生」

だいとくし 〔題讀師〕（名）和歌の會にて題を讀み上ぐる役。東鑑五十文應二「今日和歌御會始、題讀師紙屋河二位」

だいとくじは 〔大德寺派〕（名）佛語。臨濟宗の一派。妙超禪師を派祖とし、山城國愛宕郡東榮竹大門村大德寺を本山となすもの。釋門事物紀原「臨濟宗。大德寺派」

だいとくじん 〔大德人〕（名）富有なる人。かねもち。平治「長田は大德人にて、世を何ふ者なれば」

だいとくわい 〔大都會〕（名）大いなる都會。大都。

だい-とこ 〔大德〕（名）だいとく（大德）に同じ。字津保「大とこたち・おんやうじなどきて、はらへし、讀經するほどに」蜻蛉日記「忌むこ・とうけ給ひし日、ある大とこの裝束をひきかけたりしまま」源夕顏「大とこの、摩たふとくて經打ちよみたるに」

だい-どこ 〔臺所〕（名）だいどころ（臺所）の略。

だいど-こめ 〔臺所女〕（名）【植】景天（けいてん）科の草本。莖の高さ四五寸。多く分岐して多少地に臥し、叢生狀をなす。莖・葉共に多肉、柔軟、葉は互生、小形、長楕圓狀なり。夏季、枝梢上に黃色、五瓣の小花を簇開す。我が國、海濱に自生す。

だいどころ 〔臺所〕（名）煮たき其の他、食物の調理に使用する室。くりや。だいどこ。かって。廚房。炊事場。庖厨。臺盤所。東鑑十八文治元年九月廿六日「六郎者於二臺所一、放火自殺」同十七寛喜四年、十二月廿八日「今追入之者逃參二幕府臺所一」徒然草「臺所の棚に、小土器に味噌の少し附きたるを見出でて」

だいどころ-がしら 〔臺所頭〕（名）江戸幕府の職名。御臺所の長。飲食物を調理することを掌る。明良帶錄「御臺所頭二百俵、職役料百俵」

だいどころ-かた 〔臺所方〕（名）一料理方。廚丁。二綾田・豐臣時代、庖廚の事を掌る職。臺所の衆。

だいどころ-ごぞぶね 〔臺所御座船〕（名）本船に附屬して、食物を調理する御座船。

だいどころに 〔臺所荷〕（名）臺所にて使用する雜具の荷物。丹波與作「臺所荷はつぎ傳馬、おつづら荷物は通し馬」

だいどころ-にん 〔臺所人〕（名）江戸時代の職名。煮炊・料理の事を掌りたる小役人。吏徵下御目見下、奥御膳所御臺所人九人、同上廚役役料十人、同上四十俵持扶持高」

だいどころ-の-しゅう 〔臺所衆〕（名）だいどころかた（臺所方）に同じ。卜齋記「秀吉公御代に、臺所の衆、朝は日の出に參り、臺など集め、前に鐘あり。其の鐘を撞かせ料理人など遣はし候」

だいどころ-の-とじ 〔臺所刀自〕（名）臺盤所の事を扱ふ下臈の女官。

だいどころ-はんとう 〔臺所番頭〕（名）めしたき男の長。

だいどころ-ぶぎゃう 〔臺所奉行〕（名）武家の職名。臺所の事を掌るもの。多門院日記天正十七年、十月十七日「關白殿七つ時分に御出で、成身院御宿所也。次兵衛浮田宰相公・細川兵部入道、公家衆れきれき御同道也。僧坊中寺內まで、悉く宿坊に取り候、是れは上の御臺所奉行とて、福住吉右衛門と云ふ人來たり、上下三十人餘有之歟」

だいどころ-ぶね 〔臺所船〕（名）本船に附屬して食事を調理する船。廚船。若風俗雜臺所船なる小者に、其の若衆の御名を略ねけるに」

だいどころ-もと 〔臺所許〕（名）臺所のある處。だいどころ。狂言文藏「汝は臺所もとにて、何やら甘い物を食べたといふが」

だいどころ-やかた 〔臺所屋形〕（名）屋形船の名所。ふなやかた（船屋形）を見よ。

だいどころ-をとこ 〔臺所男〕（名）臺所の事に使はるる男。めしたき男。みづし。みづし。

だいどころ-をんな 〔臺所女〕（名）みづしめ。みづし。くりやめ。下女。

だいとと-く 〔大都督〕（名）全軍を統率するもの。

だいとと-く-ふ 〔大都督府〕（名）だざいふ（太宰府）の唐名。職原抄上「太宰府（唐名、都督府）」

だいとともえ 〔臺巴〕（名）紋所の名。ともえ（巴）三を見よ。

だいとりやう 〔大度量〕（名）大なる度量。大氣。

たいとん 〔退遁〕にげしりぞくこと。にげさること。韓愈文「退二、逃既不獲、其志願之今、退將二遁而窮居」

たいな 〔大儺〕（名）古昔、十二月晦日の禁中の追儺に、黃金の四目の假面を被り、玄衣・朱裳を著し、右に戈を執り、左に楯を持ち、除陽師の祭文を讀み終はりたるとき、惡鬼を逐ふため儺摩を作し、戈を以て楯を擊つもの。大舍人の身體長大なる者よりこれを取る。儺長。方相氏。儀式十二月、除陽師進讀二祭文、其詞曰「中臣祓・紅心五節加久良波、大儺公小儺公、持二兵一、追走、飛殺食鬼、閉食鬼詔」

たい-ない 〔體內〕（名）からだのうち。

たい-ない 〔胎內〕（名）こぶくろのなか。はらのなか。はらごもり。胎中。盛衰記十九「人間生、老子は八十年胎內にはらまれて、明王の代を待ちけり」義經記三「郎劫國三、義經、母にて候ふもののたいないにやどりながら父にわかれて、果報拙きものなりとて」

たい-ない 〔對內〕（名）內部又は內國に對すること。（對外の對）

だい-ないき 〔大內記〕（名）內記の上位。職員令「中務省中務大內記二人、掌二詔勅、正六位上、四人」類聚三代格「太政官符、令二定二內記四人一。大內記二人、右定二正七位上官。少內記二人、右定二正七位上官。以前右大臣宣、奉勅如件。大同元年七月廿一日」字津保藤原「なぬかの日うちかうぶり賜はり、十一日に大內記になされ、春宮の學士になされなどして」

たいない-くぐり 〔胎內潛〕（名）一人の潛り得べき程の自然の洞穴。二夏越祓（ハラヘ）の時、神社の鳥居などに作りたる茅などの大なる輪を、參詣人にまたぎくぐらしむること。

だいないし 〔大內史〕（名）明治四年八月十日、太政官の正院に置かれたる職員。諸機務の文書・法案を勘査し、國史を修め、官記・位記等の事を掌るもの。正と權とあり、正官は勅任、權官は奏任とす。同八年九月二十二日廢せられたり。法令全書明治四年八月十日官制等級「大內史」

たいない-しゅけん 〔對內主權〕（名）【法】對外主權に對して、國內に於ける主權の行動の稱。

だい-なう 〔大腦〕（名）【醫】腦の大部分を占め、表面は卵圓形にして窪隆し、溝によりて分割せられたる許多の廻轉・隆起を有する柔軟なるもの。外部は灰白質中央に大腦縱裂ありて、左右の半球に分かる。身體中、最高の器官にして、運動・五官・考慮・感覺・意志等を掌る。其の重量は動物の高下によりて差あり。人類にありては腦重の五分の四、體重の三十分の一に達す。

だいなう-じゅうれつ 〔大腦縱裂〕（名）【醫】大腦の中央を縱走せる裂罅。

だいなう-はんきう 〔大腦半球〕（名）【醫】大腦が大腦縱裂によりて分割せられたる、左右の部分の稱。

だい-なごん 〔大納言〕（名）一古昔の官名。太政官の次官にて、中納言の上位し、大政に參與し、可否を獻替し、宣旨を敷奏することを掌る。喉舌の官。おほいものまうすつかさ。亞相。續紀「和銅元年三月癸巳朔、「詔大納言正三位大中臣朝臣清麻呂、授二正一位行大臣事」」令義解職員「太政官中務大納言一人、掌參議庶事」字津保「大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使源朝臣まさより」源氏桐壺「父の大納言はなくなりて、母北の方なん、いにしへの人のよしあるにて」二明治二年七月八日に置かれたる太政官の職員。勅任官とす。職掌、前に同じ。同四年七月二十九日廢せられたり。明治二年七月八日職員令「大納言、二人」

（ミんごないだ）

三小紋の一。かじまやともん。圖

だいなごん-あづき 〔猪肝赤〕（名）【植】豆科、菜豆（インゲンマメ）屬の一年生草本。赤小豆の一品種。子粒大にして黑色を帶ぶるもの。ほこりあづき。をはりあづき。

だい-なし 〔大梨〕（名）昔時、下僕などの著物。多く紺色なり。紺のだいなし。心中宵庚申「御門脇の長屋より、紺のだいなし裙七の圖まで引っからげ、一ふり振って振り出だすは」

だいなし 〔臺無〕（連）物事の甚だしく損じ又は汚れたること。傾城買二筋道「袖をだいなしに濡らした」

たいなし 〔怠納〕怠りて、所定の期限內に納めざること。

たいなし 〔滯納〕所定の期限を經るとも、猶納めざること。國稅徵收法第四「國稅の滯納に因り滯納處分を受くるとき」

だいなし 〔代納〕他人に代はりて納むること。

たいなしゃ 〔怠納者〕（名）怠納するもの。明治十六年太政官布告第三十一號「徵發令に依り負擔す可き費用の怠納者」

たいなし-しゃ 〔滯納者〕（名）滯納せるもの。國稅徵收法第三「滯納者」國稅滯納處分法第四「滯納者の納稅義務」

たいなし-しょぶん 〔滯納處分〕（名）【法】租稅・公課其の他、納付の義務ある金錢・物品の滯納者を强制して徵收する行政處分。國稅徵收法第四「國稅の滯納に因り滯納處分を受くるとき」

たいなしょぶん-ひ 〔滯納處分費〕（名）【法】滯納處分を行ふに必要なる費用。國稅滯納處分法第六「滯納處分費滯納稅金に付ては他の債主に對し先取權あるものとす」同第八「滯納處分費は左に掲くる費目にして督促令狀手數料を除くの外實際支拂するものを云ふ」

だいなほし-かんな 〔臺直鉋〕（名）平鉋の一。臺は普通四五寸にして、刃は眞すぐに臺に仕込まれたるもの。鉋臺の面を削り直し、又は堅材を削る等に用ふ。

だいなまいと 〔英 Dynamite〕（名）【化】にとろぐりせりん・を硅藻土に吸收せし

めたるもの。烈しき爆發力を有するを以て、鑛山等にて鑛石を採開せしむる等に用ふ。

だいなも (英 Dynamo) (名) 【理】機械的の仕事によりて電流を生ぜしむる裝置。即ち、電磁氣感應を利用し、磁場内にて こいる・を廻轉せしめて電流を得る機械。其の主要部は場磁石と稱する強き電磁石の兩極N・Sと、軟鐵心にこいる・を捲ける發電子Aとにして、こいる・の兩端は軸の金屬環BBに連なり、電刷毛と稱する銅製の刷毛m・nによりて外電路に連なる。發電子を回轉すればAのこいる中に感應電流を生ず。而して導線が磁力線を切る運動の方向はAの半廻轉毎に電流の方向反對となり、外線路には所謂交流を生ず。これ即ち交流だいなも・なり。こいる・の兩端の終はる處に特別の裝置を施して直流を生ぜしむるやうになしたるを直流だいなも・といふ。實際には場磁石の極數を增し、こいる・も亦其の數を增したるものを用ひ、發電子の回轉には蒸氣力、又は水力を用ふ。

だいなもるーる (英 Dynamo rule) (名) 【理】磁力線の方向と之を切る導線の運動の方向と、之により誘發せらるる感應電流の方向との關係を規定せるもの。即ち、右手の母指・食指及び中指の三つが互ひに直角をなすやうにし、食指を磁力線の方向、母指を導線の運動の方向に向くときは、感應電流は中指の方向に向かふ。右手の規則。

だいなん 〔大難〕 (名) 大いなる災難。非常の難儀。易經上經「內文明而外柔順、以蒙大難」莊子「臨大難而不懼者、聖人之勇也」史記「所怒甚多而不怨大難」

(諺)大難が小難で濟む 災厄の、思ひしよりは輕微なりしをいふ。

だいに 〔大貳〕 (名) 一 太宰府の次官。帥の下、少貳の上に位するもの。權帥を置かざる時に置く。萬葉「從四位下石川宮麻呂、慶雲年中任大貳」職原抄「太宰府中興有權帥者不任大貳任大貳者不任權帥、雖無其謂、已爲流例、多是以名家人任之」 二 明治四年八月に置かれたる鎭臺の上級の次官。即ち帥の下、少貳の上に位し、帥の職掌を輔佐する奏任官。同六年一月九日廢せられたり。明治職官沿革表「(八月)年「大貳」

だいにのじそ 大貳餞書 太宰の大貳が其の職を辭せんことを請ふために奉れる書狀。榮華見任「このごろ、大貳のじそ奉りたれば」同玉葉「大貳のじそといふものおほやけに奉りたりければ、我れも我れもと望みのの、しりけるに」

だいにさ 〔第二紀〕 (名) 【地】ちゆうせいだい(中生代)の異名。

だいにさ 〔第二義〕 (名) 絕對の理義にあらざること。主眼とする意義にあらざること。方便。(第一義の對)

だいにさむ 〔第二義務〕 (名) 【法】第一義務を忘りたるにより生ずる義務。即ち、損害賠償の義務の類。(第一義務の對) (英 Secondary duty)

だいにくわこ 〔第二過去〕 (名) 【文法】だいくわこ(大過去)に同じ。

だいにけいようし 〔第二形容詞〕 (名) 【文法】形容詞の一。語尾の、しく・し・しき・しけれと活くもの。

だいにけん 〔第二權〕 (名) 【法】きうさいけん(救濟權)に同じ。

だいにけんーばぶ 〔第二權法〕 (名) 【法】第二權を其の內容とする法規。(第一權法の對)

だいにけんり 〔第二權利〕 (名) 【法】きうさいけん(救濟權)に同じ。

だいにーこいる 〔第二——〕 (名) 【理】感應こいる・の、第一こいる・の外に捲きたる捲數の極めて多く細く、導線にて造れるこいる。感應電動力は此のこいる中に生ず。

だいにーこくみん 〔第二國民〕 (名) 次條又は第二國民兵役の略。

だいにこくみんへい 〔第二國民兵〕 (名) 第二國民兵役に服するもの。

だいにこくみんへいえき 〔第二國民兵役〕 (名) 國民兵役の一。常備兵役・後備兵役・補充兵役及び第一國民兵役に在らざる兵役義務者の服するもの。徵兵令(明治六年)「國民兵役は分て第一國民兵役第二國民兵役とす」同(同)三「第二國民兵役は常備兵役後備兵役補充兵役第一國民兵役に在さる者之に服す」

だいにこくみんへいせいしゅ 〔第二國民兵召集〕 (名) 國民兵召集の一。第二國民兵を召集するもの。陸軍召集條例(明治十三)第四十三「國民兵召集を分て第一國民兵召集第二國民兵召集の二種とす」

だいにしゃうばい 〔第二商業〕 (名) 【商】第一商業に對して、間接に財貨の轉換を媒介する商業の稱。即ち、銀行・運送・問屋營業の類。

だいにしゅーいうびんぶつ 〔第二種郵便物〕 (名) つうじゃういうびんぶつ(通常郵便物)を見よ。郵便法(明治十八)第二種郵便物を他種の郵便物と合裝するときは第一種郵便物と同一の取扱を爲す」

だいにしゅーへいせき 〔第二種兵籍〕 (名) 陸軍兵籍の一。士官候補生・主計候補生・見習醫官・見習藥劑官・見習獸醫官・下士・兵卒(軍曹以上及び常備兵役に編入すべき者を除く)の諸生徒及び依託學生の身上に關する必要の諸件を登記するもの。陸軍兵籍規則(明治)「第二種兵籍」

だいにーしん 〔第二審〕 (獨 Zweite Instanz) (名) 【法】第一審に對する上級の審級。即ち、控訴審。裁判所構成法(明治十八)第一審及第二審の裁判權」

だいにしんーさいばんしょ 〔第二審裁判所〕 (獨 Gerichte zweiter Instanz) (名) 【法】或る訴訟事件に就き、第二審の裁判をなす裁判所。控訴裁判所。刑事訴訟法(明治三十三)第一審裁判所と第二審裁判所とを問はず法律に於て罰せざる所爲に對し刑を言渡し又は相當の刑より重き刑を言渡したる場合」

だいにせいしつ 〔第二性質〕 (英 Secondary quality) (名) 【哲】事物其れ自身に屬せず、事物の心を觸發する事によりて心に生ずる主觀的・個人的のものにして、しかも吾れ等の事物其れ自身に屬すと思ふ性質。此の見解は古代でもくりとす・の哲學に始まり、近世に至り、ろっく是れを明かにし、色・香・味・音等を第二性質なりとせり。

だいにそうべう 〔第二宗廟〕 (名) そうべう(宗廟)を見よ。

だいにち 〔大日〕 (名) 佛語。だいにちによらい(大日如來)の略。夫木「大日の種子より出でてさまや形、さまや形また尊形となる」砂石集「外宮は金剛界の大日、或ひは阿彌陀とも習ひ侍る也」

だいにちのいんさう 大日印相 佛語。大日如來の手に結びたりといふ印相。盛衰記(十九)「文覺は國床に上り結跏趺坐して大日の印相を結ぶ」

だいにちだいしゃうふどうみゃうわう 〔大日大聖不動明王〕 (名) 〔不動明王は大日如來の化身なればいふ〕佛語。ふどうみゃうわう(不動明王)の異稱。「狂言鳥」「中央に大日大聖不動明王」

だいにちーだう 〔大日堂〕 (名) 大日如來を安置したる堂。義經記(廿八)「義經ほろ〳〵と彌勒堂の東、だいにちだうの上より見渡せば」

だいにちーによらい 〔大日如來〕 (名) 佛語。びるしゃな(毘盧遮那)に同じ。扶桑略記(廿八)「(神護景)二年、入道大相國供養法成寺金堂(其記)「中略」其內安置三丈二尺金色大日如來」中略「爲住持佛法、鎭護國家也」源夕鶴「大日如來そらごとし給はず」榮華「中略」中臺の尊、高くいかめしうおはしまして、大日如來におはします」

だいにっぽんていこくせいふけんぶぶっぷさねんしゃう 〔大日本帝國憲法發布記念章〕 (名) 大日本帝國憲法發布式に關りたる親王以下の諸員(判任官以下を除く)に限り頒賜せられたる記念章。金銀の二種あり、共に圓形、徑九分餘、輪廓內の表面に菊御紋と高御座並びに大勳位菊花頸章との圖、裏面に明治二十二年二月十一日大日本帝國憲法發布記念章の二十三字を識す。帝國憲法發布記念章。明治二十二年勅令第百三號(同)「大日本帝國憲法發布記念章は金銀の二種とす」

だいにっぽんていこくせいふーぶりこうさい 〔大日本帝國政府五分利公債〕 (名) 鐵道公債・臺灣事業公債・滿高整理公債・舊鐵道會社債務整理公債・鐵道國有の代償として交付せる公債・臨時事件公債及び第一回國庫債券整理公債の總稱。五分利公債。

だいにっぽんていこくせいふーぶりこうさいーしょうしょ 〔大日本帝國政府五分利公債證書〕 (名) 大日本帝國政府五分利公債に對して發行せる公債證書。五十圓・百圓・五百圓・千圓・五千圓・一萬圓の六種あり。帝國政府五分利公債證書。明治三十九年大藏省令第七號「整理公債證書軍事公債證書及大日本帝國政府五分利公債證書の額面種類」

だいにっぽんていこくせいふーとくべつぶりこうさい 〔大日本帝國政府特別五分利公債〕 (名) 我が國の國債の一。明治三十七八年の臨時事件費支辨のために、同三十九年二月に募集せるもの。發行總額三億一千四十萬七千圓、年利百分の五、償還期限二十五年以內とす。帝國政府特別五分利公債。

だいにっぽんていこくせいふーとくべつぶりこうさいーしょうしょ 〔大日本帝國政府特別五分利公債證書〕 (名) 大日本帝國政府特別五分利公債に對して發行せる公債證書。五十圓・百圓・五百圓・千圓・五千圓・一萬圓の六種あり。

だいにーどくくわい 〔第二讀會〕 (名) 【法】どくくわい(讀會)を見よ。衆議院規則(明治三十)「第二讀會に於ては議案を逐條朗讀して之を議決すべし」

だいにーにんしょう 〔第二人稱〕 (名) 【文法】次條に同じ。對稱。

だいにーにんしょうーだいめいし 〔第二人稱代名詞〕 (名) 【文法】人代名詞の一。自己と對する相手の名に代用するもの。即ち、なんぢ・きみ・あなた・そなた等の類。對稱代名詞。

だいにーぶーせうさーぶ 〔代入消去法〕 (名) 【數】消去法の一。n箇の未知數を含むn箇の方程式の一、又は多くの方程式より、甲未知數の値を他の未知數にて表はし、之を殘りの方程式の甲未知數の代りに置き換へて、方程式の數と未知數の數とを減じ、以て單立方程式を得る方法。例へば $3x+2y=8$, $4x-3y=5$ に於て、前式より $y=\frac{1}{2}(8-3x)$ としてyの値をxによりて表はし、之を後式に置換すれば

$$4x-3\times\frac{1}{2}(8-3x)=5$$

即ち $8x-24+9x=10$

となりて、單立方程式をなす如し。

だいにーぶっせい 〔第二物性〕 (名) 【哲】だいにせいしつ(第二性質)に同じ。

だいにーほけん 〔第二保險〕 (名) 【商】さいほけん(再保險)に同じ。(第一保險の對)

だいにーほじゅう 〔第二補充〕 (名) 次條、又は第二補充兵役の略。

だいにーほじゅうーへい 〔第二補充兵〕 (名) 第二補充兵役に服する人。戰時若しくは事變の際第一補充兵を召集し仍ほ兵員を要するときに限り召集するもの。明治二十二年一月法律第一號徵兵令(第十七條)「第二補充兵は戰時若くは事變に際し第一補充兵を召集し仍ほ兵員を要するときは之を召集す」

だいにーほじゅうーへいえき 〔第二補充兵役〕 (名) 明治三十七年九月以前に於ける陸軍の補充兵役の一。其の年所要の第一補充兵員に超過する者が、一箇年四箇月の閒服するもの。明治二十二年一月法律第一號徵兵令(同)第五「補充兵役は陸軍に在ては第一補充兵役第二補充兵役とし(中略)第二補充兵役は一箇年四箇月にして其年所要の第一補充兵員に超過する者之に服す」

だいにーよびさん 〔第二豫備金〕 (名) 豫備金の一。豫算外に生じたる必要の費用に充つるもの。第二豫備費。會計法(明治三十)第二「豫備金」同(同)「第二豫備金は豫算外に生じたる必要の費用に充つるものとす」

だいにーよびひ 〔第二豫備費〕 (名) 前條に同じ。

だいにるおーち 〔第二類地〕 (名) 有租地の一。池沼・山林・牧場・原野・雜種地の總稱。地租條例(明治三)「第二類地に勞費を加へ(第一類地と爲すものを開墾と謂ふ」

だいーにん 〔大任〕 (名) 重大なる任務。大いなる役目。大役。太平記(巻六)「以て無才庸愚身、大任重器の職を汚し候ひぬれば、讒言も多く候らんと覺え候」孟子(告子下)「天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨」

だいーにん 〔退任〕 (名) 任を退くこと。又、任を退かしむること。舊市制(明治三十四)「多數の一半を退任せしむ」

だいーにん 〔耐忍〕 (名) 耐(ぶ)へ忍ぶこと。こらふること。或ひは堪忍すること。がまん。忍耐。荀子(仲尼)「能耐忍之」

だいーにん 〔體認〕 (名) しかと心中にのみこむこと。體すること。

だいーにん 〔大人〕 (名) 一 たいじん(大人)に同じ。 二 佛語。てんりんしやうわう(轉輪聖王)に同じ。

だいーにん 〔代人〕 (名) だいりにん(代理人)に同じ。御仕置例類集(天明元年)「金錢出入吟味之節、當人病氣に付、代人差出候儀に付評議」皇室典範(第五十條)「皇族は代人を以て訴訟に當らしめ」

だいーにん 〔代任〕 他人に代はりて其の任務につくこと。又、其の人。漢書(地理志)「幼者扶老、而代其任」

だいにんーしゃ 〔退任者〕 (名) 退任せ

る人。舊市制第五十三、初回の退任者は抽籤を以て之を定む但退任者は再選せらるることを得」

だい-にんじん （名）【植】はなうどの異名。

たいにん-たんぽ 〔對人擔保〕（名）【法】たいじんたんぽ。對人擔保に同じ。

たいにん-りょく 〔耐忍力〕（名）耐忍する意思の力。がまんづよさから。忍耐力。

たい-ぬり 〔退塗〕（名）繪畫に、最書の際より、少しく其の線を避けて塗ること。

だい-ねつ 〔大熱〕（名）一非常に亢進せる體温。二最も甚だしき暑熱。著聞「寛平の遺誡にも中夢大熱・大寒慎之と侍り」韓琦詩「大熱極炎苦、赫日燒桑」

たい-ねつびょう 〔大熱病〕（名）甚だしき熱病。孕常弊「天狗の所爲毒氣五體に泌み渡り、大熱病を受け給ひ」

だい-ねん 〔大念〕（名）次條一の略。

だい-ねんぶつ 〔大念佛〕（名）一多數の僧侶の集まりて、大聲に念佛すること。謠百番「此の頃は嵯峨の大念佛にて候程に」小町踊「千本の花に聲あり大念佛」二佛語。次條の略。

だいねんぶつ-しゅう 〔大念佛宗〕（名）佛語。ゆうづうねんぶつしゅう融通念佛宗に同じ。

だい-のう 〔代能〕（名）觀世・金春・寶生・金剛の四座の大夫が、京都にて一世一代の能を興行すること。「南州府志」「芝居中興凡座大夫、一代一度必於京都施能中興是稱代能」凡三箇日也」

だい-のう 〔大農〕（名）一巨額の資本を投じ、多數の農夫を使役して廣大なる地積を耕作せしめ、自ら其の監督にのみ當たる地主又は資本主。二資本の豐富なる農夫。豪農。三次條の略。

だいのう-せい 〔大農制〕（名）大農組織の制度。

たいのう-そしき 〔大農組織〕（名）農業組織の一。耕作地が大農地に區劃せられ、大農によりて經營せらるるもの。

たいのう-ち 〔大農地〕（名）大農の所有し又は引き受けて耕作する大區劃の土地。

だい-のし 〔臺熨斗〕（名）三方に熨斗鮑（アワビ）を載せて客に供するもの。四季所の名。

だいのじ-かたばみ 〔大字酸漿〕（名）紋所の名。

だいのじ-びし 〔大字菱〕（名）紋所の名。

たい-の-だい 〔對代〕（名）平安朝時代に於ける貴人などの邸にて、對の屋を作らずに、寢殿の東西に公卿座を構へ、子午に中門を續けたるもの。大樂雜事「御殿、西對代、寢殿久安記云、上皇居不二御殿一、先上皇側山、永保記、西對東廂、上皇上卷」大樂御裝束間事「宣、永保三大右記云、東對代母屋、西鋪二青錦疊六枚一、爲二上官座一」

だい-の-つき 〔大月〕（名）太陽曆にて三十一日暦にて三十の日數ある月。だい。（小の月の對）

だい-の-むし 〔大蟲〕（名）其の中の大なる蟲。

（諺）大の蟲を活しゆの蟲を殺せ　止むことを得ざる場合には、大なる者を救はん爲めに小きものを犧牲にせよ。

だい-の-もの 〔代者〕（名）代理人。代人。

だい-の-もの 〔代物〕（名）代りとなる物品。

だい-の-もの 〔臺物〕（名）一大いなる臺に載せたる料理品。醒睡笑「病ひ愈えて後、恰び事の振舞あり。酒盛りの牛、臺の物に鶴の作りたるを取りあげ」二臺屋（ダイ）より大いなる臺に載せて青樓に運び來たる料理品。

たい-のや 〔對屋〕（名）平安朝時代、禁中・貴人などの邸にて、寢殿の左右若しくは背後に、相對せしめて造りたる別棟の建物。多くは廊にて寢殿と通じ、又、東の對の屋は梁殿に、西の對の屋は釣殿に連續す。其の構造、柄を入れず、狐戸なく、二方葺き即しにするを常とす。後世は女中部屋の稱。下學集「對屋（ダイヤ）」撮壤集「對屋（ダイヤ）」

たいのや-づくり 〔對屋造〕（名）家屋の造り方の一。屋上切妻にして、左右に搏風あり。其の棟は前後、又は左右に兩下するもの。例へば、伊勢神宮・出雲大社の類。海人藻芥「近年さりぬべき諸院家にもろはやの對の屋有之歟、無下に見苦しき者也。對の屋は對の屋作りとて定まれる樣有之上、別の作り樣更に無二其謂一」中夢「對の屋作りとは軒は十間・廿間なりとも、妻は三間也、實に所用の子細あらば何間も庇を指すべし。孫子庇までも無二子細一哉」

たい-は 〔大波〕（名）おほなみ。巨濤。韓愈詩「軒然大波起、宇宙駭雨妨」

たい-は 〔大破〕（名）甚だしく破ること。大いなる破損。運歩色葉「大破（ハイ）」

たい-は 〔類馬〕（名）馬術の語。馬の、途中などにて、急に身すくみ動かずなること。內破風。

だい-は 〔臺場〕（名）要害の地に設けて大砲の臺を据ゑつくる土石の建造物。砲臺。

たい-はい 〔大盃・大杯〕（名）大いなる盃。巨觥。大白。狂言「最前の五盃でさへ迷惑に存じましたに、いはんや其の大盃で、存じもよらぬことでござる」

たい-はい 〔大旆〕（名）天子又は將軍の旗。儀禮「龍、載大旆」

たい-はい 〔台背〕（名）（たい（台）はさめはだ、老人のせなのさめはだの如くなるよりいふ）ちうじん（老人）の稱。詩經「黃髮台背、壽考與試」

たい-はい 〔帶佩〕（名）一身に帶ぶること。又、其の容姿。平家「烏帽子・體佩人に勝れ」中論「上懸乎冠纓、下繫乎帶佩」二技藝の型（カタ）。作法。花柄天神緣記「門生等が弓遊びしけるに中略いきほひ・たいはい、たと〳〵んかたおはしまさず」運歩色葉「體拜（ハイ）号」體拜。體配。

たい-はい 〔退敗〕（名）敗れて退き走ること。南史「軍至渦陽、退敗」

たい-はい 〔退廢〕（名）廢退。

たい-はい 〔大敗〕（名）大いに敗ること。易經上「用行師、終有大敗」

（おほまけ）左傳「襄公、王卒大敗」

たい-はい 〔餒敗〕（名）魚肉などのくさること。腐敗。

たい-はい 〔頹敗〕（名）くづれやぶれること。朱熹文「及周之衰、賢聖之君不作、學校之政不修、倫・教化陵夷、風俗頹敗」

たい-はい 〔頹廢〕（名）くづれ荒ること。やぶれすたること。後漢書「大學昨廢、皆宜二隸存、故祿傳至今、而頃者頹廢、至爲二園林芻牧之處一」

たいはい-にち 〔大敗日〕（名）陰陽家が大凶日として、行戰などに忌むといふ日。即ち、甲辰・乙巳・庚辰・辛巳・壬申・癸亥・丁亥・戊戌・己丑の日。多聞院日記「三年正月廿八日、筒井出頭、去十六日十惡大敗日也、向後、節、以勞來之、父老童稚垂髮戴白、滿二其車下一、莫二不感悅一」

たい-はく 〔褪剝〕（名）退剝　色のさめて、つやのうすること。

たい-はく 〔逮縛〕（名）からめとること。追ひかけ捕らへてしばること。

たいはく-あめ 〔太白飴〕（名）上白にて煉り固めたる白色の飴。太白。

たいはく-ざたう 〔太白砂糖〕（名）精製したる上等の砂糖。太白。

たいはく-じん 〔太白神〕（名）ひとひめぐり（一日廻）に同じ。中右記「正月十日、明日太白神在二東、然者可二被用一西陣歟一」

たいはく-せい 〔太白星〕（名）きんせい（金星）の異名。太白。和名「長庚。彙名苑云、太白星、一名長庚、暮見二於西方一爲二長庚一」盛衰記「五星者彗星・熒惑星・歲星・太白星・辰星なり」爾雅「明星謂之啓明。注太白星也」

たいはくせい-まつり 〔太白星祭〕（名）陰陽家にて太白星を祭ること。東鑑「三年、月廿九日、今曉太白星祭以下、被二行一御祈等一」

だい-ばこ 〔臺箱〕（名）江戸時代、市店を廻はる髮結の梳具の筥。浮世床「嘘を指のさきへ附けて、木地蠟色の臺箱へ、のしこし山を書いてゐる」

だい-はしけちゃう 〔大端舟長〕（名）はしけちゃう（端舟長）を見よ。法令全書「明治四年二月十八日民部大輔より大端舟長」

だい-はじめ 〔代始〕（名）帝位、又は家督を繼きて、其の地位に就きたる始めの年。柱史抄「代始無恩赦、但承和・天祿二代有此事」元祿別錄「安和三年三月廿五日丙申改元爲天祿、代始詔赦賑給、代始例希有也」

だい-はち 〔大八〕（名）一だいはちぐるまの略。二眼の大いなる人を罵りていふ語。

後合戰に可二忌事一也」運歩色葉「大敗日辰（甲乙巳・庚辰・辛巳・壬申・丙申・癸亥・丁亥・戊戌・己丑・庚寅・辛卯・壬辰・癸巳・甲午・乙未・丙申・丁酉・戊戌・己亥・庚子・辛丑・壬寅・癸卯・甲辰・乙巳・丙午・丁未・戊申・己酉・庚戌・辛亥・壬子・癸丑・甲寅・乙卯・丙辰・丁巳・戊午・己未・庚申・辛酉・壬戌・癸亥）也」

たい-はう 〔貸方〕（名）かしかた（貸方）に同じ。

たい-はう 〔太保・大保〕（名）一支那の官名。三公の一。書經「周官、立二太師・太傅・太保一、兹惟三公」二うだいじん（右大臣）の唐名。撮壤抄「官、右大臣（右丞相・右僕射・右相）・大保（右相）」三淳仁天皇の朝に、一時右大臣を改めたる稱。續紀「三年八月癸酉、改二易官號一、中略右大臣曰二大保一」

たい-はう 〔大邦〕（名）おほいなるくに。大國。詩經「大無二害人不一悉、敢距二大邦一、侵二阮徂共一」書經「武成」「大邦長二其力一、小邦懷二其德一」

たい-はう 〔大砲〕（名）おほづつ。巨砲。巨熕。

たい-はう 〔大寶〕（名）極めて貴きから。至寶。國子「宋之愚人得二燕石于梧臺之側一、藏之以爲二大寶一」

たい-はう 〔大方〕一度量の大いなる人。賢明なる人。學識ある人。莊子「惠家「吾長見笑二於大方之家一」」二世間一般の人。三高貴の婦人の稱。おほかた。回おほかた。あらまし。四羽前國米澤地方より產出する一種の厚紙。

たい-ばう 〔大望〕（名）たいまう（大望）に同じ。運歩色葉「大望（バウ）」

たい-ばう 〔大房〕（名）大なる房室。主なる（や。律疏「凡造二畜蠱毒一中略即以二蠱毒一毒二人者一、大房・小房並住之房耳」政事要略「物記云、親兄弟、自兄弟之大房、小房並住之房耳、然依二父兄住一大房、弟住一小房一耳。師云、注云、大房・小房者、是一端耳、然則住二同房一而毒亦同」

たい-ばう 〔體貌〕（名）すがたかたち。容貌。漢書「五行志」「人君行二己、體貌不二恭、怠慢驕蹇、則不二能敬一事」

だい-ばう 〔大坊〕（名）大なる僧坊。運歩色葉「大坊（バウ）」

たいはう-かんぢやう 〔貸方勘定〕（名）【簿記】かしかたかんぢやう（貸方勘定）に同じ。Creditor account (Account)

たいはう-さんがく 〔貸方金額〕（名）【簿記】帳簿の貸方に記入したる金額。かしかたきんがく。Creditor amount

だいはうぐんだい 〔大判官代〕（名）昔時、國衙又は莊園に置きて、專ら田政を掌らしめたる官なるべし。鹿島文書「仁治四年十月日」「大判官代散位橫朝臣」

たいはう-さま 〔大方樣〕（名）貴人の母の敬稱。大方（バウ）。

たいはう-たい 〔大砲隊〕（名）大砲を運用する軍隊。砲兵隊。

たいはうちゃうけいすう 〔體膨脹係數〕（名）【理】物體の體積の膨脹・收縮の割合。物體の原の體積と上昇したる溫度との積を以て、此の溫度の上昇によりて膨脹したるだけの體積の增しを除したる商。固體にては通常、線膨脹係數の三倍を以て之を表はす。

だいはう-らく 〔大寶樂〕（名）雅樂の道調曲の一。和名「大寶樂」道調曲。大寶樂」

たいはう-りつ 〔大寶律〕（名）文武天皇の大寶年間に制定せられたる法律。續紀「三年六月、令二諸國一、大寶律令、始頒二新律於天下一」

たいはう-りゃう 〔大寶令〕（名）文武天皇の大寶年間に制定せられたる法令。續紀「三年六月、令二諸國一、大寶律令、始頒二新令一、親王諸臣百官人等、就而習之」

だいはかせ 〔大博士〕（名）一博士の特にすぐれたるもの。又、みやうきやうはかせ明經博士の稱。天武紀「大博士百濟人崔丹」二はかせ（博士）を見よ。明治二年七月八日職員令「大博士」三はかせ（博士）を見よ。明治三年四月五日太政官布告「宣敎使中正權大中少宣敎使自今正權大中少博士と被二改稱一事」回明治二十年五月二十日に置かれたる上級の學位。文部大臣が博士の會議に付し、學問上特に功績ありと認めたる者に、閣議を經て授くるもの。同三十一年十二月廢せられたり。明治二十年五月勅令第十三號學位令「學位は博士及大博士の二等とす」同第三條「大博士の學位は中略閣議を經て之を授く」

だいはかり 〔臺秤〕（名）【理】藥箇の挺子を組み合はせて造りたる秤。測らんとする物體を載すべき臺を備ふ。

たいはく 〔大白〕（名）大いなる杯。大杯。巨觥。研北雜誌「蘇子美中略遂邀引一大白」中略君臣相遇其難如二此、復舉一大白」

たいはく 〔太白〕（名）一たいはくせい（太白星）の略。鎌紀「九月廿六日、太白蝕見」平治「歲星入月、其野有二逐相一、與太白一鬪」大伯。二精製したる純白の砂糖。上白。三たいはくあめ（太白飴）の略。四太き絹絲。

たい-はく 〔大舶〕（名）大なる船舶。大船。黃鶴成詩「大舶輕舟海上行」

たい-はく 〔戴白〕（名）頭に白髮を戴くこと。又、其の人、即ち老人。漢書「鼂錯「天下顧二宗廟之重一、方內大寧。戴白之老、不見二兵革、民得二夫婦相守、女子相保一、陛下之德也」後漢書「禹、所止輒停、車住節、以勞來之、父老童稚垂髮戴白、滿二其車下一、莫二不感悅一」

たい-はて 〔褪剝〕（名）退剝　色のさめて、つやのうすること。

たい-はく 〔逮縛〕（名）からめとること。追ひかけ捕らへてしばること。

たいはく-あめ 〔太白飴〕（名）上白にて煉り固めたる白色の飴。太白。

たいはく-ざたう 〔太白砂糖〕（名）精製したる上等の砂糖。太白。

たいはく-じん 〔太白神〕（名）ひとひめぐり（一日廻）に同じ。中右記「正月十日、明日太白神在二東、然者可二被用一西陣歟一」

たいはく-せい 〔太白星〕（名）きんせい（金星）の異名。太白。和名「長庚。彙名苑云、太白星、一名長庚、暮見二於西方一爲二長庚一」盛衰記「五星者彗星・熒惑星・歲星・太白星・辰星なり」爾雅「明星謂之啓明。注太白星也」

たいはくせい-まつり 〔太白星祭〕（名）陰陽家にて太白星を祭ること。東鑑「三年、月廿九日、今曉太白星祭以下、被二行一御祈等一」

だい-ばこ 〔臺箱〕（名）江戸時代、市店を廻はる髮結の梳具の筥。浮世床「嘘を指のさきへ附けて、木地蠟色の臺箱へ、のしこし山を書いてゐる」

だい-はしけちゃう 〔大端舟長〕（名）はしけちゃう（端舟長）を見よ。法令全書「明治四年二月十八日民部大輔より大端舟長」

だい-はじめ 〔代始〕（名）帝位、又は家督を繼きて、其の地位に就きたる始めの年。柱史抄「代始無恩赦、但承和・天祿二代有此事」元祿別錄「安和三年三月廿五日丙申改元爲天祿、代始詔赦賑給、代始例希有也」

だい-はち 〔大八〕（名）一だいはちぐるまの略。二眼の大いなる人を罵りていふ語。

だい-はちえぶ 一大八葉（名）次條の略。東鑑十七、文暦元年十一月八日「直衣・綱代車大八葉」

だいはちえぶの-くるま 大八葉車（名）はちえぶのくるま八葉車を見よ。建内記正長元年廿三日「今日酉刻御移徙室町御第、也中略大八葉御車」

だいはち-くるま 大八車　代八車（名）「もとは代八にて、八人の代りをなす義。或ひは大八とは大津の八町にて、此の地は古へより雑車のありし處なればいふか。雑遊」大いなる一種の荷車。二代男「大麻に笑ふは、大八車の如し」

（まるぐちはいだ）

だいはち-にんぎゃう 一大八人形（名）かもがはにんぎやう（加茂川人形）を見よ。

だいはちもんじ 一大八文字（名）八文字の足取を大きく蹈むこと。雙生隅田川「是れより殿の御門出で、大八文字の大跨ぎ」

たい-はつ 一胎髪（名）うぶげ（産毛）に同じ。

たい-はつ 一苦髪（名）苔の類の毬びて、毛髪の如くなりたるもの。苔錢。

たい-はつ 一體罰（名）身體の局部に、直接に苦痛を與ふる懲罰。小學校令第四十七條「小學校長及教員は教育上必要と認めたるときは兒童に懲戒を加ふることを得る但し體罰を加ふることを得ず」

たい-はつ 一戴罰（名）懲罰を受けること。受罰。明治十四年十二月陸軍省乙第七十三號陸軍懲罰令第十二「處罰中の者に戴罰の儘服務を命ずることを得」

たい-はつ 一待罰　たいざい（待罪）に同じ。

だい-はつ 一題跋（名）題と跋と。題辭と跋文と。夢溪筆談「唐昭宗菩薩蠻詞蜀本在陝州一佛寺中、後人題跋多盈軸矣」

たいはつ-とげぶ 一帶伐作業（名）森林の伐採作業の一。森林を伐採するに、其の伐木線を帯狀に區劃し、其の區劃線内に傘伐又は皆伐作業を行ひ、跡地を天然下種、又は人工造林によりて更新するもの。

だい-はばき 臺鍾（名）刀劍の金具。切羽（せつぱ）の小さきものを鍾金（しやくがね）に作りつけたるもの。貞享名目抄

たい-はぶ 一大法（名）重大なる法規。重きねぶきて。大内家壁書「こがね・しろがねの兩目之事は、京都の大法」書經洪範、洪範法也、言天地之大法」

だい-はぶう 一内破風（名）たいば（類馬）に同じ。

だい-はぶくわん 一大法官（名）はふくわん（法官）を見よ。明治五年八月三日太政官第二百十八號司法官等級、大法官」

たい-はん 一大藩（名）一領土のおほいなる諸侯。南史明帝紀「明祭酒雖出撫大藩、而恆事屢空」二明治元年二月十一日、石高を以て諸藩を三等に區別したる其の一。四十萬石以上のもの。同三年九月十日改めて十五萬石以上の藩を稱し、同四年七月十四日藩を廢し縣を置くにより廢せられたり。法令全書明治元年三「大藩但四十萬石以上を唱」明治三年九月十日太政官布告藩分爲三物成拾五萬石以上を大藩とし五萬石以上を中藩とし五萬石未満を小藩とす」

たい-はん 一大半　半數を過ぐること。半分以上。おほかた。過半。運歩色葉「大半（ハンン）」戰國策「傷弩破車、罷馬亡矢之大半」史記項羽紀「漢有天下大半、而諸侯皆附之」

たい-はん 一大凡　おほよそ。あらまし。大略。運歩色葉「大凡（ハンン）」

たい-はん 一隊幡（名）上古、出征の時に於ける隊長の標旗。令義解軍防令「凡私家不得有鼓中略軍幡長五尺闊五尺中略隊」

たい-はん 一胎盤（名）【胞】哺乳類の胎兒が母體より營養を供給せらるる部分にして、胎嚢と母體子宮壁の一部の密着して生じたるもの。

だい-はん 一臺飯（名）臺盤の食物。古語節用食物「臺飯（宣作代飯）」

だい-はん 一代判　こうけん（後見）をいふ、京阪地方の方言。大阪堺問答「乾出入「相手代判付之者に候處、代判致病死、跡代判無之内、及出入候時は、跡代判極次第願出候申し渡し」德川禁令考後聚十二、人別帳に不加地方なる「錢屋彌助幼少に付、代判、次の雇置候段願仕候」

だい-はん 一臺盤（名）一古昔、食物を盛りたる盤を載せたる臺。机の如く横に長きもの。枕草子「だいばんの上にあやしきめのありしを、ただ取りに取りて食ひ紛らはしし かば、中げんにあやしのくひ物やと人見けんかし」源遺「だいばんなども片へは座ばみて、たたみ所所ひきか

（んばいだ）

へしたり」禁秘抄「臺盤三脚切盛盤大臣」二めし（飯）をいふ、薩摩國の方言。物類稱呼

だい-はん 一代番（名）一代はりて番をすること。二代りの番人。

だい-はんぐわん 一大判官（名）はんぐわん（判官）を見よ。明治五年八月二十四日太政官第二百三十四號「大判官」

だい-はんげ 一半月（名）【植】おほはんげの異名。

だい-はんげつ 一大半月（名）半月の指物の大なるもの。太閤記十二、山崎之城攻「島毛の大半月のさし物をさし」

だい-はんじ 一大判事（名）一古昔、刑部省の上級の判事。職員令「刑部省中略大判事二人正六位下」二明治二年七月八日に置き、同八年五月四日に廢せられたる最上級の判事。初め正官のみなりしが、同四年十月二十四日權官を置けり。明治二年七月八日職員令「大判事」

だい-はんじゃく 一大磐石（名）一大いなる磐石。太平記三、武藤常の人の百人しても、動かし難き大般石を、輕輕と脇に挾み」吉野都女楠「大磐石を肩先に疊みかけたる如くにて」二泰然自若として動かざること、又、丈夫なることに譬へていふ語。

だいはん-どころ 臺盤所（名）一臺

盤を置く所。禁中にては清涼殿内の一室にて、女房の詰所。臣下の家にては食物を調ふる處。臺所。字津保土藏「中納言例見參らぬ人もおはしますなどのたまへば、臺盤所より參る」枕「だいばん所の方より」二貴人の北の方の稱。妻女の、食物を調ふるよりいふ。みだいどころ。字治拾遺「大ばん所の、胸をきりにきりて病ませ給ひしかば」平家「紫花上「我等」御娘八人中略一人は中略花山院の左大臣殿の御臺盤所にならせ給ひて」

だい-はんにゃ 一大般若（名）【植】きく（菊）の異名。

だいはんにやきやう-ゑ 一大般若經會（名）佛語。大般若經を講讀する法會。大般若會。玄藩寮式「凡大安寺大般若經會、毎年四月六七兩日、請僧一百五十口」轉讀大般若經」

だいはんにや-ゑ 一大般若會（名）佛語。前條に同じ。雅樂寮式「凡西大寺三月十五日成道會、大安寺四月六七兩日大般若會」東大寺讃嘆錄「八幡宮大般若會事」

たい-ひ 一苔碑（名）苔のむしたる石碑。張正見詩「野藤侵沸井、山雨濕苔碑」

たい-ひ 一堆肥（名）廢物を堆積して、腐らしたる肥料。つみごえ。

たい-ひ 一貸費（名）費金を貸與すること。學費を貸與すること。

たい-ひ 一退避（名）しりぞきさくること。ひきしりぞくこと。漢書張馬「孤乞骸骨、欲退避」

たい-ひ 一對比（名）一比較すること。二相對すること。三英Contrast心美相反對せる、或ひは著しく相異なる感覺・觀念又は感情が對立して、其の一方若しくは雙方の特性が一層顯著になることの稱。反對。對照。

たい-び 一黛眉（名）まゆずみにておきたる眉。

たい-び 一大尾（名）をはり。しまひ。終局。終極。結尾。結末。

だい-ひ 一大悲（名）佛語。一衆生を哀愍し、其の苦惱を除去する佛の大いなる慈悲。盛衰記「清盛「誠に古仙經行之聖跡、大悲利物の靈崛也」法華經「抜其難、即大悲力也」二佛語。だいひぼさつ（大悲菩薩）の略。榮華「大悲を始めとして、大梵深遠に至るまで、積き居させ給へり」謠田村「大悲の光そふ故か、此の寺の地主の櫻に若くはなし」

だいひ せんだい の ぼさつ 大悲闡提菩薩（せんだいは梵Icchanti 忍辱と譯す。苦痛・屈辱を忍びて怨恨せざる義）佛語。觀音菩薩の異名。一切の衆生を悲愍して救濟するよりいふ。盛衰記八、法皇三「彼の聖德太子は、救世觀音の應現、大悲闡提の菩薩也」

だいひ の ひかり 大悲光　佛語。衆生の无明の闇を照らす佛の大悲を、光に譬へていふ語。

だいひ の ゆみ 大悲弓　佛語。佛の大悲を以て惡魔を降伏するを、弓に譬へていふ語。謠田村「千の御手ごとに、大悲の弓には智慧の矢をはめて、一たび放てば」

だいひ の りけん 大悲利劍　佛語。佛の大悲心を以て一切の障害を除き衆生の衆苦を破滅するを、鋭利なる劍に譬へていふ語。謠摩耶「大悲の利劍を額に當て、龍宮の中に飛び入れば」

だいひ りもつ 一大悲利物　佛語。佛の大悲を以て一切衆生を利益すること。盛衰記三「藤原「古仙經行之聖跡、大悲利物之靈崛也」

だい-ひさ 一臺引（名）宴席の膳などに敷く紙。

だい-ひきもの 臺引物（名）膳部に添へて出だす肴・菓子の類。心中宵庚申「二獻目も御機嫌よく、お盃がかはって平の臺、ありがたがための臺引物」

だいひ-くわんおん 一大悲觀音（名）佛語。くわんぜおんぼさつ（觀世音菩薩）に同じ。

だいひ-さ 一大悲者（名）佛語。だいひしや（大悲者）に同じ。續後紀「五くさの寶の雲は大悲者（だいひ）の、子種の御手の人の世を」宇津保藤原「長谷の大ひさ、人の願ひを滿て給ふ」源玉鬘「大ひさには、ことどもも申さじ」

だい-ひし 一大菱（名）紋所の名。

だい-ひし 一大祕史（名）ひし（祕史）を見よ。明治九年八月太政官布告第百十三號「大祕史」

だいひ-しゃ 一大悲者（名）佛語。大悲者の義に同じ。諸佛・菩薩、特に觀音菩薩の稱。藤川記「道の行くへに石山寺に詣でて、大悲者を禮し奉る」

だい-ひしょ 一大祕書（名）ひしょ（祕書）を見よ。明治五年十月十三日太政官第三百五號「大祕書」

たい-ひ-じょ 一待避所（名）橋梁上又は隧道内にて、保線手・線路工夫・線路看守者などが、通過列車を一時避けて待ち居る場所。

たい-ひ-せい 一貸費生（名）貸費せられて修學する學生。

たい-ひ-せん 一待避線（名）單線の鐵道などにて、列車行き違ひの際、一時避けて待ち合はするために設くる側線。

だいひ-たもんてん 一大悲多聞天（名）佛語。大悲なる多聞天王。謠鞍馬「浮世に遠き鞍馬寺、本尊は大悲多聞天」

たい-ひつ 一大筆（名）大なるふで。筆蹟又は詩文などの雄大なる傑作にいふ。椽大の筆。文同詩「禁掖便當提大筆、名藩猶自擁高麾」

だい-ひつ 一大弼（名）一孝謙天皇の時、紫微中臺の下に置かれたる官。續紀天平宝字元年九月庚戌「制、紫微中臺官位中略大弼二人正四位下官」二古昔、弼の上位。職原抄下「弼正臺中略大弼一人、少弼一人」官職秘抄下「弼大少公達諸大夫任之、於大弼者參議或兼之、好古有國等也、又諸官權亮兼之、惟範是也」三だんじやうのだいひつ（彈正大弼）に同じ。明治二年七月八日職員令「大弼」

だいひつ 一代筆（名）他人に代はりて筆を執ること。又、其の人。代書。若風俗「一人の母親こがれて、世の限りと知らせて、代筆の文見しより」湯幔小品「會試沈同和以代筆中略第一名、代筆者趙鳴陽中略第六名、俱吳江人、事發並罰除名」元史選舉「諸冒名就試、別立姓名、及受財爲人懷挾代筆傳義者、並許人告」

だいひぼさつ 一大悲菩薩（名）佛語。くわんぜおんぼさつ（觀世音菩薩）の異稱。

たい-ひやう 一大病（名）重き病氣。大患。重病。篤疾。禮記曲禮「病革矣、如至乎大病、則如之何」吳志魯肅「我已大病矣」

（諺）大病に藥無し　物事の極度に達したる時は、施すべき術なきに譬ふ。

だい-ひやう 一大兵（名）身體の長大なること。（小兵（こひやう）の對）井筒業平河内通「此方は大兵、彼方は上手」燕村句集「大兵の二十餘りや衣がへ」

だい-ひやうし 一大拍子（名）劇場の囃子の一。大小鼓の打ち合せにて、三味

線入りもあり。社頭・鳥居・玉垣・神樂堂などの場に用ふ。

だいびゃうしんの まつり 代病身祭（名）だいやくまつり（代厄祭）に同じ。伊呂波字類「代病身祭タイビヤウシンノマツリ」

だいびゃうにん 一大病人（名）大病を煩ひをる人。

だいびゃくえ 一大白衣（名）佛語。密教の能法の一。「阿婆縛抄」

だいびろ 臺廣（名）下駄などの臺の、廣きこと。

だいひん 一大賓（名）敬重すべき大切なる客。周禮「大行人掌大賓及大客之儀、以親諸侯」論語「出門如見大賓」使民如承大祭」

だいひん 一代品（名）かはりの品物。代物。

だいひんしはらひ 代品支拂（英 Payment in kind）（名）〔法〕だいぶつべんさい（代物辨償）に同じ。

たいふ 一大輔（名）一古昔、次官の上位。神祇官にては大副、八省にては大輔と書す。職員令「中務省中務大輔一人」同「神祇官中務大副一人」同「式部省中務大輔一人」同「神祇官及び各省に置かれたる次官の上位にして、共に勅任たり。神祇官には大副と書し、少副の上に位して神祇伯の職掌を輔佐し、同四年八月八日神祇官と共に廢せられ、各省には大輔と書し、卿の職掌を輔佐し、同十九年二月二十六日廢せられたり。明治二年七月八日職員令「大副」同「大輔」

たいふ 一大副（名）一古昔、次官の上位。神祇官にては大副、八省にては大輔と書す。職員令「中務省中務大輔一人」同「式部省中務大輔一人」同「神祇官中務大副一人」同「式部省中務大輔一人」同「神祇官及び各省に置かれたる次官の上位にして、共に勅任たり。神祇官には大副と書し、少副の上に位して神祇伯の職掌を輔佐し、同四年八月八日神祇官と共に廢せられ、各省には大輔と書し、卿の職掌を輔佐し、同十九年二月二十六日廢せられたり。明治二年七月八日職員令「大副」同「大輔」二明治二年七月八日職員令「大副」同「大輔」

たいふ 一大夫（名）一五位の稱。古昔は五位以上をもいふ。是れ等正しくはたいふと呼び、たゆうと音便にいはずとぞ。孝德紀「賜食封大夫以上」

たいふ 一大夫（名）一支那、周時代の職名。士の上、卿の下に位するもの。禮記曲禮「大夫死、衆」二大名の家老の異稱。

たいふ 一大府（名）一ばくふ（幕府）の敬稱。二長官又は大名などの敬稱。三おほくらしやう（大藏省）の唐名。拾芥抄「大藏卿大府卿」唐六典「凡官府都鄙之吏、及執事者、受財用、焉則今太府之任也」

たいふ 一大父（名）おほぢ。祖父。史記「大父開地」

萬三石川大夫和歌一首」公式令「凡授位任官之日喚畔、三位以上先名後姓中略唯於太政官、三位以上稱大夫、四位稱姓、五位先名後姓、其於寮以上、四位稱大夫」枕「大夫は。式部大夫・左衛門大夫・史の大夫中略からぶり得て、何の大夫、權の守などいふ人の」二「雜技の者、宮中に召さるる時、無位にては入るを得ざれば、假に五位に准ぜられしより起こると。一說、皇室式微の時、諸職人の、金を奉りて五位・六位の官位を得たるに基くと」狂言・淨瑠璃、其の他、遊藝・曲藝等を業とする者。三俳優の女形。おやま。犬子集「とへば大夫の年の若さにの句あつもりと餅み打ちしたる一の谷」圓遊女の頭立ちたるもの。洞房語聞「大夫名目は京都より始まる。藝の上の名なり」貫我虎磨「大名の參會するは、大夫・天神といふ女郎の大將」四かんねし。祠官。神職。東鑑四文暦二年、伊豆國三島社中略神主盛方號大夫、中略神主盛成號大夫」五伊勢國宇治山田の神職の兼ねたりし家に限りていふ。膝栗毛「旅人の御師に至るを迎ふ中略あなた方はいづれへ御越しでござりますな中略太夫はどれへ」

たいふ 一大夫（名）一支那、周時代の職名。士の上、卿の下に位するもの。禮記曲禮「大夫死、衆」二大名の家老の異稱。

たいふ 一大府（名）一ばくふ（幕府）の敬稱。二長官又は大名などの敬稱。三おほくらしやう（大藏省）の唐名。拾芥抄「大藏卿大府卿」唐六典「凡官府都鄙之吏、及執事者、受財用、焉則今太府之任也」

たいふ 一大父（名）おほぢ。祖父。

たいふ 一大傅（名）一きだいじん（左大臣）の唐名。撮壤集「官位左大臣左丞相左右相」二淳仁天皇の朝、一時、左大臣を改めたる稱。續紀天平宝字三年、勅、改昌官號中略左大臣曰大傅」三天皇未だ成年に達し給はざる場合に、其の保育の任にあたる職。皇室典範第二十、天皇未だ成年に達せざるときは太傅を置き保育を掌らしむ」同第二十「先帝遺命を以て太傅を任せざりしときは攝政より皇族會議及枢密顧問に諮詢し之を選任す」同第二十「太傅は攝政及其の子孫之に任ずることを得ず」圓支那の周時代にて、三公の一。たいし（太師）を見よ。

たいふ （英 type）（名）一しるし。記號。二かた。手本。模型。三活字。

たいふ 一逮部（名）明治二年七月十七日刑部省に置かれたる職員。捕亡に從事する判任官。同年十一月五日逮部司を置くに及びこれに隸せられ、同四年七月九日逮部司と共に廢せられたり。明治二年七月八日職員令「逮部」

たいふ 一大部（名）一多くの部數、又は册數。大册。樂高僧傳「大部經文」二おほよその部分。大部分。

たいふ 一内府（名）ないだいじん（内大臣）の唐名。ないふ。拾芥抄「内大臣内府内相府今名内臣」

たいふ 一乃父（名）他人の父の稱。韓愈「乃、單に父の稱。書經「惟乃祖乃父、世篤忠貞」服勞王家」

たいふ 一大夫（名）職員の長官。官位令「從四位、中宮大夫下階」續紀「天平元年十一月、從四位下御使王、爲大膳大夫」同「天平三年丁卯、從四位下御使王、爲大膳大夫」源「小野朝臣牛養爲皇后宮大夫」

たいふ 一大夫（名）職員の長官。官位令「從四位、中宮大夫下階」續紀「天平元年十一月、從四位下御使王、爲大膳大夫」同「天平三年丁卯、從四位下御使王、爲大膳大夫」源「小野朝臣牛養爲皇后宮大夫」

たいふ 一大分（名）一おほかた。よほど。だいぶん。すこぶる。大略。大概。大抵。狂言「文蛤」「新座の者を大分抱へやうと思ふが」

たいふう 一大風（名）烈しき風。つよきかぜ。おほかぜ。天武紀「大風折木破屋」續紀「大寶元年、大風潮漢、田園損傷」詩經「大風有隧、貪人敗類」史記「大風從西北起、折木發屋揚沙石」

たいふうし 一大楓子（名）〔植〕ふうしゅ（楓子）の平滑なる木本。葉は細くして、曲がり易き枝を出だす。葉は長卵圓形、或ひは線狀長橢圓形、上面光澤あり。花は單性、雌雄異株、帶黃色にして芳香を發す。果實は蒴果にして球形、種子は油を含める脂乳を有し、之より大楓子油を搾る。東印度の原產。かったるすぐり。

たいふうしゆ 一大楓子油（名）大楓子の種子より搾取せる油。

たいふおろし 大夫下（名）大夫職の領城を、天神に下だすこと。色道大鑑「大夫おろし。上職にて出世したる領城の、大職にくだれるをいふ」

たいふかく 一太夫角（名）紋所の名。かく（角）を見よ。

目。一段の三分の二。卽ち、太閤檢地以前は二百四十歩、其の以後は二百歩の稱。大。地方答問書「世上にて太閤檢地と申し、文祿年中頃には田畠反歩を大歩・小歩・半歩と記し鍬水帳有之、大歩は貳百歩、小歩は百歩、半歩は百五十歩之事に候」四民格致重法記「太閤檢地は一段三百六十歩と云ひ傳へたり。然れども天正年中の水帳を見しに三百歩なり。其の水帳には畝と云はなく、壹段・大歩・小歩・半歩・八十歩・九十歩など有之」

たいふかのこ 太夫鹿子（名）貞享中、京都西洞院四條の藤屋善右衛門なる者の始めて染め出だしたる染物。結鹿子の如くに紺屋形を染めたるもの。守貞漫稿

たいふかひ 大夫買（名）一大夫職の領城を買ふこと。畿内地方の方言。二遊女を買ふこと。遊女買。夕霧阿波鳴渡「道通りが、左近殿を太夫買ひといったげな」

たいふがみ 大夫髮（名）大夫の結ふ髮のさま。若風俗「江北の赤頭の子供を江南の金剛が手に懸くれば、程なく太夫髮となり」

たいふさやく 一大夫客（名）大夫を相方とする客。賀古教信七墓廻「つい出來合ひと言ふ分が、大夫客の勝部にて」

たいふく 一退復　退きかへること。太平記「公卿・山門・會稽・退復し給ふ」

たいふく 一大福（名）一大いなる福運。二大いに富みて福分多きこと。三だいふくもち（大福餅）の略。

たいふくさ 一大福貴（名）大いに福貴なること。大福。狂言「今よりは大福貴にして取らせうぞ」

たいふくじゃ 一大福者（名）だいふくちゃうじゃ（大福長者）に同じ。三代男「都なる大福者に、家久しく四角なる箱に入れ納め置かれ、土藏に深く住み馴れしに」

たいふくちゃう 一大福帳（名）〔福分を祝ふ儀〕商家の元帳。豪帳。日次紀事「裝演上、大福書大福帖字、左右記年月日」傾城反魂香「あれあれ彼處へ、大福帳擔げて來るは、みやぢやないか」

たいふくちゃうじゃ 一大福長者（名）非常に富有なる人。おほがねもち。金滿家。平家「此の國綱卿と申すは、雙びなき大福長者にて御座しければ」盛衰記「彼の大納言は大福長者にておはしければ」徒然草「或る大福長者の云はく」

たいふくちゅう 一大腹中（名）度量の寬大なること。ふとっぱら。寬濶。本朝三國誌「四海を呑んで、狹からぬ大將軍の大腹中」世間手代氣質「大商人ほどあって、だいふくちゅうの云ひやう」

たいふくとく 一大福德（名）大いなる福德。大なる福利。宇津保俊蔭「此の木の上下、上の品は大福德の木なり。一寸を持ちてむなしき土をたたくに、一萬疫河沙の寶わき出づべき木なり」同蜻蛉「暑きころなれば、貧しき人のためにはいとよしし。是れは大福德におはしなん、あたたかげにつきておはしますと誇りありく」

たいふくもち 大福餅（名）餅菓子の一。餅に餡を包み、鐵板の上にて兩面を炙りたるもの。

たいふぐるひ 大夫狂（名）遊女買ひにうつつをぬかすこと。博多小女郎「良氏「我れ我れは俄か富限は見らるる通り」今日からは大夫狂ひ」

たいふけい 一大府卿（名）おほくらのかみ（大藏卿）の唐名。拾芥抄「大藏卿大府卿」

たいふけい 一大不敬（名）一大いなる不敬。殊に皇室に對する不敬。二八虐の一。大社を毀ち、大祀神御の物、若しくは乘輿・服御の物を盜み、神璽・内印を盜み、若しくは僞造し、御藥の調合を誤り、御膳の食禁を犯し、乘輿を指斥し、又は諸使に對捍して人臣の禮を失ふもの。名例律「六曰、大不敬」

たいふこ 大夫子（名）若手の歌舞伎俳優。若風俗「川御座にたいふこの後髮見ゆる」

たいふさき 一大夫鷲（名）【動】ごゐさぎ（五位鷺）の異名。

たいふさぎ 大夫棧敷（名）物の正面によく見ゆる所。劇場の語。歌舞伎

たいふし 一逮部司（名）明治二年十一月五日刑部省に置かれる司。捕亡の事を掌るもの。正・大少佑・位長・逮部の職員を置く。同四年七月九日刑部省と共に廢せられたり。明治二年十一月五日太政官御沙汰「今般刑部省中逮部司を被置職員如左」

たいふじ 一大府寺（名）おほくらしやう（大藏省）の唐名。職原抄「大藏省唐名大府寺」

たいふしゃうけん 一大夫將監（名）將監の五位に敍せられたる人。官職知要「凡諸司判官は相當六位也、しかるを敍五位、兩官如元なる時は中略將監を或左近右近大夫、或大夫將監とも見えたり」

たいふしゅぼ 一大府主簿（名）おほくらのさくわん（大藏錄）の唐名。拾芥抄中本「大藏卿中略錄大府主簿」

たいふしょく 一大夫職（名）大夫たる女郎。おしよく。おしよく女郎。一代男「情あって大氣に生まれつき、風俗大夫職に傾はって、衣裳よく著こなし」吉野忠信「名經名宿」色は根本大夫職、さては天職柔なり」

たいふじょちゃう 一逮部助長（名）明治二年七月十七日刑部省に置かれたる職員。逮部長を助けて捕亡の事を掌る判任官。同年十一月五日廢せられたり。明治二年七月八日職員令「逮部助長」

たいふじらう 一大府侍郎（名）大藏省の次官。大藏大輔の唐名。職原抄「大藏卿中略侍郎」

たいふしょう 一大富長者（名）だいふくちゃうじゃ（大福長者）に同じ。神祇全編「手伐加藏瓦必作大富長者」

たいふつ 一大物（名）おほいなるもの。關尹子「能積小物然後能成大物」

たいふつ 一對物（名）或る物件に對することと。

たいふつ 一代物（名）かはりの物。代品。

たいふつ 一大佛（名）大いなる佛像。多くは釋迦如來・大日如來とす。字治拾遺「其の夜、東大寺の大佛の御前にて」遍照抄「大佛鑄始」北史「繁昏陽西山、爲大佛像」

藏卿中略大輔一人、權大輔一人、相當正五位下、大府侍郎一人、大府侍郎權一人」

たいふじん 一大夫人（名）天子の御生母たる夫人・女御の尊稱。皇太夫人。續紀「大神龜元年、朝、尊正一位藤原夫人爲大夫人」同「三年、天平寶字、自今以後、道鬼爲皇太夫人」

たいふせいけい 一大府少卿（名）大藏省の次官。大藏少輔の唐名。職原抄「大藏省中略少輔一人、權少輔一人、相當從五位下、唐名、大府少卿」

たいふせった 大夫雪蹈（名）昔時、遊女のはきたる雪蹈。浮世親仁形質「雪蹈ほどな二つなひの鼻緒の大夫雪駄をはかし」

たいふせん 一大府宣（名）太宰權帥又は大貳より、其の府の在職官に下だす文書。朝野群載「太宰府、帥大貳最初府宣。大府宣。太宰府在職官人等、仰下、三箇條事」

たいふちゃう 一逮部長（名）明治二年七月十七日刑部省に置かれたる職員。捕亡の事を掌る判任官。同年十一月五日廢せられたり。明治二年七月八日職員令「逮部長」

たいふちゃうじゃ 一大富長者（名）だいふくちゃうじゃ（大福長者）に同じ。

たいふつ 一大佛（名）大いなる佛像。多くは釋迦如來・大日如來とす。字治拾遺「其の夜、東大寺の大佛の御前にて」遍照抄「大佛鑄始」北史「繁昏陽西山、爲大佛像」

たいぶつ　くやう　〔大佛供養　大佛を供養すること。

（諺）**大佛の柱を蟻がせせる**　大黒柱を蟻がせせるに同じ。だいこくばしら（大黒柱）の條を見よ。

だいぶつ-おほばんさん　**大佛大判金**　（名）豐臣秀吉が大佛供養の時（一説に豐臣秀頼が大佛再建の時）、鑄造せりといふ大判金。面に十刷、後藤及び花押を墨書し、桐章を極印し、背に桐章を極印せると別に花押を墨書せるとあり。縱五寸四分・横三寸三分、重量四十四匁二分と、縱五寸五分・横三寸五分五厘、重量四十四匁二分と、縱五寸五分五厘横三寸五分弱、重量四十四匁七分との三種あり。大佛判。大日本貨幣史「大佛大判金」

だい-ぶっし　〔大佛師（名）ぶっし（佛師）の尊稱。又、佛師の長。朝野群載十六、佛師「大佛師從四位下田中連土公ノ麿」東鑑建暦元年八月廿一日「南都大佛師成朝」

たいぶつ-しんよう　〔對物信用（名）【經】信用の一。擔保物に著眼して、其の人の身上如何を顧みざるもの。（對人信用の對）

だいぶつ-せん　〔大佛錢（名）もんじせん（文字錢）の異稱。貨幣通考「寛文中、寛永錢の吹き繼ぎあり。按ずるに京師の大佛を毀ちて鑄る所なり。故に俗に大佛錢と云ふ」

たいぶつ-たんぽ　〔對物擔保（名）【法】擔保の一。特定の財産を以て債務の履行を確保するもの。即ち、質・抵當の類。物上擔保。（對人擔保の對）

だいぶつ-でん　〔大佛殿（名）大佛を安置する殿堂。朝野群載二、東大寺大佛殿、佛前板文」東鑑二、治承五年、火焔及大佛殿十月十八日「之間」

たいぶつ-ばぶ　〔對物法（名）【法】其の内容が主として物に關する法規。（對人法の對）

だいぶつ-ばん　〔大佛判（名）だいぶつおほばんきん（大佛大判金）の略。金座永野家記「大佛判（大阪吋代之面承り傳（申し候）」老談一言記「大佛判之儀、太閤様之時、私先組德乘相極め申し候、極印の桐も德乘作にて、大佛供養之時、入用のため拵へ候故に大佛判と申し候。常之通用之大判よりは金位能く御座候」

だいぶつ-べんさい　〔代物辨濟（名）【法】債務者が債權者の承諾を得て、其の負擔したる給付に代へ、他の給付をなして其の債務を消滅せしむること。

だいぶつ-もち　〔佛餅（名）京阪地方にて流行の餅。奈良大佛を本尊とせる京都京極通り誓願寺門前の餅屋にて賣り出だしよりいふ。養生物語「木村が上方勢を追ひ立てた勢ひより、討死の時中略大佛餅を手に手に持ち、しづかに食ようてゐた」一代女「天滿のだいぶつもち」

たいぶつ-れんず　〔（英 Objective lense）（對物——）（名）【理】顕微鏡及び望遠鏡等に於て、筒先にありて物體に對するれんず。一箇、又は數箇の凸れんず。を組み合はせたるものを用ひ、之によりて外物の實像を生ぜしむ。

たいぶ-の-かみ　**逮部正**（名）明治二年十一月五日に置かれたる逮部司の長官。奏任とす。同四年七月九日逮部司と共に廢せられたり。

たいふ-の-し　**大夫史**（名）左大史の五位に敍せられたる人。中右記寛家二「右大辨時範朝臣、奉仰遣召大外記大夫史、則皆參」保元新式「大夫史師綱、やがて忠正頼憲が許に行き向かって召すに」

たいふ-の-じょう　**大夫尉**（名）たいふぐわん（大夫判官）に同じ。

たいふ-の-しん　**大夫進**（名）五位にて中宮大進となりたるものの稱。平治「中宮大夫進朝長」

たいふ-はぐわん　**大夫判官**（名）檢非違使尉にて五位に敍せられたる人。大夫尉。吉野拾遺「たいふはぐわん赤松光範が、津の國のかためなりけるとき」

だい-ぶぶん　〔大部分　だいぶ（大部）に同じ。

たいふ-へさ　〔大斧劈（名）支那畫の山水の皴法の一。大なる斧にて劃りたる跡の如き筆痕を用ふるもの。

たいふ-まんぢゅう　〔大夫饅頭（名）六月の嘉祥に、大饅頭を下ださるること。又、其の饅頭。建武四

たいふ-もと　〔大夫元（名）演藝の興行人。興行元。座元。若風俗「その外四十五人の舞子ありしが中略大夫元にも欲を知らず、物にもならぬ客をうかうか持てなし」皇都午睡「三座の太夫元を旦那と稱して、京猿の座本と違ひ、至極尊敬する事也中略太夫元は、代代銀主興行人にて、別に役者ならず」

たいぷらいたー　〔（英 Typewrighter）（名）筆蘆を用ひて書寫する代りに、活字にて自由に印刷し得るやう仕組まれたる機械。挺子の一端に鈕を、他端に必要なる文字・符號等、例へばあるふぁべっとの如き活字を附し、紙を動かしつつ所要の鈕を指にて壓すときは、之に應ずる文字を印刷し得。

たいふ-らうちゅう　〔大府郎中（名）おほくらのじょう（大藏丞）の唐名。抄「大藏省中略冰大少、郎中職」

たいふ-わげ　**大夫髷**（名）太夫の結ふ髪の如きまげ。破枕集「松にそふは太夫髷かよ柳がみ」

たいぶん　〔堆糞（名）馬糞などを堆積して、腐らしたる肥料。堆肥。

たい-ぶん　〔台聞（名）貴人の聞こし召すこと。おきき。台聽。高聞。

だい-ぶん　〔大分　だいぶ（大分）に同じ。俳諧新選「散らぬ葉も大分もった柳かな」

たいぶんすう　〔帶分數（名）【數】ぶんすう（混分數）に同じ。

たいへ　〔（名）たらひ（盥）をいふ。陸奥國南部地方の方言。物類呼稱

たい-へい　〔大兵（名）多くの兵士。大軍。六韜「大兵發而、萬物皆服」

たい-へい　〔大柄（名）大いなる權柄。大いなる權力。宋史「爲邦在乎任人、任人在乎公正、公正之道莫先於賞罰、斯爲政之大柄也」

たい-へい　〔大瓶（名）大いなる瓶。おほがめ。諺「數多の瓶猩、大瓶に上ぼり」幸若舞曲「しゅじゅの大へい・おほづつを、御でゐ（甲し出だし）顧瑛詩「大瓶酒酒鷄鴨鮮、滿頭花插鬢邊紅」

たい-へい　〔大弊（名）大いなる弊害。宋史「震言、當時之大弊、曰民窮、曰兵弱、曰財匱、曰士大夫無恥」くづれすたること。

たい-へい　〔頽弊　くづれあること。正「其類弊」

たい-へい　〔太平（一）たいへい（泰平）に同じ。運歩色葉「太平・泰平・オ」史記「黔首衆謐、人樂同則、嘉保太平」（二）越前國より産出する一種の厚紙。（三）たいへいらく（太平樂）の略。

（諺）**太平、象なし**　泰平の代には却りて別に其の現象を認むべきものなし。

（諺）**太平の功は一人の力にあらず**　太平の功をなすは多人數の力による。四子講德論「大廈之材非一丘之木、太平之功非一人之力也」

（諺）**太平の百石は戰場の千石**　太平の世には功を立つる場合少なきを以て、高祿を得難きこと。

たい-へい　〔泰平　世の中のおだやかに治まること。天下事なく、人民やすらかに暮らし居ること。昇平。太平。太平記「長崎新左、かくてぞ國家の泰平、武運の長久にて候はんと存ずるに」漢書食貨「泰平二十七歳、遭九年食、然後王德流」

たいへい-がみ　**大平紙**（名）たいへい（太平）に同じ。

たいへい-きゅう　〔太平弓（名）八張弓の一。弓に鏑藤（カブラフヂ）矢摺藤（ヤスリ）及び鏑扣藤（カブラフヂ）を卷けるもの。即ち、式（ニ）の藤の弓。（延用略）三議一統大變紙「實檢の時出で立ちは中略弓は太平弓、矢は鷹の羽なるべし」有德院殿御實記附錄「仰せにより、太平弓・征矢・鯨の尻籠に、替弓そへて來る」

たいへいきよみ　**太平記讀**（名）昔時、路傍などにて、太平記を讀み錢を乞ひたるもの。後世の講釋師。人倫訓蒙圖彙「太平記讀（ヨミ）。近世より始まれり。太平記よみての物もらひ、あはれ昔は疊の上にも暮らしたればこそ、つづり讀みにもすれ。なまなかかくてあれよかし、紙屑の涼み、紙の森の下などにては、むしろ敷きて座をしめ、講釋こそをこならめ」

（みよきいへいた）

たいへいげんぱう-せん　〔太平元寶錢（名）淳仁天皇の天平寶字四年三月に鑄造せる銀錢。徑及び重量詳かならず。一を以て萬年通寶の十に當てたり。太平元寶。大日本貨幣史「太平元寶錢」

たいへいこく　〔太平國（名）太平に治まる國。吉野都女楠「太平國に太平の、君が威光は萬萬歳」

たいへい-しゅ　〔太平酒（名）沖繩縣より産出する一種の酒。

たいへい-しんきやうりう　〔太平眞鏡流（名）劍術の一派。享保の頃、若名眞鏡齋盟重の創めたるもの。

たいへい-せう　〔太平簫（名）ちやるめら（哨吶）の異名。

たいへい-ふ　〔太平布（名）琉球より産出する質の丈夫なる織物。鎧などに用ふ。

たいへい-らく　〔太平樂（一）雅樂の道調曲の一。支那、唐の明皇の作る所といふ。破陣樂。和名「道調曲。太平樂（ヒヤウラク）、宇津保菊宴「太郎君太平樂、次郎君皇鷰」枕「たいへいらくは、さま惡しれど、いとをかしい」（二）すきはうだい。でたらめ。でほうだい。太平。浮世風呂「他人宿に雜用を拂ってまごついて居るにはましだから、居てやるんだなぞと太平樂さ」

（諺）**太平樂をいふ**　次條に同じ。

（諺）**太平樂を並べる**　すき放題な事をいふ。

たい-べう　〔大廟（名）（一）そうべう（宗廟）に同じ。禮記「季夏六月、以禘禮祀周公於大廟」論語「子入大廟、每事問」（二）伊勢の太神宮。神廟。

だい-へう　〔代表（名）【法】法人・團體、又は一箇人の機關となり、これに代はりて其の意思を發表すること。又、其のもの。舊町村制「町村會は其町村を代表し」商法「定款又は總社員の同意を以て特に會社を代表すべき社員を定めたるときは各社員會社を代表す」

だい-へうぐ　〔題表具（名）表具の形式の一。隨筆

だいへう-くわへい　〔代表貨幣（名）貨幣の代用となるもの。即ち、小切手・約束手形・爲替手形の類。

だいへう-けん　〔代表權（名）【法】代表をなす權限。

だいへう-しゃ　〔代表者（名）代表權を有するもの。商法「資本の十分の一以上に當たる株主か取締役に對して訴を提起することを請求したるときは特に代表者を指定することを得」

だいへうしゃぬん　〔代表社員（名）合名會社・合資會社、又は株式合資會社の社員にて、定款又は法律の規定により會社を代表する權限あるもの。

だい-へさ　〔大辟（名）〔へき（辟）は刑の義〕重き罪。重き刑罰。大罪。大刑。獄令「凡決大辟罪、在京者、行決之司、三覆奏」同「凡斷罪行刑之日、並宣告犯狀、決大辟罪囚、苦防援著枷至刑所」書經「百刑「大辟之罰、其屬二百」

だい-へき　〔頽壁（名）くづれたる壁。

だい-へき　〔題壁（名）詩歌・文章などを壁上に題すること。南史「沈約郊居宅」時、新構閣齋、客爲贊二首、并以所撰文章呈約。即命工寫人題其贊于壁」

たい-べつ　〔大別（一）いなる區別。おほわけ。大區分。（二）おほよそ。大體。

だい-べつたう　〔大別當（名）おほべったう（大別當）に同じ。

だいへん　〔大篇（名）篇章の長く、雄大なる詩文。雄篇。大作。蘇舜欽詩「大篇隨自出、爛漫風力老」

たい-へん　〔對邊（名）【數】相對する邊。

たい-へん　〔大變（一）大いなる變事。非常なる凶變。「大變也」史記「恐天下將有大變也」東方有大變、然後王可以多割地」（二）大に驚くべきこと。おほごと。（三）甚だ。非常に。大相。

たい-べん　〔胎便（名）かにくそ（蟹屎）に同じ。

だい-べん　〔大便（名）人類が肛門より排出する食物の殘滓。くそ。ふん。大用。和名「屎、大便也」著聞「大便をもよほしければ」

だい-べん　〔大辯（名）いとすぐれたる辯舌。能辯。達辯。莊子「大道不稱、大辯不言」

（諺）**大辯は訥なるが如し**　大辯なる人は妄りに口をきかざるより、一見したる所にては却りて どもりに類す。老子「大巧若拙、大辯如訥」

だい-べん　〔大辨（名）（一）古昔、辨官の上位。左と右とあり。おほともひ。官位令「從四位。左右大辨上階」枕「大辨」（二）べん（辨）を見よ。明治二年七月八日職員令「大辨」

だい-べん　〔代辨（一）他人に代はりて辨償すること。代償。衆議院議員選擧法「第八十七條、旅費若は休泊料の類を代辨し、及其の代辨を受けたる者」（二）他人に代はりて其の事務を辨ずること。又、其の人。代理。

だいべん-くどくてん　〔大辨功德天（名）佛語。だいべんさいてん（大辨財天）に同じ。

だいべんげふ 〔代辨業〕（名）他人の代理をなすを目的となす營業。營業稅法（第二號）第三代辨業」同（第十三條）公なる周旋業代辨業仲立業仲賣業」同（第九條）第十「代辨業仲立業仲賣業は各店舗其の他の營業場毎に營業稅を課す」

だいべんざいてん 〔大辨財天〕（名）佛語。女相の佛。世を護り、物を濟ひ、佛法を流通して倦怠なく、智慧を以て福を養くる功德ありといふ。辨財天。

（んていざんべいだ）

だいべんしゃ 〔代辨者〕（名）だいべんにん（代辨人）に同じ。

だいべんてん 〔大辨天〕（名）佛語。だいべんざいてん（大辨財天）に同じ。

だいべんにん 〔代辨人〕（名）一他人に代はりて其の事務を辨ずる人。代理人。二代辨業を營む人。舊商法（第四百六條）代辨人」

だいべんむし 〔大辨務使〕（名）最上級の辨務使。明治三年閏十月二日太政官布告「大辨務使、相當從三位」

だいべんりやうじ 〔代辨領事〕（名）だいりりやうじ（代理領事）に同じ。

たいほ 田庵（名）田間につくりたるいほり。夫木「まばらなるたいほにすこがいをやすみ、月にもらして幾夜あかしつ」

たいほ 〔台輔〕（名）三公の位にありて天子を輔佐しまつる人。太平記（廿一）「天下「朝廷の政、武家の計らひに任せて有りしかば、三家の台輔も奉行・頭人の前に媚びを成し」後漢書（班固傳）「永惟太宗之重、深思嗣續之福、詢謀台輔、稽之兆占、天人協和、萬國咸寧」

たいほ 〔大保〕（名）たいはう（大保）を見よ。

たいほ 〔退歩〕一あとじさりすること。あともどり。後退。退却。二以前よりも惡くなること。劣等に下だりゆくこと。おとること。

たいほ 〔逮捕〕人の身體に、直接に物質上の力を加へて、其の行動の自由を制奪すること。めしとること。ていぽ。大日本帝國憲法（第三）「日本臣民は法律に依るに非ずして逮捕監禁審問處罰を受くることなし」史記（魯周）「上皆並逮捕趙王賈高等」

たいほ 〔太母〕（名）おほば。ばば。祖母。漢書（外戚傳）「李太后、親平王之太母也。注太母、祖母也」

たいほう 〔大封〕（名）廣大なる封土。周禮「大封之禮、合衆也」

たいほう 〔大鵬〕（名）支那にて想像上の大鳥。鯤（こん）といふ大魚の化したるものにて、其の翼の徑三千里ありといふ。おほとり。鵬。太平記（卷七、鳥山入）「昨日は海をはかりし大鵬の、九霄の雲に搏つが如く」莊子（逍遙遊）「北冥有魚、其名爲鯤、鯤中化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲」

たいほう 〔大寶〕（名）加持に用ふる護摩壇。（護摩）「庭訓往來（九月）「可致用意、物者中間大寶、高座・紺蓋・塗塔」

たいほうし 〔植〕だいたうまい（大唐米）の異名。

だいほう-れんげ 〔大寶蓮華〕（名）珠寶より成れる蓮華。大原問答（青葉笛）「大寶蓮花の下、八功德池は、甘露の水、清清と清らかに」

たいぼく 〔大木〕（名）大いなる立木。巨樹。大樹。おほぎ。盛衰記（廿四、三井寺）「久米の仙人通力を起こして、大木を飛ばし」運歩色葉「大木（ダイ）」書經（金縢）「天大雷電以風、禾盡偃、大木斯拔」孟子（萬章、玉下）「爲巨室、則必使工師求大木」

（諺）大木一本の弱みは小木千本の擂みとなる 大勢力あるものの失敗は、其の部下多數のものに影響す。養輪軍記「「大木一本のよわみは小木千本の痛みとなり」

（諺）大木に蟬のとりついたやう 大木に蟬に同じ。おほぎ（大木）の條を見よ。松の木に蟬。

（諺）大木の下に小木育つ 大勢力ある人の許には、多くの人人が庇護せらる。

（諺）大木は風に折られる 喬木風に折らるに同じ。けうぼく（喬木）の條を見よ。

（諺）大木はころべども地につかず 勢力の大なるものは、失敗すとも全く倒ることなし。

（諺）大木へ蟬のとまったやう 大木に蟬のとりついたやうに同じ。

たいぼく 〔台墨〕（名）他人の書簡の敬稱。台翰。台書。芳墨。

たいぼくし 〔大卜師〕（名）おんやうじ（陰陽師）の唐名。職原抄「陰陽師（相當從七位上、唐名、大卜）」

たいぼくせい 〔大卜正〕（名）おんやうはかせ（陰陽博士）の唐名。職原抄「陰陽博士（相當從七位上、唐名、大卜正）」

たいぼくれい 〔大卜令〕（名）じんぎは（神祇伯）の唐名。職原抄「神祇官（中務）（相當從四位下、中務、落伯、又、大卜令、又、神部卿）」

たいぼくわんり 〔逮捕官吏〕（名）犯人を逮捕する職權ある官吏。即ち、巡査。警部などの類。

たいぼさい 〔逮捕罪〕（名）【法】不法に人を逮捕するによりて成立する犯罪。刑法（第三十一章）「逮捕及監禁の罪」

だいぼさつ 〔大菩薩〕（名）最高の僧位。又、其の僧位を賜はりたる人。行基大菩薩行狀記「三代の御戒師たるによりて、大僧正の位を改め、大菩薩の尊號を授け給ひけり」

たいぼ-じゃう 〔逮捕狀〕（名）刑事被告人、體刑の執行を逃れたる犯罪人、又は逃亡犯罪人等を逮捕するために、檢事の發する令狀。刑事訴訟法（第八十六條）「檢事の發したる逮捕狀は拘留狀と同一の效を有す」明治三十二年法律第六十八號（第四）「檢事か艦船乘組員の逮捕を命すへき場合に於ては逮捕狀を發すへし」逃亡犯罪人引渡條例（第七）「本條例に據り發したる總ての逮捕狀は帝國內何れの地に於ても效力あるものとす」

たいぼ-じゃう 〔逮捕狀〕（名）【植】かたくり（片栗）の異名。

だいぼせ 〔臺牡丹〕（名）【植】だいぎぼたん（臺木牡丹）の異名。

だいぼたん 〔臺牡丹〕（名）【植】だいぎぼたん（臺木牡丹）の異名。

だいぼちゃう 〔大簿帳〕（名）古昔、大帳・稅帳の類の稱。令（義解）（公式）「大事廿日程謂、計算、大簿帳（戶部、財帳等也）及須、諮詢者」

たいぼつ 〔退沒〕（名）たいもつ（退沒）に同じ。

だいぼふ 〔大法〕（名）佛語。修法の一。大熾盛光法・七佛藥師法・普賢延命法等の稱。宇津保（俊蔭）「かしこき智者にて、大法など盡くして受けたりければ」平家（三、豆）「醫家藥を盡くし、大法・祕法一として殘る所なう被修けり」盛衰記（廿五、西宮）「何れの大法・祕法と申し候とも、是れに過ぎたる御祈禱侍るまじ」

だいぼふし 〔大法師〕（名）一天平寶字四年以前、大寺にて私に授與したる僧位の一。孝德紀「以沙門狛大法師・觀亮・惠雲・常安・靈雲・惠至、主寺僧晃・道登・惠隣・惠妙・惠勝、並爲十師」二天平寶字四年に置かれたる僧位の九階の上位。傳燈位

四階、又は隼位四階を經てこれに昇る。類聚國史（百八十七、齋戒十、賜大法師善謝、度三人」）

だいぼふじ 〔大法事〕（名）大規模の法事。佛語新選集「夜をこめて新米春くや大法事」

だいぼふゑ 〔大法會〕（名）大規模の法會。大會。宇津保（俊蔭上）「次の卷に、女だいきやうの有樣、大法會のことはあめり」庭訓往來（九月）「近日執行佛事大法會」事候」

だいぼらく 〔大補樂　大舞樂〕（名）雅樂の道調曲の一。和名抄「道調曲。大寶樂・大舞樂」

たいぼん 〔大本〕（名）第一の基本。おほもと。中庸「立天下之大本」

たいぼん 〔大犯〕（名）大いなる犯罪。大罪。太平記（廿三、公家一統）「武、諸國の守護、大犯三箇條の檢斷の外は、綸旨事無かりしに」

だいぼん 〔臺本〕（名）きやくぼん（脚本）に同じ。

だいぼんえい 〔大本營〕（名）大蘿の下に置く最高の統帥部。幕僚及び各機關の高等部を置き、參謀總長及び海軍軍令部長は各其の幕僚に長として帷幄の機務に奉仕し、作戰を參畫し、終局の目的を稽へ、陸海兩軍の策應・協同を圖るものとす。戰時大本營。「天皇の大纛下に最高の統帥部を置き之を大本營と稱す」同（第）「大本營に在て帷幄の機密に參與し帝國陸海軍の大作戰を計畫するは參謀長の任とす」

だいぼんげ 〔大凡下〕（名）身分の極めて下等なるもの。罵りていふ語。太平記（五、大塔宮、忝くも中國御門出ある路次に參り合はせて、汝等程の大凡下の奴原が、左樣の事可仕樣やある」

たいぼんげじょう 〔退凡下乘〕（句）佛語。釋迦の靈鷲山にて說法の時、摩訶陀國王頻婆沙羅これを聞かんために通路を開きて、中間に建てたりといふ二つの卒都婆。即ち、一は下乘といひ、王此の所より徒行し、一は退凡といひ、凡人をして是れより內に入らしめざるもの。平家（二、山）「退凡下乘のそとばも、昔のみむして頽きぬ」徒然草「退凡下乘の卒都婆、外なるは下乘、內なる退凡なり」西域記「如來御世垂五十年、多居靈鷲山、廣說妙法、摩訶陀國頻婆沙羅王爲聞法故興發人徒、自山麓至峰岑、跨谷凌巒、編石爲階、廣十餘步、中五六里、中路有二卒都婆、謂下乘、即王至此徒行以進、一謂退凡、即簡凡人不令同往其山頂」

だいぼんざん 〔大本山〕（名）佛語。寺の本山にて、寺格の第二位にあるもの。

だいぼん-じんをん 〔大梵深遠〕（名）佛語。夫餘の略。榮華（魯）「大悲を初めとして大梵深遠に至るまで、纔き居させ給へり」

だいぼんじんをん-くわんおん 〔大梵深遠觀音〕（名）佛語。によいりんくわんおん（如意輪觀音）に同じ。

だいぼんぞく 〔大凡俗〕（名）最も凡俗なること。大俗。非國女夫池（雅房）「大凡俗の身を以て、申し上げ可き詞なし」

だいぼんてん 〔大梵天〕（名）佛語。色界の四禪天の中、初禪天にある天。神皇正統記（大風）「ありて沫を吹き立て空中に投げおく、即ち大梵天の宮殿となる」倶舍論（梵輔天）「中有高樓閣、名大梵天」

だいぼんてんわう 〔大梵天王〕（名）佛語。大梵天の主。淫欲を離れ、清淨潔白なる佛。

（うわんてんぼいだ）

たいま 〔大麻〕（名）一ぬさ（幣）の異稱。おほぬさ。二武具。指物の名。御祓箱。三（植）あさ（麻）に同じ。四（植）まを（苧麻）に同じ。

たいま 〔對馬〕（名）一將棊にて、雙方が同數の駒を置きて差すこと。二將棋の技倆の同等なること。互角の將棋。

だいま 〔大魔〕（名）大いなる惡魔。盛衰記（八、實日本國の大魔と成りて、天下を亂り、國家を惱まさん」

たいまい 〔袋米〕（名）袋に入れたる米。東鑑（十二、建久三年五月八日）「白布三段、袋米一」

たいまい 〔瑇瑁　玳瑁〕（名）【動】爬虫類中、龜類の一種。體の長さ三尺許り。扁平楕圓形の海龜。背甲は黃色に黑斑を交へ、十三枚の大鱗及び數多の緣鱗より成り、覆瓦樣に排列せり。四肢は扁平にして游泳に適す。我が國、小笠原島・琉球諸島・臺灣、及び熱帶地方の海洋に產す。背甲は裝飾品の材料として貴重せらる。鼈甲即ちこれなり。和名抄「瑇瑁（代犀）」運歩色葉「玳瑁・瑇瑁（ダイ）」史記（秦本）「趙使欲入秦、楚、爲瑇瑁簪」漢書（賈誼）「簪冒鼈甲」嶺南雜記「玳瑁出南番海洋、狀如龜鼈、背負十二葉、三倒鱗、其身、以滾、醋煑之、逐片應手而落」

（いまい）

だいまい 〔大枚〕多くの金額。又、多分の金。背時、餅銀（ヘイギン）の大なるをいひたるに基く。後拾遺往生傳「作大枚餅（ヘイギン）」七十一「番厮合爲此の革はだいまいかな」

たいまい-ざさゑ 〔玳瑁蒔繪〕（名）玳瑁の模樣の如く色どりたる蒔繪。（俗記）

たいまう 〔大望〕（名）大いなるのぞみ。分際をこえたる願望。非望。（大學）「狂言花子」「是れ程に思ひ立った大望を」津國女夫池（雅房）「兄は生ひ先大望ある大事の男」

だいまつ 〔松明〕（名）松の脂多き部分、又は竹・葦などを束ねて火を點し、路を照らすに用ふるもの。うちまつ。しようめい。宇津保（初秋）「たいまつの光に中將見るに、まして更なり」狹衣「たいまつまゐらで、くらうなり侍りぬ」盛衰記（廿六、烏擧）「松を出だして見れば、實に七十計りの法師なり」

たいまつ-あぶり 〔燒松炙〕（名）火焙（ヒバリ）の一種。下文を見よ。土津靈神言行錄（下、九）「會津先太守蒲生氏之世（中略）作大壇（生）一、木以、倉津松、繫罪人、合掌手抱、竹輪、而束、麻苧、燃之、左右前後、持之、莢之、罪人踊躍而死、名之謂燒松炙（ヒバリ）」

だいまつ-かつ 〔大鞦韆〕（名）あやぎり（綾切）の異名。樂家錄（廿八、三）「高麗壹越調、綾切（阿波、他一名、愛嬢女、又、高麗女、又、大鞦韆、又、鞦韆綾箱舞」

たいまつ-ぎゃうれつ 〔松明行列〕（名）祝意を表するため、一團の人數が、夜中箇箇に松明を點じつらねて練り行くこと。

たいまつ-やく 〔松明役〕（名）松明をとぼす役。しようめいの役。

たいまつる 〔奉〕（他動）たてまつる

（來）也の音便。土佐日記「昌速、酒・よきものたいまつれり」宇津保「すみやき・きこりなどいふものども、集まりてたいまつれり」

たいまつる　奉（助動）たてまつる（奉）の音便。宇津保「このあないを語らひたいまつらんとて」同「女人の見たいまつるべくば、ゐてたうべらんや」大鏡「放語したいまつりたるを」

たいまつ-の-まつり　當麻祭（名）大和國葛下郡當麻の都比古神社にて、毎年四月上申の日に行ふ祭禮。

だいまる-かひ　大丸買（名）現金にて買ひて、懸直なきこと。

たいま-れき　一大麻暦（名）神宮司廳より毎年頒布する暦。

だい-まねり　代參（名）㊀他人に代はりて參詣すること。又、其の人。だいさん。「運歩色葉「代參（ダイサン）」」狂言「鞍馬中略汝は、いつもだいまねりに參らする」」㊁物奚るる人に代はりて神佛に參詣する一種の乞食。風俗文選「常に花やかなる行き來は稀に、番なふもの念佛・代日・代侍・代參り」

たい-まん　一忘慢　おこたること。なまけ。なほざり。おろそか。怠惰。緩怠。等閑。「運歩色葉「忘慢（マン）」左傳「滅亡無牲成而下」郊、上忘慢也」史記「封禪書「後稍忘慢也」」

だい-まん　一大萬（名）紋所の名。曾我扇八景「黒一文字・白一文字中略大一・大萬・大吉、山の内の一黨」

だい-まんだら　一大曼荼羅（名）佛語。曼荼羅の一種。祕藏記「四種曼荼羅、一、大曼荼羅五大也、三昧耶形二、三昧耶曼荼羅中略三、法曼荼羅中略四、羯磨曼荼羅」眞言名目「四曼者、一、大曼荼羅、諸尊相好具足身也、又、繪像佛形五色交色、故名大、大者殊勝義、圓滿義、則五大色云大曼荼羅也」

たい-み　一大味（名）すぐれて佳き味。至味。楊雄文「大味必淡、大音必希」

だい-みさ　臺實木（名）芝居の道具立にて、松・杉などの樹の形に臺を取りつけて据ゑつけ飾るもの。

だい-みやう　一大名（名）㊀平安朝の末、多くの名田を有したるものの稱。㊁鎌倉時代に、將軍の家臣にて、領地の大いなる守護・地頭に與へたる稱號。東鑑「三寿永三年三月「下、土佐國大名國信・國元・助光入道等所」」盛衰記「四、奥「此の馬をば大名・小名、八箇國の者共、内外につけて所望ありき」」㊂江戸時代に、知行高一萬石以上の武家の稱。官中祕策「七拾箇國大名數、都合貳百六拾貳人」

（諺）**大名と針とは遠目に見ゆる**　大名は供人多く、針は光りて、遠目にも能く見ゆ。曾我虎磨「松原は松の木の茂りに紛るる事もある、大名と針とは遠目に見ゆると言ふからは、いざ此處に待ち受けて、遠目に見ん」

（諺）**大名の三代目**　愚物多き譬へ。

（諺）**大名の一人子**　大切にせらるるものに譬へていふ語。尤草紙「用ひらるるもの物の品」、大名のひとりご」

（諺）**大名の火にくばったやう**　なす所を知らざる譬へにいふ語。和歌民のかまど「大名火にくばる」

（諺）**大名の憎兒のやう**　役に立たぬ譬へにいふ語。

（諺）**大名の病ひは行き倒れも同然**　大名が病ひにかかれば、醫師どもが相談療治して互ひに責任を他に讓り、恰も行き倒れの人を隣より隣に送るに同じきこと。

（諺）**大名は大耳**（ダイミミ）　大名は些細の事に耳をかさず、聞きても聞かぬふりをすべし。

（諺）**大名は草の鹿毛**　大名は所領の安堵を圖るため、强者に附き易き譬へ。承久軍物語「侍は草の靡き」

（諺）**大名は家來が寄って馬鹿にする**　大名は家來が寄り集まり追從・輕薄するによりて馬鹿となる。

（諺）**大名は地獄の下積**　大名は生存中、驕奢を縱にし下を苦しむるにより、死後は地獄に陷りて、重き刑罰を受くること。

だい-みやう　一大明（名）だいみやうにち「大明日」の略。

だいみやう-あづけ　大名預（名）江戸時代、囚人を大名に預くること。月番老中豫め其の意を大名に告げ、大名より其の家僕數人を評定所に遣はして之を受け、警固して其の邸に至る。其の警固の人數及び待遇等は貴賤によりて差異あり。武士預。

だいみやう-おもと　大名萬年青（名）【植】百合科、萬年青屬の多年生草本。萬年青の一種。斑入りのもの。

だいみやう-がし　大名貸（名）江戸時代、町人にて大名を相手に金を貸したること。若風俗「角屋敷ばかり六箇所、大名貸の手形まで、腹誓りの弟に讓り」浮世親仁形氣「今都にて、大名借する、上から二番目の銀持」

だいみやう-がひ　大名買（名）商人の言ふままに、金錢を惜しまず品物を買ひ取ること。

だいみやう-ぎやうざ　一大名行儀（名）大名の如く、態度のおほやうなること。

だいみやう-ぎやうれつ　一大名行列（名）江戸時代、大名が公の外出の時、規定の儀衛を備へたる行列。又、それに模したる行列。近代世事談「大名行列。相傳ふ、信長公の時、明智日向守はからひとして、知行に應じて人數を定め、行列を極む」

だいみやう-くわそく　一大名華族（名）江戸時代の大名にて、明治維新の後、華族に列せられたるもの。（公家華族の對）

だいみやう-げい　一大名藝（名）其の技藝の實際に役に立たぬにいふ語。

だいみやう-けんどん　大名慳貪（名）色漆をもて書きたる下品の椀。江戸名物鑑「大名けんどん、新そばや二本道具の汁幸味」

だいみやう-ご　大名子（名）大名の子息の如く、驕揚なること。

だいみやう-じま　大名縞（名）こまかき堅縞。大名筋。衣食住記「大名島・市松・小六染」

（まじうヤみいだ）

だい-みやうじん　一大明神（名）神の尊稱。明神。東鑑「二建保四年「是偏大明神之所示給也、何無其恃「哉」」砂石集「「日吉の大明神の御制止あれば」」悲華經「我滅度後、施惡世中、現大明神、廣度衆生」」

だいみやうじま　大名筋（名）だいみやうじま（大名縞）に同じ。

だいみやう-そう　一題名僧（名）經供養の時などに其の經の題目を讀み上ぐる僧。榮華本紀「絹は五十を講師には取らせて、殘りは題名僧どもにとそ取らせめ」」大鏡「「御堂の北の廂にこそは、題名僧の座はせられたりしか」」

だいみやう-だけ　大名竹（名）【植】たいみんちく（大明竹）に同じ。

だいみやう-づり　大名釣（名）屋根船を泛かべ、鮎に鈴をつけたる釣絲を繫ぎて流し、鈴の音によりて魚のかかりたるを知り、釣り上ぐること。

だいみやう-ながあづけ　大名永預（名）終身禁め置きて鼓さざる大名預。

だいみやう-ななこ　大名魚子（名）魚子形の一種。魚子と磨きとを一筋おき蒔きたるもの。其の形、采の五子の目に似たるより、一に五子の目魚子ともいふ。寛文頃、京都の魚子師宗田又兵衛の創めたるもの。

だいみやう-にち　一大明日（名）陰陽家にて百事に大吉なりといふ日。即ち、甲辰・甲申・乙未・乙丑・丙辰・丙午・丁卯・丁未・戊辰・己卯・己酉・庚戌・辛未・辛酉・辛亥・壬午・壬申・癸巳・癸酉の日。大明。運歩色葉「大明日、甲辰申乙未寅丙辰午丁卯未戊辰己卯酉庚戌辛未酉壬午申癸巳酉諸事大吉日也」」伊勢暦頭書「大明日は、いにしへより用ひ來る吉日也。然れども、あくのさはりあらば用ふべからず」松風村雨東帶「鑑「大明日の鷹揚に」」

だいみやう-はった　大名飛蝗（名）【動】昆蟲類中、直翅類の一種。體の長さ二寸内外、綠色、又は稍褐色を帶び、前翅長く、後肢は長大にして、脛節赤色を呈す。我が國に普通なる害蟲なり。とのさまばった。

だいみやう-ふう　一大名風（名）大名の風俗。大名らしき風采。國姓爺後日合戰「天のなせる大名風、器量・骨柄嚴然たり」」

だいみやう-ぶしん　一大名普請（名）入費を惜しまぬ贅澤なる工事。增補史軍記「物入り構はぬ結構づくめ、正眞の大名普請」

だい-みやく　一代脈　だいしん（代診）に同じ。源氏冷泉節「法眼樣の手助かり、代脈にでも出る樣に」」浮世風呂「たった一返、お駕籠でとざったが、夫れから後は、一日置きに代脈だはな」」

たいみんがさ　（名）【植】菊科、よぶすまさう屬の草本。莖の高さ四五尺に達し、中空にして多汁なり。葉はやぶれがさに似て、缺刻やや淺く、不齊なる各裂片には鋭尖なる鋸齒を具ふ。秋季、梢上に多くの枝を分かち、五片の總苞を有し、黄白色の筒狀花數箇を含める多數の頭狀花序を圓錐狀に著く。我が國、山地の稍陰濕の地に自生す。

たいみん-ちく　一大明竹（名）【植】かんざんちく（寒山竹）の異名。

たいみん-づきん　一大明頭巾（名）寶暦年間、大阪の中村富十郎なる女形の俳優江戸に來たりし時、寒風を防ぐためとて作りはじめたる一種の頭巾。

たいみん-ふう　一大明風（名）大明國の風俗。大明國のてぶり。國姓爺後日合戰「錦舎が行儀・作法、なぜ大明風には育てぬぞ」」

たい-む　（名）【植】たちじやかうさうの異名。

たい-む　一大霧（名）深く立ち籠めたる霧。濃き霧。濃霧。

たい-む　一除務（名）軍隊の事務。

だい-む　一代務（名）他人に代はりて其の事務を處辨すること。代辨。

だいむ-けん　一代務權（名）代務する權利。

だいむ-にん　一代務人（名）㊀代務する人。㊁法）商業主に代はりて其の營業に關する一切の事務を取り扱ふ權限を有する人。支配人。民事訴訟法「第四百四條「商業上より生したる訴訟に付ては代務人に之を爲すを以て原告若くは被告の本人に爲したると同一の效力を有す」」

たい-め　對面（名）たいめん（對面）の略。參語「あさましくたいめ（たいめん）せで、月日のへにけること」」宇津保「俊蔭「なかすみの君おはしければ、たいめして物語りし給ふ」」源「蜻蛉「さりぬべきを見て、たいめすべくたばかれ」」

だいめ　代目（名）㊀古昔、田一町につき、其の四分の一を引き去ること。㊁茶室の造り方。疊一枚の四分の一だけ爐を切り、又は板敷とすること。南方錄「三三日三号「二疊・三疊又は四疊半にも臺目と云ふは、くる」」」結遊笑覽「「茶室に臺目と云ふは、一疊を四つに分かち、一分減じたるなり。堺にて藥種一斤を四分一減じたるをだい目と云ふ文字可考といへり。按ずるに其の大なる方を大目と云ふならん、席にて廣狹あるなり」」臺目。

たい-めい　一大名（名）大いなる名譽。すぐれたる名聲。運歩色葉「「大名（ダイ）」」杜甫詩「諸葛大名垂宇宙、宗臣遺像肅清高」」

たい-めい　一待命　一待命（名）㊀命の下だるを控へ待つこと。上の沙汰を待ち居ること。左傳「使「待「命于東」」㊁官吏にて、其の任所、又は職務などの未定なる場合の稱。外交官及領事官官制「第十「外交官又は領事官にして一時外國在勤を免したる者を待命とす」」海軍給與令「第七「准士官以上待命中は俸給十分の八中略を給し」」

たいめい　一戴命　命令を奉承すること。仰せをうけたまはること。奉命。

だいめい　一大命（名）君主、又は上帝の命。書經「太甲「天監、其德、用集大命、撫綏萬方」」詩經「大雅「曾是莫聽、大命以傾」」左傳「莊公「臨「武事、將「發大命、而藩「王心焉」」後漢書「王常「臣蒙「大命、得「以鞭策、托「身陛下」」

だい-めい　一題名（名）名字などを記すこと。文體明辯「「按題名者紀「識登覽尋訪之歲月與「其同遊之人「也、其敍事欲「簡而贍、其采「雅欲「健而鮮」」獨昌黎集有「之、亦文之一體也」」

たいめい-くわんり　一待命官吏（名）其の任所、又は職務の未定中なる官吏。

たい-めいし　一代名詞（名）【文法】名詞に代用する詞。人代名詞・指示代名詞・疑問代名詞あり。各條を見よ。

たい-めいじ　一大名辭（名）【論】だいじ（大辭）に同じ。

たいめうやく　一大妙藥（名）きくめの極めて靈妙なる藥。

だいめ-かき　臺目掻（名）次條に同じ。

だいめ-ぎり　臺目切（名）茶の湯の語。中柱の右に爐を直したること。臺目かき。南方錄「「番目「中柱の右に爐を直したるを臺目切と云ふ。六尺三寸の疊の内、臺子の幅一尺四寸と、臺子先の屏風の厚さ一寸とかきてのけ、則ち其の一尺四寸の幅、元來一尺四寸の風爐の座を客疊に出だして爐を切りたり。一枚疊の内、臺子の置目分切りのけ故、臺目切の疊、臺目かきの疊といふ也。柱なし。臺目切も有り、自由なれども、柱有る本式也」」

だいめ-たたみ　代目疊　大目疊　臺目疊（名）其の長さが普通の四分の三なる疊。餘の四分の一は爐を切り、又は板敷とす。

たい-めん　一體面（名）ていさい。みえ。面目。

たい-めん　一對面　面をあはすこと。面と對ひあふこと。あひ見ること。たい

め。對類。面會。竹馬「いやゝ彼の御使にたいめんし給へ」宇津保「吹上「久しうたいめん給はらずなりにければ」易經注「凡物對面而不相通、否之道也」唐書「若人機識、是宜委任、毎爲香兒陳事、千里外猶對面語」

たいめん-さんぢゅう 一【對面三重】（名）芝居の鳴物の三重にて、對面の場に用ふるもの。

たいめん-じょ 一【對面所】（名）來客に對面する所。應接間。應接所。東鑑「十八、永元元年九月」「午未兩時大風、御對面所顚倒」長綠「二年以來中次記正月」「御對面所へ御出座」

たいめん-の-ば 一【對面場】（名）芝居にて親子・兄弟などの、久しぶりにて對面することを演ずる幕。

だい-もく 一【題目】（名）㊀標題。外題。朗詠「經題「題目「佛號」眼、知汝花中植善根」白氏文集「記贈元九」「題目「各以首句、命爲題目」「无量壽經「諸經題目「所立不同」㊁となへな。名號。名稱。名目。「是れに持ちたるは桑の弓中華まづめでたき題目なり」北史「李賢「時行殿初成、未有題目、帝詔「近侍「各名之」㊂條件。箇條。「平治「叶ひ難き題目なる由、申されければ」徒然草「九條相國伊通公の歎狀にも、ことなることなき題目をも書き載せて自讃せられたり」回佛語。日蓮宗にて、其の所依たる法華經の表題に南無を加へたる南無妙法蓮華經の七字の稱。二代男「最早今なり、低う念佛と申す。我れは題目唱へ、きあ是れまで」「傾城反魂香「宗旨宗旨の手向草、題目・眞言・念佛の網向に更くるも」

だい-もく-かう 一【題目講】（名）【植】おほぐるま（土木香）の異名。

だいもく-こう 一【題目講】（名）日蓮宗の信徒の組合。題目講の講中。浮世親仁形氣「不斷の心ばへ（を氣の毒がり、題目講中を賴み」

だいもく-しゅう 一【題目宗】（名）（法華經の題目を唱ふるよりいふ）ほっけしゅう（法華宗）の俗稱。類聚名物考「日蓮宗「法華宗・題目宗」

だいもく-そう 一【題目僧】（名）佛語。だいみやうそう（題名僧）に同じ。

だいもく-だいこ 一【題目太鼓】（名）法華の題目を唱へながらたたく太鼓。

だいもく-をどり 一【題目踊】（名）山城國松が崎にて、七月十六日の夜、題目に節を附けて男女一所にをどりたる踊。鹿筑波「妙なふりするは題目踊かな」

だい-もじ 一【大文字】（名）だいもんじ（大文字）に同じ。

だいもじ-の-はた 大文字旗（名）大きなる文字を記せる旗。甲陽軍鑑「元伊奈に おはします時の大文字旗なり」

だいもじ-いちご 一【大文字貝】（名）【動】たこのまくら（海燕）の異名。

だいもじ-がひ 大文字火（名）【動】どの異名。

だい-もつ 一【退沒】しりぞきかくること。盛衰記「十九、文「上界の天人も退沒の雲には悲しむらめ」

だい-もつ 一【大物】（名）だいぶつ（大物）に同じ。

（諺）大物はつりどり ㊀大いなる物は、一時に其の全體を動かし難けれども、少しづつ削り取りて久しきを經ば、遂に其の全體を取り終ふるに至るといふこと。㊁大事は功を積みて漸次に成就すべく、一時にはなし難き譬へにいふ語。

だい-もつ 一【代物】（名）㊀あたひのしろ。代金。代料。狂言「賣豆「それなら求めませうが、代物は何程ぞ」㊁ぜに（錢）の稱。甲陽軍鑑「代物十疋ばかり持て來たり」武者物語「周防國大內義隆公御幼少の時分、龜童丸殿と申し奉るが、下下の子供代物をもてあそぶを御覽にて、龜童丸殿も御もてあそびあらんとの御意なり」

だいもつ-がへ 一【代物替】（名）金錢の代りに他の物にて交換すること。折焚柴「「價銀千貫目にあたる程のものども、銅をもて買ひとらん事を望み申す。其の望む所をゆるされき。是れを世に代物替といふ事の始めとす」

だい-もの-ない 一【代物ない】（形）だいじない（大事無）に同じ。

だい-もん 一【大紋】大文（名）㊀人いなる紋がら。字津保「上「みすのもかうには、大もんの錦をさせ給ふ」平家「「小松殿鳥帽子直衣、大文の指貫のそばを取って、さやめき入り給へば」㊁大形の紋所。盛衰記「「大文を三つづつ書きたる直垂」㊂大形の紋所を五箇所にあらはしたる布製の直垂。下には長袴を用ひ、腰板に紋なく、合引と尻と胸の左右とに紋あり。鎌倉時代、諸大夫の多く用ひたるもの。

（ア）馬所色揃ず
（イ）内衣紋三目幡
（ウ）だいもん

だいもん の かうらい 大紋高麗　大いなる紋所のつきたる高麗縁。海人藻芥「だいもんのかうらいは、親王・大臣これを用ひる。以下更に用ひるべからず」

だい-もん 一【大門】（名）大いなる門。總門。枕「「おはしましつきたれば、大門の元に、こま・もろこしの樂して、しし・こまいぬをどり舞ひ」榮華「「その北の方の大門に、その日の內についぢ築き」禮記「「客車不入大門」

だい-もんじ 一【大文字】（名）㊀大形の文字。大字。著聞「「紫雲之峰、嵐碎と、三句を大文字にて四枚に書きみてさせ給ひて參らせられたりければ」㊁大といふ漢字。砂石集「「大文字を知らで、またふりのやうなる文字は何ぞと問へる僧ありけり」㊂だいもんじのひ（大文字火）の略。蕪村句集「「「「「「「相阿彌の宵寢起こすや大文字」花洛名所圖會「「大文字「「「「「「「

七曜「今般太陰暦を廢し太陽暦御頒行相成候に付來る十二月三日を以て明治六年一月一日と被ゝ定候事」

だいやがはーのり 大谷川海苔 (名) 【植】藻の一種。下野國日光山中の大谷川に特に多きよりいふ。

たいやーさぎやう 一逮夜經 (名) 逮夜になす讀經。

たいーやく 一大役 (名) 一重き役目。重大なる役務。傾城島原蛙合戰「二人共に大役うけたまはり」 二花魁(オイラン)にて、大なる手役又は場役の稱。

たいーやく 一大厄 (名) 一大なる厄難。重大なる災厄。運歩色葉「大厄(ヤクヤク)」 二陰陽家の最も忌む厄年。即ち、男の四十二歳、女の三十三歳。

たいーやく 一退役 役を退くこと。職を辭して退くこと。

たいーやく 一大約 おほよそ。大略。大概。

だいーやく 一大藥 (名) 舶來の特別の藥をいふなるべし。庭訓往來十二月「藥種高直之間、大藥・紫藥者、斟酌事餞」

だいーやくくわん 一大譯官 (名) 明治二年八月二十日外務省に設き、同四年八月十日に廢せられたる最上級の譯官。外國と交通の辭令・文書を飜譯する外、兼ねて外客入朝の參侍譯語を掌る奏任官。明治二年七月八日職員令「大譯官」

だいやく-まつり 代厄祭 (名) 陰陽家にて毎月行ふ祭の一。代病身の祭。知信朝臣記(天承二年七月廿九日)「晦御祓御祭、秋季代厄御祭等被ゝ行之」 東鑑(治五寿元三年五月廿日)「若君御前御所等、重被ゝ行之」 廣資奉仕代厄祭」

たいやーまおり 逮夜參 (名) 僧侶が檀家などの逮夜經に行くこと。

だいやもんど (英 Diamond) (名) 一【鑽】こんがうせき(金剛石)に同じ。 二とらんぷ・の札の一。赤色にて描きたる菱形の模樣あるもの。

だいやもんどーしき (英 Diamond wedding) 【——式】(名) 打ち揃ひて生存する夫婦が、結婚後六十年目に行ふ祝賀の式。

たいゆ 一大輸 (名) 大に負けたること。おほまけ。大敗。

たいーゆう 一大勇 (名) 小事には心を動かさず、大事に當たりて奮ひ起こる勇氣。沈勇。孟子公孫丑上「吾嘗聞ゝ大勇於夫子」

(誹)**大勇は怯なるが如し** 大勇の者はおちつきて、猥りに人と爭はざるにより、一見怯懦なるに似たり。

(誹)**大勇は鬪はず** 大勇の者はおちつきて、妄りに人と爭鬪せず。

(誹)**大勇は勇ならず** 大勇は怯なるが如しに同じ。

たいーゆうせい 一大熊星 (名) 【天】北天にある大熊星座中の星の名。其の數百五十許りあり。然れども肉眼にて認め得るものは七箇にして、北斗星も亦この中にあり。

たいーよ 一貸與 貸し與ふること。舊市制(明治七年)「市有財産の賣却貸與」

たいーよう 一體用 (名) 本體と作用と。實體と應用と。

たいーよう 一對用 てきよう(適用)に同じ。源氏冷泉節「恩を仇にて報ずるとは中華此の罪科に對用する地獄ととはよもあらじ」

たいーよう 一胎孕 はらむこと。懷胎。懷孕。姓娠。書經禹貢「鳥獸孳尾。厥産生爲ゝ乳、胎孕爲ゝ化」

だいーよう 一大用 (名) だいべん(大便)に同じ。(小用の對)

だいーよう 一代用 他の物に代へて用ふること。

だいよう-がくがう 一代用學校 (名) だいようしりつせうがくかう(代用私立小學校)の略。

だいよう-かんくわんん 一代用感化院 (名) 北海道及び府縣の區域内にある團體、又は私人所屬の感化事業の設備を、内務大臣の認可を經て感化院に代用したる場合の稱。感化法(明治四十年)第二項「代用感化院」

だいよう-けうゐん 一代用教員 (名) 小學校教員の免許狀を有せずして小學校准教員に代用せられたるもの。小學校令(明治四十三年)第二十三條「代用教員に關する規程は文部大臣之を定む」 小學校令施行規則(明治四十三年)第五條「代用教員」

だいよう-しりつせうがくかう 一代用私立小學校 (名) 明治四十年三月以前市町村立小學校にて、學齢兒童を悉く就學せしむること能はざる等の特別の事情ある場合に、其の代用となしたる市町村内又は町村學校組合内の私立尋常小學校の稱。代用小學校。代用學校。明治三十三年八月文部省令第十四號小學校令施行規則(明治三十三年)「私立尋常小學校にして教授上管理上衛生上適當なる設備を具へ成績佳良なるものにあらされは之を代用私立小學校と爲すことを得す」

だいよう-せうがくかう 一代用小學校 (名) 前條に同じ。

だいーよく 一大慾 (名) 一極めて慾の深きこと。又、其の人。運歩色葉「大欲(ヨクヨク)」 又、其の人。運歩色葉「大欲(ヨクヨク)」 又取らう取らうと、大欲にかかって」 二遠大なる慾望。

だいよく ひだり 一大慾非道 大慾にして非道なる行ひをなすこと。文武五人男三「我が子の意見もすべき身が、大慾非道の振舞」

(誹)**大慾は無慾 次條の略。**

(誹)**大慾は無慾に似たり** 一大慾のものは小利益を顧みざれば、一見無慾の如くに見ゆ。 二大慾の者は却りて損失を招き易くして、無慾と同樣の結果となる。徒然草「究竟は理即に等し、大欲は無欲に似たり」

たいーらう 一大牢 太牢 (名) 一支那にて天子が社稷を祭る時の犠牲に用ふる牛・羊・豕の稱。禮記王制「天子・社稷、皆大牢、左傳(桓公)「子同生、以ゝ大子生之禮一舉ゝ之、接以ゝ大牢」」 二立派なる饗膳。太平記(廿八、饗合戰)「酒を勸めんとしけるに、大牢の具へを爲して」 史記(項羽本紀)「項王使者來、爲ゝ太牢具一舉欲ゝ迫ゝ之」 王褒文(聖主得賢臣頌)「藥石含ゝ毒、太牢有ゝ足與論」太牢之滋味」 三江戸時代、戸籍を有する庶民の犯罪者を入れたる牢屋。牢獄秘錄「大牢・二間牢入牢者之事。一、大牢は宿有ゝ之者、貳間牢は宿無ゝ之者」

たいーらう 一大老 (名) 一世人より尊重せらるる老年の賢者。孟子離婁上「二老天下之大老也」 二豐臣時代、豐臣家の置きたる最高の執政官。大年寄。豐臣秀吉譜ゝ「天正十九年、以ゝ大權現・前田利家・浮田秀家・毛利輝元・小早川隆景、爲ゝ天下大老」」 三江戸幕府の職名。老中の上に位し、將軍を輔佐して政務を總攬せるもの。其の人なき時は闕員とす。藩翰譜井上大炊頭源利勝(中略)寛永十五年六月連署の事許され、免とい本大老と稱せらる」

たいーらう 一大浪 (名) 大いなる浪。おほなみ。

たいーらう 一大粮 (名) 諸司・諸衛府、又は院宮より申請する粮米。大粮米。類聚三代格(五、延喜二年)「太政官符(中略)而偏見ゝ式文、輒稱ゝ微ゝ損、不ゝ行ゝ大粮」」 無充ゝ封租、其尤甚者、不ゝ勞ゝ言上、受ゝ然平居」 太政官式「凡親王以下月料并諸司要劇及大粮等、毎月申ゝ官出充(中略)大粮者、毎月十六日申ゝ太政官、廿日官符下ゝ民部、廿二日出給」 西宮記(十月)「申ゝ大粮文」

たいーらう 一退老 年老いて職務を退き隱居すること。白居易文(洛選池上)「白氏叟樂天退老之地」

たいーらう-まい 一大粮米 (名) たいらう(大粮)に同じ。

たいーらく 一大略 (名・副) たいりやく(天略)に同じ。

たいーらく 一頽落 隤落 くづれ落つること。崩落。曹植文(曹叟)「挂ゝ獵驅之輕翼、公、忽類落而離ゝ群」

だいーらそつ 一大選卒 (名) 明治五年八月三十日開拓使に置き、同七年十月三十日廢せられたる最上級の選卒。等外吏とす。明治職官沿革表(明治五年)「大選卒」

たいーらん 一台覽 (名) 貴人の見らること。御覽。

たいーらん 一大亂 (名) 大いに亂るること。甚だしき騒亂。太平記(十二、投降)「大亂の後は弓矢を裏みて、干戈を袋にす」 戰國策「大將擅ゝ兵於外、而内有ゝ大亂、則君臣相疑」 史記(樂毅)「老幼孤寡不ゝ得ゝ其所、此大亂之道也」

たい-らん 一胎卵 (名) 佛語。胎生と卵生と。

たい-らん しつ 一胎卵濕化 佛語。胎生と卵生と濕生と化生と。即ち四生の稱。盛衰記(四十八、女院)「隔生即妄とて、生死道隔たりぬれば、昇沈・苦樂悉くに忘れ、胎卵濕化一として不覺」

たいーり 一大利 (名) 大いなる利益。運歩色葉「大利(タイリ)」 禮記「事ゝ君、大言入、則望ゝ大利、小言入、則望ゝ小利」 左傳(哀公廿年)「竊ゝ邑叛ゝ君、以徵ゝ大利」而無ゝ名、貪冒之民、將實力焉」

(誹)**大利は利ならず** 利の大なるは、一見して利の如く見えず。

だいーり 一對理 たいしん(對審)に同じ。

だいーり 一内裏 (名) 一天子の住まはせ給ふ宮殿。おほうち。禁裏。御所。皇居。禁闕。禁廷。禁中。宇津保(楼上)「内裏

らで、見る人もをかしうおぼゆれ」 源(明石)「かかるついでに、だいりに奏すべき事によりてなん、いそぎのぼりぬる」 二だいりびな(内裏雛)の略。

だいり ぜうまつ 一内裏燒亡 内裏の燒失したること。十訓「太子の難波の宮を圍めりしに(中略)皇子の軍、彼の宮をば焚きてけり。吾が朝に内裏燒亡、必有ゝ廢朝」」 禁秘抄「内裏燒亡、必有ゝ廢朝」

だいーり 一大理 (名) 一支那古代の職名。追捕・糾彈・裁判・訴訟などの事を管掌せるもの。保元(義朝)「警護人を殺害することあるに、時の大理なれば、皐陶これを捕らへて罪を奏せん時、舜は如何し給ふべき」 二けびなしのべったら(檢非違使別當)の唐名。平家(十二、獄舍)「獄舍の前なる苔のしたにうづもれて、後世とぶらふ人もなかりしを、時の大理につけて申しうけ」 東鑑(文治四年)「大理」 盛衰記(十九、義朝)「大理に申し、御免し有って」

だいーり 一代理 一他人に代はりて事を處理すること。間接代理と直接代理とに分かつ。各條を見よ。 二だいりにん(代理人)の略。 三(法)ちょくせつだいり(直接代理)の略。民法(第二編第三章)「代理」

たいーりう 一滯留 (名) 一とどこほること。又、とどこほらすること。運歩色葉「滯留(タイリウ)」 荀子「通ゝ流財物粟米、無ゝ有ゝ滯留」」 二旅先に暫く留まり居ること。逗留。張九齡詩「轉蓬空濕處、聊洗滯留情」

たいーりう 一對流 (理)熱が流體中に傳播する仕方。流體の下部に熱を與ふれば、熱せられたる部分は上昇し、外部の密度小なる部分は來たりて此處を補ひ、熱を受けて上昇し、順次此くの如く此の作用を反覆して、熱の傳播

すること。

だいりうかう 一大流行 (名) 大いに流行すること。おほはやり。

だいり-おほばん 一内裏大番 (名) 京都二條城に在番して、内裏警固の任に當たること。傾城島原蛙合戰「内裏大番の御在京に、馴染みを重ね」

だいり-かうくわん 一代理交換 (名) 【商】組合銀行が交換組合に加入せざる銀行の代理として、手形交換所にて其の手形を交換すること。

だいりかうくわん-ぎんかう 一代理交換委託銀行 (名) 交換組合に加入せずして、手形の代理交換を組合銀行に委託する銀行。

だいーりき 一大力 (名) 非常に強き力。又、其の力ある人。怪力。强力。保元(新院御所)「大力の强弓、矢つぎ早の手利なり」 著聞(十、大力)「聞こえ有りて、人おぢあへりけり」 南史(豊臣)「大力十餘人」 晉書(郭璞)「大力而遲鈍」

だいり-さめい 一代理記名 (名) 代理人が本人に代はりて證書類に記名すること。

たい-りく 一大陸 (名) 一廣く大いなる陸地。書經(禹貢)「揆衛既從、大陸既作」」 二地球上の廣大なる陸地。即ち、西大陸・東大陸の稱。

たいりく-たう 一大陸島 (名) 【地】大陸の一部分が地異により、大陸と分離して島となりたるもの。蓬瀛・樺太の類。

たいりく-てききこう 一大陸的氣候 (名) 【地】大陸内部の氣候。即ち、雨量少なく、寒暑の差甚だしき氣候。これ陸地は熱を得ることも又失ふことも速かにして、溫度の昇降甚だしければなり。

だいり-くわん 一代理官 (名) 他の官

吏に代はりて其の職務を代理する官吏。所得稅法第三十一條、稅務署長又は其の代理官」

だいり-くわんけい 〔代理關係〕（名）【法】代理人と其の本人との間に存する法律上の關係。

だいり-くわんちゃう 〔代理官廳〕（名）他の官廳に代はりて其の職權を處理する官廳。

だいり-けい 〔大理卿〕（名）一けびゐしのべったう（檢非違使別當の唐名。大理。職原抄に「檢非違使。別當一人（諸卿、大理）」）二きやうぶきやう（刑部卿）の唐名。職原抄に「刑部省中務卿一人（刑部正四位下、諸卿、刑部卿兼大理職）」

だいり-げふ 〔代理業〕（名）代理商の營業。

だいり-けん 〔代理權〕（名）（英 Right of representation）【法】他人の代理をなす權能。即ち、他人のためになしたる意思表示が、直接に效果を其のものに歸せしむべき權能。民法第百九條「第三者に對して他人に代理權を與へたる旨を表示したる者は其代理權の範圍内に於て其他人と第三者との間に爲したる行爲に付き其責に任ず」

だいり-こうし 〔代理公使〕（名）公使の一。辨理公使の次に位するもの。奏任官とす。明治三十二年廢せられたり。明治二十六年十月勅令第百二十四號外交官及領事官官制第一條、代理公使」同第三條「代理公使公使館一等書記官中略は奏任とす」

だいり-さま 〔内裏樣〕（名）天皇の御樣に擬したる大形の雛人形。内裏雛。内裏。

だいり-しき 〔代理式〕（名）【簿記】組合商品の記帳方法の一。組合商品を、委託と同樣に見做して記帳するもの。

だいり-しゃ 〔代理者〕（名）他人の代理をなすもの。代理權を有するもの。貴族院令額納稅者議員互選規則第十一條、府縣知事又は其の代理者」

だいり-しゃう 〔代理商〕（英 Commercial agent）（名）【法】商業使用人にあらずして、一定の商人のために、平常其の營業の部類に屬する商行爲の代理、又は媒介をなすを營業とするもの。商法第七條「代理商」

だいり-じゃうらふ 〔内裏上臈〕（名）内裏の上臈女房。狂言佐渡「内裏上臈と見えまして」

だいり-じょう 〔大理丞〕（名）せうはんじょう（少判事）の唐名。拾芥抄中本、小判事大理丞」

だいり-せい 〔大理正〕（名）だいはんじょう（大判事）の唐名。拾芥抄中本、大判事一人、大理正」

だいり-せき 〔大理石〕（名）【鑛】成分は炭酸かるしうむにして、通常純白なれども、不純物のために縞をなすものもあり。裝飾及び建築用の材とす。

だいり-ちまき 〔内裏粽〕（名）下の文を見よ。きのふはけふの物語「昔天子ちまきを御覽じて、一段おもしろき由、勅諚あれば、それよりして京わらんべども、おいりちまきと今に申しならはし候と申し上げられ候へば」

だいり-ちゃうをく 〔大理廳屋〕（名）大理寺の自宅に設けたる役所。

だいり-ぢょらうしゅう 〔内裏女郎衆〕（名）内裏の女房達。狂言金岡「内裏女郎衆の、如何にも美しう出で立たせられ」

だいり-つ 〔對立〕（名）一雙方ならびたつこと。相對して存立すること。對峙。二【論】〈いりつ（並立）に同じ。

だいりつ-がいねん 〔對立概念〕（名）【論】〈いりつがいねん（並立概念）に同じ。

だいりつ-さむ 〔對立義務〕（名）【法】權利と對立する義務。即ち、債務の類。（孤立義務の對）

だいり-っし 〔大律師〕（名）僧官。律師の上位。續紀（神龜元年十月壬寅）「基眞禪師、法參議大律師、並之冠、正四位上平授之」同（延暦三年十一月）「以僧永厳爲大律師」

だいり-てん 〔代理店〕（名）代理商の店。金庫規則第七條、支店出張店又は代理店」

だいりてん-かんぢゃう 〔代理店勘定〕（名）簿記の勘定科目の一。代理店なる名を口座として、代理店と本店との貸借勘定を整理するもの。

だいりてんかんぢゃう-もとちゃう 〔代理店勘定元帳〕（名）本店が其の代理店との間に於ける貸借勘定を整理するため備ふる帳簿。

だいりてん-ちゃう 〔代理店長〕（名）代理店の主任者。金庫規則第八條「日本銀行の支店長出張店長又は代理店長」

だいり-とく 〔大利得〕（名）澤山の利益。おほまうけ。

だいり-にん 〔代理人〕（名）【法】一他人に代はりて事を處理する人。有權代理人と無權代理人とに分かつ。各條を見よ。二特に代理權を有する人。即ち、有權代理人の稱。法定代理人と委任代理人とに分かつ。各條を見よ。民法第九十二「代理人が其權限内に於て本人の爲めにすることを示して爲したる意思表示は直接に本人に對して其效力を生ず」

だいり-はごいた 〔内裏羽子板〕（名）地方にて造り出だす羽子板に對して、京にて作り、夫婦の體を彩かきたるもの。諸國咄「この女、袖より内裏羽子板を取り出だし」

だいり-びな 〔内裏雛〕（名）だいりさま（内裏樣）に同じ。本朝二十不孝「大和國吉野の里に、内裏雛を立てて娘友達集まり、彌生の節句遊び」芭蕉句集「内裏雛人形天皇の御字とかや」

だいり-べったう 〔大理別當〕（名）けびゐしのべったう（檢非違使別當）の唐名。

だいり-やう 〔大梁〕（名）二十八宿の一。禮記月令「季春之月。…季春者日月會於大梁」「而斗建巳辰之辰」

だいり-やう 〔大領〕（名）古昔、郡の長官。所部を撫愛し、郡の事を檢することを掌るもの。職員令「大郡。大領一人」（養老郡司令）

だいり-やう 〔大量〕（名）一大いなる度量。大度。魏書「盧敏少有大量」二量の大いなること。かさの多きこと。三大いなる酒量。

だいり-やう 〔體量〕（名）身體の重量。からだの目方。

だいりやう-き 〔體量器〕（名）體量を測る器械。

だいりやうげん 〔大靈驗〕（名）大なる靈驗あること。靈驗の大なること。傾城反魂香（三段目）「南無日本第一大靈驗、三所權現と伏し拜み」

だいりやうじ 〔代領事〕（名）明治四年十一月五日に置かれたる最下級の領事。判任とす。同六年二月二十二日廢せられたり。法令全書（明治四年十一月五日）「代領事。八等官」

だいりやく 〔大略〕一遠大の智略。大器量。史記（淮陰侯傳）「沛公慢而易人、多大略」漢書（武帝紀）「如武帝之雄材大略、不改文景之恭儉」二あらまし。おほよそ。大概。太平記（巻十六、楠兄弟書置）「此の逸塔の九輪は、大略

赤銅にてあると傳ゆる」庭訓往來（六月）「撓節所所念劇、大略此式鍼也」甲陽軍鑑「此の馬鹿大將の仕形は戯けても、必ず心は大略剛なる者にて、我儘なる故に」孟子（滕文公下）「此其大略也」

だい-ろよ 〔大呂〕（名）一六呂の一。じふにりつ（十二律）を見よ。周禮（春官大司樂）「乃奏黃鍾、歌大呂、舞雲門」「以祀天神」禮記（月令）「季冬之月、律中大呂」二陰暦十二月の異稱。運歩色葉「大呂（ヲイ十二月名）」國語（注）「十二月曰大呂」三大なる鐘の名。史記（呂后本紀）「呂先生一至楚、而使趙重於九鼎大呂」（注）大呂、周廟大鐘」

だいりょう-かく 〔對稜角〕（名）【數】二つの平面が交はりてなす、互ひに向かひ合へる二面角の稱。

だいりょう-にめんかく 〔對稜二面角〕（名）【數】相交はる二平面のなす向ひ合の角。

だいりょく 〔體力〕（名）身體の力量。

だいりょく 〔帶緣〕（名）緣色を帶ぶること。みどりがかりたること。

だいり-りゃうじ 〔代理領事〕（英 Acting consul）（名）領事の不在、又は事故ある場合に、代はりて其の事務を處辨するもの。

だいり-ろくじ 〔大理錄事〕（名）刑部省の主典、刑部屬の唐名。拾芥抄中本「刑部卿中務屬（左弾正、刑部史）」

たいりん 〔大鱗〕（名）たいぎょ（大魚）に同じ。

たいりん 〔大輪〕（名）花などの輪の大なるもの。俳諧新選「大輪の白菊生けん月の雨」

たいりん 〔大倫〕（名）人倫の大道。論語（微子）「欲潔其身、而亂大倫」孟子（滕文公下）「内則父子、外則君臣、人之大倫也」

だい-りんくしょ 〔大林區署〕（名）林區署の一。農商務大臣の管理に屬し、其の管轄區域内の國有林野及び部分林に關する事務を掌るもの。林區署官制第一條「大林區署」

だいりんくしょ-ちゃう 〔大林區署長〕（名）林區署の職員。農商務大臣の指揮監督を承けて、大林區署中全般の事務を掌理するもの。山林事務官、又は山林技師を以て之に充つ。林區署官制第三條「大林區署長」

だいりん-だな 〔大輪棚〕（名）床の間・書院などの脇に設くる棚の一種。押板の代りに用ひてよしといふ。

たいる-ぞの 〔苔類〕（名）【植】體中に葉綠を有し、同化作用を營む下等植物。綠色をなして、樹皮は地上に蔓延す。

たいる-ぞの 〔對壘〕（名）とりでを築きて敵と相對すること。晉書（苻堅載記）「亮數挑戰、帝不出、與之對壘百餘日」

たいれい 〔頽齡〕（名）おいぼれたる年齡。としより。高齡。高年。老年。老齡。陶潛詩「酒能祛百慮、菊解制頽齡」「錢起詩「寧學陶潛醉、空嗜酒、頽齡拾此事」東當」

たいれい 〔大禮〕（名）一朝家の重大なる儀式。即ち、御即位・立后の類。禮記（曲禮）「大禮必簡」史記（禮書）「大禮與天地同節」二一生の中にて最も大節なる儀式。即ち、冠・婚・喪・祭の類。

たいれい-きねんしゃう 〔大禮記念章〕（名）大正四年十一月に行はれたる大禮の記念として、踐祚の式に召されたる者、即位禮・大嘗祭の式に召されたる者、各所在地に於て奬勵を賜はりたる者、大禮の事務及び大禮に伴ふ要務に關與したる者に授與したる銀製の記章。圓形、徑一寸、輪廓内表面上部に金菊御紋、兩側緣に櫻橘枝と萬歲交架の圖、裏面に大禮記念章大正四年十一月の文字を識す。大正四年勅令第百五十四號（皇室令）「皇室大禮記念章制定の件を裁可し玆に之を公布せしむ」

たいれい-し 〔大禮使〕（名）即位の禮及び大嘗祭を行ふとき其の事務を掌理せしむるため、内閣總理大臣の管理の下に、宮中に置く官廳。總裁及び長官・次官・參與官・事務官・典儀官・書記の職員を置く。登極令第五條「即位の禮及大嘗會を行ふときは其の事務を掌理せしむる爲宮中に大禮使を置く」同上「大禮使の官制は別に之を定む」

たい-れいし 〔大令史〕（名）れいし（令史）を見よ。法令全書（明治四年八月十日）「諸司大令史」

たいれいし-ごようがかり 〔大禮使御用掛〕（名）大禮使にて必要あるときに置き、其の用務を辨ぜしむる職。

たいれいし-さんよくくわん 〔大禮使參與官〕（名）大禮使の職員。大禮使長官の命を承け使務を輔くるもの。内閣總理大臣の奏請により内閣にて之を命ず。

たいれいし-じむくわん 〔大禮使事務官〕（名）大禮使の職員。上官の命を承け事務を掌るもの。内閣總理大臣の奏請により内閣にて之を命ず。

たいれいし-じょくくわん 〔大禮使職員〕（名）大禮使の事務を取り扱ふ職員。即ち、大禮使長官・大禮使御用掛・大禮使次官・大禮使參與官・大禮使事務官・典儀官・大禮使書記の稱。大禮使官制第十一條「官職を有するに因り大禮使職員を命ぜられたる者」

たいれいし-そうさい 〔大禮使總裁〕（名）大禮使全般の事務を總裁する職。皇族の中より勅命す。

たいれいし-ちゃうくわん 〔大禮使長官〕（名）大禮使の職員。所部の職員を統督し、使務を總理するもの。其の任命は勅命による。

たいれいしちゃうくわん-くわんぶん 〔大禮使長官官房〕（名）大禮使の一部局。人事・文書・饗宴其の他、各部に屬せざる事務を掌るもの。

たいれいしぎくわい 〔大禮使評議會〕（名）大禮使内に置き、大禮使長官の諮問により重要の事項を審議する所。

たい-れいじん 〔大伶人〕（名）（れいじん（伶人）を見よ。明治三年十一月七日太政官布告「大伶人。相當正九位」法令全書（明治四年八月十日）「大伶人」

たい-れいふく 〔大禮服〕（名）朝拜・參賀・參拜の節に著用すべき禮服。官等により、又、文官と武官とにより其の飾りに差あり。

たい-れう 〔體療〕（名）身體の内部の病氣を治療すること。又、其の醫術。政事要略（巻十二）「醫生既讀諸經、乃分藥數、習中略以二十二人學體療」唐書（百官志）「醫博士一人、助教一人、掌教授諸生、以本草甲乙脉經、分而爲業、一曰體療」

たい-れう 〔代料〕（名）一だいきん（代金）に同じ。警察犯處罰令（第三條、八號）「申込なき新聞紙雜誌其他の出版物を配付し又は申込なき廣告を爲し其の代料を請求したる者」二代用となす材料。

だい-れうちゃう 〔大寮長〕（名）れうちゃう（寮長）を見よ。明治二年七月八日職員令「寮長」

たい-れつ 〔隊列〕（名）多數の整列。

ならび。つらなり。列。

だい-れつ　〔大烈〕（名）大いなる事業。大業。書經立政「揚武王之大烈」

だい-れふ　〔大獵〕獵して鳥獸を多く獲たること。大規模の狩獵。漢書元帝「永光五年冬幸長楊宮射熊館、布車騎、入獵」

（諺）**大獵の明日**　大獵の翌日は獵なしの意。

だい-れふ　〔大漁〕魚をすなどりて多く獲ること。れふの多きこと。たいぎょ。

だい-れん　〔對聯〕（名）つゐれん（對聯）に同じ。

だいれん-さい　（名）【植】きじなぎくの異名。

だいろ　（名）【動】かたつむり（蝸牛）の異名。

だい-ろ　〔大呂〕（名）たいりょ（大呂）に同じ。

だい-ろ　〔大路〕（名）一幅廣き路。おほどほり。大道。詩經檜風、羔裘「大路公、掺執子之袪兮」二大寶の制にて、勅使の屢經過する道路。即ち、山陽道の稱。厩牧令、凡諸道置駅馬、大路廿匹、中路十匹、小路五匹」後紀十七、延暦十六年六月三日「省、因幡國八上郡莫男驛、智頭郡道俣驛馬各二匹、以不緣大路、乘用希也」

だい-ろ　〔退路〕（名）退却する道路。しりぞく路。

だい-ろく　〔大祿〕（名）多くの祿高。高祿。太平記廿六、藤原師賢「大祿を與へ、高官を授け給ひしかば、位外戚を越え、祿萬戸に過ぎたり」禮記表記「君子不以小官受大祿」淮南子「出入祿、行入賞」起、豊宗立「無後」

だい-ろくじ　〔大錄事〕（名）ろくじ（錄事）を見よ。明治五年四月太政官布告第百十八號「大錄事」

だいろく-てん　〔第六天〕（名）佛語。欲界の六天の中の第六。欲界の主にして、他の樂事をもつて自己の樂しみとなすを以て、また他化自在天ともいふ。

だいろくてん の まわう　第六天魔王　佛語。第六天の魔王といふ外道は」砂石集「第六天の魔王といふ外道は」砂石集「太神宮御鉢を指し入れて探り給ひける時、第六天の魔王遙かに見て」

だい-ろん　〔大論〕大いに論ずること。歐陽修詩「大論斥佛老」高麗史「高麗史」

だい-ろん　〔對論〕一差し向かひて論じ合ふこと。二或るものに對してなす議論。三雙方をむかひ合はせて辯論せしむること。下學集「對論ツイ」

だい-わ　〔對話〕相對して話しあふこと。さしむかひの談話。相對の話。對談。運歩色葉「對話ツイ」隆都刺詩「山僧對話夜未央、不知風露濕衣裳」

だい-わ　**臺輪**　（名）【建築】上の物を支へ下の物を蓋ふ平たき横木。柱及び頭貫の上にありて枡組（ますぐみ）及び蛙股（かへるまた）を承け、又、鳥居の柱の上にあり鳥木を支ふるもの。

だい-わう　〔大王〕（名）一わう（王）の敬稱。史記、高祖「暴師覇上、以待大王」二しんわう（親王）の稱。康富記、応安六年「施主御名字事、禪定大王と可被載歟、親王をば大王と申す故也」

だい-わう　〔大黄〕（名）【植】からだいわう（大黄）の異名。

だい-わうじやう　〔大往生〕（名）いと安らかなる往生。いささかの苦しみもなき往生。大原問答、青葉笛「中品中生こそ、世にあり難き大往生の業懷なれ」

黄の精分をあるこーる・にて浄きたる液。胃病などの藥とす。

だい-わられん　〔大黄連〕（名）【植】（びのぼらずに同じ。

だい-わくせい　〔大惑星〕（名）【天】太陽系の中、地球より大なる木星・土星・天王星・海王星の四つの總稱。其の質量は地球の質量を單位とする時、木星は317.7、土星は94.8、天王星は14.6、海王星は17なり。

だい-わ-しゃ　〔對話者〕（名）一對話する人。二【法】隔地者に對して、直ちに回答をなし得る狀況にある人。商法第二百六十九條「對話者間に於て契約の申込を受けたる者か直ちに承諾を爲さざるときは申込は其效力を失ふ」

だいわ-まんしららく　〔大和萬秋樂〕（名）まんしららく（萬秋樂の異稱。數調抄「萬秋樂。異名、大和萬秋樂・金商萬秋樂」

たいわん-ぎんかう　〔臺灣銀行〕（名）臺灣島の金融機關として明治三十年の臺灣銀行法により特設せられたる株式會社組織の銀行。證券の割引、爲替事業、諸預、貸付等の普通一般の銀行事業の外、國庫金の取扱及び臺灣銀行券の發行をなすもの。臺灣銀行法「臺灣銀行」

たいわんぎんかう-かんりくわん　〔臺灣銀行監理官〕（名）臺灣銀行の業務を監視する官吏。臺灣銀行法第八條「主務大臣は臺灣銀行監理官を置き臺灣銀行の業務を監視せしむ」同第十九條「臺灣銀行監理官は何時にても臺灣銀行の金庫帳簿及諸般の文書を檢査することを得」

たいわんぎんかう-けん　〔臺灣銀行券〕（名）臺灣銀行にて發行し、該銀行が何時にても其の持參人の請求に應じ、其の額面相當の正貨と引き換ふる義務ある證券。

たいわん-ざる　**臺灣猿**　（名）【動】哺乳類中、猿類の一種。一般に大形、毛色淡褐色にて、黑色・白色及び灰色の斑あり。顏面特に赤く、尾は著しく長し。我が國、臺灣に產す。

たいわん-じげふこうさい　〔臺灣事業公債〕（名）我が國の國債の一。臺灣の鐵道敷設、土地調査、築港、廳舍建築、大租權整理、及び水利事業に要する經費に充つるために募集せるもの。其の總額七千三百五十萬圓、利率一箇年百分の五以下、償還期限發行の年より四十五箇年とす。臺灣事業公債條例「臺灣事業公債」

たいわんじげふこうさい-しようしよ　〔臺灣事業公債證書〕（名）臺灣事業公債に對して發行せる公債證書。明治三十九年大藏省告示第七百二十八號「臺灣事業公債證書」

たいわん-しゅびたい　〔臺灣守備隊〕（名）臺灣に置く守備隊。

たいわんしゅびたい-しれいくわん　〔臺灣守備隊司令官〕（名）臺灣總督に隸し、部下の軍隊を統率し、守備區域内の警戒及び防禦に任ずるもの。陸軍少將を以てこれに補す。臺灣守備隊司令部條例第一「臺灣守備隊司令官」

たいわんしゅびたい-しれいぶ　〔臺灣守備隊司令部〕（名）臺灣守備隊司令官の統轄の下に、其の事務を取り扱ふ役所。副官・軍醫正・軍醫及び下士の職員を置く。臺灣守備隊司令部條例「臺灣守備隊司令部」

質厚赤纖紗、兩側に銀線にて菊模樣を置き、中央に金糸にて紳章の二字を織出す。紳章。臺灣紳章條規「臺灣紳章」

たいわん-そうとく　〔臺灣總督〕（名）臺灣及び澎湖島を管轄する單獨官府。其の委任の範圍内にて海陸軍を統率し、内務大臣の監督の下に諸般の政務を統理するもの。親任官とし、海陸軍の大將若しくは中將を以てこれに充つ。臺灣總督府官制第一「臺灣總督」

たいわん-そうとく-ふ　〔臺灣總督府〕（名）臺灣總督の統轄の下に、其の事務を取り扱ふ役所。總督官房・民政部・陸軍部・海軍部の四部局を設け、民政長官・局長・藩務總長・參事官・事務官・警視・視學官・編修官・秘務官・技師・海事官・譯官・屬・警部・視學・編修書記・技手・通譯の職員を置く。臺灣總督府官制第二「臺灣總督府」

たいわん-そうとくふ-かいぐんぶ　〔臺灣總督府海軍部〕（名）臺灣總督府の一部局。臺灣總督の所轄内に於ける海軍に關する事を掌るもの。參謀長・參謀・副官・通譯官・海軍書記の職員を置く。臺灣總督府海軍書記の職員を置く。臺灣總督府海軍幕僚條例「臺灣總督府海軍部」

たいわん-そうとくふ-くわんぼう　〔臺灣總督府官房〕（名）總督府官房の一。臺灣總督府に屬するもの。

たいわんそうとくふ-とくごくがくかう　〔臺灣總督府國語學校〕（名）臺灣總督府の統轄に屬する學校。小學師範部・公學師範部・國語部及び實業部に分かち、附屬學校を附置す。小學師範部は小學校の教員たるべき者、公學師範部は公學校の教員たるべき者を養成するを目的とし、國語部は本島人の青年者に主として國語を教授し、兼ねて他日本島に於いて公私の業務に就かんとする者に須要なる教育を施すものとし、實業部は本島人にて農業・電信・鐵道の業務に就かんとする者に須要なる教育を施すものとす。附屬學校は公學校と女學校と小學校とに分かち、附屬公學校は臺灣小學校の本旨により兒童を教育し公學師範部の生徒をして實地授業の練習をなさしめ、兼ねて本島人の兒童に對する普通教育の方法を研究する所とし、附屬女學校は本島人の女子教員の養成を主とし、兼ねて技藝教育を施す所とし、附屬小學校は臺灣小學校の本旨により兒童を教育し、小學師範部の生徒をして教育實習をなさしめ、兼ねて本島に於ける内地人兒童の普通教育の方法を研究する所とす。國語學校。明治三十五年臺灣總督府令第五十二號「臺灣總督府國語學校規則」

たいわんそうとくふ-ちほうはふゐん　〔臺灣總督府地方法院〕（名）臺灣總督府法院の一。其の管轄區域内に於ける民事・刑事の第一審裁判及び刑事の豫審をなす單獨裁判所。

たいわんそうとくふ-ちほうはふゐん-ちやう　〔臺灣總督府地方法院長〕（名）臺灣總督府地方法院の長官。判官を以てこれに補し、其の院一般の事務を指揮し、其の行政事務を監督するもの。

たいわんそうとくふ-はふゐん　〔臺灣總督府法院〕（名）特別司法裁判所の一。臺灣總督府に直屬し、民事・刑事の裁判をなすことを掌るもの。臺灣總督府地方法院と臺灣總督府覆審法院とに分かつ。各條を見よ。臺灣總督府法院條例第二「臺灣總督府法院は臺灣總督府に直屬し民事刑事の裁判を爲すことを掌る」同第三「臺灣總督府法院を分ちて地方法院及覆審法院と

たいわんそうとくふ-ふくしんはふゐん　〔臺灣總督府覆審法院〕（名）臺灣總督府法院の一。臺灣總督府の所在地に一箇所を置き、各臺灣總督府地方法院の裁判を覆審し、及び裁判管轄に關する申請を裁判する合議裁判所。一若しくは二以上の部を設け、各部に部長を置き、院長・判官を以てこれに補し、各部は部長一人、判官二人を以て組織して、總ての事件を審問裁判し、部長を其の裁判長とす。

たいわんそうとくふ-ふくしんはふゐん-ちやう　〔臺灣總督府覆審法院長〕（名）臺灣總督府覆審法院の長官。判官を以てこれに補し、其の院一般の事務を指揮し、其の行政事務を監督するもの。

たいわんそうとくふ-みんせいちやうくわん　〔臺灣總督府民政長官〕（名）臺灣總督府の職員。臺灣總督を佐けて民政部の事務を總理し、各局署の事務を監督する勅任官。

たいわんそうとくふ-みんせいぶ　〔臺灣總督府民政部〕（名）臺灣總督府の一部局。行政・司法に關する一切の事務を掌るもの。内務局・財務局・通信局・殖產局及び藩務本署を置く。

たいわんそうとくふ-りくぐんばくれう　〔臺灣總督府陸軍幕僚〕（名）明治四十一年一月以前に於ける次條の稱。

たいわんそうとくふ-りくぐんぶ　〔臺灣總督府陸軍部〕（名）臺灣總督府の一部局。臺灣總督の所轄内に於ける陸軍に關する事を掌るもの。參謀部・副官部（北の明治を合はせて最初を知ず）・法官部・經理部・軍醫部・獸醫部の各部に分かつ。臺灣總督府陸軍部條例「臺灣總督府陸軍部」

たいわんそうとくふ-れい　〔臺灣總督府令〕（名）臺灣總督が、其の職權若しくは特別の委任により發する行政命令。

たいわん-ちやうちやう　〔臺灣廳長〕（名）臺灣の地方廳の長官。

たいわん-ばう　〔臺灣帽〕（名）次條の略。

たいわん-ばうし　〔臺灣帽子〕（名）たいわんばなま・に同じ。

たいわん-ばうず　〔臺灣坊主〕（名）とくとうびやう（禿頭病）の異名。

たいわん-ばった　〔臺灣飛蝗〕（名）【動】昆蟲類中、直翅類の一種。體の長さ一寸餘、形普通のばったに似たり。頭部割合に大きく、前胸部は細く縱れて、兩側に一條の黑線あり。後肢は黃色、斑紋なし。我が國、臺灣に產する害蟲。秋季產卵し、翌年五月孵化し、數百群をなして稻・麥等を食害す。わたりばった。

たいわん-ばなま　（名）だんといふ植物の葉にて造り、臺灣・琉球などより產出する夏帽子。はなま・に似たれども品質劣り、價も廉なり。又、これを精製して臺灣の淡水より產出するものを淡水ばなまと又は新ばなま・といふ。臺灣帽子。臺灣帽。

たいわん-はんちじむきよく　〔臺灣蕃地事務局〕（名）明治七年四月四日太政官に置き、臺灣蕃地の處分に關する事務を取り扱はしめたる局。翌年一月四日廢せられたり。明治七年九月太政官達第百二十四號「臺灣蕃地處分に付關係の願伺届等府縣より差出候分並指令文共細大無遺漏、其時遂に蕃地事務局江可致通知」此旨相達候事」

たいわんはんちじむ-ちやうくわん　〔臺灣蕃地事務長官〕（名）明治七年四月四日に置かれたる臺灣蕃地事務局の長官。翌年一月四日局と共に廢せられたり。

たいわん-ぶね　**臺灣船**　（名）臺灣の

船。太宛船。

たいわん-ゆり (名) 【植】てっぱうゆりの異名。

たい-ね 〔大尉〕 (名) 一だいじやうだいじん(太政大臣)の唐名。職原抄「太政大臣一人、相當従一位官、大略相國・太師・相國・太師」 二浮仁天皇の朝、一時、大將を改めたる稱。續紀廿一・天平勝寶元年「大將爲正三位官、改曰大尉」 三最高級の尉官。即ち、陸軍大尉と海軍大尉との稱。 四支那の漢・唐代などにて、三公の一。唐六典「三公・三師・太尉一人、正一品」

たい-ね 〔大位〕 (名) 高き官位。高位。榮華豊「我若向後至大位、心事相諧者」後漢書桓榮「臣以愚頑、顯備大位」

たい-ね 〔台位〕 (名) 台槐の位。三公の位。楊巨源詩「心期玉帳親台位」

たい-ね 〔退位〕 一帝王の位を退くこと。後漢書馬援「帝封三男廖防光爲列侯、廖等不得已受封、曾而退位歸第」

たい-ね 〔對位〕 (論)(いりつ(並立)に同じ。

だい-ね 〔代位〕 一他人に代はりて其の地位に就くこと。 二羅 Subrogatio. 英 Subrogation) 【法】他人に代りて其の地位に就き、其の權利を行使すること。法律上の代位と裁判上の代位とに分かつ。各條を見よ。民法第三百九十三條代位に因りて抵當權を行ふ者は其抵當權の登記に其代位を附記することを得」

たい-ね-がいねん 〔對位概念〕 (名) (論)(いりつがいねん(並立概念)に同じ。

だい-ねぎし 〔大威儀師〕 (名) 佛語。威儀師の上位。貞觀元年四月廿七日藥師寺の正儀、興福寺の延壽に此の職を授けたるを初めとす。ねぎし(威儀師)を見よ。類聚三代格三・天安三年四月「傳燈大法師位正儀年六十七、傳燈大法師位延壽年四十二、藥師寺、傳燈大法師位延壽年四十一、興福寺。右被右大臣宣偏、奉勅、件等僧、宜定大威儀師」 江次第三「大威儀師、可著凡僧上」

たい-ね-こうちやう 〔大尉工長〕 (名) 明治四年七月兵部省に置かれたる陸軍築造局の職員にて、大尉相當の技術官の稱。明治四年七月兵部職員令「大尉工長三人」

だい-ねーしゃ 〔代位者〕 (名) 【法】代位するもの。民法「債權の一部に付き代位辨濟ありたるときは代位者は其辨濟したる價額に應じて債權者と共に其權利を行ふ」 同同三「代位者に其辨濟したる價額及び其利息を償還することを要す」

だい-ねーそけん 〔代位訴權〕 (名) 【法】かんせつそけん(間接訴權)に同じ。

だい-ねとく 〔大威德〕 (名) 佛語。だいねとくみやうわう(大威德明王)の略。榮華初花「さいぎ阿闍梨は大威德をゐやまひて、腰をかがめたり」 保元新院御崩御「門門をば不動明王大威德の固め給ひて、入り難し」

だいねとく-の-ほふ 大威德法 佛語。だいねとくみやうわうのほふ(大威德明王法)に同じ。だいねとくみやうわう(大威德明王)の條を見よ。扶桑略記廿五・天慶三「善祖公男定額僧沙門淨藏、爲伏將門、於延曆寺首楞嚴院、期三七日、修大威德之法」 慶滋記「清盛行大威德法」

だいねとく-じゅ 〔大威德呪〕 (名) 佛語。大威德明王の神呪。著聞「大威德呪をみてて暫く加持するに、ゐへて働かず」

だいねとく-みやうわう 〔大威德明王〕 (名) 佛語。五大明王の一にて、西方を守護し、一切の惡毒龍を摧伏すといふもの。其の像は六面・六臂にして、劍・鉾・輪・杵を持ち、太白牛に御す。大威德。諸尊經「西方に大威德明王」

だいねとくみやうのほふ 大威德明王法 佛語。密教の修法の一。大威德明王を本尊として修するもの。太平記十二、神泉苑「東寺に爐壇をかまへ、大威德明王の法を修し給ふ」

(うわうやみくとゐゐだ)

だいね-べんさい 〔代位辨濟〕 (英 Subrogated performance) (名) 【法】他人の債務を辨濟したる者が、其の辨濟により、債務者に求償することを得る範圍内にて債權者の地位を承繼すること。代品支拂。民法三百九十二條「債權の一部に付き代位辨濟ありたるときは代位者は其辨濟したる價額に應じて債權者と共に其權利を行ふ」

だいねべんさい-しゃ 〔代位辨濟者〕 (名) 【法】代位辨濟を爲したるもの。

たい-ねん 〔退院〕 一住持が其の寺院を退きて隱居すること。庭訓往來十月「入院新命、退院西堂」 社寺取計留「退院のもの住職」 道山詩話「長老遂退院而去」 二入院し居りたる病人が、病院より家に歸ること。 三江戸時代、僧侶に科する閏刑の一。刑の宣告あるとき僧侶の職を解き其の居住の寺院より退出せしむるもの。但し、道院と異なり、命を受くる後、再び其の寺院に立ち寄りて後に退くことを得。御定書百箇條「仕置者、寺を退院、可退出申渡」 類例祕錄「天保元年七月、本寺退院申付候節、領中徘徊差留候も不苦」

だい-ねん 〔代員〕 (名) 他人に代はりて其の事務を行ふ人。代人。陸軍將校分限令「第四條、第七條、第三條、第十二條、第十三條、第十四條、第十五條、第十六條、第十七條、第十八條、第十九條、第二十條、第二十一條、第二十二條、第二十三條、第二十四條、第二十五條、第二十六條、第二十七條、第二十八條、第二十九條、第三十條、第三十一條、第三十二條、第三十三條、第三十四條、第三十五條、第三十六條、第三十七條、第三十八條、第三十九條、第四十條、第四十一條、第四十二條、第四十三條、第四十四條、第四十五條、第四十六條、第四十七條、第四十八條、第四十九條、第五十條、第五十一條、第五十二條、第五十三條、第五十四條、第五十五條、第五十六條、第五十七條、第五十八條、第五十九條、第六十條、第六十一條、第六十二條、第六十三條、第六十四條、第六十五條、第六十六條、第六十七條、第六十八條、第六十九條、第七十條、第七十一條、第七十二條、第七十三條、第七十四條、第七十五條、第七十六條、第七十七條、第七十八條、第七十九條、第八十條、第八十一條、第八十二條、第八十三條、第八十四條、第八十五條、第八十六條、第八十七條、第八十八條、第八十九條、第九十條、第九十一條、第九十二條、第九十三條、第九十四條、第九十五條、第九十六條、第九十七條、第九十八條、第九十九條、第百條、第百一條、第百二條、第百三條、第百四條、第百五條、第百六條、第百七條、第百八條、第百九條、第百十條、第百十一條、第百十二條、第百十三條、第百十四條、第百十五條、第百十六條、第百十七條、第百十八條、第百十九條、第百二十條、第百二十一條、第百二十二條、第百二十三條、第百二十四條、第百二十五條、第百二十六條、第百二十七條、第百二十八條、第百二十九條、第百三十條、第百三十一條、第百三十二條、第百三十三條、第百三十四條、第百三十五條、第百三十六條、第百三十七條、第百三十八條、第百三十九條、第百四十條、第百四十一條、第百四十二條、第百四十三條、第百四十四條、第百四十五條、第百四十六條、第百四十七條、第百四十八條、第百四十九條、第百五十條、第百五十一條、第百五十二條、第百五十三條、第百五十四條、第百五十五條、第百五十六條、第百五十七條、第百五十八條、第百五十九條、第百六十條、第百六十一條、第百六十二條、第百六十三條、第百六十四條、第百六十五條、第百六十六條、第百六十七條、第百六十八條、第百六十九條、第百七十條、第百七十一條、第百七十二條、第百七十三條、第百七十四條、第百七十五條、第百七十六條、第百七十七條、第百七十八條、第百七十九條、第百八十條、第百八十一條、第百八十二條、第百八十三條、第百八十四條、第百八十五條、第百八十六條、第百八十七條、第百八十八條、第百八十九條、第百九十條、第百九十一條、第百九十二條、第百九十三條、第百九十四條、第百九十五條、第百九十六條、第百九十七條、第百九十八條、第百九十九條、第二百條、第二百一條、第二百二條、第二百三條、第二百四條、第二百五條、第二百六條、第二百七條、第二百八條、第二百九條、第二百十條、第二百十一條、第二百十二條、第二百十三條、第二百十四條、第二百十五條、第二百十六條、第二百十七條、第二百十八條、第二百十九條、第二百二十條、第二百二十一條、第二百二十二條、第二百二十三條、第二百二十四條、第二百二十五條、第二百二十六條、第二百二十七條、第二百二十八條、第二百二十九條、第二百三十條、第二百三十一條、第二百三十二條、第二百三十三條、第二百三十四條、第二百三十五條、第二百三十六條、第二百三十七條、第二百三十八條、第二百三十九條、第二百四十條、第二百四十一條、第二百四十二條、第二百四十三條、第二百四十四條、第二百四十五條、第二百四十六條、第二百四十七條、第二百四十八條、第二百四十九條、第二百五十條、第二百五十一條、第二百五十二條、第二百五十三條、第二百五十四條、第二百五十五條、第二百五十六條、第二百五十七條、第二百五十八條、第二百五十九條、第二百六十條、第二百六十一條、第二百六十二條、第二百六十三條、第二百六十四條、第二百六十五條、第二百六十六條、第二百六十七條、第二百六十八條、第二百六十九條、第二百七十條、第二百七十一條、第二百七十二條、第二百七十三條、第二百七十四條、第二百七十五條、第二百七十六條、第二百七十七條、第二百七十八條、第二百七十九條、第二百八十條、第二百八十一條、第二百八十二條、第二百八十三條、第二百八十四條、第二百八十五條、第二百八十六條、第二百八十七條、第二百八十八條、第二百八十九條、第二百九十條、第二百九十一條、第二百九十二條、第二百九十三條、第二百九十四條、第二百九十五條、第二百九十六條、第二百九十七條、第二百九十八條、第二百九十九條、第三百條、第三百一條、第三百二條、第三百三條、第三百四條、第三百五條、第三百六條、第三百七條、第三百八條、第三百九條、第三百十條、第三百十一條、第三百十二條、第三百十三條、第三百十四條、第三百十五條、第三百十六條、第三百十七條、第三百十八條、第三百十九條、第三百二十條、第三百二十一條、第三百二十二條、第三百二十三條、第三百二十四條、第三百二十五條、第三百二十六條、第三百二十七條、第三百二十八條、第三百二十九條、第三百三十條、第三百三十一條、第三百三十二條、第三百三十三條、第三百三十四條、第三百三十五條、第三百三十六條、第三百三十七條、第三百三十八條、第三百三十九條、第三百四十條、第三百四十一條、第三百四十二條、第三百四十三條、第三百四十四條、第三百四十五條、第三百四十六條、第三百四十七條、第三百四十八條、第三百四十九條、第三百五十條、第三百五十一條、第三百五十二條、第三百五十三條、第三百五十四條、第三百五十五條、第三百五十六條、第三百五十七條、第三百五十八條、第三百五十九條、第三百六十條、第三百六十一條、第三百六十二條、第三百六十三條、第三百六十四條、第三百六十五條、第三百六十六條、第三百六十七條、第三百六十八條、第三百六十九條、第三百七十條、第三百七十一條、第三百七十二條、第三百七十三條、第三百七十四條、第三百七十五條、第三百七十六條、第三百七十七條、第三百七十八條、第三百七十九條、第三百八十條、第三百八十一條、第三百八十二條、第三百八十三條、第三百八十四條、第三百八十五條、第三百八十六條、第三百八十七條、第三百八十八條、第三百八十九條、第三百九十條、第三百九十一條、第三百九十二條、第三百九十三條、第三百九十四條、第三百九十五條、第三百九十六條、第三百九十七條、第三百九十八條、第三百九十九條、第四百條、第四百一條、第四百二條、第四百三條、第四百四條、第四百五條、第四百六條、第四百七條、第四百八條、第四百九條、第四百十條、第四百十一條、第四百十二條、第四百十三條、第四百十四條、第四百十五條、第四百十六條、第四百十七條、第四百十八條、第四百十九條、第四百二十條、第四百二十一條、第四百二十二條、第四百二十三條、第四百二十四條、第四百二十五條、第四百二十六條、第四百二十七條、第四百二十八條、第四百二十九條、第四百三十條、第四百三十一條、第四百三十二條、第四百三十三條、第四百三十四條、第四百三十五條、第四百三十六條、第四百三十七條、第四百三十八條、第四百三十九條、第四百四十條、第四百四十一條、第四百四十二條、第四百四十三條、第四百四十四條、第四百四十五條、第四百四十六條、第四百四十七條、第四百四十八條、第四百四十九條、第四百五十條、第四百五十一條、第四百五十二條、第四百五十三條、第四百五十四條、第四百五十五條、第四百五十六條、第四百五十七條、第四百五十八條、第四百五十九條、第四百六十條、第四百六十一條、第四百六十二條、第四百六十三條、第四百六十四條、第四百六十五條、第四百六十六條、第四百六十七條、第四百六十八條、第四百六十九條、第四百七十條、第四百七十一條、第四百七十二條、第四百七十三條、第四百七十四條、第四百七十五條、第四百七十六條、第四百七十七條、第四百七十八條、第四百七十九條、第四百八十條、第四百八十一條、第四百八十二條、第四百八十三條、第四百八十四條、第四百八十五條、第四百八十六條、第四百八十七條、第四百八十八條、第四百八十九條、第四百九十條、第四百九十一條、第四百九十二條、第四百九十三條、第四百九十四條、第四百九十五條、第四百九十六條、第四百九十七條、第四百九十八條、第四百九十九條、第五百條、第五百一條、第五百二條、第五百三條、第五百四條、第五百五條、第五百六條、第五百七條、第五百八條、第五百九條、第五百十條、第五百十一條、第五百十二條、第五百十三條、第五百十四條、第五百十五條、第五百十六條、第五百十七條、第五百十八條、第五百十九條、第五百二十條、第五百二十一條、第五百二十二條、第五百二十三條、第五百二十四條、第五百二十五條、第五百二十六條、第五百二十七條、第五百二十八條、第五百二十九條、第五百三十條、第五百三十一條、第五百三十二條、第五百三十三條、第五百三十四條、第五百三十五條、第五百三十六條、第五百三十七條、第五百三十八條、第五百三十九條、第五百四十條、第五百四十一條、第五百四十二條、第五百四十三條、第五百四十四條、第五百四十五條、第五百四十六條、第五百四十七條、第五百四十八條、第五百四十九條、第五百五十條、第五百五十一條、第五百五十二條、第五百五十三條、第五百五十四條、第五百五十五條、第五百五十六條、第五百五十七條、第五百五十八條、第五百五十九條、第五百六十條、第五百六十一條、第五百六十二條、第五百六十三條、第五百六十四條、第五百六十五條、第五百六十六條、第五百六十七條、第五百六十八條、第五百六十九條、第五百七十條、第五百七十一條、第五百七十二條、第五百七十三條、第五百七十四條、第五百七十五條、第五百七十六條、第五百七十七條、第五百七十八條、第五百七十九條、第五百八十條、第五百八十一條、第五百八十二條、第五百八十三條、第五百八十四條、第五百八十五條、第五百八十六條、第五百八十七條、第五百八十八條、第五百八十九條、第五百九十條、第五百九十一條、第五百九十二條、第五百九十三條、第五百九十四條、第五百九十五條、第五百九十六條、第五百九十七條、第五百九十八條、第五百九十九條、第六百條、第六百一條、第六百二條、第六百三條、第六百四條、第六百五條、第六百六條、第六百七條、第六百八條、第六百九條、第六百十條、第六百十一條、第六百十二條、第六百十三條、第六百十四條、第六百十五條、第六百十六條、第六百十七條、第六百十八條、第六百十九條、第六百二十條、第六百二十一條、第六百二十二條、第六百二十三條、第六百二十四條、第六百二十五條、第六百二十六條、第六百二十七條、第六百二十八條、第六百二十九條、第六百三十條、第六百三十一條、第六百三十二條、第六百三十三條、第六百三十四條、第六百三十五條、第六百三十六條、第六百三十七條、第六百三十八條、第六百三十九條、第六百四十條、第六百四十一條、第六百四十二條、第六百四十三條、第六百四十四條、第六百四十五條、第六百四十六條、第六百四十七條、第六百四十八條、第六百四十九條、第六百五十條、第六百五十一條、第六百五十二條、第六百五十三條、第六百五十四條、第六百五十五條、第六百五十六條、第六百五十七條、第六百五十八條、第六百五十九條、第六百六十條、第六百六十一條、第六百六十二條、第六百六十三條、第六百六十四條、第六百六十五條、第六百六十六條、第六百六十七條、第六百六十八條、第六百六十九條、第六百七十條、第六百七十一條、第六百七十二條、第六百七十三條、第六百七十四條、第六百七十五條、第六百七十六條、第六百七十七條、第六百七十八條、第六百七十九條、第六百八十條、第六百八十一條、第六百八十二條、第六百八十三條、第六百八十四條、第六百八十五條、第六百八十六條、第六百八十七條、第六百八十八條、第六百八十九條、第六百九十條、第六百九十一條、第六百九十二條、第六百九十三條、第六百九十四條、第六百九十五條、第六百九十六條、第六百九十七條、第六百九十八條、第六百九十九條、第七百條、第七百一條、第七百二條、第七百三條、第七百四條、第七百五條、第七百六條、第七百七條、第七百八條、第七百九條、第七百十條、第七百十一條、第七百十二條、第七百十三條、第七百十四條、第七百十五條、第七百十六條、第七百十七條、第七百十八條、第七百十九條、第七百二十條、第七百二十一條、第七百二十二條、第七百二十三條、第七百二十四條、第七百二十五條、第七百二十六條、第七百二十七條、第七百二十八條、第七百二十九條、第七百三十條、第七百三十一條、第七百三十二條、第七百三十三條、第七百三十四條、第七百三十五條、第七百三十六條、第七百三十七條、第七百三十八條、第七百三十九條、第七百四十條、第七百四十一條、第七百四十二條、第七百四十三條、第七百四十四條、第七百四十五條、第七百四十六條、第七百四十七條、第七百四十八條、第七百四十九條、第七百五十條、第七百五十一條、第七百五十二條、第七百五十三條、第七百五十四條、第七百五十五條、第七百五十六條、第七百五十七條、第七百五十八條、第七百五十九條、第七百六十條、第七百六十一條、第七百六十二條、第七百六十三條、第七百六十四條、第七百六十五條、第七百六十六條、第七百六十七條、第七百六十八條、第七百六十九條、第七百七十條、第七百七十一條、第七百七十二條、第七百七十三條、第七百七十四條、第七百七十五條、第七百七十六條、第七百七十七條、第七百七十八條、第七百七十九條、第七百八十條、第七百八十一條、第七百八十二條、第七百八十三條、第七百八十四條、第七百八十五條、第七百八十六條、第七百八十七條、第七百八十八條、第七百八十九條、第七百九十條、第七百九十一條、第七百九十二條、第七百九十三條、第七百九十四條、第七百九十五條、第七百九十六條、第七百九十七條、第七百九十八條、第七百九十九條、第八百條、第八百一條、第八百二條、第八百三條、第八百四條、第八百五條、第八百六條、第八百七條、第八百八條、第八百九條、第八百十條、第八百十一條、第八百十二條、第八百十三條、第八百十四條、第八百十五條、第八百十六條、第八百十七條、第八百十八條、第八百十九條、第八百二十條、第八百二十一條、第八百二十二條、第八百二十三條、第八百二十四條、第八百二十五條、第八百二十六條、第八百二十七條、第八百二十八條、第八百二十九條、第八百三十條、第八百三十一條、第八百三十二條、第八百三十三條、第八百三十四條、第八百三十五條、第八百三十六條、第八百三十七條、第八百三十八條、第八百三十九條、第八百四十條、第八百四十一條、第八百四十二條、第八百四十三條、第八百四十四條、第八百四十五條、第八百四十六條、第八百四十七條、第八百四十八條、第八百四十九條、第八百五十條、第八百五十一條、第八百五十二條、第八百五十三條、第八百五十四條、第八百五十五條、第八百五十六條、第八百五十七條、第八百五十八條、第八百五十九條、第八百六十條、第八百六十一條、第八百六十二條、第八百六十三條、第八百六十四條、第八百六十五條、第八百六十六條、第八百六十七條、第八百六十八條、第八百六十九條、第八百七十條、第八百七十一條、第八百七十二條、第八百七十三條、第八百七十四條、第八百七十五條、第八百七十六條、第八百七十七條、第八百七十八條、第八百七十九條、第八百八十條、第八百八十一條、第八百八十二條、第八百八十三條、第八百八十四條、第八百八十五條、第八百八十六條、第八百八十七條、第八百八十八條、第八百八十九條、第八百九十條、第八百九十一條、第八百九十二條、第八百九十三條、第八百九十四條、第八百九十五條、第八百九十六條、第八百九十七條、第八百九十八條、第八百九十九條、第九百條、第九百一條、第九百二條、第九百三條、第九百四條、第九百五條、第九百六條、第九百七條、第九百八條、第九百九條、第九百十條、第九百十一條、第九百十二條、第九百十三條、第九百十四條、第九百十五條、第九百十六條、第九百十七條、第九百十八條、第九百十九條、第九百二十條、第九百二十一條、第九百二十二條、第九百二十三條、第九百二十四條、第九百二十五條、第九百二十六條、第九百二十七條、第九百二十八條、第九百二十九條、第九百三十條、第九百三十一條、第九百三十二條、第九百三十三條、第九百三十四條、第九百三十五條、第九百三十六條、第九百三十七條、第九百三十八條、第九百三十九條、第九百四十條、第九百四十一條、第九百四十二條、第九百四十三條、第九百四十四條、第九百四十五條、第九百四十六條、第九百四十七條、第九百四十八條、第九百四十九條、第九百五十條、第九百五十一條、第九百五十二條、第九百五十三條、第九百五十四條、第九百五十五條、第九百五十六條、第九百五十七條、第九百五十八條、第九百五十九條、第九百六十條、第九百六十一條、第九百六十二條、第九百六十三條、第九百六十四條、第九百六十五條、第九百六十六條、第九百六十七條、第九百六十八條、第九百六十九條、第九百七十條、第九百七十一條、第九百七十二條、第九百七十三條、第九百七十四條、第九百七十五條、第九百七十六條、第九百七十七條、第九百七十八條、第九百七十九條、第九百八十條、第九百八十一條、第九百八十二條、第九百八十三條、第九百八十四條、第九百八十五條、第九百八十六條、第九百八十七條、第九百八十八條、第九百八十九條、第九百九十條、第九百九十一條、第九百九十二條、第九百九十三條、第九百九十四條、第九百九十五條、第九百九十六條、第九百九十七條、第九百九十八條、第九百九十九條、第百條、第百一條、第百二條、第百三條、第百四條、第百五條、第百六條、第百七條、第百八條、第百九條、第百十條、第百十一條、第百十二條、第百十三條、第百十四條、第百十五條、第百十六條、第百十七條、第百十八條、第百十九條、第百二十條、第百二十一條、第百二十二條、第百二十三條、第百二十四條、第百二十五條、第百二十六條、第百二十七條、第百二十八條、第百二十九條、第百三十條、第百三十一條、第百三十二條、第百三十三條、第百三十四條、第百三十五條、第百三十六條、第百三十七條、第百三十八條、第百三十九條、第百四十條、第百四十一條、第百四十二條、第百四十三條、第百四十四條、第百四十五條、第百四十六條、第百四十七條、第百四十八條、第百四十九條、第百五十條、第百五十一條、第百五十二條、第百五十三條、第百五十四條、第百五十五條、第百五十六條、第百五十七條、第百五十八條、第百五十九條、第百六十條、第百六十一條、第百六十二條、第百六十三條、第百六十四條、第百六十五條、第百六十六條、第百六十七條、第百六十八條、第百六十九條、第百七十條、第百七十一條、第百七十二條、第百七十三條、第百七十四條、第百七十五條、第百七十六條、第百七十七條、第百七十八條、第百七十九條、第百八十條、第百八十一條、第百八十二條、第百八十三條、第百八十四條、第百八十五條、第百八十六條、第百八十七條、第百八十八條、第百八十九條、第百九十條、第百九十一條、第百九十二條、第百九十三條、第百九十四條、第百九十五條、第百九十六條、第百九十七條、第百九十八條、第百九十九條、第二百條、第二百一條、第二百二條、第二百三條、第二百四條、第二百五條、第二百六條、第二百七條、第二百八條、第二百九條、第二百十條、第二百十一條、第二百十二條、第二百十三條、第二百十四條、第二百十五條、第二百十六條、第二百十七條、第二百十八條、第二百十九條、第二百二十條、第二百二十一條、第二百二十二條、第二百二十三條、第二百二十四條、第二百二十五條、第二百二十六條、第二百二十七條、第二百二十八條、第二百二十九條、第二百三十條、第二百三十一條、第二百三十二條、第二百三十三條、第二百三十四條、第二百三十五條、第二百三十六條、第二百三十七條、第二百三十八條、第二百三十九條、第二百四十條、第二百四十一條、第二百四十二條、第二百四十三條、第二百四十四條、第二百四十五條、第二百四十六條、第二百四十七條、第二百四十八條、第二百四十九條、第二百五十條、第二百五十一條、第二百五十二條、第二百五十三條、第二百五十四條、第二百五十五條、第二百五十六條、第二百五十七條、第二百五十八條、第二百五十九條、第二百六十條、第二百六十一條、第二百六十二條、第二百六十三條、第二百六十四條、第二百六十五條、第二百六十六條、第二百六十七條、第二百六十八條、第二百六十九條、第二百七十條、第二百七十一條、第二百七十二條、第二百七十三條、第二百七十四條、第二百七十五條、第二百七十六條、第二百七十七條、第二百七十八條、第二百七十九條、第二百八十條、第二百八十一條、第二百八十二條、第二百八十三條、第二百八十四條、第二百八十五條、第二百八十六條、第二百八十七條、第二百八十八條、第二百八十九條、第二百九十條、第二百九十一條、第二百九十二條、第二百九十三條、第二百九十四條、第二百九十五條、第二百九十六條、第二百九十七條、第二百九十八條、第二百九十九條、第三百條、第三百一條、第三百二條、第三百三條、第三百四條、第三百五條、第三百六條、第三百七條、第三百八條、第三百九條、第三百十條、第三百十一條、第三百十二條、第三百十三條、第三百十四條、第三百十五條、第三百十六條、第三百十七條、第三百十八條、第三百十九條、第三百二十條、第三百二十一條、第三百二十二條、第三百二十三條、第三百二十四條、第三百二十五條、第三百二十六條、第三百二十七條、第三百二十八條、第三百二十九條、第三百三十條、第三百三十一條、第三百三十二條、第三百三十三條、第三百三十四條、第三百三十五條、第三百三十六條、第三百三十七條、第三百三十八條、第三百三十九條、第三百四十條、第三百四十一條、第三百四十二條、第三百四十三條、第三百四十四條、第三百四十五條、第三百四十六條、第三百四十七條、第三百四十八條、第三百四十九條、第三百五十條、第三百五十一條、第三百五十二條、第三百五十三條、第三百五十四條、第三百五十五條、第三百五十六條、第三百五十七條、第三百五十八條、第三百五十九條、第三百六十條、第三百六十一條、第三百六十二條、第三百六十三條、第三百六十四條、第三百六十五條、第三百六十六條、第三百六十七條、第三百六十八條、第三百六十九條、第三百七十條、第三百七十一條、第三百七十二條、第三百七十三條、第三百七十四條、第三百七十五條、第三百七十六條、第三百七十七條、第三百七十八條、第三百七十九條、第三百八十條、第三百八十一條、第三百八十二條、第三百八十三條、第三百八十四條、第三百八十五條、第三百八十六條、第三百八十七條、第三百八十八條、第三百八十九條、第三百九十條、第三百九十一條、第三百九十二條、第三百九十三條、第三百九十四條、第三百九十五條、第三百九十六條、第三百九十七條、第三百九十八條、第三百九十九條、第四百條、第四百一條、第四百二條、第四百三條、第四百四條、第四百五條、第四百六條、第四百七條、第四百八條、第四百九條、第四百十條、第四百十一條、第四百十二條、第四百十三條、第四百十四條、第四百十五條、第四百十六條、第四百十七條、第四百十八條、第四百十九條、第四百二十條、第四百二十一條、第四百二十二條、第四百二十三條、第四百二十四條、第四百二十五條、第四百二十六條、第四百二十七條、第四百二十八條、第四百二十九條、第四百三十條、第四百三十一條、第四百三十二條、第四百三十三條、第四百三十四條、第四百三十五條、第四百三十六條、第四百三十七條、第四百三十八條、第四百三十九條、第四百四十條、第四百四十一條、第四百四十二條、第四百四十三條、第四百四十四條、第四百四十五條、第四百四十六條、第四百四十七條、第四百四十八條、第四百四十九條、第四百五十條、第四百五十一條、第四百五十二條、第四百五十三條、第四百五十四條、第四百五十五條、第四百五十六條、第四百五十七條、第四百五十八條、第四百五十九條、第四百六十條、第四百六十一條、第四百六十二條、第四百六十三條、第四百六十四條、第四百六十五條、第四百六十六條、第四百六十七條、第四百六十八條、第四百六十九條、第四百七十條、第四百七十一條、第四百七十二條、第四百七十三條、第四百七十四條、第四百七十五條、第四百七十六條、第四百七十七條、第四百七十八條、第四百七十九條、第四百八十條、第四百八十一條、第四百八十二條、第四百八十三條、第四百八十四條、第四百八十五條、第四百八十六條、第四百八十七條、第四百八十八條、第四百八十九條、第四百九十條、第四百九十一條、第四百九十二條、第四百九十三條、第四百九十四條、第四百九十五條、第四百九十六條、第四百九十七條、第四百九十八條、第四百九十九條、第五百條、第五百一條、第五百二條、第五百三條、第五百四條、第五百五條、第五百六條、第五百七條、第五百八條、第五百九條、第五百十條、第五百十一條、第五百十二條、第五百十三條、第五百十四條、第五百十五條、第五百十六條、第五百十七條、第五百十八條、第五百十九條、第五百二十條、第五百二十一條、第五百二十二條、第五百二十三條、第五百二十四條、第五百二十五條、第五百二十六條、第五百二十七條、第五百二十八條、第五百二十九條、第五百三十條、第五百三十一條、第五百三十二條、第五百三十三條、第五百三十四條、第五百三十五條、第五百三十六條、第五百三十七條、第五百三十八條、第五百三十九條、第五百四十條、第五百四十一條、第五百四十二條、第五百四十三條、第五百四十四條、第五百四十五條、第五百四十六條、第五百四十七條、第五百四十八條、第五百四十九條、第五百五十條、第五百五十一條、第五百五十二條、第五百五十三條、第五百五十四條、第五百五十五條、第五百五十六條、第五百五十七條、第五百五十八條、第五百五十九條、第五百六十條、第五百六十一條、第五百六十二條、第五百六十三條、第五百六十四條、第五百六十五條、第五百六十六條、第五百六十七條、第五百六十八條、第五百六十九條、第五百七十條、第五百七十一條、第五百七十二條、第五百七十三條、第五百七十四條、第五百七十五條、第五百七十六條、第五百七十七條、第五百七十八條、第五百七十九條、第五百八十條、第五百八十一條、第五百八十二條、第五百八十三條、第五百八十四條、第五百八十五條、第五百八十六條、第五百八十七條、第五百八十八條、第五百八十九條、第五百九十條、第五百九十一條、第五百九十二條、第五百九十三條、第五百九十四條、第五百九十五條、第五百九十六條、第五百九十七條、第五百九十八條、第五百九十九條、第六百條、第六百一條、第六百二條、第六百三條、第六百四條、第六百五條、第六百六條、第六百七條、第六百八條、第六百九條、第六百十條、第六百十一條、第六百十二條、第六百十三條、第六百十四條、第六百十五條、第六百十六條、第六百十七條、第六百十八條、第六百十九條、第六百二十條、第六百二十一條、第六百二十二條、第六百二十三條、第六百二十四條、第六百二十五條、第六百二十六條、第六百二十七條、第六百二十八條、第六百二十九條、第六百三十條、第六百三十一條、第六百三十二條、第六百三十三條、第六百三十四條、第六百三十五條、第六百三十六條、第六百三十七條、第六百三十八條、第六百三十九條、第六百四十條、第六百四十一條、第六百四十二條、第六百四十三條、第六百四十四條、第六百四十五條、第六百四十六條、第六百四十七條、第六百四十八條、第六百四十九條、第六百五十條、第六百五十一條、第六百五十二條、第六百五十三條、第六百五十四條、第六百五十五條、第六百五十六條、第六百五十七條、第六百五十八條、第六百五十九條、第六百六十條、第六百六十一條、第六百六十二條、第六百六十三條、第六百六十四條、第六百六十五條、第六百六十六條、第六百六十七條、第六百六十八條、第六百六十九條、第六百七十條、第六百七十一條、第六百七十二條、第六百七十三條、第六百七十四條、第六百七十五條、第六百七十六條、第六百七十七條、第六百七十八條、第六百七十九條、第六百八十條、第六百八十一條、第六百八十二條、第六百八十三條、第六百八十四條、第六百八十五條、第六百八十六條、第六百八十七條、第六百八十八條、第六百八十九條、第六百九十條、第六百九十一條、第六百九十二條、第六百九十三條、第六百九十四條、第六百九十五條、第六百九十六條、第六百九十七條、第六百九十八條、第六百九十九條、第七百條、第七百一條、第七百二條、第七百三條、第七百四條、第七百五條、第七百六條、第七百七條、第七百八條、第七百九條、第七百十條、第七百十一條、第七百十二條、第七百十三條、第七百十四條、第七百十五條、第七百十六條、第七百十七條、第七百十八條、第七百十九條、第七百二十條、第七百二十一條、第七百二十二條、第七百二十三條、第七百二十四條、第七百二十五條、第七百二十六條、第七百二十七條、第七百二十八條、第七百二十九條、第七百三十條、第七百三十一條、第七百三十二條、第七百三十三條、第七百三十四條、第七百三十五條、第七百三十六條、第七百三十七條、第七百三十八條、第七百三十九條、第七百四十條、第七百四十一條、第七百四十二條、第七百四十三條、第七百四十四條、第七百四十五條、第七百四十六條、第七百四十七條、第七百四十八條、第七百四十九條、第七百五十條、第七百五十一條、第七百五十二條、第七百五十三條、第七百五十四條、第七百五十五條、第七百五十六條、第七百五十七條、第七百五十八條、第七百五十九條、第七百六十條、第七百六十一條、第七百六十二條、第七百六十三條、第七百六十四條、第七百六十五條、第七百六十六條、第七百六十七條、第七百六十八條、第七百六十九條、第七百七十條、第七百七十一條、第七百七十二條、第七百七十三條、第七百七十四條、第七百七十五條、第七百七十六條、第七百七十七條、第七百七十八條、第七百七十九條、第七百八十條、第七百八十一條、第七百八十二條、第七百八十三條、第七百八十四條、第七百八十五條、第七百八十六條、第七百八十七條、第七百八十八條、第七百八十九條、第七百九十條、第七百九十一條、第七百九十二條、第七百九十三條、第七百九十四條、第七百九十五條、第七百九十六條、第七百九十七條、第七百九十八條、第七百九十九條、第八百條、第八百一條、第八百二條、第八百三條、第八百四條、第八百五條、第八百六條、第八百七條、第八百八條、第八百九條、第八百十條、第八百十一條、第八百十二條、第八百十三條、第八百十四條、第八百十五條、第八百十六條、第八百十七條、第八百十八條、第八百十九條、第八百二十條、第八百二十一條、第八百二十二條、第八百二十三條、第八百二十四條、第八百二十五條、第八百二十六條、第八百二十七條、第八百二十八條、第八百二十九條、第八百三十條、第八百三十一條、第八百三十二條、第八百三十三條、第八百三十四條、第八百三十五條、第八百三十六條、第八百三十七條、第八百三十八條、第八百三十九條、第八百四十條、第八百四十一條、第八百四十二條、第八百四十三條、第八百四十四條、第八百四十五條、第八百四十六條、第八百四十七條、第八百四十八條、第八百四十九條、第八百五十條、第八百五十一條、第八百五十二條、第八百五十三條、第八百五十四條、第八百五十五條、第八百五十六條、第八百五十七條、第八百五十八條、第八百五十九條、第八百六十條、第八百六十一條、第八百六十二條、第八百六十三條、第八百六十四條、第八百六十五條、第八百六十六條、第八百六十七條、第八百六十八條、第八百六十九條、第八百七十條、第八百七十一條、第八百七十二條、第八百七十三條、第八百七十四條、第八百七十五條、第八百七十六條、第八百七十七條、第八百七十八條、第八百七十九條、第八百八十條、第八百八十一條、第八百八十二條、第八百八十三條、第八百八十四條、第八百八十五條、第八百八十六條、第八百八十七條、第八百八十八條、第八百八十九條、第八百九十條、第八百九十一條、第八百九十二條、第八百九十三條、第八百九十四條、第八百九十五條、第八百九十六條、第八百九十七條、第八百九十八條、第八百九十九條、第九百條、第九百一條、第九百二條、第九百三條、第九百四條、第九百五條、第九百六條、第九百七條、第九百八條、第九百九條、第九百十條、第九百十一條、第九百十二條、第九百十三條、第九百十四條、第九百十五條、第九百十六條、第九百十七條、第九百十八條、第九百十九條、第九百二十條、第九百二十一條、第九百二十二條、第九百二十三條、第九百二十四條、第九百二十五條、第九百二十六條、第九百二十七條、第九百二十八條、第九百二十九條、第九百三十條、第九百三十一條、第九百三十二條、第九百三十三條、第九百三十四條、第九百三十五條、第九百三十六條、第九百三十七條、第九百三十八條、第九百三十九條、第九百四十條、第九百四十一條、第九百四十二條、第九百四十三條、第九百四十四條、第九百四十五條、第九百四十六條、第九百四十七條、第九百四十八條、第九百四十九條、第九百五十條、第九百五十一條、第九百五十二條、第九百五十三條、第九百五

たら網にからまれて、浮かみもやらぬお龜とは」和漢三才圖會「撮網（アミ）。罷網（ヒキアミ）。阿美。今云二醫網一。江南傳用多黑色之」撮網。

たらあみ-ぶね 投網船 （名） とあみぶね（投網船）に同じ。

だらあん-りう 〔道安流〕（名） 茶の湯の一流。金森道安宗和が織部流に遠州流を加へて案出したるもの。茶譜「（金森宗和は古田織部流を根本にして、小堀遠州流を指し加へ、自分の物數奇少し宛仕替へ、自ら道安流と名付けたり」

たらい 〔島夷〕（名） 島地の夷狄。島にすむえびす。盛衰記十九「兵藤「決勝於島夷之外」狼戾逆之徒傳首於京都」「天下遂に平定、海内永く一統せり」書經「禹貢「島夷皮服」」

たらい 〔討夷〕 ㊀うちたひらぐること。討平。㊁夷狄を討伐すること。

たらい 〔擣衣〕 砧（キヌタ）にて衣を擣（ウ）ち光澤を出だすこと。たうえ。夫木「貞永七年七首歌合、風前擣衣」

たらい 〔湯醫〕 溫泉に入りて病氣を醫すること。湯治。空華日工集「（延文七年二月十五日）「仍乞湯醫之暇」入府中醫爲湯醫」往熱海「宿」山崖家」

だらい 〔道衣〕（名） 道士の著る衣服。だうえ。

たらい-いう 〔黨友〕（名） ㊀同じ黨派のともがら。とも。なかま。黨。一味。徒黨。㊁其の黨派に心をよせて援助する人。

だらい-いう 〔導誘〕 導（ミチビ）き誘（イザナ）ふこと。みちびき。誘導。詩經「四方其訓之。箋「教訓者所以導誘人」故爲導也」

だらいしくわい 〔道醫師會〕（名） 醫師會の一。北海道にある郡市醫師會の全部を以て組織するもの。醫師會規則「醫師會は郡市區醫師會及道府縣醫師會とす」同「郡市區醫師會は道府縣内三分の二以上の郡市に於て郡市醫師會設立に至りたるときは道府縣醫師會を設立することを得」

たらい-そくめう 〔當意卽妙〕（句） うまく其の場合にあてはまること。卽座の氣轉。

たらい-いちご 唐苺 （名） 【植】かぢいちごの異名。

たらい-いつ 〔逃逸〕 にげ出だすこと。にげはしること。逃逸。北史「昶子承緒、承緒子暉、尙蘭陵長公主。公主與暉忿諍、推主墜牀、暉遂逃逸」

たらい-いつ 〔蕩逸〕 はういつ（放逸）に同じ。後漢書「酒旦「酒略抄小之體」「蕩逸人閒之事」」同「宜蕩逸簡易、寬小過、總大綱而已」

たらい-いと 唐絲 （名） 舶來の木綿絲。

たらい-いぶき 唐伊吹 （名） 【植】びやくしん（柏槙）の異名。

たらい-いん 〔唐音〕（名） たうおん（唐音）に同じ。運歩色葉「唐音ヨウ」」俳諧新選「唐音も少し言ひたき牡丹哉」

たらい-いん 〔導引〕 もみれうぢをなすこと。按摩。老の數「導引は惡しからず、心に任すべし」

だらう 〔堂宇〕（名） 堂ののき。堂。洛陽伽藍記「放光明、鏗於堂宇」」世說「「立精舍旁連樹帶長川「芳林列於軒庶、清流激於堂宇」」

たらう-うす 唐臼 （名） すりうす（磨臼）に同じ。

たらうち-さう （名） 【植】つばめおもとの異名。

たらう-ちは 唐團扇 （名） ㊀支那風に擬したる團扇。昔時、軍陣にて采配の代りに用ひたるより軍配團扇ともいふ。本朝二十不孝「行司、唐うちはを翳して、四本柱の中に立てば」㊁紋所の名。唐團扇（くはなうちは　たうちは　中陪うちは　三段うちは）

扇を象りたるもの。くはなうちは・たうちは・なかつうちは・みつたうちは等種種あり。

たらうちは-に-つた 唐團扇蔦 （名） 紋所の名。

たらうちは-に-ひとつつた 唐團扇一蔦 （名） 紋所の名。

たらう-うん 〔稻雲〕（名） 秋の頃、一帶にみのりたる稻穗を雲に見たてていふ語。范成大詩「樂歲今歲事、天末稻雲黃」

たらう-うん 〔倒運〕（名） 傾く運命。否運。類運。

たらう-え 〔擣衣〕 たうい（擣衣）に同じ。

だらう-え 〔道衣〕（名） だうい（道衣）に同じ。

たらう-えい 〔倒影〕（名） 影（ヒカ）を倒にうつすこと。又、倒にうつりたる影。溫庭筠詩「疊瀾不定照天井、倒影蕩搖晴翠長」」同「鳥飛天外斜陽盡、人過橋邊倒影來」

たらう-えう 〔桃夭〕（名） 「下文の詩經の語より出づ」婚嫁の時期。よめいりどき。嫁期。詩經「周南「桃之夭夭、灼灼其華。之子于歸、宜其室家」」

たらう-えう 〔陶窑〕 陶窯 （名） 陶器を燒くかま。やきものがま。

たらう-えう 〔蕩搖〕 ゆり動かすこと。又、ゆれ動くこと。左傳「成三年「欲閥閱「賴我公室、賴我社稷、帥我暨賜、以來蕩搖我邊疆」」戴叔倫詩「蕩搖清管雜、幽咽野風傳」

だらう-えき 〔道驛〕（名） しゆくば。驛路。驛。太平記「世尊寺大納言「道驛を重ねて、無程京都に著きしかば」」

たらう-えふ 〔桃葉〕（名） ものは。王獻之詩「桃葉復桃葉、渡江不用楫」」白居易詩「小妓携桃葉、新歌蹈柳枝」」

たらう-おもだか 唐澤瀉 （名） 【植】みづがしは（睡菜）の異名。

たらう-おり 唐織 （名） からおり（唐織）に同じ。織留「四角に赤地の唐織を、菊の花形に切り合はせ」

たらう-おん 〔唐音〕（名） 漢字の音の一種。陪・唐又は其れ以前の音を傳へたる漢音・吳音に對して、宋・元以後の支那音を傳へたるものの稱。卽ち、行燈（アンドン）・普請（フシン）の類。たういん。

たらう-か 〔刀下〕（名） 白刃の下。かたなのした。

（諺）刀下の鬼となる　斬られて死す。きり殺さる。

（諺）刀下の鳥、林藪にまじはる　（斬り殺さるべき鳥の、免れて林藪に放たれたる義）蘇生の思ひをなしたる譬へにいふ。盛衰記「四十七、六代「是れや此れ、俎上の魚の江海に移り、刀下の鳥の林藪に交はるとは」」

たらう-か 〔刀架〕（名） かたなかけ（刀掛）に同じ。

たらう-か 〔稻稼〕（名） いね（稻）に同じ。晉書「五行「大水、稻稼蕩沒」」

たらう-か 〔稻荷〕（名） ㊀稻荷（イナリ）の神。㊁動「狐は稻荷（イナリ）の神の使なりといふ

より轉じて、狐の異名。關東の方言。物類稱呼

たらう-か 〔棹歌　櫂歌〕（名） ふなうた。漁歌。朗詠「郷淚數行征戍客、棹歌一曲釣漁翁」」南史「羊侃性豪侈、善音律、自造采蓮櫂歌兩曲、其有新異」」隋書「地理志「至洞庭爲競渡之戲、其迅檝齊驍、櫂歌亂響、喧振水陸」」

たらう-か 〔蹈歌〕 ㊀足を蹈みならしてうたひ舞ふこと。舊唐書「音樂志」「出內人、連袂蹈歌」」㊁古昔、歲首に行はれたる舞踊の一種。

これが朝廷の儀式に定まりしは、聖武天皇の頃よりならんといふ。男蹈歌・女蹈歌の二種あり。男蹈歌は正月十四日十五日に行はれ、四位已下の殿上・地下の輩、高巾子の冠に綿花を付け、俄馬樂を歌ひ、舞ひ奏でつつ、禁裡より初めて諸院・諸宮を巡る。女蹈歌は同十六日に行はれ、舞姫四十人、紫宸殿の南庭より校書殿を廻り、歌を唱へて退出す。中古以來男蹈歌は止みて、女蹈歌のみとなれり。萬歲樂。あらればしり。西宮記「蹈歌」源氏「內宴たうかなど聞き給ふにも」

たらう-か 〔當下〕 ただいま。當時。目今。目下。水滸傳「「當下、上至住持眞人、下及道童侍從」」

だらう-か 〔堂下〕（名） 堂のした。又、そこに居る身分の人。百合若大臣野守鏡「「堂上・堂下同音に、さながら蘇生の如くなり」」左傳「昭公廿二年」「往立於堂下」」孟子「梁惠王上」「王坐於堂上有牽牛而過堂下者」」

だらう-か 〔道家〕（名） 道教。又、道教を奉ずる人。史記「武帝「推儒術、貶道家言」」同「孝文好道家之學」」

だらう-か 〔道歌〕（名） 精神修養のことを詠みたる教訓の歌。運歩色葉「道歌カウ。」」

たらう-がい 〔當該〕（名） ㊀そのこと。そのもの。大鏡「狂言綺語「正月の御飾りの當該になる、根延の松を捧げまする」」㊁其の局にあたること。そのかかり。そのうけもち。「當該官吏」

だらう-かい 〔導開〕 みちびき開くこと。

たらうがい-の-さる 桃核猿 （名） 竹切を耳とし、ももの核にて作りたる猿。

たらう-かう 〔黨綱〕（名） 黨派の綱領。黨の紀綱。黨の政綱。

たらう-かう 〔倒行〕 道理にさからひて事を行ふこと。順序によらずして逆に事を行ふこと。

たらうかう ぎやくし 〔倒行逆施〕 ぎやくしたらうかう（逆施倒行）に同じ。史記「伍子胥「吾日暮途遠、吾故倒行而逆施之」」

だらう-かう 〔道幸〕（名） だうかうだな（道幸棚）の略。和泉草「「道幸」」茶道望月集「有、道幸を見立て初めたる事は、手ぐつ人形を使ひ初めたる者を道幸の坊といふ也。箱を背負うて旅行自由する樣に拵へ、夫れに色色人形を入れて使ひ歩行かせし、其の箱より見出初めし事と也。其の人の名を取りて、今以て道幸と云ふと也」

だらう-がう 〔堂號〕（名） 堂の名。屋號。

だらう-がう 〔道號〕（名） 僧侶などの名。又は字の外につくる號。號。運歩色葉「「道號ダウガウ」」古今印史「道號之稱、雖起於末世、然義各有取、或因性欲而以韋自勉、或因性緩而以枝自厲」勸善書「宋僧惠詢、道號月堂」

だらう-だな 道幸棚 （名） （道幸なる者の創意によりていふとぞ）茶室の燈傍の壁につくりて、茶器を載する袋戸棚。參考「節用「「道幸棚ダウカウ」」茶器所以爲居設之所右は貯茶器所也」」又「「道幸棚ダウカウ」」「茶器所用前其誤而已」」

たらう-がき 〔唐柿〕（名） 【植】㊀いちじゆく（無花果）の異名。㊁いぬびは（天仙果）の異名。

たらう-がく 〔唐樂〕（名） 唐朝より傳來したる雅樂。左樂。左方。續紀「廿六、天平勝寶元年十月戊子「幸二弓削寺一禮佛、奏二唐・高麗樂於庭一」」同「廿七、天平勝寶二年十月癸酉「左曰唐樂、中國之音也」」宋史「音樂志」

だらう-かく 〔堂閣〕（名） 堂と閣と。盛衰記「「太曾山「堂閣空沂蒼海之波濤」」

だらう-がく 〔道學〕（名） ㊀じゆがく（儒學）に同じ。論衡「量知「文史筆札之能、而治定簿書考理煩事雖無道學、觔力材能盡於朝廷、此亦報上之效驗也」」朱熹文中「「其傳何爲而作也、子思子憂道學之失其傳而作」」㊁支那、宋・明の儒者の唱ふる心性・理氣の學の稱。癸辛雜識「宋沈仲固言、道學之名起於元祐、盛於淳熙、其徒讀書作文者、則目爲玩物喪志、留心政事者、則目爲俗吏、其所讀者、止四書・近思錄・通書・太極圖・東西銘・語錄之類、自詡其學爲正心・修身・齊家・治國平天下、然考其所行、則實行不相顧」」㊂道家の學問。隋書「經籍「蓋公能言黃老、文帝宗之、自是相傳、道學彙矣」」

たらう-がく-し 〔唐樂師〕（名） 古昔の職名。唐樂生を教ふること を掌りたるもの。職員令「雅樂寮「樂師十二人「教生」」

たらう-がく-せい 〔唐樂生〕（名） 古昔、唐樂を習ひたるもの。職員令「雅樂寮「樂師十二人「教生」」唐樂師「學生六十人「學習」」本紀「類聚三代格「天平元年二月廿二日「太政官符「唐樂生六十人」」

だらう-がく-せんせい 〔道學先生〕（名） ㊀道學を修めたる先生。㊁道理に偏して事理に暗き學者。頑固なる學者。

たらう-がき 唐瘡 （名） （唐人の、肥前國長崎に來りたる者、其の毒を傳へたるよりいふとぞ）㊀ばいどく（黴毒）に同じ。東海道名所記「唐瘡をかき出だして、これを防がんとて、輕粉・大風子なんど、あらけなき藥を飲みて」」㊁浸淫瘡（シンインソウ）に類せる瘡なりと。月海錄「永正九年、壬申人民多有瘡、似浸淫瘡、是膿瘡、髓花瘡之類、稀所見也、治之以衰淫瘡之藥云云、謂之唐瘡・琉球瘡」」新撰倭漢合圖「「永正十一年唐瘡始」」

たらう-の-せちゑ 〔蹈歌節會〕（名） 主上南殿に御して蹈歌を見そなはし、又、五位以上を召して宴を賜ふ儀。公事根源「「蹈歌節會」」盛衰記「廿八、十六日には蹈歌の節會も行はれず」」

たう-かぶ 〔套甲〕（名） ことづめ（琴爪）に同じ。

たら-かへで 三角楓 (名) 【植】槭樹(ヤマモミジ)科。槭樹屬の落葉喬木。葉は長柄を有し、殆ど全邊にして、上端三裂し、各裂片は鋭頭なり。四五月頃、枝梢頭に小花を多數につけ、雙翅果を結ぶ。支那の原産。我が國、庭園に栽培せらる。からもみぢ。

たら-かむり 唐冠 (名) 【一】兜の側の一種。武德安民記(ヤ)「藤堂佐渡守高虎、この由を聞きて中華唐冠の冑を授け畢はんぬ」運歩色葉「唐冠(カラカブト)」 【二】【動】軟體動物中、腹足類の一種。殼は長さ八寸許りにて、殼口狹く兩脣闊く、板狀に擴張して、内方に齒あり。我が國、琉球等の暖海に産す。

たら-がや 唐榧 (名) 【植】てうせんかやの異名。

たら-がらし 蕃椒 唐辛 (名) 【一】【植】茄科、蕃椒屬の一年生草本。莖の高さ二三尺に達し、葉は卵形又は長卵形にして尖り、長き葉柄によりて互生す。夏日、葉腋に白色の合瓣花を開く。果實は通常細長くして紅熟し、辛味を有す。品種甚だ多し。果實を辛味料、葉を食用とす。廣く我が國に栽培せられ、又、觀賞用となすことあり。かうらいどせう。きてんじやう。なんばん。最明寺殿百人上萬葉(ヤ)「奴餞に米柱ゐて、奥齒に噛る唐辛」太祇全集「唐辛墨の上へはかりけり」 【二】紋所の名。蕃椒を象りたるもの。みつたうがらし・りんだうたうがらし等種種あり。

(三しらがうた)

たらがらし-みそ 唐辛味噌 (名) 唐辛をまぜたる味噌。孫常磐三「唐辛味噌はあるけれど、是れでは咽せて堪るまい」

たら-がらす 唐烏 (名) 【動】【一】鳥類中、燕雀類の一種。鳥の一種。頸部より胸部・腹部は灰白色乃至灰黑色なり。亞細亞大陸の産にして、稀に我が國に見る。 【二】かささぎ(鵲)の異名。

たら-かん 〔堂監〕 (名) 文章院の職員。

たら-かん 〔盜汗〕 (名) ねあせ(寢汗)に同じ。

たら-かん 〔倒涵〕 さかさにしてひたすること

たら-かん 〔刀眼〕 (名) 刀のめくぎをうつ孔。めくぎあな。

たら-がん 〔桃顏〕 (名) 桃色の顏色。美しき顏いろ。平家七、熊谷「桃顏露に綻び、紅粉眼に媚びをなし、柳髮風に亂るる粧ひ」

たら-がん 〔唐雁〕 (名) 【動】かてう(鷽)の異名。

だらかん-は 〔道閑派〕 (名) 茶の湯にて、石州流の一派。石州流の祖片桐石見守の門人清水道閑を派祖となすもの。茶傳集(茶人名鑑、石州流清水道閑(京都の人、慶長元和の頃)、道閑、石州流の祖、初め織部門也、後所部敵にて他邊の茶道と成る、石州の婿みとにまかせ石州流となるなり。慶安元年六月廿日没)」

たら-き 〔陶器〕 (名) やきもの。すゑもの。伊呂波字類「陶器」禮記月令「陶器必良」

たら-き 〔黨規〕 (名) 黨の規則。黨則。

たら-き 〔黨紀〕 (名) 黨の風紀。黨の紀律。

たら-き 〔當季〕 (名) このとき。このせつ。此の季節。當期。運歩色葉「當季(タラキ)」陸機歌「同じ處にたらきまで、半夏・半夏と季を重ね」

たら-ぎ 〔當期〕 (名) 【一】前條に同じ。 【二】取引所の語。たらきり(當切)に同じ。

たら-ぎ 〔當歸〕 (名) 【植】繖形科、當歸屬の多年生草本。莖の高さ二三尺。葉は三出複葉にして互生す。小葉は深く三裂するか或ひは缺刻を具へ、深綠色にして光澤を有し、緣邊に尖鋸齒あり。夏秋の候、枝梢上に小形白色の花を複繖形に開く。根を干して藥用とす。我が國、山地に自生し、又園圃に培養せらる。うまぜり。おほぜり。かはくさ。かはさく。かはぜり。すずかのかうほん。運歩色葉「當歸(タラギ)藥」芭蕉句集「當歸より哀れは墳の菫草」

たら-ぎ 〔逃毀〕 住民の逃脫するとき、領主等が其の妻子を抑留し、資財を奪取すること。貞永式目「百姓逃散時、稱逃毀(令損亡)事。右諸國住民逃脫之時、其領主等稱逃毀、抑留妻子、奪取資財、所行之企、甚背仁政」新編追加(寛保)「土民去留事。右宜任民意之由、被載式目畢。而或稱逃毀、抑留妻子資財、或號有負累、以强緣沙汰、取其身代、之後、如相傳令逃退之由有其聞、事實者甚以無道也」

たら-ぎ 〔黨議〕 (名) 【一】黨内の評議。沈約詩「賞途或妄踐、黨議勿輕持」 【二】其の黨の議論。黨論。

たら-ぎ 〔黨議〕 (名) 〔たら(讜)は正しき義〕道理に叶ひたる議論。おもねりへつらはざる意見。

たら-ぎ 〔討議〕 互ひに或る事につきて意見を戰はすこと。互ひに意見を述べて論じ合ふこと。討論。

だら-ぎ 〔道義〕 (名) 人の履行すべき正しき道。道德上の理義。易經(繫辭)「成性存存、道義之門」史記(太史公自序)「春秋以道義」

たら-ぎ-あん 〔討議案〕 (名) 討議に附する原案。

たら-ぎう 〔討究〕 深くたづねきはむること。研究。沈約文「又世胄名氏、本國俗緣、散、析衆部、平議、討究」唐書(儒學傳)、治党(馮)「鉉、討究儒術、以興典憲」

たらぎう-らく 打球樂 (名) 大食調の雅樂にて、唐樂の一。舞人四人毬を掻きやり舞ふもの。だきうらく。

たら-ぎく 〔唐菊〕 (名) 【植】しうめいぎく(秋牡丹)の異名。

たら-ぎ-しやう 〔陶器商〕 (名) 陶器を販賣すること。又、其の商人。

だらぎ-しん 〔道義心〕 (名) 道義を守る心。道念。

だらぎてき-じんぶつ 〔道義的人物〕 (名) 道義を辨へたる人物。

たら-きばうし 玉簪 (名) 【植】百合科、紫萼(ギボウシ)屬の多年生草本。莖の高さ四五尺餘に達す。葉は卵形にして叢生し、長き葉柄を有し、葉面に纖質の白粉あり。夏日、二三尺の花莖を葉間より抽出し、白色の花を總狀花序に排列す。觀賞用として庭園に栽培せらる。てうせんぎばうし。ほそばのぎばうし。

(しうばぎうた)

たら-きばうし (名) 【植】ぎばうし(紫萼)の異名。

たら-きびし 唐黍 (名) 【植】【一】たうもろこし(玉蜀黍)の異名。芭蕉句集「唐黍や軒端の荻の取り遮へ」 【二】もろこし(蜀黍)の異名。

たら-ぎり 瓶桐 唐桐 (名) 【一】【植】馬鞭草(クマツヅラ)科、瓶桐屬の落葉小灌木。幹の高さ一二尺乃至三四尺。葉は桐の葉の如く圓くして尖り、緣邊に鋸齒あり、大なるものは全長一尺に達す。夏秋の候、上方に枝を分かち、穹・房共に五裂して紅色なる花を開く。唐國の産。あかぎり。ひぎり。 【二】紋所の名。きり(桐)を見よ。

たら-ぎん 〔陶鈞〕 陶均 (名) 瓦を造る器具。ろくろ。漢書(董賢)「聖王制、世御、俗、獨化、於陶鈞之上」

たら-ぎん 〔韜鈐〕 〔たう(韜)は弓の袋、きん(鈐)は矛の柄〕兵法。武術。張說詩「禮樂逢明主、韜鈐用老臣」

たら-ぎん 〔當今〕 (名) 當代の天皇陛下。今上。いまのうへ。保元(新院御所御評議)「當今は誰れに讓りましまさん」運歩色葉「當今(タウキン)」

たら-ぎん 〔當銀〕 (名) たうきん(當金)に同じ。

たら-ぎんせん (名) 【植】菊科、金盞草(ハナガサ)屬の一二年生草本。莖の高さ五七寸乃至尺餘。葉は長倒卵形、淡色を呈し、明瞭なる葉柄を缺く。初め地上に叢生し、春より秋にかけて枝を分かち、其の頂に淡黃又は黃褐色の花を開く。下種の季節によりて花季を異にす。我が國、庭園に栽培せらる。

たら-く 〔倒句〕 (名) 意味を强むる爲めに轉倒せしめたる句。

たら-ぐ 〔戇愚〕 (名) 〔たら(戇)はおろかなる義〕おろか。ばか。韓愈文「潮州刺史謝上表」「臣以狂妄戇愚、不識禮度」

たら-ぐ 〔道具〕 (名) 【一】佛家の器具。釋氏要覽「道具、中阿含經云、所蓄物可養身道者、即是增長善法之具。菩薩戒經云、養生順道之具、是也」 【二】轉じて、一切の器物の稱。うつは。狂言(茶壺)「わらはが持つて來た道具・小袖を代(ヒロ)なせと言うて、皆にさしました」運歩色葉「道具(ダウグ)」 【三】武家にて槍の特稱。武具第一の具としたるよりいふ。曾我虎磨(ヨ)「武士も道具を伏せ編笠に」 【四】其の物に具備する諸種のもの。狂言(三人片輪)「此の度は引きか、へ、唖に成つて參らうと存じ、道具を用意致してござる」丹波與作(ヨ)「顏の道具、手足まで、母は斯うは產みつけぬ」 【五】他人のために利用せらるる人

たら-ぐ-いち 道具市 (名) 古道具を賣る市。燕村句集(秋)「秋の燈やゆかしき奈良の道具市」

だら-ぐう 〔道宮〕 (名) 道士の仲まの居所。觀。

だらぐ-えらみ 道具選 (名) 道具のえりごのみすること。八笑人(ヨ)「そらそらだらぐえらみが始まつた」

だらぐ-おとし 道具落 (名) 戰場にて槍などの武器、又は兵卒を失ふこと。(關西笑話)續山井「やり梅も風には道具おとしかな」

だらぐ-かた 道具方 (名) 演劇、其の他の興行物にて用ふる道具の事を勤むるもの。(戲場一覽)「道具方。角の芝居(カドノシバヰ)町(ヤウ)大工角兵衛」戲場樂屋圖會「道具方」

だらぐ-ぐら 道具藏 (名) 道具を入れ置く藏。市中取締類集「役所御道具藏壺棟、新規御取り建てに付き」

だらぐ-くらべ 道具競 (名) 物合せの一。道具を對比して優劣を判じ輸贏を決するもの。狂言(茸)「此の間のあなたこなたにお道具くらべは、夥しい事でござる」

たら-ぐし 唐櫛 (名) 齒の甚だ細かく密なる梳櫛(ヒメグシ)。運歩色葉「唐櫛(タラグシ)」新永代藏(四)「大阪長町の唐櫛も、此の男が廻はしはじめて、後後はする人多し」國姓爺(淨瑠璃)「唐子髻には薩摩櫛、島田髻には唐櫛と、大和・唐土打ちませて」

だらぐ-し 〔道具師〕 (名) 能樂などにて用ふる道具の事を勤むるもの。(明和京羽二重)「能道具師。新町通出水上る町、半田次右衛門」

だらぐ-しゅう 〔道具衆〕 (名) 武家の職名。槍奉行に屬する騎馬の武士。戰場に出づる時、長柄の槍を取りて接戰することを專務となすもの。

だらぐ-だい 〔道具代〕 (名) 道具の買入料、又、使用料。大概順(御目見以下大概)「持高。御道具代一箇年金五兩」世間子息氣質「道具代金銀合して五拾三兩貳歩貳朱」

だらぐ-だて 道具立 (名) 【一】所用の道具を飾り立つること。 【二】物事の準備。(諺)道具立する者は仕事が鈍い 下手の道具しらべに同じ。へた(下手)の條を見よ。

たら-くつ 〔撓屈〕 くったう(撓屈)に同じ。北史(于仲文)「摩氣厲然、初不撓屈」

だらぐ-どめ 道具止 (名) 道具などを持ちて、此處より奥へ入ることを禁止すること。又、そのところ。室町千疊敷「大下馬の道具止め、四尺四面の立石」

たら-くねんぼ 〔唐九年母〕 (名) 【植】うちむらさきの異名。

たら-くは 〔唐鍬〕 (名) 鍬の一種。頭部は全く鐵製にて、木の柄をはめたるもの。刃に反(ソ)なし。樹の根を掘り起こす等に

用ふ。和爾雅「鍋」（鍋唐鍋で味噌起こすやう）賞行の出來がたき言動に譬へていふ。

たらぐば 唐桑（名）からくは（唐桑）に同じ。

だらぐばこ 道具箱（名）道具を入れておく箱。

たらくばふ 倒句法（名）修辭の一法。倒句を用ひて文章を修飾するもの。

たらぐみ （名）【植】胡頽子（ヒ）科胡頽子屬の常綠灌木。まるばぐみの變種。概形まるばぐみに似て、花は淡紫色を呈す。

だらぐもち 道具持（名）一武家にて槍持の稱。夕霧阿波鳴渡「道具持の槍右衛門、一人殘って臺所覗き」二消防夫の仲間にて、纏持（マトモチ）の稱。

だらぐや 道具屋（名）古道具をあきなふ人。又、其の家。骨董屋。心中刃氷朔日「兵衛小か「道具屋おかめ與兵衛とは、思へば近き町つづき」

だらぐやぶし 道具屋節（名）淨瑠璃節の一種。寛永・延寶の頃、大阪の淨瑠璃語、道具屋吉左衛門の語りはじめたるもの。

たらくらげ 唐水母（名）【動】びぜんくらげ（備前水母の異名。一代女「親やなどの吸ひ物・唐水母ばかりで酒飲んだ事はない」

たらくるみ 唐胡桃（名）【植】てうちくるみ（胡桃の異名。

たらくわ 湯火（名）湯（ユ）と火と。又、熱湯と猛火と。史記「貨殖」前蒙矢石、不避湯火之難者、爲重賞使也」

たらくわもさけず 湯火不避 湯火の中に入るをも恐れず。

たらくわ 桃花（名）桃（モモ）の花。諸詩「桃花雨を帶び、柳愛風にたをやかなり」王維詩「春來過是桃花水、不辨仙源何處尋」

たらくわのせっく 桃花節 三月三日の節句。ものせっく。上巳。

たらくわ 稻花（名）いねの花。朗詩「山畦甲日稻花風」劉長卿詩「暮天江色裏、田鶴稻花中」

たらくわ 倒戈 戈を倒にして味方を攻むること。轉じて、敵に內通すること。うらぎり。書經「前徒倒戈、攻于後」以北」

たらくわ 陶化 教化すること。陶冶。感化。皇甫規文「凝、蕭萬姓、陶化八紘」

たらくわ 糖化 【化】澱粉の、糖類に變化すること。

たらくわ 唐畫（名）支那人の描きたる畫。又、支那風の畫。から畫。（やまと畫の對）

たらくわ 陶畫（名）陶器に描く畫。陶器に描きたる畫。

たらくわ 陶瓦（名）一陶器と瓦器と。二うはぐすりをかけたるかはら。唐書「敎民作陶瓦」

だらくわ 導火（名）一くちび。みちび。二事件をひきおこす動機。

たらくわい 韜晦 自分の才能・地位・形跡などをつつみかくすこと。くらます。唐書「愈事韜晦」

たらくわうこう 刀光（名）かたなのひかり。崔國輔詩「刀光照寒月、陣色明如畫」

たらくわうしょく 橙黃色（名）橙（ダイ）の實の如く、少し赤みを帶びたる黃色。かうぢいろ。

たらくわく 湯鑊（名）湯を煮立てて罪人を煮殺すに用ふる足なき大鼎。盛衰記「獄囚は湯鑊を出で、罪人枷鎖をゆるされたり」史記「臣知狀大王之罪當誅、臣請就湯鑊」

たらくわくのけい 湯鑊刑 湯鑊に入れて罪人を煮殺す刑。かまうで。

たらぐわし 唐菓子（名）からくだもの（唐菓物）に同じ。

だらくわせん 導火線（名）一くち火をさそふ裝置の線。二事件を惹き起こす動機をさそふ因緣。

たらくわーふん 桃花粉（名）べに（紅）の異名。

たらくわん 刀環（名）たいたうとう（大刀頭）に同じ。漢書「立政等、未得私語、即目視陵、而數數自僭其刀環、握其足、陰諭之、言可還歸漢也」高適詩「王程應未盡、且莫顧刀環」

たらくわん 當官（名）一當該の官吏。そのかかりの官吏。二その官。さしあたりの官。

たらくわん 陶棺（名）我が國上古用ひられたる素燒の棺。灰白又は赤色にて、通常、蓋と、底部に脚とを有す。

だらくわん 導管（名）一【植】植物學上の用語。長く連接せる細胞が、相隣接せる胞膜の全部又は一部を失ひて長管をなせるもの。植物體內の液體運移の通路なり。

（たらくわんうた）

だらくわん 道觀（名）道教の寺觀。事物紀原「周穆王尙神仙、召尹軌杜冲居終南山、尹眞人草樓之所、因號樓觀、蓋道觀之初也」

だらくわんーさう 王不留行（名）【植】石竹科、王不留行屬の一、二年生草本。莖の高さ一二尺に達す。葉は披針形、淡綠色にして對生す。淡紅色、五瓣の花を開き、蒴花序に排列す。歐羅巴洲の原產。觀賞用として栽培せらる。かさぐさ。すかくさ。すかなぐさ。すすくさ。

（うさんわくうだ）

たらくわんもくかう 唐環木瓜（名）紋所の名。

だらくわんーれい 導官令（名）おほひのかみ（炊炊頭）の唐名。職原抄「大炊寮中務頭一人（無權官、相當從五位下）」

たらけ 當家（名）この家。我が家。平治「便宜候はば、當家の浮沈をも試むべしとこそ存じ候へ」東鑑「十六、正治二「當家武勇、獨在宗政」運歩色葉「當家」北史「喪當家之寶」

たらげ 峠（名）（たむけの音便）一坂路ののぼりつめたる最も高き所。堀河百首「足柄の山のたらげに今日來てぞ富士の高嶺の程は知らるる」二物事の頂上。危險の極度。「病氣の峠を越す」

だらけ 道家（名）だうか（道家）に同じ。

だらけ 道化（おどけの訛りか）一人のをかしみを催す戲れの言語又は動作。おどけ。滑稽。二だうけがた（道化形）の略。人倫訓蒙圖彙「道化。うつけを第一とし、うそがましき事のみいひ、なりふりまでをかしげに見え、見物のかたがた笑ひを催さす」

だらげ 堂下（名）だうか（堂下）に同じ。太平記「十三花山院殿、堂上・堂下雲の如くなりし青侍・宮女」

たらけい 倒景（名）夕日の影。いりひ。斜景。夕景。斜照。斜影。

たらけい 刀圭（名）一藥を盛る匙。隱牘「刀圭」茅窗漫錄「刀圭」神仙傳「沈羲吳郡人中黃老君使玉女持金案玉杯、盛藥賜羲、羲曰、是神丹、飲者不死、矣、給各一刀圭」二轉じて、醫術また醫者の稱。「刀圭の家」

たらけい-か 刀圭家（名）刀圭を執りて病を療する人。くすし。醫者。醫師。

たらけい-じゅつ 刀圭術（名）いじゅつ（醫術）の異稱。刀圭。

だらけう 道敎（名）一道德の敎へ。二支那に行はるる一種の敎義。黃帝・老子を祖とし、養生を講じ、長壽を求め、呪咀・祈禱等を行ふもの。

だらけーがた 道化形（名）芝居にて道化の事を演ずる役。又、其の役を得意とする人。歌舞妓事始「道戲がた、むかしは立役のおも役なり。人品よく委麗として、心に足らはぬ所作するを道戲といひし也今の濱外といふは、丁稚三太・かど・鼻・ちよち・兵衛・あるひは庄屋の松兵衛などいふ如きの端役になりて、意趣たがへり」

たらげ 盪擊 烈しくつきあたること。あらく打ちあたること。柳宗元文「摈山石「屈折東流、其典委勢峻、盪擊益悉」

たらげ 道化形（名）【植】石松（ヒカゲノカヅラ）科、石松屬の多年生草本。莖の高さ一尺餘に達す。葉は細長くして尖り鋸齒を有して莖に密生す。子囊は稍腎臟形にして、秋季葉上の葉腋に一箇づつ生ず。我が國、山地に自生し、又、觀賞用として栽培することあり。

（ばしげうた）

だらげーしば （名）【植】石松（ヒカゲノカヅラ）科、石松屬の多年生草本。莖の高さ一尺餘に達す。葉は細長くして尖り鋸齒を有して莖に密生す。子囊は腎臟形にして、秋季葉上の葉腋に一箇づつ生ず。我が國、山地に自生し、又、觀賞用として栽培することあり。

だらげーしばゐ 道化芝居（名）道化の事を演ずる芝居。おどけしばゐ。

たらけーしゃく 桃花石（名）堅くして舌に粘せぬ赤石脂。和名「桃花石。本草云、桃花石、色如桃花、故以名之」名義抄「桃花石」

たらけつ 糖結（名）きやら（伽羅）を見よ。

たらげつ 當月（名）このつき。今月。本月。運歩色葉「當月」北史「初神武納浚母、當月而有孕」

たらげつ-さり 當月切（名）取引所の語。ていきとりひき（定期取引）を見よ。

たらげーぶ 糖業（名）砂糖の製造業。

たらげぶかいりやうじむさよく 糖業改良事務局官制（名）「糖業の調査試驗」

たらげぶかいりやうじむさよく 糖業改良事務局（名）農商務大臣の管理に屬し、糖業の調査・試驗・糖業に關する講話・講習・土壤・肥料・砂糖其の他糖業に關係ある物料の分析・鑑定、甘蔗種苗の配布、糖業に關する補助、及び共進會・品評會等に關する事務を掌る役所。局長・事務官・技師・技手・書記の職員を置く。「糖業改良事務局官制」

たらげぶかいりやうじむさよくーちやう 糖業改良事務局長（名）糖業改良事務局の長官。農商務大臣の指揮・監督を承けて、局中全般の事務を掌理するもの。沖繩縣知事を以てこれに充つ。

だらけーもの 道化物（名）滑稽なることをなす人。道化たる人。東海道名所記「勘三郎とかや聞こえし道化者が、女形とやらんことごとしき芝居」

だらけーやくしゃ 道化役者（名）芝居にて道化の事を演ずるを得意とする役者。道化芝居の役者。浮世床「「鶴屋南北とは、むかしの道化役者で」

だらける 道化（自動）道化をなす。おどける。ふざける。ざれたはむる。俳草「むさくさものといへば、だらけて面白きこといふ」

だらけーゑ 道化畫（名）こっけいぐわ（滑稽畫）に同じ。

たらけん 刀劍（名）かたなとつるぎと。又、其れ等の兵器の總稱。史記「春申君」

たらけん 唐犬（名）獵犬の一種。性、敏捷にして勇猛なるもの。

たらけん 唐硯（名）支那製の硯。多くは瓦硯たり。

たらけん 陶硯（名）陶製の硯。硯史「相州士人、自製陶硯」

たらけん 倒懸 手足を縛りて倒さにつるすこと。轉じて、非常なる困苦に譬へていふ語。太平記「當今之時、萬乘之國行仁政、民之悅之、猶解倒懸也」

たらげん 桃源（名）ぶりようたうげん（武陵桃源）を見よ。太平記「或ひは被停出仕、尋桃源跡」

たらげんのゆめ 桃源夢 浮世を離れたる安樂の生活に譬へていふ語。

たらーげん 蹠言（名）一ありきたりの言。又、ふるくさき言。陳套の言。二常に定まりてある言。おきまりの言葉。きまりもんく。

たらーげん 蹠言（名）蹠直なる言語。正しき言葉。おもねりへつらはぬ言。直言。孟子「盡心、益稷曰、禹拜、蹠言」釋曰、蹠言善言也」漢書「谷永傳」「吾久不見班生、今日復聞蹠言」

たらーご 鼓（名）ふりつづみ（振鼓）に同じ。書經「下管鼗鼓、合止柷敔」

たらーご 套語（名）たらげん（套言）に同じ。

たらーど 道虛（名）だうどにち（道虛日）の略。玉葉「建久元年、十月、十日、「組朝卿今日入洛、而依道虛衰日、延引明日」明月記「建永元年、三、明日道虛、明後日厭日」

たらーこう 刀工（名）かたなかぢ。

たらげんのみえ 陶犬瓦雞（句）外貌のみえらく見えて、何等の働きもなき人を嘲りていふ語。古老軍物語「武士と名をかかりながら武篇なくば、陶犬・瓦雞とて、譬へば石にて造りし犬は名のみ犬にして盜人を咎めず、瓦にて造りし雞は名のみ雞にして、八聲をとなへずが如し」初學記「陶犬不能吠、瓦雞焉能鳴」成語考「空存無用、何殊陶犬瓦雞」

たらけんーびたひ 唐犬額（名）【承應頃の俠客、唐犬權兵衛の頭つきをまねたるよりいふ】額の毛を廣く、角を鉈さきの如く尖らせて拔き上ぐること。俠客傳「江戸に唐犬粗といふ男達ありし中略大方男ぶりよく美男なりし。額別して大きく、かっかうよろしく、今稀なり」

たらーこ 鼓（名）ふりつづみ（振鼓）に同じ。書經「下管鼗鼓、合止柷敔」

たらーど 套語（名）たらげん（套言）に同じ。

だらーど 道虛（名）だうどにち（道虛日）の略。玉葉「建久元年、十月、十日、「組朝卿今日入洛、而依道虛衰日、延引明日」明月記「建永元年、三、明日道虛、明後日厭日」

たらーこう 刀工（名）かたなかぢ。

刀匠。

たう-こう 〔陶工〕（名）やきものし（焼物師に同じ。桂林漫録下、「鮮瑠は日本勢州松坂の陶工なり」

たう-こう 〔桃紅〕（名）ももいろ。薄紅き色。ときいろ。淡紅。元史輿服志「大紅・桃紅」

だう-こう 〔堂構〕（名）家業をうけつぐこと。書經大誥「若考作室既底法、厥子乃弗肯堂、矧肯構」能負析薪」陳琳文「聞魏周桑虞仲翔、各紹堂構」

たうこぎ 狼把草（名）【植】菊科、鬼鍼草（ヤブタバコ）屬の一年生草本。莖の高さ二三尺。葉は對生、下部のものは三裂又は五裂して粗鋸齒を有し、上部のものは廣披針形にして粗鋸齒を有す。秋季黄色の頭狀花を開き、後、刺ある果實を結ぶ。此の植物は毛髪を黒くする效ありといひ、又、肺結核を治すと稱せられたり。

たうこぎ （名）【植】ぎしぎし（羊蹄）の異名。

たう-こく 〔島國〕（名）しまぐに。海國。

たう-ごく 〔當國〕（名）この國。我が國。源至尊「大貳の北の方ならずば、たうごくの受領の北の方になし奉らん」

だう-こしかけ 堂腰懸（名）茶の湯の語。辻堂にかたどりたる腰懸の休息所。壺を飾く。茶道筌蹄「一茶「堂腰懸。利休形、外露地にあり。壺はくれを用ふ。元來辻堂にかたどりたる故、堂腰懸といふ」

だう-こつ 〔橈骨〕（名）【醫】前膊を形成する長骨の一。前膊の外側にあり。三角稜狀にして、上膊骨・尺骨及び腕骨と連接す。

だうこつ-とうみゃく 〔橈骨動脈〕（名）【醫】前膊動脈の一枝。肘關節窩に起こり、下走して手背に達するもの。

だうこ-にち 〔道虚日〕（名）陰陽家にて出行に忌むといふ日。即ち、毎月の六日・十二日・十八日・二十四日・晦日。道虚。東鑑廿八文治元年「道虚日被用吉事「例」平家九三草六日は道虚日」運歩色葉「道虚日六日十二日十八日廿四日晦日」

だうこ-のばら （名）でこのばらに同じ。堆草下糞千句「石白に何やら入れてまはすらんの句。だうこのばらはとまかなるべし」

たう-ごばら 〔唐牛蒡〕（名）【植】やまごばら（商陸）の異名。

たう-ごま 唐獨樂（名）獨樂の一種。竹筒の上下をふさぎ、横に孔を穿ち、中央に軸を貫き、これに絲を纏ひて廻はせば音を發す。鎖山井「たうごまの花のうなるやあやの聲」和蘭雅「空鐘（ヴィヴィ）」空鐘。

だう-ごもり 堂籠（名）寺の堂に參籠すること。猿蓑「春の夜は誰れか初瀬のだうごもり」

たう-こん 〔刀痕〕（名）かたなきずのあと。刀瘡。宋史韓世忠「刀痕箭鏃、如剉雪然」

たう-こん 〔當今〕いまの時。いま。只今。現今。現時。如今。目今。左傳「當今吾不能與晉爭」史記「當今諸侯無異心」

たう-さ 〔蹈査〕實地を踏みて調査すること。

たう-ざ 〔當座〕（名）一その座。その席。その場。平家「當座の公卿、皆長方の儀に同ずと申しあはれけれども」庭訓往來「執筆發句賦物以下、才覺未練之間、當座定可及赤面」歟、聊可有用意」之由承候訖」二すぐそのば。即座。盛衰記「「當座」叡慮に堪へさせ給はず、遷任を下さるるの上、當座に刑部卿になされ、内の昇殿を聽さる」狂言「當今、相手を切り殺し、其の身も當座に相果て申され候」三其の時かぎり。又、暫時の間。當分。さしあたり。狂言「當座の笑ひ草に成されて下されい」同「千鳥」足下の左樣仰せられうと存じ、當座の代りは持って參った」四其の座にて出だす歌などの題。又、其の題にてよみたる和歌など。即席の詠吟。「後題の對」光經集「建保七年二月十一日、内裏當座の歌合せに」著聞「順德院御位の時、當座の歌合せ有りけり」臨野「何とて御當座などをも遊ばされ候はぬぞ」五たうざよきん・當座預金の略。

たう-ざ-あづかり 當座預（名）あづかり主の側より見たる當座預金の稱。貯蓄銀行條例「銀行に於て新に一口五圓未滿の金額を定期預り若は當座預りとして引受るとき」

たうざ-あづけ 當座預（名）あづけ主の側より見たる當座預金の稱。明治二十七年法律第十六號「政府は當座預又は定期預として日本銀行に預け入るることを得」

たうざ-あづけきん 當座預金（名）【商】前條に同じ。

たう-さい 〔當歳〕（名）生まれたる其の年。

たう-さい 〔倒載〕さかしまに載すること。前後の差別なく載すること。禮記「「倒載干戈、包之以虎皮」」晉書「日夕倒載歸、酩酊無所知」

たう-ざい 〔盜罪〕（名）竊盜罪と强盜罪との總稱。盜犯。

たうさい-ご 當歳兒（名）其の年に生まれたる子供。當歳なる嬰兒。松風村雨東帶鑑「「當歳子の若宮、魚類にて育て申し、萬一の事候はば」

たう-さく 對策（名）たいさく（對策）に同じ。宇津保藤原「家・かまどなくして便りなからん人、道ごとにおきては、しきじにも入り、たうさくし、及第し、學問料たまはり」

たう-さく 〔唐瘡〕（名）たうがさ（唐瘡）に同じ。運歩色葉「唐瘡（タウガサ）」

たう-ざく 〔盜賊〕（名）盜罪によりて得たる贓物。舊刑法第三百五十五條「盜犯を防止し又は盜賊を取還するに出たる時」

たうざ-うり 當座賣（名）當座に賣ること。即座に賣れたること。綫留「買ひ寄る人逢萊の山をなし、一日五十兩餘りが當座賣り」

たうざ-かし 當座貸（名）當座の間だけ貸しおくこと。

たうざ-かしこし 當座貸越（英 Overdrawn account）（名）【商】銀行が當座預金の取引ある者と約定して、其の預金の盡くるに拘はらず、一定の金額に達するまで其の者の振り出したる小切手の支拂をなし、其の者をして隨意の時に返金せしむるもの。此の貸金の利子は普通の貸附金の利子より高きを例とす。當座預金貸越。臺灣銀行法第五條「當座貸越勘定」

たうざ-かしつけ 當座貸附（英 Call loan）（名）【商】銀行にて取り扱ふ貸附の一。貸附期限の定めなきもの。（定期貸附の對）

たうざ-かひ 當座買（名）當座の入用だけを買ひ調ふること。二代男「夜は當座買ひの蠟燭、茶も人並に詰めねばならず」膝栗毛「春き米の當座買ひ」

たうざ-かり 當座借（名）當座の間だけ借りおくこと。新永代藏「大商人に何卒慇懃に仕掛けて、金銀の當座借りに事缺かぬ樣にすべし」

たうざ-かりこし 當座借越（名）當座貸越を、當座預金のあづけ主の側より見ての稱。

たうざ-かんぢゃう 〔當座勘定〕（英 Current account）（名）【簿記】當座預金及び其の利子を整理する勘定。其の貸方には預金、其の借方には引出金を記入す。

たう-さく 〔討索〕（名）討尋。

たうざ-くみあひ 當座組合（英 Temporary association. 獨 Gelegenheitsgesellschaft）（名）【商】數人が共通の計算を以て一時簡單の商行爲をなすことを目的とする組合。

たうざくみあひ-けいやく 當座組合契約（英 Contract of temporary association. 獨 Vertrag des vorübergehenden Vereins）（名）當座組合を組織する契約。

たう-さげ 唐豇（名）【植】いんげんまめ（菜豆）の異名。

たうざ-さばき 當座捌（名）後後は兎もあれ、當座のよきやうに取りさばくこと。當座の言ひ譯。一時のがれ。五人女「何心なく當座捌きに語りける」

たうざ-しのぎ 當座凌（名）當座のやりくり。其の時の間にあはせ。

たうざ-ちゃう 〔當座帳〕（名）種種の事項を其の發生順に記入して、仕譯せざる帳簿。附込帳。

たうざ-のがれ 當座逃（名）當座だけ責任を免れんとすること。一寸逃れ。綫留「貧者になって、當座のがれに質を置き」

たうざ-まかなひ 當座賄（名）當座だけを、甚だしき不都合なきやうに取りまかなふこと。當座凌の活計。心中刃氷期日「當座賄ひに、金取り、だましの空誓文か」

たうざ-ざや 〔唐紗綾〕（名）もんざや（紋紗綾に同じ。黄金產業袋「唐紗綾花紋ざやの事也」

たうざ-やき 當座燒（名）すぐ其の場にて燒くこと。即座に燒くこと。若風俗「松茸を狩る中國松烟らせて、當座燒に柚酢のかをり」

たうざ-よきん 〔當座預金〕（英 Current deposit）（名）【商】預金の一。期限を定めず、何時にても預主の請求に應じて支拂ふもの。たうざあづけきん。

たうざよきん-かしこし 當座預金貸越（名）【商】たうざかしこし（當座貸越）に同じ。

たうざよきん-かよひちゃう 當座預金通帳（名）當座預金の出入を證明する帳簿。

たうざよきん-もとちゃう 當座預金元帳（名）當座預金者の名を口座として、其の人の預金に關する勘定を整理する帳簿。

たう-ざる 唐猿（名）【動】をながざる（尾長猿）の異名。

たう-さん 〔當參〕（名）參り著くこと。參著したるばかりなること。又、その人。東鑑「九月廿九日「所參從之軍兵、當參已一萬七千餘騎也」」太平記「義助參、當參の一族、並びに相順へる兵共に至るまで」謠「當參の人人も、訴訟あらば申すべし」

たう-さん 〔蕩產〕財產を蕩盡すること。倒產。破產。皇室典範「皇族蕩產の所行あるとき」

たう-さん 〔倒產〕一さかさま。逆產。二前條に同じ。

たう-さん 〔逃散〕一にげちること。唐書「黄巢之亂、樂工逃散」二武家時代、多數の平民が申し合はせて逃亡すること。貞永式目「百姓逃散時、稱逃毀」」「損亡事」例書「「出奔人」」逃散之事。御取箇筋其外諸拜借等之義、總而百姓之心に不任義有之」之、其の村中亦者貳箇村三箇村」」申合、田畑・家・屋敷を捨て、其處を立ち退き候を逃散と相唱ふ、勿論逃散者、妻子を連れ立ち退き候を逃散と云ふ」

たう-ざん 〔唐棧〕（名）舶來の棧留織（ハジリ）。唐棧織。

たう-ざん 〔唐山〕（名）もろこし。から。唐土。支那。

たう-ざん 〔當山〕（名）一この山。二この寺。當寺。謠「「さても當山に於いて花見の由、承り及び候間」」運歩色葉「當山」三たうざんは當山派の略。又、たうざんしゅう（當山衆）の略。御當家令條「「修驗道之事。從先規、如有來、諸國之山伏例」」筋目可致入峯、當山本山各別之儀候條、諸役等互不可混亂」

たう-ざん 〔刀山〕（名）佛語。地獄にありといふ刀をうゑたる山。つるぎの山。たうせん。太平記「「地獄軍」」其の有樣偏へに八大地獄の罪人の、刀山・劍樹につらぬかれ、猛火・鐵湯に身を焦がすらんも、かくやと被思知たり」

たう-ざん 〔逃竄〕のがれ竄（カク）すること。にげて姿をかくすこと。魏志「「田疇」」嘯負義逃竄之人耳、蒙恩全活、蕩幸多矣」

だう-さんじ 〔道參事〕（名）道長官の諮問に應ずる名譽職。道の管轄内に居住して學識・名望あるものの中より朝鮮總督の認可を受けて道長官の命ずるもの。

たうざん-じま 唐棧縞（名）たうざん（唐棧）に同じ。

たうざん-しゅう 〔當山衆〕（名）佛語。當山派の山伏衆。即ち、眞言宗の山伏にて山城國宇治郡醍醐寺三寶院に屬するものの稱。（本山衆の對）醍醐寺

たうざん-しゅげん 〔當山修驗〕（名）しゅげんだう（修驗道）を見よ。

たうざんとめ 〔唐棧留〕（名）たうざん（唐棧）に同じ。

たうざん-は 〔當山派〕（名）修驗道の一派。眞言宗の僧聖寶を祖とし、山城國宇治郡醍醐寺三寶院を本山となすもの。木葉衣「小「聖護院御門下の山伏衆、これ

を本山派と云ひ、三寶院御末派なるを當山派と唱ふ。當山とは本來大峰を指して云ふ。寺社規刑集寺社、本山「本山派・當山派者、右之順に而宜候」

たうさんぼん 〔唐三盆〕（名）舶來の三盆。

たうし 〔島司〕（名）地方官の一。島嶋に長たるもの。知事の指揮・監督を承けて其の管轄區域内の行政事務を掌理する等の職務ある奏任官。地方官官制第四十四條「島司」

たうし 〔當司〕（名）現在の司。

たうし 〔悼詞〕（名）人の死亡を悼み弔ふ詞。弔辭。弔詞。

たうし 〔唐詩〕（名）一支那、唐時代の詩。二支那の韻文の總稱。からうた。漢詩。

たうし 〔唐紙〕（名）支那製の紙。竹と楮の皮とを煮て漉きたるもの。質濃(ジヤウ)にして厚く、裂け易し。其の淺黃赤色なるを上品とし、白くして堅きを下品とす。著聞集「讃を白唐紙二枚に書きたり」

〔語「唐紙(カラ)」・「唐紙(トウし)」、假名で書け〕の紛れ易きものは假字にて記せ。

たうし 〔刀子〕（名）かたな。短刀。木工寮式「五寸刀子一枚料、鐵五兩四分、十已下一兩」同「一尺刀子一枚料、鐵十一兩」令書生漢得一利刀子、足以殺人」

たうし 〔蕩子〕（名）一放蕩なる子。放蕩むすこ。二放蕩に耽ける人。遊冶郎。古詩「昔爲倡家女、今爲蕩子婦」

たうし 〔桃枝〕（名）ももの小えだ。梁書虎皮毗「策桃枝杖」

たうし 〔綯絲〕（名）よりたる絲。よりいと。

たうし 〔禱祀〕いのりまつること。史記封禪書「冬塞禱祀」

たうし 〔倒死〕路傍などに倒れて死すること。ゆきだふれ。のたれじに。

たうし 〔盜視〕盜み視ること。人知れぬやうに窺き視ること。

たうし 〔讜聾〕（名）たうし(蕩子)に同じ。

たうし 〔蕩兒〕（名）たうし(蕩子)に同じ。

たうじ 〔當寺〕（名）この寺。本寺。當山。盛衰記「彼禪門欲入武士於當寺」謠田村「すなはち當寺の佛力なり」

たうじ 〔當事〕（名）直接に其の事件に關係すること。儀禮「佐食當事則戶外南西」

たうじ 〔當時〕一この時。ただいま。當今。現時。源東雲「當時の帝しか惠み申し給ふなれば」宇治拾遺「何事も申せ、當時寒げなり、此の衣きよ」二その頃。その時。そのかみ。蘇洵文「上田樞密書」「當者見執事於益州、當時之文、淺狹可笑」

たうし 〔當士〕（名）道教を修行する人。郭璞詩「青谿千餘仞、中有一道士」

たうし 〔道志〕（名）古昔、大學の明法道を卒業し、左右衛門の志(ココロザシ)に任じて檢非違使の志を兼帶するもの。朝野群載「改氏姓任道志者明法博士資清是也」

〔參考節用「道志(ココロザシ)」明法道(ミチノリ)博士(ハカセ)六位(ロクヰ)時、任之(ニンズル)〕

たうし 〔導師〕（名）一佛語。衆生を說きて佛道に導き入るる僧。所問經「何名導師、文殊答云、住是道、已能令衆生得成熟、故名導師」二供養・法會の時、首班となりて事を行ふ僧侶。三代實錄「天貞觀三年、近來奉修理東大寺大毗盧遮那佛、工夫既成、中略令導師具演事由」古今集「正月廿一日、しもつやつづも寺に人の集しける日、眞西法師の導師にいへりける詞を歌によみて」宇津保「俊蔭「歳の果ての御讀經中略導師の前の物、まんどころいそぐ人人多かり」枕「御佛名のそやの御導師聞きて出づる人は」三佛事にて、法儀の主となり、引導を渡す僧。

だうし 〔瞠視〕目を見張りて視つむること。瞠目。

たうしうにぶやく 〔島收入役〕（名）島吏員の一。島の收入を受領し、其の費用の支拂をなし、其の他會計事務を掌るもの。

たうじき 〔當色〕（名）一陰陽家にて當年の生氣の方、即ち吉方(ヨホウ)に夫れ夫れ配當したる色の稱。二位階相當の色。即ち、一位は深紫、二位・三位は淺紫の類。位色。推古紀「當色袍」「庭訓往來八月「家文當色等色色狂文、盡色節」」三禁中に公事ある時、其の役を勤むる者に公よりわりあてて賜はる裝束。紫式部日記「宮の下部、綠のきぬの上に、白きたうじき著て御湯參る」飾抄「下侍人、小忌、仁平元年十一廿五祕記曰、臨時祭舞人陸奥少將宵摺私訓之、當色類紙不合期、故也」四武家にて白張著たる中間の稱。

たうじき 〔陶器〕（名）陶器と磁器と。やきもの。すゑもの。

たうじこく 〔當事國〕（名）直接に其の事件に關係する國。

たうじしゃ 〔當事者〕（名）直接に其の事件に關係するもの。民法「第三十八條、條件附法律行爲の各當事者」

たうし-せん 〔當四錢〕（名）其の一箇が當時の通用錢四文にあたりたる錢。即ち、寶永當四錢・文久當四錢の類。四當錢。四文錢。草茅危言「怪しきは見行の當四錢也。是れは今迄曾て無かりしを、明和中始鑄なれば其の年號を用ひらるべきに、やはり寶永也」貨幣通考「當四錢以一分錢(寶六貫六百八十文、寶六貫七百四十三文)」

たうしつ 〔刀室〕（名）刀の鞘。さや。たちざや。

たうじつ 〔當日〕（名）その事のある日。又、其の事のありたる日。その日。運歩色葉考「當日」陸游詩「惟有樂城詞、哀怨如當日」

たうじつ 〔桃實〕（名）桃の實。謠明「君、桃實をきこし召さば」

たうしつ 〔蹈襲〕其の通りうけつぐこと。其の通りまねること。韓愈文「蹈襲前人言句」

たうしつ 〔討襲〕不意に襲ひ討つこと。劉希夷詩「古來奏甲兵、有事常討襲」

たうじつ-せん 〔當十錢〕（名）其の一箇が當時の通用錢十文にあたりたる錢。即ち、寶永通寶の類。草茅危言「寶永中の當十錢は量に中たらざりし故やがて廢したれども中略寶永通寶の文は正を得たり」

だうじゃけ 〔堂島下馬〕（名）桑は桐のくり齒に、鐵錢を以て表を打ち附けたる下駄。表なきものもあり。

たうしゃ 〔當社〕（名）一この會社。二この神社。謠加茂「當社の御神體とも御神物とも、唯此の御矢の御事なり」

だうしゃ 〔堂舍〕（名）大なる家と小なる家と。又、堂屋。太平記十七「堂舍・佛閣に火を懸けて、一字も不殘燒き拂ひ」

だうしゃ 〔道者〕（名）一道教を修めたる者。道士。道人。劉得仁詩「石路特來尋道者、雲房空見有仙經」二打ち連れて神社・佛閣に參詣する旅人。道衆。廻國。著聞「彼の河の橋を道者渡るとて、南無大慈三所權現と、上下踏人稱へ奉る聲を聞きて」義經記「吉野山「寺中には道者多き時節。傾城反魂香「道者時分で見世は忙し、洗濯物はつかへる」

だうしゃ 〔導者〕（名）案内者。手引。

だうしゃ 〔導車〕（名）機械に裝置したる他の多くの車輪に動力を與ふる車輪。

たうしゃう 〔堂上〕（名）一古昔、昇殿を許されたる四位以上の公卿の稱。（地下の對）二轉じて、後世、汎く公卿の稱。

たうしゃう 〔當省〕（名）この省。本省。

たうしゃう 〔唐商〕（名）からの商人。支那の商人。

たうしゃう 〔刀匠〕（名）刀鍛冶。刀工。北史「路遺二刀劍、悅取視之、乃召州內刀匠示之」

たうしゃう 〔刀傷〕（名）かたなのきりきず。かたなきず。刃傷。

たうしゃう 〔湯傷〕（名）熱湯を浴びて、皮膚の爛るること。やけどすること。

たうじゃう 〔黨情〕（名）黨の事情。黨派の內情。

たうじゃう 〔盜情〕（名）人の物を盜まんとする心。盜心。

だうじゃう 〔堂上〕（名）堂の上。太平記「五月廿日、當今奉公の人人は皆一時に望みを達して、門前市を成し堂上花の如し」禮記「曲禮、堂上不趨」孟子「離婁、王上坐於堂上、有乘車而過堂下者」戰國策「言於章俎之間、謀成於堂上」

だうじゃう 〔道上〕（名）みちのうへ。みちのへ。みちなか。途上。路上。劉憲詩「東郊道上轉青旂」

たうじゃう-がた 〔堂上方〕（名）堂上の御方。くげしゆう。くものうへびと。たうしやうにん。

たうしゃう-け 〔堂上家〕（名）くげ(公家)に同じ。

たうしゃう-しゅう 〔堂上衆〕（名）くげしゆう(公家衆)に同じ。

たうしゃう-ぞく 〔唐裝束〕（名）唐樂・高麗樂の如き外國傳來の舞樂に用ふる裝束。常裝束と別裝束とに分かつ。常裝束とは鳥甲・半臂・下襲・表袴・赤大口・忠緒・石帶・襪・絲鞋・靴掛・末廣等の一具したるものをいひ、別裝束とは胡飲酒・秦王・玉樹等の裝束の如く其の一曲に限りて用ふるものをいふ。かさねしやうぞく。讃歌訓抄「唐裝束、ここには襲裝束と云ふ。左右の色はかはれども具足の數同じ事也。鞋・半臂(同略)・下襲・表袴・下袴(大口也)・紅單衣(蹴鞠云)・帶(袋)・甲(石)・蹈(懸)・襪・絲鞋・沓、此の委之時は折烏帽子をきて引き立て、樂屋等には著するなり」

たうしゃう-にん 〔堂上人〕（名）たうしやうがた(堂上方)に同じ。

たうしゃうばい 〔唐商賣〕（名）唐物の商賣。博多小女郎波枕「斯う申す某は長崎者九右衛門と申して、そっと致いた唐商賣」

たうし-しゅうぶ 〔植〕（名）【植】蒔尾(バサ)科に屬する多年生草本。葉は劍狀にて、春季、球形をなせる地下莖より生ず。夏季、葉間に花莖を抽くこと二三尺、上部に多數の花を總狀に開く。花色は通常淡紅なれども、種種異品あり。船載せるものにして、觀賞用として栽培せらる。

だうしゃく 〔瞠若〕驚きて瞠視するさま、又、あっけにとられたるさまにいふ語。莊子「田子方、夫子步亦步、趨亦趨、夫子奔逸絕塵、而回瞠若乎其後矣」

たうしゅ 〔當主〕（名）當代の戶主。當代の主人。明治二十二年二月法律第三號衆議院議員選擧法「第十六條「華族の當主」

たうしゅ 〔黨首〕（名）黨の首領。黨の首領。

たうしゅ 〔盜取〕一ぬすみとること。二法他人の所持する財物を、其の意に反して不法に自己の所持に移すこと。

たうしゅ 〔桃樹〕（名）ももの木。拾遺記「山上有桃樹百圍」

たうじゅ 〔陶鑄〕一陶器をやくことと金物を鑄ることと。二轉じて、德を以て人を感化すること。陶化。陶冶。莊子「逍遙遊「是其塵垢粃糠、將猶陶鑄堯舜者也」

たうしゅう 〔堂衆〕（名）延曆寺の三塔に結番して花を奉る役。また興福寺・園城寺にも此の職あり。盛衰記「九「抑堂衆と申すは、本學匠召し仕ひける童部の法師になりけるを、若しは中間法師などにて有りけるが、金剛蕊院の座主覺尊僧正御治山の時より三塔に結番して、夏衆と號して、佛に花奉りし輩なり。近來行人とて山門の惑に募り、切物・奇物賣めはたり出舉人に借し散らして、德付き・公名付きなどして、以ての外に過分になり」

だうしゅう 〔同〕（名）【同十五字「廿人の堂衆等も讓かざりける其の中に」】

だうしゅう 〔道衆〕（名）道者だち。順禮衆。

だうじゅつ 〔道術〕（名）道教にて修する術。道家の行ふ術。史記「相從論議、師「島先王聖人之道術、究徧人情」

たうしゅの-とみ 〔陶朱富〕（句）古代、支那、越國の大夫范蠡、官を退き陶の地にありて朱公と稱し、富み巨萬を累ねたるより、大金持ちに譬へていふ。

だうしゅん-てん 〔道春點〕（名）林道春の用ひたる漢文の訓點。其の訓み方、舊點に基き、最も國文に近きもの。

たうしょ 〔島嶼〕（名）しまと小じまと。しま。太平記「廿九、蠡是島嶼居民、不懼官法、專務貪婪、書「地出海劫奪」江總文「望島嶼之還回」」

たうしょ 〔當初〕（名）はじめ。しょて。そのかみ。最初。水經「注「蠡當初山水淸豐、漂積于斯」」

たうしょ 〔當所・當處〕（名）一このところ。現在の場所。當地。太平記「六、蠡「先日當所の敵を、無事故追ひ落として候ひつるを一面目にして、御上洛候へかし」謠「何れも何れも當所の名物なり」」楊嚴經「心精通潤、當處湛然」二取引所の語。當取引所の略。「當所の株百枚」三取引所の語。たうしょかぶ(當所株)の略。「當所が高い」

たうしょ 〔到處〕（名）いたるところ。杜甫詩「殘杯與冷炙、到處潛悲辛」高適詩「江山到處堪、乘興、楊柳青青那足悲」

だうしょ 〔道書〕（名）道教の教義を說きたる書物。又、道教の教義を記せる書籍。用明天皇職人鑑「道書にも、呂洞

賓が袖の中の青蛇を抛つて黄龍に乗ぜしは、身の中の蓬萊山を唯心の淨土とあらはしたり」魏志「造作道書、以惑百姓」

たう-しょうもん 〔名〕 **當證文** 一この證文。地方凡例錄七「帳別」二其の年限り元拂ひの證文。地方凡例錄二「當證文」

たう-しょく 〔名〕 **當職** 一この職業。現在の職業。運歩色葉「當職」二其の務めに當たる職。現在の職務。この職。平家五「文覺」「安藤武者右宗、其の時の當職の武者所にて有りけるが」盛衰記四「都合「前官・當職の公卿・殿上人、十が八九は藤氏として春日大明神の氏人也」三室町時代、現任の管領の稱。

たう-しょく 〔名〕 **當職** 一この職業。現在の職業。運歩色葉「當職」二其の務めに當たる職。現在の職務。この職。平家五「文覺」「安藤武者右宗、其の時の當職の武者所にて有りけるが」盛衰記四「都合「前官・當職の公卿・殿上人、十が八九は藤氏として春日大明神の氏人也」三室町時代、現任の管領の稱。

たう-しょくば 〔名〕 **當所株** 取引所の語。この取引所の發行したる株券。

たう-しょさき 〔名〕 **島書記** 島吏員の一。島長の命令を承けて庶務に從事するもの。

たう-しょばらひ-かはせてがた 〔名〕 **當所拂爲替手形** 〔商〕取立手形の一。銀行所在地にて支拂はるるもの。

たう-しょばらひ-てがた 〔名〕 **當所拂手形** 〔商〕其の支拂地が支拂人の住所又は營業所なる爲替手形。當所拂手形。當地拂手形。(他所拂爲替手形の對)

たう-しょばらひ-てがた 〔名〕 **當所拂手形** 〔商〕前條に同じ。(他所拂手形の對)

たう-しょ-わりびき-てがた 〔名〕 **當所割引手形** 〔商〕其の割引をなす銀行の所在地を支拂地となす手形。(他所割引手形の對)

たう-しん 〔名〕 **刀身** かたなの中身。

たう-しん 〔名〕 **盜心** ぬすみ心。どろぼう根性。

たう-しん 〔名〕 **蕩心** 一心をとろかすこと。本心を錯亂せしむること。二しまりなき心。しだらなき心。三放蕩にふける心。

たう-じん 〔名〕 **刀刃** かたなのは。莊子「養生」庖丁爲文惠君「解」牛中略今臣之刀十九年矣、所解數千牛矣、而刀刃若新發于硎」元稹詩「耀燿刀刃光」

たう-じん 〔名〕 **島人** 島の住人。しまびと。

たう-じん 〔名〕 **唐人** 一唐土の人。支那人。からびと。持統紀「唐人奏蹈歌」「著聞」或る處に佛事有りけるに、唐人二人來たりて聽聞しけるに」二外國人。異國人。三物の道理のわからぬ人を罵りていふ語。

(諺)**唐人の川止に逢ったやう** わからぬことをつぶやく譬へにいふ語。

(諺)**唐人のねごと** わからぬ言語、又はつまらぬ理窟をくどくどしく並ぶるを嘲りていふ語。大鏡冠「唐人の嫁言いふ夢を覺ましくれん」千紅萬紫「三不惑と口ぎれいなるたうじんのねごとも心もとなし」

(諺)**唐人のまうし子** わからぬ事を言ふ人の譬へ。

たう-じん 〔名〕 **陶人** 燒物師。陶工。周禮考工記「陶人爲甗」

たう-じん 〔名〕 **黨人** 一仲間の人。くみのもの。後漢書黨錮傳「二家賓客互相譏揣、由是甘陵有南北部、黨人之議由此始矣」二黨派に屬する人。黨員。

たう-じん 〔名〕 **盜人** ぬすびと。盜賊。盜。運歩色葉「盜人」諺安「笈に目をかけ給ふは、盜人さぶな」

たう-じん 〔名〕 **蕩盡** 一つかひはたすこと。費やしつくすこと。二やぶれつくること。すたれうすること。

たう-じん 〔名〕 **討尋** 尋ね究むること。討究。討窮。

だう-しん 〔名〕 **道心** 一事の善惡。邪正を識別して正善につく意識。道德的の意識。二私塾に藏はれざる天賦の心。本心。良能。良心。書經大禹「人心惟危、道心惟微」三佛語。佛道に歸依する心。佛果を得んとする心。菩提心。枕三「貴き事、道心多かりとて、說經すといふ所に、さいそにいきぬる人」同三「蟲はぬかづき蟲また哀れ也。さる心に道心おこして、つきありくらん」源浮寸「この人の餘り道心にすすみて山寺にんとさへ、ともすればとまり給ふなる」四佛語。十三歳若しくは十五歳以上にて佛道に入りたる人。狂言「鬼」「俄かに斯樣に、道心に成って御座る」

だう-じん 〔名〕 **道人** 一佛門に入りて得道したる人。智度論「得道者、名曰道人」二道教を修めたる人。道教に入りたる人。道士。漢書地理「道人縣。注本有仙人遊、其地、因名」三俗事を棄てたる人の自稱。

たうじん-いかり 〔名〕 **唐人碇** 瓜(ウリ)の二本ある木碇(キイカ)。

たうじん-うた 〔名〕 **唐人歌** 明暦の頃、流行したる小唄。卜養狂歌集「その比世にはやる唐人うたとて、のんせんふらんらん鬱のなさけなやといふ事を唄ひけるに」松の葉「唐人歌。かんふらんはるたいてんよ、長崎さくらんじゃばちりこていみんよでんれきえきいきいはんはうろうふすをれえんらんす」

たうじん-がくし 〔名〕 **唐人隱** 碁石にてなす遊戯の一種。(柳亭記)

たうじん-がさ 〔名〕 **唐人笠** 冑の一種。筋あり、總えんまはりに鏢を附け、內目廂繪の如きもの。大阪軍記「將軍は伏見より御立ち、山鳥の尾の御羽織、羅紗の唐人笠の御甲」

たうじん-かづら 〔名〕 **唐人蔓** 【植】一おほやまはこべの異名。二つるはこべをいふ。紀伊國の方言。(俚言集覽)三なんばんはこべ(狗筋蔓)の異名。

たうじん-ことば 〔名〕 **唐人詞** 唐人のことば。支那人の語。分からぬ語。國姓爺(浄瑠璃)「是れ男、唐人詞聞きたうない」

たうじん-じゃ 〔名〕 **道心者** 佛門に歸依したる人。佛教の信心者。大鏡「年ごろきはめたる道心者にぞおはしける」徒然草「誠に有り難き道心者なりとぞ、人申しける」

たうじん-でん 〔名〕 **唐人田** 雜色田の一。王朝時代、歸化の唐人に授けたる田地。政事要略「唐人田、信濃國、二町四段」

たうじん-ぶえ 〔名〕 **唐人笛** 一種の笛。ちゃるめら。らっぱ。

たうじん-ぶね 〔名〕 **唐人船** 唐人の乘りたる船。外國人の船。

たうじん-まげ 〔名〕 **唐人髷** 少女の髪の結ひ方の一。髷の中間を穗(ホウス)形に、毛にてかがりて結びたるもの。

たうじん-まめ 〔名〕 **唐人豆** 【植】一かいこうず(海紅豆)の異名。二なんきんまめ(落花生)の異名。

だうしん-もの 〔名〕 **道心者** 道心者(だうしんじゃ)に同じ。悔狩(國本地)「時によっては鼠袋に頭陀袋、道心者ともあらはるる」

たうじん-らん 〔名〕 **唐人蘭** 【植】はくろの異名。

たうじん-りう 〔名〕 **唐人流** 唐人の風。支那の流儀。天神記「唐人流の料理人を呼び寄せ」

たうじん-をどり 〔名〕 **唐人踊** 昔時、流行したる一種の踊。支那人の踊に擬したるもの。二代男「禿の金作に唐人踊をさせしより」甲子夜話「一、唐人踊之儀、此の度嚴敷く停止被仰付候に付、子供に至る迄、かんかんをどり歌抔決して申す間敷く候、且辻商人・飴賣・壹枚摺繪草子抔にも、右唐人踊ひにうた抔持ち流行候者有之ば、其の所留置、町所聞き糺し、早早可訴出候事」

たう-す 〔名〕 **刀子** 運歩色葉「刀子(スカ)」

たう-す 〔名〕 **たうし(刀子)** に同じ。

たう-す 〔自動〕 **黨** 一なかまいりをなす。くみす。二おもねりつく。阿附す。三かたよる。偏す。論語「君子不黨」四互ひに助けあひて非を愿す。かばひあふ。

たう-ず 〔他動〕 **討** うつ。せむ。のぞく。殺す。征討す。誅伐す。書經「天討有罪」

たう-ず 〔他動〕 **湯** 熱湯にて茶碗をあたたむ。

だう-す 〔名〕 **堂司** **堂主** 佛語。禪宗の僧職。掃除を掌るもの。庭訓往來十月「堂主。掃除餘役」尺素往來「堂主」

たう-すぎ 〔名〕 **唐杉** 【植】松杉科、杉屬の常綠喬木。杉の一品種。支那産のもの。庭木となす。ひめすぎ。やはらすぎ。

たう-すず 〔名〕 **唐錫** しやりに同じ。

たう-ずみ 〔名〕 **唐墨** たうぼく(唐墨)に同じ。

たう-せ 〔名〕 **當世** 矢條に同じ。

たう-せい 〔名〕 **當世** 一當時の世の中。今の世。今世。運歩色葉「當世(タウセイ)」慶筑波「當世(向かぬ昔の人心」三代男「當世のはやり歌」戰國策「眞可以說當世之君矣」史記「當世」非當世、憂亂齡首」二たうせいふう(當世風)の略。狂言「大むかし中むかし・當風といふて三段おぢやるが、どれを習やるぞ。されば、大むかしも高尊にござらうず。さりながら、たうせいも若うござらう」

たう-せい 〔名〕 **黨勢** 黨派の勢力。

たう-せい 〔名〕 **濤聲** なみのおと。

たう-せい 〔名〕 **倒生** 倒さに生ふること。

たう-せい 〔名〕 **陶製** 燒物にて造ること。又、燒物にて造りたるもの。

たう-せい 〔名〕 **蹈青** 春の野に出でて、青草を蹈むこと。春の散歩。歲華紀麗譜「二月二日蹈青節、初都人游賞、散在四郊、張公詠以爲、不若樂之爲樂。乃以是日出萬里橋、爲綵舫數十艘、與賓僚分乘之、鼓吹前導、後遂爲故事」劉禹錫詩「昭君坊中多女伴、永安宮外蹈青來」

たうせい-うた 〔名〕 **當世歌** 當世風の歌。當世流行の歌。三代男「殊更の時雨物淋びしく、當世歌のせて更け行く月を惜しみ」

たうせい-がほ 〔名〕 **當世顏** 當世の人のすく相附。一代女「年は十五より十八まで、たうせいがほは少し劣る」

たうせいしたて 〔名〕 **當世仕立** 當世風に仕立つること。又、當世流行の仕立て方。一代女「二尺五寸袖の當世仕立に平たく見ゆるを好み」

たうせい-ぶう 〔名〕 **當世風** 一當世のはやりふう。いまやう。二當世風。當世樣。時樣。三當世の風習。

たうせい-むき 〔名〕 **當世向** 當世風に適應すること。時好に適すること。

たうせい-りう 〔名〕 **當世流** 一當世の流行のふう。いまふう。いまやう。二當世風。時樣。三當世の流俗。

たうせい-をとこ 〔名〕 **當世男** 其の態度・風俗の當世向きなる男。一代女「美しげなるたうせいをとこの、とりなりしどけなく、色青ざめて、戀に形をせめられ」

たうせい-をんな 〔名〕 **當世女** 態度・風俗の當世向きなる女。今風の女。五人女「室町通り仕出し衣裳の物好み、當世女のただ中、廣い京にも亦有るべからず」戀八卦柱曆「それは昔の女三の宮、是れはおさんの當世女」

たうせ-ぎ 〔名〕 **陶石** 陶器・磁器の原料となる石。

たう-せき 〔名〕 **黨籍** 黨員の名籍。

たう-せき 〔名〕 **蹈藉** 足下にふみしくこと。司馬相如文「上林」「步騎之所蹈藉」

たう-せき 〔名〕 **悼惜** 悼(イタ)み惜しむこと。哀惜。

たう-せつ 〔名〕 **盜竊** せったう(竊盜)に同じ。禮記「盜竊亂賊而不作」史記「晉世家」「秦長唐老、以盜擊、爲務」

たう-せつ 〔名〕 **當節** この節。今の時節。當今。當時。現時。

だう-せつ 〔名〕 **撓折** まがり折ること。又、ため折ること。後漢書「撓折棟梁、孤」「漢室」

たうせつ-ば 〔名〕 **蹈雪馬** よつじろ(驪)に同じ。和名「四驪皆白曰驪音厘蹈跡也、俗呼爲蹈雪馬」

たう-せん 〔名〕 **唐船** 支那の船。からふね。もろこしぶね。平家「一」「先帝」「入水」「よき武者をば兵船に乘せ、雜人ばらをばたうせんに乘せて」東鑑「廿三、年四月三日」「宋人和卿造畢唐船」

たう-せん 〔名〕 **唐扇** 支那のあふぎ。たららちは。運歩色葉「唐扇」

たう-せん 〔名〕 **當千** 一つにて千に匹敵すること。一つにて同種の千以上に當たるほどの力を備ふること。吉野忠信「當千と頼みをかけし小早川、其の外手廻はり多く討たせ」李陵文「武帝」疲兵再戰、一以當千」

たう-せん 〔名〕 **刀尖** 刀のきっさき。刀鋩。

たう-せん 〔名〕 **刀鋌** 刀と短かき矛。史記「匈奴」「其長兵則弓矢、短兵則刀鋌」

たう-せん 〔名〕 **刀山** 佛語。刀輪地獄の四面に在りといふ山。つるぎの山。たうざん。諸獄「足にたうざん蹈む時は、劍樹共に解す」觀佛三昧經「刀輪地獄者、四面刀山、於衆山間、積刀如瓦、空中有八百萬億極大刀輪、如雨而下」

たう-せん 〔名〕 **當選** 一えらびにあたる

こと。選抜せらるること。唐書高祖劉闢反、宰相杜黙裴潾共才、詔統左右神策麟游奉天諸屯兵討之、時顧功宿將人人自謂當選、及詔出、皆大驚」 ㊁選擧に當たること。衆議院議員選擧法第七十一條第一項「當選人にして當選證書付與前に於て其の當選を辭し中略當選無效となりたるとき」

たうせん 〔當籤〕 籤に當たること。

たうせん 〔逃潛〕 にげ潛むこと。のがれかくること。逃匿。逃竄。斐度文章碑「謀飲冰於仁義、豈逃潛於阻穢」

たうぜん 〔當然〕 副 まさに然るべきこと。まさしく道理に當たること。あたりまへ。

たうぜん 〔陶然〕 副 醉ひごこちのよきさまなどにいふ語。うっとり。陶潛文「抑鼓一觴陶然自樂」

たうぜん 〔蕩然〕 副 ㊀ひろびろとして何もなきさまにいふ語。㊁少しも殘らぬさまにいふ語。「蕩然として地を掃ふ」

たうせん 〔導線〕 名 【理】電流を通ずるために導體を以て造れる線。

だうぜん 〔瞠然〕 副 だうじやく(瞠若)に同じ。管子「瞠然視」劉禹錫文「瞠然「惠深者瞠然若喪、樂神者沖然無違」釋惠洪詩「入門兒女啼饑寒、瞠目瞠然作直視」

たうせんぎゐん 〔當選議員〕 名 當選して議員となりたるもの。貴族院議員資格及選擧爭訟判決規則第三、貴族院令第九條に依り出訴する者は當選議員を被告とすへし」

たうせんく 〔當選區〕 名 其の人の當選したる選擧區。帝國議會議長副議長議員歳費及旅費支給規則第十一條、旅費は當選區の何地に在るを問はず其の住居地より直路の里程を計算して之を支給す」

たうせん-しゃ 〔當選者〕 名 當選せるもの。當選人。

たうせん-しょうしょ 〔當選證書〕 名 選擧の管理者より當選者に交付する證書。衆議院議員選擧法第五十二、當選人當選を承諾したるときは地方長官は直に當選證書を付與し」

たうせん-そしょう 〔當選訴訟〕 名 【法】當選の效力に關して提起する訴訟。衆議院議員選擧法第八十一「選擧訴訟若は當選訴訟」

たうせんだん 〔川楝〕 名 【植】楝(レン)科、楝屬の落葉喬木。楝の一種。小葉、橢圓狀披針形にして、先端銳く尖り全緣なり。果實は大にして橢圓狀球形をなし、味苦し。藥用に供す。くろせんだん。

たうせんだん 〔唐旃檀〕 名 【植】いぬぎり(檜)の異名。

たうせん-にん 〔當選人〕 名 たうせんしゃ(當選者)に同じ。衆議院議員選擧法第七、有效投票の最多數を得たる者を以て當選人とす」同項、前項の當選人にして當選證書付與前に於て其の當選を辭し」

たうせん-ぶぎゃう 〔唐船奉行〕 名 室町幕府の職名。外國の通信及び貿易等を掌りたるもの。からふねぶぎやう。陸涼軒隨筆寛政五年「就渡唐正使并居坐筒條申狀、與伊勢守判之、致披露以後、于唐船奉行飯尾大和守、於殿中渡之」

たうせん-ぶね 〔唐船船〕 名 たうせん(唐船)に同じ。御伽草紙「直ぐに筑紫へ行くたうせんぶねに便船して、蒼海萬里の波路を經て、何處をはかりともなく思ひ給ふ」

たうそ 〔刀俎〕 名 刀とまないたと。太平記「如今人方爲刀俎、我爲魚肉、何辭記本紀「如今人方爲刀俎、我爲魚肉、何辭爲」

たうそう 〔唐僧〕 名 唐代の僧。又、唐土の僧。平治「唐僧來たりて、生身の觀音なりとて拜する事あり」

たうそう 〔逃走〕 にげはしること。のがれはしること。遁走。

だうそう 〔堂僧〕 名 堂內の番僧。砂石集「十三人の僧を、十二人は寺官にさして點心替みける時、一人の僧をば堂僧として點心を食はせず」

たうそう-ざい 〔逃走罪〕 名 【法】既決又は未決の囚徒が逃走したるによりて成立する犯罪。刑法第六章「逃走の罪」

たうそう-しゃ 〔逃走者〕 名 ㊀逃走したる人。刑法第百五條「犯人又は逃走者の親族にして犯人又は逃走者の利益の爲めに犯したるときは之を罰せず」 ㊁逃走罪を犯したる人。

たうそく 〔黨則〕 名 黨の規則。黨規。

たうそく 〔蹈測〕 名 實地を蹈みて測量すること。

たうそく 〔討測〕 名 尋ね測ること。宋書王惠「始居宿於外、討測文典、薛酌傳記、寒暑未更、便卓然可述」

たうぞく 〔黨族〕 名 なかま。くみ。ともがら。黨類。黨與。

たうぞく 〔盜賊〕 名 ぬすびと。どろぼう。盜人。盜。賊。著聞集「盜賊者、刑獄之法中略都鄙不可禁」運歩色葉「盜賊」周禮小宰、六職、五曰、刑職、以詰邦國、以糾萬民、以除盜賊」禮記月令「國多盜賊、邊竟不寧、土地分裂」

(諺)盜賊にも三分の理あり 何事にも相應の理由あり。

(諺)盜賊にも仁義 惡人の中にも、多少、禮儀・人情あること。莊子胠篋「跖之徒問於跖曰、盜亦有道乎。跖曰、何適而無有道邪、夫妄意室中之藏、聖也、入先勇也、出後義也、知可否、智也、分均仁也、五者不備而能成大盜者、天下未之有也」

たうぞく 〔討賊〕 賊を討ずること。賊をせめ討つこと。

だうぞく 〔道俗〕 名 道人と俗人と。僧侶と俗人。僧俗。纂異記「道俗皆集聞之法」後撰集「だうぞくに歌よませ給うけるに」榮華物語「道俗加持の香水をもて、法身の御頂に灑がる」大鏡「入道殿下の御ありさまのすぐれておはします事を道俗男女の御前にて申さんと思ふが」魏書李同「道俗咸以爲善」

たうぞく-かもめ 〔盜賊鷗〕 名 【動】鳥類中、游禽類の一種。體の長さ二尺許り。全身黑褐色、尾は中央甚だ長し。冬季我が國に來たる。

たうぞく-ひかたやく 〔盜賊火方役〕 名 ひつけたうぞくあらため(火附盜賊改)に同じ。柳營秘鑑「一、盜賊火方役二人中略先手より役人」

だうそ-じん 〔道祖神〕 名 さ(へのかみ(障神)に同じ。運歩色葉「道祖神」

たうそよご 〔田植〕 名 【植】しまとべらの異名。

たうた 〔田歌〕 名 たうあうた(田植歌)に同じ。謠川「山郭公聲添て謠ふ田歌も猶繁し」燕村句集「午の貝田歌音なくなりにけり」俳諧新選「春の子も田歌覺えつ少しづつ」

たうた 〔淘汰〕 すぐり去ること。不用のものを除くこと。後漢書黨錮傳「淘汰學者之累惑」

たう-だい 〔當代〕 名 ㊀この時代。いまの世。當世。今世。現代。狂言八尾「當代は人間が利根になり、八宗・九宗に宗體を分け」頓歌加留多「小松殿の御耳に立たであるべきか、此の君は當代の賢人」後漢書黨錮傳「當代以爲榮」 ㊁その時代。その世。 ㊂當時の天皇。當今。源明石「當代の御子は右大臣の御女、承香殿の女御の御はらに」同東屋「たうだいの御かしづき娘を大秦り給へらん人の」榮華日蔭「當代の御爲めにも、いとさまざま哀れに見えさせ給ふ」 ㊃現在のあるじ。當時の戶主。當今の家主。當主。

たう-だい 〔當帝〕 名 現時のみかど。今の天子。當今。狹衣「一條院・當帝などの一つきさい腹」大鏡「六十八代、つぎのみかど・當帝、これ一條院の第二の皇子なり」

だう-だい 〔導體〕 名 【理】でんだうたい(傳導體)に同じ。

たう-だいこん 〔唐大根〕 名 【植】㊀あかだいこん(紅蘿蔔)の異名。 ㊁あかぢさ(火焰菜)の異名。

たう-たう 〔名・副〕 物を輕く打つ音。とんとん。狂言「扇抜き出だし、銚子の長柄をたうたうと打ち」

たう-たう 〔黨黨〕 名 多くの黨。くみくみ。なかまなかま。徒黨。黨類。黨與。東鑑「八月廿六日「相具當國黨黨、可來會一由」

たう-たう 〔蕩蕩〕 副 ㊀廣大なるさまにいふ語。書經湯誥「湯湯洪水方割、蕩蕩懷山襄陵」詩經大雅「蕩蕩上帝、下民之辟」 ㊁たひらかなるさまにいふ語。書經洪範「無偏無黨、王道蕩蕩」

たう-たう 〔滔滔〕 副 ㊀水のひろく盛んに流るるさまにいふ語。曾我十二月廿日「南は蒼海漫漫として、田子の浦波たたうたり」謠天鼓「水滔滔として波悠悠たり」詩經國風「汝水滔滔、行人憔憔」同小雅「滔滔江漢、南國之紀」 ㊁辯舌のよどみなきさまにいふ語。世の中一般なること。論語微子「滔滔者、天下皆是也」

たう-たう 〔瑝瑝〕 名 ㊀鼓などの音にいふ語。虞世基文「振瑝瑝之鐘鏜」鏜鏜。 ㊁波また瀑の音にいふ語。

たう-たう 〔丁丁〕 名 木を伐る音などにいふ語。燕村句集「朝霧や杭打つ音丁丁たり」詩經國風「肅肅鴇羽、施于小棘、伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶」

たう-たう 〔當道〕 名 ㊀この道。自分の學ぶ道。太平記「廿四天皇「中にも荒序は當道の深秘にて、容易離」不レ奏之」庭訓往來十二「如仰當道名醫者、可有奔走也」 ㊁醫家にて、內科の稱。

だう-だう 〔堂堂〕 副 ㊀立派なるさま、雄大なるさま、又、威嚴あるさまにいふ語。太平記十三公家「凡そ事の體、嚴重に見えて堂堂たり」同十三「無爲の德天下に及んで、民皆堂堂の化に訝れり」論語子路「堂堂乎張也、難與爲仁矣」史記孔子世家「安得世世堂堂、方數千里乎」 ㊁毫も包みかくしなきさまにいふ語。

だうだう の ぢん 〔堂堂陣〕 軍容の嚴正にして士氣の振ふ陣。孫子「勿擊堂堂之陣、勿邀正正之旗」黃帝出軍訣「是謂堂堂之陣、整整之旗、此大勝之徵也」

だう-だう 〔嗷嗷〕 副 言葉多くしてかまびすしきさま、又、くどくどしきさまにいふ語。どど。韓愈文「嗷嗷以害其生」

だうだう-めぐり 〔堂堂廻〕 名 ㊀所願のために寺社の堂のまはりをめぐること。 ㊁どうどうめぐりに同じ。

たうた-ちょうかい 〔淘汰懲戒〕 名 【法】懲戒の一。官紀其の他服務上の紀律を紊亂せる者を全く排除するもの。即ち、免官・免職の類。

たう-たう 〔到達〕 いたりつくこと。とどくこと。到著。

たう-たつ 〔逃脫〕 にげいだすこと。ぬけてのがるること。逃逸。

だう-たつ 〔堂達〕 名 佛語。七僧の一。法會・受戒等の時、唄師・散花などの下にありて諸事を司り、願文・呪願文を導師・呪願師に捧ぐる役。庭訓往來十月「已講・堂達」拾芥抄下本「堂達」

たう-たで 〔名〕 【植】㊀おほけたで(蓼草)の異名。 ㊁はるとらのを(紫參)の異名。

たうた-とり 〔田歌鳥〕 名 【動】ほとときす(子規)の異名。爲忠集「早苗取る頃しも小田にをりはへて、うち頻り鳴く田歌鳥かな」

たう-たふ 〔瑝鞳〕 名 ㊀鐘・鼓の音にいふ語。 ㊁波また瀑の音にいふ語。蘇軾文「夜風薄ノ船、瑝鞳有ノ聲」

だう-たふ 〔堂塔〕 名 堂と塔と。東鑑「九月廿三日「所造立堂塔、不知幾千萬宇」」踏歌「長堂塔蹙を並べて夥し」

たう-ち 〔田打〕 名 陰曆三四月頃、耕作し易からしめん爲め、豫じめ田を打つこと。藝衣山歌「雲雀より田打ち、遠し山の上」

たう-ち 〔當地〕 名 この土地。當所。本地。神仙傳「皆四方奇異之物、非當地所有」

たう-ち 〔島地〕 名 しまの土地。しまぐに。しま。

たう-ち 〔倒置〕 名 さかさまにおくこと。逆におくこと。莊子雜篇「失性于俗者、謂之倒置之民」」史記「倒置干戈、復以先皮、以示天下不復用兵」

たう-ぢ 〔湯治〕 名 温泉に浴して病氣を療治すること。中右記「天永三年「予俄病、胸、湯治之間、不行向也」」東鑑「年五十八日「長三、和泉前司行方、此間湯治之與、俄以煩中風所勞」」著聞「壺坂の僧正のもとに、湯治のために忍びて湯の剩限を持ち飯ほど」

たう-ちう 〔陶鑄〕 名 たうや(陶冶)に同じ。

たう-ちう 〔盜鑄〕 名 法を犯して竊かに金錢を鑄造すること。漢書文帝「除盜鑄錢令」」同食貨「禁鑄錢、則錢必重、重則其利深、盜鑄如雲而起」

たうち-がに 〔田打蟹〕 名 【動】しほまねき(望潮)の異名。

たう-ちく 〔名〕 【植】さささく(淡竹藪)の異名。

たうちく-らん 〔萬壽竹〕 名 【植】百合科、萬壽竹屬の草本。莖の高さ二三尺。綠色にして直立し、披針形の葉を互生す。花は淡黃綠色にして紫色を帶ぶ。支那・印度・すまとら・じやば等の產にして、たまたま我が國に栽植せらる。かぐらさう。かぐらささ。ほうちやく。

たう-ぢさ 〔荵菜〕 名 【植】藜科、荵菜屬の二年生草本。莖の高さ三尺餘。葉は

互生、長卵形、往往紫色を帶ぶ。花は小形、黄綠色にして穂狀花序に排列す。葉を食用とす。南部歐羅巴の原産。いつもぐさ。いつもな。ふたばさう。ふだんさう。ふだんな。

たうち-さう (名)【植】つばめおもとの異名。

たうち-しゃ (名)【植】たうちさ(蔡菜)の異名。

たうち-は 湯治場 (名) 湯治する場所。温泉場。

たうちばらひ-てがた 當地拂手形 (名)【商】たうしよばらひはせてがた(當所拂爲替手形)に同じ。(他地拂手形の對)

たう-ちゃ 皐蘆 (名)【植】山茶(ツバキ)科、山茶屬の常綠灌木。概形茶に似たれども、其の幹太く、葉も亦肥大にして厚く、長さ三四寸あり。秋の末、葉腋に白色の花を開く。我が國、山地に自生す。きっかふくわ。

たう-ちゃ 〔唐茶〕 (名) 支那より渡來したる茶。博多小女郎浪枕に「茶だしに唐茶摘まみ込む」

たう-ちゃう 〔唐茶宇〕 (名) こはくおり(琥珀織)を見よ。

たう-ちゃう 〔島廳〕 (名) 地方廳の一。勅命を以て指定する島地に置かるるもの。島司・島廳書記・島廳視學の職員を置く。地方官官制(第四十三條)「島廳」

たう-ちゃう 〔島長〕 (名) 島吏員の一。上司の指揮・監督を承けて島を統轄し、法律・命令若しくは慣例によりて其の行政事務を擔任するもの。沖繩縣開切島吏員規程(第二條)「島長」

たう-ぢゃう 〔刀杖〕 (名) 刀と杖と。

だう-ぢゃう 〔道廳〕 (名) 北海道廳長官が其の事務を取り扱ふ所。北海道廳官制(第十、九條)「道廳」

だう-ぢゃう 〔道場〕 (名) 一佛道を修業する場所。僧尼令「凡僧尼非在寺院、別立道場、聚衆教化者、皆還俗」續紀(天平二年二月十四日)「留止之處、皆是道場」三代實錄(元慶二年正月十日)「平朝臣高棟奏請、別墅在山城國葛野郡、以爲道場、賜額平等寺、詔許之」右京大夫集「おはしましし御方を取りはらひて、だうぢゃうにしつらはれたりしもあはれにて」釋氏要覽「開宴修道之處、謂之道場、隋煬帝勅遍改僧居名道場」白居易詩「紗籠燈下道場前、白日持齋夜坐禪」二佛像を安置し、緇に說教あるのみにて、寺格もなく、住僧も定まらぬ寺院。三武道の稽古所。

だう-ぢゃうくわん 〔道長官〕 (名) 朝鮮の各道に置く最高の地方官府。朝鮮總督に隸して法令を執行し、管内の行政事務を管理し、所屬官吏を指揮・監督するもの。勅任官とし、當分の内は奏任官とすることを得。朝鮮地方官官制(第五條)「道長官」

だうぢゃう-くわん 〔道場觀〕 (名) 佛語。佛道修行の道場にて、己れが所信の佛身を觀ずること。祭華經「雖趍朝廷、雖居私廬、發菩提心、凝道場觀、行住坐臥事三寶、造次顚沛歸一乘」

たうちゃう-しがく 〔島廳視學〕 (名) 島廳の職員。島司の命を承けて學事の視察其の他學事に關する庶務に從事する判任官。當分の中、島廳書記にこれを兼ねしむ。地方官官制(第四十四條)「島廳視學」

たうちゃう-しょき 〔島廳書記〕 (名) 島廳の職員。島司の命を承け庶務に從事する判任官。地方官官制(第四十三條)「島廳書記」

だうぢゃう-まはり 道場廻 (名) 武術修業者の、各地の道場を廻はること。又、其の人。

だうぢゃう-まねり 道場參 (名) だうぢゃう(道場)に參ること。又、其の人。冥途飛脚「阿彌陀笠、道場參り打ち連れしは」

たうちゃう-れい 〔島廳令〕 (名) 島司が法律命令により、又は知事より委任せられたる事件に付きて發する行政命令。此の命令には其の島廳令なることを明記し、島司之に署名し、公布の年月日を記入して同日公布すべきものとす。地方官官制(第四十)「島司は法律命令に依り若くは知事より委任せられたる事件に付島廳令を發することを得」明治二十六年勅令第百九十九號(第一)「島廳令及郡令には中島廳令又は郡令なることを明記し」同(第三)「島廳令及郡令を公布するの方法は北海道廳令又は府縣令の定むる所に依る」

たう-ちゃく 〔到著〕 いたりつくこと。とどくこと。到達。著到。

たうちゃく-じゅん 〔到著順〕 (名) 到著する順番。到著したる順番。

たうちゃく-ねだん 到著値段 (名)【商】うんちんほけんれうこめねだん(運賃保險料込値段)に同じ。

たうちゃく-わたし 到著渡 (名)【商】賣買せる商品が其の地に到著の上にて引き渡さるること。

たう-ちゅう 〔島中〕 (名) 島のうち。島のなか。島内。史記(田敬仲完世家)「與其徒屬五百餘人入海、居島中」

たう-ちゅう 〔撐柱〕 (名) つかへばしら。ささへばしら。つっかひぼう。つっぱり。支柱。

たう-ちゅう 〔條蟲〕 (名)【動】さなだむし(條蟲)に同じ。

たう-ぢゅう 〔當住〕 (名) 一今の住職。現在の住持。現住。運歩色葉「當住(タウジウ)」二今の住人。現在の住民。

だう-ちゅう 〔道中〕 一旅行の途中。旅中。旅上。丹波與作「長の道中、下下が退屈致すべい」享保集成絲綸錄(二年又五年十一月)「道中宿宿に而、敕令觀覽(紹興九年五月)「天下道中立大名衆并在番衆之飛脚之由、假名を申し觸り通り候もの有之由」戰國策「孟嘗君就國於薛、未至百里、民扶老携幼、迎君道中」漢書(王莽傳)「賈舟稍長安、廚給祠具、道中過者皆飲食」二たび。旅行。三遊女が日を定め盛裝して遊廓内をねり歩くこと。又、遊女のねりあるくこと。二代男「藤屋の太夫に、道手右の方に並びて、何時とても道中を大事に懸くる」色道大鑑(寛永)「道中。女郎の歩行のなりふりの見立て也。此の人は、道中よきの惡しきのといふ同也」

だうちゅう-かご 道中駕籠 (名) 昔時、道中の客を載するを目的としたる駕籠。

(謎)道中駕籠や、からかどや、ゆきよりも
どりは安いな　幼き者を背に負ひてかくいひてはやす小兒の遊戯。

だうちゅう-がさ 道中笠 (名) 旅行用の笠。さんど笠など。

だうちゅう-き 〔道中記〕 (名) 一道中の記事。旅行の日記。紀行。二道中の宿場・里程・名所・古跡などを記して旅客の案内となすもの。旅行案内。太祇全集「松陰に見るや扇の道中記」膝栗毛「「駕

の内で、道中記を見てゐさっしやるは」

だうちゅう-ぎ 道中著 (名) 旅行用の衣服。旅行服。

だうちゅう-こじき 道中乞食 (名) 乞食をして旅行する人。

だうちゅう-ざし 道中差 (名) 昔時、旅行にさしたる刀。普通のものより稍短くして、多くは樺と鞘とに袋をかく。

だうちゅう-し 〔道中師〕 (名) 一常に或る地の間を旅行して、他人の用辨を業とする人。即ち、飛脚・荷宰領の類。二ごまのはひに同じ。

だうちゅう-じら (名) 道中にて旅人の物を盜みとる盜賊。じらを見よ。膝栗毛「道中じらであろぞいな、ぼり出してやらんせ」

だうちゅう-すがた 道中姿 (名) 一旅行中の姿。たびすがた。二道中三の姿。壽門松(寛永元年)「見厭かぬ君が外八文字の道中姿」

だうちゅう-すがら (名、副) 旅立ちしより先方に著くまでの間。みちすがら。丹波與作「そちは通しぢやげな、だうちゅうすがらも用あらば」

だうちゅう-すごろく 道中雙六 (名) 廻り雙六の一種。東海道の宿場を畫き、江戸より順次にすすみ、京都にてあがるやうに仕組みたるもの。貞享の頃、淨土雙六にならひてつくりたるものといふ。丹波與作「道中雙六とやら、東海道の繪をひろげ、あぢな事して遊びます」

だうちゅう-すぢ 道中筋 (名) 旅行する道筋。道中のみちすぢ。丹波與作「當代は道中筋も吟味强く」

だうちゅう-づけ 道中附 (名) 道中にて用ふるもの。一代男「尻からげを下ろし、道中附の扇を腮して」

だうちゅうてんまやく 道中傳馬役 (名) 江戸時代、道中の驛馬・人夫を出だすべき先觸れを掌りたる役。

だうちゅう-どっこ (名) ごまのはひをいふ。下野國日光の方言。物類呼稱

だうちゅう-はおり 道中羽織 (名) 昔時、道中する武士の著用したる羽織。丹波與作「御迎ひの爲家老中間猛猛耕のだうちゅうばおり」

だうちゅう-はばき 道中脛巾 (名) 旅行に著くる脛巾。井筒業平河内通三「道中脛巾脱ぐや脱がず、息も休めず走りに走って驅け附けたり」

だうちゅう-ぶぎゃう 〔道中奉行〕 (名) 江戸幕府の職名。大目付・勘定奉行の兼職にして、東海道の諸橋梁の修築、驛路の取締等を掌るもの。吏徵(附錄)「道中奉行兩人、大目附一人御勘定奉行(公事)一人兼役、正德二年壬申二月廿六日始置、兩人、與力二騎同心十人宛を附けらる」

だうちゅう-ぶくろ 道中袋 (名) 旅行用の袋。信玄袋の類。

たう-ちょく 〔當直〕 とのゐすること。とまりばん。當番。令義解(公式)「凡内外百官、司別置事閑繁、各於本司、分番宿直(開元令、諸職事官、皆置番直、其番上者、皆令宿直、其番上者、皆令宿直、其番上者、皆令宿

本威靈仙(ヰヤウ)屬の草本。莖の高さ一二尺。葉は對生、披針狀、鋸齒を有し、莖・葉共に白色の柔毛あり。夏日、梢頭三四寸の穗をなし、ひめとらのをに似たる淡紫碧色の花を開く。

たう-ちう 〔當朝〕(名) 一この朝廷。現在の朝廷。二この王朝。現在の王朝。

たう-ちう 〔當代〕(名) 一この御代。當代。

たう-ちう 〔唐朝〕(名) 支那の唐の朝廷。唐の世。謠(ウタヒ)曲、唐朝の古へも、帽子の紅樓とて」

だう-ちう 〔道調〕(名) 十二調子の一。教訓抄(キヤウクンセウ)「十二調子者、壹越調(ヒチベチテウ)・道調(ダウテウ)」

だうちう-さよく 〔道調曲〕(名) 道調の樂曲。例へば、散手破陣樂・太平樂・拔頭の類。和名抄(ワミヤウセウ)「道調曲。上元樂・五更轉・散手破陣樂(サンシユハジンラク)・太平樂」

だうちう-をしやう 〔堂頭和尚〕(名) 佛語。禪家にて住持の稱。方丈和尚。方丈。庭訓往來十月「禪家者堂頭和尚」勤修百丈清規「侍者出小榜二云、奉堂頭和尚慈旨」

たう-てき 〔當敵〕(名) めざす所の敵。たうのてき。太平記(サンセウ七、新編)「道譽は相模守の當敵なれば、此の宿所をば定めて毀ち燒くべしと憤られけれども」

たう-てき 〔盪滌〕 あらひすすぐこと。洗滌。史記(シキ)「萬民咸蕩滌邪穢、貪酌飽滥、以飾厥性」

たう-てつ 〔饕餮〕 〔たう(饕)は食物を貪る義〕 金錢・飲食などを食ること。食欲(ジキヨク)を(ことなきこと。又、其の人。左傳(文公十八年)「食(ジキ)於飲食、冒於貨賄、天下之民、謂之(ノ)饕餮(ダウテツ)」

たう-てん 〔當店〕(名) このみせ。我がみせ。

たう-てん 〔唐天〕(名) 舶來の天鵝絨(ビロード)。

たう-てん 〔滔天〕 天にまではびこること。太平記(サンセウ)「滔天(ハビコリ)の逆(ヤウ)、鯨鯢(ゲイ)難(ガタシ)盡、已揚(アガ)滔天之波瀾、燔火不(ヒ)消、愈起(ヒ)燎原之烟焰(ヒ)」書經(ショキヤウ)「湯湯洪水、方割蕩蕩、懷山襄陵、浩浩滔天」漢書(カンシヨ)「吞(ノミ)彌賊臣、篡(ウバフ)漢滔天」

たうてん-の-いきほひ 滔天勢 天にはびこる程の勢力。非常なる勢ひ。晉書(シンシヨ)「殷浩(ヒ)非挑戰之秋、劉石有(ル)滔天之勢」

たう-てん 〔倒轉〕 てんだう(顛倒)に同じ。傾城島原蛙合戰(ケイセイシマバラ)「蛙の姿と飛び出づれば、二人の女も倒轉し、物陰に忍べば」

たう-でん 〔稻田〕(名) 稻をうゑたる田。いなだ。詩經(シキヤウ)小雅(セウガ)「滮池北流、浸(ヒタス)彼稻田」

だうでん-たい 〔導電體〕(名) 【理】能く電氣を傳ふる物體。即ち、電氣抵抗の割合に少なき物體。金屬・特に銅・鐵及び洋銀の類。

だうでん-りつ 〔導電率〕(名) 【理】物質が、電氣を流通せしむる良否の度合をあらはす量。電氣抵抗の反數を以て表さる。

たう-と 〔唐土〕(名) から。もろこし。支那。唐山。太平記(サンセウ六、新編)「我が朝は不及申、唐土・天竺・大元・南蠻も未だ是れ程の大軍を發こす事、無(ナ)有かりし事なり」謠曲(ウタヒキヨク)「唐土の詩賦を以て我が朝の歌とす」

たうど-の-とり 唐土鳥 姑獲鳥(コカクチヤウ)などの妖鳥なりと。正月七日に七種菜を打ち、此の妖鳥の災ひを禦ふ厭勝(ヱンセウ)として唱ふる詞。下文を見よ。世說(故事苑)「事文類聚に歲時記を引きて曰、正月七日多鬼車鳥度、家家鎚門打戶、鎚燈燭、諷之已上倭俗、七種菜を打つ唱へに、唐土の鳥日本の鳥、度らぬ先にと云へるは、此の鬼車鳥を忌む心なり、板を打ち鳴らすは、鬼車鳥不(ズ)止やうに諷ふなり」

(諺)唐土の虎は毛を惜しみ、日本の武士は名を惜しむ 唐土の虎が其の毛を愛惜する如く、日本の武士は其の名を重んず。

たう-ど 〔陶土〕(名) 【化】長石・雲母等の分解により成生し沈積したるもの。白色の塊狀をなし、陶磁器の製造に供せらる。成分は含水硅酸・あるみにうむ・なり。唐書(トウシヨ)「甄官署令掌(ツカサドル)琢石陶土之事」中興瓶缶之器」宋史(ソウシ)「續木皮(ヲ)爲布、陶土爲(ル)釜」

たう-ど (副) たくさん(澤山)をいふ、相模國の方言。物類呼稱(ブツルヰコシヤウ)

だう-と 〔道途 道塗〕(名) みち。道路。往來。杜甫詩「不(ル)長道途永」

たう-とう 〔刀豆〕(名) 【植】なたまめ(刀豆)に同じ。

たう-とう 〔到頭〕(副) つまり。遂に。結局。羅隱詩「浮世到頭須適(ル)性、男兒何必盡成(ル)功」

だう-とう 〔道統〕(名) 儒學の傳說。朱熹文(シヤウ)「夫堯舜禹、天下之大聖也、自是以來、聖聖相承、若成湯文武之爲(ル)君、皐陶・伊・傅・周・召之爲(ル)臣、既皆以此而接夫道統之傳」

だう-どうし 〔堂童子〕(名) 古昔、宮中の御齋會の時、五位殿上人より選びて花筥を配附する役。(松屋筆記)又、寺院に仕ふる下部にて、使役に供し、法會の時、花筥をとるもの。宇津保(ウツホ)「堂童子は初めの夜のひじ美濃守、次の夜のものは津の守」枕(マクラ)「清げなるたて文などもたせたる男の、ずきやうの物うちおきて、堂童子など呼ぶ聲、山響き合ひて、きらきらしう聞こゆ」榮華(エイクワ)「山階寺の僧ども、堂童子までかづけものなど賜はす」侍中群要(ジチウグンエウ)「前一日、差(サシ)定堂童子五位四人」塵添壒囊抄(ヂンテンアイナウセウ)「南都の諸寺には、堂童子と云ふ下部侍也」

たうどう-はつい 〔黨同伐異〕(句) 我が黨に同意して異黨を攻むること。我が黨類と組み合ひて反對者を攻擊すること。

たう-とく 〔逃匿〕 にげかくること。たうぢとく。逃滑。孟子(モウシ)「公孫丑上」「益烈(ヒ)山澤而焚之、禽獸逃匿」史記(シキ)「伯夷傳」「逃匿山中、義不(ズ)爲漢臣」

だう-とく 〔道德〕(名) 人の履み行ふべき正しき道。人倫五常の道。易經(エキキヤウ)「和順于道德、而理(ル)于義」禮記(ライキ)「一(ニ)道德、以同(ジ)俗」

だうとく-がく 〔道德學〕(名) 【倫】りんりがく(倫理學)に同じ。

だうとく-くわん 〔道德官〕(英 Moral sense) (名) 【倫】善惡を直下に判別する本能的なる道德的感情。次條を見よ。

だうとくくわん-せつ 〔道德官說〕(名) 【倫】道德官を原理とせる倫理說。しやふつべりー(Shaftsbery 一六七一—一七一三)・はつちそん(Hatcheson 一六九四—一七四七)等の稱へたるもの。

だうとく-けういく 〔道德教育〕(名) 人の品性・道德を涵養するを目的とする教育。小學校令(ケイレイ)「道德教育及國民教育の基礎」

だうとく-しん 〔道德心〕(名) 道德を守る心。善惡を判別して善なる行爲をなさんとする心。

だうとく-てき 〔道德的〕 道德に關するにいふ語。

だうとくてき-しやうめい 〔道德的證明〕(獨 Der moralische Beweis) (名) 【哲】かんと・が純粹理性批判に於て不可能とせし自由・靈知界・永生及び神なる觀念の實在性の證明を、實行理性批判に於て別種の見地よりなせしもの。此れ等の觀念の實在性を純粹理性批判に詳論せらるる如く、知的理性は立證も否定もなし得ざるが可能なるものと證明せり。併し實行理性批判に於て、行的理性は其の先天的確信の下に、此れ等を必然なるものと保證せり。これ即ち道德的證明にして次の如し。吾人は道義律の必然的且つ普遍妥當的なるを確信す。從ひて、其の依りて以て存立する條件に就ても同樣に信ぜざるを得ず、而して其の條件は自由・靈知界などの觀念なり。故に此れ等の觀念の實在性を必然的に確信す。されば之は知の證明にあらずして、先天的信の保證なり、即ち、汝能ふ、汝當に爲す可きが故に(ich kann, denn du sollst)なる行的意識を根據とせり。

たう-とつ 〔唐突〕 だしぬけ。突然。不意。馬融文「守規不(ル)固兮、爲(ル)所(ル)唐突」

たう-とん 〔逃遁〕 のがるること。にげること。逃逃。戰國策(センゴクサク)「齊王逃遁走莒、僅以身免」

たう-な 〔菘〕(名) 【植】十字花科、蕓薹屬の二年生草本。葉は廣くして大きく、缺刻あるものと無きものとあり、長さ一尺五六寸に至る。九月頃播種し、十一月頃より葉を摘み取るに適す。花は黃色なり。多く鹽漬として食用に供す。いのげんな。いんげんな。しろな。すずな。

だうな (蒙) 無益に物を費やすこと。むだ。保元(ホウゲン)「此の矢をかいかなぐりて投げ捨て、おのれ程の者をば矢だうなに、手取りにせん」平家(ヘイケ)「只今の矢一筋では敵十人をば防がんずる物を、罪つくりに矢だうなにとぞ制しける」(源太(ゲンタ)夢合(ムアハセ)「敵唯今味方を追って可來、十間より外ならば玉だうなにうたせそ」

たう-ない 〔島內〕(名) 島の內。島中。

たう-なす 〔番南瓜 南瓜〕(名) 【植】茄蘆(ナスビ)科、南瓜屬の一年生草本。莖は蔓性、卷鬚を有す。葉は圓き心臟形にして邊く五裂し、長き葉柄によりて互生す。夏日、黃色、大形の合瓣花を開き、單性、雌雄同株なり。果實は大形の漿果にして、數箇の縱溝を有す。我が國、廣く各地に栽培せられ、果實を食用に供す。かぼちや。かぼちやぼうぶら。ぼうぶら。きくさたうなす。なんきんばうぶら。ぼうぶら。蕃南瓜。

たう-なつ 〔番南瓜〕(名) 【植】おほづつの異名。

たう-なん 〔盜難〕(名) 【植】ぬすみに逃ふこと。ぬすまるること。賊難。

たうなん-ばうちぎ 〔盜難報知器〕(名) 盜賊の家內に忍び入らんとして戶・障子をあけ、又はづしなどしたる時、電鈴に通じて警鐘を亂打する電氣仕掛。

たうなん-ほけん 〔盜難保險〕(名) 【商】損害保險の一。盜難の塡補を其の目的とするもの。

たう-に 〔唐煮〕(名) 砂糖のみにて食物を煮ること。又、其の煮物。

たう-にゅう 〔糖乳〕(名) みるくーに同じ。

たう-にん 〔當人〕(名) 直接に其の事に關係ある人。本人。當事者。

たう-にん 〔桃仁〕(名) 藥用とする桃の核。仇池筆記「有(リ)甕、於林中見一桃過熟而絕大、中間食已葉、其核、翊取而剖之、得雄黃一塊、如桃仁、及研而吞之、甚甘美」

だう-にん 〔道人〕(名) だうじん(道人)に同じ。謠(ウタヒ)曲、これは玄翁といへる道人(ダウジン)なり」(善言石字考)節用(セツヨウ)「道人(ダウニン)」

たう-ぬの 〔唐布〕(名) 舶來の木綿布。唐木綿。宗五大草紙(ソウゴタイサウシ)「たう布のたくひは、僧・喝食になほよく候」

たうぬら-びやう 〔糖尿病〕(名) 尿中に葡萄糖を含みて排出する病。遺傳・精神過勞・頭部外傷・腎臟病等によりて起こり、渴と飢とを覺え、尿量增加し、身體痩せ、又、眼病・神經痛等を起こし、重態に至りては昏睡・呼吸促迫・精神朦朧等の症狀を呈す。砂糖・澱粉質等の食物を避け、蛋白質・脂肪質の食物を取るべし。

たう-ねつ 〔鬧熱〕 非常に雜香すること。非常に賑しきこと。熱鬧。白居易詩「紅塵鬧熱自雲冷」

たうねつ-せかい 〔鬧熱世界〕(名) 鬧熱する場所。雜香する市街。

たう-ねん 〔當年〕(名) 一この年。ことし。今年。本年。謠(ウタヒ)曲「殊に當年は、一段と見事にて候」狂言(キヤウゲン)「鳥(トリ)」「當年も相變らず參らうと存ずる」二その年。そのころ。そのかみ。當時。方子詩「庭梅曾試當年花」

だう-ねん 〔道念〕(名) 一道義の念。道義心。吳筠詩「嘗昔希道念、而今果天矜」二求道の念。盛衰記(セイスイキ)「十八(ジユウハチ)「本意は只至孝・報恩の道念より起これり」」戰歌加留多(カルタ)「遁世の身とはなったれども、心に起こらぬ道念」

だうねん-ぶし 〔道念節〕(名) 貞享の頃、京都の道念山三郎のうたひ出だしたる盆踊りの口說(クドキ)といふ唄より出でたる小唄の節。踊りの拍子に能く合へりといふ。(本朝世事談綜)

たう-の-いも 〔紫芋〕(名) 【植】天南星科、芋屬の多年生草本。芋の一品種。葉柄紫色を帶び、塊莖大にして子少なし。共に食ふべし。しう。

たう-の-ごま 〔苞麻〕(名) 【植】たうごま(苞麻)の異名。

たう-の-つち 〔唐土〕(名) 鹽基性炭酸鹽の白色沈澱物。古來、白粉(ヲシロイ)として使用せり。

たう-の-とり 〔唐鳥〕(名) 【動】とき(朱鷺)の異名。

たう-の-をもみ (名) 【植】しらびそ(白檜曾)の異名。

たう-は 〔黨派〕(名) 一黨內の分派。二くみ。なかま。徒黨。閥結。

たう-は 〔刀欄 刀把〕(名) 刀(カタナ)の欄(ツカ)。たかみ。倒把。

たう-は 〔濤波〕(名) はたう(波濤)に同じ。水經注「湖濟濤波」答賓戲「驚駭如濤波、被深如春華」

たう-は 〔塘坡〕(名) どて。つつみ。

堤防。

たう-は 〔蹈破〕 ふみやぶること。ふみあるくこと。跋渉。太平記「或る時は馬蹄蹈破板橋霜、行路に日を窮め」傳燈鈔「蹈破鐵鞋無覓處、得來全不費工夫」

だう-は 〔道破〕 いひやぶること。いひのけること。說破。論破。

たう-はい 〔刀背〕 刀のみね。むね。南史「盜馬賊以刀背、歐其脅」

たう-はい 〔黨輩〕 仲間うち。同類。黨類。後漢書「黨輩八十餘人、皆以誹訪當伏重法」

たう-はう 〔當方〕 こなた。こちら。わが方。

たう-ばう 〔刀鋩〕 刀(ナガ)のきっさき。はさき。刀矢。

たう-ばう 〔逃亡〕 ㊀にげて委を隱すこと。のがれかくること。捕亡令「凡囚及征人・防人・衛士・仕丁流移人、逃亡者、欲入寇賊者」刑部省式「凡罪人逃亡者、申官追捕」史記「急即以逃亡自捐之」㊁かけおち。出奔。逐電。令義解「令「凡浮逃絕貫」問、浮有浮逃也、逃者逃亡也、絕者無籍也、及家人奴婢被放爲良若訴良得免者」本朝語類「漢三代格十七、養老四年三月十七日「太政官符、逃亡戶口、悔過歸鄉給復事」同八、寶龜五年「太政官符、應敎神郡百姓逃亡口分田地子事」

たう-ばう 〔悼亡〕 死亡したる人を悲しむこと。孫逖詩「白日期僧老、老園忽悼亡」

だう-ばう 〔道傍〕 道のほとり。みちばた。路傍。漢書「吏出不敢令鄭亭食、食于道傍」

たうはう-かんぢやう 〔當方勘定〕 (英 my account; Our account) (名)【簿記】他支店勘定の一。當店より勘定を起こすもの。即ち、他支店へ仕向くるもの。仕向口。(先方勘定の對)

たうばう-しや 〔逃亡者〕 (名) たうばうにん(逃亡人)に同じ。

たうばう-ちやう 〔逃亡帳〕 (名) 大帳の枝文の一。逃亡人に關する事項を記入せるもの。政事要略「五十七、私奏「逃亡帳」

たうばう-ぢようちやう-くぶんでん 〔逃亡除帳口分田〕 (名) 王朝時代、全戶逃亡するものありて、五保追訪するも三年まで得ざるか、又は戶內の口逃亡して六年まで得ざるとき、整年に至り計帳より除きて其の口分田を官に收めたるもの。輸地子田とす。主稅寮式「逃亡凡勘租稅者中略逃亡除帳口分田中略爲輸地子田」

たうばう-にん 〔逃亡人〕 (名) 逃亡したる人。逃亡者。

たうばう-はんざいにん 〔逃亡犯罪人〕 (名) ㊀逃亡したる犯罪人。㊁【法】日本帝國と犯罪人引渡條約を締結したる國の管轄內にて、其の條約に揭ぐる犯罪を犯したるに就き告訴・告發若しくは有罪の宣告を受けて帝國の管轄內に逃避したるもの、又は逃避したる嫌疑若しくは逃避せんとする嫌疑あるもの。帝國臣民以外の人たることを通例とすれども、帝國と請求國との犯罪人引渡條約に交互其の臣民の引渡しをなすべき條款あるとき、又は犯罪人引渡條約に交互の任意を以て其の臣民の引渡請求に應ずることあるべき旨の條款あり、且つ請求國にて同樣の場合には自國の臣民を引渡すべき旨を申し出でたるときには帝國臣民をも包含す。逃亡犯罪人引渡條例「逃亡犯罪人」

たう-はざさ 〔刀背笹〕 (名)【植】ぶんどざさ(拾原草)の異名。

たう-はさみ 〔唐鋏〕 (名) 鋏の一種。二つの刃を交叉せしめ、其の中央を釘留めとし、下の兩端に孔あり、これに指を差し入れて開閉する仕掛けのもの。

たうば-し 〔湯婆子〕 (名) ゆたんぽ。たんぽ。醫餘叢考「今人用銅錫器盛湯、置衾中、煖脚、爲之湯婆子」

たう-はぜ 〔討伐〕 (名)【植】なんきんはぜ(烏臼)の異名。

たう-ばつ 〔討伐〕 兵を遣はして罪ある者をうつこと。征伐。史記「然挾王室之義、以討伐、爲會盟主、政由五伯」

たう-ばつ 〔盜伐〕 他人の所有若しくは占有に屬する竹木を不法に伐採すること。北史「有人盜伐其父墓中樹者、突對之號慟」

たう-ばつ 〔黨閥〕 同じ黨派のものが、其の主義を貫徹する爲めに、自黨の者を助けて他黨の者を排斥すること。同黨異閥。

たう-はと 〔唐鳩〕 (名)【動】いへばと(家鳩)の異名。

だう-はふ 〔道法〕 (名) みちのり。路程。道程。

たうばり 〔賜〕 (名) たうばること。たまはること。又、其の物。多く爵祿の類にいふ。字津保「上上「此の頃伊賀の守の餝するを、明年の院の御たうばりをことし申させ給へど」大和物語「む月の加階たうばりの事いとゆかしうおぼえけれども」源氏「御たうばりのつかさ・かうぶり、何くれの事にふれつつ」

たう-はる 〔(自動)〕 古語。其の質を受けて似る。似る。應神紀「其爲人、能似(パリタ)武內宿禰之形」雄略紀「而貌容儀、相似(ナリタ)天皇」

たうばる 〔賜〕 (他動) たまはる。いただく。頂戴す。拜受す。應神紀「蒙(バリタ)御歌」天武紀「「請(ヒタ)家地」」催馬樂「鷹の子は我れにたうばらんや」

たうはわけ 〔黨派別〕 (名) 黨派により區別すること。

たう-はん 〔刀瘢〕 (名) 刀傷のあと。刀痕。

たう-はん 〔盜犯〕 (名) 竊盜犯と强盜犯との稱。盜罪。法「曹至要抄上「强盜犯、按之、盜犯之屬、觸類多端中略凡盜犯事、朝家重所誡也」舊刑法「第三百十五條「盜犯を防止し」

たう-はん 〔纛幡〕 (名) 古昔、軍陣に於ける將軍の標旗また仗旗。龍像(ダリヤウ)纛幡・鳳像(ダリヤウ)纛幡・虎像(ダリヤウ)纛幡・兕像(ダリヤウ)纛幡あり。ぢやうき(仗旗)を見よ。令義解「軍防「凡私家不得有鼓・鉦・弩中略及軍幡」讀中略幡者西宮記曰、白地中略幡紅白色幡也、然家所紅白色幡」

たう-はん 〔當番〕 ㊀番に當たること。又、其の人。狂言「頃日、若い衆と初心講を結んで御座るが、近き內に身共の當番に御座る」㊁とのゐ。とまりばん。宿直。當直。職制律「凡官人無故不上、及當番不到、若因假而違者、一日笞廿」左右近衛府式「凡毎月一日十六日、具錄當番近衛歷名、次官已上奏進」盛衰記「七、成親「鳥

羽の御所に被候し時には、非番・當番して目にかからん、詞にかからんとこそ振る舞ひしか」唐書「五品以上、及折衝當番者」

たうばん-がき 〔當番書〕 (名) 當番の者が其の旨を記して詰番の者に差し出だす文書。泊御番心得「當御番前日之朝、泊介之桁に而當番書相認め、詰番衆江手紙相添へ遣し候事。以手紙、致啓上候、今日者御詰番御太儀奉存候。然者、明幾日捌者泊御番に付、當番書差し出し申し候。今晚泊り之御方江御渡し可被下候、奉頼候、以上」

たう-ひ (名)【植】松杉科、はりもみ屬の常綠喬木。幹の高さ數十尺に達す、葉は線形にして尖り、長さ六七分、下面やや白色を帶ぶ。夏日、花を開き、雌雄同株、後、圓錐形の毬果を結ぶ。我が國、深山に自生し、又、觀賞用として栽培せらるることとあり。㊁いらもみの異名。

たう-ひ 〔橙皮〕 (名) 臭橙(ダイ)の皮を乾したるもの。藥用とす。

たう-ひ 〔當否〕 (名) ㊀あたることとあたらざることと。あたりはづれ。㊁よろしきにかなふことと然らざることと。よしあし。史記「龜策「時數辯、當否」國家賴其便」

たう-ひ 〔逃避〕 のがれて其の場をさくること。逃げさくること。詩經「序「勸若無所逃避」

たう-び 〔掉尾〕 てうび(掉尾)に同じ。

たう-ひしんけい 〔倒披針形〕 (名)【植】植物學上の用語。披針形の倒さまになりたる形。

たう-ひつ 〔唐筆〕 (名) 支那より舶來せる筆。書史「唐筆爲觀乃可挂也」

たうひつ 〔刀筆〕 (名) ㊀支那の上代に、竹簡に文字を彫りしるすために用ひたる小刀。㊁文書の記錄。又、其の記錄を掌る小吏。戰國策「臣少爲秦刀筆」漢書「倍吏之所務、在於刀筆筐篋」

たうひつ-の-さいじ 〔刀筆の細事〕 刀筆の吏のなす如き微細なる事務。つまらぬ事務。

たうひつ-の-り 〔刀筆吏〕 ㊀文書の記錄を掌る小役人。書記。史記「何于秦時、爲刀筆吏」漢書「起秦刀筆吏」㊁ひくき役人。小役人。小官吏。

たうびやく-せん 〔當百錢〕 (名) ㊀てんぱうつうはうせん(天保通寶錢)の異稱。貨幣通考「當百錢之事。天保六年乙未九月金座に於て當百錢を鑄る。壹枚を以て並錢百文に換ふ。世に是れを百文錢といふ」㊁紋所の名。

たうひ-ゆ 〔橙皮油〕 (名) 橙皮より採りたる油。

たう-ひん 〔盜品〕 (名) 盜みたる品物。贓品。贓物。

たう-びん 〔湯瓶〕 (名) ゆわかし(湯沸)に同じ。

たう-ふ 〔當否〕 (名) たうひ(當否)に同じ。

たうぶ 〔賜〕 (他動) 〔たぶ(賜)の延〕たまふ(賜)に同じ。枕「笛の笛中略其れは陸圓にたうべ」

たうぶ 〔食〕 (他動) 〔たぶ(食)の延〕たぶ。くふ。飲む。飲食す。備馬樂「酒をたうべて、たべ醉うて」古今「さぶらひにて、男ども酒たうべけるに」

たうぶ 〔給〕 (助動) 〔たぶ(給)の延〕㊀たまふ(給)に同じ。他の動作に添へていふ敬語。神功紀「廼(ナ)告吾國」」土佐日記「御館より出でたうびし日より」宇津保「藤原「かしこにもゆるしたうばでありしものの」同「阿王「行く末・只今、物のかためと侍りたうぶ人なり」㊁己れが動作に添へていふ對話上の敬語。字津保「梅花「桂川わたりに興ある所をもて侍りたうぶを、そこになん花見給へんとて、日頃侍りたうぶなり」

たう-ぶ 〔蹈舞〕 ぶたう(舞蹈)に同じ。唐書「武后召秦言「將用之、問曰舞喜否、秦言蹈舞謝」

たう-ぶう 〔當風〕 (名) いま風。いまやう。當世風。狂言「大むかし・中むかし・たうふうといふて、三段おぢやるが」隨學壞「廿前後になりて流行り出でたるを見れば、いかにも當風にてだてに覺えし」

たう-ぶう 〔唐風〕 (名) からぶり。からやう。鮑照詩「唐風久不諭」

たう-ぶぎやう 〔塘奉行〕 (名) 江戶時代、肥後國にて堤防の工事を掌りたる役人の稱。地方凡例錄「肥後國にては堤を塘と云ふ、在方普請奉行を塘奉行と唱へ、堤塘ともいふ」

たう-ぶく 〔當腹〕 (名) 今の本妻の腹に生まれたること。又、其の人。(先腹の對)保元「斷官召返「是れは只當腹の寵愛といふばかりを以て」平治「信賴「當腹の愛子」江濃記「道三は子息新九郎が爲めにうたれける中略三男喜平次と云ふ是れは當腹なり」

たう-ぶく 〔道服〕 (名) ㊀道家にて著る衣服。遯生八牋「道服、不必立異、以布爲佳、色佳、白爲上、如中衣四邊、延以緇色布、亦可、次用茶褐布爲袍、緣以皂布、或緋亦可、如禪衣、非兜羅綿、以紅褐」

たう-へ 〔糖分〕 (名) 砂糖質の成分。

たう-ぶん 〔當分〕 (名) 今しばらくの間。當座。狂言「當分、御目がまるったら當分に御げんざうであろ、又御氣に入らずば逗留の事があらう」國姓爺後日合戰「此のいろいろは當分のたまもの」

たう-へい 〔刀兵〕 (名) 兵戰。

たう-へい 〔盜兵〕 (名) 寇掠に來たる敵兵。侵略し來たる兵。漢書「漢王燒絕棧道、以備諸侯盜兵」

たう-へい 〔湯餅〕 (名) うどん。溫麪。爲之、月衣之製、鋪地儼如月形、穿起則如披風道服、二者用以坐禪、筑蹇披雪避寒、俱不可少」㊁中古、公卿・大納言以上の人の、內內にて著用したる上衣。袖濶く、腰より下に襞ありて、僧の衣に類するもの。太平記「十四、手馬「將軍中略義貞と死を共にすべしとて、忽ちに鈍道服給ひて錦の直垂をぞ被召ける」㊂眞宗にて素絹・直綴・法服と區別して、色衣の稱。

たう-ぶつ 〔當物〕 (名) 抵當としたる物品。しちくさ。質物。典物。

たう-ぶつ 〔唐物〕 (名) 支那及び諸外國より渡來せる品物。舶來品。類聚三代格「十九、延暦三「太政官符。應禁遏諸使越關私買唐物事」幕令拔抄「「唐物・毛物に携はり候商賈人」

たうぶつ-ぬげぶね 〔唐物拔船〕 (名) 外國より唐物を積み來たりて關稅を免るる船。

たうぶつ-みせ 〔唐物店〕 (名) 唐物をあきなふ店。

たうぶつ-や 〔唐物屋〕 (名) 唐物をあきなふ家、又は人。古著問屋舊記「寶保八年中略先物問屋問屋町和泉三家組物十箱」「唐物屋拾五組」

青箱雜記「湯餅、溫麵也、凡以麵爲食煮之、皆謂之湯餅」李頎詩「菊花辟惡酒、湯餅茱萸香」

たらへい 〔討平〕 討ち平ぐること。討夷。

たらべに 唐紅 (名) 支那より渡來せる少しく紫色を帶ぶる紅。あにりん・より製す。からのべに。

たらへんぼく 〔唐變木〕 (名) 氣のきかぬ者を罵りていふ語。七偏人「石町の愚鈍人(ジンボウ)、其の儘ちやあねえか」

たらほ (名) 表具(ヒョウグ)の形式の一。(俗語)

たらぼく 〔唐墨〕 (名) 支那より渡來せる墨。支那製の墨。からすみ。

たらぼし 唐法師 (名) 次條に同じ。

たらぼふし 〔唐法師〕 (名) だいたうまい(大唐米)の異名。

たらぼん 唐本 (名) 支那より渡來せる漢籍。

たらぼん 〔逃奔〕 にげはしること。逃逃。左傳(哀公元年)「逃奔有虞、爲之庖正、以除其害」

たらぼん-ぢゆうべう 〔唐梵重標〕 (名) 漢語と梵語とをかさねて」の語となすこと。徒然草「護摩たくといふもわろし、修する護摩するなど云ふ也(參考)梵語の護摩は漢語にたくといふ心なればきらふ也。されども梵語と漢語と二つ重ねて呼べる多し。此れを華梵雙舉とも唐梵重標とも云ふ、佛書に其の例數多侍り」

たらま 〔稻麻〕 (名) いねとあさと。韓じて、幾重にも取り圍みたるさまにいふ語。稻麻竹葦。太平記(巻六、四條隆資)「前後左右に騎馬の兵二萬餘騎、馬回りに徒立ちの射手五百人、四方十餘町を相支へて、如稻麻打ち圍みたり」

たらま ちくゐ 〔稻麻竹葦〕 幾重にも取り圍みたるさま、又、物の多きさまにいふ語。太平記(三十巻)「二十萬騎、稻麻竹葦の如く城を取り卷いてぞ責めたりける」法華經(方便品)「如稻麻竹葦充滿十方刹」希有授量功德經「三千大千世界滿中如來、如稻麻竹葦」

だらま 駄馬 (名) 一荷物(ニモツ)をつくる馬。にうま。だば。二乘馬にならぬ劣等の馬。だば。駑馬。三めうま(牝馬)に同じ。

(誹)駄馬の道草喰ひ 極めて遲鈍なる譬へ。にいふ語。東鑑(四元暦二年)「伴兩人、下向鎭西之時、於京令拜任事、如駄馬之道草喰」

だらまう 〔獰猛〕 わるづよきこと。ねいまう。

だらまき (名) 【植】かうやまき(金松)の異名。

だらまめ 唐豆 (名) 【植】一そらまめ(蠶豆)の異名。二ぶちまめ(鑄豆)の異名。

たらる 唐丸 (名) 一(動)雛の一種。純粹のもの少なし。體黑色にて重量多く肥大なり。單冠なるは、らんぐしゃん。の脚に羽毛なきものに類似す。冠厚きものを貴ぶ。二次條の略。

たらるま-かご 唐丸籠 (名) 一唐丸を入れて飼養する圓筒形の竹籠。二江戸時代、平民の重罪人を護送するに用ひた圓筒形の駕籠。逃亡に備ふるために外面を網にて被ひたり。

たらるま-やぶり 唐丸破 (名) 唐丸籠にて護送せらるる罪人が其の籠を破りて逃走し、又、他人が唐丸籠を破りて其の中の罪人を逃走せしめたること。又は是れ等の事をなしたる人。

たらん-まんぢゅう 〔唐饅頭〕 (名) 餅菓子の一種。かすていら・の類の固き皮に餡を包み、圓く扁平に燒きたるもの。

たらみ 唐箕 (名) 穀物の實と粃(ミ)とを吹き分くる具。箱の內部に裝置したる風車樣のものの廻轉により風を生じ、箱の上部に設けたる漏斗狀のものに投じたる穀物の落ち來たるを吹きて粃また籾殼と淨米とを分かつ。和漢三才圖會(巻三)「鼈甲、用鼈扇(ヘラ)、唐箕、俗太宇美、以鼈甲(ヘラ)、唐箕、千石とぼしの事也。農術鑑正記」農術鑑「穀、用鼈扇去、粃也」農術鑑正記「こなしたる粃を入れれば、もみ・ほこり・粃、段段に分かる、ひるに及ばず」

たらみかん 〔唐蜜柑〕 (名) 【植】なつみかん(夏蜜柑)の異名。

たらみつ 〔糖蜜〕 (名) 蜜の如くなりたる砂糖。

たらみの 唐蓑 (名) 蓑の一種。肩より背を覆ふもの。農夫などの暑さを凌ぎ又雨を防ぐに用ふ。

たらみや 堂宮 (名) 佛堂と神宮と。堂又は宮。大鏡(狂言)「仁王と申すは堂・宮の門に立って御座る、いかめな御佛で御座るが」

たらみやう 〔唐名〕 (名) たうめい(唐名)に同じ。

だらみやうじ 〔道明寺〕 (名) 次條の略。洛陽集「道明寺喰っても涼し備後砂」

だらみやうじ-ほしいひ 道明寺乾飯 (名) もと河內國志紀郡道明寺にて製出し、今は其の近村にて盛んに製する乾飯。最も上品とす。道明寺。

たらむ 〔當務〕 (名) 其の事務に當たること。又、現在執る所の事務。太平記(四十巻、井尻合戰)「當務の僧共、人工・行者に至る迄、打ち殺すのみならず」

だらむかへ 道迎 (名) 道(ミチ)にて迎ふること。諸國(室町)「道迎への其の爲めに、酒を持ちて參りて候」

たらむぎ 唐麥 (名) 【植】はとむぎ(薏苡)の異名。

たらむしろ 唐筵 (名) からむしろ(唐筵)に同じ。酌井記「つづら切附・たうむしろの事、いづれも不苦」武雄記「唐筵の切附並びに沓の事」

たらめ 專女 (名) 一老いたる女。老女。土佐日記「翁人ひとり、たうめひとり」和名三「專。日本紀私記云、專領(ヒレヲ)女(メ)、俗語(ヒレヲ)老女(ヒレヲ)」二老いたる狐。老狐。字治拾遺(巻五)「紙たまはりて此れに包みてまかりて、たうめや子供などに食はせん」山槐記(巻五)「於齋宮御在所近邊、射(ヒ)殺白專女、北面下臈源親所從所爲」百錬抄(建久四年十一月七)「藤原仲季拘留名、配流土佐國、於齋宮邊、依射殺白專女也」

たらめ 專 (副) 〔前條を專一の義としたる誤訓と。古語拾遺(巻)〕もっぱら(專)に同じ。記(巻)「故專(ヒラ)汝往將問」曇行紀「故汝專(ヒラ)領東國」

だらめ 堂兎 (名) 紀伊國日高郡丸山村に住する賤民の稱。同兎(ドウト)。賤者考「日高郡中藩丸山村のうち堂兎(ドウト)といふあり(同兎とも書く、實はいかなる故か知らず。口稱にのみいひ、文字はかりに兎にたてたるなりといへり)凡に同じといへり。按ずるに、もと三昧堂などにつきたる兎田などありて、そこに住居せるより、人も忌み、又堂兎といふにやあらん」

たらめい 〔唐名〕 (名) 唐土の名稱。

からな。たうみやう。

たらめい 〔刀銘〕 (名) 刀劍の銘。陳書(巻五)「世祖以琰博學、引置左右、嘗使製刀銘、援筆即成、無所點竄」

たらめ-づかひ 專使 (名) せんし(專使)に同じ。應神紀「遣專使(ヒラヒツカヒ)、以從髮長媛」

たらめん 〔當面〕 面前に存在すること。現前。まのあたり。めのまへ。諸(歌)古「當面黃舌の囀り、鶯の子は子なりけり」水滸傳(巻三)「有眼不識眞師、當面錯過」

たらも 唐瘡 (名) たうがさ(唐瘡)に同じ。妙法寺記(永享)「此の年天下にたうもと云ふ大なるかさ出でて、平愈すること良久し」

たらもく 〔湯沐〕 湯をあみ髮を洗ふこと。湯にて身體をあらひ淸むること。ゆあみ。淮南子(覽冥)「湯沐具、而鑊鼎相弔」

たらもく の いぶ 湯沐の費用にあつるための采邑。湯沐邑。湯沐の地。禮記(王制)「方伯爲朝天子、若有湯沐之邑」戰國策(齊)「以上庸六縣爲湯沐邑」

たらもく の ち 湯沐地 前條に同じ。太平記(四、呉越戰爭)「越の國を獻呉王、成湯沐地」

だらもく 〔瞠目〕 目を見張ること。瞠視。袁宏道文(四民傳記)「失手墮瓶、竟不得一口、瞠目而去」

たらもくかう 唐木瓜 (名) 紋所の名。

たらもの 當物 (名) 取引所の語。當月切にて賣買せられる物。

たらもみ (名) 【植】もみ(樅)の異名。

たらもめん 唐木綿 (名) 舶來の木綿。絲細くして綿幅廣し。唐布。

だらもり 堂守 (名) 堂を守る人。堂の番人。

だらもろこし 玉蜀黍 (名) 【植】禾本科、玉蜀黍屬の一年生草本。莖の高さ七八尺に達す。葉は大なる披針形にして平行脈を有す。七八月の頃、莖頭及び葉腋に花を開き、單性、雌雄同株、雄花は梢上に抽きて、稍すきの穗に類して大きく、雌花は葉腋に生じて穗狀花序に排列し、大形の苞に包まれ、長き毛狀の花柱を出だす。亞米利加洲の原產。我が國、各地に栽培せられ、果實は食用に供せらる。なんばんきび。たまきび。

だらもん 〔討問〕 尋ね問ふこと。尋問。

だらもん 〔道門〕 (名) 道教の敎義。道敎。道家。

だらや 〔當夜〕 (名) 一この夜。今夜。二その夜。その事のある夜。

たらや 〔陶冶〕 一陶器を造ることと金物をふくことと。書經(呂刑)「治土器曰陶、治金器曰冶」孟子(公孫丑)「以粟易械器者、不爲陶冶」二陶工と冶工と。三育成すること。養成すること。生育すること。陶化。淮南子(覽冥)「包裹天地、陶冶萬物」漢書(賈誼)「臣聞、命者天之令也、性者生之質也、情者人之欲也、或天或壽、或仁或鄙、陶冶而成之、小能粹美、有治亂之所生、故不齊也」

たらやう 〔蕩漾〕 ただよひ動くさまにいふ語。阮籍詩「人情有感慨、蕩漾焉能排」孫逖詩「仙翁何時還、綠水空蕩漾」

たらやく 膏藥 (名) からやく(膏藥)の忌み詞。紫式部日記「ふやのはかせ、さかしだちさいらぎ居たり。たらやくくば

たらやく 〔湯藥〕 (名) せんじぐすり。煎藥。和名三「湯藥」太平記(十三、神)「帝湯藥を進りけるが、建盡を開かせ給ひて」史記(巻五)「湯藥非陛下口所嘗也」進」李密文(陳)「劉夙嬰疾病、嘗在床蓐、臣侍湯藥、未嘗廢離」

たらやく 〔當役〕 (名) 一この役。當職。二當番の役。三其のかかり。四活計のさしづめの費用。(物類名)戴恩記「そこは貧しき身なれば、我が當役をしてやらんほどに、月次に出よ」

たらやく 〔當藥〕 (名) 【植】一すいば(酸模)の異名。二せんぶり(當藥)の異名。

たらやくじしゃ 〔湯藥侍者〕 (名) 佛語。禪家の僧職。和尙の湯藥の事を掌る侍者。庭訓往來十五「禪家者中書狀・請客・湯藥(ヤウ)・衣鉢等侍者」異制庭訓往來「燒香侍者・書狀侍者・請客侍者・湯藥侍者・衣鉢侍者、已上頭首方也」

たらやくくりんだう (名) 【植】龍膽(ヤウ)科、龍膽屬の多年生草本。莖の高さ五六寸より一尺に達す。葉は全邊、對生、下部のものは稍倒披針形にして長く、上部のものは廣披針形にして短し。夏日、莖頂に二三箇の白色にして稍黃色を帶びたる花を集生するも、よく開展せず。我が國、高山に自生し、苦味多く、健胃劑に用ひらる。

(りうたんりくやうた)

たらやせい 〔陶冶性〕 (名) 少年の、陶冶し得べき性質。即ち、教育の可能性。

たらゆみ 唐弓 (名) 一わたうち弓。わたゆみ。二だんきゆう(彈弓)に同じ。

たらよ 〔黨與〕 (名) くみ。なかま。黨類。徒黨。管子「請謁得于上、則黨與成于下」史記(秦始皇)「黨與成乎下」

たらよう 〔當用〕 (名) さしあたりたる用事。當面の需用。太平記(巻六、呉)「呉子・孫子、六韜三略なんどこそ可然當用の文なれとて、昌黎文集の談義を止めてけり」

たらよう 〔盜用〕 盜取して使用すること。ぬすみてつかふこと。舊刑法(第二百四、他人の印影を盜用したる者」

たらよう-ぐち 當用口 (名) 取引所の語。さしあたり需用ある手口。「當用口の外、抄抄しあきなひなく」

たらよう-にっき 〔當用日記〕 (名) さし當たりての用むきをしるしおく日記。

たらよく 〔湯浴〕 一ゆあみ。入湯。湯沐。浴浴。二(化)ゆせん(湯煎)に同じ。

たらよく の れう 湯浴料 湯浴の費用。

たららい 〔當來〕 (名) ままに來たるべき時。未來。後來。將來。保元(上)「來には三世諸佛の利益に洩るべし」盛衰記(巻十八、四)「笛は今生一旦の翫物、經は當來得脫の資緣なり」

たららい の たうし 當來導師 佛語。未來の世に出現すべき彌勒菩薩。源(夕顏)「なもたららいのだうしとぞ拜むなる」

たららい の ちご 當來值遇 當來に彌勒佛に値遇すること。太平記(三、赤松)「順逆の二緣、何づれも濟度・利生の方便なれば、今生の逆罪を續して、當來の値遇とやならん」同(廿二、義勳)「加樣のついでならでは、早晩か參詣の志をも遂げ、當

来値遇の縁をも可結」

たうーらい 〔到來〕 ㊀とどくこと。到著。到達。盛衰記「去ぬる八月廿五日除目の聞書、九月二日到來」太平記「本文ハ去ル十六日ノ事ナリ」 ㊁根運などのむかひ來たること。豫想どほりにきたること。 ㊂他より贈り來たること。贈物の屆くこと。

たうらい-もの 〔到來物〕 (名) 他より贈り來りたるもの。おくりもの。もらひもの。

たうーらう 〔蟷螂　螳蜋〕 (名) ㊀〔動〕かまきり(蟷螂)に同じ。太平記「十六多良宿禰、御方は纔かに三百騎には過ぎず中略此の兵を以て彼の大敵に合はん事、蚍蜉動二大樹一、螳蜋遮二流車一、不レ異」 ㊁かまきりの如く搜せたる馬。尺素往來「爲二其奮固一、侍所之勞、就レ可レ被レ打二出河原邊一、同御進發之旨傳承候之間、螳蜋二十疋率二進之一候」

たうらう-の いかり 〔蟷螂怒〕 蟷螂斧を以て隧車に向かふに同じ。太平記「十四、新田尼上洛事、前亡餘黨纔存、揚二蟷螂怒一之日、尊氏中將賜東八箇國管領」

たうらう-の まもり 〔螳螂守〕 勁敵に當たるに、極めて微力なる兵備。

(誹)螳螂力を合はせて車を覆す 微弱にして侮らはしきものも、よく一致すれば、時には一大事をなすことある譬へ。盛衰記「雖二天下無雙之得ヲ名、如二螳蜋合レ力而覆レ車、蜂蟻一心而穿レ岸」

(誹)螳螂手をあげて隧車に向かふ 螳螂斧を以て隧車に向かふに同じ。盛衰記「愛に今たやすくも奉レ領二平家御世一、との合戰の企て誰れ人ぞ、恐らくは螳螂の手を擧げて向二龍車一嗤へかは、名乘れ名乘れ」

(誹)螳螂の飢餓に逢うたやう 非常に痩せたる人の譬へにいふ語。

(誹)螳螂のやう 前條に同じ。

(誹)螳螂の斧 螳螂斧を以て隧車に向かふの略。天網島「六十日・六十日に問屋の仕切りにさへ逆はるる商賣、十貫目近い金出して請け出すの根びきのとは、螳螂が斧でござる」陳琳文「檄二袁紹一、陳二其罪一」「欲レ以二螳螂之斧一、禦二隧車之隊一」

(誹)螳螂髆を怒らして車轍に當たる 次條に同じ。莊子「猶二螳螂之怒一、髆以當二車轍一、則必不レ勝レ任矣」

(誹)螳螂斧を以て隧車に向かふ 自己の微力を顧みずして、妄りに大敵に當たる譬へにいふ。螳螂手を擧げて隧車に向かふ。螳螂髆を怒らして車轍に當たる。螳螂の斧。譬太平「この大功を起こす事中略螳螂が斧を以て隧車に向かふ如くなり」同「義平が手勢十六騎響へば、螳螂が斧を執つて龍車に向かふ如くなり」韓詩外傳「齊莊公出獵、有二螳螂一、舉レ足將二搏一其輪一、問二其御一曰、此何蟲。對曰螳螂也、此蟲知レ進而不レ知レ退、不レ量レ力而輕就レ敵。公曰、此爲二天下勇蟲一矣。廻二車避一之」

だう-らく 〔道樂〕 ㊀其の道に耽り樂しむこと。 ㊁よからぬ遊び、即ち酒色・博奕等に耽ること。放蕩。放埒。遊蕩。 ㊂職業外の事をなすこと。 ㊃ものずき。好事。 ㊄方外なる物をいふ。關東の方言。

だうらく-にん 〔道樂人〕 (名) ㊀ものずきなる人。好事家。 ㊁たうらくもの(道樂者)に同じ。

だうらく-ばうず 〔道樂坊主〕 (名) 墮落・破戒の僧。身持の修まらぬ坊主。

だうらく-むすこ 〔道樂息子〕 (名) 放蕩なる息子。道樂なる少年。蕩子。

だうらく-むすめ 〔道樂娘〕 (名) 不品行なる娘。素行修まらぬ娘。

だうらく-もの 〔道樂者〕 (名) ㊀放蕩なる人。不品行なる人。緋縮緬卯月紅葉「世三又しては又しては、道樂者でのら者で、在所へ戻せ去なせ」 ㊁なまけもの。

たうらふばい 〔唐臘梅〕 (名) 〔植〕だんかうばいの異名。

たうらん 〔濤瀾〕 (名) おほなみ。巨濤。巨浪。蘆過文「鼓二千尺之濤瀾一、襲二百仞之陵谷一」

たうらんけい 〔倒卵形〕 (名) 〔植〕植物學上の用語。卵の倒さになりたる形。

たうーり 〔桃李〕 (名) ㊀ももとすももと。朗詠「桃李不レ言春幾暮」 ㊁(次の語に基く)。自己の推擧したる人才。劉禹錫詩「一日擢名徧天下、滿城桃李屬二春官一」

たうり の よそほひ 桃李粧 桃花・李花の如きうつくしき裝ひ。盛衰記「十九、文覺發心、桃李の粧ひ、芙蓉の眸、最氣高くして」

(誹)桃李言はざれども下自づから蹊を成す 德望ある人は自然と世人に歸服せらるる譬へにいふ語。盛衰記「世六、義經出二奥一、桃李不レ語、下自成レ蹊」史記「李廣傳」論曰、「桃李不レ言、下自成レ蹊、此言雖小可二以諭一大」

たうーり 〔棠梨〕 (名) 〔植〕薔薇科、梨屬の落葉喬木。春季、小形、五瓣白色の花を開き、果實はりんごに似て秋熟す。からなし。

だーうり 〔駄賣〕 (名) 駄荷を其のままにて賣ること。おろしうり。

だーうり 〔道理〕 物事の然るべき理義あること。すぢみち。ことわり。わけ。宇津保「嵯峨院」「さすがに道理失ひ給はず、さかしくおはする人なれば」源「桐壺」「此の御事にふれたることをば、だうりをも失はせ給ひ同「蓬生」「世の道理を思ひとりて恨みざりけり」荀子「修身」「其行二道理一也、勇」淮南子「主術」「不レ修二道理之數一」戰國策「秦」「秦至盛、不レ近二道理一也」

だうり ことわり 道理斷 道理とことわりとの重言。尤も至極。蟬丸「實に道理ことわりやと、各袖をぞ絞らるる」

だうり しとく 〔道理至極　至極もっとも〕。もっとも至極。「凱陣八島「げに道理至極せり、御心安く思し召せ、御供せさせ參らせん」

だうり のうへ の だうり 道理上道理 道理至極。至極もっとも。傾城反魂香「こちや道理づくめに成ったかと、摩を上げて泣き給ふ、道理の上の道理なり」

(誹)道理を破る法はあれど法を破る道理なし 道理も法には勝たれず。浮世鏡「世俗に道理を破る法はあれど、法を破る道理なしと云へる言は、心得の有る事也」

たーうーりう 〔當流〕 (名) ㊀この方の流儀。わが流派。 ㊁當代の流儀。當世風。今風。(古流の對)。雪女五枚羽子板「古流な事をさらりと止め中略心意氣も風俗も、是れ當流の眞中川、酒になりての名人さ」

たうりーくわ 〔桃李花〕 (名) 雅樂の黃鐘調の一。古昔、支那にて桃花盛んに開く時の酒宴、即ち三月三日の曲水の宴に此の樂を奏せしといふ。赤白桃李花。教訓抄「桃李花(又、唐)樂家錄世七左方樂」「左鐸。桃李花六人常裝束」

だうり-ぜめ 〔道理責〕 (名) 道理を以て責むること。

たうーりつ 〔倒立〕 さかしまに立つこと。後漢書「馬援傳」「義兵士卒、皆以布纏裹倒立地、熱者灌殺之」

だうり-づめ 〔道理詰〕 (名) 道理を以て言ひつむること。又、何事も道理を押し立ててすること。理窟づめ。壽門松「あちらもこちらも道理詰め、道理の無いは我ればかり」

だうり-で 〔道理〕 (副) 其のわけで。なるほど。

たうり-てん 〔忉利天〕 (名) 佛語。欲界の第二天。須彌山頂にあり。閻浮の地上より八萬由旬ありといふ。中央に善見城天、其の四方に各八天ありて、三十三天となる。其の他、四圍・諸市等あり。宇津保「俊蔭」「かみのしなは三寶より初め奉りて忉利天までに及ぼさん」无量壽經「四天王及忉利天、依何而住」

たうりてん-ぐう 〔忉利天宮〕 (名) 佛語。忉利天の善見城にありといふ宮殿。盛衰記「世二、經盛」「忉利天宮の雲の上には、天人歌舞して抽を翻す」

たうり-てんによ 〔忉利天女〕 (名) 佛語。忉利天の善見城の四方に連なる寶樓一萬七千房の各房に七人づつ住める天女。皆、帝釋の正妃なりといふ。榮華「本朝」「九重の宮の内に擬戲し給ふこと、かの忉利天女の快樂を受けて、歡喜苑の内に遊戲するに劣らず」

だうり-はづれ 〔道理外〕 (名) 道理に違ふこと。理窟にあはぬこと。

たうーりやう 〔稻粱〕 (名) いねとあは。詩經「小雅」「王事靡盬、不能蓺稻粱」同「小雅」「黍稷稻粱農夫之慶」稻粱。

たうーりやう 〔當量〕 (名) 〔化〕原子量を原子價にて除したる商を其の元素の當量といふ。即ち、水素一原子量と化合し若くは之と置換し得る他の元素の量なり。又、酸と鹽基との中和に於ても此の語を用ふることあり。鹽酸の一分子量は苛性曹達の一分子量と中和する故に、互ひに當量なりといひ、硫酸の一分子量は苛性曹達の二分子量と中和する故に硫酸二分の一分子量は苛性曹達一分子量と當量なりといふ類。

たうりやう-ねん 〔當梁年〕 (名) 東方蒼龍箕星(一名、梁星)の西又は子・午・卯の方角にあたる年。此の年には宮室の造營を忌むといふ。百練抄「延久元年、依二當梁年一、今年不レ可レ作二內裏之由一、被レ定レ之」諸道勘申「同「建長元年三、當梁年、內裏造營事、被二問一諸道」「中略八年、壬寅、諸道勘申、當梁年事、造二內裏一事定也」

たうりやく 〔韜略〕 (名) ㊀りくたうさんりやく(六韜三略)の略。 ㊁轉じて、兵法の稱。兵略。軍略。祖日用詩「廟謀能允廸、韜略又縱橫」

たうりおん 〔島吏員〕 (名) 沖繩縣島尻郡粟國島・渡名喜島・伊平屋島・鳥島及び國頭郡伊江島の各島に置く吏員。即ち、島長・島收入役・島書記・村頭の類。沖繩縣閒切島吏員規程「第四」「島吏員」

たうりん 〔桃林〕 (名) ㊀ももの はやし。ももばやし。 ㊁〔動〕(書經の武成に放二牛于桃林之野一とあるより出づ)し(牛)の異名。後深心院關白記「延文三年、桃林一頭、引二道一」品評、連連所望之故也」下學集「桃林タウリン、牛異名也、牛馬類野」

たうーるい 〔黨類〕 (名) なかま。くみ。徒黨。黨與。盛衰記「二、日向太郎通良」「以下の黨類三百三十五人討ち取るの由、家貞が許より交名を注して申し上げたれば」後漢書「黨錮傳」「左右群豎、惡二傷黨類一」

たうーるゐ 〔糖類〕 (名) 〔化〕可溶性にして甘味を有する炭水化物。蔗糖・麥芽糖・葡萄糖の類。

だーれ 〔道理〕 (名、副) だうり(道理)の訛り。浮世風呂「「道理(だうり)で色が惡い」」

たーれう 〔當寮〕 (名) この寮。わが寮。

たうろ 〔當路〕 要路に當たること。樞要の地に立つこと。當局。孟子「公孫丑」「公孫丑問曰、夫子當二路於齊一、管仲・晏子之功、可二復許一乎」史記「秦始皇」「使二人微感一張儀一曰、子始與二蘇秦一善、今秦已當レ路、子何不二往游一以求二通一子之願一」許棠詩「當路公卿誰見レ待、故鄉親愛自疑レ非」

たうろ の ひと 當路人 要路に當たる人。樞要の地に立つ人。

だーうろ 〔道路〕 (名) 通行のみち。みち。通路。街路。往還。往來。朗詠「百里奚乞食於道路、穆公委之以レ政」運歩色葉「道路」論語「子罕」「予縱不レ得二大葬一、予死二於道路一乎」禮記「月令」「開二通道路一」

だうろ めを もってす 道路以目 國人が其の人を恕めども公言するを憚り、目と目とを見合はせて互ひに其の心を知らすること。

たうろぎ 〔蟷螂〕 (名) 〔動〕たうらう(蟷螂)の轉。

だうろく-じん 〔道陸神〕 (名) だうそじん(道祖神)に同じ。

だうろ-けいさつ 〔道路警察〕 (獨 Wegepolizei. 英 Road police) (名) 〔法〕行政警察の一。道路交通の安全及び便宜を保持するを目的とするもの。

だうろ-しき 〔道路敷〕 (名) 道路及び軌條などの敷地。

たうろん 〔黨論〕 (名) 其の黨の議論。黨議。

たうろん 〔讜論〕 (名) 道理にかなひたる議論。正しき議論。讜議。

たーうろん 〔討論〕 ㊀互ひに議論を戰はすること。互ひに辯難すること。 ㊁事理をただしきはめて論ずること。論語「堯曰」「世叔討論之」

たうろん-くわい 〔討論會〕 (名) 討論するための集會又は會合。

たうわ 〔當話〕（名）當座の談話。その座のはなし。大織冠「當話の利いたる奴めかな」曾我虎磨「素より諸國の人に馴れ、數萬の幇間につきあひて、當話・口合ひ雖れにか負けん」

だうわ 〔道話〕（名）心學の談話。

たうわく 〔當惑〕さし當たりて施す手段に惑ふこと。途方に暮るること。思案に盡くること。

たうわた 唐綿（名）〔植〕わた（草綿）の異名。

たうわた 馬利筋（名）〔植〕蘿摩科三科、馬利筋屬の多年生草本。莖の高さ二三尺に達す。葉は對生、長楕圓形又は披針形。夏日、梢頭に紅色の繖形をなせる花を開き、花後、莢を結び、裂開して白絮ある種子を吐く。觀賞用として庭園に栽培せらる。

たうわたり 唐渡（名）長崎より安南・暹羅等へ渡海すること。

たうわん 〔陶碗〕（名）陶器の碗。茶碗。

たうん 〔黨威〕（名）黨の威勢。黨勢。

たうね 〔黨爲〕（獨 Sollen. 英 Aught）（名）〔哲〕〔倫〕驅想などの如き思惟の心理學的必然に對し、思惟の規範的・妥當的必然を言ひ、又、慾望の如き意志の自然因果的即ち心理學的必然に對し、意志の規範的・妥當的、即ち直言的必然の稱。不許不。（不可不の對）〔倫〕現代新かんと學派の一なるヴィンデルバンド（一八四八—一九一五）の開ける西南獨逸學派（ばーでん學派）に於て認識の對象を存在なりとする摸寫的見解に對し、其の對象は妥當其の物・規範其の物、即ち、當爲なりとせり。後には當爲を論理的に純化して、價値其の物（Wert an sich）と稱せり。不許不。（存在・實在の對）

たうねん 〔島委員〕（名）島長が必要と認むるとき、沖繩縣知事の許可を得て島に置く臨時若しくは常設の委員。島長の指揮・監督を承け、其の事務の一部を分掌し、又は一時の委託により事務を處辦するもの。

たうねん 〔唐韻〕（名）たういん（唐音）に同じ。大織冠「不學の我れ我れ唐韻通じ難し、日本詞御存じならば、和語の口上承らん」

たうねん 〔黨員〕（名）たうじん（黨人）に同じ。

たうゑ 田植（名）苗代（ナワシロ）にて育てたる早苗を水田に移し植うること。種蒔きより五十日前後に行ふを常とす。辨内侍日記「五月十日前後に行ふるとみくさの花おもしろくうたひて田植の、まねしたりし」百練抄（六、大治三年）「兩院幸八條大宮水園、有田殖事」

たうゑ しんじ 田植神事　神田に苗を植うる祭式。攝陽群談「住吉大神社。五月廿八日御田植の神事、御供の御田を植る早乙女は、泉州堺南領城町乳守遊女勸之」香取志（祀上）「大御田祭。同月五日也。世俗御田植神事と云ふ。此の日、神事に早少女と云ひて、少女八人、手に早苗を持ち、色色美服を著」

たうゑの まつり 田植興　田植の遊興。百練抄（六、大治二年）「兩院女院臨幸鳥羽殿、有田植興」中右記（六、治二年五月十四日）「三院御幸鳥羽、有田種興」

（諺）田植が濟めば裾が梁へ掛かる 用事が濟めば、其の時必要なりしものも忘るる譬へにいふ。

（諺）田植布子（コソ）に裸蓑 田植の頃寒くて布子を著、蓑時の頃暖かにて裸となる如き氣候はづれ。かかる氣候は俗に豐年の兆なりといふ。（國言 風俗）

だうゑ・うた 田植歌（名）前條に同じ。田植に早少女などのうたふ歌。田歌。平家女護島「手んでに早苗取りはやす（中略）土によどれぬ田植歌」

たうゑがさ 田植笠（名）田植などにかぶる笠。田笠。

たうゑ・ぐみ 田植胡頽子（名）〔田植の頃、實熟すればいふと〕〔植〕なはしろぐみ（胡頽子）の異名。

たうゑ・め 田植女（名）田植をする女。うゑめ。早少女。

たうゑん 〔桃園〕（名）桃の木を多く植ゑたる園（ハタ）。ももぞの。劉長卿詩「手栽松樹蒼蒼老、身臥桃園寂寂春」

たうをがたま （名）〔植〕木蘭科、をがたまの屬の常綠喬木。をがたまのきの一種。支那產のもの。からだねをがたまのき。かんしゅをがたま。

だうをく 〔堂屋〕（名）殿堂の屋根。又、大なる家。晉書（陸士衡傳）「堂屋五間、拉然而崩」

だうん 〔朶雲〕（名）他人の手紙の敬稱。朶翰。芳翰。尺書。唐書（韋陟傳）「以五采箋、爲書記、使侍妾主之、其牋答受、寫而已、皆有楷法、陟唯署名、自謂所書陟字、若五朶雲、時人慕之、號郎公五雲體」

たえ・いる 絶入（自動）息絶ゆ。死ぬ。絶息す。ぜつにふす。竹取「書きはつると、たえ入り給ひぬ」源（葵）「御せうそこきこえ給ふほどもなく、たえいり給ひぬ」

だ・えき 〔唾液〕（名）〔醫〕唾液腺より分泌せらるる清澄なる液。澱粉質を分解して食物の消化を助け、又、食物塊を粘滑にして嚥下に容易ならしむ。

だえき・せん 〔唾液腺〕（名）〔醫〕唾液を分泌する腺。口腔の左右に各三種あり。耳下腺・顎下腺・舌下腺これなり。

たえ・こがる 絶焦（自動）絶え入るほどにこがるる。深く戀ひ慕ふ。諸（生田 野道）「扶にすがり絶えこがれ」

たえ・ざま 絶狀（名、副）絶えんとする狀。枕草「蜘の巣のこぼれ殘りて、ところどころに、絲もたえざまに雨のかかりたるが」

たえす 絶（自動）絶ゆるやうになる。たゆ。つく。萬「常陸なる奈佐可の海の玉藻こそ、引けば多延須（タエス）れ、あどか多延世（タエセ）む」

たえず 絶（他動）たやす（絶）に同じ。五人女「夏中は毎日の花を摘み、香を絶えさず」綾留「紙入れに金銀を絶えさず」

たえ・ず 不絶（副）間斷なく。つづきて。常に。萬「なにはの國に天の下知らしめしきと、今の世に多要受（タエス）しぬばむ、大君の召ししぬべにはしめ結ふべしも」同「はふくずの多要受（タエス）いひつつ」同「はふくずの多要受（タエス）しぬばむ、絶えんとして繼かにつづくさまにいふ語。ときれとぎれ。源（葵）「おほい殿に、二三日などたえだえにまうで給へど」同（若菜）「いと近ければ、心ぼそげなる御聲、たえだえ聞こえて」新古今（序）「山ふかみ春とも知らぬ松の戸に、たえだえかかる雪の玉水」

たえだえ・し 絶絶（形）たえだえなり。

たえて 絶（副）〔一〕すこしも。さらに。さっぱり。ちっとも。一向。一圓。竹取

「此のめのわらはは、たえて宮づかへつかうまつるべくもあらず侍るを、もて煩ひ侍り」古今（三）「風ふけば嶺にわかるる白雲の、たえてつれなき君が心か」勢語「世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけからまし」大和物語「たきもののくゆる心はありしかど、ひとりはたえてねられざりけり」〔二〕とびはなれて。たちまちに。すぐれて。後撰（三）「玉の緒のたえて短き命もて、とし月ながき戀ひもするかな」新勅撰（三）「玉の緒の絶えて短き夏の夜の、夜半になるまで待つ人のこぬ」

たえ・はつ 絶果（自動）〔一〕全く絶ゆ。後撰（四）「たえはつるものとは見つつ筱がにの、絲を頼める心細さよ」增鏡「たえはつる契りをひとり忘れぬも、うきも我が身の心なりけり」〔二〕全く息絶ゆ。死にきる。源（葵）「夜中過ぐるほどになん、絶えはて給ひぬ」

たえ・はてる 絶果（自動）前條の口語。

たえ・ま 絶間（名）とだえたるあひだ。絶ゆる間。きれたる間。中絶せる間。間斷。仁德紀「以繁矢田堤、是時有兩處之築（ツキ）矢而乃壞之、繁寡」後撰（一）「よそながらやまんともせずあふことは、今こそ雲のたえまなるらめ」拾遺（四）「いかばかりくるしき物ぞ、かづらきのくめぢの橋の中のたえまは」

たえま 絶間絶間　たえまの重言。きれめきれめ。後拾遺（三）「はるばると野中に見ゆる忘れ水、絶え間絶え間をなげく頃かな」續古今（秋下）「秋霧のたえまたえまをながむれば、空に浮きたる月ぞ流るる」

たえる 絶（自動）たゆ（絶）の口語。

たえんさ・ん 〔多鹽基酸〕（名）〔化〕金屬によりて置換せらるべき水素原子二箇以上を有する酸の總稱。硫酸 H_2SO_4・燐酸 H_3PO_4 等の類。

だ・おび 駄負（名）馬の尻に覆ひ掛くるもの。やせかくし。（貞丈 雜記）

だ・おほばこ （名）〔植〕おほばこ（車前）の異名。

だ・おほひ 手覆（名）ゆがけ（弓懸）に同じ。

たおる （英 Towel）（名）せいやうてぬぐひ（西洋手拭）に同じ。

だ・おろし 駄卸（名）駄荷を其のまま卸し賣りにすること。

たか 高（名）〔一〕たかし（高）の語幹。萬「いやとほに國をき離れいや多可（タカ）に山を越えすぎ」竹取「こわたかに、なのたまひそ」謠曲「昔高や嵐山、人になる知らせ給ひそ」〔二〕かず。かさ。量。〔三〕牧種のかさ。とりだか。〔四〕知行・扶持などの額。祿高。〔五〕ほど。かぎり。せいぜい。程度。分際。生玉心中「命惜しい程なら、高で身を打つ事もない」浮世風呂「勘忍してやんなせえ、高が生餅ひだから、どうもしかたがねえ」同「火でも遣って火がはねるといふ物なら燒痕でも出來ぎうが、高が湯だ」〔六〕直段のうへなること。騰貴。「親株は一二圓高を示し」〔七〕たかどま（高土間）の略。（夢梅 高知）

たか が しれる 程度がわかる。際限がわかる。雪女五枚羽子板「高の知れた浮世の中」

たか を くくる 括高　其の程度を豫測す。見くびる。あなどる。若風俗「折りふし買うてもらふ蔭子にさへ高を括られ、帶解かすまでの詫びごと」

たか （名）いかのぼり（凧）をいふ。上野信濃の方言。（物類 呼稱）

たか 鷹（名）〔動〕鳥類中、猛禽類の一類。馴養して狩獵に用ふ。數種あり。一般に背面灰黑色、腹面は白色に、黑き横條多きを常とす。一歲なるを黃鷹（キタカ）、二歲なるを撫鷹（ヨタカ）、三歲なるをもろがへりといふ。又、雄は體小なるを以て、せう、雌は大なるを以ておほだか又だいといふ。かしこどり。こゐどり。仁德紀「放鷹令捕」和名抄「鷙鳥、鷹鷂總名也。日本私記云、俱知、唐韻云、鉢（ハツ）鷹鷂二年色也」同「鷹。廣雅云、一歲名之黃鷹（和名抄 之）、撫鷹（加良太加 三歲名之）、青鷹・白鷹（宣和 大鷹）」（保元物語）「鷹（太加）」（太平記）「鷹（太加）」（太平記）「鷹（太加）」（太平記

たるもの。桶・樽などにはめて締め固むるに用ふ。又、銅・鐵なるもあり。かづら

たが（名）あば（浮子）に同じ。

だが（接）さうではあるが。ではあるが。けれど。

たかあがり 高上（名）高き所へ登ること。上座につくこと。國姓爺「愛は餘り高上がり、妾それへと立ち出づる」猿蓑集「雪子や待たん餘り雲雀の高あがり」

たかあし 高足（名）一田樂の技に用ふる道具。下の横木に兩足をかけて庭上を踊りあるく。又、その技。保元「高あしに召され、築垣に御尻を懸け、よなよな御遊びある事ありしを」洛陽田樂記「高足一足」二膳などの脚の高きもの。

たかあし-がに 蟹（名）【動】節足動物中、甲殻類の一種。大なるものは脚を伸ばせば一丈以上に達し、節足蟹の一種。大なるものは脚を伸ばせば一丈以上に達し、節足動物中これに及ぶものなし。頭胸部は寶珠形にして、徑一尺餘、帶紅黄色なり。脚も赤帶紅黄色にして、第一對の歩脚最も長大、且つ大なる鋏を具ふ。我が國、東海の深所に棲息す。しまがに。

（にがしあかた）

たかあしだ 高足駄（名）足駄の齣の高きもの。今昔「中結ひて高足駄を履きて、杖を突きて」泰公覺怡記「たかあしだをはいて、御堂の前にぞ出で來たる」

たかあ-ひきぎ 高相引（名）相引の高きもの。内部に湯呑みを載する棚を設く。

たかあ-ぶぎ 高扇（名）一扇を高くあげてあふぐこと。今昔「翁出で來て上下を見上げ見下ろして、高扇を仕ひて、其の札の許に立ちて」二田樂の技などに用ふる具。竿の先に大團扇を附けたるもの。田植歌の時、蝗を扇ぎ攘ふ窟なるべし。洛陽田樂記「基忠卿、捧九尺高扇」

たかあ-あみ 高網（名）冬・春の間、鴨・小鴨などを捕らふるため、長さ七尺程の篠竹を十四五間程の間をあけ、相向かひ、たがひ違ひに六十本ほど、水溜り又は田などの島のつく所に立てならべ、網絲を右の竹に纏をへるやうに二重に卷き附けたるもの。月の出入に島さわぐ時、絲に掛かるを取る。

たかあみ-やく 高網役（名）昔時、伊勢國長島などにて、高網を以て鴨・小鴨などを捕らふる者に課したる稅。地方凡例錄「高網役・鷲運上。高網役は冬・春之内、鴨・小鴨之類を取り、鷲運上は夏秋鷲を取る運上也。明樣共勢州長島本田新田附に重に有之」

たかい 一他界 一他のさかひ。他の世界。太平記「若し此の龍王他界に移らば、池淺く水少なくして、國荒れ世乏しからん」二他人の世界。他人のなかまうち。冥途飛脚「中の好い他界より、久離切つた親子の親しみは世の慣ひ」三（人間界を去りて他の世界へ行く意）死すること。死去。後世、貴人の死去に限りていふ。東鑑「雜色成里者有年來之功、中略而去夏頃他界」平家「故頃殿御他界間爲」孤被抱母懷中」甲陽軍鑑「殊更氏康他界なれば、少しもとどこほる事有るまじく候へども」

たかい-いなぎ 高嘶（名）いななく音の高きこと。諸羅生駒も遣まず高いなないきし」齋門松「大門に轟く馬の高嘶き」

たかいぬ 鷹犬（名）鷹狩に用ふる犬。隆祐集「少將伊成朝臣住の江にて一兩日遊びて、かへさの道より鷹犬をこひ侍るとて」

たかいはい 高岩（名）高く立ちたる岩。新六帖「入海のせとの崎なる高岩に、白波としてあるる汐風」

たかいびき 高鼾（名）一いびきごゑの高きこと。平家「毛文覺、ちっとも不驚、船底に高鼾かいてぞ臥したりける」太平記「曾我「高鼾鐙」かきて寢入りたり」二高くいびきの聲たてて、よく寢入ること。五十年忌歌念佛「寄ね寄れば高鼾、前後も知らず」川中島合戰「蹈み延ばしたる高鼾」

たかう （名）たかうながたな（筍刀）の略。

たかう 他行 たぎやう（他行）に同じ。

たかう 多幸 さいはひ多きこと。多福。左傳「善人在、上則國無幸民」諺「日民之多、幸國之不幸也、是無善人之謂也」柳貫詩「此世何多幸、予生厚自憐」

たかう 他郷（名）他のさと。他の村里。諸國「他郷の者と口論し」狂言「蘆屋」「他郷の衆も餐めさせらるるは尤ぢや」

だ-から 駄餉 駄向（名）「から（餉）はしやうの轉」旅中の食物。廚事雜記「八幡行幸之時、於桂河、駄餉供之」下學集「駄向」

たかう-がたな 筍刀（名）たかうながたな（筍刀）の略。

たかう-しき 一多項式（名）【數】二つ以上の項より成る式。例（ばa+3b, a−b+5c+d）等の如し。

たかうしき-ていり 一多項式定理（名）【數】多項式の任意の冪を展開する定理。二項式定理の變形。而して（a+b+c…）^{n}の展開に於ける一般項は次の如し。

$$\frac{n!}{r!s!t!\cdots}a^r b^s c^t \cdots$$

但し $r+s+t+\cdots=n$ 又 $r, s, t, \cdots$ 等は0又は正の整數なり。

たかうすべう 鷹護田鳥尾（名）矢羽の名。鷲の羽の上下薄黑く、且つ眞中にもくま鷹の羽の如き薄黑き文あるもの。平家「十二、鎧「廿四さしたるたかうすべうの矢負ひ」義經記「四、すんとり太「ただのぶに、さきがけを給うて中略たかうすべうの矢廿四さしたるを、かしらだかに負ひなして」

たかうすべを 鷹護田鳥尾（名）前條に同じ。太平記「九、八幡「たかうすべ尾の矢三十六指いたるを、笹高に負ひ成し」

たかうち 鷹打（名）除夕七八月頃、鷹の鑄の、やうやく巣を離れて飛び翔るをうかがひ、羅（ア）を樹間に張り、死鳥を餌（ア）として捕らふること。

たかうちびき 高内引（名）高の内より差し引くこと。地方凡例錄「六、高内引、年年引」内引に、年年引・連運引と二樣有り」

たかうで 高腕（名）腕を高く取り上ぐること。源氏「十二、段長生島臺「老翁馬上をひらりと下り、高腕取って捻ぢ据ゑ」

たかうな 筍 笋（名）たかむな（筍）の音便。源「三、御寺のかたはら近き林に抜き出でたるたかうな」辨乳母集「秘えて音せぬ人の、今の帝ゐさせ給ひて、たかうなをしげりおこすれば」

たかうながたな 筍刀（名）古へ元服の習髪に、髮先、又は元結を切るに用ひたる小刀。尖（サキ）の方兩刃にして狭く、筍の狀に似たる故にいふ。

たからなつつみ 笋包（名）紙の折形の名目。

（みつつなうかた）

たかう-なま 高馬（名）たけうま（竹馬）をいふ。肥前國の方言。梅園日記

たかう-えびら 竹箙（名）武具。竹にて造りたるえびら。今昔「竹箙簿（ヤナ）箭十許り差したるを負ひて」

たかう-かかりもの 高掛物（名）江戸時代、石高に應じて、田租の外に徴收せる附加稅。例へば、小物成の一部なる三役・小役銀・大豆在納・池役及び浮役の類。地方凡例錄「高掛り物の事、中略高掛りの義、中華にては家口と云ひて家別に掛け、本朝にても往古は人別に掛け、中古は田地の反別に掛け、今は村高掛る也」地方活法「高掛り物の事」

たかう-がき 高垣（名）高く築きたる垣。神代紀「其宮也、雄（オ）柱（ヒ）太（フト）柱（ヒ）、整頓、臺宇玲瓏」諸「高垣・姫垣調ほり」

たかう-がき 竹垣（名）竹にて造りたる垣。たけがき。夫木「山がつのすどがたかがき枝もせに、夕顔なれりすがひすがひに」

たかう-かけ 箍掛（名）かづらかけ（葛掛）を云ふ、江戸の方言。物類稱呼

たかう-がしら （名）一馬具。かこがしら（鉸具頭）に同じ。小笠原入道宗實記「ちあぶみといふ事、隨兵の時、鐙のやないばを總別かたより、かこくびとたかがしら・きるしり」二籠の上部の名所。さかつらえびら（逆頼籠）を見よ。

たかう-がた 鷹形（名）鷹のかたち。

たかうがた-の-つはもの-のはた 鷹像隊幡（名）旗の名。ようざうたいばん（鷹像隊幡）に同じ。

たかがた-の-はた 鷹形幡（名）旗の名。ようざうばん（鷹形幡）に同じ。

たかがは 高川（名）水かさ高き川。萬「あすかがは高河よかし越えてきつ、まことこよひは明けず打かめや」

たかがひ 鷹飼（名）一鷹を飼養して狩獵に從ふ役。又、その人。二鷹を飼養すること。たかしゐ。たかじゃう。勢語「おほたかのたかがひにてさぶらはせ給ひける」拾遺「たかがひのまだもこなくにつなぎ犬の、はなれていかんなくる待つほど」

たかがひしゃぞく 鷹飼裝束（名）一上古の鷹飼の服裝。錦帽子をかぶり、地摺布衣に白布帶をしめ、壺腰巾に淺履をはき熊手鑓・紅袴・鳥類太刀をつく。二江戸幕府、鷹匠の服裝。辨慶格子の半鑓に淺黄霰の股引をはき、七寶つなぎの三尺を結び、春刺羽綾を著て頭巾をかぶる。

（しゃぞくしひがかた）

たかがや 高草（名）しのすすき（篠薄）をいふなるべし。古義「萬「川上の根しろ多何我夜」あやにあやに、さねさねてこそことにてにしか」夫木「秋ふかき川上とほく野わきして、やすくもたたぬ根しろたかがや」

たかがや 竹萱（名）【植】かるかや（荻草）の異名。

たかがら 高鞆（名）たかとも（高鞆）を見よ。神代紀「臂著」稜威之高鞆（ヤタ）」ぐること。井筒葉平河内通「頻かむり心しめたる高からげ、足音靜かに忍び込み」平家女護島「旅する武士の高からげ、股引・脚半・頻かぶり」

たかがり 鷹狩（名）鷹・はやぶさ・さしば等の猛禽を使ひて鳥を捕らへしむること。其の使ふ鳥によりて大鷹狩・小鷹狩の別あり。各條を見よ。たかの。放鷹。東鑑「十五、建久六年、可停止鷹狩之旨、被仰諸國御家人」同「四十一、建久二年、鷹狩事、諸人已背嚴重制符、以之爲日次之樂」長林本節用「鷹狩」

たかがり-はじめ 鷹狩初（名）年明けて初めての將軍の鷹狩。幕朝年中行事歌合「鷹狩初。民の戸ものどけき春の初とかり、かりにも常のみちは有りけり」

たかき 高木（名）丈たかき木。續現葉集「みち吉野のたか木の櫻咲きぬらし、空よりかかる嶽の白雲」

たかき に うつる 遷高木 鶯の、春に催されて、谷より出で喬木にとびうつること。貫之集「こち風に米とけなば鶯の、たか木にうつる聲を告げなん」詩經小雅「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶、出自幽谷、遷喬木、嚶其鳴矣、求其友聲」

たかき 高城（名）山地にある城。記「うだの多加紀」に、しきわなを張る」

たかぎし 高岸（名）高く聳え立つたる岸。盛衰記「八、共「武者一人、高岸に立ちて」

たかぎたかのは 高木鷹羽（名）紋所の名。

たかぎび 高黍（名）【植】たうもろこし（玉蜀黍）の異名。

たかさぶとり 高給取（名）高き給金取。五十年忌歌念佛「蒔が產んだる高給取の手代は、主の代りをも清十郎といふ子を持って」

たかく 一多角（名）一角の多きこと。二多方面なること。複雜なること。

たかく 多額（名）多くのたか。かさだか。貴族院令「第五條」「多額の直接國稅」

たかく-けい 一多角形（名）【數】三つ以上の直線によりて圍まれたる平面の部分。其の直線を多角形の邊と云ひ、邊の數が三・四・五等なるに從ひて三角形・四角形・五角形等と云ふ。

たかく-さ 高草（名）たけ高き草。夫木「星見ゆる夏げの鹿のかくろへて、ふじの裾野にしげる高草」

たかくさ かくれ 高草隱 高草にかくるること。未詳「御狩人なすの夏野は心せよ、高草がくれ折木ふすなり」

たかく-なぶぜいしゃ 一多額納稅者（名）多額納稅者議員の互選人たる資格を有するもの。即ち、各府縣にて多額の直接國稅を納め、且つ法定の消極條件に抵觸せざる滿三十歳以上の男子十五人の稱。貴族院議員資格及選擧爭訟判決規則第十「補缺議員の選擧開院中に在るときは中略多額納稅者に在ては勅任せられ後十日を以て出所の期限とす」

たかくなぶぜいしゃ-ぎゐん 一多額納稅者議員（名）貴族院の勅任議員の一。多額納稅者の互選に當選して勅任せられたるもの。其の任期は七箇年とす。貴族院議員資格及選擧爭訟判決規則第三「多額納稅者議員の互選人」

たかくら 高倉（名）屋の棟高き倉。扶桑略記「廿五、天暦七年、去夜失火、登一神祇官高倉、撲滅火者、宜令給綠」京都御役所向大概覺書「五、山城國寺社方、上賀茂社堂舍中略高倉」

たかくら 高座 (名) たかみくら(高御座)に同じ。古語拾遺「高皇産霊尊」春びをかすがの山の、高座(たかみくら)のみかさの山に」

たかくら-の 高座之 (枕) 高御座には上に蓋(きぬがさ)あるより、みかさとかけていふ。萬「はる日をかすがの山の、高座之(たかみくら)みかさの山に」

たかくるま 高車 (名) 高き櫓の下に車を附けたるものなるべし。天智紀「唐軍・雲車(たかくるま)・衝櫓鼓譟、嗔然」

たかけ 竹筒 (名) 竹かご。竹製の入わ物。字鏡「筩竹筒也、酒日筩、方日筩、太加久、小筩也」

たかげた 高下駄 (名) あしだ(足駄)に同じ。

たかこじ 高巾子 (名) かうこじ(高巾子)に同じ。

たかこし 高輿 (名) 乘物の一種。あげこし(上輿)に同じ。

たかごし 高腰 (名) 腰を高くして屈めぬこと。傲慢なるさまにいふ語。狂言「高腰を掛けてかげ事を言ひをる」孕常磐「後悔めさるが笑止なと、店前に高腰掛け、揚げ足してぞおはしける」

たかことば 鷹詞 (名) 特に鷹をつかふ者の使用する詞。やまことば。古今要覽稿人事「鷹詞山詞野詞にても鷹をつかふに限りていひつけたる詞あり。これを鷹詞といひ(渡部)又、山詞といふ(渡部)」

たかごとね 高聲 (名) 高き音聲。かうやう。太平記「一番目日本一の剛の者、謀叛に與し自害する有様見置きて人に語れと、高聲に呼ばはって」

たかさ 高 (名) たかきこと。たかき度合。

たかさ 田笠 (名) 小さく淺き笠にて田夫などの著る卑しきものなるべし。今昔「ひた黒なる田笠といふ物の、鉉(つる)破れ下げたるを著たる老法師」散木集「たがさといふものきたる男の、はたけに通ふを見て」

たかさき-たび 高崎足袋 (名) 上野國高崎より出づる足袋なるべし。一代男「たかさきたび筒短に、かぞ雪踏をはき」

たかさき-あふぎ 高崎扇 (名) 紋所の名。

たかさご-さう (名) 【植】菊科、黄瓜菜(ちしゃ)。葉は細長くして互生し、莖の上部は分岐して各梢頭に頭狀花を有す。夏日、先端に淡紫色の暈ある白色の花を開き、形ちしばりに似たり。我が國陽地に自生す。

たかさご-そめ 高砂染 (名) 播磨國姫路等より出だす染物。二重形染にて、松にちなみある形、或ひは尾上の鐘の紋を種種に染め出だしたるもの。(守貞)播磨國

たかさご-ぶね 高砂舟 (名) 播磨國高砂の船。堀河百首「夜もすがら大島あらしおろすなり、高砂舟は今ぞ出づべき」

たかさご-ゆり (名) 【植】てっぱうゆりの異名。

たかさじき 高桟敷 (名) 高く構へたるさじき。

たかさぶらう 鱧腸 (名) 【植】菊科、鱧腸屬の草本。莖の高さ二尺餘に達す。葉は對生、披針形にして、鋸齒を有し、其の面粗糙なり。八九月の頃、白色の小頭狀花を開く。果實は熟して黑色を呈す。我が國、路傍・田畦等に自生す。いたちぐさ。いたちのひともとぐさ。うなぎころし。うなぎつかみ。うまきたし。ぎばさんらいさう。

たかさを 竹竿 (名) たけのさを。たけざを。字鏡「竿太加佐乎」

たかし 鷹師 (名) 一たかじやう(鷹匠)に同じ。二主獵務の職員。鷹隼の調習に從事する判任官。宮内省官制第五十九條「鷹師」

たかし 高 (形ク) 一上(かみ)長し。重(おも)なり多し。(ひくしの對)萬「多可伎(たかき)ねにて」字鏡「凸(たかし)」四貴し。身分すぐれたり。高貴なり。雄略紀「天位(たかくらゐ)」勢語「おふなおふな思ひはすべしなそへなく、たかきいやしきくるしかりけり」五けだかし。いやしからず。「志たかし」六強し。はげし。萬「入江こぐ梶のおと多可之(たかし)」字鏡「嗟(たかし)」枕「大かた家の男主ならでは、たかくはなひたるもの、いとにくし」七廣くあらはれてあり。廣く世に聞こゆ。萬「見渡しの島の名高之(たかし)」八まさりたり。すぐれたり。「いきを高し」「眼が高い」九年齢多し。顯宗紀「老(たかし)賢」十遠し。續後拾遺「雄王よしの川よしとは誰れか岩波の、高きむかしの道慕へども」十一價貴し。高價なり。狂言「是れ又高い事で御座る、ちっとね切りませう」十二射藝の話。張弓の弦と弓との間の距離が廣し。ふとし。

たかい かね 高金 高利のかね。利子の高き金錢。「たかい金を借りる」

たかき ひと 高人 高貴の人。高位高官の人。貴人。源明「あやしき海人どもなどの、たかき人おはするところとて集まりまゐりて」保憲女集「かしこきは高き人となり、をさなきはげすき身と定めける」

たかき まじらひ 高交 高位高官の人との交際。宇津保(俊蔭)「我が有りつる世には、我が子に高き交らひもせさせんと思ひつれども」

たかき まへつぎみ 高臣 高き位にある臣下。孝德紀「上臣(たかきまへつぎみ)」

たかき みくらゐ 高御位 天皇の御位。天位。雄略紀「天位(たかくらゐ)」

たかき や 高屋 大いなる建物。大廈。高樓。枕「二十餘人ばかりそなたにゆきて走りより、たかきやにのぼりたるを、これより見あぐれば」新古今「高き屋に登りて見れば烟立つ、民のかまどはにぎはひにけり」

たかき よはひ 高齢 かうれい(高齢)に同じ。勢「老いの坂高きよはひを算へても、殘る千年は君がまにまに」

たかく とまる 高止 尊大にかまふることに譬ふ。浮世風呂「風見の鳥を見るやうに、高くとまってすまあして居るも、小雜に障らあ」

(諺)高からう善からう、安からう惡からう 價の高下によりて物の良否を判せんとする人情をいふ。

(諺)高きに升るは低きよりす 物事の進行には順序ありといふに譬ふ。書經太甲「若升、高必自下、若陟、遐必自邇」

たかじあすたーゼ (名) (英 Taka-diastase) 【化】澱粉を糖化せしむる作用を有する一種の酵素。胃の消化を助くるために藥用となす。高峰讓吉博士の發見による。

たかし-がしら 鷹師頭 (名) たかじやうがしら(鷹匠頭)に同じ。大祓院殿御實紀「正保三年十二月四日、鷹師頭、加藤助右衛門則吉、大納言殿に付けらる、所屬も同じ」

たかしかす 高敷 (他動) 〔次條の延〕

次條の敬語。萬「やすみしし吾が大君の、高敷爲(たかしかす)やまとの國は」

たかし-しく 高敷 (他動四) 〔たかは尊ぶ意、しくはしるの義〕たかしる(高知)に同じ。萬「長柄の宮に、まき柱ふと高敷(たかしき)て」

たかし-しと 竹矢籠 (名) 竹の筒を彫りぬきて壺胡籙(つぼやなぐひ)の如くに作りたるもの。貞丈雜記「一說、鷹の羽の矢をさしたる尻籠。著聞集「たかしこかき負ひて、眞弓うちかたげて」平家「平家十文字、佐殿野武士、本門」たかしこ附けたる男の、黑漆の弓持ちたる一人きたる」

たかし-しのぎ 高鎬 (名) 刀劍の作りの名。しのぎを高くしたるもの。

たかし-ほ 高潮 (名) 海上に互大なる波浪の立つこと。つなみ。源「今しばしかくだにあらば波にひかれて入りぬべかりけり、たかしほといふものになん取りあへず人そこなはるとは聞けど」同「たかしほにおぼて、此の頃娘などは岡べの宿にうつして住ませければ」今昔「風大きに吹きて雨多く降る。これに依りて高潮上りて、大小の諸の木、多く河より流れ下だる」

たかし-ほた 高島田 (名) 島田髷の根を高くあげて結ひたるもの。三代男「高島田いとはでに、袴かいどりて八文字の踊みやう、笑める顔、類ひなく作れり」好色伊勢物語「つつゐづつ井筒や銀丸島田、ゆひにけらしな我が見ざるまに」(銀丸島田、たかしまだ、たかしまだ、銀の髷のゆひやう也)

たかし-ま 高島石 (名) 近江國高島郡に產する古生代の粘板岩・輝綠凝灰岩等の稱。硯石に用ひらる。

たかじやう 鷹匠 (名) 一たかがひ(鷹飼)に同じ。大鏡「狂言師、鷹匠に仰せ付けられ、逸物の鷹を合はせけれども」有德院殿御實紀附錄「元祿中、放鷹の事をとどめさせ玉ひしとき、鷹匠の頭も大番の士とせられ、鷹匠はみな小十人組に入れられける」二主獵寮の職員。鷹師を助くる判任官待遇。判任待遇等外宮內職員職制條「鷹匠」

たかじやう-がしら 鷹匠頭 (名) 江戸幕府の職名。鷹匠を率ゐて將軍の鷹狩又は御馴等の事を總べ掌る役。

たかしやうぞく 鷹裝束 (名) 一鷹狩の支度。日葡辭書「東鑑、十、建保四年、十月九日、鷹狩、東鑑、十、建保四年、十月十九日、大、鷹、鷹狩、高橋判官盛綱爲、鷹裝束、招請之次、鷹、鷹狩、世上遊事」二鷹狩の時の服裝。たかがひしやうぞく(鷹飼裝束)を見よ。

たかじやくし 〔多賀杓子〕 (名) おたがじやくし(御多賀杓子)を見よ。

たかしらす 高知 (他動四) 〔次條の延〕次條の敬語。萬「やすみししわご大君の、高知爲(たかしらす)よしぬの宮は」同「神代よりよしぬの宮にあり通ひ、高所知(たかしらす)は山河をよみ」

たかしる 高知 (他動四) 〔たかは貴みて言ふ意〕しりたまふ。領し給ふ。治め給ふ。しろしめす。記「於高天原、冰椽多迦斯理(たかしる)豆」萬「かむさびせすと、よしぬ川たきつかふちに、高どのを高知(たかしる)まして」嵯峨紀「神武」

たかすがき 竹簀搔 (名) 竹にて編みたるすがき。堀河百首「山がつの葦屋にかけるたかすがき、ふしにくしとも思ひけるかな」月詣集「あふことはまばらに編めるたかすがき、たえまがちなる流れなりけり」

たかすき (名) たかつき(高杯)に同じ。大嘗祭式「多加須岐(たかすき)八十口」永享大嘗會記「多賀須岐(たかすき)、擎比良須岐(ひらすき)」

たかすだれ 竹簾 (名) 竹にて編みたるすだれ。保憲女集「まれにかかれるたかすだれ、涙ばかりの出で入りに」

たかすなご 高砂子 (名) 砂の高く盛り上がりたる所。小高き砂地。夫木「須磨則石浦の見渡し近けれど、あゆみくるしきたかすなどかな」

たかすね 鷹居 (名) たかじやう(鷹匠)に同じ。

たかせ 高瀨 (名) 一川の瀨の淺き處。あさせ。新古今「夏うかひ舟たかせさしこす程なれや、むすばほれゆくかがり火の影」二たかせぶね(高瀨舟)の略。和名「艇、中舟、小而深者、曰艇、太加世、俗用志賀舟」源「はし姫の心をくみてたかせさす、さをのしづくに袖ぞ濡れぬる」

たかせ-がひ 高瀨貝 (名) 【動】さらさばていの異名。

たかせ-ぶね 高瀨船 (名) 河船の名。古へのは小さくて深し。後世のは大きくて底平たく淺し。三代實錄「貞觀十六、元慶八、仁和二、寛平元、延喜八、寛平元、延喜八、寛平元、延喜八

墓の異名。㊁たにたでの異名。

たかたぬき 鷹靫 (名) 鷹を使ふに用ふる手袋。ゆがけ。和名十五、鞲沢太「鷹聞書鷹たぬき、長さ四寸八分。但し身によるべし。へり廣さ四分、裏に二寸計り皮を返したるべし」

たかたは 高田派 (名) せんじゆじは(専修寺派)に同じ。

たかだま 竹玉 (名) 竹を管玉などの如く切りて緒に通したるもの。一説、竹につけたる玉。萬「榊が枝にしらがつくゆふ取りつけて、いはひべをいはひほりする玉、竹玉(たまたま)をしじにぬきたり」

たかたやう 高田様 (名) 幅四寸ばかりの帯を腰にぐるぐる巻きて、其の端を結ばず、はさみ込むこと。慶長頃の女の風。落穂集「女中の帯中略別して高田やうと申し候、三つ割りを又三分狭にくけ、其の端を結ひ、押し込みて差し置き候如く有之候」

たかだんし 高檀紙 (名) おほたかだんし(大高檀紙)に同じ。明月記(安貞元年四月十三日)「右少辨爲經奉書(宣旨)高檀紙」乳母草子「料紙とあらんに、ひきあはせ・高檀紙・こたかだんし・すぎはら、出だすべし」

たかちやうちん 高提燈 (名) たかはりやうちん(高張提燈)に同じ。見聞雑録「總赤の高挑燈は謙信の旗本也」國姓爺鳥「百千の高提燈、一度にぱっと立ったるは」

だかつ 蛇蝎 (名) じやかつ(蛇蝎)に同じ。

たかつかさ 主鷹司 (名) 古へ、鷹犬の調習を掌りたる役所。兵部省に屬す。職員令「主鷹司」

たかつかひ 鷹遣 (名) 鷹狩に鷹を使ふ人。

たかつかひ 鷹使 (名) 武家時代、鷹狩などの事に就きての使者。

たかつがみ 高津神 (名) 雷又は尺狗などをいふと。大鏡 師輔 祝詞式大嘗「高津神(たかつかみ)乃災」

たかつき 高坏 (名) 食物を盛る器。かはらけの下に、輪に作りたる高き臺を添へたるもの。又、土にて、かはらけと共に作り附けにしたるものあり、土高坏(つちたかつき)といふ。後には木にて全體作り付けにし、漆塗などにせるあり、或ひは上を膳の狀に廣くしたるもあり。たかすき。こしだか。萬「高坏(たかつき)に盛り机にたてて、母にまつりつや」勢語「其のみをたかつきに盛りて、かしはをおほひて出だし」宇津保 上 俊蔭「女御の君の御前には、沈のをしき、同じたかつきにする五九つ」源 宿 玉 紫たんのたかつき」

(きつかた)

たかつくゑ 高机 (名) 脚高き机。

たかつとり 高津鳥 (名) 空をかくる鳥。空を翔りて人に災をなす鳥。祝詞式大嘗「高津鳥(たかつとり)乃災」同 鎮魂 天若彦毛返曾不申乎、高津鳥(たかつとり)殃留依岳立處留身亡支」

たかづの 高角 (名) 兜の前立(まえだて)の一種。鹿の角を高く立てたるもの。平治 兵乱 高角の冑の緒を締め」

たかづのうつ 高角打 たかづのを兜の前立とす。保元 上 合戦 「高角打たる兜を著」平家 四 宮御 「足利の其の日のしやうぞくには 中略 たかづのうったるかぶとの緒をしめ」

たかつば (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。たかのはだひと同屬にして、甚だこれに類し、體灰褐色にして、背鰭より側線に亙りて黒色の縱斜條數箇あり。我が國、近海に產す。

たかつまど 高妻戸 (名) 高く上げて作りたる妻戸の稱。著聞集「貞觀殿の高妻戸より、をどりおりさせ給ひける」

たかて 高手 (名) 人を縛り上ぐるにいふ語。臂より上、肩より下の稱。(小手の對) 狂言 生酒 「小手の縄をゆるし、高手ばかりにて御前に引きすゆる」傾城島原蛙合戰 足 「琵琶の姫の高手の縄」

たかてうし 高調子 (名) 調子のたかきこと。てうしだか。

たかてこて 高手小手 (名) 人を後手に類より肱をかけて厳しく縛りあぐること。盛衰記 宮 「島指の直垂著て、高手小手に縛られて」太平記 廿四 「抱手三人走り寄つて中に擧げ打ち倒し、高手小手に禁めて侍所へ渡せば」

たかとう (名) 【植】㊀ちやんばぎく(博落廻)の異名。㊁つるどくだみ(何首烏)、又、にがかしう(黄獨)の異名なるべし。㊂まつかぜさうの異名。

たかとうだい 高燈臺 (名) 腰高き燈臺。盛衰記 廿八 「怒侍を見入れたれば、高燈臺に火白く掻き立てたり」

(いだうとかた)

たかとうだい 大戟 (名) 【植】大戟科、大戟屬の多年生草本。莖の高さ三尺餘に達す。葉は互生、披針形、細

(いだうとかた)

の突起あり。我が國、山野に自生す。有毒植物なり。

たかとうだいくわ 大戟科 (名) 【植】顯花植物、雙子葉類の一科。草本・灌木又は喬木。多くは乳液の液汁を含む。葉は通常互生し稀に對生又は輪生し、往往、托葉を供ふ。花は單性、雌雄同株又は異株。萼は存在し又缺くることあり。花冠は通常缺如す。雄蕊は一箇乃至多數、雌蕊は通常三箇の心皮の結合せるものにして、概ね三室の上位子房を有す。胚珠は子房の各室に一箇又は二箇あり。果實は通常蒴・稀に漿果又は核果なり。種子は胚乳を有し、往往・假皮を供ふ。かまら・たとうだい・ほるとさうの類これに屬す。此の科の植物は温帶・熱帶に產す。

たかとうろう 高燈籠 (名) 下文を見よ。昔物語「歴歴の衆、死去の人あるは、大かた七回忌まで毎年七月高燈籠を立つる、長さ七八間ばかりの杉の丸太の上に、三角にいらか結ひ、杉葉にて包み、しでを切りて附け、燈籠は辻番の行燈の類にて小さく拵へ、上を開き、下をすぼませ、屋根は板にて拵へ、玄關と臺所の間の廣き所に立てる。七月朔日より晦日まで、毎夜暮れ六つより明け六つまで燈す、一向宗にはこの事なし。他宗は何れも此くの如し」賀古教信七墓廻「書きたる字なりをば高燈籠に表して、無明の闇を照らすべく」

(うろうとかた)

たかとき 鷹時 (名) 鷹をつかふ時。鷹狩をなす時。夫木「朝霞まだたかどきも待ちつけず、すずろだちして鳴くきぎすかな」

たかどぢやう 鷹鰌 (名) 【動】たかのはどぢやう(鷹羽鰌)の異名。

たかどの 高殿 (名) ㊀高く造りたる家。又、二階造り以上の家。仁德紀「登高臺以遠望之」靈異記「樓閣多端、日本紀寛宴歌「多賀度能」に上りて見れば天の下、よもにけぶりて今ぞ富みぬる」和名十「謂臺上構屋爲樓」天武紀「設壇場」即帝位於飛鳥淨御原宮」觀 聖 紀 ㊁高き壇。壇。

たかどのや 高殿屋 (名) 前條に同じ。神代紀「臺宇」(たかどの)」舊 玉 井「高殿屋照り輝き」

たかとび 高飛 (名) ㊀高く空中に飛ぶこと。㊁體操の一。體を高く躍り上がらすること。㊂盗賊などの、遠方へ逃走すること。日本 國 紀

たかとぶ 高飛 (自動) 空高くとぶ。そらとぶ。萬「みそら行く雲にもがもな、高飛(たかとぶ)ふる鳥にもがも」

たかとま 高土間 (名) 劇場の見物人の座席の一。下さじきの前にて一段ひくき所。平土間よりは一段高し。

たかとも 高鞆 (名) 普高くひびく鞆。記「臂取佩伊都之竹鞆(たかとも)而、弓腹振立」神代紀「臂著稜威之高鞆(たかとも)」

たかとり 高取 (名) ㊀知行を受くること。又、其の人。㊁多額の知行を受くること。又、其の人。㊂夾條の畦。圖りんづけどり(盤附取)に同じ。地方要集錄 上方藏東方巡 附篇之六法 「上方は厘附取也、高取ともいふ也」

たかとりやき 高取燒 鷹取燒 (名) 筑前國早良郡西新町高取より製出する陶器。質緻密にして堅硬なり。筑前國續風土記 「鷹取燒器。鷹取燒は朝鮮軍の時、加藤主計頭清正、彼の國にて瓷器を製する者を連れ來たり、肥後にて瓷器を作らしむ。其の者の名を井戸新九郎と號せらるる故、其の製せし器を井戸燒と云ふ、後に長政公より招きて筑前に呼び寄せ、家臣手塚氷雪に命じ、氷雪が居城鞍手郡鷹取にて瓷器を製せしむ。よって鷹取燒と名付けて今に是れを稱す」

たかな 高菜 (名) 【植】おほがらし(大芥)の異名。和名廿、辛芥 太加

たかな 菘 (名) 【植】たうな(菘)の異名。字鏡「菘太加」伊呂波字類「菘菜(たかな)」

たかなからし 高菜芥 (名) 【植】おほがらし(大芥)の異名。

たかなは 高縄 (名) 下文を見よ。鳥を捕ふるために縄に鏡(たかな)をつけて高く張り置くもの。謠 忠知 「身の苦しさも悲しさも、忘れ草の追鳥、高縄をさしひく沙の」日本山海名產圖會 鳥 「鳥は中略是れを捕るに中略一法に高縄と云ふ有り、是れは池沼・水田の鳥を捕るが爲なり。先づ鏡を寒に凍らざるが爲め、油を加へて是れを一度煮て、苧に塗り、轆に卷き取り、さて兩岸に篠竹の細きを長さ一間計りなるを、間一間半に一本づつ立て並べ、右の絲を纏ひ張る事圓の如し中略一方に向かひたる一本づつの竹は、尖の切りかけの管に油を塗り、絲の端をかけ置き、鳥のかかるに付けて、管はづれて纏はるるを捕ふ。是れを棚が落ちるといふ。東西の風には南北に延き、南北の風には東西にひき、必ずず風に向かって飛び來たるを待つなり」

たかなぶり (名) 鷹の鞭。鷹の羽並(わなみ)をつくろひ、嘴に附きたる餌を落とし、又は夜狩の時、鷹をなぶりて寢させぬために用ふ。定家卿鷹三百首 冬 「口餌引きはしをすらする鷹なぶり、腰にさしてはむちかとぞ見る」

たかなみ 高浪 (名) 高く立つ波。おほなみ。新六帖「今ぞ我れあら磯岩の高浪に、つちふみかねて袖ぬらしつる」謠 松風 「須磨の高波はげしき夜すがら」

たかに 高荷 (名) ㊀高く積みあげたる荷。謠 賀茂 「山賊・夜盗のぬす人ら、高荷をおとし」㊁江戸時代、賣品を一丈程の高さに積み重ねたるを背負ひて賣りありきたる者の稱。安永の頃まであり。

(俗)高荷をつけたる馬の岸の細道傳ふ 危險なるに譬ふ。

たかぬ 綰 (他動) 集めて一つにす。つかぬ。たぐ。萬「たつかつゑ腰に多何綰て、かく行けば人にいとはえ」

たかね 高根 高嶺 (名) 高き峰。萬「田子の浦ゆ打ち出でて見ればま白にぞ、富士の高嶺に雪はふりける」同 「さぬらくはたまのをばかり、惜しからくは富士の多可禰のごと」

たかね 高音 (名) ㊀高き音。㊁三絃の合奏に、甲(こう)音と乙(おつ)音との二つの調子を互ひに交ふるもの。

たかね 高直 (名) 高き直段。高價。「一興方の高直」狂言 鏡 「ことの外な高れでござる」

たかね 飴 (名) あめ(飴)の古名。神武紀「以八十平瓮(無水造飴)」

たかね 鏃 鏑 (名) 鋼鐵にて作りたる鏃。金屬の彫刻・截斷又は岩石等を破壞するに用ふ。和名十五、鏃 加 「鏑器也」小右記 長 四 五 「以鐵槌鏑等可破大石」

たかねおぼえ 高直覺 (名) 取引所の語。高直に慣ること。「高直覺えに買ひ慕ふ人氣」

たかねおろし 高根颪 (名) 高き峰より吹き來る風。夫木「比叡の山高根おろしのうき摩に、雪ふきわたす滋賀の浦波」

たかねさう (名) 【植】莎草科、藨(たかね)屬の多年生草本。葉は披針形、幅六七分、長さ七八寸に達するものあり。地下莖より地中を横走する鉤枝を出だして繁殖す。春季、葉間に尺餘の花莖を抽き、疎らに分岐して綠褐色の小花を開く。我が國、山地又は山林中に自生す。ささなげ。

たかねしだ (名) 【植】水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生草本。地下に根莖を有し、之より狹長なる羽狀複葉の葉を數多叢生し、高さ五六寸に達し、葉柄の下部には鱗片葉を生ず。羽狀葉邊は大小不齊の缺刻鋸齒ありて、其の中脈の左右に子嚢群を生ず。我が國、高山に自生すれども、極めて稀なり。

たかねすみれ (名) 【植】菫菜(ビオラ)科、紫花地丁(スミレ)屬の多年生草本。概形は、きばなのこまのつめに酷似し、只葉質厚く、花形大なるを異とす。七八月頃、黄色の小花を開く。我が國、信濃國八ヶ岳・蓮中國岩手山等の高山に自生す。

たかねつめくさ (名) 【植】石竹科、漆姑草(ツメクサ)屬の多年生草本。莖の高さ二三寸、叢生す。葉は細長にして對生。七・八月頃、莖頂に白色五瓣の一小花を開く。我が國、中部及び北部の高山に自生し、又、觀賞用とす。

たかねとんぼ (名) 【植】蘭科に屬する多年生草本。莖の高さ、二三寸。葉は對生、葉面光澤を有し、形やや圓形、先端尖り、基脚を包む。八月頃、花莖上に黄色小形の花を穗狀に開く。我が國、高山に自生す。

たかねなでしこ (名) 【植】石竹科、瞿麥(ナデシコ)屬の多年生草本。莖の高さ七八寸。葉は狹長にして尖り、對生、平行脈を有す。七八月頃、淡紫紅色の花を開く。我が國、中部及び北部の高山に自生し、又、觀賞用とす。

たかね-ひかげのかづら（名）【植】石松（ヒカゲノカズラ）科。石松屬の多年生常綠草本。莖は長き紐狀をなして地上に臥し、所所に根を生ず。葉は杉の葉樣、短針狀にして密生す。子蘰は特別の枝を直立して、其の上部更に分枝し、長さ一寸許りの圓柱狀の穗を附け、短縮せる鱗片の間に胞子を生ず。我が國、高山に自生す。

たかね-ぶね　鑿船（名）鑿を敵船に打ち込みて毀ち沈むることを任務とする船。

たか-ねんぶつ　高念佛（名）聲高く念佛すること。十調「かの松原にて高念佛を申して、其のまぎれに鐘をわりて」盛衰記十八「阿彌陀佛、阿彌陀佛と、高念佛申して」

たか-の　鷹野（名）たかがり（鷹狩）に同じ。應仁略記「義就、鷹野に出でたりと云ふ沙汰あり、いかなれば上聞に達しけん」

たか-の-つかさ　主鷹司（名）しゅようし（主鷹司）に同じ。三代實錄四十四元慶七年七月五日「弘仁十一年以來主鷹司、鷹飼三十人、犬三十牙食料、毎月充彼司」

たか-の-つめ　鷹爪（名）■抹茶の一。上品なるもの。■【動】たかのはどぢやう（鷹羽鰌）の異名。■【植】こしあぶらのき（金漆樹）の異名。■【植】つめくさ（漆姑草）の異名。■【植】めのまんねんぐさ（佛甲草）の異名。■【植】をのまんねんぐさの異名。

たか-の-つめ（名）【植】五加（ゴカ）科、五加屬の落葉喬木。葉は長き葉柄を有する掌狀複葉にして三箇の小葉より成り、脊迫、枝端に叢生し、小葉は稍不整卵形、先端鋭尖、緣邊に細鋸齒を有す。初夏、葉腋に長梗を抽き、淡綠色、小形の花を繖狀に開く。我が國、山地に自生す。

たか-の-とり　鷹鳥（名）【動】きじ（雉子）の異名。鷹は雉子をとるを專らとしたればいふ。其の外は鷹のうづら、鷹のひばり、鷹の鶴などと、其の鳥の名をいふ。大内問答「たかの鳥とはきじなり」

たか-の-は　鷹羽（名）■鷹の尾の羽。矢羽に用ふ。東大寺獻物帳「赤漆桐木叙一具（中略）白阿蘇胡錄十四具（中略）」■紋所の名。鷹の羽を象りたるもの。いつつたかのは・くぜたかのは・げいしうたかの・さんぼんたか・たかのけてふ・たかのはねげたか・だきたかのは・ちがひたかのは・ならびたかのは・ふせんたかのは等種種あり。太平記十四「宮方ハ鷹ノ羽ノ旗一流れ指し揚げ」■料理の名。かまぼこの肉へ筋かひにあらめを入れ、板に附けて燒きて切りたるもの。■和船のからかいの上にある蛭股（ヒルマタ）の狀の飾り。■【動】たかのはだひの略。■【植】とたにわたり（水机周）の異名。

五つ羽の圓
羽の圓ひがち
羽の圓ちがだ
羽の圓ひがた
羽の圓ひがた
羽の圓ひがた

れ、中高に書くこと故實なり。條數の事、三箇條を本とす、附書は中の條に附之者也、若し五箇條も七箇條も條數あらば、法の外と知るべし。たとへ幾條あるとも、先づ初めに定と書く、寶買物に付きて可〻敢沙汰一題、善惡を取り交ぜて書きたるを高札と云ふなり。大形市町に立之者也」〔二〕人札の價高きもの。

たかぶね 鷹船 (名) 昔、攝津國大阪川口御船屋にありたる小さき官船の名。鳥背船。

たかぶり 高 (名) たかぶること。おごり。おほぶう。おほへい。

たかぶる 高 (自動四) 〔一〕たかまる。すむ。充迫す。「獺が高ぶる」狂言 鉢立 脈が殊の外高ぶりますが」〔二〕ほこる。おごる。押柄なり。保元 左近將曹「天下に高ぶるに驕を以てす」

たかべ (名) 【動】こがも(小鴨)の異名。萬三「人漕がずあらくもしるしかづする、をしと高能(ヲシ)とふなのへにすむ」和名 鵯(ヒヨドリ)加一名、沈鳧。貌似鴨而小、背上有文」鳧・鵯字

たかべ (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。體偏圓形にして、背部蒼綠色、腹部に至るに從ひ銀白色となる。櫛鱗を被り、上顎僅かに長く、齒は微小なり。我が國、近海に產す。

たかへ 違 (名) 〔一〕たがふること。ちがはすこと。あやまり。枕三「縫ひたがへの人のけに直さめ」〔二〕かたたがへ(方違)の略。枕三「こよひ方のふたがれば、たがへになんゆく」

たかへい 高塀 (名) 高く造りたる塀。由良家傳記「那波落城の時、那波殿家老三歳の幼子を懷に入れて、高塀より下へ落ち申し候」

たかへし 手返 (名) 腕おしの類なるべし。明道 和名三「相扶加以拳加人也。橋氏漢語抄云、拗腕上」

たがへし 耕 (名) たがへすこと。たがやし。

たがへす 耕 (他動四) 作物を植うるために田畠を掘り返す。たがやす。字鏡「糒田畠 名義抄「耕タガヘス」夫木七「この頃のしづがたがへすからすきの、うしと思ふも力なの世や」

たがへ-もの 違物 (名) とりたがへたる物。枕三「あやしのたがへ物や、人のもとにさる物つつみて送る人やはある」

たかへ-べや 鷹部屋 (名) 鷹を飼ひ置く所。大友興廢記 鎮公「御鷹部屋廿間」

たかへり 手返 (名) たがへること。夫木七「みず狩りする片野の薄招けども、空とぶ鷹はたがへりもせず」

たかへる 手返 (自動四) 合はせやりたる鷹、鷹飼の手に返り來たる。袖中抄 夫木「おぼつかなたが「へる鷹もいかたらん、かりぼつの小野の雪ぐれの空」

たがへる 違 (他動下) たがふ(違)他動の口語。

たかーほ 高帆 (名) 本帆(ホンポ)の上に高くかけたる帆。

たかーほこ 鷹槊 (名) 鷹をすゑ置く木。春は梅、夏は擬、秋は檜、冬は松を用ふと。字鏡集「槊タカホコ」伊呂波字類「槊タカホコ」

たかーま 高天 (名) たかまのはら(高天原)に同じ。祝詞 式 遺遣 高天(タカマ)の原 神王「高御魂神魂命」

たかまがはら 高天原 (名) たかまのはら(高天原)に同じ。夫木四「やほよろづ四方の神たち集まれり、たかまがはらにきき高くして」

たかまき 高蒔繪 (名) 地より高くもり上げたる蒔繪。大磯虎稚物語 鳥籠「あっぱれ馬や駿足や、梨子地の鞍に高蒔繪」名物六帖 五「泥金蒔漆(マキエ)」

たかまくら 高枕 (名) 〔一〕枕を高くして寢ること。今昔七「高枕に寢ぬる枕上に、打出の太刀おきたり」太平記 廿三 屋形の内に高枕して、鮑鰒(キレ)かきてぞ臥したりける」〔二〕安心をして注意せざること。安心して寢ること。槍權三「刀の刃に血も附けず、高枕でも暮されず」

たかまげ 高髷 (名) 島田髷の根を高く結ひたるもの。たかしまだ。

(げまかた)

たかまつ-の-ぜじゃう (名) ぜじやう(畝隴)に同じ。

たかまつ-やき 高松燒 (名) 讃岐國高松にて、利兵衛といふものの燒き始めたる陶器。仁清燒に似て厚し。利兵衛燒。陶器考 附錄 高松燒

たかまの-はら 高天原 (名) 〔高天原は我が國天孫種族の祖國にて、天上にありといふ〕そら。天空。祝詞式 鎮魂祭「高天原に神留坐」風雅集 曇りなく高天の原に出でし月、やほよろづ代のかがみなりけり」

たかまはし 箍廻 (名) 樽のたがを、竹の枝などのY字形したるものにて、地上を押しまろばす戲れ。其角句「たが廻したがたが廻し始めけん」

たかまゆ 高眉 (名) 公家の子元服の時、眉を剃り落とし、其の上部に墨にて圓く點を二つ描くこと。

たかまる 高 (自動四) たかくなる。あがる。

たかみ 高 (名) 高き所。高き部分。

たかみくら 高御座 (名) 〔一〕御即位、朝賀等の大儀に、大極殿又は紫宸殿の中央に飾りて、天皇の就かせ給ふ御座。清寧紀「設壇場於勢余甕栗、陟天皇位」内匠寮式「凡毎年元正、前一日、官人率木工長上雜工等、裝飾大極殿高御座」〔二〕天皇の御位の稱。天位。萬四「多可美久良(タカラ)あまの日つぎと、あめの下しらしめしけるすめろぎの」天位 紀 崇神

(らくみかた)

たかみくらの-ぎゃうかう 高御座行幸 大嘗祭に、廻立殿などへ行幸し給ふこと。增鏡「大嘗會の時も、たかみくらの行幸に、前行とかやいふことなど勸め給ふ」

たかみくらゐ 高御位 (名) 天皇の御位の稱。神武紀「恭臨寶位以鎮元元」

(諺)高みで見物 次條に同じ。

(諺)高みの見物 局外にありて、同情心なく傍觀すること。

たかみ 手上 (名) 古語。銅の柄(ヱ)。記上 集「御刀之手上(タガミ)血」神武紀「撫劍柄、此云剗那瑳倶毎、剗那瑳倶毎、謂拔刃頭也」萬三「やき太刀の手頭(タガミ)おしねり」頭 神代紀上

たかみこし 高見越 (名) 取引所の語。直段の高くなるべき豫想。「休日越しの高見越しを、人氣の上に現はし」

たかみや 高宮 (名) 次條、又、たかみやひら(高宮平)の略。寵のすさみ「高宮の袴につもじ寶りきたるを、漆紋をつけ肩衣とし」

たかみや-ぬの 高宮布 (名) 近江國高宮より織り出だしたる布。毛吹草三「近江。高宮布(タカミヤノ)」甲子夜話三「德廣は高宮布の拍子染を、漆紋かかせてさへ著されたり」

たかみや-ひら 高宮平 (名) 近江國高宮より出だす夏の袴地。きぬいとなし。萬金產業袋三「古今平。江州高宮より出づる島すぢ、絲也、高宮ひら、きぬ絲なし」

たかむ 高 (他動下二) 高くす。あぐ。

たかむしろ 竹席 (名) 〔一〕簾・竹などにて編みたる敷物。江次第 二七日草、南廂西第二間、差南去東西行、鋪簟四枚」唐船噺今國姓爺「正眞の寶圖は宗穆にて、たか筵の下に隱し置く」簟・〔二〕【動】さめびたきの異名。

たかむな 筍 (名) たけのこ(笋)に同じ。神代紀三「化成筍(タカムナ)」和名 竹 加無奈 竹初生也」本草和名三「竹筍 加無奈云多加一名、草華 倭名類聚抄 和名、多加牟奈」

たかむなさか 高胸坂 (名) 古語。胸のうへ。むね。神代紀三「高胸(タカムナサカ)、此云多毎歌武娜瑳歌(タカムナ)」胸上 紀下代

たかむら 竹叢 篁 (名) 竹の林。たかやぶ。たかばやし。たかはら。和名 竹 加牟奈 竹叢也」篁 倭名抄

たがめ 田鼈 (名) 【動】昆蟲類中、有吻類の一種。體大にして扁く、全身暗褐色を呈し、前肢鎌狀をなす。水中に棲み、夜間飛行す。かうやひじり。かっぱむし。

たかめる 高 (他動下) たかむ(高)の口語。

たかめん 高兎 (名) 田穀の作柄を檢見して、其の租額の最も多き極度のもの。之に反するものを下兎と云ふ。

たかもがり 竹虎落 (名) 竹にて作りたる虎落。幸若舞曲 烏帽子「あのむかひに見えたるたかもがりの内こそ、五郎太夫と申して、ゑぼしの上手にてさふらへ」

たかーものがたり 高物語 (名) 高聲に談話すること。たかばなし。袖曾我三「手に手に小たい松を打ち振りて、たかものがたりしてぞ行きける」

たかーもも 高股 (名) 股の上部。川中島合戰三「勝額の高股薙ぐり切り」

たかーもも-だち 高股立 (名) 高く股立をとること。持統天皇歌軍法「高股立の徒待(タカモモ)ぞ、息をはかりに驅け來たり」

たかーもも-ひき 高股引 (名) 股引を高くまくりあぐること。曾我五人兄弟三「草鞋に高股引、息をはかりに走り行く」

たかーもり 高盛 (名) 椀・皿などに食物を高くもること。又、その盛りたる物。日中行事「一二の盞まゐりて、蔵人わたる殿のすゑの作りあひの妻戸のもとにて、高盛(りもかた)とう、やと二廻いへば、番衆長押のもとにてまゐるといふ」

たかもり-もの 高盛物 (名) 前條に同じ。鎌倉年中行事「遠侍には高盛物二つあり」

たかーや 鷹屋 (名) 鷹を飼ひ置く小屋。宇津保 吹上「鷹屋に鷹十づつすゑたり」同 初音「有大將殿は鷹屋にすゑて、いと名高き御鷹二つかけ給ひて」

たかーや 高屋 (名) たかどの。高樓。鴨長明 百首 「いかばかり惠みあまねき御よなれや、高屋の軒にかやもしどろに」

たかーや 箍屋 (名) かすがらかけ(葛掛)に同じ。

たかーやうじ 高楊枝 (名) 滿腹のさま。「武士は食はねどたかやうじ」鷹筑波「長居は長れありとこそ聞けの句折りすてよ貴人の前の高楊枝」

たかーやうじ 竹楊枝 (名) 薄く狹く削りたる竹の一端に毛を植ゑつけたるもの。齒を磨くに用ふ。

たかーやか 高 (名、副) 高きこと。高きさま。たからか。枕三「さは色に出でてはえいはずあると、高やかにうち言ひうめきたるも」源夕顏「たかやかなる荻につけて、しのびてとのたまへれど」

たかーやぐら 高櫓 (名) 高く築きたるやぐら。二三階の櫓。平家八 鬼界島「瀨尾太郎は急ぎ高矢倉に走りあがり」盛衰記 七 「河の邊り近く高櫓を造らせて、此の上に登りて四方を下知し給ひけり」

たかやさん 鐵刀木 (名) 【植】棕櫚科、鐵刀木屬の常綠木本。幹は直立し、葉は幹の頂に叢生し、掌狀に分裂し、棕櫚の葉に類似す。支那の原產。材は其の質極めて堅きを以て著名なり。姑獲木。

(たかやさん)

たかやさん-みなし (名) 【動】軟體動物中、腹足類の一種。みなしがひの一種。殼は二寸計りにして圓錐形をなす。螺層部は短く、介殼の後端に僅かに存す。帶黃褐色にして、栗色の波線縱にあり。長崎以南の暖海に產す。

たかやし 耕 (名) たがやすこと。たがへし。耕作。

たかやす 耕 (他動四) たがへす(耕)に同じ。

たかやぶ 竹藪 (名) 竹の多く生じたる所。竹の林。たかむら。やぶ。たかばやし。

たかーやま 高山 (名) 高き山。かうざん。祝詞式 六 高山(タカヤマ)之末、短山之末 延喜上 坐祭 萬三「かくばかり戀ひつつあらずば高山(タカヤマ)の、岩ねしまきて死なましものを」

たかーやま 鷹山 (名) 鷹狩する山。催馬樂「たか山に鷹を放ちあげておくをなみ、あはれおくをなみ、はれ」

たかーやりど 高遣戸 (名) 高く造りたるやりど。高然草「小部・小板敷・高遣戸などもめでたくこそ聞こゆれ」

たかーゆく 高行 (自動四) 空を飛びゆく。記下「多迦由久(タカユク)や、はやぶさわけのみおすひがね」

たかーよ (名) 鳥の胴部の名所。とり(鳥)を見よ。

たから 寶 (名) 〔一〕貴重すべき物。はうもつ。財寶。武烈紀「銀鼓(ハクラ)」萬三「しろかねもこがねも玉も何せむに、まされる多可良(タカラ)子にしかめやも」菜蔬 「いろいろの寶の香どもたかせ給へれば、いきやう薰じたり」〔二〕金錢。財貨。かね。竹取「右大臣阿部のみうしは、たからゆたかに、家ひろき人にぞおはしける」貨・財 名義抄 〔三〕大切にあつかふべきもの。主君又は親などにいふ。宇津保 俊蔭「たからの王ぞとて、この子をさきげて養ふ」

たからのいけ 寶池 佛語。極樂淨土にありといふ八功德池(ハクヂ)なるべし。草庵集「蓮咲くたからの池に漕ぐ舟の、まづ面影に浮かびぬるかな」

たからのうてな 寶樹 佛語。極樂淨土にありといふ寶のなる樹。夫木 「あだに散る花見るだにもあるものを、

たからのうふき思ひこそやれ」

たから の きみ 寶君　大事と思ひ奉る主君。大切なる主君。榮華物語「我が寶の君は、いづこにあからめせさせ給へるぞや」大鏡「猶わがたからの君におくれ奉りしやうに、ものかなしく思ひやらるる折りこそ侍られ」

たから の くらゐ 寶位　天子の御くらゐ。帝位。夫木「宮殿のいさどのこすな、我が君の寶の位かぞへ、みんかし」

たから の こ 寶子　大切に育つる兒。富貴の家の兒。萬葉「ありぎぬの寶之子（ナカラ）らが」

たから の ほしみ 寶欲　財寶をむさぼり求むること。推古紀「絕（ヲ）餐（ヲ）欲」

たから の やど 寶宿　財寶の多く集まる家。金瓶家。曾丹集「きのふ見したからの宿も、今日は淺茅が原と露しげくて」

たから の やま 寶山　寶の多くある山。又、顧ひ望みし所に來たり著きたるにいふ。謠曲「法性寶如の寶の山に、法味に引かれて來たりたり」狂言「誠に寶の山に入つたと云ふものぢや」智度論「如人有手入寶山中、自在能取」

たから の わう 寶王　寶を多く所有したる人。富者。宇津保「かみなびの種松といふ長者、限りなきたからのわうにて」榮華「此の宮は幸おはする宮なり。たからの王になり給ひたんとす」

（誹）**寶多ければ身を害す**　財寶多ければ却って身命をそこなふ。砂石集「財多ければ身を害し、名高ければ神を害す」

（誹）**寶といへども用にあらず**　貴けれども日常の用をば足し難きをいふ。

（誹）**寶の持ち腐れ**　寶を持ちながら利用せぬこと。

（誹）**寶の山に入りながら手を空しくして歸る**　よき場合にありながら、その望みを果たし得ず。三代實錄「貞觀四年、悲願、億億萬劫があひだ、生死にりん廻せん事」正法念經「閻羅王爲人說偈云、汝得人身不修道、如入寶山空手歸、汝今且自作還自受、唱喚苦者欲何爲」

（誹）**寶は國の渡りもの**　金は世界の廻りもちに同じ。かね（金）の條を見よ。

（誹）**寶は身の仇**　金ある爲めに身を亡ぼす。

（誹）**寶は身のありあはせ**　次條に同じ。

（誹）**寶は身のさしあはせ**　所持品を寶りて當座の用に立つること。吾吟我集「代かへて銘をつぎぬる腰刀、げにも寶は身のさしあはせ」浮世風呂「寶は身の指し合せだと、殘った道具諸式を寶つては樂」膝栗毛「財は身のさし合せとやら、どうぞ是れを寶りたうござりますが、お買ひなさって下ださりませぬか」

（誹）**寶は湧き物**　財寶は得んとすれば得らるるもの。博多小女郎浪枕「寶は湧き物、御命さへ有るなれば、わしや嬉しう御座んする」

たからか 高（名、副）高きこと。たかきさま。たかやか。榮華「北の方いとうれしと思ひて、衣たからかにひき上げて」狹衣「いとたからかに打ち笑ひて」

たから-がひ 寶貝（名）【動】紋體動物中腹足類の一種。殼の長さ二寸許りにして、長卵形をなしたる一種の卷貝。形、子安貝に似たり。外面は白色又は淡褐色にして、暗褐色の斑點を散在す。動物寶を食し、各地の海岸に產すれども、殊に暖地に多し。この一種を、古代、支那・印度及び亞弗利加等にては通貨に供用したることあり。ほしたから。

（ひがらかた）

たからぐら 寶藏（名）寶物を入れ置く倉。はうざう。著聞「これは重物なりとて、やがて、寶藏に收められけるとぞ」徒然草「ふるき寶藏の繪に」

たからくらべ 寶競（名）物合せの一。各自の寶物を對比して、優劣を判じ輸贏を決するもの。狂言「此の中のたからくらべは、おびただしい事ではなかったか」

たから-がし 石龍芮（名）【植】毛茛科、毛茛屬の一二年生草本。莖の高さ二・三尺餘に達し、太くして空洞をなす。葉は互生、掌狀に分裂して光澤を有す。春季、黃色、五瓣の小花を開く。果實は多數、小形の乾果より成り楕圓形をなす。我が國、水田又は濕地に自生す。有毒植物なり。うしぜり。うばぜり。かへるのきつけ。ししのひたひぐさ。ほほけれぐさ。

たから-がし （名）【植】たねつけばな（蓑草）の異名。

たから-づくし 寶盡（名）一種種の寶物を列挙したるもの。二繪又は模樣などに、如意寶珠・寶鎗・打出の小槌・金嚢・隱蓑・隱笠・丁子・花輪違・金函等の形を寄せて畫きたるもの。

（にしくづらかた）

たから-に 寶荷（名）寶の入りたる荷物。寶物入りの荷物。源氏十二段長生島臺「色色の寶荷を、二十餘匹に負ほせつつ」

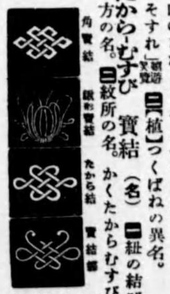
たから-ぶね 寶船（名）〔支那、韓愈の送窮文に見えたるに起こりて、もとは窮鬼を川へ流し棄てる呪ひより轉じたるものといふ〕七福神・寶づくし等を舟に載せたるさまを繪にかきて、これに、長き夜のとをのねぶりのみなめざめなみのりふねのおとのよきかなといふ廻文歌を書き添へたるもの。元日又は二日の夜、枕の下に敷きてねる。吉夢ある時は來年福を得る兆とし、惡夢を見る時は翌朝之を川へ流す。昔時は節分又は除夜に行ひたり。佐夜中山集「節分と人には告げよたから舟」雪女五枚羽子板「今宵は如何した夢がな見る、此方はまことの寶船」

たからぶね-うり 寶船賣（名）寶船の繪を賣りあるく者。一代男「尼拂ひの座、夢違ひの獏の札、寶舟寶など、鰯・柊をさして鬼打ち豆」

たから-ぶるひ 寶振（名）寶のありたけ悉く出だすこと。榮華「殿この度なん、寶ぶるひするなどの給はせて」

たから-ばん （名）一比叡山にて木の芽漬の稱。山法師の歌「うんたらや無動寺山のたからまん、あ（ては魚にまさりこそすれ」（頓證寺寶）二【植】つくばねの異名。

たから-むすび 寶結（名）一紐の結び方の名。二紋所の名。かくたからむすび。


（にびすむらかた）

くはがたたからむすび・たからむすびてふ等種種あり。

たからむすび-さっかふ 寶結繖甲（名）紋所の名。

たからむすび-てふ 寶結蝶（名）紋所の名。たからむすび寶結を見よ。

たから-もの 寶物（名）一寶とする物。はうもつ。たから。源氏「よろづにめづらかなるたからものども」榮華「月宴、故朱雀院の御たからものは、唯この宮にのみこそはあなれ」名義抄「貨（カ）寶（ヲ）物」二愛し養ふ我が兒の稱。

たから-や 寶屋（名）寶を賣買する家。又、其の人。狂言「寶屋が何處やら、又、名を何といふやら存ぜぬ」

たっ-がり 田刈（名）田の稻を刈ること。戀八卦柱暦「超ゆる我が身の死出の山、死出の田長の田がりよし」

たかり-ぐみ （名）【植】あきぐみ（秋茱萸）の異名。

たか-りん 高厘（名）村高にて割りたる免。地方落穗集「反取・厘取共に詰る所は胴尻にて、高厘・毛付厘とて、取米を高と毛付高にて割り合ひ、何れも免幾つ何分何厘と見る也。高厘と云ふは村高（惣高）を割り、毛付厘といふは永引等の引物を村高の内にて引き、殘る高にて割る也。村方にて割りたる免は高厘とも處厘ともいふ。殘高にて割りたる免は毛付厘とも實厘ともいふなり」

たかる 集（自動）集まりつく。より集まる。耕餘瀝卯月紅葉「人がたかる何事ぞ、早早通りや」吉野都女楠「熟柿にたかる目白ども、捻り殺して見せう」

たかる 集（自動）前條に同じ。記「字士多加禮（ヒ）斗呂呂岐豆」神代紀「膿沸蟲流（ル）」

たっ-がる （接尾）動詞の下につきて希望する意を表す語。「見たがる」「聞きたがる」字治拾遺「御げんざんに入りたがり候」

だかる 抱（自動）いだかる。いだきつく。だきつく。宇津保「琵琶中藏人にだかれては、ひき侍らず」

だかれ-どころ 抱心地（名）次條に同じ。

だかれ-どころ 抱心（名）だかれたる心地。だかれどころ。大綱冠「生まれ出でたる懷は、抱かれ心の柔かな、兩手を肌にひったりと」

たか-わらひ 高笑（名）高聲に笑ふこと。たかゑみ。國姓爺「母は大聲高笑ひ」

たか-わり 高割（名）石高又は取高に應じて割りつくること。

たかわり-じゃうなぶさん 高割上納金（名）石高に應じて割りあて上納せしむる金。德川禁令考「廿三、元祿九年（一六九六）月、上納下付」西丸御普請に付、高割上納金之御書付」

たかわり-つじばん 高割辻番（名）寛永十三年より大小名の石高に割り當てて、小路・小路に設けしめたる辻番。瀨田問答「高割辻番は、何頃より初まり候哉」

たかわりつじばん-しょ 高割辻番所（名）高割辻番の事務を取り扱ふ所。瀨田問答「高割辻番所は寛永十三年に初めて、大小名共に小路・小路に辻番所を建て、其の外町中端端木戸を拵へ、番人差し置くべき旨被仰出候事、前撰集に見えたり」武江年表「寛永十三年、高割辻番所始まる。或ひは五年ともいふ」

たか-ゑ 高笑（名）たかわらひ（高笑）に同じ。宇鏡「嚇（太加乎乃）」

たかゑみ 高咲（名）前條に同じ。

たかゑ 高閾（名）高き閾。閾。

たかをぶね 高尾船（名）はやぶね（早船）の古名。和名抄「舸（俗云高尾舟）」

たかをむすび 高尾結（名）江戸時代行はれたる鯖人の帶の結び方の名。

（ひすむたかた）

たかをり 竹折戸（名）竹にて作りたる折戸。へ走り入り侍りしを」

だ-かん 朶翰（名）だうん（朶雲）に同じ。

たかん-じゃう （名）たかじゃう（鷹匠）の誤り。

たかんな 筍（名）たかむな（筍）に同じ。著聞「むかし雪中のたかんな、しはすのやまもも、顧ふにしたがひて求め出だしけり」

たかんな の かは 箨　たけのかは（竹皮）に同じ。大鏡「たかんなのかはを、男のおよび毎に入れて」

たかんな を とむ 籠筍　物の多く立ち込みたるさまにいふ。平家「餘りに人多く參りつどひ、たかんなをこみ、稻麻・竹葦の如し。役人ぞ被レ開候へ」

たかんながたな 筍刀（名）たかうながたな（筍刀）に同じ。

たき 丈（名）たけ（丈）に同じ。景行紀「身長（タケ）一丈」名義抄「長（タケ）」

たき 瀧（名）一河瀨の傾斜急なる處を奔り流るる水。急流。奔湍。萬「いは走る多伎（タキ）もとどろになく蟬の、聲をし聞けば都しおもほゆ」滝（俗字）二高き所より直下する水。瀑布。勢語「たき落とし、水走らせなどして」宇津保「下（樹上）「山の高きより落つる瀧の、からかさの柄さしたるやうにて」

たき の いと 瀧絲　瀧の落つるさまを、絲の數多乘れたるによそへていふ語。拾遺「流れくるもみぢ葉見ればから錦、瀧の絲もて織れるなりけり」

たき の いはつぼ 瀧岩壺　岩の間にある瀧壺。夫木「鮎走る瀧の岩つぼわきかへり、見るも涼しき水の色かな」

たき の うはて 瀧上手　瀧の上流。寶治二年百首「春も猶河浪さえて立田山、瀧の上てにみ雪降るらし」

たき の しらいと 瀧白絲　瀧の落つる條を白絲の數多乘れたるに見たてていふ語。拾遺「春くれば瀧の白絲いかなれや、結べども猶あわに見ゆらん」

たき の しらたま 瀧白玉　たぎり落つる水玉を白玉に見立てていへる語。古今「葦鹿の巻の山の岩根をとめて落つる、瀧の白玉千世の數かも」

たき の しらなみ 瀧白浪　瀧のたぎり落ちて起こる白浪。續古今「吉野河花にも水やまさるらん、散れば落ちそふ瀧の白浪」

たき の しろかみ 瀧白髮　瀧のたぎり落つるを白髮に見立てていふ語。永久百首「梢より落ちくる瀧のしろかみは、よにひさしくへて成るにやあるらん」

たき の せ 瀧瀨　たきつせ（瀧津瀨）に同じ。萬「いにし（ゆ人のいひくる老い人の、わかゆちふ水ぞ名におふ瀧之瀨（ヲ）」

たき の せわき 瀧瀨脇　早瀨のそば。夫木「立田河瀧の瀨わきに祈へつつ、祈りくらすは君が爲めとぞ」

たき の と 瀧戸　たきぐちの（瀧口）戸に同じ。たきぐち（瀧口）の條を見よ。兵範記「安元二年（一一七六）十一月、賀茂臨時祭「舞人三人（四位五位六位）、樂人（御馬）入レ瀧戸」

たき の ふるとぞ 瀧古聲　古く聞きし瀧の音。聞きふるしたる瀧の音。壬

二集「氷とく谷の山風吹きぬらし、岩根をとむる瀧の古こゑ」

たきの へ 瀧上　たきのうへ。瀧のほとり。萬三「瀧上(ノウヘ)のみ船の山に居る雲の、つねにあらむと吾がもはなくに」

たきの みを 瀧水尾　激流の深き所。貫之集「春たちて風や吹くとて今日見れば、瀧のみをより玉ぞ散りける」

たきの よどみ 瀧淀　瀧水の滞ちて淀(ヘ)留まること。又、其の處。源若紫「風ひややかに吹きたるに、瀧のよどみもまさりて音高くきこゆ」

たき 〔他季〕(名) 他の季節。本朝三國誌「當季・他季、珍花、いづれおろかは無けれども」

たき 彈碁 (名) たんぎ(彈碁)の略。源若紫「ご・すごろくのばん・てうど・たきのぐなど、田舎わざにしなして」

たきの ばん 彈碁盤　彈碁に用ふる盤。源若紫「ご・すごろく・たきのばんどもなど取り出でて、こころどころにすさびくらし給ひつ」和泉式部集「たきのばんといひし物のありし、賜へといひたれど、うせにければ」

たき 〔他岐〕(名) ほかのえだみち。よこみち。韓愈詩「通塗無他岐」

たき 〔多岐〕道の幾すぢにも分かれて居ること。韓じて、多方面なること。

たきばらやう 〔多岐亡羊〕學問の道多方にして、眞理を得難きにいふ語。又、彼れか此れかと思案に惑ふこと。列子說符「大道以多岐亡羊、學者以多方喪生」

たぎ 〔多疑〕疑ひの多きこと。疑ひ深きこと。人物志「精良長慎、善在多疑」、矢在多疑」

だぎ (名) 酒をしこむに、甘酒になりし時、熟湯を詰めて其の中に入れ置くもの。日割

だ-ぎ 〔惰氣〕(名) 怠る心。なまけごころ。いやき。

だ-ぎ 〔唾棄〕つばきを吐き捨つる如く棄てて顧みざること。うとみ顧みざること。

たぎ-あかし 燒明 (名) たてあかし(立明)に同じ。樂式部日記「たきあかしの光の心もとなければ、四位少將などを呼びよせて、しそくをさせて人人は見る」

だぎ-あぐ 抱上 (他動下二) 抱きて上にあぐ。かかへて上にあぐ。いだきあぐ。大鏡狂言「其の儘抱き上げまして、もとの寄合ひの座敷へ連れて參り」

だぎ-あし 抱蘆 (名) 紋所の名。

だぎ-あは 抱粟 (名) 紋所の名。

だぎ-あはす 抱合 (他動四) だき合ふ。やうにす。だき合はしむ。室町千歳敷「劍と劍とを抱き合はせたる夫婦合」

だぎ-あふ 抱合 (自動四) 互ひにいだきつく。運歩色葉「抱合アフ」

たぎ-いし 瀧石 (名) 盆石の一。多くは黑又は黝にて、中に瀑水の如き白條を現はしたるもの。駿河國蘿枝邊の產、最上たり。

だぎ-いでふ 抱銀杏 (名) 紋所の名。

だぎ-いね 抱稻 (名) 紋所の名。門出八島「抱笹・抱稻・花菱、波に兎のしるしこそ、龜井・片岡・伊勢・駿河」

だぎ-いねなへ 抱稻苗 (名) 紋所の名。

だぎいねに-むかひすずめ 抱稻向雀 (名) 紋所の名。

だぎいね-の-まる 抱稻丸 (名) 紋所の名。

だぎいねのまるに-みつぼし 抱稻丸三星 (名) 紋所の名。

だぎ-いる 抱入 (他動下二) かかへいる。いだきこむ。

だ-ぎら 〔打毬〕(名) 一古昔、馬上にて、曲杖を以て毬(ダギ)を打つ戲れ。まりうち。類聚國史七十二弘仁十年「渤海國使王文矩等打毬、賜綿二百屯爲賭」續後紀三承和十年「令四衛府馳騁種種馬藝及打毬之儀」二江戸時代、遊戲の一種。數人騎馬にて二組に分かれ、互ひに長き叉手に類したる毬杖を携へ、場中に置きたる紅白の毬を抄(スクヒ)ひ取りて、馬場の一方に設けたる毬門に投げ入るるもの。互ひに妨げ合ひて、已が組に屬したる毬を早く投げ入れ終はりたるを勝ちとす。

だぎう-づゑ 打毬杖 (名) 打毬の時用ふる長き棒。

だぎう-でき 抱腕木 (名) 電柱を挾みて、抱き合せに取り附けたる腕木。曲線其の他、特に堅牢を要する電線路に用ふ。

だぎ-うば 抱乳母 (名) 小兒のもりをする乳母。若風俗「筋目をただし、だきうばかかへ、御乳を定め」

だぎ-らうらく 〔一打毬樂〕(名) 雅樂の大食調の一。樂家錄廿八、大食調。打毬樂 太平樂 胡飛 中華樂 鳳凰 鳳樂 鳳凰 鳳樂

だぎ-らうめ 抱裏梅 (名) 紋所の名。

だぎ-うり 抱瓜 (名) 紋所の名。

だぎ-おこす 抱起 (他動四) いだきおこす。かかへおこす。

たぎ-おとし 焚落 (名) 薪を燃やして後に殘りたる火。おき。浮世風呂二「湯番のあたる火と共に焚き落としの灰となりしは、終湯(シマヒ)の入り損ひ、今一と足で噓惜しい哉」

だぎ-おにかしは 抱鬼柏 (名) 紋所の名。

だぎ-おにぎく 抱鬼菊 (名) 紋所の名。

だぎ-おもだか 抱澤瀉 (名) 紋所の名。おもだか(澤瀉)を見よ。

だぎおもだか-びし 抱澤瀉菱 (名) 紋所の名。

だぎ-おろす 抱下 (他動四) 抱きて下へおろす。俳諧新選「水仙や馬から横に抱きおろす」

だぎ-かうほね 抱河骨 (名) 紋所の名。

だぎ-かかふ 懷抱 (他動下二) いだきてかかへもつ。いだく。だく。

だぎ-かかへ 懷抱 (名) だきかかふること。だきたりかかへたりすること。冥途飛脚「御年寄の舅御の臥し病みの抱きかかへ、みやづかへは嫁の役」

だぎ-かさつばた 抱燕子花 (名) 紋所の名。かきつばた(燕子花)を見よ。

たぎ-かけ 薰掛 (名) 髮に香(タキ)を焚き留むるために、香爐を入れて枕とする箱。

だぎ-かご 抱籠 (名) 竹を編みて造り、太さ二圍、長さ三四尺乃至五六尺、夏の臥寢に抱きて涼を取るもの。竹几(ツクヒ)。竹夫人。俳諧古選「蓼、抱籠を蹈み出して寢る暑さかな」

だぎ-がしは 抱槲 (名) 紋所の名。しは(槲)を見よ。

だぎ-かぢのは 抱梶葉 (名) 紋所の名。かぢのは(梶葉)を見よ。

たぎ-がは 瀧川 (名) 山川などの急流にして激(タギ)れる川。詞花上「瀨を早み岩にせかるる瀧川の、われても末に逢はんとぞ思ふ」

だぎ-かぱりいね 抱變稻 (名) 紋所の名。

だぎ-かぱりおもだか 抱變澤瀉 (名) 紋所の名。

だぎ-かばりぼや (名) 紋所の名。

たぎ-がら 焚殼 (名) 焚きて灰となりたるもの。若風俗「伽羅のたきがら下されませいと、都なれや花車なる物もらひ」

たぎ-ぎ 焚木　薪 (名) 燈などに燒く料の木。燃料に供する木。たきもの。まき。萬廿「多伎木(タギ)こる鎌倉山のこたる木を、まつとながいはば戀ひつつやあらむ」源若紫「この頃のことと、薪のみひろひてまゐる山人もあり」和名十二「薪、薪、集要云、火木曰薪(タキギ)」燈木七

たきぎ こる 薪樵 一薪を伐採す。二佛語。釋迦が法を求むるため、阿私仙人に奉事して、千年間薪をこり水を汲み苦行して、終に法華經を得たりといふ故事。法華八講の時、下文の行基菩薩の歌を唱ひて行道するを例とす。行基菩薩歌「法華經を我が得しことは薪こり、菜摘み水汲み事へてぞ得し」蜻蛉日記「たきぎこることは昨日に盡きにしを、いざ斧の柄はここにくたさん」源御法「薪こる讚歎の聲も、そこらつどひたる響き、おどろおどろしきを」法華經藥草喻品「時有仙人、來白王言、我有大乘、名妙法蓮華、經、若不違我、當爲宣說」王朝「仙言、歡喜踊躍、即隱仙人、供給所須、採果、汲水、拾薪、設食、乃至以身而作牀座、身心無倦。于時奉事經於千歲、爲於法故、精勤給侍、令無所乏」

たぎぎ つく 薪盡　佛語。釋迦の入滅をいふ。源若菜「佛の御弟子のさかしきひじりだに中陰薪つきける世の悲ひは深かりけるを」榮華御裳「かの娑羅林の涅槃のほどをよみたるなるべし。長谷の入道殿は聞き給ひて、たきぎつきといはまほしとぞの給ひける」法華經序品「佛此夜滅度、如薪盡火滅」

たきぎ の ぎょうだう 薪行道　佛語。法華八講の法會の第三日、即ち第五卷の提婆品を供奏する日に、行基菩薩の、法華經を我が得しことは薪こり、菜摘み水酌み仕へてぞ得しの歌を唄ひ、薪を負ひ水桶を擔ひたる者が、衆僧の列末に加はりて行道する式。たきぎこる(薪樵)を見よ。五代帝王物語「五卷の日、薪の行道あり、其の儀、心も詞も及ばず」

たきぎ の のう 薪能　昔、奈良興福寺南大門の芝生にて、二月七日より一七日の間行ひたる能樂の稱。羅山文集九十「仲春值南都春日社前舞樂(御願)太鼓(紀)擊紫調太鼓、使被許之」日次紀事二七日、薪能」風俗文選(歌)「西金堂の樂を改め、南大門に移して薪の能を始む。七度半の使に四座の猿樂を召す、雨天には紙を蹈んで試み、夜陰には薪を積んで焚く」

(誹)薪に火を吹けば客が來る 薪の火を吹くは、來客ある兆なり。

(誹)薪に油を添へる いやが上に勢ひを添ふるに譬ふ。

(誹)薪に花 いやしき姿の中にやさしき風情のある譬(ヘ)にいふ語。鰐山姥「いづれも若き殿達、此の柴燒が栖家は御いやであらんといふ風情、不東ならぬ山人の、薪に花とは是れならん」

(誹)薪を抱きて火を救ふ 害を除かんとして却りて害を增す。戰國策趙「以地事秦、譬猶抱薪而救火也」

たぎ-ぎさぎやう 抱桔梗 (名) 紋所の名。

だぎ-ぎく 抱菊 (名) 紋所の名。

だぎ-ぎくのは 抱菊葉 (名) 紋所の名。きく(菊)を見よ。

だぎぎく-はぎく 抱菊葉菊 (名) 紋所の名。

たぎぎ-ごる 薪樵 (枕) 薪を樵る鎌とつづくより鎌倉山にかく。萬廿、多伎木許流(コル)かまくら山のこたる木を、まつとながいはば戀ひつつやあらむ」

たぎぎ-はさみ 薪挾 (名) 薪を挾むもの。唐船噺今國姓爺(ヒ)「薪挾みの杖(ツエ)にて、雜なくロをこじ開き」

たぎぎ-ひろひ 薪拾 (名) 薪をひろふこと。又、其の人。采薪。

たぎぎ-ぶぎやう 薪奉行 (名) 幾田時代、薪炭の事を掌りたる役。太閤記「吉野(奉行)汝を薪奉行なんどにせんことは、定に駿馬を駟車に苦しめ、大材を小事に用ふるにひとし」

たぎぎ-や 薪屋 (名) 薪・炭などを鬻ふ家。二代男「八丁堀の薪屋の手代」三代男「盛りといひし若衆方も、ちり果つる薪屋となって」

だぎ-くぎぬき 抱釘貫 (名) 紋所の名。

たぎ-くち 瀧口 (名) 一瀧の落ち口。吉野拾遺「三吉野にありと聞こえし瀧口が、落ちては名をも流しけるかな」二清涼殿の東北方なる御溝水の落つる處。又、其の處に候する武士。蔵人所に屬して禁中の警衛及び雜役に任ず。西宮記「瀧口本所在二第所(第十八若三十八)、瀧口(第十八若三十八)、瀧口(本所)、瀧口(第十八若三十八)、瀧口(本所)、瀧口(第十八若三十八)、瀧口(本所

物にしみさす。枕草子「よくたきしめたるたきものの」源氏物語「えならぬ御ぞ引きかさねて、たきしめさうぞく給ひて」

だきーしむ　抱締（他動下）強く抱き持つ。かたく抱きて離さず。抱持す。俳諧新選蕉「抱き占める子に稲妻の轟きかな」

だきーしめる　抱締（他動下）前條の口語。

だきーしゅろ　抱棕櫚（名）紋所の名。しゅろ（棕櫚）を見よ。

だきーすくむ　抱竦（他動下）抱きてすくむやうにす。浦島年代記「うんと伸ぶるを抱きすくめ」

たきーすさむ　焚荒（自動四）焚く火の勢ひ盛んにつのる。續千載秋上「たきすさむ烟や殘る秋の田の、庇火屋が上にかすむ月かげ」新千載夏二「たきすさむ我が下燃の烟こそ、人目に絶えぬ思ひなりけり」

たきーすつ　焚捨（他動下）焚きたるまま捨てておく。焚きつがず、其のままにす。新勅撰雜四「心ある海士の藻汐木たきすてて、月にぞあかす松がうら島」

たきーすて　焚捨（名）㊀たきすつること。たきすてたること。又、そのもの。㊁芝居の語。舞臺にて遣ふ鼻紙・焙硝・たどん・烟草など、日日消費するものの稱。

たきーすてる　焚捨（他動下）たきすつ（焚捨）の口語。

たきーすみ　焚炭（名）燃料に供する炭。一代男「嵐防ぎ候小野の焚炭・よし野紙、悲田院の上履までも自らして」

だきーすみれ　抱菫（名）紋所の名。すみれ（菫）を見よ。

だきーすゐせん　抱水仙（名）紋所の名。すゐせん（水仙）を見よ。

だきーそだつ　抱育（他動四）だきかかへてそだてあぐ。樊ひそだつ。狂言「石「身共は其の伯母に抱き育てられた者ぢや」

だきーたかのは　抱鷹羽（名）紋所の名。たかのは（鷹羽）を見よ。

だきーたけのまる　抱竹丸（名）紋所の名。

だきーたちばな　抱橘（名）紋所の名。

たきーたつ　焚立（他動四）焚きて烟をたてさす。萬葉「しがの海人の烟焼立てて焼く鹽の、辛き憂をも我れはするかも」

だきーたばねわらび　抱束蕨（名）紋所の名。

たぎち　滾（名）たぎつこと。さかまき。萬葉「富士川と人の渡るも、その山の水の當（タギチ）ぞ」

だきーおからー　抱力（名）抱きしむる力。抱きたる手ごたへ。百日曾我虎御前「抱き力なき草枕、投げそ枕に科も無や」

たぎつ　滾（自動四）㊀わきあがる。さかまく。たぎる。記紀歌式大嘗「落多支都（タギツ）速川乃瀬坐須瀬織津比咩止云神」萬葉「さざれ浪いそこせぢなるのとせ川、音のさやけさ多藝通（タギツ）せどとに」落隆丸「沸十編」㊁心いらだつ。せきこむ。萬葉「言に出でて云はばゆゆしみ、山川の當都（タギツ）心をせきあへてけり」

たぎち　ながる　滾流　さかまきてながる。萬葉「いは走る多藝千流留（タギチナガル）はつせ川、絶ゆることなく又も來て見む」

たぎつ　こころ　滾心　いらだつこころ。せきたつ心。萬葉「なげきせば人知りぬべみ、山川の瀧情（タギツココロ）をせかへたるかも」

たぎつ　しらなみ　滾白波　さかまきて立つ白浪。萬葉「年のはにかくも見てしか、みよしぬの清きかふちの多藝非白波（タギツシラナミ）」

たぎつ　ながれ　滾流　さかまきて流るる水流。水流の急なる處。藤加馬岩根。松が根流ぎ來る、たぎつ流れは白玉の音ある水や貴船川」

たぎつ　なみ　滾波　さかまきて立つ浪。謠曲「三吉野の川淀、瀧つ波の花をすくはば、若し國栖魚やかからまし」

たぎつ　なみだ　滾涙　たぎり落つる涙。後撰恋上「天の川憩しきせにぞ渡りぬる、たぎつ涙に袖は濡れつつ」

たぎつ　やまかは　滾山川　山間をたぎりて流るる川。萬葉「いそのまゆ多藝津山河（タギツヤマカハ）絶えずあらば、またもあひ見む秋かたまけて」

たぎつ-かは　瀧津川（名）たきがは（瀧川）に同じ。柏玉集「朽ちずとも袖は泪のたきつ河、せき入れて落とす程やなからん」

たぎつ-く　焚附（他動四）㊀火をつけて燃やす。㊁おだつ。そそのかす。けしかく。煽動す。夕顔阿波鳴渡「こ無やくしいあたぶの惡い、こりや御無用に遊ばせと、焚き附けらるる」

だきーつく　抱著（自動四）いだきつく。とりつく。狂言花子「ひったりと抱きついたれば中略なう腹立ちやというて突き倒された」

たきーつけ　焚附（名）火を容易く燃えつかすために用ふる枯柴又はこっぱなどの類。用明天皇職人鑑山崎玉世「硫黄が島に立つ烟、同じ思ひをたきつけに、なれもこがるる姫島や」

たきーつける　焚附（他動下）たきつく（焚附）の口語。

たきーつ-せ　瀧津瀬（名）たき（瀧）に同じ。萬葉「ちはやふる宇治のわたりの多企都瀬（タキツセ）を、見つつ渡りて」古今冬「ふる雪はかつぞけぬらし、足引の山のたきつせ音まさるなり」

たきつせの　瀧津瀬之（枕）瀧津瀬は流れのはやきものなるより、早しにかけていふ。古今雜三「たきつせのはやき心を何しかも、人めつつみのせきとどむらん」

だきーつの　抱角（名）紋所の名。つの（角）を見よ。

だきつののうちーにほし　抱角内星（名）紋所の名。

だきつのの-まる　抱角丸（名）紋所の名。

たきーつほ　瀧壺（名）瀧の落ちこむ淵。平家五文覺流行「文覺瀧壺に下り浪立り、頭際潰かって惣救の呪を誦てけるが」

たきーどの　瀧殿（名）瀧のほとりに建てたる殿。泉殿の類。源氏「御堂は大覺寺の南にあたりて、瀧どのの心ばへなど、劣らずおもしろき寺なり」公任集「人人具して、もみぢ見にありき給ひしに、さがのたきどのにて」

だきーとむ　抱留（他動四）いだきておさへとどむ。

だきーとめる　抱留（他動下）前條の口語。

だきーとる　抱取（他動四）だきて我が方へ取る。抱き止む。狂言「石「身共、かまへてかまへて過ちすなと、抱き取り抱き取り制すれば」

たきなしーしょうま（名）〔植〕やはたさうの異名。

たきーなみ　瀧波（名）落ち下だる瀧の水。伊勢千首「岩にかけ河せに音や餘るらん、雨さへ〈そひてふるの瀧なみ」謠石橋「此の瀧波の、雲より落ちて數千丈」

だきーなみ　抱波（名）紋所の名。

だきーなみ-とめる　抱波巴（名）紋所の名。

だきーなんてん　抱南天（名）紋所の名。なんてん（南天）を見よ。

だきに　茶枳尼（名）佛語。だきにてん（茶枳尼天）の略。眞俗佛事編二「茶吉尼（されば此國を天竺の國なるに、茶吉尼と云ふ、我が朝の也、茶吉尼ともの云ふべし）大日經義釋に以術召諸茶吉尼」而詞記「貴之、猶汝常敬人、故我今當食汝」慧琳音義「茶枳尼、梵語、則鬼總名、能魅人與人通者也」茶吉尼。陀祇尼。吒幾羅。

だきに　の　ほふ　茶枳尼法　佛語。だきにてんのほふ（茶枳尼天法）に同じ。

だきに-てん　茶枳尼天（名）佛語。だきにてん（茶枳尼天）の條を見よ。平家「奥ある聖をこめて、吒幾羅（ダキニ）の法を百日行はせられけり」

だきに-てん　の　ほふ　茶枳尼天法　佛語。夜叉鬼の一類にて、自在なる通力を有し、六月前に人の死を知り、人の心臓を食とす。其の法を修する者は通力を得るといふ。

だきにてん　の　ほふ　茶枳尼天法　佛語。密宗にて行ふ呪法の一。これを行へば諸願成就すといふ。太平記「世世六紙、吒祇尼天の法を習ひて、三七日行ひけるに」

だきーね　抱寝（名）抱きて寝ること。

たきーのぼり　瀧登（名）瀧を登ぼり行くこと。大鏡「狂言（ノ）人」山を捧へまして、夫れへ瀧を落としまして、鯉の瀧登りを致すべしまうと存じますが」

たきーのみ　瀧飲（名）ひといきに飲むこと。ぐいのみ。狂言「河原聟」此の上は瀧飲みせう」卜養狂歌集「瀧のみは絶えて久しく酔ひぬるに、よだれ流れて翁ねむりける」

だきは-おもだか　抱葉澤瀉（名）紋所の名。

だきーはぎ　抱萩（名）紋所の名。はぎ（萩）を見よ。

だきーはしら　抱柱（名）竹矢來（ヤライ）又は假板圍（ガコヒ）などにて、主なる柱の反對の側に建つる柱。板を穿ちて繩を通し、整方の柱を連結して板を押ふるやうにす。おさへばしら。

だきーはせう　抱芭蕉（名）紋所の名。ばせう（芭蕉）を見よ。

だきはーちゃのみ　抱葉茶賞（名）紋所の名。すきの（薄）を見よ。

だきーはなすすき　抱花薄（名）紋所の名。すすき（薄）を見よ。

だきーはばうき　抱羽帚（名）紋所の名。はばうき（羽帚）を見よ。

たきーばん　焚番（名）浴湯の燃の火を焚く者。浮世風呂「大概何所の湯やでも、あがり番と焚き番は毎日代はり合ふ」

たきーび　焚火（名）㊀かがり火。㊁身を吸むるためなどにたく火。謠安達「山に上がり木を取りて、焚き火をしてあて申さうずるにて候」

たきび　の　ま　焚火間　閉爐裏のある室。

だきーひさご　抱瓢（名）紋所の名。だきひうたん。ひさご（瓢）を見よ。

だきーひひらぎ　抱柊（名）紋所の名。ひひらぎ（柊）を見よ。

たきふ　一多級（名）㊀多くの階級。㊁學校にて、學級を二つ以上に編制すること。（單級の對）

たきふ-がくかう　一多級學校（名）たきふせうがくかう（多級小學校）に同じ。（單級學校の對）

たきーふさ　頭髻（名）もとどり（髻）の古名。景行紀「筒城宮「頭髻（フサ）」刀佩「衣中」崇峻紀「挾作「四天王像」置「於頂髻（フサ）」」

たきふ-せい　一多級制（名）一の事物に付、數多の等級を設くる制度。（單級制の對）

たきふ-せうがくかう　一多級小學校（名）全校の兒童を二學級以上に編制する小學校。（單級小學校の對）小學校令施行規則「九條「多級小學校」

たきふ-はふ　一多級法（名）學生を學力に應じ、二箇以上の各學級に編制して教授するもの。（單級法の對）

だきーへうたん　抱瓢簞（名）紋所の名。だきひさご。

だきーほ　抱帆（名）紋所の名。

たきーほこり　焚埃（名）たき火によりて生ずるほこり。

だきーほそづの　抱細角（名）紋所の名。

だきーほたん　抱牡丹（名）紋所の名。

だきほたん-にわげた　抱牡丹井桁（名）紋所の名。

だきほたん-のは　抱牡丹葉（名）紋所の名。

だきほー-の-まる　抱帆丸（名）紋所の名。

だきほや-に-むかひばと　抱柳に向ひ鳩（名）紋所の名。

だきほやのまる-に-むかひばと　抱柳丸に向ひ鳩（名）紋所の名。

たきーまくら　瀧枕（名）㊀たきのほとりに宿ること。堀河百首「山里はねざめの床のさびしきに、絶えず音なふ瀧枕かな」㊁藪行の渓の枕にそそぐさまにいふ語。月詣集「せきもあへずはなれて落つる涙かな、わがそばたつるたき枕より」

たきーまさる　焚增（他動四）一層多く焚く。いやが上に焚く。後拾遺冬「都にも初雪ふればをの山の、まきの嶽がまたきまさるらん」新古今雜中「沖つ風よ寒になれや田子の浦の、蜃の藻鹽火たき增さるらん」

たきーまず　焚交（他動下）種種のものをまぜて焚く。伊勢千首冬「落葉にもくぬ木のかれ枝燒きまぜて、さてやほどある跡の埋火」

たきーみづ　瀧水（名）たきの水。瀧となりて流れ落つる水。小侍從集冬「山がくれ人も訪ひこぬ瀧水は、つららにのみぞ結ばれにける」

だきーめうが　抱茗荷（名）紋所の名。めうが（茗荷）を見よ。

だきめうが-くづし　抱茗荷崩（名）紋所の名。

だきめうが-びし　抱茗荷菱（名）紋所の名。めうが（茗荷）を見よ。

たきもと-りう　瀧本流（名）しようくわだうりう（松花堂流）を見よ。一代男「瀧本流をよく遊ばしける程に、師弟の契約させて遣はしける」に、手本紙ささげて」

たきーもの　焚物（名）たきぎ。まき。嬉遊記「五月雨」酒を尋ね出だし、あたためて飲まんとしけるに、燒物のなかりければ」

たきーもの　薫物（名）種種の香を合はせて作りたる煉香。合香。宇津保中「御火桶をすゑて火おこし、たきものどもくべて、たき匂はし」枕「よきたきものたきて、ひとりふしたる」

たきもの　の　こ　薫物籠　薫物の上に伏せて、衣をかけ香を焚きしむる籠。ふせご。和名「薫籠（ヲ或毛乃乃古）」相模集「たきものこを見んとのみ思ふかな、ひとりある身の心ぼそさに」

たきもの　の　つかひ　薫物使　贈物とする薫物を持參し行く使者。明月記「建仁二年六月廿日「所所薫物使」

たきもの-あはせ　薫物合（名）各人煉香（ネリカウ）の名をかくして持ち出で、之を薫きて其の優劣を決し勝敗を定むる戯れ。香合。紫式部日記「御たきものあはせは

てて、人人にもくばらせ給ふ」

たきもの-うり 薫物賣 (名) 煉香(ネリカウ)を賣りあるく者。七十一番歌合「たきものうり。隨分此のかうどもえりととのへたれば、この夕暮のしめりぞおもしろき」

たきもの-ぐさ (名) 【植】きく(菊)の異名。

たきもの-つつみ 薫物包 (名) 折形の名目。

たきもの-ひめ 薫物姫 (名) しょくちょ(織女)の異名。乞巧奠の時は終夜机上に薫物を供するよりいふなるべし。

だき-もみぢ 抱紅葉 (名) 紋所の名。もみぢ(紅葉)を見よ。

だき-もり 抱守 (名) 小兒を抱きかかへて世話すること。又、その人。かしづき。

たきやう 〔他郷〕 (名) よその土地。異郷。他國。朗詠「洲鷹夜雨他郷淚」太平記「無跡愁ひの淚を滴配所月、一人易位宸襟を惱他郷風、給ふらん」王勃詩「九月九日望郷臺、他席他郷送客杯」

たきやう 〔多行〕 (名) 五十音圖の第四の行の名。卽ち、た・ち・つ・て・との五つ。

たきやう 〔他行〕 よそへ出でゆくこと。他出。盛衰記「九、義經迎ニ都ヲ落ち下だりし時、友時が他行して侍りし程に」百合若大臣野守鏡「門より外に他行せず、形は榮華に誇れども、心は牢舍の苦しみなり」

だき-やせおもだか 抱痩澤瀉 (名) 紋所の名。

だき-やはず 抱矢筈 (名) 紋所の名。

だき-やまぶき 抱山吹 (名) 紋所の名。やまぶき(山吹)を見よ。

たきゐる 滾 (他動ヰ) たぎるやうにす。煮え立たす。大鏡「御堂の南面にかなへをたてて、湯をたぎらかしつつ」

だき-らん 抱蘭 (名) 紋所の名。

たぎり-ゆ 滾湯 (名) 煮え立ちたる湯。にえゆ。沸湯。宇治拾遺「門に入らんとするに、たぎりゆをおもてにかくるやうにおぼえて、ふつとえ入らず」

だき-りんだう 抱龍膽 (名) 紋所の名。

たぎる 滾 (自動ル) 一たぎつ(滾)に同じ。宇津保「藤原忠こそ、わき出づる涙の川はたぎりつつ、戀ひ死ぬべくも思ほゆるかな」後拾遺「奥山にたぎりて落つるたきつ瀬の、玉ちるばかり物な思ひそ」二煮え立つ。にえあがる。大和物語「この水、あつ湯にたぎりぬれば、湯ふてつ」三たぎつ(滾)に同じ。六帖「うちたえて落つる淚になるたきの、たぎりて人を見ぬがわびしき」

だき-わかまつ 抱若松 (名) 紋所の名。まつ(松)を見よ。

だき-わらび 抱蕨 (名) 紋所の名。

だき-わりはぎ 抱割萩 (名) 紋所の名。

だぎん-ほ 兌銀舗 (名) りやうがへてん(兌替店)に同じ。

たく 栲 (名) たへ(栲)に同じ。記「多久(タク)づぬの白きただむき」萬「多久(タク)ぶすましら山風のねなへども、ころがおそきのあろこそえしも」

たく 〔宅〕 (名) 一住む家。すみか。すまひ。東鑑「七、文治三年、還御之次、入御岡崎四郎宅」書經「伯夷、惟太保、先周公、相宅」二わが住む家。自宅。「たくへ物出でなさい」運歩色葉「宅屋敷」三他人に對して、妻が其の夫をいふ稱。

たく 〔託〕 (名) 託すること。たのむこと。たのみ。依託。依賴。

たく 〔澤〕 (名) 一さは。周禮「有山虞澤虞」以掌山澤」二めぐみ。恩德。德澤。恩澤。書經「皐陶謨、澤潤生民」孟子「離婁「西夫四鄰有不被堯舜之澤者若已推而內之溝中」三惡風。

たく 〔鐸〕 (名) 一形、鐘に似て、中に舌あり、上方の柄を持ちて振り鳴らすもの。ぬりて。ぬて。和爾雅「鐸(タク)金鐸也、木鐸、金口木舌也」淮南子「鼎(カナヘ)振鐸以令於兆民」二ふうりん(風鈴)に同じ。

たく 〔籜〕 (名) たけのかは。

たく 〔卓〕 (名) 一つくゑ。しよく。二高きこと。すぐれたること。卓絶。卓爾。

たく 〔柝〕 (名) ひやうしぎ。又、ひやうしぎを打つこと。易經「豐、重門擊柝、以待暴客」

たく 〔磔〕 (名) 一はりつけ(張附)に同じ。二罪人の屍を張りさらす刑。漢書「張敞傳、改、磔曰棄市、勿復磔」註「磔、張其尸」

たく 長 (自動ク) 一十分になる。盛りになる。萬「朝露(アサツユ)なへにけぬべくおもほゆ」「草字鏡、卓日太本作紀」徒然草「西大寺靜然上人、腰かがまり眉白く、誠に德たける有樣にて、内裏へまゐられたり」二さかり過ぐ。たけなはになる。末になる。古今「名(ナ)さ夜ふけてなかばたけゆく、久方の月ふきかへせ秋の山風」夫木「奉たけてきの川白く流るめり、吉野の奥に花や散るらん」

たく 焚 (他動カ) 一火を燃やす。火をつく。萬「あま少女いさり多久(タク)火のおほほしく、つぬの松原おもほゆるかも」新後撰「ほのかなる難波のあし火いかなれば、たきそむるより身をこがすらん」二火に燒く。くべて燃やす。くべる。源「蜻蛉、山賤のいほりにたけるしばしばも、こととひこなん懇ふる里人」後拾遺「都にも初雪ふればをの山の、まきの炭がまたきまさるらん」三炊ぐ。煮る。「飯をたく」四香をくゆらす。源「いみじき香のかこそすれ、尼君のたき給ふにやあらん」

たく 〔綰〕 (他動カ) 一掻き上ぐ。取り上ぐ。「髪などにいふ萬「多氣(タケ)ばぬれ多香(タカ)ねば長き妹が髪、この頃見ぬにかきれつらむか」同「ふりわけの髪を短み、若草を髪に多久(タク)らむ妹をしぞ思ふ」二手綱をあやつる。萬「秋つけば萩さき匂ふ岩瀬野に馬太伎(タケ)ゆきて、をちこちに鳥ふみたて」三力を盡くして舟を漕ぐ。萬「大舟をあるみに漕ぎ出でてや船多氣(タケ)、わが見し兒らがまみはしるしも」土佐日記「ゆくりなく風吹きて、たけどもたけども、しりへしぞきにしぞきて」

たぐ 〔他動ク〕 くふ(食)の古語。雄略紀「共食者(タヒトビト)」皇極紀「米だにも多礙(タグ)て通らせ、かましのをぢ」萬「妻もあらば取りて多宜(タグ)ましさみの山、野の上のうはぎ過ぎにけらずや」

だく 〔跑〕 (名) だくあし(跑足)の略。

だく 〔濁〕 (名) 一にごること。にごり。二けがれ。三不正。四だくおん(濁音)の略。「清・濁の兩音」

だく 〔諾〕 (名) うべなふこと。承知したりと答ふること。承諾。論語「孔子曰諾、吾將仕矣」禮記「子游曰諾」

だく 駄句 (名) つまらぬ句。拙劣なる句。

だく 抱 (他動カ) 一いだく(抱)の約。宇津保「いづれの宮をかまづだき給ふといとよみかはして、二の宮遊び給ふをかきいだき給ひて」二人を罪に陷る。日本靈異記

だく-あし 跑足 諾足 (名) 馬術の語。馬の、稍早足に驅くること。笠懸日記「馬の事はさくり走りなり。常の嗜古にはだく足にてもよし」

たく-あん 〔卓案〕 (名) つくゑ。たく。

たく-あん 〔澤庵〕 (名) 大根の略。

たくあん-づけ 澤庵漬 (名) 〔澤庵和尚の創意なりともいひ、又貯へ漬けの音轉なりともいふ〕 漬物の一種。乾したる大根に鹽と糠とをふりかけ、壓石(オモシ)にて壓して漬けたるもの。からづけ。京都ひやくぼんづけ(九州)。

たく-い 〔卓衣〕 (名) けさ(袈裟)の異名。

たく-い 〔卓異〕 他にすぐれて異なること。傑出して異彩を放つこと。漢書「故被延令張賀輔導劉脩射恩寵卓異、厥功茂焉」

だく-い 〔諾意〕 (名) うけがふ心。承諾する意志。

たく-え 〔卓衣〕 (名) けさ(袈裟)に同じ。

たく-えぶ 〔托葉〕 (名) 【植】植物學上の用語。葉の莖に連なれる處の兩側に、通常一箇づつ附屬せる葉片。

だく-おん 〔濁音〕 (名) 聲帶の振動を伴なふ音。にごる音。が・ぎ・ぐ・げ・ご・ざ・じ・ず・ぜ・ぞ・だ・ぢ・づ・で・ど・ば・び・ぶ・べ・ぼ、以上二十の子音。(蔚晉の對)

たく-かう 〔卓行〕 (名) すぐれたる行ひ。卓越したる行爲。漢書「卓行殊遠」

たく-き 〔託寄〕 一たのむこと。ゆだぬること。寄託。晉書「帝問華、誰可託寄者」二たくこきめい(託孤寄命)の略。たくこ(託孤)の條を見よ。

たく-きよ 〔謫居〕 咎を受けて引き籠もり居ること。又、遠地に配流せられて居ること。保元「左府卽「東國に謫居せば」元稹詩「謫居猶得住蓬萊」

たく-くわん 〔多苦觀〕 (名) 【哲】【倫】えんせいくわん(厭世觀)に同じ。

たく-けい 〔磔刑〕 (名) はりつけ(張附)に同じ。

たく-けん 〔卓見〕 (名) 他に勝ぐれたる見識。すぐれたる慧見。卓識。

たく-げん 〔託言〕 一かこつけのことば。いひぐさ。いひま。二ことづてること。傳言。

だく-げん 〔諾言〕 (名) うけがひたることば。承諾したることば。

たく-こ 〔澤湖〕 (名) 【地】かた(潟)に同じ。

たく-こ 〔託孤〕 孤兒をたのむこと。論語「可以託六尺之孤」

たくこ きめい 〔託孤寄命〕 遺孤と國家の政事とをたのむこと。論語「可以託六尺之孤、可以寄百里之命」

たく-ご 〔卓午〕 (名) まひる。正午。王士禎詩「蜂聲滿院日卓午」

たく-ご 〔憂吾〕 (名) 【植】つはぶき(款冬)に同じ。

たく-ごく 〔澤國〕 (名) 水澤の多き地方。周禮「澤虞、用「龍節」」宋之問詩「澤國韶氣早」

たく-ぐさ 〔手草〕 (名) 一手に持ちて遊ぶもの。歌舞に手に執るもの。てすさび。記「手草結天香山之小竹葉」二小さき竹の異名。ささ。堀河百首「白にぎて千種(たぐさ)の枝に取りかさね、うたへば明くる天の岩門」

たく-ぐさ 〔田草〕 (名) 一田の中に生ずる雜草。新六帖「賤のをはしげるいなばの五月雨に、晴間を見てや田草引くらん」二「萬葉集卷の十に田草引(タクサ)とあるを、略解に田草は田葛(タクズ)の誤りなるべしと說きたり。此の說に從ふべし」田葛(タクズ)の誤讀より來たりし語。萬代「たぐさひく岡の卯の花散るまでに、なに解しのぶほととぎすかな」

たく-さい 〔卓才〕 (名) 卓絶したる才能。すぐれたる才能。

たく-ざい 〔磔罪〕 (名) たくけい(磔刑)に同じ。

たく-さつ 〔磔殺〕 はりつけにかけて殺すこと。又、梟刑。

たくさ-づき 田草月 (名) 陰曆五月の異名。莫傳抄「五月雨に空もすくなきさくも月、たぐさ月とは是れをいはまし」

たく-さん 〔澤山〕 あまた。おほく。十分。太平記「六、赤松合戰」近來は雨の降る事も候はぬに、是れ程までの水の卓散に候はん」「同十六、新田左中將、義貞松」水も兵粮も卓山なる上」たんと。ぜう。だいぶん。能狂ふんだく。是樣せんど。卓たらど。相當だらく。常陸もうに。信州。どんと。上總じどくだま。豆江しこたま。駿國よん。こ。包蓋よんにやう。肥州ふんだん。眞鶴。特聽。卓散。

たく-し 〔托子〕 (名) ちやたく(茶托)に同じ。貴暇錄「建中初、蜀相崔寧女、以金盞無儲、病。其獸。指、取。孫子。承盛。之、既吸而傾、乃以。鐵環。株子中。坐。之、盃。遂定。卽。遣。匠以。漆環。易。鐵。寧奇。之、製。名。托子」

たく-し 〔卓子〕 (名) てーぶる。つくゑ。しよくたく。卓。

たく-し 〔度支〕 (名) かずへれう(主計寮)の唐名。職原抄「主計寮「度支、金部」」

たく-じ 〔卓爾〕 (副) すぐれたるさま、傑出したるさまにいふ語。論語「子曰、既竭吾才、如有所立卓爾」

たくし-あげる 〔手繰上〕 (他動ヤ) たぐりあげる。「手繰上」に同じ。

たくし-かく (自動カ) つづけざまにいふ。

たくし-じゅつ 〔卓出〕 他にすぐれぬき出ること。保元「左府卽「東國に謫居せば」元稹詩「謫居猶得住蓬萊」

たくし-とむ 〔手繰寵〕 (他動ム) たぐりこむ。「手繰寵」に同じ。

たく-しつ 〔澤漆〕 (名) 【植】とうだいぐさ(澤漆)に同じ。

たくし-ぶらう 〔度支部郎〕 (名) かずへのじよう(主計允)の唐名。職原抄「主計寮中務允大、度支部郎」

たく-しゃ 〔宅舍〕 (名) すみか。いへ。宅。南史「周濟、逃居官清約、私無宅舍」

たく-しゃ 〔澤瀉〕 (名) 【植】おもだか(澤瀉)に同じ。

たく-しゃう 〔託生〕 生を寄すること。物に寄りて生存すること。「一蓮託生」出だして賞すること。陳書「戶有殖遺」卽加擢賞」

たく-しゃう 〔擢賞〕 多くの中より拔き出だして賞すること。陳書「戶有殖遺」卽加擢賞」

たく-じゃう 〔卓上〕 (名) つくゑの上。又、食卓の上。蘇村句集「卓上の酢に眼寒し鰒魚亭」

たくじゃう-えんぜつ 〔卓上演說〕 (名) 宴會などの卓上にてなす演說。てーぶるすぴーち。

たくしゃ-くわ 〔澤瀉科〕 (名) 【植】おもだかくわ(澤瀉科)に同じ。

だく-しゅ 〔濁酒〕 (名) にごりざけ(濁酒)に同じ。清酒の對。庭訓往來十二「濁酒酷旨、睡眠昏沈、行樂歡動」耶律楚材詩「清茶佳果餞行路、遠勝濁酒來騷人」

たくし-ゅつ 〔卓出〕 他にすぐれぬき

出づること。傑出。文心雕龍「寅宏發軫以高騫故卓出而多偏」

たく-しゅつ 〔擇出 えらび出だすこと。えりぬくこと。

たく-しょ 〔謫所 (名) はいしょ(配所)に同じ。

たく-しょく 〔澤色 (名) いろつや。光澤。

たく-しょく 〔拓殖 開拓と殖民と。

たくしょく-きょく 〔拓殖局 (名) 内閣總理大臣の監督に屬し、朝鮮・臺灣・樺太及び關東洲(外交に關する事務を除く)等に關する事務を統理する官廳。總裁官及び第一部・第二部を置き、第一部は臺灣及び樺太、第二部は朝鮮及び關東洲の事務を掌る。總裁・副總裁・部長・書記官・譯官・屬・通譯の職員を置く。

たくしょく-ぎんかう 〔拓殖銀行 (名) ほくかいだうたくしょくぎんかう(北海道拓殖銀行)の略。

たくしょく-むしゃう 〔拓殖務省 (名) 明治二十九年四月に設けたる一省。拓殖務大臣の統轄の下に、其の事務を取り扱ふもの。南部局と北部局とを設け、南部局は臺灣、北部局は北海道に關する事務を掌り、參事官・書記官・屬・技師・技手の職員を置く。明治三十年八月廢せられたり。明治二十九年三月拓殖務省官制第一「拓殖務省」

たくしょくむ-だいじん 〔拓殖務大臣 (名) 明治二十九年四月に設け、翌年八月に廢せられたる各省大臣の一。臺灣及び北海道に關する諸般の政務にして、從來内務省の主管に屬する事項(警察に關する事項を除く)及び北海道に於ける鐵道・山林・原野・水產に關する事項を管理し、臺灣總督及び北海道廳長官を監督するもの。明治二十九年三月拓殖務省官制第一「拓殖務大臣は左の事項を管理す」同條三「拓殖務大臣は臺灣及び北海道長官を監督す」

たくし-らうちゅう 〔度支郎中 (名) かずへのかみ(主計頭)の唐名。職原抄「主計寮。頭一人(唐度支郎中)」指先にてくじり窪めて作りたる盃末なる土器。神供を盛るもの。神武紀「天手抉(アマノタヲタヒ)を掬(ムスビ)て」

たくす 〔託 托 (他動サ) 〔たのむ。あづく。ゆだぬ。論語季氏「可以託六尺之孤」戰國策秦「王曰、寡人託國於子」

たくす 〔謫 (他動サ) 〔かこつく。史記刺客列傳「託疾避官」

たくす 〔磔 (他動サ) 罪によりてながす。左遷す。

たくす 〔磔 (他動サ) 磔刑に處す。はりつけにす。

だくす 〔諾 (他動サ) うべなふ。うけがふ。うけひく。承諾す。禮記曲禮「父召無諾、先生召無諾、唯而起」

だくすゐ 〔濁水 (名) にごりみづ。汚水。

だくせ 〔濁世 (名) だくせい(濁世)に同じ。

たくせい 〔柝聲 (名) 拍子木の音。

たくせい 〔濁世 (名) 〔にごりたる世。風教の亂れたる世の中。史記齊悼惠王世家「荀卿嫉濁世之政、亡國亂君相屬、不遂大道而曾不能脩、信讒佞」〔うき世。現世。娑婆。

だくせい 〔濁聲 (名) にごりたる音。だみごゑ。

だくせい-けいやく 〔諾成契約 (英 Consensual contracts. 獨 Konsensual Kontrakte) (名) 【法】諾成契約に對し、當事者の合意のみにて成立する契約の稱。

たくせき 〔卓石 (名) 【鑑】硅石は硅酸かるしうむ。結晶は通常塊狀ふ。射的鑑雜狀若しくは卓狀・短柱狀をなす。色は白・灰・黃などにして、結晶石灰岩と花崗岩其の他の火成岩との接觸部に產す。我が國、近江國石山寺、信濃國北安曇郡常磐村等に出づ。硅灰石。

たくせつ 〔卓說 (名) すぐれたる說。卓絕せる說。

たくせつ 〔多苦說 (名) 【倫】【哲】えんせいくわん(厭世觀)に同じ。

たくせつ 〔卓絕 すぐれて、他に比ぶべきものなきこと。晉書謝鯤才藻卓絕、爽邁不群」

たくせん 〔謫仙 (名) 仙界より人間界へ逐ひ貶(ヘ)されたる仙人。非凡の天才なる大詩人などを美めいふ稱。唐書李太白「知章見其文、歎曰、子謫仙人也」潤池燕談、蘇子瞻文章議論、出當世、風格高邁、眞謫仙人也」

たくせん 〔託宣 神が、人にのりうつり、又は夢などに見えて、其の意を知らする告げごと。或る大事に際し、神に指導を祈願して受けたる神の答へ。おつげ。神託。拾遺論「ある人のいはく、住吉明神のたくせんとぞ」榮華晩年「其の比、伊勢のたくせんなどいひて」保元「はるばる野に誠に權現の御託宣なりと思し召して」

たくせん 〔謫遷 罪により、官職を貶(ヘ)して遠地へ赴かしむること。島流し。配流。

たくぜん 〔卓然 (副) 高くぬけ出でたるさまにいふ語。漢書董仲舒「卓然獨出百家」表記章六經」

たくそう 〔託送 物をたのみて送ること。

たくそう-でんぽう 〔託送電報 (名) 電報託送の手續によりて發受する電報。電報規則第十「託送電報發受者の納むへき電報に關する料金」

たくだ 〔橐駝 (名) 【動】らくだ(駱駝)に同じ。戰國策趙代良馬橐駝、必實於外廐」〔下文の柳宗元の郭橐駝傳による〕ろ名きや(植木屋)の異稱。柳宗元文(隋唐嫡)郭橐駝中傳病、僕隆然伏行、有類橐駝者、中傳因拾其名、自謂橐駝」

たくだ 〔(名・副) 幼兒の足元落ち附かず、危げに歩むさま。よちよち。

たくたく 〔灌灌 〔光澤あるさま、つやありて美しきさまにいふ語。世說容止「有手人歎王恭形茂者云、灌灌如春月柳」〔肥えふとりたるさま。一說、たしみ遊ぶさまにいふ語。詩經大雅「鹿鹿灌灌」〔山に草木なきさま、禿げたるさまにいふ語。孟子告子上「是以若彼濯濯也」

だくだく (副) 汗・血などの滯らず流れ出づるさま、又、湧きかへるさま、だくつきて落ちつかぬさまにいふ語。淀鯉出世瀧德「おなかのつかへ、だくだくと、胸に踊るをさすり下げ」

だくだく 〔諾諾 いふがままにうべなふこと。盲從。史記商君「千人之諾諾、不如一士之諤諤」

だくだくの-うま 〔跑跑馬 (名) うくづきうまに同じ。

だくだ-し 〔橐駝師 (名) たくだ(橐駝)に同じ。

たくち 〔宅地 (名) 建造物の敷地、又は其の敷地に供せらるべき土地。市街宅地と郡村宅地とに分かつ。各條を見よ。續紀十四天平十九年「班給京都百姓宅地」耕地整理法第四條第十三號「建物ある宅地」枕中書「宅地四面、竝方三萬里」

たくち 〔拓地 土地をきりひらくこと。開墾。開拓。唐書「明皇有逸德、而拓地太大」

たくぢ 〔田口 (名) 田の入口。夫木「山かげのたぐちにたてるをみなへし、われひとりのみ見るぞかなしき」

たくちゅう 〔槖中 (名) ふくろの中。行李の中。史記酈生陸賈傳「陸生槖中、裝直千金」

たくちん-さい 〔宅鎭祭 (名) 陰陽家にて、新たに居宅を建てたる時、災禍を鎭ひ幸福を祈るために行ふ祭。玉葉建久二年二月十七「今日於清涼殿井藤壺(中略)可行宅鎭祭之由同仰之、是大内魔緣亂入之由、有夢告之故也」東鑑脫漏(建久元年十一月十八日)「宅鎭祭親職、石鎭晴茂(中略)奉仕之」

だく-つき 〔(名) だくつくこと。堀川波鼓「胸のだくつき堪へ、兼ねて、下女呼び起こし酒の燗、おもても締めてもう寢よ」

だく-つく 〔(自動サ) だくだくす。動悸がする。

たく-づぬ 〔栲綱 (名) 栲布(ヲ)にてつくりたるつな。たくなは。

たくづぬの 〔栲綱之 (枕) 〔つぬはつなの義〕栲(ヲ)は色白きものなるより、しら・しろ等にかく。記上「多久豆怒能(ヲクヅノ)しらぎの白きただむき」萬三「栲角乃(ヲクヅノ)しらぎの國ゆ」

たく-てう 〔宅兆 (名) はかば。墓所。孝經喪親「卜其宅兆而安厝之」

だく-てん 〔濁點 (名) 濁音のしるしに假字の左傍に施す二つの點。即ち、が・ぎ・ぐなどのゝ。

たく-なう 〔橐囊 (名) 〔たく(橐)は底のなきふくろ、なう(囊)は底のあるふくろ〕ふくろ。詩經大雅「迺裹餱糧、于橐于囊」

たく-なは 〔栲繩 (名) 栲布(ヲ)の繩。又、栲(ヲ)などの皮にてつくりたる繩。神代紀上「千尋栲繩(ヲクヅノ)」枕上「あまのかづきしたるは(中略)このたくなはを海にうけありく」

たくなは-の 〔栲繩乃 (枕) 繩は長きものなるより、ながにかけ、又、深き所にも達するより、ちひろにかく。萬三「栲縄之(ヲクヅノ)ながき命を」同五「みなわなすもろき命も、栲縄能(ヲクヅノ)ちひろにもがと願ひくらしつ」

たくなみ 〔(名) たくなむこと。たくらみ。

たくなむ 〔(他動サ) たくらむの訛り。

たくぬの 〔栲布 (名) 楮(ヲ)などの纖維にて織りたる色白き布。夫木「いかなればこひにむさるるたく布の、などさゆみなる人の心ぞ」

だくのり 〔跑乘 (名) 乘馬にてだく足に馬を行ること。

たくはつ 〔托鉢 僧尼の、鉢を持ちて米錢を乞ひありくこと。書言故事門用人「托鉢(ヲクハツ)五燈會元「聞托鉢乞其、未聞安坐以享」聞見歷「謁諸祖、未聞廢學自任」

たくはつ 〔擇拔 多くの中より、えり出だすこと。えりぬくこと。選拔。

たくばつ 〔卓拔 たくしゅつ(卓出)に同じ。

たくはつ-そう 〔托鉢僧 (名) 托鉢する僧侶。山海里「托鉢僧の心地」

たくはつ-ばうず 〔托鉢坊主 (名) 前條に同じ。

たくはふ 〔貯 (他動サ) 次條に同じ。萬四「わたつみの神のみことのみくしげに多久波比(タクハヒ)おきていつくとふ玉」

たくはふ 〔貯 (他動サ) 〔集め置く。後の用にそなへ置く。靈異記下「營農蓄財(タクハヒ)發妻子」宇津保俊蔭「たからを たくはへしことは」源氏澤標「たくはふ」〔やしなひ置く。「氣力をたくはふ」

たくはへ 〔貯 (名) たくはふること。又、たくはへたる物。貯蓄。源氏風「そのあたりのたくはへの事どもを、あやふげに思ひて」太平記一「倉庫停止(タクハヘ)人皆九年の蓄へ有るが如し」

たくはへ-さん 〔貯金 (名) 貯へおきたる金。ちよきん。

たくはへる 〔貯 (他動サ) たくはふ(貯)に同じ。

たく-はん 〔澤畔 (名) さはのほとり。さはべ。史記屈原「屈原至於江潭、被髮行吟澤畔」白居易文「遺愛寺鐘欲暮、草芊芊、澤畔迎人處處香」

たくばん 〔宅番 (名) 家の番人。

たくひ 〔比 類 (名) 〔たぐふこと。相ならぶもの。同等なる物事。孝德紀「山川に鴛鴦二つ居て、陀虞毘(タクヒ)よくたぐへるいもを誰れか率(ヰ)にけむ」〔同じ種類。くみ。類。雄略紀「曩世罕儔(タクヒ)、當時獨秀者也」宇鑑「傳聞(ヒトヅテ)、昔毛原月、又(ヒトヅテ)久毛、徒然草「此の娘只栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ」

たぐひ 〔な 無比 次條の語幹。狂言八句連歌「たぐひなの殿の心やな」

たぐひ なし 〔無比 ならぶものなし。もっともすぐれたり。無比なり。竹取「たぐひなくめでたくおぼえさせ給ひて」榮華莊嚴「たぐひなき聖の御門とさへ申しけるに」

だく-ひ 〔諾否 諾することと否と。承知と不承知と。

たく-ひつ 〔卓筆 (名) すぐれたる筆蹟。すぐれたる文筆。王逢詩「雁宕龍湫氣混淩、展旗卓筆勞爭雄」

たくひの-かみ 〔燒火神 (名) 隱岐國の海中の神火。此の神を燒火權現といひて、海部郡島前に鎭座せりと。榮華根合「下もゆる歎きをだにも知らせばや、たくひの神のしるしばかりに」

たく-ひれ 〔栲領巾 (名) 栲布(ヲ)にてつくりたる領巾(ヒレ)。

たくひれ-の 〔栲領巾之 (枕) 栲布は白きものなるより、白・鷺などにかけ、又、領巾は類にかくるより、かけにかく。萬三「栲領巾乃(ヒレノ)かけまくほしきいもが名を、このせの山にかけばいかにあらむ」同九「細比禮乃(ヒレノ)さきぎか山のしらつつじ、われにしにほはねいもに示さむ」同十「栲領巾乃(ヒレノ)しら濱波のよりもあへず、あらぶるいもに戀ひつつぞをる」

たくぶ 〔比 類 (自動サ) そふ。ならぶ。ともなふ。一しょになる。仁德紀「道ゆくものも多愚譬(タグヒ)てぞよき」孝德紀「山川に鴛鴦二つ居てたぐひよく、陀虞陛屢(タグヒ)いもを誰れか率(ヰ)にけむ」萬三「沖になづさふ鴨すらも、つまと多具比(タグヒ)て、わが身には獨なふりそと」古今雜體「年をへてえ歸りまうでこざりけるを、此の國より又使まかり到りけるに比ひて、まうできなんとて出でたりける」續後撰雜四「萬

たくぶ 〔比 類 (他動サ) そはす。ならばす。ともなはす。一しょにならしむ。古今春上「花の香を風のたよりにたぐへてぞ、鶯さそふしるべにはやる」源氏明石「年へつるとまやも荒れてうき波のかへる方にや身をたぐへまし」

たくぶく 〔啄木 (名) たくぼく(啄木)の訛り。七十一「番歌合「組し。たくふくは此の比めす人もなきうたてさよ」

たくぶすま 〔栲衾 (枕) 栲は色白きものなるより、しらにかく。萬三「多久夫須麻(タクフスマ)しら山風のねなへども、子ろがおそきのあろこそえしも」同三「多久夫須麻(タクフスマ)しらぎへいます君がめを、今日か明日かといはひて待たむ」

たくぶら (名) たこむらに同じ。雄略紀「陀倶符羅にあむ掇きつきつ、そのあむをあきつはや食ひ」

たくぼ 一度歩 たうそく(蹈測)に同じ。

たくぼく 一啄木 (名) 【動】きつつき(啄木)に同じ。臨海異物志「啄木大如雀、嘴足皆青、毛色正青翠鳥類也」 二琵琶にて奏する謡曲の名。和名抄「高麗楽曲。葦波啄木」盛衰記「啄木と云ふ曲も天人の楽也、本名僧脱楽と云ふ」 震旦の商山に仙人多く集まって、偸かに此の曲を弾じけるに、山神感に堪へつつ、木を啄む様にもてなして此れを聞けるより啄木とは申す也」 三たぼくぐみ(啄木組)の略。「啄木の絲」義経記「黄金の菊がた打ったる銅拍子に、たぼくぐの緒を入れて」

だくぼく (名) 坂路などの高低あること。凹凸。丹波與作「胸はだくだく、だくぼくの坂の下へと別かれける」

たくぼくうち 啄木打 (名) 次條に同じ。

たくぼくぐみ 啄木組 (名) 紐の打方の一。白・萌黄・紫等の色絲を交へてまだらに組みたる物。熊軸の紐、刀の下緒などに用ふ。たくぼく。

たくぼくどり 一啄木鳥 (名) 【動】きつつき(啄木鳥)の異名。

たくぼくぞめ 啄木縅 (名) 鎧の縅の一種。啄木の絲をもて縅したるもの。謙信家記「信長謙信の使者に対面ありて、たくぼくの絲にてをどしたる鎧」

たくほん 一拓本 (名) 法帖など、石ずりにしたる本。楊升庵集「慎得石鼓文拓本於先師李文正公」

たくま 一琢磨 (名) 〔琢は鑿にてうち、磨は沙石にてみがく義〕 とぎみがくこと。又、学藝を益練修むること。運歩色葉「琢磨(タクマ)切磋(ツクル)」詩経「如切如瑳、如琢如磨」爾雅「玉謂之琢、石謂之磨」 二心十分に満足せり。氣持よし。宇鏡「泰然(タイネン)自若(ジジャク)」 三満ち満ちてあり。勢ひ盛んなり。巌丈なり。夫木「荒磯の岩もとゆすり立つ波の、たくましきまでぬるる袖かな」盛衰記「四郎高国、黒栗毛の馬高さ八寸、太く逞しきが」

たくましい 逞 (形) 一心のままにふるまふ。ほしいままにす。「慾をたくましうす」 二勢ひを盛んにす。太平記「十二之巻」「不扶貧窮傍らに集武具、士卒を逞しうす」

たくましげ 逞氣 (副) たくましきやう。たくましさう。

たくましさ 逞 (名) たくましきさま。たくましき度合。

たくまも (名) 【植】ふとゐ(蒐)の異名。

たくまる 工 (他動下二) たくむ(工)に同じ。平家「一般上近日人人相巧まるる旨、子細あるかの間」

たくみ 工 巧 (名) 一たくむこと。くはだて。てだて。經營。 二手工又は器械などによりて物を造る業の稱。たくみわざ。工業。又、それを業とする人。職工。神代紀「作金者(クガネツクリ)」源「木の道のたくみの、萬の物を心にまかせて造り出だすも」 三特に木材にて物を造る木工の稱。こだくみ。記「おほ多久美(タクミ)をおなみこそ、すみかたぶけれ」宇津保「上「格子かくべし中間これ造らんには、なべてのたくみは寄せじ」 四しごと。しわざ。散木集「あけくれは物思ふ事をたくみにて、わりさく胸を知る人ぞなき」

たくみ 巧 (名・副) 手際よきこと。出来のよきこと。上手。巧者。神代紀「巧(タクミ)作俳優」古今序「文屋の康秀は詞はたくみにて」徒然草「巧みにして欲しきままなるは、失の本なり」

たくみづかさ 内匠寮 (名) たくみれう(内匠寮)に同じ。源「梅島」「さとの殿は、すりしき・たくみづかさに宣旨下だりて、になう改め造らせ給ふ」

たくみづかさ 内匠司 (名) 明治六年七月以前に於ける内匠寮の稱。

たくみどり 巧婦 (名) 【動】みそさざい(鷦鷯)の異名。和名抄「巧婦(タクミドリ)、太平御覽「好鉤」雀皮食中蟲、故亦名蠶虎」枕「三鳥」たくみどり」名義抄「巧婦(タクミドリ)」

たくみのかみ 内匠頭 (名) 一内匠寮の長官。續紀「八月癸巳朔、五年「勅始置内匠寮、頭一人中務匠手」」 二内匠寮の長官。現今は勅任官なり。

たくみのごんのかみ 内匠權頭 (名) 明治十八年十二月二十三日宮内省に置かれたる内匠寮の職員。内匠頭なき場合に置き、其の職掌の内匠頭に同じき奏任官。同二十二年七月廃せられたり。

たくみのごんのすけ 内匠權助 (名) 明治十八年十二月二十三日宮内省に置かれたる内匠寮の職員。内匠助なき場合に置き、其の職掌の内匠助に同じき奏任官。同二十二年七月廃せられたり。

たくみのじょう 内匠允 (名) 内匠寮の判官。

たくみのすけ 内匠助 (名) 一内匠寮の次官。續紀「十月癸巳朔、八年「勅始置内匠寮、中務助一人中務匠手」」 二明治四十一年一月以前に於ける内匠寮主事の稱。宮内省官制第六十「内匠助」明治二十二年七月宮内省達第十「宮内省官制第三十九「内匠助」」

たくみのつかさ 内匠寮 (名) たくみれう(内匠寮)に同じ。

たくみのつかさ 主工署 (名) 春宮坊の被官。しゅこうしょ(主工署)に同じ。東宮職員令「主工署。首一人、木工寮の屬官。令義解「木工寮中務工部廿人、諸不無職司宛工」」

たくみべ 工部 (名) 木工寮の屬官。令義解「木工寮中務工部廿人、諸不無職司宛工」

たくみれう 内匠寮 (名) 一古昔、中務省に屬し、禁内の器物、工匠のことを掌り、又、殿舎の装飾に從事せる所。後には障子の破損のみを奉仕せり。うちのたくみのつかさ。たくみづかさ。續紀「十八年中務匠手」」 二現今、宮内省の一部局。建築及び土木に關する事務を掌るもの。頭・主事・屬・技師・技手の職員を置く。宮内省官制第二十二條十「内匠寮」

たくみれうのしゅじ 内匠寮主事 (名) 内匠寮の職員。寮務を掌る奏任官。宮内省官制第六十「内匠寮主事」

たくみわざ 工業 (名) たくみ(工)に同じ。

たくむ 工 (他動四) 一工夫す。考へはかる。 二たくらむ。くはだつ。著聞「かねてより、しかたくみまうけたる事なれば」太平記「八山法師「鎌ねてより巧みたる事なれば」

たくめ 専 (副) たうめ(專)に同じ。神武紀「此皆承密旨而歌之、非敢自專者也」

だくめく (自動四) だくだくするやうなり。だくつくやうなり。狂言「何事、仕つけぬ事をすると、胸がだくめいて氣味が悪い」

たくも 焚藻 (名) 藻を取るために藻鹽草を燒くこと。後拾遺「三浦風に蹈にけりな里の蜃の、たくもの烟心弱さは」千載「見さみだれはたくものけぶり打ち濕り、しほ垂れまさる須磨の浦人」

たくやく 一憂箭 (名) ふいがら(鏑)に同じ。老子「天地之間其猶囊籥乎」注「囊籥冶鑄所用、致風之器也」

だくやく 一諾 (名) 諾を與ふること。

だくやくしゃ 一諾約者 (名) 諾約せる人。

たくゆ 一託喻 物によそへてさとすこと。曹植文「假靈龜以託喻」

たくよう 一擢用 多くの中より、抜き出だして用ふること。後漢書「程烏字宵以有才弊、皆擢用之」

たくら (名) たくらだの略。新永代蔵「釜の下にて消炭をするたくらあり、その火をとりて炭に消すよりは、薪を多く燃さされ」

だくらう 一濁浪 (名) にごりたるなみ。范仲淹文「霖雨霏霏連月不開、陰風怒號濁浪排空」

だくらう 一濁醪 (名) にごりざけ(濁酒)に同じ。左思文「清酷如淵、濁醪如河」

たくらく 一卓犖 ぬきんでてすぐれたること。卓越。太平記「十五「建武寺院境「此の寺四箇の大寺の其の一つとして、論場の公請に隨ひ、實祚の護持を致す事、諸寺に卓犖せり」同「十三「山門」」登書「曇芳「卓犖不羈、有世之度」」

たくらく 一拓落 おちぶれること。ふしあはせ。落魄。揚雄文「何爲宮之拓落」

たくらく 一謫落 罪によりて官職を免ぜらるること。菅家後集「一從謫落在柴荆、萬死兢兢跼蹐情」

たくらだ (名) 愚人。ばかもの。うつけもの。御伽草紙「物ぐさ太郎」「扨も扨も、是れ程の

たくらだはなしと思ひて」三河物語「我がとまらんといはざるに、とまらんといふ奴ばらめは、たくらだめまで」運歩色葉「田藏田・於大田・宇佐・雪東・田舞田・於大・田舞・宇佐・於大・田舞・宇佐・於大・田舞・宇佐

の花の花粉を受けて受精すること。

たくわ 〔多寡〕おほきすくなきと。孟子「五穀多寡同、則價相若」

だくわい 〔墮壞〕おちてこはるること。衰へすたること。やぶること。史記「股肱不良、萬事墮壞」

たくわく 〔他廓〕(名) 外のくるわ。他の遊廓。色道大鑑「他廓。傾城町の事を云ふに、外の遊廓をさしてたたふる時の詞也」

だぐし 〔駄菓子〕(名) 粗製の菓子。下等の菓子。

だぐしや 〔駄菓子屋〕(名) 駄菓子を製造する家。又、駄菓子を賣る人、又は家。

たくわん 〔澤庵〕(名) たくあん(澤庵)の訛り。

だくわん 〔兌換〕紙幣、又は兌換銀行券などを、硬貨と引き換ふること。兌換銀行券條例第二「兌換銀行券は金貨を以て兌換するものとす」

だくわんぎんかう 〔兌換銀行〕(名) 兌換銀行券を發行するを得る銀行。我が國には日本銀行とす。

だくわんぎんかうけん 〔兌換銀行券〕(名) 日本銀行にて發行し、該銀行が何時にても其の持參人の請求に應じ、其の額面相當の正貨と引き換ふる義務ある證券。兌換銀行券條例「兌換銀行券」

だくわんぎんかうけんはっかうせい 〔兌換銀行券發行税〕(名) 兌換銀行券の制限外發行に課する税。其の税率は一箇年百分の五以上にて、其の時時大藏大臣の定むるものとす。

だくわんきんけん 〔兌換金券〕(名) (英 Convertible Gold note) 其の所持人が、何時にても金貨と引き換ふることを得る證券。

だくわんぎんけん 〔兌換銀券〕(名) (英 Convertible silver note) 其の所持人が、何時にても銀貨と引き換ふるを得る證券。

だくわんけん 〔兌換券〕(名) だくわんぎんかうけん(兌換銀行券)に同じ。明治三十二年法律第五十六號「日本銀行は兌換銀行券條例第二條第二項に該當せる保證に據り發行する兌換券中政府又は其他へ貸附たる兌換券」

だくわんけんはっかうせい 〔兌換券發行税〕(名) だくわんぎんかうけんはっかうせい(兌換銀行券發行税)に同じ。

だくわんけんはっかうはふ 〔兌換券發行法〕(名) 【經】兌換券の發行に就き採るべき方法。一部準備法・比例準備法・最少額發行法・制限伸縮法・阜綸準備法・最高發行法等の種類あり。

だくわんしへい 〔兌換紙幣〕(名) 紙幣の一。其の所有者の要求に應じ、發行銀行にて何時にても正貨と引き換ふべき義務あるもの。(不換紙幣の對)

だくわんしへいはっかうはふ 〔兌換紙幣發行法〕(名) 兌換紙幣の發行に就き採るべき方法。

だくわんしょうけん 〔兌換證券〕(名) しやうきんだくわんしょうけん正金兌換證券に同じ。明治七年二月大藏省布達各種紙幣通札交換規則第五「兌換證券は大藏省開拓使共に裏面に糊貼したる小印紙を以て確證とすへし」

だくわんせいど 〔兌換制度〕(名) 兌換紙幣に關する制度。

たくゐ 〔卓偉〕他にぬきんでてえらきこと。吳志「蔣欽烈之寵、體卓偉之才」

だくね 〔諾唯〕諾(だく)と唯(ゐ)と。又あいさつ。返答。唯諾。

たくあつ 〔卓越〕卓絶。晉書「未見奪出群卓越之倫」

だくを 〔濁汚〕にごりてけがるること。汚濁。蘇軾文「余方匹馬、欲磨濁汚」

たけ 丈 (名) ㊀高さ。物の高さ。身長。雄略紀「長(たけ)人」參語「つつ井づつ井づつにかけしまろがたけ、過ぎにけらしないも見ざるまに」枕「雪山中略たけなど少劣りもてゆく」源「あながちにたけたかき心地ぞする」㊁長さ。「反物のたけ」㊂有る限り。ありたけ。夫木「物思ふ心のたけぞ知られける、よなよな月をながめあかして」同「鳥もの思ふ袖になげきのたけ見えて、しのぶ知らぬは涙なりけり」回馬の、足より肩に至る高さ。四尺以上四尺九寸までの稱。「たけなる馬に打ちのって、令人をも連れず唯一騎」

たけ 嶽 岳 (名) 高く大なる山。高山。記「笠紫日向之高千穗之久士布流多氣」同「みえしぬのをむろが多氣に」萬「よろづよに語りつげこし此の多氣に、ひれ振りけらし松浦さよ姫」峰 記下 嶺 記中

たけ 竹 (名) ㊀【植】木本科に屬する常綠木本。種は二種ありて、一は地中に生じ、一は空中に直立す。大なるは高さ六七丈、周圍三尺に餘まり、小さきものは細小にして篠(ささ)といふ。苦竹(にがたけ)・淡竹(はちく)・呉竹(くれたけ)・山竹(やまたけ)・孟宗竹(もうそうちく)・紫竹(むらさきたけ)・水竹(すいちく)・琉球竹(りきうちく)・箭(やぜ)など種類多し。東洋諸國、東印度及び西印度諸島の特產。かはたまぐさ。このきみ。さえだぐさ。記下「もとには、いくみ陀氣(たけ)生ひ」萬二「秋山のしたぐるいも、なよ竹(たけ)のとをよる子ら」㊁たけのこ(筍)をいふ。宮女の詞。㊂笙・笛などの類。管樂器。曾我扇八景「三竹を吹き絲を引くこと藝上郎と分明なり」

たけあむかど 竹編門 竹の編戸(たけのあむ)のある門。夫木「道かへてたが世を渡る宿ならん、竹あむ門の前の柴垣」

たけのあき 竹秋 陰曆三月の異名。竹は八月を春とし、三月を秋とすといふよりいふ。

たけのあまはだ 竹甘皮 竹のあまかは。多識編「竹茹。和名、今按、太計乃阿末波太」

たけのあみど 竹編戸 細き竹をあみて作りたる戸。徒然草「あやしの竹の編戸の内より」玉葉「時しらぬ竹の編戸の内までも、世は春なれや鶯の聲」

たけのあらし 竹嵐 竹に風の吹き來たりて、さはさはと音たつること。山家集「玉みがく露ぞ枕に散りかかる、夢驚かす竹の嵐に」

たけのうてな 竹臺 涼殿の東廂にある漢竹(からたけ)の臺及び呉竹(くれたけ)の臺の稱。新續古今「君や今はらぬ色に契るらん、たけのうてなの萬代のかげ」

たけのけぶり 竹烟 竹の林など、遠くよりけぶるやうに見ゆるさまにいふ語。「新葉集「たちまじる友をも何か松のきり、竹の烟の山かげのいほ」

たけのこ 竹籠 竹を編みて作りたる谷(たに)。宇鏡集「簀(スノコ)。竹時雨(スダレコ)」

たけのしぐれ 竹時雨 竹の上に降る時雨。時雨にて竹藪などのそよぐこと。又、竹の葉のすれあふ音を時雨の降る音に譬へていふ。俳諧奇談「なつかしき竹の時雨や庵の跡」

たけのしたみち 竹下道 竹の生ひたる下を行く路。夫木「我が宿の垣ほの

谷の朝戸出に、雪折れくぐる竹の下道」

たけのだい 竹臺 たけのうてな(竹臺)に同じ。古事談「左府狀「于竹臺笠、石灰壇にて燒きて强ひ申されければ」榮華物語「かずさしの物は、内の御前とおぼしくて、竹のだいよりぬき出でたるを數にはしたり」

たけのつつ 竹筒 竹の幹を筒に切りたるもの。砂石集「香盤の蓋に細き竹のつつをねぢ入れて、片端をば佛の鼻にねぢ入れて」本朝字鏡「荼(タ)竹乃豆豆」

たけのと 竹戸 門に竹の生ひてあるにいふ。又、たけのあみど。著聞「竹の戸のかたに、人の音するを見やりたれば」夫木「ふし馴れぬほどをばゆるせ竹の戸に、風も夜寒の時も來ぬらん」

たけのとぼそ 竹扉 前條に同じ。太平記「或ひは片田舍に立ち忍びて、桑の門・竹の扉に住みわび給へ」

たけのともしび 竹燈 むすびとうだい(結燈臺)に同じ。堯孝法印集「さ夜もはや竹のともし火更けにけり、唱ふる御名や殘りすくなき」夫木「あまたたび竹のともしびかかげてぞ、三世の佛の名をば唱ふる」

たけのね **のむち** 竹根鞭 竹の根にて造りたる鞭。出陣日記「一陣にて竹の根のむち、なし地の鞍、青毛の馬、此の三色を於御當家きらふなり」

たけのは 竹葉 〔ちくえふ(竹葉)の字の直譯。竹葉は支那にて酒の異名)さけ(酒)の異名。夫木「竹の葉に浮かべる菊を傾けて、我れのみ沈む歎きをぞする」謠「鵜飼「鵜るるふしは、竹の葉の露ばかりぞに受けじとは思ひしかど共、盃に向かへば變はる心かな」

たけのはしら 竹柱 竹にて造りたる柱。たけばしら。龜山殿七百首「板びさし竹の柱のかりの世に、うち驚けとふる霰かな」山家集「代代ふとも竹のはしらの一すぢに、たてたるふしはかはらざらなん」

たけのはなと 竹花籠 竹にて編みたる花かご。夫木「しきみ摘む竹のはなとのはかなさも、まことの道に入らざらめやは」

たけのはなみ 竹葉浪 風のために、竹の葉の浪の如くにそよぐこと。貫井集「上そよぐ竹のはなみのかたよりを、見るにつけても夏ぞ涼しき」

たけのはやし 竹林 たけやぶ(竹藪)に同じ。萬「梅の花散らまく惜しみ、吾が園の冬氣乃波也之(ハヤシ)に鶯なくも」

たけのはやま 竹編山 山の籠にて竹の茂りたる處。新勅撰「踏みわけんものとも見えず、朝ぼらけたけのは山の霧の下露」

たけのはる 竹春 陰曆八月の異稱。猶、竹の秋を見よ。

たけのまがき 竹籬 竹にて編めるかき。袋忠百首「我れならぬ人もこそ折れをみなへし、こぼれた出でそ竹の籬に」

たけのみどり 竹綠 竹の葉のみどり。色の變はらぬにいふ。拾遺「白雪は降りかくせども、千世までに竹の綠は變はらざりけり」堀河百首「木の葉ちる折りふしごとにかはらねば、いくよをふべき竹のみどりぞ」

たけのよ 竹節 竹の節と節との間。古今「木にも非ず草にも非ず竹のよの、はしに我が身はなりぬべらなり」

たけのよどこ 竹夜床 竹にて作りたる床に夜寢ねること。又、其の床。新六帖「雪ふりて竹の夜床の寒けきに、ゆるす衣の御代やきてまし」

たけ 竹 竹綸綱 竹をよりて綱に造りたるもの。夫木「うき橋に竹のよりづな打ちはへて、小舟ならぶる富士の川浪」

(謎)竹に油を塗る 辯舌の達者なるに譬ふ。

(謎)竹のさきに鈴を附けたやう 多辯なる譬へ。

(謎)竹の二節 まれなる譬へ。

(謎)竹八月に、木六月 伐採に適したる時節なるをいふ。實永略書「人はいふ竹は八月木六月、美濃が腹をば今が切り時」

(謎)竹を割ったやう 邪曲なき譬へ。一休咄「邪なる萌しなく、竹を二つにわりたる如くの御心ざしなり」

たけ 茸 (名) 【植】きのこ(蕈)の異名。和名十六「菌蕈介也」夫木「松が根のたけかりゆけば、もみぢ葉を袖にこき入るる山おろしの風」

たけ 〔他家〕(名) 我が親族にあらぬ家。ほかの家筋。太平記「一門・他家、宗徒の人人」運歩色葉「他家(タケ)」

だけ 嶽 丈 (接尾) たけ(嶽)に同じ。又は程の意を表はす語。「これだけ書く」俳諧古選「蝶、遊ばるるだけは遊ぶや秋の蝶」

たけい 〔他計〕(名) ほかのはかりごと。李綂文「明主顯過則退、疑阻則退、不敢他計、苟安其位」

たけい 〔多藝〕(名) 多くの藝に通じて居ること。多能。書經「乃元孫不若、且多材多藝」史記「公、且巧、多材多藝」(謎)多藝は無藝 多藝の人は、特にすぐれたる藝なきこと。

たけうま 竹馬 (名) ㊀小兒の玩具。竹竿を馬に擬し、跨がりて遊ぶもの。又、竹竿の先に馬の頭の形したるものを作り、股に挾みて行くもの。又は二本の竹竿に各足掛(アブミ)を附けて兩足を載せ、兩手にて竿の上部を執りて歩むもの。ちくば。袋草紙「竹馬はふしがちにしていと弱し、今ゆふかげに乘りて參らん」夫木「竹馬におきふし馴れし其のかみの、よよはふれども忘れやはする」㊁次條の略。

たけうまふるぎや 竹馬古著屋 (名) 江戸時代の行商の一。古著類を竹の四脚ある籠又は箱にかけ、天秤棒に荷なひて商ひあるくもの。宇治拾遺「賣りありくこと。又、其の人。三十二番歌合「たけ賣。手あたりのよき枝あれば折るもうし、花の園ひのもがり竹召せ」

(やぎるふるぎやたけうま)

(たけうま)

たけうまぶ 竹植日 (名) 陰曆五月十三日の稱。この日を竹祭日といひて、竹を栽うるに最も好き日とす。

たけえびら 竹箙 (名) たかえびら(竹箙)に同じ。曾我「箙八「柿の直垂に、鹿筒さしたるたけえびら取りてつけ」

たけえん 竹緣 (名) 竹にて造りたる緣。浦島年代記「竹緣・板緣、くわったりひったり」

たけ-がらし 竹格子 (名) 竹にて造りたる格子。一代女「表に竹格子を附けて、奥深に小間き家作り」三代男「さもしからぬ所作、竹格子に年を經ける」

たけ-がき 竹垣 (名) 一竹にて作りたる垣。たかがき。宇鏡「蘿竹加」夫木「日數經る雪にしをるる心地して、ゆふがほ咲けるしづがたけがき」二紋所の名。

たけ-かご 竹籠 (名) 竹を編みてつくりたるかご。

たけ-がさ 竹笠 (名) 竹の網代笠。伊勢物語「東国に下りて、しげどうの弓に野矢負ひて、竹笠をきたりけり」曾我「兵庫三」「梅檀籐の弓の眞ん中とり、萌黄うらつけたるたけがさ、木枯に吹きそらせ」

たけ-がたな 竹刀 (名) 中身を竹にて造りたる刀。たけみつ。雪女五枚羽子板「身は竹刀、抜き繁ねて」

たけ-かぶり 竹冠 (名) たけかんむり(竹冠)に同じ。運歩色葉「竹カブリ」

たけ-がへし 竹反 (名) 遊戯の名。御鬮(おくじ)の如く輪狭く扁平に作りたる竹を片手の甲の上に載せ、竹を煽(アオ)るやうに突き上げながら、竹を裏返らしむること。げへ。(嬉遊笑覧)

たけ-かむり 竹冠 (名) たけかんむり(竹冠)に同じ。

たけ-がらす 岳烏 (名) 【動】ほしがらす(星烏)の異名。

たけ-がり 茸狩 (名) 山野に遊びて茸を探すこと。きのことり。古今雑下「北山に、僧正遍昭とたけがりにまかれりけるに、よめる」雅経部狂集「いづくをもみな笠とりの山ぞとや、雨用意せぬ今日の茸がり」

だけ-かんば (名) 【植】樺木(カンバ)科、樺木属の落葉喬木。幹の高さ三丈許り。樹皮は茶白色又は淡紫黒色にして、層層剝落す。葉は卵狀尖頭、ほぼ三角形を呈し、鋸歯を有す。早春、葉に先だちて帯黄青褐色の單性穂狀花を同株に出だす。果實は穂の長さ一寸餘に達す。我が國、高山に自生す。さはふぢ。

たけ-かんむり 竹冠 (名) 漢字の冠の一。竿・笠・笛などの上方にある竹の字の稱。

だ-げき 一打撃 一うちたたくこと。とりひしぐこと。葛洪文「岩無故自墮落、打撃然人」二損害となること。損失。「少なからざる打撃を被る」

だげき-ほう 一打撃法 (英 Pressing) (名) 地金銀を打撃・鍛冶して貨幣を製造する方法。

たけ-きり 竹切 (名) たけきりの五しき(竹切會式)の略。

たけきりの ごしき 竹切會式 昔、山城國鞍馬寺に、六月行ひたる法會の一。口に呪文を唱へ、棒にて竹を切るといふ。僧畟延が毘沙門の呪文によりて大蛇を寸斷せしめたるに始まりたりと。

たけ-きれ 竹切 (名) 竹のきれはし。竹片。

たけ-くぎ 竹釘 (名) 竹を削りて作りたる釘。

たけくぎ-いくさ 竹釘軍 (名) 會議などにて、一座を統率する者なく、議のまとまらぬこと。島原日記「此の列座の衆評議の體は、口口言ひ勝ちにて、竹釘軍と申す者にて、頭無之候」

たけ-くそく 竹具足 (名) 鉤術・槍術などの稽古の具。竹にて鎧の胴の狀に作りたるもの。

だけ-ぐみ (名) 【植】くろまめのきの異名。

たけ-くらべ 丈比 (名) 一高さを比較すること。二背丈の短長を比較して優劣を定むること。せいくらべ。砂石集「ひきき人のたけくらべは、ひききを勝ちとするが如し」御伽草子「箇様に申し候へば、鼠とたけくらべのやうに候へども」三高さを競ふこと。回廊の異名所。たか(鷹)を見よ。

たけ-げた 竹下駄 (名) 竹を割り、緒をつけて作りたる下駄。うたたね「己が氣を割って見せたる竹の下駄」

たけ-けむしてふ 竹毛蟲蝶 (名) 【動】昆蟲類中、鱗翅類の一種。成蟲は體細長にして其の色暗黒、翅の色も亦同じ。幼蟲は體長くして短き毛を密生す。竹葉を喰害す。

たけ-ごし 竹輿 (名) 竹にて編みたる輿。竹輿。

たけ-ごま 竹獨樂 (名) たうごま(唐獨樂)に同じ。

たけさ 猛 (名) たけきさま。たけき度合。榮華物語「猫さしならばせ給はん程のたけさは、こよなかるべければ」

たけ-ざいく 竹細工 (名) 竹を用ひてするさいく。又、その物。元祿萬買物調方記「京之分。竹ざいく、四條寺町の東」國花萬葉記「竹細工」府中の町花人(商賈)飾(ふり)て、いろいろあるを、紀て作るる」

たけざいく-し 竹細工師 (名) 竹細工を業とする人。名物六帖「竹器匠(タケイジ)」

たけ-さえ 竹小筒 (名) ささえ(竹筒)に同じ。傾城島原蛙合戰「足の下、土を鋤鍬・竹小筒・鐵を指物に不吉の印し」所の名。

たけざさ-にすずめ 竹笹雀 (名) 紋所の名。

たけざさ-のはる 竹笹丸 (名) 紋所の名。

たけ-さを 竹竿 (名) 竹の竿。ちく

たけし 猛 (形) 一つよし。いさましし。勢ひはげし。堅固なり。綏靖紀「今汝特挺神武(タケビ)、自誅元惡」竹取「たけく思ひたるみやつこまろも、物に酔ひたる心地してうつぶしふせり」徒然草「實の大事は、たけき川のみなぎり流るるが如し」剛。悍・雄健紀上代。壯紀下代。二叫ぶ聲はげし(厳)などにいふ。名義抄「咆(タケビ)・吼(タケビ)」三心強く思ふ。氣丈夫なり。宇津保藤上下「大將のありさま・かたち、御門と申すともきしろひ雖く思したるを、少したけく思すに」源夕顔「さるかたくなしきもののふに守られ給ふは、御ためにもたけからずや」大鏡「男宮おはしませば、たけくぞ」回他の執るべき手段にまさりてよし。えらし。格段によし。宇津保俊蔭「何かは、心づようきこえても、何のたけきことかは」源玉鬘「逃げかくれ給ふとも、何のたけきことかあらん」同夕顔「たけき事とては、ねを泣き給ふ」

たけき いくさ 剛軍 勇敢なる軍隊・士卒。萬二「出でむかひかへり見せずて、勇みたる多家吉軍卒(イクサビト)とねぎ給ひ」

たけき そなへ 武備 戰爭の用意。軍備。又、武裝。神代紀「躬裝(ソナヘ)武備(ツハモノ)」

たけき ひと 剛人 つよき人。剛勇なる人。勇士。神代紀「壯士(タケキヒト)」和名「壯士(タケキヒト)」

たけき わざ 武藝 武道の技藝。武術。武技。綏靖紀「武藝(タケキワザ)過人、而志尚沈毅」

たけじざい-てん 他化自在天 (名) 佛語。じざいてん(自在天)に同じ。謡曲「化天・耶摩天・他化自在天、三十三天攀ぢ登りて」智度論「此天奪他所化而自娯樂、故曰他化自在」

たけしまゆり (名) 【植】百合科、百合属の多年生草本。莖・葉くるまゆりに似たれども、葉層彼の如く正しからず。鱗莖は卵狀形なり。春日、梢上に、赤色にして底に暗紫色の細點を有する花を開く。我が國、山地に自生し、又、栽培せらるることあり。

たけ-じゅばん 竹襦袢 (名) つつぼ袖の襦袢なるべし。玄峰集「汗に朽ちぼ風すすくべし竹じゅばん」

たけす 竹簀 (名) 竹にて造りたるすのこ。たけすのこ。

たけすがき 竹簀掻 (名) たかすがき(竹簀掻)に同じ。夫木「冬來てはあねこがねやのたけすがき、いくよねざめの風か寒けき」

たけ-すがた 丈姿 (名) 身長と風采と。身の高さとからだつきと。源帚木「たけすがたととのひ、美しげにて、十人さまざまに今めかしう見ゆ」

たけ-すだれ 竹簾 (名) 竹を編みて作りたる簾。

たけすのこ 竹簀 (名) たけす(竹簀)に同じ。出觀集「賤の男がくろ木のこやの竹すのこ、いなほ亂れてかかる頃かな」

だけ-ぜり (名) 【植】繖形科、だけぜり属の草本。莖は細くして一二尺に達す。上部の葉は形略みつばに似たれども狭くして尖り、下部の大葉は小葉更に深く三裂して九片となることあり。秋季、莖頂・枝梢に小形、白色の花を繖形花序に開く。我が國、山中に自生す。かのつめさう。

たけ-ちか (副) 思ひがけなく。不意に。古語一説、たまさかに同じ。本居宣長「萬二「玉敷きて待たましよりは、多鶏蘇香(ソカ)にきたるこよひしたぬしくおもほゆ」

たけ-だいす 竹臺子 (名) 竹製の臺子。和漢茶誌「竹臺子」

たけしば-ゆり (名) 【植】百合科、百合属の多年生草本。莖・葉くるまゆりに似たれども、葉層彼の如く正しからず。鱗莖は卵狀形なり。春日、梢上に、赤色にして底に暗紫色の細點を有する花を開く。我が國、山地に自生し、又、栽培せらるることあり。

たけたか-だんし 丈高檀紙 (名) たかだんし(高檀紙)に同じ。

たけたか-ゆび 丈高指 (名) なかゆび(中指)に同じ。

たけ-だけし 猛猛 (形) 一甚だしく猛し。極めて勇猛なり。二しぶとし。ごうぶとし。ごうづうし。「盗人たけだけし」

たけだけし-げ 猛猛氣 (副) たけだけしさうに。たけだけしきさま。

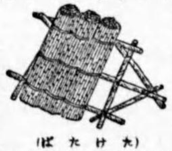
たけだけし-さ 猛猛 (名) たけだけしきさま。たけだけしき度合。

たけ-だち 丈立 (名) 立ちたる身のたけ。丈の高き程合。竹取「菜種の大きさおはせしを、我がたけだちならぶまで、美ひ奉りたる我が子を」宇津保初瀬「たけだちよきほどに、姿のきよらなること、更にならびなし」源若菜「舞人は、五ふのすけどもの貌清げに、たけだちひとしき限りをえらせ給ふ」

たけだ-づきん 竹田頭巾 (名) 江戸時代、大阪の操芝居(ジョウルリ)に用ひたる頭巾。頭より覆面まで一幅の製。(守貞漫稿)

たけ-たてわき 竹立涌 (名) 織物の模様の名。立涌(ワキ)の中に竹の葉などの紋あるもの。狭鏡「すすしの御袴・御紋たけたてわきを織る」

たけ-たば 竹束 (名) 戰陣に用ふる楯の一種。丸竹を束ねて楯とし、矢丸を防ぐに用ふ。又、牛竹束・車竹束・植竹束等の名あり。甲陽軍鑑「竹計りにも限らず、枕・柱までからげ集め、武田の諸勢是れを竹たばと名附けて」三河物語「竹たばを付け而、晝夜時之間もゆだん無く」


(ばたけた)

たけたば-ぶね 竹束船 (名) 竹束を楯としたる昔の軍船。

たけだ-びし 武田菱 (名) 一紋所の名。菱形四箇を菱形に組み合はせたるもの。甲斐國の武田氏のもの。甲陽軍鑑「武田びしを大きに蒔繪したる箱の」二模樣の名。よつわりびし。わりびし。

(こしびだけた)

たけだ-りう 武田流 (名) 兵法の一流。小幡勘兵衛景憲が武田信玄・山本晴幸等の兵法を傳へて其の徒に授けたるもの。甲州流。駿河土産「御家の御軍法、萬事之儀、自今已後は武田流に被遊候間」大和事始「武田流軍術」

たけ-たるき 竹椽 (名) 竹を用ひて屋根のたるきとしたるもの。太平記「武田信玄三「昔の玉楼・金殿に引き替へて、憂き節茂き竹椽」

たけ-ち 高市 (名) とし(郡市)の美稱。古語拾記「やまとのこの多氣知(タケチ)に、こ高る市のつかさ」神代紀上「會ニ八十萬神於天高市(タカチ)」

たけつ 多血 (名) 一體内に血の多きこと。二物事に容易に感激し易きこと。「彼は多血男子なり」

だけつ-が (名) 【植】しらびそ(白檜曽)の異名。

たけつ-かん 多血漢 (名) 多血質のをとこ。甚だ感激し易く、獻身的性質に富む男子。

たけづくり-の-たち 竹作劍 (名) 竹の形を金具・蒔繪にせる太刀。東鑑「四十六、廿三日「刑部少輔敦時持參御劍(竹作)」

たけつ-しつ 多血質 (英 Sanguine) (名) 【心】四氣質の一。はれる(西暦一七〇八—一七七七)は外的刺激を感受すること速かなるもの之を保留する力弱るもの、即ち忽ち興奮し、忽ち冷却し、性急輕躁なるものを言ひ、ずんと・は情緒の變化の遲速及び其の强弱より氣質を分かち、其の速かにして弱きものをいへり。

たけ-づつ 竹筒 (名) 竹にて作りたる筒。

たけ-づっぱう 竹筒 (名) 前條に同じ。

たけ-づな 竹綱 (名) 細く割りたる竹にてなひたるつな。

たけ-づゑ 竹杖 (名) 竹にて作りたるつゑ。狂言「鳥帝ひこれに竹杖が御座る、此れをかう竹馬に致しまする程に」

たけ-でっぽう 竹鐵砲 (名) 玩具の名。竹を用ひて鐵砲の狀に作りたるもの。慶筑波「藪にふるや竹鐵砲の玉あられ」

たけ-ど 竹戸 (名) 竹を編みなどして作りたる戸。

だ-けど (接) 次條の略。

だけども (接) だけれどもの略。

だけ-なが 丈長 (名) 一紙の名。普通の紙よりも丈長ければいふ。奉書紙の類にて、質厚く潤氣なくて、縦一尺六寸五分、横二尺三寸あるもの。たけながはうしょ。持統天皇歌軍法「此の萬九に向かって紙穿鑿は、舌長・丈長」二この紙をたたみて元結としたるもの。ひらもとゆひ。雪女五枚羽子板「風れ髪中略小枕拾て丈長も、より元結に大雲」

たけ-ながし 竹流 (名) 次條の略。お菊物語「金にてもあらば出せよといふにより、懐中の竹流し二本持って有りしを出だし遣はす」紀伊國物語「竹流しの金子などを能きほどに取り」

たけながし-きん 竹流金 (名) さをがね(竿金)に同じ。台德院御實記「黄金三拾枚、竹流金數十枚」

たけながし-ばん 竹流判 (名) 前條に

同じ。武德編年集成「故太閤の千枚分銅と稱する金を以て、四十八文目宛の竹流判と云ふを拵へ」

たけなが-ほうしよ 丈長奉書 (名) たけながが丈長に同じ。

たけ-なは 竹繩 (名) 竹を細く割りて繩になひたるもの。物を束ね、又は、火繩に用ふ。

たけ-なは 醋 (名、副) ㊀物事の最も盛んなる時。きいちゅう。もなか。神武紀「酒醂之後、吾則起歌」㊁やや盛りを過ぎたる時。衰へかけたるとき。「節已にたけなはなり」

たけに-ぐさ (名) 【植】ちやんばぎく(博落廻)の異名。

たけ-にすずめ 竹雀 (名) 紋所の名。笹竹の丸の内に雀の向き合ひてあるもの。曾我五人兄弟小袖「竹に雀は陸奥の五十四郡の總政所」

たけのうれん 竹暖簾 (名) 竹にて造りたるのうれん。新永代蔵「手習ひ子の筆の軸を貫ひためて、竹暖簾を拵へさせ」

たけ-の-かは 竹皮 (名) ㊀竹の幹の外面の部。和名「篠[ササ]乃皮」㊁筍を包める鱗片狀の皮。笠・草履を造るに用ひ、又、食物などを包むにも用ふ。籜。

たけのかは-ざうり 竹皮草履 (名) 竹の皮にて造りたる草履。

たけのかは-づつみ 竹皮包 (名) 食物などを竹の皮にて包みたるもの。

たけの-こ 筍 竹子 (名) ㊀竹の地下莖より生ずる嫩芽。鱗片狀の皮にて包まる。煮て食用にす。たかんな。古今集「今更に何おひ出づらん竹の子の、うきふししげきよとは知らずや」源氏物語「ませの中に根ぶかくうゑし竹の子の、おのがよよにや生ひ別かるべき」㊁縫ひ直したる古著の、前の襟込みの部分だけ色さめず際だちて見ゆるもの。㊂たけのこいしや(筍醫者)の略。

たけのこ の かは 筍皮 たけのかは(竹皮)に同じ。和漢三才圖會「孫竹[ヒメタケ]筍皮[タケノカハ]」

(諺)**筍で損をしたやう** やぶにらみを嘲りいふ語。

(諺)**筍の親まさり** 親よりも其の子のまさりたる譬へ。國姓爺後日合戰「國姓爺が手柄始めは千里が竹、其の筍の親まさり」

(諺)**筍の番をするやう** 筍で損をしたやうに同じ。

たけのこいしや 筍醫者 (名) 〔未だ數醫者ともならざる醫者の義〕技術の幼稚にして、極めて拙劣なる醫師を嘲りいふ語。たけのこ。

たけのこ-がさ 筍笠 (名) 筍の皮を編みて造りたる笠。法性寺笠。宗長手記「床に蓑・竹のこ笠かけ、わらうだを敷きて」

たけのこ-がたな 筍刀 (名) たかうなかたな(筍刀)に同じ。

たけのこ-がひ 筍貝 (名) 【動】軟體動物中、腹足類の一種。殼は螺層高くして長圓錐狀をなし、やや筍の如し。表面に斑紋あり。長さ三四寸なるを多しとす。我が國、近海に產す。

たけ-のこぎり 竹鋸 (名) 竹にて鋸の刃に造りたるもの。武家時代、錦挽[ニシキビキ]の刃に用ひたる刑具。時慶卿記「慶長三年十一月四日「親二人は土に掘り入れ首を出だして、首を七日に竹のこぎりにて被引と也」東武實錄「盜賊[ヒトヌスビト]是れを捕へて踏頭にさらし、竹鋸を以て首を引く事七日にして之を殺す」

たけのこ-ぎり 筍桐 (名) 紋所の名。

たけのこぎりびき 竹鋸挽 (名) のこぎりびき(鋸挽)を見よ。

たけのこ-づゆ 筍露 (名) 陰暦四五月頃吹く東南の風をいふ。伊勢國鳥羽及び伊豆國の船人の方言。物類呼稱

たけのこ-どき 筍時 (名) 筍の出盛りの時。芭蕉句集「新麥や筍時の草の庵」

たけのこ-ながし 筍流 (名) 陰暦四五月頃に吹く南風の稱。物類稱呼

たけのこ-びき 竹鋸挽 (名) たけのこぎりびき(竹鋸挽)に同じ。

たけのこ-ぶぎやう 筍奉行 (名) やぶにらみ(藪睨)の異稱。

たけのこ-むし 筍蟲 (名) 【動】馬蝿(バエ)の幼蟲の稱。

たけのこ-めし 筍飯 (名) 細く切りて煮しめたる筍を加へて炊きたる飯。

たけのこ-めばる (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。めばるに似て、體の長さ一二尺、赤色を帶び、背は黒色、體側に五條の黒條あり。我が國、近海に產す。

たけ-の-その 竹園 (名) ㊀竹の生ひたるその。㊁〔支那漢の時、梁孝王の御苑を修竹苑と名づけしより起こる〕くわうぞく(皇族)の異稱。夫木集「色かへぬ竹の園なる鶯は、幾よろづ代の春を待つらん」

たけ-の-そのふ 竹園生 (名) ㊀前條に同じ。續古今「王日くるれば竹のそのふにゐる鳥の、そこはかとなく音をも鳴くかな」㊁前條㊁に同じ。玉葉集「つかへつつ行くすゑ遠くたのむかな、竹のそのふに代代を重ねて」徒然草「竹のそのふの末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき」

たけ-のふし 竹節 (名) 【動】昆蟲類中、直翅類の一種。體の長さ三寸餘に達する細長杆狀のものにて、恰も竹稈の如し。頭部は小さく、前胸部長く、普通に翅を缺く。性遲鈍、草食す。とげとなふし、とびとなふし等の種類あり。ななふしむし。ななふし。

たけのふし-むし 竹節蟲 (名) 【動】昆蟲類中、直翅類の一種。體の長さ三寸餘に達する細長杆狀のものにて、恰も竹稈の如し。頭部は小さく、前胸部長く、普通に翅を缺く。性遲鈍、草食す。とげとなふし、とびとなふし等の種類あり。ななふしむし。ななふし。

たけのふし-むすび 竹節結 (名) 緒の結び方の名。

たけのほる 闌上 (自動) 旭日など、炎節に高くさしのぼる。山家集「たけのぼる朝日のかげのさすままに、都の雪は消えみ消えずみ」

たけ-の-せる 竹丸 (名) 紋所の名。ささのまる。

たけ-の-み 竹實 (名) じねんご(自然黐)に同じ。治部省式「祥瑞中略人參生長處竹實滿瓮」

たけ-の-みその 竹御園 (名) たけのその(竹園)に同じ。夫木集「綠なる竹のみそのの(竹園)に代代に、猶もときはのかげぞしつらん」

たけ-の-みや 多氣宮 (名) 次條に同じ。

たけ-の-みやこ 多氣都 (名) 〔多氣は伊勢の國の郡名〕伊勢にて齋宮のおはします所。たけのみや。大和物語「かの齋宮のおはしますところは、たけの都となんいひける」散木集「ときはなるたけの都の石なれば、うれしきふしを數へてぞ知る」

たけ-ばうき 竹帚 (名) たかばうき(竹帚)に同じ。二代男「辰が帶にたけばうきをささせ」

(諺)**竹帚も五百雜漢** 鰯のかしらも信心がらに同じ。いわし(鰯)の條を見よ。

たけ-ばし 竹箸 (名) 竹にて作りたるはし。二代男「著物拵へ、其の散らし形に、缺五器・竹籌・面棚、其の物の持ちぬる道具を品品切り附けして」

たけ-はしご 竹梯子 (名) 二本の長き竹を縱とし、横の段を木材にて造りたる梯子。

たけ-はしら 竹柱 (名) 竹にて造りたる柱。夫木「けさ見ればきそのふせやの竹ばしら、たわむばかりに雪ふりにけり」同「大井河きしのとまやのたけばしら、うかりしふしや限りなりけん」

たけ-はやし 竹林 (名) たかばやし(竹林)に同じ。

たけ-はら 竹原 (名) たかはら(竹原)に同じ。伊呂波字類「篁[タケハラ]」

たけび 哮 (名) 古語。たけぶこと。さけび。神代紀「奮稜威之雄誥[タケビ]」

たけ-びし 竹菱 (名) 戰陣の具。竹を削りて菱に代へたるもの。播州佐用軍記「駿州川邊・革の袋に入れて持ちたる鐵菱・竹菱を中略時きたりける」

たけびし-に-さき 竹菱笹 (名) 紋所の名。

たけぶ 哮 誥 (自動) 猛くさけぶ。恐ろしきさまに吼ゆ。さけぶ。ほゆ。記「伊都之男建[タケビ]」神武紀「於軍中」萬葉「ますらをの思ひ多鶏備[タケビ]て、かくせる其のつま」叱咤紀

たけびころぶ 誥噴 解高にしかり貴む。神武紀「誥噴[タケビコロビ]」

だけ-ぶ 一妥協 雙方折り合ひて穏かに事をまとむること。をりあひ。

たけぶん-がに 武文蟹 (名) 〔元弘の亂に兵庫湊に死せる楠武文の怨靈が化したるなりとて名づく〕【動】節足動物中、甲殼類の一種。體形よく平家蟹に似て、甲背に數箇の疣狀突起ありて醜し。毎脚短毛を粗生す。甲の長さ一寸二分許り。我が國、東海・西海等に產す。

たけべ-がさ 建部笠 (名) 紋所の名。

たけべ-てふ 建部蝶 (名) 紋所の名。

たけ-べら 竹篦 (名) 竹にて造れるへら。繊留「定木・竹べら・はけ・糊まで持ちて」

たけ-ない 竹米 (名) 【植】はひまつ(這松の異名。(木篤)を見よ。

たけ-まつ (名) 【植】すずたけ

たけ-みそ 竹黄 (名) 竹の中にある粉。白色・黒褐色等あり。藥品として用ふ。牙色にして微かに透明なるを上品とす。本草綱目啓蒙「天竹黄。たけみそ」

たけ-みつ 竹光 (名) ㊀竹を削りて刀身に代へたるもの。小兒などの差料とす。膝栗毛「脇差はたけみつ故、浮きて流れる」㊁鈍刀を嘲りていふ語。

たけもとりつ 竹本流 (名) 淨瑠璃節の一流。竹本義太夫の語り出だせるもの。義太夫節。竹本義太夫の語り出だせるもの。義太夫節。竹豐故事「竹本・豐故事の流義は、時に合ひし浮るりと云ひつべし」

たけ-もみ (名) 【植】次條の異名。

だけ-もみ (名) 【植】松杉科、樅屬の常綠喬木。樅の一種。幹の高さ十三丈、周り一丈三尺に達す。樹皮は灰褐色、葉は普通の樅よりも短くして裏白し。五月下旬頃開花し、後、長き圓柱狀の毬果を結び、十月成熟す。我が國、日光・富士・御嶽、四國の石槌山、武藏國の秩父等に產す。板材及び製紙の原料に供す。うらじろもみ。にっくわうもみ。にれもみ。へそもみ。粗末なる家。著聞「たけ屋をつくりて、黑木の屋になぞらへて」㊁竹を賣る店。

たけ-やうじ 竹楊枝 (名) たかやうじ(竹楊枝)に同じ。

たけ-やぶ 竹藪 (名) たかやぶ(竹藪)に同じ。竹島雜誌「此の島東の方大竹藪あり」

(諺)**竹藪に矢を射るやう** 無益なる譬へにいふ語。

たけ-やま 茸山 (名) 茸の生ゆる山。蕪村句集「心にくき茸山越ゆる船路かな」

たけ-やらい 竹矢來 (名) 竹にて結ひたる矢來。

たけ-やり 竹槍 (名) 竹の幹の一端を尖らせ、槍に代へて用ふるもの。東亂記「物馴れたる手だれども數百人、犬引に作り立て、竹やりを持たせ、夜討ちの支度をさせ」信長公記「其の折り節、竹槍にて扣き合ひ御覽じ」

たけり 哮 (名) たけること。

たけり を かく 哮り出だす 曾我虎磨「猪は怒って猛りをかき、牙を研ぎ、鼻嵐を吹き掛け」

たけり (名) 〔猛りの義〕動物の陰莖を藥用とする時の稱。

たけり 田計里 (名) 【動】鳥類中、涉禽類の一種。中等大にして、背面は黑綠色、頸の側面及び腹は白く、頭は黑色にして冠毛あり。脚は赤色なり。冬季、我が國、各地に見る。なべげり。

たけり-たつ 哮立 (自動) たけり出だす。盛んにたける。

たけり-たつ 哮立 (自動) 前條に同じ。

たけり-たてる 哮立 (自動下) 前條の口語。

たける 梟帥 (名) 上古、勇猛なる夷族の長の稱。記「やつめさすいづも多那流(ハヤ)がはける太刀」神武紀「八十梟帥(ハヤ)」

たける 猛 (自動) 猛くあり。强くて勇ましくあり。あらくあり。あばる。神代紀「五十猛(ハヤ)神」字鏡「游蛇(ハヤ)」宗長千首鳥「あらちをのかる矢のさきに猛る猪も、人の憂きにぞ身をばかふなる」

たける 哮 (自動) たけぶ(哮)に同じ。名義抄「哮・哮(タケブ)・吼(タケブ)」

たける (自動) 古語。物に觸れて情動く。感ず。雄略紀「感(タケル)以爲婚」

たける-べ 長 (自動下) たく(長)の口語。

たける-べ 武部 (名) 上古、武人の團體の稱。景行紀「武部(タケベ)」

だ-けれど (接) 次條の略。

だ-けれども (接) さうではあるけれど。さうですが。だけど。だけども。

たけ-れんじ 竹櫺子 (名) 竹にて造りたる櫺子。丹波異作「竹櫺子の出格子に、首を伸ばして取り附けば」

たけ-わ 竹輪 (名) 紋所の名。

たけわ-に-くまいざさ 竹輪九枚笹 (名) 紋所の名。

たけわ-に-さんばすずめ 竹輪三羽雀 (名) 紋所の名。

たけわ-に-みつすずめ 竹輪三雀 (名) 紋所の名。すずめ(雀)を見よ。

たけわのうち-に-ごまいざさ 竹輪中五枚笹 (名) 紋所の名。

たけわのうち-に-ささ 竹輪中笹 (名) 紋所の名。

たけわり-にかいまつ 竹割二蓋松 (名) 紋所の名。

たけ-を 猛男 (名) たけく勇ましき男。ますらを。丈夫。萬葉「から國に行き足らはして、歸りこむますら多家乎(ヲ)にみき奉る」

たけん 一他縣 (名) ほかの縣。

たけん 一他見 (名) 他人に見ること

と。三代男「我れ許りうなづきて、他見をなさず、祕して箱に納め置きけるとぞ」源氏十二段長生島盡「某も、一生他見致さじと曾正坊に誓ひぬれば」

たげん 〔多言〕多く物言ふこと。饒舌。多辯。名義抄「浹 [illegible]」詩經 [illegible]「人之多言、亦可畏也」左傳 [illegible]「言以考典、典以志經、忘經而多言」

たーげん 〔他言〕たごん(他言)に同じ。

たげん-はらていしき 〔多元方程式〕(名)【數】二つ以上の未知數を有する方程式。例へば $3x+4y+5z=23$ の類。

たげん-れんりつはらていしき 〔多元聯立方程式〕(名)【數】二つ以上の未名數を含む方程式。

たげん-ろん 〔多元論〕(英 Pluralism)(名)【哲】宇宙を一實在に還元し得ざる多數の實在より成立すとなす哲學說。

たこ 馬脊瘡 (名) 馬の背上に生ずる瘡。和名抄「療馬脊瘡 [illegible]」

たこ 胼胝 (名) 手足などの皮膚の、摩擦によりて固く厚くなりたるもの。たこずれ。

たこ-がいる 胼胝入 久しく座して、足の感覺鈍くなる。又、同じ事を度度聞きて、耳の感覺を失ふ。「足にたこが入る」「耳にたこが入る」

たこ 凧 (名) いかのぼり(凧)に同じ。

たこ-をながす 流凧 凧を上げ、凧を高く飛ばす。相模國の方言。

たこ-をのぼす 昇凧 前條に同じ。東海道の方言。

たこ 蛸 章魚 蛸 (名) ■【動】軟體動物中、頭足類の一屬。外套膜は囊狀をなして體軀を包む。八本の長き脚ありて、これに二列の吸盤を有す。口は脚の基部を周圍とする中心にあり。體色は往往甚だ變色すれども、灰褐色なるを多しとす。我が國各地の沿海、岩礁の間に棲息し、晝間は隱逃して出でず。夜間出でて食物を求む。肉食性にして食食なり。食用に供す。種類數多あり。まだこ。和名抄「海蛸子 [illegible]」字鏡「蛸 [illegible]」■地形 [illegible] などを突き、固め、又、杭打ち等に用ふる重き具。普通、圓柱狀の木に把手を附け、又、下部に繩を附け、杷手及び繩を執り上下して打つ。

たこ-の-にふだう 蛸入道 たこにふだう(蛸入道)に同じ。雅趣醉興集「和田の原こぎ出でて見し其のそれに、似て足長したこの入道」

(諺)蛸の眞で、あたまへあがる 己れは誇れども他よりは卑しめらるるに譬ふ。蛸の糞は頭にありとしていふ。

(諺)蛸の友喰ひ 同類相食む譬へ。

たこ 〔多故〕(名) むづかしき事件の多きこと。困難の多きこと。多難。國語「王室多故、余懼及焉」史記「呂后時、事多故矣、然平寬自愼、定宗廟、以榮名終稱賢相」

たーご 田子 (名) たびと(田人)に同じ。榮華月集五月のさみだれにも哀れにて、しほとけくらし、田子の袂に劣らぬ有樣にて」堀河百首「いそぎ取れ今は早苗も生ひつらん、田子のもすそは朝しめるとも」

たご の かけなは 田子懸繩 田植の時、田に張り渡すなは。夫木「時しあればたごのかけなはながき日も、猶いとなくやさなへとるらん」

たご 擔桶 (名)(田子の潮酌む桶よりいふと。[illegible]) ■水などを入れて擔ふに用ふる桶。になひをけ。■こえたご(肥桶)の略。

たーご 〔詫語〕(名) たぶらかす言。いつはる言。又、ほこりの言。晉書「甘言詫語、方伯襲之以方伯」

だーと (名) だかう(駄荷)の訛り。構窟自語「南都方の樂人、例年霜月若宮祭禮の竟宴の心にや中華だことて、酒肴をまうけて遊ぶ事あり」

だーと 〔唾壺〕(名) 唾をはき入るるに用ふるつぼ。禁祕抄「唾壺・手拭宮」雅亮裝束抄「したのこしの奥にだこのはこのふたを置きて、唾壺をするたり」世說 [illegible]「以如意一打唾壺、壺口盡缺」

だーと 〔鼉鼓〕(名) 鼉の皮にて張りたりといふ鼓。詩經 [illegible]「於論鼓鍾、於樂辟廱、鼉鼓逢逢、矇瞍奏公」

だーと 〔打鼓〕太鼓をうちならすこと。杜甫詩「負、繩出井此英女、打鼓發船何郷郎」

たこ-がしら 蛸頭 (名) かこがしら(鉸具頭)の訛り。

たこ-からげ 蛸絡 (名) 衣の裾の周圍を捲りあげること。東海道名所記「濃れかたびらをしぼり、たこからげに裾を絡げて」

たーこく 〔他國〕よその國。ほかの國。又、ほかの國へ行くこと。諸 [illegible]「是れは他國の物語」禮記 [illegible]「宗子有罪、居于他國」庄子 [illegible]「大夫、其祭也」史記 [illegible]「李斯因說秦王、請先取韓以恐他國」

たーこく さんがい 〔他國三界〕他の國の遠く隔たりたる所。娥歌加留多「不承な顏も見せ給はず、他國三界此の雪に、御身にかけての勞りは、先の世の親か兄弟か、ただの御緣と思はれず」

だーごく 〔墮獄〕現世の惡業により、死して地獄におち行くこと。傾城島原蛙合戰「今生はなぶり物、來世は墮獄」

だごく-にん 〔墮獄人〕(名) 地獄に墮つる人。地獄に墮ちたる人。曾我五人兄弟「大罪人の墮獄人、此の袈裟は伊達に著るか」

たこく-もの 他國者 (名) 他國生まれの者。他國の人。國姓爺「他國者は城內へ堅く禁制との掟てなり」

たこくらげ 蛸水母 (名)【動】腔腸動物中、水母類の一種。傘は淺く、幅は高さの二三倍ありて、其の緣は八十箇の緣瓣に分かる。傘の中央下面より四本の管を垂れ、相合して盤狀となり、尙其の下面より八本の觸手の如き口腕と名附くるものを垂る。全體淡き黃褐色にて、傘面に更に數多の斑點を見る。我が國、東南海に多く產す。

たこく-わたり 他國渡 (名) 他國に渡り行くこと。他國を廻り歩くこと。國姓爺後日合戰「浪人の他國渡りの留守の宿、嫁の關玉賢女にて、家を賄ふかせ世帶」

たごさく 田五作 (名) 農夫を卑しめていふ稱。

たこし 鯖 (名)【動】魚の名。詳かならず。さごしの類か。和名抄「鯖、子之、太古魚名也」

たーごし 手輿 (名) えうと(腰輿)に同じ。儀式 [illegible]「齊內親王參入、坐川原御殿、御輿留手輿坐」和名抄「腰輿、之太古」枕「御輿・たごしなどもてかへる」

たーごし 手越 (名) 手より手に傳へ行くこと。崇神紀「おほ坂につきのぼれる石むらを、多誤 [illegible] に越さず越しかへむかも」以手遞傳 [illegible]

たこ-ずれ 胼胝擦 (名) たこ(胼胝)に同じ。

たご-だご (副) 小兒の、辛うじて歩むさまにいふ語。西行和歌談抄「兒のたどたどあゆみたる體の歌」

たこ-づきん 蛸頭巾 (名) 頂を圓く

製りたる頭巾。紫の布帛を用ひたりといふ。[illegible] 常照愚草「頭巾御覽ありし事、もともとは餡頭巾を專ら用ひ候ひし」

たこ-つぼ 蛸壺 (名) 蛸を捕るに用ふる素燒の壺。桐の木の浮 [illegible] をつけて海中に沈め置き、蛸の其の中に入りたる頃をうかがひ、引き上げて捕る。崇義集「蛸壺やはかなき夢を夏の月」

たこ-にふだう 蛸入道 (名) たこ(章魚)の異名。その圓き頭が入道の坊主頭に似たるよりいふ。又、轉じて坊主頭の者を嘲りたる稱。

たこ-のあし (名)【植】さはしをん(扯根菜)の異名。

たこ-のき 露兒樹 (名)【植】桑蘭(フエ)科、桑蘭屬の常綠木本。幹の高さ二十尺餘に達す。葉は細長にして尖り、緣邊に鋭き鋸齒あり、平行脈を具ふ。樹幹の下部に多數の大なる氣根を生ずる狀、蛸に似たりとて此の名あり。夏日、小形、單性にして雌雄異株の花を開く。我が國、琉球・臺灣等の濕地に自生す。觀賞用とし、又、葉を以て籠・帽子等を造る。臺灣ばなま・帽の如き之なり。きあだん。きのあだん。桑蘭。

(きのこたけ)

たこ-の-き (名)【植】とねりこ(樗)の異名。

たこのさーくわ 露兒樹科 (名)【植】蘭花植物、單子葉類の一科。喬木又は灌木。直立又は攀緣し、雌雄異株、多くは幹枝より氣根を出だす。葉は硬き革質にして三縱列をなし、單葉にして平行脈を有し、披針形又は線形をなして鋭尖頭、基部は葉鞘をなす。花序は腋生又は頂生、單一又は分枝せる肉穗花序をなし、葉狀の花莖にて包被せらる。雄花は密生し、每花に多數の雄蕊あり。雌花は單體をなせる雌蕊を有し、子房は單室又は多室をなし、各相分離し、又は隣接せる諸花に於けるものと連合す。胚珠は一箇乃至多數あり。果實は核果又は蒴果、數多集まりて長精圓狀をなせる蕊合果をなす。たこのきは此れに屬す。此の科の植物は舊世界の熱帶諸地に廣く播布す。桑蘭科。

たこ-の-て (名)【植】さはしをん(扯根菜)の異名。

たこ-の-ぼう 擔桶棒 (名) てんびんぼう(天秤棒)をいふ。京都の方言。今宮心中「水汲みが、汲んで荷うて持つや擔桶棒の棒」

たこ-のぼり 凧幟 (名) いかのぼり(凧)に同じ。

たこ-の-まくら 海燕 (名)【動】蘇皮動物、海鱔類の一種。長徑三寸許りの稍扁平精圓形の殼を有し、棘短小にて毛の如し。殼と棘とは褐色を呈す。我が國、東南海及び西海に產す。まんぢゆうがひ。

たこ-の-めんざ (名)【動】かめの手(龜手)の異名。

たこ-の-を 鮹尾 (名) 武具。指物の一種。

たご-ばう (名)【植】ちやうじたでの異名。

たご-ばうず 蛸坊主 (名) たこにふだう(蛸入道)に同じ。

たこ-はた 蛸旗 (名) 旗の一種。その形、後世の吹流(ナガレ)に同じかるべし。玉石雜話「齊明紀、蛸旗(ハタコ)二十頭」

たこ-ひさ (名) 蛸を料理するに用ふる庖丁。

たーごふ 〔多劫〕(名) 佛語。極めて多くの歲月。太平記十(五六段)「[illegible]」怨ちに死せる人は、永く修羅の奴となり、苦を多劫の間に受けん事を」

たこ-ぶね 舡魚 蛸船 (名)【動】軟體動物中、頭足類の一種。體軀は稍卵形にて、八本の脚を有し、各脚に二列の吸盤あり。雌は脚のうち六本は細長く先端細しと雖も、他の二本は末端擴張して羽狀をなし、側扁卵形の螺旋狀をなしたる單房の介殼を擁す。殼質は透明・脆薄にして美麗なり。雄は小形、雌の十分の一なるもありて、介殼を缺き、脚のうち一本は膨大して交接器となる。多く暖海に產す。かひだこ。

(ねぶこた)

たこ-まくら 海燕 (名)【動】たこのまくら(海燕)の異名。

たこ-むら (名) 古語。かひな。うで。記「白たへの袖きそなふ多古半良(タコ)に、あむ掻さつき」

たこ-め 賭 (名) ただれたる眼。ただれめ。字鏡「賭、太己」

たご-をけ 擔桶 (名) たご(擔桶)に同じ。

たーこん 〔多恨〕うらみ多きこと。哀情の多きこと。王僧孺「旅心已多恨、春至尙難群」

たーごん 〔他言〕他人に語ること。人に告ぐること。たげん。「他言を許さず」用明天皇職人鑑「他言せられな、我れこそ親王の家臣、五位の介諸岩と言ふ者よ」

たーごん 〔多言〕多くものいふこと。口數多きこと。たげん。盛衰記十八(鐵砲)「高麗・多言にして、人をも人とせざりける餘り中略孤勳勳、被流罪げり」

たーさい 〔多妻〕(名) 一人の男が二人以上の妻を持つこと。

たーさい 〔多才〕(名) 才智の多きこと。

たーさい 〔多材〕(名) 才能の多きこと。書經 [illegible]「乃元孫不若、且多材多藝」史記 [illegible]「且巧能多材多藝」

たーさい 〔多罪〕■罪多きこと。書經 [illegible]「殄戮多罪、亦克用勸」■過失、又は無禮をわぶるに用ふる語。

だーさい 〔打碎〕うちくだくこと。晉書 [illegible]「雖謂、鞭撻石打碎」

だーさい 〔墮罪〕罪人となること。諸 [illegible]「無閑の底に墮罪すべかつしを」甲陽軍鑑「それがし無閑奈落「墮罪仕らん」

だざい-の-だいのそつ 太宰權帥 (名) 太宰府の官。親王帥に任ずれば、權帥代はりて專ら府務を統督す。但し大臣の左遷せられて此の官に任ぜられたる者は府務に預らず。續後紀 [illegible] 藤原常嗣薨中略承和元年改 [illegible] 近江權守中略四年 [illegible] 太宰權帥」榮華 [illegible] 御門を傾け奉らんと構ふる謀により、太宰權帥になして流し遣はす」

だざい-の-せうげん 太宰少監 (名) 太宰府の判官。大監の下に位するもの。職員令「太宰府中略少監二人 [illegible]」

だざい-の-せうに 太宰少貳 (名) 太宰府の次官。大貳の下に位するもの。職員令「太宰府中略少貳二人 [illegible]」

だざい-の-そち 太宰帥 (名) 次條に同じ。

だざい-の-そつ 太宰帥 (名) 太宰府の長官。中古以來、多くは親王を以て任ず。官位令「親王中略三品四品太宰帥中略踏王諸臣中略從三位太宰帥」國基集「江中納言、太宰帥になりてくだられしに」

だざいの-だいげん　太宰大監（名）太宰府の判官。少貳の下に位するもの。職員令「太宰府中務大監二人[官位相當]」[令義解]「太宰大監大伴宿禰百代」

だざいの-だいに　太宰大貳（名）太宰府の次官。親王帥に任じて權帥なき時は、大貳代はりて專ら府務を統ぶ。職員令「太宰府中務大貳一人[從四位下]」

たさいはう-どうぶつ　多細胞動物（名）【動】多數の細胞相集合して體軀を構成する動物の總稱。動物界中、原始動物を除きたるものの外は皆是れに屬す。

だざいふ　太宰府（名）古（筑前國に置かれたる官府の名。九國・二島、即ち、西海道を總管し、兼ねて外寇を防ぎ、外交の事を掌る。其の長官を帥[ソチ]とし、其の下に權帥・大貳・少貳・大監・少監・大典・少典等の諸官あり。なほ別に主神[カンナギ]の官ありて、管内諸社の祭祀を掌る。おほみことものつかさ。鎮西府。職員令「太宰府[帥・大貳・少貳]」

だ-さう　挓喪（名）馬の脛の下にある旋毛。

たさく　他策（名）ほかのはかりごと。

たさく　多作　多くつくること。「多讀多作」

たさく　短冊（名）たんざく（短冊）の略。宇津保[藤原]銀に塗りものしたるかぎども、たざく附けつつ、いと多かる中に」

ださく　駄作　つまらぬ製作。拙劣なる著作。

ださけ　駄酒（名）味のわるき酒。買のあしき酒。惡酒。雪女五枚羽子板「駄酒でも打ちくらって、唐辛をかっ喰」

たさつ　他殺（自殺の對）他人に殺さるること。

た-さん　他山（名）一他の山。ほかの山。二他の寺。ほかの寺。よそのお寺。諸[法華經]「一寺の賞翫、他山の覺え、時の花たり」

（諺）他山の石、以て玉を攻むべし　他人の反對說又は惡行が、却って自己の智德を修養すべき助けとなる。詩經[小雅]「他山石可以攻玉」

だ-さん　打算　數ふること。勘定すること。見積もること。錢塘遺事「賈似道忌害一時任事關臣、行打算法、以汚之、向士壁守、潭、貶用委浙西閫打算、趙奏守、潭、則委經康閫打算、江淮廣帥皆受賕錢之苦」

たさん-えんき　多酸鹽基（名）【化】二酸鹽以上の鹽基。水酸化かるしうむ $Ca(OH)_2$、水酸化あるみにうむ $Al(OH)_3$ の類。

ださん-てき　打算的　物事をなすに、打算して取りかかるにいふ語。勘定高きこと。

たし　足（名）一足[ソク]すること。增し加ふること。二おぎなひ。たすけ。補益。太鼓狂言[五句]「路錢のたしに致さうと存じて ほそものを用意致いた」

たし　多士（名）多くの人才。書經[文王之]「關股多士、今惟我周王」

たし せいせい　（多士濟濟）すぐれたる人の多くあること。詩經[大雅]「濟濟多士、文王以寧」

たし　他志（名）あだしごころ。ふたごころ。左傳[襄公三年]「令尹似君矣、將有他志」史記[呉太伯世家]「伍員知光有他志」

たし　立（自動）たつ（立）の活用、たちの訛り。古、東國の方言。萬[三]「あらしをも多志[タシ]やはばかる不破のせき、くえてわは行く」同[四]足柄のみ坂に多志[タシ]て袖振らば、いはなるいもはさやに見もかも」

たし（形ク）一接尾語の如く他の語に屬つき、その事の甚だしき意を表はし、又其の語意を强むる語。記[上]「うれ多久[タク]も鳴くなる鳥か」萬[三]「三笠山ぬべゆ行く道こき太久[タク]も、荒れにけるかもひさにあらなくに」勢語「飽ればこそいとど櫻はめでたけれ、うき世に何か久しかるべき」二助動詞の如く動詞に屬つきて、願ひ望む意を表はす語。萬[三]「おほならばかもかもせむを、かしこみと振り痛[タク]袖をしぬびたるかも」月詣集[三]「聞きたしや宿をたどりてなく涙、わすれ水とや流れゆくらん」

たし（副）たしか。しかと。丁寧。記[下]「たしみたけく、多斯[タシ]にはゐねず」祝詞式[國幣]「倭文[ヤマトブミ]大御心[ヒ]多親[タシ]に」出雲風土記「丁寧[タシ]所遣國在詔而、丁寧[タシ]負給」

たじ（名）えだる（柄樽）をいふ。京都及北越の方言。[物類呼稱]

たじ（名）暫く時のたつこと。久しき時間。王安石詩「留連山水立多時」

たじ-ごと　多事（名）一仕事の多きこと。事件のしげきこと。莊子[天地]「富則多事、壽則多辱」二事變の多くあること。世間の穩かならぬこと。「國家多事」

たじ-ごと　他事（名）ほかのこと。餘事。史記[武帝紀]「以他事誣[シ]御史之」

たじ なし　他事無　他の事を顧みず。餘念なし。平治[下]「亡夫並びに姫君の後世を、他事なく弔ひける」宇治拾遺「ただ圍碁をうつ外は他事なし」左傳[襄公廿年]「晉士起將歸、時事於宰旅、無他事矣」

だし　出（名）一いだすこと。二城の名。でまる（出丸）に同じ。立入宗繼記「城の大手のだしにおき申す女房にて候故、名をばだし殿と申し候」三幟などの頭に附ける飾物。雜兵物語「指物の眞先に出しと云ふものがある。且那が出しは酒ばやした」四胄人形の胄の上に附けたる厚紙製の飾物。鷹筑波「けづりかけの胄のだしは經師」五だしかぜ（出風）の略。六だしじる（煮出汁）の略。七手段　方便。利用。雙生隅田川「すっぱの皮め、談合づくの徒腹、天狗のだし食はぬ百連」八だしがひ（出貝）の略。雍州府志[七、土產]「婚人合貝爲遊戲、其法三百六十之貝、左右分之、閑並床上、空其中央、貝一隻內、右貝稱出、置床上、左貝稱出、每一箇、而出置中央之隙地」

だし に つかふ　使出　手段に利用す。他狩劍本地「親をだしにつかふは、物取りの奥の手」

だし　山車（名）祭禮の時、車上に種種の飾物などして曳き出だす車。やたい。[東國]だんじり[大阪]はなだい[土佐][物類呼稱]

だしあひ　出合（名）だしあふこと。[太鼓狂言八句]「夫れなれば、出し合ひに致しませう」

だしあふ　出合（他動）互ひに金品を出だす。「金をだしあふ」

だしあみるぬ-ぎょげふ　出網類漁業（名）定置漁業の一。垣網を、土俵若しくは碇等を以て、一定の水面に敷設するもの。漁業法施行規則[明治三十七]「出網類漁業」

だしいれ　出入（名）いだすことといれること。しゅつにふ。出納。五人女「內藏の出し入れをも任され」俳諧新選「出し入れは雲の仕事や山櫻」

たし-しう　他州（名）ほかのくに。よそのくに。他國。平治[下]「昨日の他州の愁へ、今日は我が身の責め」劉禹錫詩「紅葉滿山歸故國、黃茅徧地住他州」

だし-おき　出置（名）貯藏より出だして時を經たること。「出し置きの香の物」

だし-おくる　出遲（自動）出だす機會に後る。又、言ひ出だしかぬ。言ひ出だすに躊躇す。一代男「出し遲れてゐる中に、吉田方より申し出だして」

たしか　慥確（名・副）一かたくして動かざること。しかとして移らざること。雄略紀「君臣義切[ヤリキ]」竹取「心たしかなるをえらびて」二安心なること。信用せらるること。萬[三]「慥[タシカ]使をなみと、心をぞ使にやりし、夢に見えきや」三間違ひなきこと。相違なきこと。しかと。きっと。宇津保[藤原]「人づてならで、御手にたしかに奉れ」枕「たしかに守り侍らん」源[夕顏]「たしかに其の車をぞ見まし」宇治拾遺「きやつ、たしかに召しこめて勘當せよ」四危からざること。あぶなからざること。大丈夫。宇津保[藤原]「家の券添へて奉りたる目錄そへて奉り給ふ。これはたしかなる物に入れて置き給へれ」五分明なること。判然としたること。はきと。古今序「詞かすかにして、始め終りたしかならず」宇津保[上]「八月ばかりにとは承れど、たしかにはまだうけたまはらず」宇治拾遺「暗ければ、たしかにけしき見えず」六祭すること。おほかた。たぶん。大抵。狂言[佐渡]「たしかに無いと聞いたが、有るが定か」同[月見]「其方へ仰せ附けられたは、たしかこめこめとやら仰せ附けられた」

だし-かぜ　出風（名）〔船を出だすに便なる風の義〕とうふう（東風）をいふ。諸國の方言。

だし-がひ　出貝（名）かひあはせ（貝合）を見よ。

たしかむ　確（他動下二）念を推して一應たしかなる點を見屆けおく。曖昧たる點を明瞭にす。

たしかめる　確（他動下）前條の口語。

だし-がら　出殼（名）煮出しなどしたる物の滓[カス]。「茶のだしがら」

たし-き　多識　多く物事を識ること。晏經[上]「君子以多識前言往行以畜其德」

たし-き　田鴉（名）【動】鳥類中、沙禽類の一種。中形の鳥。背部は黑色にして、其の兩側を通じて黃赤色の太き條斑あり。腰部は赤黃色に黑斑を交へ、頭部の中央線に赤褐色の條斑ありて、其の兩側に太き黑條あり。類部は白色、喉胸部は黃褐色に黑斑を交へ、腹部は白色、嘴は暗褐色を呈す。歐・亞兩大陸に產し、冬季我が國に多く來たる。

たし-きって　出切手（名）江戸時代、掛屋が指紙を持參し代金を提供したる者に交付せる領收書。これを藏屋敷に持參するときは、現米又は米券を受け取ることを得たるもの。

だし-きぬ　出衣（名）いだしぎぬ（出衣）を見よ。

だし-きり　出切（名）一だしきること。二絕えず出だし居ること。出したるままなること。浮世風呂「奇麗な拳ぢやあねえ、靡が早いに手は出し切りで、指先をおつにごまかすはな」

だし-きる　出切（他動上一）出だし終はる。

だし-げた　出桁（名）【建築】腕木[ウデギ]の端に載せたる桁。うでぎ（腕木）を見よ。

だし-こぶ　出昆布（名）昆布を煮だしに用ふること。又、其の昆布。

だ-じ　田鹿（名）【動】うし（牛）の異名。

だし-じる　出汁（名）煮出したる汁。

だし-っこ（名）互ひに物を出だし合ふこと。浮世風呂「手ん手んに出しっこで寄りかかるだ」

たし-てん　他支店（名）他店と支店と。

たしてん-かんぢやう　他支店勘定（名）簿記の勘定科目の一。他店又は支店の名を口座として、これらの當店に對する貸借勘定を整理するもの。

たしてんかんぢやう-もとちやう　他支店勘定元帳（名）他店又は支店の名を口座として、これらの當店に對する貸借勘定を示す帳簿。

たし-なし　足無（形ク）物に乏し。困窮せるさまなり。仁德紀「布德施惠、以振困窮[タシナシ]」齊明紀「使人遠來、辛苦[タシナシ]」名義抄「龍鍾[タシナシ]、窘[タシナシ]」

たしなみ　窘（名）窘[タシナシ]むこと。困窮。困阨。顯宗紀「全身免厄[タシナミ]」

たしなみ　嗜（名）一嗜[タシナミ]むこと。好み。すき。二心がけ。用意。覺悟。太平記[北條滅亡]「朝暮只武勇の御嗜みの外は他事なし」狂言[鐘鑄]「小刀は持ちませぬ。たしなみの惡い者共ぢやな」三つつしみ。修飾。「身のたしなみ」

たしなみ-いしやう　嗜衣裳（名）身なみの衣裳。

たしなみ-ごころ　嗜心（名）たしなむ心。つつしみの心。謹慎の心。一代女「萬事おとしつけて居たる客には太夫氣を呑まれて、我れと身に嗜み心出できて中等位取る事は脇になりて」

たしなみ-だうぐ　嗜道具（名）身の修飾に用ふる道具。身だしなみの道具。化粧道具。狂言[煮物]「鏡中藏今は人間のたし

なみ道具となって」

たしなむ 窘（名）困窮す。辛苦す。神代紀上「風雨難」窘、不得留休、辛苦降」同下「有川雁嬰、羈困厄」

たしなむ 嗜（他動）苦しむ。なやむ。

たしなむ 嗜（他動）苦します。なやます。神武紀「如何危我於海乎」

たしなむ 嗜（他動）（其の業を嗜む）みゃびぶ義よりいふ）一このむ。すく。たしむ。今鏡「さやうに道をたしなみて、やんごとなくなんおはしける」今物語「和歌の道をたしなみて、其の名聞こゆる人なり」二用意し置く。心掛く。太平記「自後最後の時も不忘、心中の愁緒を述べて、天下の稱嘆に殘されける」甲陽軍鑑「文をたしなみ、能く人を見知る大將」三つつしむ。慎飾す。謠切髪「露の命を惜しまずして、最後を清くたしなみ候へ」

だしぬく 出抜（他動）他の隙を見又は之を欺き、己れ先んじて事をなす。著聞集「誰れに蹴りつけんとてかく程に人をだしぬかんとするぞ」太平記「引きかねはるを、播磨國の住人肥塚が一族、三百餘騎が中に取り籠めて、出し抜いて虜りてけり」

だしぬけ 出抜（名）一だしぬくこと。浮世風呂「おれを出し抜けにして、皆出たな」二不意に事をなすこと。突然。不意。唐突。浮世風呂「うぬら、出しぬけに」

だしぴん 出鬢（名）鬢の毛を出だして髪を結ぶこと。色芝居草子「髪は大ていに、はね元結も目にたたず、出し鬢も少しつと有って」

たしぶ 田澀（名）田の水あか。田の水さび。

たしぶ 嗜（他動）たしむ（嗜む）に同じ。名義抄「就」同「嗜」

たしぶち 足扶持（名）扶持を更に増して與ふること。又、その扶持。

だしぶく 出文机（名）いだしふづく系（出文机）を見よ。

だしべい 出塀（名）射撃又は物見等に便なる爲め、城郭の塀の一部を外へ突き出だしたるもの。太平記「見山夜討」搦手に對する東の出塀の口をば、大和・河内の勢五百餘騎にて堅めたり」同「六番太平出塀の脇に引っそうて、木戸を切り落とさんとしける」

たしほね 鳥（名）鳥の頸部の名所。とり（鳥）を見よ。

たしま 但馬紙（名）【植】むろ（杜松）の異名。

たじまがみ 但馬紙（名）但馬國より出づる紙。貞丸「大館常興書札抄「但馬紙十束送給之」鈴以紙著候」

たしまへ 足前（名）不足を足す分。おぎなひ。補闕。

たしみ 嗜（名）たしむこと。このみ。すき。嗜好。

だしみせ 出見世（名）ところみせ（床見世）をいふ。京阪の方言。守貞漫稿

たしみだけ 立繁竹（名）立繁竹の義にて、繁く生ひ立てる竹なりと。古事記「山のかひに立ち榮ゆる葉びろくまかし、もとには いくみたけ生ひ、末には多斯美陀氣生ひ」

たしむ 嗜（他動）このむ。すく。たしなむ。字鏡「嗜太平」又「阿支太平」又「己乃平」

たしゃ 多謝（名）厚く禮を述ぶること。漢書「至」府、爲我多謝問趙君」

たしゃう 多生（名）佛語。幾度も生をもかへて生まれ出づること。多くの生死を經たること。蘇軾詩「多生宿業盡、一夜中氣存」

たしゃうくわうごふ 多生曠劫（名）佛語。多くの生を更へ、無量の劫を經ること。太平記「朝敵をたぼし得ずして空しく黄泉の旅におもむきぬる事、多生曠劫までの妄念となりぬと覺え候」

たしゃうのえん 多生緣（名）佛語。多くの生をかふる前より結ばれたる因緣。太平記「一樹の陰に宿り、同じ流れを汲むも皆是れ多生の緣不淺」

たしゃう 他生（名）佛語。今生より過去及び未來の生をいふ稱。運歩色葉「他生」諸教「是れ又他生の功力なれば、日頃は敵今は又、誠に法の友なりけり」李商隱詩「海外徒聞更九州、他生未卜此生休」

たしゃうのえん 他生緣（名）たしゃうのえん（多生緣）の誤り。たしゃう（多生）の條を見よ。諸田「一河の流れを汲んで、他生の緣ある旅人に」

たしゃう 他姓（名）たせい（他姓）に同じ。運歩色葉「他姓」

たじゃう 多情（名）一情の多きこと。情愛深きこと。尊愈詩「多情懷二酒伴一、餘事作二詩人一」二氣の移り易きこと。浮氣なること。うつりぎ。

たじゃうたこん 多情多恨（名）多情にして多恨なること。物事に感じ易くして、うらみ多きこと。

だしゃう 駄餉（名）食物。辨當。誤りてだから。東鑑「八、治承四年、永實獻二件駄餉一」明月記「嘉祿元年十一月廿八日、社頭駄餉所、兩大將別當參候」

だじゃうくわう 太上皇（名）だじゃうてんわう（太上天皇）の略。類聚國史「廿五、弘仁十年、十四年、弘仁十四年、天長元年、仍僧尼位、禪「太上皇」」日本紀略「弘仁十四年、九月廿五日、皇帝再三苦請、太上皇固辭」史記「秦始皇本紀」「尊二莊襄王一爲二太上皇一」

だじゃうぐわん 太政官（名）だいじゃうぐわん（太政官）に同じ。

だじゃうくわんさつ 太政官札（名）明治元年閏四月より翌二年六月まで製造し、同八年五月三十一日（一兩以下の分は、同九年五月三十一日）より通用を廢止せられたる不換紙幣。製造總額四千八百九十七萬三千九百七十三兩一分三朱。内、九十七萬三千九百七十三兩一分三朱は發行するに至らずして燒棄せり。十兩札・五兩札・一兩札・一分札・一朱札の種類あり。

だじゃうくわんにっし 太政官日誌（名）明治の初年、朝廷の日日の行事を記載して公布せる文書。今の官報に類す。

だじゃうくわんぶ 太政官符（名）詔書を頒下する時、太政官より其の被官に下だす文書。

たしゃうごふ 多生劫（名）佛語。たしゃう（多生）の條を見よ。釋迦如來誕生會「妻と呼び君と呼ぶ、結緣は多生劫」

たしゃうこん 多漿根（名）【植】根が肥大柔軟にして、殆ど柔組織より成り、其の中に液質の養分を貯ふるもの。蕪菁・菜蔬の類。

たしゃうしょくぶつ 多漿植物（名）【植】莖・葉等が肥厚して多量の水分を含める植物。概ね乾燥地に生ずるを以て、自體内に水分を貯ふるなり。仙人掌・馬齒莧の類。

だじゃれ 駄洒落（名）つまらぬしやれ。拙きしやれ。

たしゅう 多趣（名）おもむきの多きこと。趣味多きこと。陳後主詩「園林多趣賞、祓禊樂還尋」

だしゅ 舵手（名）船のかじとり。

だしゅ 唾手（名）手につばきをつくること。勇みて事に著手するにいふ。唐書「唾手可取」

たしゅう 他宗（名）他の宗旨。ほかの宗旨。

たしゅう 多衆（名）たいしゅう（大衆）に同じ。治安警察法「多衆の運動」

たしゅううんどう 多衆運動（名）一定の目的のために戸外に群集したる多人數が、其の目的を遂行すべく、音聲又は形容を以て處處を運動し廻はること。治安警察法「結社集會又は多衆運動に關し警察官の尋問ありたるとき」

たしゅつ 他出（名）一他所に出づること。酉陽雜俎「因他出夜驚、中路怨遇虎」

たしょ 他所（名）一其の場所と異なるところ。ほかの場所。よそ。盛衰記「幼き御曹司を他所に奉置って、所所にて思し召さんも心苦し」庭訓往來三月、四至「幼稚示境、阡陌聊不可被混亂他所」宋史「皆徙置他所」二他所にうつること。榮華「榮蔬、それさ（他所さられなば、まいていかにいかに」

たしょう 他稱（名）【文法】百分と話相手とより以外のものの稱。即ち、第三人稱。（自稱の對）

たしょく 多食（名）多く食ふこと。大食。論語「鄉黨、不二撤薑食、不二多食一」

たしょとりたてかた 他所取立手形（名）【商】取立手形の一。銀行所在地にあらざる地にて支拂はるるもの。

たしょばらひかはせてがた 他所拂爲替手形（英 Domiciled bill）（名）【商】其の支拂地が支拂人の住所又は營業所の所在地と異なる爲替手形。他所拂手形。（當所拂手形の對）

たしょばらひてがた 他所拂手形（英 Domiciled bill）（名）【商】前條に同じ。（當所拂手形の對）

たしょばらひにん 他所拂人（英 Domicile drawee）【商】他所拂手形の支拂の義務ある人。

たしょゆき 他所行（名）一餘所へ行くこと。他へ移ること。大阪の方言。二藝妓娼妓の他へ出かせぎすること。

たしょわりびきてがた 他所割引手形（名）【商】其の割引をなす銀行の所在地にあらざる地を支拂地となす手形。（當所割引手形の對）

たしらか 水（名）水を盛る瓶。四時祭式「供二神今食料一…多志良加四口、陶鉢八口」江次第「水部一人、執二多之良加一、次之」同「次取水部所持多之良加」

たしるし 田印（名）みなかもの。

たしろ 田代（名）田地。田。讃古事談「蓋の四方に田あり」千町の田代あり」

たじろぎ （名）一たじろぐこと。二どさくさすること。ぐづぐづすること。源「「さる方のよすがに思してもありぬべきに、さやうならんたじろぎに、たえぬべきわざなり」

たじろぐ （自動）一退き避く。しりどみす。躊躇す。夫木「晴れぬるかたじろぐ雲のたえまより、星見えそむるむらさめの空」二對抗し難くあり。劣る。宇津保「俊蔭「文の道は少したじろぐとも其のすぢは多かり、此の事は俊蔭一人こそあれ」三動き傾く。傾く。堀河百首「朝夕につどふ板田の橋なれば、桁さへ朽てたじろぎにけり」月詣集「風吹けばかゝるまがきもたじろぎて、いとどあたなる朝顔の花」著聞「引きぬかんと動かしければ、たじろがざりければ」

たしん 他心（名）たい（他意）に同じ。戰國策「有二他心一不可」

たじん 他人（名）たにん（他人）に同じ。

たしん 蛇心（名）じゃしん（蛇心）に同じ。

たしん 蛇心佛口（名）じゃしんぶっこう（蛇心佛口）に同じ。じゃしん（蛇心の條を見よ。

だしん 打診（名）指頭などにて胸部などを打ち、其の音響によりて内臓の病の有無を察知すること。

だしんき 打診器（名）打診に用ふる板又は槌。

たしんけう 多神教（英 Polytheism）（名）【宗】宗教にて、多數の神の存在を信じ、之を禮拜するもの。

たしんつう 他心通（名）佛語。五神通の一。他人の心を知る通力。

たす 足（他動）不足をおぎなふ。增し加ふ。大鏡「狂言「足らずば足らぬと疾うおしゃらいて、足しておまさうものを」」同「武」只今では隣屋敷を買ひ足しまして、殊の外廣う住まひするに依って」

だす 啄長魚（名）【動】だつ（啄長魚）の異名。

だす 墮（自動）おつ。おちいる。墮落す。保元「左府「奈落の底に墮す」

だす 出（他動）いだす（出）に同じ。（誹）出す事は舌を出すも嫌ひ　極めて吝嗇なる人にいふ語。（諺）出す事は神から手を出すも嫌ひ　前

條に同じ。

(誹)出す事は目の中の壓でもいや　前條に同じ。

たーすう　一多數　(名)　數の多きこと。

たすう の いっち　多數一致　(羅 Consensus gentium)【哲】多人數の意見の一致が眞理の標準なること。一般の一致。

たすう-あっせい　一多數壓制　(名)　多數の者が其の多數をたのみて、少數のものを壓制すること。

たすう-けつ　一多數決　(名)　半數以上の意見によりて議事を決定すること。

たすう-だいへうほう　一多數代表法　(名)【法】選擧の一。選擧人中の多數の投票を得たる者を當選人となすもの。過半數制と最多數制との二種あり。過半數制とは選擧人中にて投票せるものの半數以上の投票を得たる者を當選人とする制度をいひ、最多數制とは投票者中の最も多數の投票を得たる者を當選人とする制度をいふ。

たすかる　助　(自動四)　一助けられて免る。二命をひろひ得たり。死を免る。

たすき　襷　手綴　(名)　一仕事する時、衣の袖を肩又は腕に束ぬる紐。背中にて打ち交ひに結ぶ。神代紀上「以羅縫手綴(タスキ)」祝詞式「手襷(タスキ)取掛(タスキ)」萬二「白たへの多須吉(タスキ)をかけ、まそ鏡手に取りもちて、あまつ神あふぎ乞ひのみ」二小兒の雙手の浩きを自由に著する一種の著物と。宇津保「今宮こもんの白き綾の御ぞ一つかさね奉りて、たすきかけて、いとをかしく」枕「ちご中夢ど中夢きぬ長くて、たすきあげたるが、はひ出でくるもいとうつくし」名義抄「襁褓(タスキ)」二紐又は線を斜めに打ち違へたること。又、其の模樣。徒然草「經文などの紐を結ぶに、上下よりたすきにちがへて」

たすき-がけ　襷掛　(名)　一たすきをかけて居ること。たすきをかくるさまにしたること。宇津保「御ぞは濃きあやのうちぎ、あはせのはかま、たすきがけにて、えび染めのきの直衣きて」枕「ちご中夢たすきがけにゆひたる腰のかみの、たうをかしげなるも、見るにうつくし」二江戸時代に、髮置の時、扇を開き、柄の方に麻を長くさげ、色水引にて扇に結ひ附けたるを頂に置くこと。かくして産土神に參詣せしといふ。江戸砂子「女兒祓ひに、白髮又といふ。曙遊雲覽」けと雙して、麻苧・眞綿に未廣」三つたへぞり(傳反)に同じ。

たすきがけ-の-ののじ　襷掛の字　(名)【形によりていふ】ゝの字の稱。

たすき-すがた　襷姿　(名)　たすきをかけて働くすがた。拾玉「それもいさ爪に藍しむことのはの、しいし取りおくたすきすがたよ」

たすき-の-のじ　襷の字　(名)　たすきかけのゝの字(襷掛の字)に同じ。

たすき-ひねり　襷捻　(名)　相撲の手の一。四手に組み、片手を上げて相手の首を捲くやうに差手と合掌を組み、體を一杯に寄せて捻り倒すこと。

たすき-ほし　(名)　二十八宿の一。よく(襲)に同じ。

たすく　助　(他動四)　一力を添ふ。てつだふ。助力する。源末摘花「翁、門をえあけやらねば、よりて、ひきたすくる、いとかたくななり」同浮舟「抱き給ひて、たすけられつつ入り給ふを」相模集　二危難を救ひて免れしむ。救ひて災を避けしむ。竹取「旅の空に、たすくべき人もなき所に、いろいろの病ひをして」宇津保菊宴「人の命をたすくとおもほして、此の事なしたばかり給へ」三みちびきて過失なからしむ。すすめて功をなさしむ。後見す。輔佐す。萬八「あめつちの神あひうづなひ、すめろぎのみたま多須氣(タスク)て」源梅宴「おほやけの固めとなりて、天の下をたすくる方にて見れば」名義抄「贊(タスク)」四倒るるを支ふ。源蜻蛉「左右の戸もよろぼひ倒れたれば、をのこどもたすけて、とかくあげさわぐ」五乏しきものに給す。貧しきものをにぎはす。

たすけ　助　(名)　一たすくること。又、其のもの。すけ。てつだひ。すくひ。助力。輔佐。竹取「もしさいはひに神のたすけあらば、南海に吹かれおはしぬべし」同「汝がたすけにとて、片時の程とくだしを」二人用の品。物資。太平記「馬・物の具兵粮等に至るまで、我れ不吝と奉りける間、行路の費け卓散なり」費。三鷹の尾羽の名。

たすけ の ほね　助骨　あばらぼね(助骨)に同じ。和名「助骨(多須乃保禰)幹骨也」名義抄「助(スケノホネ)骨」

たすけ-ことば　助詞　(名)【文法】じょどうし(助動詞)に同じ。

たすけ-ぶね　助船　(名)　難破船、又は水に溺れんとする人などを助くるため乘り出づる船。すくひぶね。救助船。平家「丸六黑助舟に乘らんとて、細道に懸かりて汀の方へ落ち行く處を」盛衰記「助舟も多く有りけれども」

たすける　助　(他動下)　たすく(助)の口語。

たすけ-をしふる-つかさ　助教官　(名)(助教官の字の直譯)　助教。助教授。百寮訓要和歌「學ぶ身をたすけをしふる人なくば、いかにしてかは道に至らん」

たーせ　一他世　(名)　佛語。未來の世。あの世。觀无量壽經「捨身、他世必生淨國」

たーせい　一他姓　(名)　自分と異なる姓。他人の姓。ほかのうぢ。

たーせい　一多世　(名)　多くの世。多くの年代。盛衰記「世間(ヨ)、國(ヨ)、王氏より日城に及んで、大權の芳契多世を經たり」

たーせい　一多勢　(名)　人數の多きこと。おほぜい。保元「親經等、身方多勢なれば」平治「紀伊守、多勢を以て無勢を擊つこと、當の事なり」

(誹)多勢に無勢　多人數と少人數と。敵し難きにいふ。平家「六代(ヨ)、多勢に無勢、可叶共不見けり」

たーせい　一惰性　(名)　一(理)くわんせい(慣性)に同じ。二從來の習慣又は趨勢。

たーせう　一多少　一おほきとすくなきと。又、數量の程度。運歩色葉「多少(セウ)」史記「日暮、不知其兵多少」二いくらか。幾分か。すこしは。

たーぜり　一(植)一せり(芹)の異名。更科日記「いく千たび水の田ぜりを摘みしかど、思ひし事の驚もかなはぬ」二たがらし(石龍芮)の異名。

たーせん　一多錢　(名)　錢の多きこと。金錢を多く所有すること。

(誹)多錢善く貧ふ　資本多きものは成功し易きに譬ふ。韓非子「長袖善舞、多錢善賈」

だーせん　一擬錢　(名)　あないち(穴一)に同じ。

だーせん　一兌錢　(名)　兩替の賃錢。經濟錄「大板金を以て小板金に易へ、小板金を歩金に易ふるには、皆兌錢を出だす。俗に是れを切賃と云ふ」

だーせん　一唾腺　(名)　【醫】だえきせん(唾液腺)に同じ。

だーそう　一駄送　馬に負はせて荷を送ること。

たーそ-がれ　誰彼　(名)　たそがれどき(誰彼時)の略。源夕顏「よりてこそ其れかとも見め、たそがれにほのぼの見つる花の夕顏」新古今夏「たそがれの軒端の萩にともすれば、穗に出でぬ秋ぞ下にことふ」

たーそ-がれ-ぐさ　黃昏草　(名)　【植】ゆふがほ(夕顏)の異名。蘆玉集

たそがれ-づき　黃昏月　(名)　たそがれ時の月。除暦三四日頃の夕方の月。諸院抄「二月の黃昏月もはや入りて」

たそがれ-どき　誰彼時　黃昏時　(名)(誰之彼れはと、人のさまの見分け難き時の義)　夕方のうすぐらき時。夕ぐれ。暮れがた。たそがれ。かはたれどき。くわうこん。宇津保菊宴「夕暮のたそがれ時はなかりけり、かくたちよれどとぶ人もなし」拾遺雜秋「あし引の山ほととぎす里なれて、たそがれどきに名のりすらし」源夕顏「光ありと見し夕顏の白露は、たそがれ時のそら目なりけり」

たそ-く　一他則　(名)　【哲】たりつ(他律)に同じ。

たー-そく　一多足　たしまへ。おぎなひ。補足。

だー-そく　一蛇足　じゃそく(蛇足)に同じ。

たそく-るぬ　一多足類　(名)　【動】節足動物の一綱。體は頭部と胴部との二つに分かれ、頭部に口、一對乃至二對の觸角、數箇の單眼を有す。胴部は扁平又は圓長形にして、數多の環節より成り、各一對又は二對の脚を生じ、脚の先鍋には一箇の鉤狀に曲がりたる小さき爪あり。雌雄異體にして、生長中に變態をなす。馬陸(ヤスデ)・蜈蚣(ムカデ)の類。

たーそば　(名)　【植】一たがらし(石龍芮)の異名。二みぞそばの異名。

たーそぶ　(名)　ちしぶ(地澁)に同じ。

だーそめ　駄染　(名)　紺ばかりにて染むること。紬語

たーそ-や　誰哉　(名)　次條の略。

たそや-あんどう　誰哉行燈　(名)　たそがれあんどうの訛りと。滑稽

たそや-かた　誰屋形　(名)　たそやあんどうの形に擬して、庭などに据ゑ置く燈籠。

たー-そん　一他村　(名)　ほかのむら。他のむら。

たた　楯　(名)　古語。たて(楯)に同じ。記「多多(タタ)なめていなさの山の木の間よも、い行きまもらひ戰へば」仲哀紀「盾(タタ)列陵(ヨリ)」

たた　縱　(名)　古語。たて(縱)に同じ。成務紀「阡(タタナミ)陌」萬八「多多(タタ)さにもかにも横さも、やつことぞあれはありける、ぬしのとのとに」

たた　(代)　自らの事を卑下していふ第一人稱。

たた　多多　多けれは多きほど。

(誹)多多ますます辨す　多ければ多きほど巧みに爲す。技倆大にして餘裕あるにいふ。

(誹)多多ますます善し　前條に同じ。史記(孟嘗君傳)「臣多而益善耳」

たた　徒　(名、副)　一ますぐ。まがらぬこと。記「尾張に多陀(タタ)に向かへる、をつの崎なる一つ松」同「おほ坂に逢ふや少女を、道問へば多陀(タタ)にはのらず、たぎまちをのる」二隔つるもの無く。直接。「對馬白旗、空掲(タタ)獨進」竹取「ただに病み死ぬるよりも、人聞きはづかしくおぼえ給ふなりけり」宇津保「ときてやる衣の袖の色を見よ、ただの涙はかかるものかは」枕十二「ただそこはかとなく物くはぬ」二普通なること。つね。なみ。勢語「まだいと若うて、后のただにおはしける時とや」枕「ただの勝ちよりは、ほこりかなり」凡記「代金を要せざること。相當すべき仕事をなさざること。「ただ貰ふ」狂言「ただ乘せる秀句を、をすへて進ぜう」

ただ なき み　徒無身　唯ならぬ身。妊娠したる身。心中宵庚申「お中に四月、唯もない身を、姑御が手を取って駕籠に引きずり乘せ」

ただ なら ず　なみならず。普通のさまならず。樣子ありげなり。宇津保俊蔭「彼の女君ゆめのごとありしに、ただならずなりにけり」枕「小兵衛といふが赤紐の解けたるを、これを結ばばやといへば、實方の中將よりてつくろふに、ただならず」

ただ なる より は　ただ何事もなきよりは。普通よりは。枕「ただなるよりはをかしと見るほどに」源明石「都の人もただなるよりは、いひしにたがふとおぼさんも、心はづかしうおぼさるればし」

(誹)ただとる山のほととぎす　勞力なくして取るをいふ。語。三世相「何の手もなく殺しなば、ただとる山の時鳥」

ただ　直　(名、副)　一ますぐ。まがらぬこと。記「尾張に多陀(タタ)に向かへる、をつの崎なる一つ松」同「おほ坂に逢ふや少女を、道問へば多陀(タタ)にはのらず、たぎまちをのる」二隔つるもの無く。直接。

ただ　唯惟只但　(副)　一これのみ。こればかり。萬「ものは皆はあたらしきよし、唯(タタ)人はふりたるのみしよろしかるべし」枕「ただ何となく、よろづにめでたきを」源桐壺「人の心を曲げたる事はあらじと思ふを、ただ此の人故にて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては」二ひたすら。せちに。一すぢ。いっそのこと。萬「利根川の川瀨も知らず多多(タタ)わたり、波にあふのすあへる君かも」竹取「ここもただしれにしれて、まもりあへり」枕「ただまかせて物し給へ」三わづか。たった。允恭紀「さざらがた錦のひもを解きさけて、あまたはねずに多儀(タタ)ひと夜のみ」萬「山かひに咲ける櫻を多太(タタ)ひと目、君にぢか。記「少女に多陀(タタ)にあはむと、わがさけるとめ」天智紀「赤駒のい行きはばかるまくず原、何のつてごと多拵(タタ)にしえけむ」萬「たかまとのをばな吹きこす秋風に、ひも解きあけな多太(タタ)ならずとも」四すぐ。ぢき。ただち。枕「たたみなどほうとたておくと見れば、ただつぼねに出でつ」源若菜「ただ此の西おもてに、持佛すゑ奉りて行ふ尼なりけり」四其のまま。まるで。そっくり。恰も。萬「月たちて直(タタ)みか月の眉ねかき、け長く戀ひし君に逢へるかも」源蜻蛉「御ひたひ・頭つきのをかしさ、ただ兒のやうに見え給ひて」

ただ き に く　づかづかと進み來たる。一むきに押しよせ來たる。榮華「人二三人ばかり供にて、この宮をさしてただ來にくるに」

ただ むかふ　直向　すぐに向かふ。直ちに向かひ居る。萬「から國に渡りゆかむと、多太牟可布(タタむかふ)みぬめをさして」

ただ　唯惟只但　(副)　一これのみ。こればかり。萬「ものは皆はあたらしきよし、唯(タタ)人はふりたるのみしよろしかるべし」枕「ただ何となく、よろづにめでたきを」源桐壺「人の心を曲げたる事はあらじと思ふを、ただ此の人故にて、あまたさるまじき人の恨みを負ひしはてはては」二ひたすら。せちに。一すぢ。いっそのこと。萬「利根川の川瀨も知らず多多(タタ)わたり、波にあふのすあへる君かも」竹取「ここもただしれにしれて、まもりあへり」枕「ただまかせて物し給へ」三わづか。たった。允恭紀「さざらがた錦のひもを解きさけて、あまたはねずに多儀(タタ)ひと夜のみ」萬「山かひに咲ける櫻を多太(タタ)ひと目、君に

見せてば何をか思はむ」

ただ おく 只置　そのままにすて置く。何事なしにゆるし置く。一代女「おのれ只置く奴にあらずと、白眼つけて齒切りをして」

だだ (名) 一小兒の甘えて氣ままをいふこと。むつかりくねること。「だだをこねる」 二はは(母)をいふ。出羽國の方言。

ただ を いふ 次條に同じ。假名文章娯節用「ばばあの云ふことをよく聞いて、だだをいってすねるではないよ」

だだ を こねる 小兒など、甘えてわがままをいふ。むづかりくねる。

だだ 一朶朶 (名) あの枝この枝。多くの枝。枝枝。王晃詩「朶朶花開澹靄痕」

たたあはせ 立合 (名) 相撲の行司。内裏式中「七月七日相撲式」「立合等、各立幕北頭」爲忠百首「たたあはせ弓とる方をかたひかん、左ずまひの强く見ゆれば」

ただ-あり 徒有 (名、副) 一何事もなきさまなること。何氣なきこと。徒爾なること。枕「をかしき筋などたてたることはなくて、ただありなるやうなるを」源帚宮「誰れもさばかりになりぬる御ありさまの、いとやつればみ、ただありなるやはあるべき」 二打ちおきて其のままなること。つくろはぬさまなること。なほざりなること。源胡蝶「さはいへど、ゐ中びを給へりし名ごりこそ、ただありにほひかなる方にのみは見え給ひにけれ」同夕霧「艷なる程なれば、ただありのあはつけ人だに、ねざめしぬべき空のけしきを」無名草紙「詞づかひなども、むげにただありにぞあめめる」

ただ-だい 一多大 甚だ多きこと。澤山。 二墮胎 自然の出産期に先だち、人爲によりて胎兒を母體より分離せしむること。貞永式目抄「殺害刃傷、鬪訟律云中略墮人胎徒二年。注云中略又墮胎者謂寧内子死乃坐若寧外死者從本殿傷」德川禁令考「明十九天保十三閏十一月」女醫師と唱へ候者中略其の中には妊娠之者を頼みに應じ預かり置き、墮胎致させ候類も有之哉に相聞こえ」刑法第三百「懷胎の婦女藥物を用ひ又は其他の方法を以て墮胎したるとき」

ただ-いぎ 唯行 (名) 一むきに引きはりてゆくこと。榮華月蓂「綱代車に乘せ奉りて、ただいきにゐて奉れば」

ただ-いこ 一大大鼓 (名) 太鼓の一種。長さ二丈、立ちながら打つもの。朝廷又は大社の舞樂に用ふ。おほだいこ。教訓抄「大大鼓」樂家錄「今所〻用大鼓凡有三種也、二日大大鼓、晴舞樂時設於庭上、者也、二日荷大鼓、參向列地時用之、三曰釣大鼓、御遊及常舞樂用之」

た-だいこん (名) 【植】やまがらしの異名。

だ-だいざい 墮胎罪 (名) 【法】藥物又は其の他の方法にて墮胎せしむるによりて成立せる犯罪。刑法第二編第三章「墮胎の罪」

ただ-いま 只今 (名、副) 一いま。現時。目下。正に今。垂仁紀「兄王所謀、適是時(イマ)也」雄略紀「職世孕儔、當時(イマ)獨秀者也」源葵「ただ今はをさなき御ほどに、罪なくおぼして」 二すぐさま。今すぐ。たっていま。宇津保祭使「今ただいまとて、うちにまゐりぬ」枕「此の翁丸打ちてうじて犬島に遣はせ、ただいま」

ただいま じぶん 今じぶん。今頃。大藏狂言「是れは何と思し召し、只今時分出させられて御座る」

だたい-やく 墮胎藥 (名) 墮胎に用ふる藥。南史「孝嗣在、孕、母不願」有子、以攝衣杵自舂、其歷、并服墮胎藥、胎下」

たたう (名) たたうがみ(疊紙)の略。

だ-たう 一妥當 (名)【哲】獨 Gelten)存在に對し、意味、價値として存立すること。 二おだやかにあたること。適切に相當すること。

たたう-がみ 疊紙 (名) 引合紙などを一枚のまま折りて、横二つ竪四つに折りたるもの。懷中して、鼻紙また歌の詠草にも用ふ。ふところがみ。くわいし。宇津保菊宴「御かがみ・たたう紙・はぐろめより始めて一具」枕「みちの國紙のたたう紙の細やかなるが」源夕顔「御たたう紙に、いたうあらぬさまに書きかへて」

たたうがみ-うり 疊紙賣 (名) たたうがみを賣る人。七十一番歌合「たたうがみうり。御たたうがみ召せ、色もよく出できてさふらふぞとよ」

だたう-せい 一妥當性 (獨 Giltigkeit, Geltung, 英 Validity) (名)【哲】經驗より全然獨立に、夫れ自身意味と價値とを保持する理性の必然性。

ただ-うど 直人 (名) ただびと(直人)の音便。徒然草「一の人の御ありさまは更なり、ただうども、舍人など給はるきははゆゆしと見ゆ」

たたう-るぬ 一多糖類 (名)【化】加水分解によりて、更に簡單なる糖類に分解する物質。澱粉・蔗糖の類。

ただ-か 直香 (名) 古語。其の人などを、直ちにさしあてていふ語。其の人の身の上の事。玉勝間「又、かは助辭にて、直(ヲ)といふに同じくて、其の人にまのあたりなる時にいふまさかに對して、其の人に隔たれる時にいふ語。類聚名義抄「萬、ただか」

たたかひ 鬪戰 (名) 一たたかふこと。打ち合ふこと。 二戰爭をすること。いくさ。合戰。景行紀「久煩の征伐(ヲサマリ)」 三技藝などの優劣を爭ふこと。勝負。

たたかふ 鬪戰 (自動四) 一互ひにたたき合ふ。打ち合ひて勝ちを爭ふ。夫木「うつ波に滿ちくる潮のたたかふを、たてが崎とはいふにぞありける」 二互ひに兵を出だして攻め合ふ。合戰す。戰爭す。記「いゆきまもらひ多多加閇(ヲヲカヘ)ば、われはやゑね」竹取「相たたかはんとすとも、彼の國の人來(キ)なば、たけき心つかふ人よもあらじ」決戰紀武「互ひに技を比べて優劣を爭ふ。勝負をす。

(諺)**鬪ふ雀人を恐れず** 決死の者は弱小と雖も相手を恐れず。太平記「馬越の兵は小勢なりと雖も志を一にして、しかも遁れぬ所を知れり、窮鼠却噛し猫、鬪雀不恐人といへり」

ただ-がほ 只顏 (名) 化粧せざるありのままの顏。すがほ。續松「年比御行ひにやつしはて給ひて、つくろふ所なき御ただがほのめづらしう」太平記「敵治兵衛死語「此の女房の湯より上って、只顏ならんを見せて、うとませばやと思ひて」

たたき 敲 (名) 一たたくこと。打つこと。 二江戸時代、庶人に科せる追放より輕き刑。罪人の肩・背及び臀部を笞つもの。輕敲と重敲との二種あり。其の方法は獄舍の表門前に莚を敷き、罪人を裸體にして其の上に俯臥せしめ、下男四人にて手足を抑へ、打役、杖を以て肩・背及び臀を迭ひにたたく。御定書百箇條「傳住惡、敲九十たたき、牢屋門前にて科人之肩・仕形」

たたき-あぐ 叩上 (他動下二) 一たたきて作り上ぐ。 二技術を練り鍛へて上達す。「たたきあげたる腕前」

たたき-あげる 叩上 (他動下一) 前條の口語。

たたき-あひ 敲合 (名) たたきあふこと。打ち合ひ。

たたき-あふ 敲合 (自動四) 互ひに打ち合ふ。

たたき-おこす 叩起 (他動四) 一戸を叩きて、家の中の人の睡りたるを覺しおこす。 二睡り居る人を强ひて起こす。

たたき-おとす 叩落 (他動四) たたきておとす。うちおとす。かちおとす。

たたき-がね 敲鉦 (名) 佛具の一。地に伏せ、撞木にて敲き鳴らすもの。形鉦鼓に似たり。ふせがね。かね。若風俗「首に懸けたる叩鐘の音逡しをらしく」

たたき-ぐさ (名) 【植】かにくさ(海金砂)の異名。

たたき-ごばう 敲牛蒡 (名) 牛蒡をたたき碎き、煮て味をつけたるもの。浮世風呂「居醒もたたき牛房も苦な咄しだから、さらけ止め」

たたき-ごま 叩獨樂 (名) 下文を見よ。守貞漫稿「叩き獨樂。是れ亦獨樂の一種也。昔より在之歟、詳かならず、江戸等にて天保頃童部弄之、京阪には行はれざりし木の挽物也。白木のまま彩りなし、高さ一寸五分ばかり、是れを回轉せしむるには、上の如き竹或ひは木の端に木綿の細長き裁れをつけ、是れを鞭として打ち擲き回らす故にたたきごまの名あり。右の叩き獨樂は貝獨樂より工み出せる物歟と覺ゆ。其の形乃ち貝に似たり」

たたき-ころし 敲殺 (名) たたきころすこと。

たたき-ころす 敲殺 (他動四) 打ちて殺す。ぶちころす。なぐりころす。

たたき-ごゑ 叩聲 (名) 戸などをたたくやうなる聲。新六帖「何かその夜半の水雞のたたきごゑ、さりとて法のとし(もの)とやは聞く」

たたき-だいく 敲大工 (名) 未熟なる大工。つまらぬ大工。たたき。

たたき-だす 敲出 (他動四) 一たたきて逐ひ出だす。 二たたきて逐ひ出だす。始む。うちだす。打擲して去らしむ。 三逐ひ出だす。逐ひ拂ふ。

たたき-たつ 敲立 (他動下二) 頻りにたたく。はげしくたたく。若風俗「芝居は追ひ出しの太鼓を敲き立て、どやどやするに」

たたき-つかふ 敲使 (他動四) むごく使役す。おひつかふ。驅使す。浮世風呂「人の子だから構はぬと云って、奉公人をたたきつかひ」

たたき-つく 敲附 (他動下一) 一たたきて地につく。たたきふせる。 二强くたたく。 三無理に押しつける。他を壓迫す。

たたき-ばなし 敲放 (名) 一たたきて其のままにすること。 二江戸時代の刑名。たたきの刑に行ひて、其のまま放免すること。我衣「元文中略此の時より敲放しとて、刑鞭のこと始まる」 三使役したる割合に、適當の報酬を支拂はずして關係を絶つこと。

たたき-ばらひ 敲拂 (名) 前條に同じ。

たたき-ひしぐ 敲拉 (他動四) たたきつぶす。

たたき-ふす 敲伏 (他動下二) 一たたきてうつぶさす。たたきて倒す。 二言論にて服從せしむ。壓伏す。

たたき-ふせる 敲伏 (他動下一) 前條の口語。

たたき-みこ 敲巫 (名) あづさみこ(梓巫)をいふ、播磨國の方言。物類呼稱

たたき-みしゃぐ 敲拉 (他動四) たたきひしぐ(敲拉)の訛り。領城佛原「此の尺八でゐつの指をたたきみしゃいでのけん」

たたき-やね 敲屋根 (名) 「屋根を葺く時、鎚にて繁く敲くよりいふ」こけらぶき柿葺)をいふ、京阪地方の方言。東國

たたき-わけ 敲別 (名) やまわけ(山別)に同じ。

たたき-わる 敲割 (他動四) たたきて幾つかにわる。たたきてこはす。打ち破る。五十年忌歌念佛「錠前を敲き割り、提物・差し換へ取り出だせば」

たたく 敲叩 (他動四) 一つづけて打つ。打ちて音をたたす。「太鼓をたたく」饗異記「叩(タタク)」竹取「門をたたきて、車持皇子おはしましたりと告ぐ」 二うちなぐる。ぶつ。打擲す。毆打す。狂言「河原撫打」 三打ちなりとも、叩きなりともしやれ」 四打ち合はせて音をたたす。源夕顔「手たたけば、山彦の答ふるうるさし」 四たたくやうに吾れはぞ戀ふる、いもが直香(ヲヲカ)に」同 五はしけやし君が多太可(ヲヲカ)を、まさきくもありたもとほり」

なるさまをなす。神代紀上「有鵠鵠飛來、擦擦其首尾」玉戸などをたたくやうなる音をたつ。新後撰夏「夏の夜はうたたねながらあけなまし、たたくひなの音なかりせば」☆たづね問ふ。質問す。七 抑ひ盡くす。「底をたたく」八 ワリたたく(賣叩)の略。

たたき も わたす 敲渡　そこここ　たたきまはす。枕三「ふところ紙求むとて、暗ければさぐりあてんさぐりあてんと、たたきも渡し」

(諺)**たたき止めば喰ひ止む**　勞働を廢すれば餓死す。新氷代藏二「扇の骨を削り、今日の手間賃を翌日の烟の價にして、正眞のたたき止めば喰ひ止むとは災の事ぞかし」

(諺)**敲く人の按摩を取る**　己れを打擲する人の勞をいたはりて、按摩を取る。彼方も感應す。和漢古諺「敲けば鳴る」

(諺)**敲けば鳴る**

たたく 手抱 (他動四) 手にて抱く。一説、たたく(叩)記上「あわ雪のわかやる胸を、そ陀多岐多岐多岐まながり」纖體紀「多多金多岐あさはり」

たたくたり 直下 (名) 一むきに下に向くこと。ずんずんとなりさがること。新六帖三「谷さまにはへる峰べの玉かつら、ただぐだりにもなる我が身かな」

たたくる (他動四) たたくれるやうにす。傾城反魂香上「袴の裾蹈みたたくって、にらみつけ」

たたくれ (名) たたくれること。たたくれたるもの。東海道名所記「うね足袋筒のたたくれを直し」

たたくれる (自動下一) 一ただる(畑)に同じ。かなづほし。たたれたるといふべきを、たたくれるといふは如何」二 破れ損ふ。

たたけ 狸 (名) 【動】たぬき(狸の異名。本草和名「狸骨・虎狸・猫狸、又、有肌。一名雞材・一名、貪狗、一名鼠狼、和名、多多介」名義抄「狸タタケ」同「貍タタケ」

たたけ 狸毛 (名) たぬきの毛。宇津保蔵「筆ゆひのざいなん侍る、いでつかうまつれ、わたりかたきかきものは、たたけゆふことなり」運歩色葉「狸毛筆タタケフデ」

ただこえ 直超 (名) 直に越えゆく こと。紆曲せで、眞直に越えて行くを得て近きこと。萬六「直超タダコエの此の道にして、おしてるや難波の海と名づけけらしも」

ただ-ごと 徒言 (名) 心を用ひざるありのままの言。何といふかどもなき言葉。枕三「ただごとにはうるさく思ひよりて侍りつかし、けさのさまいかに侍らましとて、笑はせ給ふを」

ただ-ごと 徒事 (名) よのつねの事。普通の事。なみの事。(變事の對)竹取「此の比となりては、ただ事にも侍らざめり」盛衰記三「殿下、撰錄の臣の係る憂目を御覽するも、直事にあらず」

ただごとうた (名) 歌の六義の一。ただごとは正言の義にて、が(雅)の直譯。一説、物に准へ又は譬へていはずして、ただありのままにいへる歌。古今序 五つつにはただごとうたと」

ただ-ごとば 徒言葉 (名) ありのままにのべたる言葉。飾りのなきことば。ただごと。六條宰相家歌合「むげにただ言葉にて、げびたるやうに思う給ふれども」

ただ-さ 縦 (名) たての方。たて。成務紀「阡タタサ」孝德紀「方タタサ」萬六「多多佐多多」にもかにも横さもやつこどぞ、あれはありける主のとのに」横字 表字

ただ-さき 徒前 (名) 〔手のさきの義〕鷹狩の語。鷹をすゑたる左の手のさき。たなさき。貞丈雜記

たださきの は 徒前羽　鷹の左の羽。運歩色葉「徒前羽タタサキノハ鷹」

ただ-さす 直刺 (自動四) 日光が直ちにさす。直接に照らす。記上「朝日之直刺タタサす國、夕日之日照國」

ただ-さま 竪方　縦方 (名) 一竪なるさま。立てたるさま。枕三「戸のあきたるがあらはなれば、琵琶の御琴をたださまに持たせ給へり」二 ますぐなるさま。一直線なる方。枕三「澤水もげにただいと青く見えわたるに、上はつれなく草生ひしげりたるを、ながながとたださまに行けば」

ただし 縦 (名) 古語。たて(縦)に同じ。成務紀「日縦タタシ」

ただし 糾 (名) ただすこと。吟味。詮議。

ただし 正 (形) 一なほし。すぐなり。曲がらず。傾かず。二 整へり。亂れ散らず。正直なり。神武紀「汝忠タタシ而且勇」允恭紀「且亡君之忠臣タタシ」字鏡「端タタシ」土佐日記「これぞただしきやうにて、うまのはなむけしける」今物語「常時ただしき歌よみ多く聞こゆる中に、いづれかすぐれ侍る」

ただし 但 (接) 一上文に添へて、更に其の意味又は或る條件若しくは例外の意を說き出だす始めに用ふる語。垂仁紀「自經而死耳、唯タタシ妾難死之、敢勿忘天皇之恩」竹取「仰せの事はいともたふとし、ただし此の玉たはやすくえ取らじを」宇津保俊蔭「誰れかいひまつはし知らせん、ただし命の後、女子のためにけ近き寶とならんものを奉らん」二 上文の意を轉して、他の意を說き起こすに用ふる語。然らずば。或ひは。若しくは。又は。「過むかただし退くか」

ただし は 但　ただし(但)に同じ。大鏡「狂言綺語「其の方の庭前か、但しは外から貰うておりやったか」

ただし-がき 但書 (名) 但なる文字を附して、其の前文の說明、又は例外若しくは其の條件を定めたる文。

ただし-げ 正氣 (副) ただしきやう。ただしさう。

ただし-さ 正 (名) ただしきさま。ただしき程度。

ただす 立 (自動四) たつ(立)百番の敬語。記上「二柱神立タタシ」天浮橋」同「なすや板戸をおそぶらひ、わが多多勢タタレば」萬十「しくら川せをたづねつつ我がせこは、鵜かは多多佐タタね心なぐさに」

ただす 正 (他動四) 一正しくす。改めなほす。善くする。たほす。「名をただす」「過ちをただす」顯宗紀「正タタシ統萬機、臨照天下」源若宮「喜びの涙ともすれば落ちつつ、目をさへ拭ひただして」臣記 二 理非を究め明らむる。罪過の有無をしらぶ。吟味す。詮議す。名義抄「撿・撿タタス」「枕三「いかにしていかに知らましいつはりを、空にただすの神なかりせば」新古今雜下「車より紅の衣を出だしたりけるを、檢非違使のただすんとしければ」紅。二 是非を問ふ。質問す。「疑ひをただす」質。

ただす-つかさ 彈正臺 (名) だんじやうだい(彈正臺)に同じ。和名上「彈正臺太政官豆加佐一」

ただずまひ 佇 (名) 一たたずまふこと。二 立ちたる樣子。やうす。ありさま。源梅壺「もとの木だち山のたたずまひ、面白き所なるを」同若菜「おほやけ・わたくしの

人のたたずまひ、よき・あしきことの目にも耳にもとまるありさまを」

たたずまふ 佇 (自動四) たたずむ(佇)に同じ。枕「女房のぬぎ、奥の方にたたずまふを」

たたずみ 佇 (名) たたずむこと。立ち止まること。暫時止まること。さまよふこと、又、ぶらつくこと。徘徊すること。丹波與作「親方の馬を取られては、木曾海道・中仙道、ただずみが叶はぬ」

たたずむ 佇 (自動四) 立ちとどまる。暫時とどまる。又、さまよふ。ぶらつく。徘徊す。神代紀上「就其樹下、徙倚彷徨タタズム」萬四「あすか男がながめ忌み、縱ひし黑香さしはきて庭に立住タタズばば」竹取「彼の家に行きてたたずみありきけれども」古今雜下「うりん院の木の蔭にたたずみてよめる」

ただ-ただ 只只 (副) 〔ただ(只)の重言〕ただを强めていふ語。

ただ-ただ (副) ひた走りに走るさまにいふ語。とど。宇治拾遺三「あやまちせんからに、出家すべきやうやうあると思ふ心又つきて、ただただと走り出でられにけり」

たた-たん (名) 舞の囃しの言葉。狂言笠「一つ舞ひませうチヤン」したんに、たたたんに、たっほほ、たっほほ」

ただ-ぢ 直路 (名) すぐなる路。まはり遠からぬ道路。萬十「月夜よみ妹にあはむと直路タタジから、われはきつれど夜ぞ深けにける」和名十「徑路タタジ歩道也」

ただちに 直 (副) 一ぢかに。直接に。ぢきぢきに。二 時を移さずに。すぐに。ぢきに。徒然草「妄心迷亂すと知りて一事をもなすべからず、直ちに萬事を放下して道にむかふ時は」

ただっと (名) ただをこねる小兒。わがままなる小供。

ただっぴろし 徒廣 (形) ただびろし(徒廣)の音便。

ただ-つめ 只攻 (名) 一圖に押しよすること。一向きにつめよすること。太平記廿五「住吉の敵を追ひ拂ひ、只攻めにつめ立てて、急に追ひ懸くる程ならば」

ただて 直手 (名) 人傳てならぬ直接の手。ぢかの手。萬十「鈴が音のはゆまうまやのつつみ井の、水を賜へな妹が多太手タタデよ」

ただ-とり 只取 (名) 取りたるのみにて報酬せざること。

(諺)**只取り山のほととぎす** 只取りにすること。勞力なくして物を得ること。醒睡笑「あるもの山路を行き、不思議に白鳥をひろうたり。更に鳥の名を知らず。人に向かひてかくと語る。聞く者それは郭公であらうずと云ふ。いや大なる鳥也。中中、小鳥ではない。さりとも時鳥にすうだ。ただとる山の郭公とて、背からあることよ」

ただ-なか 直中 (名) 正しき中央。まんなか。正中。狂言鈴「扨も扨も太郎冠者めが、中ひかしのただ中を申した」一代女三「御前樣の不斷御思し召し入りのただ中へ持って參れば」

ただな-つく (自動四) 一古語。疊まり重なる。記中「多多那豆久タタナヅく香かき山」二 衣のたたまりつく如く、和かに靡き著く。萬三「つまのみことの多田名附タタナづやは肌すらを、つるぎたち身に添へ寢ねば」

たたなはる 疊 (自動四) たたまる。かさなる。萬「疊有タタナハる青垣山」枕三「髮の打ちたたなはりて、ゆららかなる程、長さおしはかられたるに」

たたなはる 疊 (自動下二) 前條に同じ。宇津保祭「かうぶりたたなはれ」同蜻

たたなづく 楯並 (枕) 楯を並べて射るといふより**いに**かく。記中「多多那米豆タタナづく」いなさの山のこの間よも」萬三「楯並面タタナづく」いづみの河のみをたえず、つかへまつらむ大宮所」

ただ-なり (名、副) 一向きになり變はること。俄かになること。平家五「萬唯成りに花の都、わ中になるこそ悲しけれ」

たたなる 疊 (自動四) たたまる。たたなはる。

ただ-なれ 唯馴 (名、副) 一筋に馴るること。全く馴るること。榮華若菜「ただなれにさし歩みて參り給ふ」

ただ-に 啻 (副) ただ。ひとり。(下に、のみならずと結ぶを常とす)續紀「大保平萬多他上ニ解味道理不ト念」

たたぬ 疊 (他動下二) たたむ(疊)に同じ。一説、萬葉の疊は彌の誤りと。古義 萬十「君がゆく道の長ちを繰り多多疊ネて、燒きほろぼさむあめの火もがも」

ただ-の-おりもの 唯織物 (名) 〔唐うし・とがうし等の織物。貞丈雜記〕ただの織物に對して、ただといふ。練貫のかだのおりものの事。御免なくてはゆめゆめ著候はず候」用害記「たた

ただ-の-きぬ 唯衣 (名) ひらぎぬ(平絹)に同じ。榮華本朝四手「殺・うすものなども奉らで、ただのきぬを御あこめにて薄色などにてありかせ給ふ」

ただ-の-みな 諱 (名) 正しき御名。御實名。神武紀「諱ミナ」仁賢紀「諱ミナ」

ただ-のり 直乘 (名) 一筋に乘ること。ひたのりにのること。萬十「はゆまぢにひき船わたし、直乘ノリにいもが心にのりにけるかも」

ただ-のり 只乘 (名) 無賃にて乘ること。狂言聟「只乘るによってただ乘り」

「よれたる裳にたたなはれたる」

たた-なめて 楯並 (枕) 楯を並べて射るといふより**いに**かく。記中「多多那米豆タタナめて」いなさの山のこの間よも」萬三「楯並面タタナめて」いづみの河のみをたえず、つかへまつらむ大宮所」

ただ-なり (名、副) 一向きになり變はること。俄かになること。平家五「萬唯成りに花の都、わ中になるこそ悲しけれ」

たたなる 疊 (自動四) たたまる。たたなはる。

ただ-なれ 唯馴 (名、副) 一筋に馴るること。全く馴るること。榮華若菜「ただなれにさし歩みて參り給ふ」

ただ-に 啻 (副) ただ。ひとり。(下に、のみならずと結ぶを常とす)續紀「大保平萬多他上ニ解味道理不ト念」

たたぬ 疊 (他動下二) たたむ(疊)に同じ。一説、萬葉の疊は彌の誤りと。古義 萬十「君がゆく道の長ちを繰り多多疊ネて、燒きほろぼさむあめの火もがも」

ただ-の-おりもの 唯織物 (名) 〔唐うし・とがうし等の織物に對して、ただといふ。練貫のかだのおりものの事。御免なくてはゆめゆめ著候はず候」用害記「たた

ただ-の-きぬ 唯衣 (名) ひらぎぬ(平絹)に同じ。榮華本朝四手「殺・うすものなども奉らで、ただのきぬを御あこめにて薄色などにてありかせ給ふ」

ただ-の-みな 諱 (名) 正しき御名。御實名。神武紀「諱ミナ」仁賢紀「諱ミナ」

ただ-のり 直乘 (名) 一筋に乘ること。ひたのりにのること。萬十「はゆまぢにひき船わたし、直乘ノリにいもが心にのりにけるかも」

ただ-のり 只乘 (名) 無賃にて乘ること。狂言聟「只乘るによってただ乘り」

たたはし (形シク) 一滿ち足るさまなり。缺くることなし。萬「春花の貴からむと望月の滿波之ケけむと」同「もちづきの多田波思ケけむと、わがもへるみこのみことは」二 いかめしくおごそかなり。たくまし。綏靖紀「容貌魁偉タたハし」靈異記「像タたハなる波」字鏡「傀タたハシク」名義抄「像タたハシク」

ただ-はたらき 只働 (名) 報酬なくして働くこと。

ただ-はて 直泊 (名) 直に來て泊つること。萬「春花の貴からむと望月の滿波之ケけむと」同「もちづきの多田波思ケけむと、わがもへるみこのみことは」二 いかめしくおごそかなり。たくまし。綏靖紀「容貌魁偉タたハし」靈異記「像タたハなる波」字鏡「傀タたハシク」名義抄「像タたハシク」

ただ-はたらき 只働 (名) 報酬なくして働くこと。

ただ-はて 直泊 (名) 直に來て泊つること。眞直に行きて泊まり著くこと。萬「ちかの崎より、おほとものみつの濱びに、多大泊にみ舟ははてむ」

たたひ (名) 【植】きんま(蒟蒻)の異名。本草和名上「蒟蒻タたひ」

たたひ-ひと 直人、徒人 (名) 一普通の人。なみのひと。つねの人。凡人。常人。神代紀下「殆非常之人タたひヒと」竹取「げに、ただ人にはあらざりけりとおぼして」源若紫「いとなやましげによみゐたる尼君、ただ人と見えず」凡夫 枕古 二 帝・后に對し、臣下の稱。勢語「二條のきさきの、まだみかどに仕うまつり給はで、ただ人におはしましける時の事なり」枕「「宮始め中將姫君などきこえし、ただ人とは、いとあたらしけれど」源梅壺「只人には、いとあたらしけれど」三 官位低き人。地下人。枕三「よき人・君達などの供なるこそさやうにはあらね、ただ人などさぞある」四 僧侶に對して、俗人の稱。天武紀下「俗タたひ供養」

ただ-ひろし 徒廣 (形ク) いたづらにひろし。しまりなくひろし。

たたふ 湛 (自動四) たまり滿つ。充滿す。神代紀上「時伊弉册尊眼滿太高タたフ」夫木「きよみ川いづる淡にしほ滿てば、せかれてたたふ浦の入海」

たたぶ 湛（他動下）塞ぎ止めて満たす。入れ満たす。宇津保俊蔭「月日をふるままに、ただ涙の海をたたへてなむ」同国譲上「酒をたたへてたべ醉ひて」

たたぶ 稱（他動下）十分に褒め言ふ。稱揚す。「德をたたふ」神代紀上「稱（ツタヘ）」

たたぶ （他動四）（策）めく義。びはみやびなどのびなりと。策（ツヒ）つとむ。はかりごとめかす。宋書「策（ツヒ）つとむ。はかりごとめかす。」一説、田賜（ツタヘ）にて、田を班（ワカ）ち賜ふ。萬葉「あかねさすひるは多多婢（ツタヘ）て、ぬばたまのよるのいとまに摘める芹これ」

たたぶし-まひ 楯節儛（名）きしまひ（吉志舞）に同じ。手に楯を持ちて節度となして舞ふよりいふ。「記紀」持統紀「奏楯節儛（ツタヘブシ）」「書紀」天武紀十八年「天武紀四年四月乙酉」「盧舎那大佛像成、始開眼中略有三王臣諸氏、五節・久米儛・楯伏・踏歌・袍袴等歌儛」令集解「雅樂寮別記云、楯臥舞十人中略右著甲持刀楯」

たたぶら 臂（名）古語。ひぢ。うで。ただむき。雄略紀「虹挙飛来、嚙天皇臂（タタブラ）」

たたへ-ごと 稱辭（名）十分に德を挙げてほめ言ふことば。神代紀上「稱辭（タタヘゴト）」祝詞式「鎮火祭「天社國社止稱辭竟奉皇神等前白久」

たたへ-な 稱號（名）ほめたたへて呼ぶ名。

たたへ-みづ 湛水（名）たたへたる水。たまりてある水。

たたへる 湛（他動下）たたふ（湛）の他動の口語。

たたほ 策（名）【植】あけび（通草）の異名。

たたま 手玉（名）古昔、手の装飾に著けたる玉。神代紀「手玉（タタマ）玲瓏、織紝之少女者」萬「足玉も手珠（タタマ）もゆらに織るはたを、君がみけしに縫ひあへむかも」

たたまる 疊（名）たたまること。かさなること。

たたまる 疊（自動四）疊みたるやうになる。かさなる。つもる。たまる。

たたみ 疊（名）一たたむこと。夫木「夏山の木蔭だにこそ、涼しきを、岩のたたみのさとりいかにぞ」二古くは敷物の總稱。むしろ・こも・皮疊・絹疊等あり。中古には主として薄絲（ウス）の類。記「あし原のしけきをやに、すが多多美（タタミ）いやさや敷きて我が二人ねし」同国「將入海時、以菅疊八重、皮疊八重、絹疊八重、敷于波上而下坐其上」萬「韓國の虎とふ神中略其の皮を多多弭（タタミ）に刺して」枕草子「まことの出雲むしろのたたみ」席薦上下」三室内の床（ユカ）の上に敷き込み置きて、上に坐臥するもの。長さ最も大なるは七尺、小なるは五尺八寸とし、幅の最も大なるは三尺五寸、小なるは二尺九寸とす。薦の心を厚さ一寸餘編みて蹈み固め、絲にて刺し縫ひ、其の表面を疊表にて覆ひ、兩邊の緣（ヘリ）を幅一寸乃至五分の麻布にて包みて綴る。大鏡狂言石「手「疊の緣をむしって御座る」」四草履・雪駄・下駄の表につくるもの。萬「・篠（ヒ）又は竹の皮を編みて造る。

たたみ の もとすゑ 疊本末　下文を見よ。槐記正二年「常修院殿の常に御物語に、疊に本末と云ふことあり」中略疊のぬひ出し方を本とす」

たたみ を たたく 敲疊　はげしく人を詰問などする時などの動作。孕常磐五「分別なされ吉次殿と、疊敲いてねだらるる」

（謎）疊の上の怪我　思ひがけざる怪我。又、有るべからざる譬へ。

（謎）疊の上の乞食　俳優又は連歌師などを嘲りていふ語。

（謎）疊の上の水練　はたけげるれん（畠水練）に同じ。

（謎）疊の上の陣立て　實用に適せざる坐上の空論の譬へ。

（謎）疊の壁をひぬる　はにかみ恥づるさまにいふ。

（謎）疊の目を讀む　手持無沙汰なるさま、又はにかむさまにいふ。

たたみ（名）したたみの略。一説、鬱味なりと。後撰雜「しほといへばなくべくてもからき世の中に、いかにあへたるたたみなるらん」

ただみ（名）【動】ささご（細螺）の異名。

たたみ-あぐ 疊上（他動下）たたみて作る。たたみなす。たたみをはる。

たたみ-あふぎ 疊扇（名）あふぎ（扇）に同じ。

たたみ-いし 疊石（名）茶道にて、茶室の庭の傳ひ路に据ゑ置く石。

たたみ-いす 疊椅子（名）たたみて、携帶に便なるやうに造りたる椅子。

たたみ-いと 疊絲（名）青麻にて製し、疊の「りなどを縫ふに用ふる絲。

たたみ-いぼ 疊（名）くるぶし（踝）をいふ、疊の方言。物理小品

たたみ-いる 疊入（他動下）たたみこむ（疊込）に同じ。榮華若菜「長持・唐櫃の蓋に、いとおどろおどろしうたたみいれ」

たたみ-いわし 疊（名）多くの鰯魚（イワシ）を水にて洗ひ、海苔を漉く如くに葭簀の上に列べて乾し固めたるもの。帖（ヂヤウ）の形したるより名づく。重本草綱目啓蒙廿九「いさざ中略薄く板の如く拵へ乾したるをしらすぼし官戸と云ひ、又たたみいわし同上と云ふ」

たたみ-おび 疊帶（名）心（シン）を入れざる帶。元祿物語「白じゆすの疊み帶結び、先一文字にして」若風俗「宗傳から茶の疊み帶」

たたみ-おもて 疊表（名）菌草の莖などを麻絲にて織りたるもの。疊の表に用ふ。備後表を上品とし、琉球表を下品とす。運歩色葉「疊面（タタミオモテ）」

たたみ-おり 疊織（名）たたみさし（疊刺）に同じ。

たたみ-かく 疊掛（自動下）つづけざまになす。槍權三上「帶ぐるぐると引きほどき、疊みかけて擲り捨て」

たたみ-かける 疊掛（自動下）前條の口語。

たたみかたてだい-くみがしら 疊方手代組頭（名）江戸幕府の制、疊奉行に屬し、疊手代を指揮するもの。憲教類典「享保二十年乙卯六月廿四日中略御疊方組頭、同世話役。右之分、向後駿斗目白帷子、一切著用仕間敷候」

たたみかたてだい-せわやく 疊方手代世話役（名）江戸幕府の制、疊奉行に屬し、疊方手代組頭の次にあるもの。吏徴下「御疊方手代廿人中略世話役三人扶持」

たたみ-がへ 疊替（名）疊の表を新しく取り替ふること。おもてがへ。

たたみ-がまし 疊釜敷（名）紋所の名。かまし（釜敷）を見よ。

たたみ-がみ 疊紙（名）たたうがみ（疊紙）に同じ。一代男「諸國に見立てし美人の書附と疊み紙一つ渡して」

たたみ-ぎぬ 帖絹（名）平たくたたみたる絹。

たたみ-ぐら 疊藏（名）疊を入れ置く藏。見聞雜記「大手腰掛御疊藏」

たたみ-けめ （枕）たたみこも（疊薦）をいふ。古へ東國の方言。藪枯枕「といふ意にて、むらにかけていふ。一説、枕詞にはあらで、米は布又は不の誤りにて、直向（スカヒ）をいふ、古へ東國の方言なるべし。萬「多多美氣米（タタミケメ）むらじが磯のはなりその、母を離れてゆくがかなしき」

たたみ-こしかけ 疊腰掛（名）たたむやうに作りて、取扱に便ならしめたる腰掛。二代男「格子より疊腰掛を出して、それに座してしめやかに語る」

たたみ-こむ 疊込（他動四）一たたみて中に入る。二代男「定家の三首、物の表具外して、挾み箱に疊み込み」二心中に思ひ込む。折り返してつづけ思ふ。日本武尊吾妻鑑「故郷に歸る家妻は、況してかうして斯くしてと、女心に疊み込む、箱根の山の此方なる」

たたみ-こも 疊薦（枕）疊にすることもを編むには薦褥に絲を卷き、跡先へ取り交へて一筋づつ隔てて編むより、へだてにかけ、又幾重（ヘ）も重ねあむより、へにもかく。記「多多美許母（タタミコモ）へぐりの山の」萬「疊薦（タタミコモ）へだて編むかず通はさば、みちのしば草おひざらましを」

たたみ-さし 疊刺（名）疊を刺し作ること。又、其れを業とする人。七十一番歌合「たたみさし。九條殿に何事の御座あるやらん、帖を多くさせらるる」運歩色葉「疊刺（タタミ）」

たたみ-さはり 疊觸（名）疊に觸るること。又、その觸れ方。畢動のあらあらしきさまなどにいふ。源氏鳥帽子折（名義抄）色黑く手足荒れ、疊觸りの荒男」

たたみ-ざん 疊算（名）嬉女子などの疊にて是非・吉凶を占ふこと。碁などを落とし、其の落ちたる處より疊の編み目を端まで數へて、丁・半の數によりて占ふ。重井筒「一文投げる賽錢さへ、進ぜうか進ぜまいかと、疊算置いて見て」

たたみ-すがれん 疊水練（名）たたみ（疊）の餘、疊の上の水練を見よ。

たたみ-たて 帖楯　疊楯（名）蝶番（ツガヒ）をつけて、たたむやうに作りたる楯。太平記「七下剋「前に疊楯をつき雙べ其の後にすぐりたる兵五百人を交へて」

たたみち 縱道（名）たてのみち。

たたみ-てだい 疊手代（名）江戸幕府の制、疊奉行に屬するもの。官中秘策「御疊奉行三人、手代二十人づつ」

たたみ-どうしん 疊同心（名）江戸幕府の制、疊奉行に屬するもの。大猷院殿御實錄「寛永十年、此の年疊奉行柴村一郎左衛門、正次に同心二十人、井上外記正繼に十人あづけらる」

たたみ-なす 疊成（他動四）たたみて作る。たたみあぐ。源氏「山の氣色木ぶかく、世ばなれてたたみなし」

たたみ-はし 疊橋（名）折り疊むことの出來るやうにしたる橋。國姓爺「必定國姓爺めが、日本流の算盤橋・疊橋なんどいふ物ならん」

たたみ-はしご 疊梯（名）折りたたむやうにしたる梯子。一代女「湯殿の疊梯子といふもあり」

たたみ-ばり 疊針（名）疊を刺すに用ふる太き針。

たたみ-ぶぎやう 疊奉行（名）江戸幕府の制、作事奉行に屬し、疊に關する事を掌る職。明良帶錄「御疊奉行（百俵役）（五人扶持）（中略）御作事奉行支配にて、御疊御座敷向、并諸役所疊表替并御疊藏より新規替、疊表床の吟味をする」吏徴別錄「御疊奉行、寛永九年壬申十月八日始置、一員」

たたみ-ぶね 疊船（名）容易く組み合はせて船とし、用なき時は直ちに解き疊みて携帶に便にする昔時の軍用船。ながもちぶね。若風俗「挾箱に疊船を仕込み取り組めば、三人乘りて大河を越すにためし有り」

たたみ-まくら 疊枕（名）折りたたみて携帶に便にする枕。下學集「摺枕（シヒマクラ）」

たたみ-め 和布（名）稚和布（ワカメ）を集めたるもの。今の干し海苔の類。著聞集「盃酌有りけるに、たたみめにこのものを肴にしたりけるを見て」

たたみ-め 疊目（名）疊みたるしわの痕。又、疊表の編み目。猿蓑冬「疊目は我が手のあとぞ紙ぶすま」

たたみ-ものさし 疊尺（名）折りたたむやうに作りて、携帶に便にしたるものさし。

たたみ-や 疊屋（名）疊をさす人。

たたみ-やたい 疊屋臺（名）必要の時は組み立て、用なき時はたたみて運搬に便ならしめたる踊屋臺。一代男「人形舞はしして遊べと、挾箱より疊屋臺取り組み」

たたみ-らら （名）【植】にら（韮）の異名。宇鏡「韮（ニラ）」名義抄「韮（ニラ）」

たたむ 疊（他動四）一折り返して重ぬ。源氏「屏風もはしの方おしたたまれたるに」同紅葉「ひきよせ給へる屏風のもとにより、ごほごほとたたみよせて」宇鏡集「揉（ヒシグ）」同「帖（ヂヤウ）」二積み重ぬ。折り重ぬ。果積す。夫木「月きゆる明石のせとに風吹けば、氷の上にたたむ白波」同「山はざまきびしくたたむ岩角に、年經てきれぬ瀧の絲かな」三つぼまず。すぼます。春の日「からかさをたたまで螢見る夜かな」四片附けて他へ移す。まとめて取り拂ふ。「所帶をたたむ」五貴めつく。いぢめつける。一代女「壹夜の別かちもなく戯れかけて中略案の如く此の男次第にたたまれて中略露者も幾人か放ちて」

ただむき 腕（名）うで（腕）に同じ。記「たくづぬの白き多陀牟岐（タダムキ）」和名「腕、俗云、宇天手腕也」神代紀上「手臂（タダムキ）」

ただめ 直目（名）直ちに向かひ見る目。めさき。もくぜん。萬「わが戀ふる子を中略まそ鏡直目（ただめ）に見ねば」同「語り繼ぐからにもここた戀しきを、直目（ただめ）に見けむ古へ男」

ただもの 只物　只者（名）なみのもの。普通のもの。尋常の人。凡人。落窪「よろしきものにやあらんとこそ思ひつれ、さらにこれは、ただものにはあらず」禁秘抄「但此甲非只物紫檀也」

ただ-やしなひ 徒養（名）徒らに養育すること。むだに衣食せしむること。日本振袖始「ただ養ひ仕よりより、畠に立たせ、鳥威しにでもしてのけたがよい」

ただ-よね （名）いね（稻）に同じ。本草和名下「稻米（タタヨネ）」

ただよはし 漂（形）一漂ふさまなり。二落ちつかぬさまなり。浮きたるさまなり。御後見なくて、ただよはしくおはしまさんよりは」同「ままさまにつけて思ふさまに定まり。ただよはしからで、あらまほしくすぐし給ふ」

ただよはしげ 漂氣（副）ただよはしきさま。ただよはしさう。源若菜下「もぬけたる蟲の殼などのやうに、いとただよはしげにおはす」

たちあひ　立合　立會　（名）　たたあはせ（立合）に同じ。

たちあひ　立合　（名）　たちあふこと。國姓爺「立ち合の軍する體に

たちあひ-がさ　立合垣　（名）　數本づつ丸竹を並べ、間を隔てて造りたる垣。

たちあひ-くじ　立合公事　（名）　江戸時代、評定所の立合の日に、三奉行・大目付・目付の出席して裁判する公事。憲法編年錄「中八、享保五年八月、公事・訴訟何によらず、立合公事を可差出」候」

たちあひ-くわんり　立會官吏　（名）　其の場に立ち會ひたる官吏。舊刑法附則第三「立會官吏の許可」

たちあひ-さいばん　立會裁判　（名）　特定人の立會の上にて開く裁判。

たちあひ-だいりにん　立會代理人　（名）　〔一〕立會人の代理者。〔二〕大阪堂島米穀取引所の仲買代理人の稱。

たちあひ-にん　立會人　（名）　其の場に立ち會ひたる人。非訟事件手續法第五十條二項「調書には中略判事書記及ひ立會人之に署名捺印すへし」

たちあふ　立合　立會　（自動四）　〔一〕雙方互ひに行き會ふ。萬三、山なみのよろしき國と、川なみの立合アフ里と、山しろのかせ山のまに」若風俗三、松陰に來て螢の厚き男立合ひて」〔二〕雙方互ひに勝負を鑑ひ又は格闘す。水鏡三、日本中略その國

たちあはせ　立合　（名）　たたあはせ（立合）に同じ。

たちあひ　立合　（名）　〔一〕たちあひにあふこと。國姓爺「立ち合の軍する體に

たちあざる　（自動四）　あざるに同じ。萬三、神のまにまにと、立阿射里アザリわが乞ひのめど」

たちあざる　裁板　（名）　たちものいた。縫殿寮式「裁板三枚各長五尺廣三寸」裁板各長四尺」

たちいた　裁板　（名）　裁物をするときに用ふる臺の板。たちものいた。縫殿寮式「裁板三枚各長五尺廣三寸」裁板各長四尺」

たちいづ　立出　（自動下二）　〔一〕立ちて出で行く。立ち去る。源若紫「うしろの山に立ち出でて、京の方を見給ふ」同帚木「ただ承りぬとてたち出で侍るに」〔二〕立ちて來

たちいさよふ　立猶豫　（自動四）　いさよふ（猶豫）に同じ。靈異記三「登於坂上、而躊躇ヲ千度左見、右三大道」

たちいさよ　立猶豫　（名）　〔一〕立ちてあるく。立ち行きはろくてねえのさ」

たちいか　柔魚　（名）　【動】するめいか（烏賊魚賊）の異名。

たちいかり　立錨　（名）　たちゆき（立行）に同じ。浮世床三「親が苦勞する罪ばかりでも、立ち行きはろくてねえのさ」

たちいさ　立行　（名）　〔一〕立ちてあるくこと。又、立ちてあるくこと。

たちあるき　立歩　（名）　立つことと。

たちあぶひびし　立蒹葵　（名）　紋所の名。

たちあぶひ　立蒹葵　（名）　〔一〕【植】錦葵（ブヒ）。〔二〕紋所の名。あふひ（葵）を見よ。

たちあぶひ　蜀葵　（名）　【植】錦葵（ブヒ）。蜀葵屬の二年生草本。莖の高さ五六尺。葉は互生、やや心臟形、五裂乃至七裂す。六月頃、各葉腋に大形の花を開く。花色は紅・白・紫等、又重瓣のものあり。甚だ美なり。庭園に植ゑて觀賞用とす。おほからあふひ。からあふひ。からほひ。はなあふひ。

たちあぶひ　立蒹葵　（名）　【動】紋所の名。

たちあぶひ　立葵　（名）　〔一〕【植】えんれいさう（延齡草）の異名。〔二〕紋所の名。あふひ（葵）を見よ。

たちあぶぎびし　立扇菱　（名）　紋所の名。

たちあぶひ　立扇菱　（名）　〔一〕【植】えんれいさう（延齡草）の異名。〔二〕紋所の名。あふひ（葵）を見よ。

たちあがる　立上　（自動四）　〔一〕坐より起つ。身を起こす。狂言鶴松「やいそこなやつ、立ち上がれ」〔二〕上ざまへ竪（タ）つ。枕三、うるはしき髪もたらん人も、皆たちあがりぬべきここちぞする」〔三〕たちまさる。すぐれてあり。

たちあがる　立別　（自動下二）　たちわかる（立別）に同じ。源胡蝶「せちにとどめ給へば、えたちあかれ給はで」

たちあかる　立別　（自動下二）　たちわかる（立別）に同じ。

たちあがり　裁上　（名）　衣物を裁ち終はりたること。

たちあかし　立明　（名）　たてあかし（立明）に同じ。榮華初花、かがり火・たちあかしの心もとなければ」狹衣三、たちあかしの畫よりもあかきに」炬火。

たちあかす　立明　（自動四）　立ちて夜をあかす。枕三、入るべきやうもなくて、立ち明かすもをかし」榮華鶴の林、されば夜一夜いもねで、立ち明かしたり」

たちあ

たちあ

たちあ

たる。來たり臨む。源行幸「西の對の姫君も立ちいで給へり」 ㊁立ち上ぼりて出づ。立ちあがる。古今雜上「人知れず思ふ心は春霞、たち出でてと君が目にも見えなん」新古今雜三「立ち出づる名殘ありあけの月影に、いとどかたらふ郭公かな」 ㊂出で來たる。出づ。源帚木「打ちそへて、もとよりの憎さもたちいでて」

たち-いとすぎ 立絲杉 (名) 【植】松杉科、杉屬の常綠喬木。いとすぎの一種。枝の立ちたるもの。

たち-いぬふぐり (名) 【植】玄參(ゲンジン)科、草本。威靈仙(ヰレイセン)屬の草本。莖は直立し、其の高さ五六寸乃至一尺、概形いぬのふぐりに似たり。春季、藍紫色の小花を開く。

たち-いねぼ 立稻穗 (名) 紋所の名。

たち-いはひ 立祝 (名) 旅立ちのいはひ。

たち-いはひ 裁祝 (名) 衣服の布帛を裁つときに行ふ祝ひ。少しの白米及び鰹節を布帛の上に供ふ。禊祝。

たち-いへ 立家 (名) たてや(建家)に同じ。

たち-いり 立入 (名) ㊀たちいること。㊁室上方にて、其の家に親しく出入すること。又、其の人。地下にては出入(イル)と、いふ。和訓栞

たち-いる 立入 (自動ヤ) ㊀入る。深く入る。經信卿集「琵琶をひかせ侍りしかば、ひろまへ所せきまで人たちいりて聞き侍りし」 ㊁たづさはる。關係する。干渉す。

たち-いを 太刀魚 (名) 【動】たちのうを(太刀魚)の異名。

たち-うごき 立動 (名) 立つことと動くこと。又、立ちて働くこと。たちはたらき。宇津保藤原「日どろはみだれ足のけにや侍らん、更に蹈みたてられ侍らず、たちうごきもし侍らぬ」

たち-うた 立歌 (名) 古代の歌曲。樂師階下に立ちながら奏するよりいふ。樂器は和琴・和笛を用ふ。大嘗會及び正月元日・七日の兩節會の時、之を奏す。貞觀儀式「元日豐楽・掃部寮立歌座、治部雅樂省寮、率二工人一參入、奏歌」

たち-うち 太刀打 (名) ㊀太刀にて闘ふこと。伯耆巻矢軍は長長し、打出でて、太刀打ちして勝負を決せん」長祿記「筒井の若黨にも、上の庄次郎三郎山本二郎五郎討ち死にす。是れは辰の剋ばかり一番の太刀打ち也」 ㊁宿の口金より血留りまでの間の稱。

たちうちの かうみゃう 太刀打高名 太刀にて闘ひて敵の首を取ること。毛利家記「陸奥卿十八歳の時とかや、又其の後九郎に「太刀打の御高名有り」

たち-うち 立打 (名) 立ちて小銃を發射すること。

たち-うり 立賣 (名) 店を構へず、路傍に立ちながら物を賣ること。又、其の人。醒睡笑「立ち賣りの勘助が所へ」山城名勝志「四條四條町の立ち賣り」

たち-うり 裁賣 (名) 需用の程度に應じ、裁ち切りて賣ること。きりうり。「西瓜のたちうり」

たち-うを 太刀魚 (名) 【動】たちのうを(太刀魚)の異名。

たち-え 立枝 (名) 高く生ひ立ちたる枝。拾遺雜「わが宿の梅のたちえや見えつらん、思ひの外に君がきませる」夫木九「春をへてとかへる山のたかつめに、柴のたちえもひこばえにけり」

たち-え 立柄 (名) 高く立ちたる莖。夫木九「小舟さし手折りて袖にうつし見んはすのたちえの露の白玉」

たち-おくる 立後 (自動ヤ下) ㊀おくれて來たる。おくれて後方につく。あとにつく。宇津保藤原「人にたちおくれて、みな人わたりはてぬるに」枕「しばし人のおはしますに、かくはまじらぬわざなりなどいふを、げにとて少し立ちおくるるもあり」 ㊁劣る。後(オク)る。源帚木「よるひる學問をも遊びをももろともにして、をさをさ立ちおくれず」同花宴「心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、今めかしき事を好みたるわたりにて」 ㊂後(オク)れて立つ。後れて事をなす。後れて時機を失す。

たち-おくれ 立後 (名) たちおくるること。

たち-おくれる 立後 (自動ヤ下) たちおくる(立後)の口語。

たち-おと 太刀音 (名) 太刀にて打ち合ふ音。浦島年代記「切り合ひ打ち合ふ太刀音・鎧音」

たち-おほふ 起覆 (自動ハ) 起ち上ぼりて遮り隱す。續紀「五色瑞雲起覆(オホヒ)天在」

たち-おもだか 立澤瀉 (名) 紋所の名。

たち-およぎ 立泳 (名) 水練術の一法。身體を立て、上部を水面にあらはし、足をはたらかして泳ぐこと。盛衰記「位尼、堅さま・横ざま・立游・犬游して沈み給はざりける」東海道名所記「水心を知り侍れば、立泳ぎ・臥泳ぎしてあがりぬ」

たち-かうがいぜさしやう 【植】燈心草科、燈心草屬の草本。莖の高さ三尺許り、多數叢生して直立す。葉は互生、細長き線形をなし、葉面に節を有す。八月頃、莖梢・葉腋に花蕊を抽き、二三分岐して、淡綠褐色の小花を簇開す。我が國、水田其の他の水邊に自生す。

たち-かかり 立掛 (名) 立ちかかること。立たんとする時。

たち-かかり 裁掛 (名) 裁ちかかること。裁ち物を始むる時。

たち-かかる 立掛 (自動ハ) 立たんとす。宇治拾遺「うつぶしに倒れたりけるを、ちがひてたちかかりて、おこしたてず頭を又うち割りてけり」

たち-かかる 裁掛 (他動ハ) 裁ち始む。裁物に取りかかる。

たち-かき 太刀打 (名) 古語。たちうち(太刀打)に同じ。崇神紀「八廻弄槍、八廻擊刀(カタナ)」

たち-かきつばた 立杜若 (名) 紋所の名。

たち-かく 立樂 (名) 節會の日、庭上にて伶人が立ちながら樂を奏すること。又、其の樂。著聞「御膳宿の方にて、立樂の時になりて、皇帝を吹き出ださせおはしたりけり」建武年中行事「獻をはりて立樂あり。日月花門より、左右の樂人舞庭樂を奏して馳道に進む。左右おのおの二曲」

たち-かくす 立隱 (他動ハ) 立ちて遮り隱す。かくす。古今春上「誰れしかもとめて折りつる春霞、立ちかくすらん山の櫻を」新古今雜上「浮雲は立ち隱せどもひまもりて、空ゆく月の見えもするかな」

たち-かくる 立隱 (自動ハ) かくる(隱)に同じ。萬「さは川の岸のつかさのしばな刈りそ、ありつつも春しきたらば立隱(カクル)がね」

たち-かくる 立隱 (自動ヤ下) 前條に同じ。古今秋上「人の見ることやくるしき女郎花、秋霧にのみ立ち隱るらん」拾遺哀傷「春は花秋は紅葉と散りはてて、立ち隱るべきこの木もなし」

たち-かけ 太刀懸 (名) たちかけのくさずり(太刀懸草摺)の略。太平記「十二公案「兵庫鎭の丸鞘の太刀に虎の皮の尻鞘(サヤ)をかけたるを、太刀懸の半に結んでさげ」同卅一「野合戰」太刀かけ・草摺の横縫皆突き切られて、威毛計り續きたるに」

たちかけ の くさずり 太刀懸草摺 いむけのくさずり(射向草摺)に同じ。

たち-かげ 太刀影 (名) ㊀太刀の映るかげ。太刀の閃く影。太平記「十九「藤宣以下被二誅」「發」より太刀にて切りけるに、太刀影に馬驚いて、深田の中へ落ちにけり」曾我「九「佐野の藤次は五郎がたちかげを見て、かいふいて逃げにける」 ㊁太刀の御蔭。武功のおかげ。甲陽軍鑑「長尾殿御太刀かげを以て、信州更級へ歸參申し度しと願みける」

たち-かさなる 立重 (自動ヤ) 立ちて重なる。又、かさなる。一代男「十人計り の屋して、今入りの男、牢屋の作法に任せ胴を打たすと、立ち重なる貌は」

たち-かさぬ 立重 (他動下) かさぬ(重)に同じ。歌などに多く裁ち重ねる意をかけていふ。拾遺「ひしげれ平野の原のあや杉よ、濃き紫に立ち重ぬべく」續千載「衣手の田上の山の春霞、たちかさねても春はきにけり」

たち-かさぬ 裁重 (他動下) 衣を裁ち縫ひて襲ね著く。歌などに多く立ち重ねる意をかけていふ。源帚木「藤衣たちかさね、かなしき事を思ひ給へしほどに」玉葉「上「時雨もて織るてふ秋のから錦、たちかさねたる衣手の森」

たち-がしば (名) 【植】灌木(イボタ)科、白薇(ウツボグサ)屬の多年生草本。莖の高さ二三尺、ほぼ直立す。葉は對生、やや柿に類し、全邊にして緣邊やや波狀を呈す。夏日、梢上の葉腋に暗紫色の花を簇開す。我が國、山中の樹陰に自生す。

たち-がしら 立頭 (名) 立家のかしら。大鏡「狂言」それより立頭(さし、亭主)へもさし、色色籠酒になり」

たち-かせ (名) 【動】かまきり(螳螂)の異名。

たち-かぜ 太刀風 (名) ㊀太刀を振ひて起こる風。大友興廢記「紹林「國光の刀するりとぬき、二三人の耳に太刀風をあてられければ」 ㊁戰ひぶりの勇ましきこと。武威。蜂須賀文書「秀吉小早川隆景宛「廿四日加州へ令出馬の處に、諸城雖相抱候、筑前守太刀風に驚き、草木も靡き開ひ」

たち-かぢのは 立梶葉 (名) 紋所の名。かぢのは(梶葉)を見よ。

たち-かつぎ 太刀擔 (名) 左の肩の中程の稱。

たち-かはり 立代 (名) たちかはること。互ひに交りあふこと。入り代はること。交替。

たちかはり いりかはり 立代入代 いりかはり(入代)に同じ。

たち-かはり 立代 (自動ヤ) かはる。變化す。交替す。萬「立易(タチガヘ)古き都となりぬれば、道のしば草長く生ひにけり」源少女「子のおとなぶるに、親のたちかはりしれゆく事は」拾遺雜「吉野山みねの白雪いつゆく消えて、けさは霞の立ちかはるらん」

たち-かぶ 戒代 (他動ヤ) 布帛など裁ち切りて、衣服を作り更ふ。源夕「夏衣たちかへてけるけふばかり、ふるき思ひもすすみっはせぬ」新六帖「たちかふるならひしならば唐衣、夏きたりとは何に知らまし」

たち-かへり 立返 (名、副) ㊀たちかへること。行きて直ちに歸り來たること。

たち-からみ 太刀絡 (名) 鎧の具。草又は藤蔓などにて環の狀に作り、太刀をからみつくるもの。

たち-がれ 立枯 (名) 木草の、立ちたるまま枯るること。又、其の木草。宇鏡「理太知祇也」夫木「柚山の横のたちがれ枝をなみ、おのれぞ白き雪はたまらず」

たち-かん (名) 相撲の手の名。井筒業平河内通「十二の捻り、十二の投げ、立かん・居かん・强みの腰」

たち-き 立木 (名) ㊀生ひたちたる樹木。津國女夫池「岸の立木に打ち掛け打ち掛け」 ㊁(法)一筆の土地、又は一筆の土地の一部分に、植栽により生ひ立たしめたる樹木の集團にて、其の所有者が所有權保存の登記を受けたるもの。明治四十二年法律第二十二號「立木」

たちき に みづかね 立木水銀 きのどく(氣毒)の隱語。氣を木にかけていふ。隱語

たち-きえ 立消 (名) ㊀火の燃え上がらず、半途にして消ゆること。又、燃えきりて火の消ゆること。若風俗「おのづから蠟燭立ち消え、心は闇となりぬ」 ㊁事の半途にして止むこと。中絶。

たちき-がくれ 立木隱 (名) 立木の茂みに身を潛ますること。若風俗「屏風に乘せて、青葉の立木隱れよりさし上ぐれば」

たち-ぎき 立聞 (名) ㊀たちぎくこと。ぬすみぎき。源末摘「同じくはけぢかき程のけはひ、立ちぎきせさせよ」狂言「盥「そっと起きて、立ち聞きして居たれば」 ㊁轡の頭の輪。轡(クツワ)を著くるところ。又、其所につけたる總(フサ)。今川大雙紙「馬に付て式法」「轡の名所の事。はみ・ほうみ・立聞・鏡・引はやくいふにぞ、すだれおろしつべくおぼゆる」

たち-ぎく 立聞 (自動ヤ) ㊀たちぎくこと。ぬすみぎき。源末摘「同じくはけぢかき程のけはひ、立ちぎきせさせよ」狂言「盥「そっと起きて、立ち聞きして居たれば」 ㊁轡の頭の輪。轡(クツワ)を著くるところ。又、其所につけたる總(フサ)。今川大雙紙「馬に付て式法」「轡の名所の事。はみ・ほうみ・立聞・鏡・引

手また水付とも云ふ」

(諺)立聞きをすると三尺地の下の蟲が死ぬ 人の密談を立聞きする時は、罪深しといふに響ふ。北條時頼記「心は奥の物音を、そろりそろりとさし足し、立聞きしたる身の科は、三寸穿む土よりも、五尺の體は縮め居る」

(諺)立聞きをすると三尺地の下の蟲が死ぬ 前條に同じ。浮世風呂三「立聞きをすると、三尺地の下の蟲が死ぬと申すが、いらざる罪を作りますのさ」

たち-さき 太刀利 (名) 太刀の鋭利なること。太刀を使ふことの手ききなること。太平記(巻九)「弊長兵、黄石公が傳へし奥、李道翁が授けし道、機に磨って心とせし太刀ききなれば」

たち-きく 立聞 (他動ヵ) 一立ちて聞く。萬三「かるの市に吾が立聞ばば、玉だすきうねびの山になく鳥の音も聞こえず」二物かげに立ちて、人の話を盗みきく。永久百首「わが門に立ちぎく人もあらませば、かくとはましやささがにの絲」

たち-とうきぼ 立木登記簿 (名) 各登記所に備へおき、立木に關する事項を登記する帳簿。明治四十二年法律第二十二號(道第十二條乃至第十四條)「立木登記簿」

たち-ぜび 立黍 (名) 【植】たうもろこし(玉蜀黍)の異名。

たち-ぎみ 立君 (名) つじぎみ(辻君)に同じ。七十一番歌合「たち君。すは御覽ぜよ、けしからずや」緋縮緬卯月紅葉(東海道)「高麗橋の西東、床も定めぬ立ち君は、見れも世渡る智ひとて」

たち-ぎる 斷切 (他動ヵ) 一たちて切る。切りたつ。切りはなす。新後拾遺(秋上)「唐錦をりは()、染めよ山姫の、たちきる袖の露もしぐれも」裁切。二閉をしきる。限る。

たち-ぎれ 立切 (名) たち滅くすこと。燃えきること。一代女三「今宵も亦、蝋燭の立ち切れまで、恰氣講あれかし」

たち-く 立來 (自動ヵ變) 立ちて來たる。記三「わたつみの沖つ白なみ多知久(タチク)も」萬三「わたつみの沖つ白なみ多知久(タチク)らし、あま少女ども島がくる見ゆ」新後拾遺(雜上)「行く年も立ちくる春も逢坂の、關路の島の音をや待つらん」

たち-くく 立潛 (自動ヵ) 閉をくぐる。萬八「あしひきのこのま立八十一(タチク)ほとときすが、かく聞きそめてのち戀ひむかも」同三「あし引の山邊に居ればほとときす、木のま多知久吉(タチクヨ)なかぬ日はなし」

たち-くさすきかづら 特生天門冬 (名)【植】たちてんもんどう(特生天門冬)の異名。

たち-くされ 立腐 (名) 立ちたるまま腐ること。そのまま腐ること。

たち-くたびれ 立草臥 (名) 久しく立ちて勞れたること。

たち-くだる 立下 (自動ヵ) 劣る。たちおくる。源(梅枝)「此の御箱には、たちくだれるをばまぜ給はず」

たち-くづ 裁屑 (名) 紙又は布などの裁ち殘り。たちはづし。

たち-ぐひ 立食 (名) 立ちたるまま食ふこと。立ちてゐて食ふこと。

たち-くもる 立曇 (自動ヵ) 霧などの立ちて空曇る。齋宮女御集「立ちくもる佐保の河ぎりはれずのみ、日たけぬ空に程のふるかな」新後拾遺(秋上)「立ち曇る霧の隔ても末見えて、絶えだえ落つる宇治の柴舟」

たち-くらべ 立競 (名) 陣立の名。下文を見よ。武德編年集成(十三、元和二年夏)「一陣山縣、二陣藤組(八千總兵、五百騎)、三陣馬場(五百總兵)」(段段に賦し、兵勢の厚さを顯はす)

たち-くらはぎけ (ちくらぎと云ふなり) (名)【植】卷柏(ヒカゲノカズラ)科、卷柏屬の草本。莖は鐵絲、分岐して稍斜上する傾きを有し、所所に根を生ず。葉は鱗片葉にして、子囊を有する枝は直立する性あり。大小二種の胞子を生ず。我が國、山地陰濕の地に自生す。

たち-くらみ 立暗 (名) 起ち上がる時、又、立ちながら目まひすること。

たち-げいこ 立稽古 (名) 俳優の新脚本を演ずる前、まづ座したるままにて臺詞の申し合せをなし、其れより立ちて各自の所作を練習すること。

たち-こえる 立越 (自動ヵ) たちこゆ(立越)の口語。

たち-こくら 立競 (名) 立つことの競爭、境海草「元日立春に、年と春赤人丸や立ちこくら」

たち-こす 立越 (自動ヵ) たちこゆ(立越)に同じ。

たち-ごとく 立五德 (名) 紋所の名。

たち-ごみ 立込 立籠 (名) 一たちこむこと。二きすを釣るに、高き展をはき、杖を突き、水中に入りて釣ること。(婦遊美覽)

たち-こむ 立込 立籠 (自動ヵ) 人また馬・車など多く入り込む。源(夕顔)「今日も所もなくたちこみけり」同(賢所所)「御とぶらひの使などたちこみたれど、聞こえつかず」狭衣三「たちこみたる物見車ども、かち人ども、こちたきまで多かり」

たち-こむ 立籠 (自動ヵ) 立ち覆ふ。萬一「國原はけむり立籠(タチコム)て、うなばらはかもめたちたつ」金葉(冬)「河霧のたちこめつれば高瀨舟、わけゆく棹の音のみぞする」

たち-ごも 立鴨 (名) 飛び立つ鴨。古へ東國の方言。萬三「多知許毛(タチゴモ)のたちの騒ぎにあひ見てし、いもが心は忘れぬかも」

たち-こゆ 立越 (自動ヵ) 一越ゆ。過ぎ行く。二まさる。すぐる。三出で行く。往く。謠(野宴)「嵯峨野の方ゆかしく候間、立ち越え一見せばやと思ひ候」狂言(石神)「彼れが私宅へ立ち越え、折櫃の加へうと存ずる」四米たる。くる。狂言(菊苗)「きっと折櫃を致さうと存じて、是れまで立ち越えたれども」

たち-さかゆ 立榮 (自動ヵ) 一草木など茂りさかゆ。記三「多知邪加由流(タチサカユル)葉びろくまかし」萬三「山しろのくぜのやしろの草なた折りそ、おのが時立榮(タチサカ)えも草なた折りそ」古今(大歌所)「鶯やたびおけど枯れせぬ榊葉の、たちさかゆべき神のきねかも」二時を得て繁昌す。繁榮す。

たち-さき 太刀先 (名) 太刀のほさき。きっさき。若風俗三「何か浮世の思ひ出で、かく申せし心根、深く太刀先にて堺開けん」

たち-ざけ 立酒 (名) 出立の際に酒を飲むこと。又、立ちながら酒を飲むこと。又、その酒。一代男三「揚屋に兵作・小太夫・虎之介など集めて、面白う遊びて、明けの日は禿どもが立酒」女殺油地獄(下)「手も屆かねば立ち上がり、つぐも受くるも立酒を中略立酒飲んで誰れを野送り、ああ氣味わる」

たち-さばき 太刀捌 (名) 太刀の扱ひ方。國姓爺三「上段・下段の太刀捌き、陽炎・稻妻・獅子奮迅」

たち-さはる 立障 (自動ヵ) さはる。さまたげとなる。

たち-さぶ 立塞 (他動ヵ) たちふさぐ。萬三「しき浪の立塞(タチサブ)道を誰が心、いとほしとかもただ渡りけむ」土佐日記「波立ちさへて入れずもあらなん」

たち-ざま 立樣 (名、副) 立つ時。立つ途端。盛衰記(四十六、義經)「南無阿彌陀佛と百返計り申して、立ち樣に口ずさみける」

たち-さまよふ 立徘徊 (自動ヵ) 立ちてうろつく。うろつきまはる。枕「居も定まらず、ここかしこに立ちさまよひ、遊びたるもいとをかし」榮華(殿上)「え座にはつき給はぬものから、さるべき所にたちさまよひ」蹴然(鞠)

たち-さもらふ 立候 (自動ヵ) さもらふ。伺候す。萬三「かみろぎの神の御門に、外のへに立候(タチサモラフ)、内のへに仕へまつりて」

たち-さや 太刀鞘 (名) 太刀のさや。刀室。字鏡「鞘(太知佐也)」

たち-さる 立去 (自動ヵ) 立ちて其の場を去る。立ちのく。神武紀「避去(タチサリ)」宇津保(俊蔭)「近く見馴るるままに、かた時もたちさるべくもあらず」

たちさらぬ 不立去 ふどうみやうわう(不動明王)をいふ。久安百首「不動。たちさらぬ誓ひたのめばおのづから、花のうてなにのぼりざらめや」

たち-さわぐ 立騒 (自動ヵ) 立ちてさわぐ。さわぎ立つ。さわぐ。後撰(二)「淵瀬ともいさや白浪立ち騒ぐ、我が身一つはよる方もなし」宇津保(梅花)「色色のあげばりをいろこのごと打ちわたして、たちさわぐ人、打ちまぜたる花のごと見ゆ」

たち-さんぼんあふぎ 立三本扇 (名) 紋所の名。

たち-しく 立頻 (自動ヵ) 頻りに立つ。立ちしきる。萬三「かしふ江にたづ鳴きわたる、しかの浦に沖つ白なみ多知之久(タチシク)らしも」同三「あをの浦に寄する白波、いやましに多知之伎(タチシキ)よせく、あゆをいたみかも」

たち-しゅう 立衆 (名) 能樂・狂言に連吟(ツレ)の一種。數人相並びて登場するもの。安宅の曲にて、義經・辨慶以外の山伏などの類。(大蔵流狂言)「御當、日出たう御座る」(立衆(同)樣に言ふ)

たちすがた 立姿 (名) 一立ちて居る姿。二舞のすがた。(謡言)「何にても立姿が見たう御座る。此の上からでも御座る程に、一つ舞ひませう」(同)「たう舞殿の立姿、見たう御座る」

たち-すぎぐさ 特生天門冬 (名)【植】たちてんもんどう(特生天門冬)の異名。

たち-すくばる (自動ヵ) たちすくむ(立竦)に同じ。浦島年代記(十八、連)「蹈みこかせどもちっとも動かず立ちすくばり、金輪際より生えぬきて」

たち-すくみ 立竦 (名) 一立ちすくむこと。太平記(十八、樂合戰)「自ら劍を抜いて已れが首を掻き落とし、左の手に髻し擧げて、立ちすくみにこそ死に給ひけれ」百日曾我「四足を土に蹈み入れて、立ちすくみになる所を」二佛をいふ。齋宮の忌み詞。倭姫命世記「内七言、佛稱立須久美(タチスクミ)」砂石集「三寶の名をもただしくいはず、佛をば立ちすくみ、經をば染紙、僧をば髮長、堂をばこりたきなんといひて」

たち-すくむ 立竦 (自動ヵ) 久しく立ちぬて足すくむ。立ちたるまますくむ。源(宮木)「やうやう腰いたきまでたちすくみ給へど」榮華(音樂)「見佛聞法の人人、日にあたりてたちすくみ、かしら痛う思ふに」

たち-すぐり-ねずぐり 立勝居勝 (名) 敵の我が軍中に紛れて忍び入るものあるを慮り、兼ねて相圖を定め置き、城門に入らんとする時、俄かに立ちたり居たりして見あらはしえり分くること。太平記(巻四十四)「夫れ夜討・强盜をして歸る時、立ち勝り居勝りと云ふ事あり」

たち-すずしろ (名)【植】次條の略。

たち-すずしろさう (名)【植】すずしろさうの異名。

たち-すぢ 太刀筋 (名) 太刀の遣ひ方。室町殿物語(兵法)「御太刀すぢをも一覽つかまつり度く存じ候」

たち-すべりひゆ (名)【植】おほすべりひゆ(狒耳草)の異名。

たち-すみさりかく 立隅切角 (名) 紋所の名。

たち-すみれ (名)【植】菫菜(ヒメ)科、紫花地丁(ヒメ)屬の多年生草本。莖の高さ尺餘。葉は大よそ長三角形を呈す。托葉は殊に長大にして葉狀をなし、少數の銀齒を具ふ。五六月の頃、白色にして紫條ある小形の花を開く。我が國、各地の稍濕潤なる原野の草間に自生す。

たち-そばの (枕) そばの木は實なきものなれば、實のなきにかけていふ。記(中)「多知曾婆能(タチバノ)みのなけくを、こきしひ五ね」

たち-そふ 立添 (自動ヵ) 附き添ふ。寄り添ふ。そふ。續紀三「少女らに男多智蘇比(タチソヒ)踏みならす、西の都はよろづよの宮」枕「めのと中略をのこどもは、ただ我がものにして立ちそひ」源(少蔵)「程もなくまた立ちそひぬべきが、くちをしくもあるべきかな」

たち-そむ 立初 (自動ヵ) 立ちはじむ。立ち出づ。風雅(巻上)「立ち初むる春の光と見ゆるかな、星をつらぬる雲の上人」鎌田兵衛名所歌合(名所屋風四季)「晉羽の山の海霞、今日立ち初めし」

たち-たうちば 立唐團扇 (名) 紋所の名。

たちたけ-ごまいぎさ 立竹五枚笹 (名) 紋所の名。

たち-たちばな 立橘 (名) 紋所の名。

たち-たつ 立立 (自動ヵ) 起ち又起つ。飛び起ち又飛び起つ。萬二「海原はかまめ立多都(タツ)」

たち-たなびく 立棚引 (自動四) 起き ちてたなびく。たなびく。萬三「あしびきの山のこぬれに、白雲に多知多奈比久(タチタナビク)」

たち-ちがひだな 立違棚 (名) 床の間・書院などの脇に設くる棚の一種。

たち-ちがふ 立違 (自動四) 入り交り立ち交りす。狭衣三「法師も俗もあけくれたちちがひつつ、いかなるわざをして、いささかも御らんじ入られんと」

たち-つかひ 太刀遣 (名) 太刀をつかふこと。又、そのつかひざま。太刀をよくつかふ人。

たち-つかろ 立疲 (自動下二) 久しく立ちて疲る。つかる。萬七「春びすら田に立蕨(ワラビ)君はかなしも、若草のつまなき君が田に立蕨(ワラビ)」

たち-つぐ 立繼 (他動四) 立ちて後をつぐ。後に繼ぎて立つ。源四宮「ひかりかくれ給ひし後、かのみかげに立ちつぎ給ふべき人、そこらの御すゑずゑにありがたかりけり」

たち-つくり 太刀作 (名) 太刀を作ること。又、其の人。後拾遺雜五「よろづ世を君が守りと斬りつつ、たちつくりえのしるしとを見よ」

たち-つくり 立作 斷作 (名) 大饗の時など、肴など調進すること。又、其の處。

たち-つくり の あく 立作幄 立作所に設くる幄。稚亮装束抄「内覽の家に母屋の大饗をすきのだい饗となづけ中略たちつくりのあくといふことあり」

たち-つくり-どころ 立作所 (名) 大饗の時、たちつくりをなす所。

たち-つけ 裁著 (名) 半袴の類にて、裾を紐にて膝の所に括りつけ、下に脚袢を穿つもの。旅行などに用ふ。伊賀袴。義殘後覺「葛湯革のたちつけに、鉢卷をむずと締め」丹波與作「しゆちんの裁著(タチツケ)りりしげに」

たち-つけ 太刀附 (名) 太刀にて切り附くること。謠土三「御太刀つけの痕を見候へば、けしからず血の流れて候」

たち-つづく 立續 (自動四) 一 立ちて相連なる。二 つづく。連なる。

たち-つづく 立續 (他動下二) 一 立ちたるまま其の時間を通す。二 立ちて連ならしむ。三 つづかす。連續せしむ。祝詞式「長道無間久立都賀氣(タツツケ)」

たち-つづけ 立續 (名) たちつづくること。「五時間立ちつづけに演說す」

たち-つづける 立續 (自他動下二) たちつづく(立續)の口語。

たち-つ-とひ 立筒樋 (名) 上より落つる水を受け入るる爲め、直立せしめたる竹筒の樋。井筒薬平河内通「天より下だる水呉れんと、軒の笂の立筒樋踏みこかし、髻をつかんであふのけに取って伏せ」

たち-つ-ぼすみれ 【植】菫菜(ハ)科、紫花地丁(ハ)屬の多年生草本。莖は地上に葡萄す。葉は圓き心臟形にして長柄を有し、鋸齒あり。羽狀に分裂せる托葉を具ふ。春季、淡紅紫色、五瓣の不整なる花を開く。花瓣の一餘は細長き距を有す。我が國・山野に自生す。

たち-つまづく 立蹴 (自動四) つまづく。よろめく。字鏡「蹴躓(太切豆久入)」

たち-つらぬ 立連 (他動下二) 立ちて連ならしむ。つらぬ。竹取「大空より人雲にのりており來て、つちより五尺ばかりあがりたるほどに立ちつらねたり」

たち-つる 立連 (自動下二) つれだつ。伴ふ。謠右近「袖觸れ續く市人の中略立ち連れ行くや中略阿部の市路に出づるなり」

たち-てんもんどう 特生天門冬 (名) 【植】百合科、天門冬(ウマノアシガタ)屬の多年生草本。莖の高さ五六寸、多く簇生す。主莖は細くして直立し、細枝は葉狀、細長にして尖れり。葉は細微にして鱗狀なり。地下に塊根あり。花を見ること稀なり。觀賞用として栽培せらる。たちすぎぐさ。

たち-ど 立處 (名) 立つところ。萬十「青柳のはらる川とになを待つと、せみどは汲まず多知度(タチド)ならすも」六帖「五月山木の下闇にともす火は、鹿のたちどのしるべなりけり」

たち-どころ (名) 【植】蘘荷(ミョウガ)科、蘘荷屬の多年生草本。莖は下部、割合に堅强、殆と直立して、長き葉柄を有する心臟狀の葉を互生し、上方に至るに從ひ、漸次蔓狀をなして他物に纏絡す。夏日、葉腋に淡黃色の雌雄花を開く。我が國・山地に自生す。

たち-ど-ころ 立所 (副) ただち。たちまち。すぐさま。即時。神代紀下「中レ矢、立ちどころに死」觀詞式「高津島殃」依兵、立ちどころに身亡ス」保元上三「即時に敵を從へ、立ちどころに利を得ること、夜討に過ぎたること候はず」

たち-ど-まり 立留 (名) たちどまること。

たち-ど-まる 立留 (自動四) 立ち行きながら止まる。暫したたずむ。萬三「途來る人の泣く涙ひさめにふれば、白妙の衣ひづちて立留(トドマリ)、われに語らく」古今春下「家に藤の花さけりけるを、人の立ちとまりて見けるを」

たち-ど-まる 立留 (自動四) 前條に同じ。

たち-とめ 太刀止 (名) かぶらまき(蕪卷)に同じ。

たち-ど-よむ 立動 (自動四) どよむ。さわぐ。萬三「あさぬのきぎし、あけぬとし立動(タドヨム)らし」

たち-とり 太刀取 (名) 一 かいしゃく(介錯)に同じ。保元四義宣旨を承りて、正清太刀取にて失ひ參らすべきにて候」謠夏人「太刀取後に廻はりつつ、稱念の聲の下よりも、太刀振り上ぐれば」二 たちもち(太刀持)に同じ。

たち-な 【植】いたどり(虎杖)の異名。

たち-なげく 立嘆 (自動四) 立ちてなげく。なげく。萬三「君に戀ひいたもすべなみ、なら山の小松がもとに立嘆(タチナゲ)つる」

たち-なほる 立直 (自動四) なほる。もとの如くなる。又、居なほる。堀河百首冬「雜波宮つなでになびく蘆の穗の、うらやましくも立ちなほるかな」徒然草「この度もしたちなほりて、命をまたくせば」

たち-なみ 立波 (名) 紋所の名。

たち-なみ-に-うさぎ 立波兎 (名) 紋所の名。

たち-なむ 立並 (自動四) たちならぶ(立並)に同じ。枕「くす玉をみこたち・かんだちめなどのたちなみ給へるに奉るも、いみじうなまめかし」宇治拾遺「たちなみたる見物のものども」

たち-なやむ 立惱 (自動四) 立ち居るに困しむ。なやむ。

たち-ならす 立馴 (他動四) 立ち馴るるやうにす。枕「いかばかりの人、九のへをかく立ち馴らすらんなど、思ひやらるるに」拾遺雜五「年をへてたちならしつる蘆たづの、いかなる方に跡留むらん」源三「御心にも、なんとて今までたちならさざりつらんと、過ぎぬる方くやしうおぼさる」

たち-ならす 立均 (他動四) 立ちて地を踏みならす。萬三「かつしかのまの井見れば立平之(タチナラシ)、水汲ましけむてこなしおもほゆ」同廿「朝庭に出で多知奈良之(タチナラシ)、ゆふ庭に蹈みたひらげず」

たち-ならぶ 立並 (自動四) 一 立ちてならぶ。源紅葉賀「立ちならびては、花の傍のみ山木なり」二 同じ程なり。西敵す。竹取「我がたけたちならぶまで髮ひ奉りたる我が子を」三 くらぶ。比較す。源高「たちならぶ人なう、心やすげなり」同藤袴「かばかりは風にもつてよ花のえに、たちならぶべき匂ひなくとも」

たち-なる 立馴 (自動下二) 馴る。馴れ親しむ。源四宮「ひとつ院の内に、あけくれ立ちなれ給へば」續拾遺雜三「立ちなるる飛火の野守已れさへ、霞にたどる春の曙」

たち-にほんあふぎ 立二本扇 (名) 紋所の名。

たち-ぬかぼ (名) 【植】蘘荷科、蘘荷屬の一種生草本。ぬかぼたでに似て莖直立し、高さ二尺許り。夏日、花を開く。我が國、各地に產す。

たち-ぬひ 裁縫 (名) たちぬふこと。さいほう。源手習「たちぬひなどするを、これ御覽じいれよ、物をいとうつくしくひねらせ給へば」

たち-ぬふ 裁縫 (他動四) 布帛を裁(タ)ちて衣などに縫ひ作る。古今雜上「たちぬはぬ衣きし人もなき物を、なに山姫の布さらすらん」源帚木「たなばたのたちぬふ方をのどめて」

たち-ぬる 立濡 (自動下二) 立ちたるまま雨などにぬる。萬三「わがせこをやまとへやるとき夜ふけて、あかとき露に吾れ立所霑(タチヌレ)し」夫木三「我がためにあはでの森の雫かは、つきとふ鹿のたちぬれて鳴く」

たち-の-うを 太刀魚 (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。體の長さ四尺餘に達し、帶の如く細長く、尾端に至るに從ひて愈細まり、末端は絲の如し。口濶く、齒は上顎骨及び口蓋骨に生ず。背鰭は背の全部に跨り、腹鰭を缺く。背面は淡青、腹面は白色なり。遠海魚に屬し、九州・中國等の大平洋に面したる海に多く產し、北に進むに隨ひて少なし。產卵期は夏秋の交にて、この時に淺海に近寄ることあり。たちいを。たちうを。白帶魚。

(たちうを)

たち-の-き 立退 (名) たちのくこと。

たち-の-きば 立退場 (名) 立ち退きて居る處。假りに移り居る處。

たち-の-く 立退 (自動四) 其の處を立ち去る。他處へ移る。源末摘「たちのきて、只今おはするやうにて打ちたたき給ふ」宇治拾遺「たちのきたるずさどもの多さを思ひやるべし」

たち-の-しり 太刀後 (枕) たちのしりとは太刀の鞘のさきをいふより、さやにかけ、鞘は玉などにて飾るより、たまにかけていふ。萬七「劍後(タチノシリ)鞘に納野に葛ひくわぎも、ま袖もてきせてむとかも夏くずひくも」同十「劍後(タチノシリ)玉まく田井にいつまてか、妹をあひ見ず家戀ひ居らむ」

たち-の-ぼる 立上 (自動四) 高く立ちあがる。空へあがる。源若紫「世の常の色とも見えず雲ゐまで、立ちのぼりける藤浪の花」續拾遺雜五「いかにせんつひの烟の末ならで、たちのぼるべき途もなき身は」

たち-の-を 太刀緒 (名) 太刀の鞘(ノ)に結び附けて腰に纏ふ紐。あしのを。おびとり。續後紀三「承和元年「四獄司・物部、刀緒用(ル)胡桃染」」大和物語「「良少將たちのをにすべき革を求めければ、盛命綰我がもとにありといひて」

たち-は 立葉 (名) 蓮の葉、又は木の葉などの、一本づつ立ちたるもの。堀河百首夏「雨ふればはすの立ち(うきゝ)葉にゐる玉の、たえずこぼるる我が涙かな」夫木三「いせ島やみつのかしはのたち葉もて、つつむま袖に神まつるらん」

たち-は 起端 (名) 起つべき機會。起ちて去るべき機(ジ)。「たちはを失ふ」川中島合戰「立つに立ち端なく」

たち-は 立場 (名) 立ち居る處。たちど。占むる地位。立脚地。浮世風呂「「蹈み込みに下駄が重なり合って足の立端がねえだ」」

たち-ばうちやう 裁庖丁 (名) かみたち(紙裁)に同じ。

たち-はき 帶刀 (名) たちはきとねり(帶刀舍人)の略。春宮坊式「正月十七日射禮、東宮參豐樂院、步射、射手帶刀十人」職原抄「春宮坊中略帶刀者撰重代侍補之」

たち-はき の ぢん 帶刀陣 帶刀の詰所。古今春下「春宮のたちはきの陣にて」宇津保貴宴「たちはきのぢんにくだもの出ださんとおぼす」

たち-はき の やく 帶刀役 武家の職名。將軍參内などある晴れの時、太刀を佩きて供奉するもの。貞丈雜記

たち-はき の さき 帶刀長 帶刀舍人の長。古くは二人あり、後には一人。源平の武士より選拔して之を任ず。たちはきせんじやう。兵範記仁安三年三月九日「帶刀上日立所長二人、平維長、上日十夜。源重綱、上日廿、夜」

たち-はき (名) 【植】なたまめ(刀豆)の異名。

たち-はけ 立試 (名) 近衛の馬場にて射藝を試み、帶刀を選拔すること。日本紀略六、天長元年「十月八日「東宮帶刀試」」同十三、承和元年「十月廿三日「帶刀試」」

たち-はき-ことろみ 帶刀試 (名) 近衛の馬場にて射藝を試み、帶刀を選拔すること。日本紀略六、天長元年「十月八日「東宮帶刀試」」同十三、承和元年「十月廿三日「帶刀試」」

たち-はき-ことり 帶刀部領 (名) 帶刀舍人にて、帶刀長に次ぐもの。木鳥(コ)。

たち-はき-せんじやう 帶刀先生 (名) たちはきのをさ(帶刀長)に同じ。たちはき(帶刀)の條を見よ。平治(中略)惡源太義平と申す者なり中略武藏大藏の軍の大將として、叔父帶刀先生義賢を伐ちしより以來」

たち-はき-とねり 帶刀舍人 (名) 春宮坊の舍人監に屬し、舍人の中にて帶刀するもの。東宮に侍し、非常を警衛す。長を先生(センジヤウ)といふ。次を部領(コ)、次を脇(ワキ)、次を連(ツラ)といふ。延喜式「太政官符。應充帶刀舍人廿人事」中略人令條

たち-はこ 太刀箱 (名) 太刀を藏めて置く納。蜻川親俊記「天文八年三月廿三日寄之」

たち-はし 太刀走 (名) たちうち(太刀打)に同じ。

たち-はし 立走 (名) たちはしること。景行紀「是小海耳、可立走(タチハシリ)渡」萬五「なにはづに御船はてぬときこえこば、紐解きさけて多知婆志利(タチハシリ)せむ」

たち-はしる 立走 (自動四) 立ちて走り行く。記「其美人驚而、立走(タチハシリ)伊須須岐伎」萬三「玉しげ少し開くに、白雲の箱より出でて、とこよべにたなびきぬれば、立走(タチハシリ)叫び袖振りこひまろび」

たち-はだかる 立塞 (自動四) 立ちて胯をひろぐ。立ちふさがりて遮る。女殺油地獄「顏色變はり眼も据わり、門口に立ちはだかり」傾城反魂香「むっと顏に立ちはだかる」

たち-はたらき（かり）　立働　（名）　たちはたらくこと。

たち-はたらく　立働　（自動四）　立ちて種種の仕事をなす。

たち-はづし　裁端　（名）　さいで。たちくず。

たちば-とり　（名）　【鵤】あはちどり（信天翁）の異名。

たちばな　橘　（名）　一【植】かうじ（柑子）の異名。記「かぐはし、はな多知婆那（バナ）は」續紀十二、天平十二、月廿一日「橘者果子之長、上人所好、柯凌霜雪而繁茂、葉經寒暑不凋」萬「多知波奈（バナ）の下吹く風のかぐはしき、筑波の山を戀ひずあらめかも」名義抄「橙（ダイダイ）・橘（タチバナ）」源鈴「箱のふたなる御くだものの中に、たちばなのあるをまさぐりて」二【植】なつみかんの異名。圓・黄の色目の名。表は朽葉にて、裏の黄色なるもの。又、表は白にて、裏は青なりともいふ。三紋所の名。えだたちばな・きくたちばな・ぎやうえふたちばな・こくもちにたちばな・だんせんたちばな・みつたちばな・むかひたちばな・やへむかひたちばな・わりたちばな等種種あり。四香の名。質は伽羅、或ひは眞南蠻と云ふ。香風おもしろし。

たちばな-おもて　（名）　顔面に生ずる一種の瘡。宇鏡「龜面（加加良毛乃太）」

たちばな-がね　橘金　（名）　轡に附屬したる環。みづつきなどの附くもの。くつわ（轡）を見よ。

たちばな-ぎり　橘桐　（名）　紋所の名。

たちばな-くづし　橘崩　（名）　紋所の名。

たちばな-けあふぎ　立花家扇　（名）　紋所の名。

たち-ばなし　立話　（名）　立ちながら話すこと。又、その話。

たちばな-づき　橘月　（名）　陰暦五月の異名。藏玉「十二月異名中略五中略橘月。誰が代よりたちばな月の名をとめて、しのぶ昔の思ひ添ふらん」

たちばな-てふ　橘蝶　（名）　紋所の名。

たちばな-とり　橘鳥　（名）　【鵤】ほとぎす（子規）の異名。

たちばな-の-えだ-の-まる　橘枝丸　（名）　紋所の名。

たちばな-びし　橘菱　（名）　紋所の名。

たちばなめ-おほばんぎん　橘姫大判銀　（名）　大判銀の一。鑄造地及び年月詳かならず。

たちばな-もり　立花守　（名）　紋所の名。まもり（守）を見よ。

たちばなめうが　橘茗荷　（名）　紋所の名。

たちばな-やき　橘燒　（名）　魚の身をかまぼこにする如く揚りくづして、枇杷の實の大きさに丸め、くちなしにて色を附け、たれ味噌にて煮たる料理。鶴見記

たちばな-の-かは　橘皮　橘の實の外皮。藥用とす。きがは。きつぴ。和名抄「橘皮。一名、甘皮（太知波久乃加波）」

（諺）**橘が根（ネ）となる**　かうなん（江南）の條、かうなんのたちばな（江南橘）を見よ。

たちばな-ぶし　橘節　（名）　【魚】かつをぶしの異名。

たちばなり-うつ　橘流　（名）　兵法の一流。楠正成の兵法を傳へたりとて、其の徒に授けたるもの。貞丈雜記「謙信流・楠流・橘流（ナレルハ）」

たち-はなる　立離　（自動下二）　離る。とほざかる。隔たる。隔離す。隔絶す。拾遺物名「思ふどちところもかへず住み馴れん、たちはなれなば戀しかるべし」源東木「さしむかひて見んほどは中略たちはなれては、さるべき事をもいひやり」

たち-はばき　太刀鎹　（名）　刀劍の金具。撿（ケ）なき一枚の鎹金。武家名目抄

たちはめ　屧軒　（名）　牛皮を切（ク）ちて草履の裏にはめ著けたるもの。今の雪駄の類。古昔、下賤の人之を用ふ。和名「屧軒、唐韵云、軒今案下駄人以牛皮一面三齒屧下也、補履下也」字鏡集「軒（タツノハキモノ）」

たち-ばら　立腹　（名）　一怒り易きこと。腹立ちやすきこと。落窪「おのが心本性たちばらに侍りて、思ひやりなく」取替「ねたくなりてたちばらにおはするおとどにて、此の御娘を永くかうじして見給はずなりぬ」二立ちたるまま切腹すること。傾城反魂香「大門口で立腹切り、新造業や禿共、芝居でするやうな事して見せう」

たちばらひ-てがた　他地拂手形　（英 Domiciled bill）　（商）たしよばらひかはせてがた（他所拂爲替手形）に同じ。

（當地拂手形の對）

たち-はれ　立腫　（名）　馬の腹の腫（ハレ）る病。和名「十二、牛、腹癰多印無レ病、直立腹下腫是也」

たちひ　（名）　【動】まむし（蝮）の異名。記下「宜ふ蝮（タヂヒ）部二」

たち-び　立日　（名）　死亡したる人の忌日。

たぢひ　虎杖　（名）　【植】いたどり（虎杖）の古名。反正紀「多遲（タヂ）花中略多遲花者、今虎杖花也」

たち-ひじは　（名）　【植】めひじは（馬唐）の異名。

たち-ひとつかしば　立一柏　（名）　紋所の名。

たち-びやくしん　立柏槇　（名）　【はひびやくしんに對していふ】【植】びやくしん（檜柏）の異名。

たち-びやくぶ　（名）　【植】百部（クワイ）科、百部屬の多年生草本。莖の高さ二尺許り。葉形、圓尖にして縱條あり、四葉又は三葉を十餘層對生す。春季、極めて短き葉柄に花梗を著け、淡綠色にて紫暈を有する一二花を開く。庭園に栽培せらる。

たちふ　蹠跗　（名）　次條の略。小大君集「前にありけるたちふといふ瓜を、黄なる色紙にっつみて」

たち-ふ-らり　蹠跗　（名）　小さき瓜。和名「蹠跗。爾雅云、蹠跗（太知布）小瓜名也」

たち-ふ-ろろ　（名）　【植】稙牛兒（ヲウジ）科、槐牛兒苗屬の草本。莖の高さ二尺許り。葉は下部のものは深く五七裂し、裂片また、缺刻あり。上部のものは小にして通常三裂す。夏季、枝梢上に、白質にして紫條ある美花を開く。我が國、山野に自生す。ふうろ。

たち-ぶくろ　太刀袋　（名）　太刀を藏め包む袋。和名「鞘（太知久路）」

たち-ふさがる　立塞　（自動四）　立ちて遮り止む。

たち-ふたがる　立塞　（自動四）　前條に同じ。字治拾遺「迎さじとたちふたがる男にくきやつなり」

たち-ふるまひ　立振舞　（名）　立ちぬふるまひ。起居動作。擧動。川中島合戰「總じて敵の國へ入る時は、起ち振舞にも氣を附け、一言・半句の詞をも謹み」

たち-ぶるまひ　立振舞　（名）　旅立ちの際にする馳走。

たち-ほこる　立誇　（自動四）　一ほこる。二はこりかに落ちつきたるさまたり。武烈紀「執・影嫉禎蹈蹋從容（ホコリ）」

たち-ほとけ　立佛　（名）　立ち委したる佛像。きのふはけふの物語「立佛を居佛にも、檀那はからひにして」一茶句集「初雪やこき使はるるたちぼとけ」

（諺）**立佛が居佛を使ふ**　立って居るものが却って、すわり居るものを使役す。

たち-まさる　立勝　（自動四）　まさる。すぐる。源帚木「同じ頃まかり通ひし所は、人もたちまさり、心ばせまことに故ありと見えぬべく」夫木「霜のうちに殘れる菊の錦には、たちまさるべき花のなきかな」

たち-まさる　起增　（自動四）　まさりてたつ。一層甚だしくおこりたつ。後撰「下「山櫻咲きぬる時は常よりも、峰の白雲立ち增さりけり」蜻蛉日記「松島の風に從ふ浪なれや、寄する方こそ立ち增さりけれ」

たち-まじる　立交　（自動四）　其の群れに加はる。入りまじる。混ず。枕「日くれて、くらまぎれにざ、過ごしたる人人皆たちまじりて」源椎「かばかり人わらへなるめを見てん人の、世の中にたちまじり」

たち-まち　立待　（名）　たちまちづき（立待月）の略。狗鶏集「十七夜立待に。月は今たちまち出でん十七夜」

たちまち　忽　倏　（名、副）　にはかに。すぐ。急に。早速。神代紀「冒訖、忽然（タチマチ）不見」靈異記「倏（タチマチ）」錄怨紀

たちまち-ぐさ　（名）　【植】一にはやなぎ（篇著）の異名。二（藥）功の忽ちある意かと」ふうろさう（龍牛兒苗）の異名なるべし。本草和名「牛扁太知久佐」伊呂波字類「牛扁草」

たちまち-づき　立待月　（名）　陰暦十七日の夜の月。たちまちのつき。たちまち。撮壤集「月。立待（タチマチ）月」和爾雅「既生魂十七日也立待（タチマチ）月十八也」

たちまち-の-つき　立待月　（名）　一前條に同じ。源夕顔「たちまちの月さし出でて」新六帖「我が門をさしわづらひてねるをのこ、さぞ立待の月も見るらん」二楊弓・大弓にて錢を賭物とするときの十七錢の隱語。括七夕（タチマチ）。類聚名物考「賭弓「所務的（マト）に錢を賭物にする時の辭有り中略楊弓にてもいへり中略十七錢。立待の月或は括りの七夕」

たち-まつ　立待　（他動四）　たちゐてまつ。萬「戀しけば來ませ吾がせこ垣つやぎ、うれ摘みからし吾れ多知麻多（マツム）」古今雜「こめやとは思ふものからひぐらしの、なく夕暮は立ちまたれつつ」

たち-まつはる　立纏　（自動下二）　まつはる。源椎「たちまつはれて、更に離れ給はず」

たち-まばり　立廻　（名）　一たちまはること。太祇全集「羽子つくや用意をかしきと立ちまはり」二芝居にて格闘を演ずる技。歌舞妓年始「年二月歌舞「都べて樂屋の通用ことば樣樣あり、大勢相手にして太刀打ちするをたてといひ、少しき事は立ち廻りといひ」三芝居樂屋雜書「大たて・試合・立廻り名目」四ゆかみあひ。喧嘩。

たち-まばる　立廻　（自動四）　一たちめぐる（立廻）に同じ。著聞「この鷹を立ちまはり立ちまはり見て、あはれ逸物上なきものなり」浮世床「それでも、錢のたち廻はるがおつだよ」二奔走す。

たち-まふ　立舞　（自動四）　一立ちて舞ふ。舞ふ。金葉「神樂や立ちまふ袖のおひ風に、なびかぬ神はあらじとぞ思ふ」久安百首「日影さす小忌の赤紐打ちとけて、たちまふ人をもてはやすなり」二入りまじりてふるまふ。たちまじる。いりまじる。勢語「きのふけふ雲のたちまひかくろふは、花の林を惜しとなりけり」源蜻「見知り給はぬ世のうさに、立ちまふべくもおぼされず」

たち-まへ　立前　（名）　一出立する前。二勞働者の勞銭に相當する賃錢。三勞働者の其の日の生活費。四劇場にて、下級の俳優の日當の給金。

たち-まもり　立守　（名）　紋所の名。

たち-まり　立毬　（名）　蹴かずして、立ちて毬をつくこと。

たち-み　立見　（名）　一たち見ること。立ちてゐて見ること。二劇場にて、舞臺に最も遠き見物場。昔時は二階と下とにありしが、近世は二階のみ。立ちながら見物するよりいふ。

たち-み　立身　（名）　立ちかからんとする身がまへ。

たち-みだる　立亂　（自動下二）　みだる（亂）に同じ。新六帖「うちむれてあはする鷹の羽風にも、野べのかや草たちみだるなり」

たち-みついし　立三石　（名）　紋所の名。

たち-みる　立見　（他動上一）　立ちて物を見る。記上「はにふ坂わが多知美禮（ミレ）ば、かぎろひの燃ゆる家むら妻が家のあたり」

たち-むかひ　立向　（名）　たちむかふこと。

たち-むかふ　立向　（自動四）　一立ちてむかふ。むかふ。萬「ますらをがさつ矢たばさみ立向（タチムカヒ）、いるまとかたは見るにさやけし」二手向ひす。對抗する。宇治拾遺「土戸より參らんとするに、舍人二人居て、人な入れそと、鋏とて、たちむかひたりければ」

たち-めぐる　立廻　（自動四）　めぐりあるく。まはりあるく。行きめぐる。たちまはる。源雜「ことごとしく俱かにたちめぐりしとのゐ人どもも、見とがめず」新千載「なげきつむ力車の輪を弱み、たちめぐるべきここちこそせね」盛衰記「法師獄定せられたりし時、世に立ち廻らば奉らんとて盜みたりき」

たち-も　（名）　【植】蘖塔（ヲウノ）科、ふさも屬の草本。莖は叢生し、羽狀の葉を通常三箇づつ輪生す。夏秋の際、梢葉腋毎に至小なる花を開く。我が國、水田の止水中に自生す。きつねのを。きつねも。きつねらん、ほざきつねのを。

たち-もち　太刀持　（名）　一武家にて、主公の太刀を持ちて近侍する役。俳諧古選「「太刀持は雪にころんで見えぬなり」二相撲にて、横綱の土俵入りをする時、太刀を持ちて後に從ふ力士の稱。

たち-もとほる　徘徊　（自動四）　もとほる。ぶらつく。徘徊す。萬「この閼よりうつろふ月のかげを惜しみ、徘徊（タチモトホリ）に夜ふけにけり」宇鏡「回穴（太知毛比）」名義抄「盤（タチモトホル）」

たち-もどる　立戻　（自動四）　もどる。たちかへる。記上「狂言（太知）定めて忘れさせたり物であらう、立ち戻って氣を附けて見よう」

たち-もの　斷物　（名）　斷ちて食はざと。

る物。禁忌の食物。七十一番歌合「醫師。あはれ我が戀の病ぞ藥なき、うき名ばかりのたちものにして」

たち-もの　裁物（名）布帛また紙など、裁ち切るべき物。又、裁ち切るわざ。

たち-もの　建物（名）たてもの（建物）に同じ。

たちもの-いた　裁物板（名）裁ちものをなすに用ふる板。

たちもの-ばうちやう　裁物庖丁（名）裁ちものするに用ふる刃の廣く闊き庖刀。

たち-もみぢ　立紅葉（名）紋所の名。

たち-やく　立役（名）芝居にて男形に扮する者の稱。（大夫の對）若風俗三原十太夫中略なと、皆根强き立役勤めけるが」人倫訓蒙圖彙「立役。一切男の役をなすを立役といふ」

たち-やすらふ　立休（自動四）やすらふ。ためらふ。躊躇す。古今長歌「庭に出でてたち休らへば、白たへのころもの袖におく露の」源帚木「しばしたちやすらふべきに、はた待らねば」

たち-やなぎ（名）【植】楊柳科の落葉樹。通常、喬木狀を呈せず。葉は廣披針形にして先端尖り、緣邊に微鋸齒を密生し、三四分の葉柄によりて互生し、背面には短き毛茸ありて、灰白質を呈す。四月頃、穗狀花を開き、長さ一寸三四分、雌雄異株にして、雄花は黃色、雌花は淡綠色なり。果實は白色の綿絮によりて飛散す。我が國、原野水濕の地に自生す。

たち-やみ　立病（名）病床にも就かずして、何となく病氣がちなること。ぶらぶらやまひ。

たちゆう-せい　一多重星（名）【天】一箇の恆星の如く見ゆるも、望遠鏡にて之を望めば數星の相接近せる星の稱。其の二箇接近せるものを二重星、三箇接近せる者を三重星と云ふ。

たち-ゆき　立行（名）たちゆくこと。

たち-ゆく　立行（自動四）一行く。萬二「あしびきのかた山きぎし立往むし、君におくれてうつしけめやも」二すぎゆく。歷。經過す。曾我五人兄第「立ち行く年も長月や、閏加はる祝ひ月」三生活の途立つ。くらしてゆく。

たち-よそふ　立裝（自動四）裝ふ。かざる。萬「やまぶきの立儀たる山しみづ、くみに行かめど道の知らなく」

たち-より　立寄（名）たちよること。

たちより-かう　立寄港（名）きかう（寄航港）に同じ。

たち-よる　立寄（自動四）一寄る。寄り來たる。竹取「年をへて浪たちよらぬ住よしの、まつかひもなしと聞くはまことか」二寄り添ふ。側に寄る。安康紀「おほまへをまへすくねがかなとかげ、かく多智瑜爾ね、あめたちやめむ」古今秋「わび人のわきて立ちよる木のもとは、たのむ蔭なくもみぢ散りけり」三途すがらおとづる。枕「下づかへどもある所にたちよりて」源帚木「年頃うれしくおもだたしきついでにのみ、たちより給ひしものを」四頼む。たよる。

（誹）立ち寄らば大木の蔭　同じく人にたよるならば、大家を頼むべきこと。吾吟我集「立ち寄らば大木の蔭と落ち椎の、かずを拾へる猿のかしこさ」

たちれる（自動四）獅蘇にて物にぢれる。

たち-れんげ　立蓮華（名）紋所の名。はす（蓮）に見よ。

たち-わうじやう　立往生（名）一立ちながら往生すること。立ちたるまま死ぬること。たちじに。大礒虎稚物語「忍辱・慈悲の衣川、立往生に立つ波は」二立ちたるまま偽すべき術のなきこと。

たち-わかる　立別（自動四）わかる。別かれて行く。別かれ去る。萬「武藏野のをぐきがぎし、多知和可禮いにしよひよりせろに逢はなふよ」竹取「つかはるる人も、年ごろならひてたちわかれなんことを」古今離「立ちわかれいなばの山の峰に生ふる、まつとし聞かば今かへりこん」

たち-わき　立涌（名）【中央に雲を描きたる雲立涌より起こりたる稱】織模樣の一種。二線相對し、中間はふくれて兩端の窄まりたるもの。雲立涌・龍鱗立涌等ありて、親王・攝關等の袍又は奴袴の織紋に用ふ。たてわき。たてわく。

たちわき-ぐも　立涌雲（名）くもたちわき（雲立涌）に同じ。

たち-わたる　立渡（自動四）一面に立ち覆ふ。遍く及ぶ。記「さゐ川よ雲多知和多理、うね び山この葉さやぎぬ風吹かむとす」萬「大野山きり多知和多流わがなげく、おきその風に霧多知和多流わがなげく」

たち-わづらふ　立煩（自動四）立ち居て困却す。大和物語「かつらの御子の御もとに、よしたねがきたりけるを、母御息所ききつけ給ひて、門をさせ給ひければ、夜一夜たちわづらひて歸るとて」同「逢ふ事の形見に植うるなよ竹の、立ち煩ふと聞くぞ悲しき」

たち-わる　裁割（他動四）裁ちてわる。きりて分け放す。きりさく。

たちね　立居（名）一立ちゐること。立ちて居ること。二起ちたり居たりすること。起ち又居ること。萬「立座わざも知らえず思へども、妹に告げねば閑使もこず」古今雜三「秋霧のはるる時なき心には、立ゐの空もおもほえなくに」源夕顏「立ち居のけはひたへがたげに行ふ」

たちね　そぶり　立居素振　立ち居と素振と。立居振舞。卯月潤色「起ち居素振りに氣を附けても、かう閻閻とは死なせまじ」

たちね　ふるまひ　立居振舞　立居振舞と。起居と動作と。舉動。たちふるまひ。

たちねる　立居（自動上）立ちて居る。立ちてあり。竹取「よごとを放ちて立ち居、泣く泣くよばひ給ふ事、千度ばかり申し給ふけにや」勢語「中空に立ちゐる雲のあともなく、身のはかなくもなりにけるかな」

たち-をどる　立踊（自動四）立ちてをどる。立ちて跳ねまはる。萬「立乎抒利（たてをどり）足すりさけび、ふしあふぎ胸うちなげき」

だ-ちん　駄賃（名）一駄荷の運賃。駄送の賃錢。徽古文書「乙巳年居川文書」路次駄賃定書」御當家令條「從江戸品川迄上下駄賃、荷物壹駄四拾五貫匁に付き京錢廿六文」二物を運搬したる報酬。主稅寮式「越前國陸路海路中略百石程駄賃米一斗升中略」

だ-ちん-うま　駄賃馬（名）駄賃をとりて物を運搬する馬。御當家令條「駄賃馬多く入り候時は、其の町より所所・在在へ雇ひ、荷物遲く無之樣に、風雨之時も可出事」夕顏阿波鳴渡「駄賃馬のやうに、しいしいとは不調法な」

（誹）駄賃馬に唐樣　釣合ひ惡しき譬へ。不相應なる譬へ。太平記忠臣講釋「其の許のやうな無鈍者に烏帽子裝束は、正

眞の駄賃馬に唐鞍置いたやうなもの」

だちん-せん　駄賃錢（名）駄途の賃錢。享保集成絲綸錄「品川より江戸迄駄賃錢、壹駄に付四十二文」

だちん-とり　駄賃取（名）駄賃をとること。又、其の人。うまかし。

たちん-ばう　立坊（名）路傍に立ち居て、車のあとおしなどに雇はるる下等の勞働者。

たつ　立（名）和船の帆柵の名所。

たつ　龍（名）一想像上の動物。體は大蛇に似て、背に八十一の鱗あり、四足に各五本の指、頭には二本の角を有し、面長く耳ありて、口邊に長き鬚を具ふ。水に潛みて空に翔け り、神靈にして能く雲雨を起こすといふ。りゆう。神代紀「龍」竹取「この國の海山より、たつはおりのぼるものなり」和名「龍太都四足五采 蓋有神靈也」鮫「龍太都」二いかのぼり（凧）をいふ。西國の方言。

たつ　のぼりたつ　龍蹴頭　くじのふれ（孔子倒）に同じ。くじ（孔子）の條を見よ。

たつ　の　みかほ　龍御顏　（龍顏の字の直譯）天子の御顏。永久百首「あはれわが君ましし時、たつのみかほに近づきて、照る日の光り身を照らし」長秋詠藻「初めて君がみよにこそ、雲のかけはし蹈み通ひ、たつのみかほに近づきて」

たつ　の　みやこ　りゆうぐう（龍宮）に同じ。謠盡「わたつみの底ともいさや白波の、龍の都を出づるなり」

（誹）龍の頷の珠を取る　冒險の所爲に譬ふ。莊子列禦「千金之珠必在九重之淵、而驪龍頷下、子能得珠者、必遭其睡也」

たつ　辰（名）（龍の義）一支干の名。じぶにし（十二支）を見よ。枕「たつの日のあをずりのからぎぬ・かざみをきせ給へり」二方角の名。はうゐ（方位）を見よ。神武紀「東南」三時の名。とき（時）を見よ。竹取「海にただよひて、五百日といふ辰の時ばかりに」四紋所の名。

（誹）辰にまいて巳にこぼす　龍が辰の日に水を卷きあげて、巳の日に雨を降らす。

たつ　立（自動四）一眞直に竪になる。丈高く眞直になる。記「燃ゆる火のほ中に多知てて問ひし君はも」同「渡りせに多豆流杵弓まゆみ」萬「立てるすべのたどきも今はなし、いもにあはずて月の へぬれば」二坐れるより起き く。起きあがる。起きてあり。枕「驗者中略よみこうじて更につかず、たちねとて、ずず取りかへしてあれど」狂言「立って見よう、手を取ってくれ」三植ゑてあり。生ひてあり。神代紀「門前所植」湯津杜木」萬「末立てあら山みちを、岩が根のしもとおしなべ」古今春上「そこにたてりける梅の花を折りてよめる」四倚へて成る。組みたてらる。設けらる。「門がたつ」「寺がたつ」五剝さる。突きたつ。「とげがたつ」「矢がたつ」六上方へおきあがる。そばだつ。「毛がたつ」枕「うるはしき奚もたちん人も、皆たち上がりぬべき心地ぞする」永久百首「琴のねの琴柱にむせぶ夕されば、氣もいよだちぬ、そぞろ寒さに」七盛きてあり。停まる。枕「その始めよりやがてはつる日まで、立てる車のありけるが」八あがる。のぼる。記「や雲多都いづもやへ垣つまごみに、八重垣つくる其の八重垣を」萬「雄氣立ありそにはあれど、行く水の過ぎにし妹がかたみとぞこし」古今春上「山櫻わが見にくれば春霞、峰にもをにもたちかくしつつ」九勝ち出づ。おこる。

記「海水乃都夫多都時」萬「天の河いと川波は多多ねども、さもらひがたし近き此の瀨を」勢語「波のいと占くたつを見て」十いきほひづく。盛す。「人氣がたつ」狂言「何と腹の立つ事ではないか」俳諧新選「立つ腹をおきへて居わる夏書かな」十一高くひびく。聞こゆ。「聲がたつ」萬「堀江こぐ伊豆手の船のかぢつくめ、音しば多知ぬ、みをはやみかも」十二あらはになる。いちじるしくなる。人に知れわたる。「目にたつ」萬「吾が名は千名の五百名に立てぬとも、君が名立てば惜しみこそ泣け」同「君に我が名はすでに多都田山、たえたる戀のしげきころかも」十三位に即かせらる。位に備はる。榮華物語「かくてみかど・東宮たたせ給ひぬれば中略梅壺女御后にたち給ふ」十四居る。就く。くらゐす。古今「人丸は赤人が上にたたんことかたく、赤人は人丸が下にたたんことかたくなんありける」十五用ひになる。使用に堪ふ。「役にたつ」「用にたつ」徒然草「よき細工は少し鈍き刀をつかふといふ、妙觀が刀はいたくたたず」十六始まる。開く。おこる。「市がたつ」十七認になる。定まる。全くなる。濟む。確定す。「證據がたつ」「身がたつ」「規則がたつ」十八旅に出づ。かど出す。發足す。記「なにはの崎よ出で多知て、わが國みれば」萬「さきもりに多知し朝けのかなとでに、たばなれ惜しみ泣きし子らはも」勢語「明けば、尾張國へたちなんとすれば」十九退き去る。避け出づ。まかる。退出す。「席を立つ」神武紀「鳥卽避去」源野鶴「みなたち給ひぬ」同「承りてたちぬ」廿飛び出づ。飛び去る。萬「山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をかも一人我寢む」廿一支干の名。じぶにし（十二支）を見よ。枕「たつ波のしげき木の間よ多都鳥の、めゆかなを見む、さねざらなくに」廿二月日過ぐ。經過す。萬「君を思ひあが戀ひまくは、あらたまの多都月ごとによくる日もあらじ」陽成院歌合「もみぢばの錦と見ゆる秋なれば、たつを惜しとや鹿の鳴くらん」廿三來たる。到る。萬「卯の花のさく月多豆ばば」同「あらたまの年行きかへり春多多ば、まづ我が宿に鶯は鳴け」古今秋「秋立ちける日よめる」廿四閉されてあり。しまる。「戶がたつ」「屏風がたつ」「几帳がたつ」廿五燃えてなくなる。もえきる。「油がたつ」若風俗「まことを語る夜は明けやすく、長蠟燭のたつ事早く」廿六沸く。たぎる。「湯がたつ」

「風呂がたつ」

たたん　つき　來るべき月。來月。後撰三「やんごとなき事によりて遠き所にまかりて、たたん月ばかりになんまかり歸るべきといひて」

たち　と　たつ　立立　立つを强めていふ語。たちにたつ。盛んに立つ。後撰雜三「かざすとも立ちと立ちなん無き名をば、ことなし草のかひやなからん」

たち　は　のぼらず　不立上　高くはあがらず。たちあがらず。萬「しかのあまの無燒く烟風をいたみ、立者不上山にたなびく」

たつ　せ　が　ない　立瀨無　自分の立ち場が無い。

（誹）たたずも矢壓　大條に同じ。毛吹草「たたずもや矢壓」

（誹）たたぬと矢壓　矢は立たずとも矢壓は放て。跡追天滿天神「春や又たたねど矢壓弓始め」

（誹）立って居るものは鯛でも使へ　坐して居るものよりは、何人にても傍に立ち居るものを使用すべし。

(諺)立つより返事　人に呼びかけられる時は、立ち上がるより先づ返事せよといふこと。

(諺)立てば歩めの親心　子の成長を待つ親の切なる心。川柳「立てば歩めが驅け出して親案じ」

たつ　立　(他動ナ)　一竪に眞直にす。丈高く竪に据う。記「その鉾、うすに多豆(タヅ)て」神代紀「拔二十握劍一倒植(タテ)於地」萬「しただみを中巻たかつきに盛り、机に立(タテ)て母にまつりつや」二偃(フ)せるものをおこす。倒れたるものを起きあがらす。三構へて作る。組みたてて作りあぐ。築く。設く。萬「橘のした照る庭に殿多豆(タテ)て、さかみつきいます吾が大君かも」源「ことにたてられた御堂の」夫木「おのづから朽ち殘りたる門柱、わが家いかでたてなほさまし」造記四矢らす。設くす。かどをつく。「鋸の目をたつ」五刺す。突きたてる。「とげをたつ」狂言「針中間人間さへ立てまする」六上方へおきあがらす。そばだてる。「耳をたつ」「角(ツノ)をたつ」祝詞式大嘗「高天原に耳振立(タテ)、聞物止馬率立(タテ)」出雲國造神賀詞「振立(タテ)事考耳韓彌高聞」七停む。置く。枕「知足院などの前に、車をたてれば」平治「馬の足を立てかねて」八揚ぐ。のぼす。「鷹埃をたつ」萬「かまどには烟吹き多豆(タテ)ず」狂言「額に四海の波立て、白髮たる有様を見て」九いきほひづかしむ。激す。「人氣をたつ」十高く擧かす。「聲をたつ」新六帖「みかり野に草とぶ犬の立ちかへり、たつるきぎすの羽音かなしも」十一押し通す。たて通す。源「たのむかげどもに別かれぬるのち、心をたてて世の中にすぐさんこともと」夫木「いざさらば茂り生ひたるとがの木の、とがとがしきをたてて過ごさん」十二あらはす。いちじるくす。人に知れしむ。萬「ますらをは名を上(タテ)べし、後の世に聞きつぐ人も語りつぐがね」十三位に即かす。位に備はらす。十四就かす。居らす。十五用ふ。つかふ。使用す。「用にたつ」「役にたつ」十六差し出す。辨償す。丹波與作「未進米、此の六日の吉書に立てねば、もとの水牢」曾根崎心中「遣らぬからは金を立て、四月七日までにきっと立て商ひの勘定せよ」十七始む。開く。おとす。勢語「顧たてたり」源「狂言鶯「新市を立てうと存ずる」」十八億にす。定む。全くす。確定す。「證據を立つ」「身をたつ」「志をたつ」「規則を立つ」「義理をたつ」仁德紀「うま人の多蒐屢(タテ)ことたて、うさゆづる鬚ゆまつがむにならべてもがも」一代男「ひとりは男分に世間を立て、其の身はいたづらを立て」十九出で往かしむ。發足せしむ。萬「赤駒が門出をしつつ、出でがてにせしを見多馬(タテ)し家の子らはも」同「ますらたけををさきに多豆(タテ)」廿遣はす。派遣す。さしたつ。「使を立つ」廿一退き去らしむ。追ひ立つ。遣てる。萬「鷹中巻朝かりにほつ鳥多底(タテ)、夕かりに千鳥ふみ多底(タテ)」宇治拾遺「おのれたてたてとて追ひたてければ、たつままに」廿二經過せしむ。過ごさす。萬代「三五月の頃いひわたりける男に、この月をたてて、といひつかはすとて」廿三閉ぢつづ。ともとぢたるを、いづくゆか妹が入り來ていめに見えつる」枕「あけて出でぬる所たてぬ人、いとにくし」廿四沸かす。「風呂をたつ」紫金和歌草「夕烟民のかまどにたつる湯の、かけても離れか身を斬るらん」廿五湯にかきまぜて調ふ。點ず。運歩色葉「調(タツ)醫茶」狂言「鶯「馬茶は亭主の役ぢやによって、某が立つるであらう」廿六節詞に添へて語意を强む。萬「ますらをの呼び多天(タテ)しかば、さを鹿のむな分けゆかむ秋の萩原」竹取「などか翁の手におほしたてたらんものを、心にまかせざらん」枕「さうぞきたてつれば」

たつ　裁　(他動ナ)　切り放す。切り分く。切る。神代紀「齋鏡(タテ)項端」萬「夏蔭のねやの下にきぬ裁(タテ)わぎも、裏まけて吾がため裁(タテ)ば、ややねほにに裁(タテ)」

たつ　絶　(他動ナ)　一とどむ。やむ。つづけず。「酒を絶つ」「食を絶つ」萬「人の子はおやの名絶(タテ)ず、大君にまつろふものと」後拾遺「さびしさに烟をだにもたたじとや、柴折りくぶる冬の山里」二緣をきる。關係を止む。「交際をたつ」平家十二「小世にたたぬ身の習ひとて、浮きふししげき竹柱」三終はらす。とぼす。つくす。「命をたつ」四遮る。隔つ。「糧道をたつ」

たつ　奉　(他動ナ)　たてまつる。ささぐ。千五百番歌合「九重に今日たてそむる氷とそ、風にも溶けぬためしなりけれ」六百番歌合「松が崎たえぬひむろにすべらぎの、千代のためしと今日ぞたてつる」出觀集「かがり舟いづれの神にへたてて、みてぐら島を漕ぎまはるらん」

たつ　田鶴　(名)　(動)つる(鶴)の異名。萬「やまと撫ひいのねらえぬに、心なく此の洲の浦に汐みちくればかたをなみ、葦邊をさして多頭(タヅ)鳴きわたる」和名「唐韵云、鶴(鶴大如鶴非鶴島、鶴別名也)」

たつ　蓼　(名)　【植】たで(蓼)の異名。字鏡「蓼(太豆)」

たつ　(名)　【植】そくづ(蒴藋)の異名。

たつ　啄長魚　(名)　【動】魚類中、硬骨類の一種。體の長さ二三尺。頗るさよりに似て兩顎長く突出し、これに細齒を生ず。背部藍色にして、腹部に至るに從ひて銀白色となる。我が國、近海に產す。

たつ　獺　(名)　【動】かはをそ(川獺)に同じ。

(諺)獺魚を祭る　獺祭(ダツサイ)を見よ。二下文の李商隱の故事より、川獺の祭の時に陳ぬる魚の如く、多くの書物を散亂することにいふ。談苑「李商隱偽文、多簡閲書册、左右鱗次、號獺祭魚」

だつ　(自動ナ)　他語につきて、めくらの如くあり等の意を表はす。枕「紫だちたる雲の細くたなびきたる」同「やすちかの宰相なども、若やぎだちて」源「ゐなか家だつ柴垣して」同「ただ人だちて、心やすくもてなし給へるさま」

たつ-い　達意　自己の意思を十分に述ぶること。自分の意思を人の了解するやうに述ぶること。史記「孔子曰、六藝於治一也。禮以節人、樂以發和、書以道事、詩以達意、易以神化、春秋以道義」

たつ-いか　脫衣　衣服をぬぐこと。

たつ-いか　(名)　【動】するめいか(鯛烏賊)の異名。

たつ-いん　捺印　なっいん(捺印)に同じ。

たつ-うま　立馬　(名)　あがりうま(脫馬)に同じ。

だつ-え　脫衣　一だつい(脫衣)に同じ。二江戸時代、僧尼に科せし刑。僧籍を除くもの。科條類典「下四破戒之僧仕置、破戒一通り之者は、脫衣、追放又は遠島被二仰附一候而も、差し而御仕置のゆるみに相成り候筋も無御座候」御仕置例類集「大番等御立法、嘉永元年付一作、不埒に付、脫衣重追放」

だつ-えい　脫穎　(名)　えいだつ(穎脫)に同じ。李白詩「毛君能脫穎、二國其同盟」

だつ-えい　脫營　營所をぬけ出でて逃ぐること。

たつ-えいさう　竪詠草　(名)　たてえいさう(竪詠草)の訛り。(竪詠草名)

だつえい-へい　脫營兵　(名)　脫營したる兵士。

だつえ-は　奪衣婆　(名)　佛語。三途川(サンズノカハ)の岸の衣領樹(エリヤウジユ)の下にあり、亡者の著衣を剝ぎ取りて樹上の懸衣翁(ケンエオウ)に渡すといふ老嫗の鬼。懸衣嫗。五十年忌歌念佛「衣類引き出し取り散らすは、三途川の奪衣婆の苛責もかくやと哀れなり」十王經「葬頭河曲有二奪衣婆一、脫二亡人衣一」

たつか　手束　(名)　手に握り持つこと。

たつかのゆみ　手束弓　手束弓(たつかゆみ)に同じ。散木集「引きながすたつかの弓の矢をはやみ、ともねにまとのなりかはすかな」夫木「わかれにしたつかの弓の白鳥を、きのかはゆすり懸ひぬ日ぞなき」

たつ-が　手束索餅　(名)　古貫、菓子の一種。索餅(サクベイ)の類。大膳職式「手束索餅祈、小麥十七斛七斗中粉米五石三斗一升、紀伊麗八斗九升、醬・味醬各一斛四斗二升六合、酢七斗一升二合、薪日別卅斤」和名「手束索餅(タツカノサクベイ)」

たつが　方便　(名)　たづき(方便)に同じ。

だつ-から　脫稿　草稿の出來上がりたること。

たつ-がしら　龍頭　(名)　一龍頭の形したるもの。兜の前立物、又は鞏(ツヅミ)の旗頭などにつく。庭訓往來「星白・龍頭・四方白甲、各一劍」源氏烏帽子折「黑鐵の五枚兜、鍬形うって龍頭、鍾の付いたる烏帽子が所望ぞ」二たつのくち(龍口)に同じ。

たつがしらのかぶと　龍頭冑　(名)　紋より八幡座にかけて龍の頭をつけたる兜。中世保元義經記「爲朝は白地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧、龍頭の兜、長覆輪の太刀はき」

たつがしら-かぶと　龍頭冑　(名)　紋所の名。りゆうづかぶと(龍頭甲)に同じ。

たつ-がた　龍形　龍像(名)　龍の形したるもの。

たつがたのおおがしらのはた　龍像幡　りゆうざうたちばん(龍像幡)に同じ。

たつがたのはた　龍像幡　前條に同じ。

たつか-づゑ　手束杖　(名)　手に執り持つ杖。杖。萬「多都可豆恵(タツカヅエ)腰にたかねて」

たつが-なし　方便無　(形ク)　たよりなし。よるべなし。たづきなし。(鎌倉錄)續紀「天下遭撫惠備賜事理、聖君乃御代、富且可在物乎、拙ノ多豆何奈佐(タツガナサ)」脫時「顯宗紀示給聲歌、辱愧無余恭心」源「須磨「たづがなき雲井にひとりねをぞなく、翼ならべし友を慰ひつつ」

たづ-がね　鶴音　(名)　つるの鳴く聲。又、つる。記「あま飛ぶ鳥もつかひぞ、多豆賀泥(タヅガネ)の聞こえむ時は我が名とはさねし」萬「多頭我鞭(タヅガネ)のかなしく鳴けば、はろばろに家を思ひで」

たづかひ　田令　田使　(名)　屯田の收穫を掌る人。欽明紀「田令(タヅカヒ)田令(タヅカヒ)、陀羅(ダラ)・共(ムラ)」東大寺小檜文書「越前國田使解申勘受官物事」

たつ-がみ　立髮　(名)　たてがみ(鬣)に同じ。賴政集「おちかかる涙やしげき戀路ゆく、駒のたつがみ露ふしにけり」金槐集「建暦二年十二月雪のふり侍りける日中巻黑馬をたびけるを、又の日見けるにたつがみに紙をむすび」

たつか-ゆみ　手束弓　(名)　手に執れる弓。弓。萬「手束弓(タツカユミ)手に執り持ちて、朝かりに君はたたしぬ、たなくらの野に」壬二集「引きとめよ紀の關守がたつか弓、春の別れもたちやかへると」

だっ-かん　一脫簡　書中に篇・章の脫落、又は落丁のあること。劉子驗文「考學官所傳、經或脫簡、或糊閒」

だっ-かん　一脫艦　軍艦の乘組人の、脫走したること。

だっ-かん　一脫監　囚人の監獄をぬけ出づること。脫獄。明律「凡犯罪脫監、越獄加二等」

だっかん-にん　一脫監人　(名)　脫監せる人。脫獄人。

たつさ　鐇　(名)　抽人の用ふる刃の廣き斧。字鏡「鐇(太豆)和名鐇(タツサ)廣刃斧也」著聞「男の肩ぬぎてたつさ振りかかげて、大木をきりたるあり」

たつ-さ　立木　(名)　一たちき(立木)に同じ。新古今「ふるばたのそばのたつきにゐる鳰の、友よぶ聲のすごき夕ぐれ」拾玉「かた岡のしづがたつ木にしばしゐて、谷より傳ふ鶯の聲」二和船の名所。艫にある門をおほたっといひ、其の上の横木をかさぎ、或ひはようへといひ、人立の中に立てる門をなかたつ、艫の左右の隅に立てるをすみたつ、其の中立(ナカタツ)と隅立(スミタツ)との間の笠木(カサギ)の上に立てる小さきものを小立(コタツ)といふ。以上大立・中立・隅立・小立を總稱して立木(タツキ)といひ、又、其の板を四間板(シケイバ)といふ。とりゐたつ。

たづさ　方便　(名)　たよりよるべ。たのみ。よすが。たどき。たづが。手段。萬「梓弓末の多頭吉(タヅキ)は知らねども、心は君によりにしものを」同「無ふといふはえも名づけたり、いふすべの多豆伎(タヅキ)もなきは吾が身なりけり」

だっ-さう　一脫臼　關節の骨などのくひ違ふこと。

たづさなげ　方便無氣　(副)　たづきなきさま。たづきなささう。源「夢「かくいとたづきなげなる御有樣を見奉るに」

たづさなさ　方便無　(名)　たづきなき度合。たづきなきさま。源「見し世の名殘なく人人さへかれなば、たづきなさもまさりぬべくなん」

たづさ-なし　方便無　(形ク)　たよりなくあり、よるべなし。たのみなし。源夕顏「此の人のたづきなしと思ひたるを、もてなし助けつつ」

たづさ-りう　田付流　(名)　田付景澄の創めたる砲術の一派。

だっ-さやく　一脫却　一ぬぎはなつこと。すてさること。二ぬけ出づること。「風塵を脫却す」

だっく　一脫句　(名)　脫け落ちたる句。

たづくり　田作　(名)　一田を作ること。又、その人。二田を作る肥料とすることよりいふ。(醫)「素乾しにしたるひしこ。ごまめ。御伽草子「たづくりに、にしん。から鮭などを、朝夕の忝じきには如何」

たづくり　手作　(名)　手製の布。一說、一種の布の名と。夫木「横の島さらしかけたる手作りに、見えまがふまで驚ぞむれゐる」

だっくり-ぼっくり　(名、副)　道などの凸凹なること。杷狩劍本地「二條川原は石高く、だっくりぼっくり曲り道」

たづくる　手作　(他動ナ)　一手にて作る。二たは接頭)　つくろふ。裝ふ。梟

極紀「あよひ拖豆矩梨（ヤウヅ）、こしつくらふも」萬廿「若草のあゆひ多豆久利（ヤウヅ）、むら鳥の朝たちいなば」

だっくわ 一脱化 一もぬけとなりて形をかふること。二或る物の窟匠を探りて、其の形式のみをかふること。

たっくわん 一達官 （名） 直き官職。高官。禮記「達官謂國之卿士大夫被君命者也」

たっくわん 一達観 一廣く見渡すこと。書經「達觀于新邑營」二一部に執著せずして、全局を觀察すること。

だっくわん 一奪還 うばひかへすこと。

たつげ 鐙 （名） たつき（鐙）に同じ。

だっけ （句） 他の語に接きて過去の事を思ひ出でて心附きたる時などにいふ語。にてありしよ。傾城賢二筋道「其の樣に餘がるものを、便便と來たは、おれが罪だつけ」

たっけん 一達見 廣く事情に通達したる見識。すぐれたる見識。晉書「充雅量弘高、達見明遠」

だっけん 一脱劍 佩びたる劍をとき去ること。賈至詩「脱劍升明堂、郁郁被慶雲」

だっこ （名） 人に抱かるるをいふ、幼兒の語。七偏人「坊はお白湯ちやんと抱子（ッコ）ちて往きたい」

だつ-ご 一脱語 （名） 脱落したる言語。ぬけたることば。

だつ-ご 一脱誤 文字などのぬけたることとあやまりたることと。後漢書「蜀齊脱誤、是正文字」同「寫物有相類、事容脱誤、幸勞見顧、何爲謝之」

だっ-こつ 一脱肛 【醫】肛門より赤き粘膜の外部に脱出したるもの。多くは排便の際に起こるも、又、歩行によることあり。

たつさはり 携 （名） たづさはること。

たつさはる 携 （自動） たづさふ（携）に同じ。萬「よちこらと手多豆佐波利（ヤウヅ）て遊びけむ」同十「思ふどち馬うちむれて多豆佐波理（ヤウヅ）、いでたち見れば」散木集「此の事にたづさはれる人を、其のむしろに召してもてはやさせ給ひ」平家「弓箭に携はらん程の者の輩には、最もかうこそ在らまほしけれ」

たづさはる 携 （他動） たづさふ（携）に同じ。萬「夕づつのゆふべになれば、いざねよと手を多豆佐波里（ヤウヅ）」

たづさふ 携 （自動） 一互ひに手を執る。連れだつ。相ともなふ。萬「人もなき國もあらぬか、わきもこと携（ヤウヅ）行きてたぐひてをらむ」六帖「雨ふりて道もあしきに鳥の、たづさひ來るはめぐりやはあらぬ」二かかはる。かかりあふ。關係す。建久六年民部卿歌合「ただ此の道にたづさひて、あらたまの年つもれるといふばかりに」新葉集「和歌の浦の道にたづさひては、七十のしほにも濡ちぬる上」

たづさふ 携 （他動） 一手に執り持つ。提ぐ。もつ。「杖を携ふ」「一瓢を携ふ」顯宗紀「相抱（ヤウヅ）之涕泣」二引き連れて行く。伴ひ行く。

たづさへる 携 （他動） 前條の口語。

だっさん-さよう 一脱酸作用 （名） 【化】酸素を含める化合物が、化學變化によりて其の酸素の一部若しくは全部を失ふ作用。

たっし 達 （名） 一官府よりの通知。二廳の内部又は附屬の諸官廳等に對して發せし命令。現今の訓令に該當す。

だっし 一脱屣 （下文の孟子の故事より出づ。だつ（脱）はぬぐ、し（屣）は履にて、敝履を脱ぐ如く愛著の念なき義）天子の位を降（オリ）り給ふこと。三槐記（治承四年上皇御脱屣之後、始被參七瀬御祓」東鑑「後鳥羽院中略建久九年正月十一日御脱屣」孟子「堯視天下、猶棄敝屣」淮南子「堯年衰志閑、舉天下而傳之舜、猶却行而脱屣」

だっし 一脱脂 脂をねぎ去ること。

だつ-じ 一脱字 （名） ぬけじ。落字。蘇軾詩「脱字欲補知無緣」

たっし-がき 達書 （名） たっしをかきたる文書。ふれがき。慣習例「諸向より達書」

たっし-き 一達識 （名） たっけん（達見）に同じ。北史「高情達識、開一遺滯累」福融文「僕毎覽此、喜其風旨、重其達識」

たっし-ぶみ 達文 （名） たっしがきの文書。

たつ-じま 縦縞 （名） たてじま（縦縞）に同じ。一代女「たつじまの布子に、鈔無しの脇指」

だっしめん 一脱脂綿 （名） 脱脂したる綿。外科療治などに用ふ。

たっしもの 達物 （名） たっしをなしたる物事。代官觸留「御觸事、其の外都而御達物之儀に付、奉行衆より之御廻狀」

たっしや 一達者 一物事に熟達したる者。達人。東鑑「治承四年十二月廿八日、爲弓馬達者之士、臨職場廻智謀勝人」庭訓往來「正月「龜挽達者」二歩行に勝ぐれたること。健歩。健足。三身體のすこやかなること。壯健。ぢやうぶ。狂言鳥目比「達者な者であったが、何としてむつけた事ぢや知らぬ」俳家奇人談「蚊の脚。達者に見ゆるる夏の中」回巡かに巧みなること。遲滯なく事をなすこと。

（諺）達者過を免はず 達人は何事にも過ちを感ず。和漢古諺「達者過を緣はず」

だっし-ゃ 一脱社 （自動） たいしや（退社）に同じ。

だつ-じゃう 一奪情 喪中にある人に除服・出仕を命ずること。通鑑書「起復起之於苫塊之中、而復其官職、也、亦謂之奪情」

だつじゃう じゃうく 〔奪情從公〕〔情を奪ひて公務に從事せしむる義〕喪中に、除服出仕を命ずること。玉葉「寿永二年十三月廿日「奪情從公之聚、指何人哉」

だつじゃう ふくにん 〔奪情復任〕喪に遭ひて解任しにる者に、除服・復任を喪中に命ずること。式部省式「凡奪情復任之聚、職上日滿、隙間任在奏、隙文一日之後、不得更給」

だつ-じゃう 一奪攘 うばひぬすむこと。陰書論語「逆復奪攘琛璧」遺絶往來」

たっしゃ-づくり 達者作 （名） 達者に生まれついてあること。からだの作りのすこやかなること。達者なる體格。平家女護島「腰骨太い達者づくり」

だっしゅ 一奪取 うばひとること。唐書「奪取猜遇判之」

だっしゅつ 一脱出 ぬけいづること。史記「超人多爲張耳陳餘耳目者、以故得脱出」

たつ-じん 一達人 （名） 一學問・技藝の奥義に通達したる人。川中島合戰「古今獨歩の弓馬の達人」二廣く道理に通達したる人。徒然草「達人の人を見る眼は、少しもあやまる所あるべからず」左傳「孔丘二子」賈誼文「達人大觀兮、無物不可」

たっす 塔主 （名） 佛語。たっちゆう。塔頭（ヅ）を見よ。尺素往來「塔（ヅ）主」運歩色葉「塔主（ヅ）」薩涼軒日錄「文明十七年、廣照國師年譜「中略應永元年申戌九月末爲崇藩塔主」同三年丙子崇壽造功畢、由是觀之、應永二年乙亥勝定國師爲崇藩塔主決矣」

たっす 達 （自動） 一及ぶ。いたる。とどく。書經「馬貢「浮于濟漯、達于河」」二深く通ず。遍く知り及ぶ。狂言「鳥「某ほど算の達したる者は御座るまい程に」三官位高くなる。史記「達視其所不爲」

たっす 達 （他動） 一とどく。およぼす。史記「太史公自序「詩以達意」同「孝文本紀「自於民之德薄而不能遠達也」」二過ぐ告げ知らす。廣く通宵す。

だっす 脱 （自動） 一ぬけいづ。ぬけはなる。ぬく。「皮脱す」二逃れ出づ。免る。史記「魯周公世家「桓子詐而得脱」漢書「高五王「自以爲不得脱長安」」三漏れ落つ。ぬく。

だっす 脱 （他動） 一ぬぐ。解き放つ。國語「脱衣就功」陸游詩「新年脱帽始微霜」二漏らす。おとす。ぬかす。

だっすゐ-さい 一脱水劑 （名） 【化】脱水作用をなす藥品。例へば硫酸・鹽化かるしうむ・無水燐酸の類。

だっすゐ-さよう 一脱水作用 （名） 【化】物質の含有する水分を除去する作用。結晶せる物の結晶水を除き、或ひは化合物の成分より水の原素を除去する類。

だつ-ぜい 一脱税 納稅者が不正に其の納稅をのがるること。營業稅法「第三十二」脱稅したる者は脱稅金額三倍の罰金又は科料に處す」

だつぜい-がく 一脱税額 （名） 脱稅せる稅金額。

だつぜい-しゃ 一脱税者 （名） 脱稅せる人。

だつぜい-だか 一脱税高 （名） だつぜいがく（脱稅額）に同じ。印紙稅法「第十一」脱稅高二十倍の科料」

だっ-せき 一脱籍 戸籍の中にぬけおちたること。戸籍よりのくこと。

だっ-せん 一脱船 船舶の乘組員が其の船舶より脱走すること。船員法「第三十二」海員か雇入期間中脱船したるとき」

だっ-せん 一脱線 一汽車・電車などの、線路より外れ出づること。二目的意外にそれたること。演說などの枝葉に走りたること。

だつ-ぜん 一脱然 （副） 悉くぬけ去るさまに、いふ語。公羊傳「隱公三年、樂正子春之視疾也、復加一飯、則脱然愈」

だった 一脱然 （名） 【醫】足趾が黑變して漸次脱落する病。徽毒に原因すといふ。老年に來たること多けれども、亦稀に見ることあり。病名彙解「脱疽（ヅ）。手足の指に生じ、甚だしきときは節より腐れ脱ける也」

だっ-そう 一脱走 一ぬけ出でて逃げ去ること。出奔。逃走。易林「三狸搏鼠、遭遇前後、死于城城、不得脱走」二仲間を脱すること。

だっそう-にん 一脱走人 （名） 脱走したる人。おちうど。

だつ-ぞく 一脱俗 俗氣を離れたること。凡庸より超越したること。幕府燕談錄「范文正嘗爲人作墓銘、以示尹師魯、師魯言其脱俗」

だつぞく-の-はん 脱粟飯 （名） 粉をとり去りたるばかりにて、精げざる粗飯。史記「平津侯弘爲人意忌、外寬內深、食一肉脱粟之飯」

だっそ-ちりめん （名） 經は木綿、緯は絹にて織りたる縮緬。

たった 立田 龍田 （名） 香の名。質は伽羅、香ほのかにして涼し。火末は蘭麝に似たり。名香目錄

たった （名） たつ（立）ことをいふ、幼兒の語。

たった 唯 （副） ただの音便。これのみ。こればかり。狂言「たった一摑みに摑み殺してやらうぞ」同「たった一矢で射てやらうぞ」

たった いま 唯今 ただいま（唯今）の音便。狂言「悔むなおのれ、たった今目にものの見せうぞ」吉野都女楠「たった今寂入りばな、今夜は歸って、翌日でも取ったがよい」

だった （自動） くたびれたるをいふ、薩摩國の方言。物類稱呼

だっ-たい 一脱退 脱ぬけ退くこと。或る關係より脱すること。民事訴訟法「第五十五條」「從參加人は訴訟より脱退したるとき」民法「第六百八」脱退したる組合員と他の組合員との間の計算は脱退の當時に於ける組合財産の狀況に從ひ之を爲すことを要す」

たつ-だう 一達道 （名） 人類一般に通じて行はるべき道德。中庸「天下達道五、所以行之者三。曰君臣也、父子也、夫婦也、昆弟也、朋友之交也。五者天下之達道也」

だっ-たう 一脱刀 佩びたる刀を脱くこと。又、帶刀を廢すること。仲間より脱け去ること。

だっ-たう 一脱黨 黨を脱すること。仲間より脱け去ること。

たった-がは 立田川 （名） 楓樣の名。古今集の秋下に、たつた川もみぢ亂れて流るめり、渡らば錦なかやたえなんとあるより出でたるもの。

たづたづ-し （形） たどたどしに同じ。萬「夕やみは路多豆多頭四（ヅヅ）、月待ちていませ吾がせこ其の間にも見む」同「たづが鳴き蘆べをさして飛びわたる、あな多頭多頭恐（ヅヅ）ひとりさぬれば」

たった-ひめ 立田姫 龍田姫 （名） 秋を司るといふ女神。古へ奈良の京の西方に立田山、東方に佐保山ありて東西相對するより、佐保を春を司る女神として對立せしめたるもの。又、立田山は紅葉の勝地なるより、此の女神の織り成せるものとせり。古今「秋下」立田姫たむくる神のあればこそ、秋の木の葉のぬさと散るらめ」貫之集「もみぢ葉のぬさとも散るか秋はつる、たつたひめこそかへるべらなれ」

たった-やま 龍田山 （枕） 龍田山のたつより、たつ又は、たちと重ねていひかく。萬「秋されば、かり飛び越ゆる龍田山

（ナリ）で、たちてもねても君をしぞ思ふ」

たっち （名） たつ（立）ことをいふ、幼兒の語。

たっち-もん 一達智門 （名） 大内裏の外郭にある十二門の一。大内裏の東面、東端の第二門なり。

だっ-ちゃう 一脱腸 【醫】腸管が腹腔内に突出すること。百日咳・便秘等によりて起こる。其の部に劇通を發し、縮少せざる時は危險なり。

たっ-ちゅう 一塔頭 （名） 一禪宗にて祖師、又は各派祖などの塔廟。又、其の院を掌る僧の稱。應仁記「武家、建仁寺の西來院は德本の塔頭なれば、此の寺に陰居せられけるを」鹿王院文書「光厳院御塔頭於天龍寺」述立聞事、尤て然存候」（醍醐寺節用）「塔頭タウ」 二禪宗以外にて、子院の内の大寺の稱。

たっちゅう-の-ばうず 塔頭坊主 佛語。禪家にて塔頭の主僧の稱。庭訓往來十月「禪家者中興塔頭坊主」

だっ-ぢん 一脱塵 俗塵を脱し避くること。世俗の煩果を避け逃ぐること。

たっ-つけ 裁著 （名） たちつけ（裁著）に同じ。

たっつけ-ばかま 裁著袴 （名） 前條に同じ。

たつつ-まひ 殊儛 （名） 上古の一種の舞。立ちながら、又、居ながら舞ふもの なり と。顯宗紀「天皇遂作殊舞（マヒ）」（日本古典文学大系本）

たっ-づみ 田鼓 （名） 腰に結びつけてうつ鼓。一説、手鼓なりと。宇津保（藤原忠実）「たつづみどもうちて、草かり笛ふく」榮華（藤原宝）「田つづみといふものは、例のつづみにも似ぬ音して、こほこほとぞ鳴らしいくめる」

たっ-て 達 （副） 強ひて。押して。是非とも。無理に。切に。曾我五人兄弟「說法の法文について、因果の道理に引きかけ、達って訴訟申すべし」平家女護島「一門達って諫め申せ、重盛一人言ふにもあらず」

たって は 達 達って詮義しては。出世景清「尤も尤も、たと（行方を知りつればとて、舅の訴人は致されまじ、達っては此方の不訓法」

だって （接） 然かあれど。されど。ではあれど。

だって-もん 談天門 （名） だんてんもん（談天門）に同じ。

だっ-と 一脱兎 （名） 脱けて逃げ出す兎。極めて迅速なる譬へ。史記田單「始如處女、適人開戶、後如脱兎、適不及距」

だっと の いきほひ 脱兎勢 脱兎の如く、極めて迅速なるさまにいふ語。

だづど （名） 【植】ちゃんばぎく（博落廻）の異名。

たっ-とく 一達德 （名） 人類一般に行はるべき德。中庸「知・仁・勇、天下之達德也」

たっ-とし 貴 （形） たふとし（貴）の音便。狂言（鬼瓦）「殺生する道具をば、此のたっとい愚僧が持たら管はない」同（花盗人）「たっとき御身とらせ給ふ」

（諺）貴い寺は門から 貴き寺は寺門に入るより已に尊崇の念を生ずること。外面を見て内部の狀態の察知せらるる譬へ。狂言（禪師）「參る程に建長寺で御座は、ああ貴い寺は門からと申すが、柱太な、よい普請でござる」浮世風呂「貴い寺は門からといふけれど、醫者さまばかりは見かけによらぬものよ」

たっ-とぶ 尊 （他動ハ四） たふとぶ（尊）の音便。

たっ-とむ 尊 （他動ハ四） たふとむ（尊）の音便。新永代藏「一錢を千兩に貴み、手近く仕末をよくして」

たつ-とり 立鳥 （名） 飛び出づる鳥。飛び去る鳥。吉野都女（天文五年）「明けぬ先より立つ鳥は、御厩つらを亂るなる隱し勢と心得」

（諺）立つ鳥あとを濁さず 注意深き者は起ち去りたる跡までも、見苦しからぬやうにふるまふ。綺留「下女も氣に入らぬ心を合點して中略たつ鳥跡を濁さず、盞洗うて水まで汲み入れて歸る」

（諺）立つ鳥の落つるやう 飛ぶ鳥の落つるやうに同じ。とぶとり（飛鳥）の條を見よ。

たつ-とりの 立鳥之 （枕） たつ鳥は群れてたつより、むれの約なるめにかけていふ。萬「を筑波の茂きこのまゆ多都登利能（タツトリノ）めゆかなを見む、さねざらなくに」

たつとり-の-からふね 龍鳥唐船 （名） りようとうげきしゆのふね（龍頭鷁首船）に同じ。りようとうげきしゆ（龍頭鷁首）の條を見よ。今鏡「たつとりのから舟池に浮かびて、水の上にこゑごゑしらべあひて、佛の御國うつし給へり」

たつな 手綱 （名） 一馬具。銜（ハミ）に結び附け、乘る人の手に執りて馬を御する綱。繩又は布を用ふ。其の質又は染色によりて唐絲手綱・繩手綱・紐手綱・絞手綱等の名あり。くつわづら。著聞十「おのが馬の手綱・おもがいをおしはづして、平類をうちてけり」盛衰記十八「不思議の法師の惡口かなとて、手綱を以て縛りて」勒。轡。 二鏡を著たる者の、烏帽子著けたる上に結ぶ鉢卷。貞曾我「十郎は白手綱を以てたぶさぎにかき」體源抄（義家朝臣の事）「第一手綱、第二小袖」 三ふとし（犢鼻褌）に同じ。室町時代より江戸幕府の始め頃用ひたる語。殿中日記（寛正六年八月十三日）「御風呂御成中略御湯かたびら、御たづな」守武千句「町へ出づるはいかめしく見ゆる句手綱をばかかず袴はほころびて」

たづな-ぞめ 手綱染 （名） 【馬の手綱に多くあるよりいふ】 だんだらぞめ（段段染）に同じ。

たつな み 龍波 （名） 紋所の名。門出八島（役所印紋）「澤瀉は小山の一類、龍波は小栗黨」

たつなみ-さう （名） 【植】屑形科、たつなみさう屬の多年生草本。莖の高さ一尺餘に達す。葉は對生、心臟形。春季、莖頂に近く青紫色又は白色の花を總狀花序に排列す。我が國、山野に自生す。こらしやうもんしなのきんちゃく。ひなめしやくし。

（うきみなつた）

たづぬ 尋 （他動ナ下二） 一先だちて行きたるものの跡をつけ行きて求む。さがし行く。萬「年のはに鮎し走らばさきた川、鵜八つかづけて河瀬多頭鵜（ウ）む」枕「驗者もとむるに、例あらで外にある、たづねありくほど、まち遠に久しきを」 二所在の分明ならぬものを探（サグ）り求む。さがす。搜索す。拾遺「おぼつかないづこなるらん蟲の音を、たづねば草の露や亂れん」源夕顏「此の扇のたづぬべき故ありて見ゆるを」 三事跡を遡り探る。事理を推し窮む。神代紀「原（ウバラ）其物根中略是吾物也」狹鏡「武きものの ふの起りをたづぬれば」原注 回問ひただす。聞きただす。質問す。源手習「御ありさまたづねとひ給ふに」同 五生「御調度どもも中略わざと其の人かの人にせさせ給へるもたづね聞きて」 四おとづ

る。とぶらふ。訪問す。夫木「嵐吹く月のあるじは我れひとり、花こそ宿と人もたづねれ」續後撰「ふみわけてさらにたづぬる人もなし、霜に朽ちぬる庭のもみぢ葉」

たづね 尋 （名） 尋ねること。おとづれ。質問。搜索。

たづね-あはす 尋合 （他動サ下） たづねて聞き合はす。問ひ合はす。

たづね-ありく 尋歩 （自動カ四） 尋ねて諸所を行く。さがし行く。枕「郭公の聲、たづねありかばやといふを聞きて」

たづね-あるく 尋歩 （自動カ四） 前條に同じ。

たづね-いだす 尋出 （他動サ四） さがしだす。たづねだす。

たづね-いづ 尋出 （他動ナ下二） 前條に同じ。蜻蛉日記「吹く風につけて物思ふあまのたく、しほの烟はたづねいでずや」源胡蝶「京になんあやしき所に、此の頃きてゐたりける尋ね出で給ひて」

たづね-いる 尋入 （自動ハ四） たづねて深く入る。わけ入りてたづぬ。千載春上「咲きぬやと知らぬ山路に尋ね入る、我れをば花のしをるなりけり」續千載冬「芳野山麓にふらぬ雪ならば、花かと見てや尋ねいらまし」

たづね-うしなふ 尋失 （他動ハ四） 尋ねて見失ふ。さがしなくす。新古今「ひとり具したりける同行をたづねうしなひて、もとの岩屋へかへるとて」

たづね-くらす 尋暮 （他動サ四） たづねて日を暮らす。金葉「今日もまた尋ねくらしつ時鳥、いかで聞くべき初音なるらん」

たづね-ごと 尋事 （名） 尋ねる事柄。問ひごと。質問。大鏡狂言綺語「思し召しよらざる尋ね事にて候へども」

たづね-しる 尋知 （他動ラ四） たづねて其の故を知る。問ひ聞きて了解す。源夕顏「猶いひよれ、たづねしらではさうざうしかりなん」

たづね-だす 尋出 （他動サ四） たづねいだす（尋出）に同じ。

たづね-とぶ 尋問 （他動ハ四） 問ひただす。問ひ聞く。源手習「御ありさまたづねとひ給ふに」

たづね-とる 尋取 （他動ラ四） さがして手に入る。源若菜「絶えねすぐせ淺からで、尼にもなさでたづねとりたらんも」同若菜「かの紫のゆかりたづねとり給へりし折り思し出づるに」

たづね-びと 尋人 （名） 其の行方をたづねさがす人。さがさるる人。

たづね-もの 尋物 （名） 一たづねさがす物品。 二前條に同じ。

たづねる 尋 （他動ナ下二） たづぬ（尋）の口語。大鏡狂言綺語「其の方の尋ねる都の膏藥煉でおりやるが」

たつの-いぐさ 龍膽草 （名） 【植】りんだう（龍膽）の異名。字鏡「龍膽（加豆乃久佐）」

たつの-いち 辰市 （名） 辰の日に、大和國添上郡に立つ市。拾遺「三「なき名のみたつの市とは騒げども、今また人をうるよしもなし」夫木「玉ぼこや多くの民のたつの市に、くるればかへるかずも見えけり」

たつの-うま 龍馬 （名） すぐれたる馬。千里の馬。りゆうめ。夫木「山たかみ石ふむ道のはるけさに、龍の馬をも今えてしがな」

たつ-の-おとしご 龍落子 （名） 【動】魚類中、硬骨類の一種。長さ一二寸乃至三四寸。體は硬き甲にて被はれ、甲は環節狀をなす。尾は細長くして鱗なく、他物に卷絡するを得べし。頭はやや馬に似たる外觀を具ふ。雄は腹部に袋あり、卵を此の中に孵化す。我が國、各地の近海に產す。うみうま。かいば。たつのおろしご。たつのこま。たつのすてご。みづちのこ。りゅうぐうのこま。

（たつのおとしご）

たつ-の-おろしご 龍落子 （名） 【動】前條に同じ。

たつの-さ 龍骨 （名） 【植】きささげ（梓）の異名。

たづの-さ （名） 【植】一たまつばき（女貞）の異名。和名抄「女貞、一名、冬青、太平御覽草木部引本草云女貞、一名、冬青」 二女貞。拾遺本草云女貞、一名、冬青、太平御覽草木部引本草云女貞、一名、冬青、太平御覽草木部引本草云女貞、一名、冬青、太平御覽草木部引

漢書「後王安得惶恐、走出門、脫帽抱馬足降」

たつはもの 田器 (名) 耕作の器具。

だっぱん 垂仁紀「黃牛負田器、將往田舍」 一脫藩 封建時代、武士が藩籍より脫して浪士となること。

たつび (名) 【動】たにし(田螺)の異名。和名抄「田中螺」

だっぴ 一脫皮 【動】蛇類・昆蟲類及び甲殼類の如き動物が生長する際に、古き表皮を脫ぎ捨て、新たなる表皮と交代する作用の稱。これ等にありては、一度生じたる外皮は體の肥大・生長に伴はざれば、之に應じたる新外皮と交代する必要あるに由る。脫皮の回數は各種動物により各異なるものとす。

たっぴつ 一達筆 一巧みに書くこと。能書。二勢能く書くこと。健筆。湖月抄「はしり書き、達筆に書く也」 (誹)達筆、筆を擇ばず 能書筆を擇ばずに同じ。のうしょ(能書)の條を見よ。

たっぷり (副) 一滿ち溢るる程。十分。澤山。井筒業平河内通「お與そひの中居が、いつよりおしろいたっぷりと塗り笠さげて跡につき」浮世風呂「男は頭へ青鬼を泥さつて、ちと否身たっぷり拵へ」 二餘裕の十分あるさまにいふ語。

たつぶり (名) 【動】かたつむり(蝸牛)の異名。

だっぶん 一達文 (名) 達者なる文。理義明白なる文。

だっぷん 一脫糞 大便をもらすこと。

だつぶん 一脫文 (名) 脫けたる文句。脫落したる字句。

たつべ 竹瓮 (名) 深き水底に沈めて魚を取る形丸き小籠。沈むときは口開き、引き上ぐる時は口閉づるやうに造れるもの。たつめ(蜆)ちんどう(河内)うへ(摂津)どう(武藤江戸)(新撰)

たつーべん 一達辯 辯舌の達者なること。よどみなき口上。

たつーほ 田坪 (名) 田地の坪數。運歩色葉「田坪」 **たっほほ** (名) 舞のふし。狂言笠「たっほほ、たっほほ、たっほほ、たっほほ」

たつーほり 立堀 (名) 山坂などにて、上より下へ縱に掘りたる堀。築城記「山城にはたつ堀可然候」

だつーま 一達摩 (名) 數珠に貫く大玉。大鉢「御ずずのいと異ありしなり。ちひさき柑子を大方の玉につらぬかせ給ひて、だつまには大柑子をしたる御ずずいと長く」孕常磐「大事の數珠(中略)でしとだつまは珊瑚樹ぞや」

だつーまき 龍卷 (名) 旋風、急激に水上に起こるとき、水の空中に捲き上げらるるもの。塵塚談「不忍池より天明年間龍卷ありけり(中略)虛空より黑雲下だり來れば、海中の潮水濫を逆に掛けし如く逆卷きのぼり、黑雲中に入る。其の雲の中に龍の形の如きもの見ゆると傳へ聞けり」

だつーまう 一脫毛 毛のぬけ落つること。又、其の毛。ぬけげ。

たつまつ-しまた 辰松島田 (名) 若き女の結髮の名。男子の辰松風に倣ひて、島田髷の根を高く結ひたるもの。享保頃流行せり。我衣「女の髮に辰松しまだは、享保中はやる」

(だましつまった)

たつまつ-ふう 辰松風 (名) 〔享保の頃、辰松八兵衛といふ人形つかひの結ひ始めたるよりいふ〕男の髮の結ひ方の名。元結をことごとしく長く卷きて、髷を高く月代の上に結ひたるもの。(宝暦以後)

たつ-まつり 辰祭 (名) 江戸時代、火災の厭勝なりとて、貴人の邸宅にて、正月初めの辰の日、辰の刻に辰の年の人をして、臺盞の屋棟に水を撒てかしめたる式。和訓栞

たつみ 巽 辰巳 (名) 方角の名。辰と巳との間。卽ち、東南の間。神武紀「東南(アタヒ)」古今雜下「わが庵は都のたつみしかぞ住む、よをうぢ山と人はいふなり」宇津保俊蔭「かの車、たつみのすみのからうん放ちて、寄せさせよ」

たづみ (名) ぶち(斑)をいふ、伊勢國の方言。和訓栞

たつみ-あがり 巽上 (名) 一言語・舉動の暴く鋭きさまにいふ語。ねたけだか。三代男「辰巳上がりの咄聲して」長町女腹切「花めがてて、西陣の九兵衛でござると、巽上(アガリ)に云ひければ」 二(植)はんごんさう(劉寄奴)の異名。

たつみ-がよひ 巽通 (名) 江戸時代、江戸深川の遊廓に通ふこと。

たつみ-ことば 巽言葉 (名) 江戸時代、江戸深川の遊廓の詞。

たつみ-ぶね 巽船 (名) 江戸時代、たつみがよひの船。

たつみん-せき 一脫民籍 (名) 其の國の臣民籍を脫すること。

たつめ 竹瓮 (名) たつべ(竹瓮)をいふ、近江國の方言。物類呼

たづら 田面 (名) 田のおもて。田のほとり。田園勢語「打ちわびて落穗拾ふと聞かませば、われも田づらにゆかまし物を」夫木「たづらなるわらやの軒のこもすだれ、これやあがたのしるしなるらん」

だづら 駄面 (名) つまらぬ面相。罵りていふ語。浮世床「あの駄面で懇も氣障だ」

だつ-らく 一脫落 ぬけ落つること。漏れおつること。「文字脫落」杜陽雜編「彫刻鬟鳳之狀、形似枯槁毛羽脫落」

たつり 一達理 道理に通達すること。聖德太子繪傳記「明心・達理の眼を閉ぢ、御衣を被いで座を組めば」

だつり 一脫離 ぬけはなるること。

だつりゃく 一奪掠 うばひかすむること。かすめとること。

だつりゃく 一奪略 うばひとること。かすめとること。

だつりゃく 一脫略 一ぬかしはぶくこと。のぞきはぶくこと。二うちすておくこと。晉書「脫略細行、不拘流俗之事」

だつろ 一脫路 (名) ぬけみち。にげみち。閒道。

だつろう 一脫漏 ぬけもること。「東鑑脫漏」裏松之文「志注裏書、然失在於略、時有所脫漏」杜甫詩「小魚脫漏不可紀、半死半生猶戰戰」

たつ-わら (名) 船の舳立(ヘタテ)の異名。船大工の語。たつわる。

たつ-わろ (名) 前條に同じ。

だつ-ね 一脫遺 ぬけおちること。ぬけ殘りたること。

たて 楯 干 (名) 一戰陣にて身を蔽ひ敵の矢丸を防ぐに用ふる具。又、僕伏にも用ふ。鐵製もあれど、多くは楯・榎の厚板にて作る。長さ四五尺、幅は二三尺、一枚なるもあり、四枚續きなるもあり。狹間あり。古製のものは長大にして、面に皮を縫ひ合はせて張るもあり。其の質・形狀又は用法によりて白楯・皮楯・鐵楯・大楯・小楯・箱楯・車楯・帖楯・屏風楯・鎭楯・持楯・塩塡、其の他種類多し。

記「あはしし少女、うしろ手は陀豆(タヅ)ろかも」神武紀「植盾(タテ)而禦雄誥」萬一「ますらをの柄の音すなり、もののふの大まへつ君楯(タテ)たつらしも」 二防ぎ護ること。又、其のもの。護衛。萬一「今日よりはかへりみなくて、おほ君のしこのみ多豆(タテ)と出でたつ、吾れは」

たて を つく 突楯 一楯をつき立つ。著聞「幕引きまはし、たてをつきて」いほぬし「神の戰ひしたる所とて、たてをついたるやうなるいはほどもあり」 二敵對す。はむかふ。對抗す。砂石集「末代は父子・兄弟・親類・骨肉、あだを結び、たてをつき、問註・對決し、境を論じ、盧分を諍ふ事、年にしたがひて世に多く聞こゆ」

たて を はぐ 矧楯 楯を作る。太平記「只今打ち立たんずる有様にて、楯をはがせ鎧を碼ぐ最中也」

たて を めんどりば につく 楯を重ね懸けて立て並ぶ。本平家「楯をめんどりばにつき並べて、源氏ここを寄せよやとぞ招きたる」

たて 館 (名) 一城の狹小なるもの。たち。甲陽軍鑑「信玄公御一代の内、甲州四郡の内に城郭を構へず、堀一重の御たてに四郡の座候」 二烟草の一種。上野國新田郡館村に產するもの。

たて 縱 竪 (名) 一上下の方向。又、其の距離。(横の對) 二南北。又、その距離。 三たていと(經絲)の略。萬八「經(タテ)もなく緯(ヨコ)も定めず、少女らが織る紅葉ばに霜なふりそね」新千載「秋の色に染むる紅葉やたてもなく、緯も定めぬ錦なるらん」

たて 立 (名) 一押し立てたる趣旨。 二たてぼし(立乾)の略。「其れをたてにとる」

たて 建 (名) 定期取引にて賣買の契約をなしたること。賣りの契約をなしたるを賣建、買ひの契約をなしたるを買建といふ。「株の賣建を踏み退き」

たて (名) 蓆席(ムシロ)にて作り、茶・綿などを入るる俵。和漢三才圖會「篩(音主)輔(音屯)俗云、太天、疑楯輔二字相似、故誤曰太天(歟)、未詳、字彙云、篩輔也、所以載盛米者也、或布袋之、故輔字从巾」

たて (名) 芝居にて、大勢を相手にして太刀打ちすること。修羅場。歌舞妓事始「(中略)大勢相手にして太刀打ちするをたてといひ、少しき事は立ち廻りといひ」浮世風呂「芝居事をすらあ、石段の立(タテ)は威勢が能いっちやあねえよ」殺陣。

たて 立 (接尾) 動詞に屬つきて名詞となり、其の事の未だ時を經ざるにいふ語。東海道名所記「近江なるいく野の村の茶屋みれば、まだ賣りもせぬ飴のねりたて」心中刃氷「朝日山鍛冶屋炭火のおこり立て」五十年忌歌念佛「心の錆びも荒砥の研ぎ立て」

たて 蓼 (名) 【植】一蓼科に屬する馬蓼(タデ)・毛蓼(タデ)・紅蓼(タデ)等の總稱。萬十「吾が宿の毛蓼(タデ)ふるから摘みはやし、實になるまでに君をし待たむ」類字鏡「蓼(本草)」 二蓼科 蓼屬の一年生草本。かはたでに似て莖・葉共に紫なるもの。我が國、各地に栽培す。あかづら。そばたで。

(誹)蓼食ふ蟲は辛きを知らず 次條に同じ。左思文「(中略)蟲之心辛。莊楚辭注曰、蓼蟲不知從乎葵蓼。王逸曰、蓼蟲處辛刺、食苦惡、不從葵蓼食甘美」白居易詩「蓼蟲避葵蓼、蓼蟲習苦不言非」

たて 立 (名) 一押し立てたる趣旨。同じからざる譬へ。菅原傳授手習鑑「藝喰ふ蟲も好好きと、あの和郎を弟子にしたり、代參におこしたりなさるる、菅丞相のお心が知りたい」

だて 伊達 (名) 〔物事を立て通さんとする意にて、立(タテ)を濁りたるものなりと。綺語抄一說、伊達政宗の部下が華美の裝ひをせしより起こると。和訓栞〕 一意氣を競ふこと。奢華をてらふこと。はでなる振舞をなすこと。いきなる風をなすこと。槍樓三才「さすがは茶人の妻、物數寄も好く、氣も伊達に」 二外見を飾ること。みえをはること。曾我五人兄弟「大罪人の隨獄人、此の裂裝は伊達に著るか、化粧に著るか」

(誹)だての薄著 だてのため、寒空にわざと薄著をなすこと。續山井「姫松のかたびら雪やだてうすぎ」

だて 立 (接尾) 他の語に屬つきて名詞となり、其のさまをなす意を表はす語。「男だて」「かしこだて」「かばひだて」無名抄「あなかしこ、歌よみだてし給ひそ、歌はよく心うべき道也」大鏡狂言舞「おのれの分で、古歌だてを言ひをる」甲陽軍鑑「未練なる大將は心せばく意地むさけれど、器用立をして」

たてあかし 立明 (名) 手に持ち擧げて、明かりを取るに用ふるもの。松明の類。たちあかし。炬火。和名十二、類、炬(太阿)東、薪灼之」江次第三、四「主殿寮入自(中略)濃口戸、奉仕立明」

たてあき 帶刀 (名) たちはき(帶刀)の音便。

たてあげ 立擧 (名) 大鎧の左の脇、屈繼(ケツ)の上部。わきいた。

たてあげ (名) 鞠の書の筒(ヅ)の部の稱。信言集「かもぐつ(鴨書)を見よ。

たてあつかり 立預 (名) 法會の時の使役に供せらるるもの。大童子之を勤む。

たてあぶ 立合 (名) 一たてあふこと。 二鐵山にて、鐵脈の稱。

たてあふ 立合 (自動) はりあふ。たてつく。抵抗す。保元「(中略)官軍(源義朝)、君に立て合ひ奉らんと御支度、以ての外の御誤りなり」著聞「汝われにたてあはん、心をさなき事ないひそ」

たてあみ 建網 立網 (名) 魚の來游すべき一定の水中に數設して魚を捕らふる網。曲網・垣網の類。

たてあみるねぎよげふ 建網類漁業 (名) 定置漁業の一。建網を用ひて漁業をすること。

たてあを 蓼藍 (名) 【植】あゐ(藍)の異名。和名「蓼藍(阿乎天)」

たてい 一佗傑 失意・困窮すること。東鑑「(廿五月七日)訴人者佗傑者也」盛衰記「(十七、廿五)かかる亂に遷幸・遷都、內裏造營、山海の財力の盡きぬるのみに非ず、人民の佗傑いくそばくぞ」屈原文「惟(中略)悒余佗傑兮」

たていし 立石 (名) 一据ゑ置きたる石。築き立てたる石。宇津保「(俊蔭)下、たて石どもはさまざまにて反り橋のこなたかなたにあり」源氏「木立・たて石・前栽などのありさま、えもいはぬ入江の水など」宇鏡「墓(ヒヤウヒヤウシ)」 二路程などの標(シルベ)に、路傍に立て置く碑石。

たていた 立板 (名) 一立てたる板。 二牛車の車箱の兩側の稱。此所に物見あるものと無きものとあり。物見あるものは物見下を下立板といふ。ぎっしゃ(牛車)を見よ。今昔「三人被振合て、或ひは立板に頭を打ち」室町殿車注文「牛部車、大將よりこれに乘る(中略)らのたて板の外は小八葉のあじろ也」 三縱の木目を其

のまま上下に通らしめたる板。（よこいたの對）

（謎）立板に水を流す　流れの早きこと。又、辯舌の滑滑と達者なるに譬ふ。盛衰記（廿三・平氏下）「流れの早き事、立板に水を懸くるに似たり」　狂言（末廣）「某が頼うだる者は、立板に水を流すやうに物をゆひつけられまする」

たていたづくり　楯板作　（名）　關船の制（ヤウ）の一種。垣（ヘイ）・櫓（ロ）の外に楯を設くるもの。

たてい-と　經絲　（名）　布帛を織るに緯（ヨコイト）絲を通して組織せしむるたての絲。即ち、織物の兩側にある耳と平行して並列せる絲。

だてい-ふく　伊達衣服　（名）　はでなる衣服。

たてい-り　立入　（名）　男としての義理又は意氣地を立て通すこと。又、その意氣。又、そのためになす方法・手段。浮世床（二）「あの野郎あ、達入りのねえ猿だぜ」

たてい-れ　立入　（名）　前條に同じ。浮世風呂（二）「今の若え者共が、達入れだの犬の糞だのと骨箱をたたくが」　浮世床（二）「それでも立て入れとなっては」

だて-てう　駝鳥　（名）　【動】鳥類中、走禽類の一種。體は鳥類中最も大にて、七八尺に達す。翼は發達せずして飛翔の用を爲さざれども、脚は大きくして强く、馬の如く疾走することを得、又、敵をよく蹴倒すに足る。趾は二箇又は三箇。亞非利加洲の沙漠に棲息す、砂中に穴を掘りて產卵し、夜間は抱卵すれども、日中は太陽の熱によりて溫む。卵及び肉は土人の食用となり、羽毛は甚だ美麗なれば、各國にて諸種の裝飾に供せらる。

たて-ぢう　立臼　（名）　地上に立て搗き物を搗く臼。職野（二）「立臼に若草見たる明屋かな」

たて-えいさう　竪詠草　（名）　和歌の書式の一。檀紙・杉原・小奉書などを二つに折り、又、其れを内へ五つに折り、初めの行には記名、次の行に歌題、次の行に上の句、次の行に下の句を一行に書くを例とす。二首を書く時は三行目の中に一首を、四行目に一首を二行づつに書く。

たて-おもだか　立澤瀉　（名）　紋所の名。たちおもだか立澤瀉に同じ。

たて-かく　立掛　（他動下二）　立てて他の物に寄せ掛からす。

たて-かけ　立掛　（名）　一たてかくること。二男の髪の結ひ方の一種。寛永の頃、浮瑠璃語江戸半太夫の結ひ始めたるもの。男色十寸鑑「たてかけの大髻（ヤウ）、つとの大きなるは似合ひたると似あはぬ人あり」一代男「髮切りして、立懸に結ふ事はやりけるに」

たて-かける　立掛　（他動下一）　たてかく（立掛）の口語。

たて-かさ　立傘　（名）　一江戸時代、長柄傘を天鵞絨又は羅紗等にて作りたる袋に入れたるもの。貴人の供連の時に之を持たしむ。日本武尊吾妻鑑「臺がさ・立笠・お長刀」二武具。指物の一種。立傘の形したるもの。

たて-かぢ　立柁　（名）　和船の具。航走の時、直角に柁床に取り附くる柁。

たて-がはら　竪瓦　（名）　壁の腰などに添へて覆ふ平面の瓦。

たて-かはり　竪替　（名）　竪米の替はること。八木のはなし（賢基）、竪替は十月にて、一箇年の内、相場の竪として賣買する竪米も替はり、相場替ること なり。帳合米は日日算用する約束なれ共、勝負商ひの事故、思はく次第、相對にて幾日も算用せぬことあり。されど竪替には相場新に替はる故、是非決算せざれば、後竪替の算用出來ぬ定めなり」

たてかひ-の-うま　櫪飼馬　（名）　たてかひたる馬。馬寮の厩にて飼養せる馬。左馬寮式「凡櫪飼馬、龍頭鎖若有破損者、取諸園賈馬龍頭鎖充用」

たて-かふ　櫪飼　（他動四）　厩などにて大切に飼養す。宇津保（藤原）「かかるわざのために、かた時に千里行く馬をたてかひ給ひけるに、鞍おきて」

たて-かふ　立替　（他動下二）　他人に代はりて一時金品を出だし置く。他人に一時支拂ひ置く。

たて-かふ　建替　（他動下二）　改めて建つ。たてなほす。再建す。新勅撰（三）「くりかへしあまてる神の宮柱、たてかふるまであはぬ君かな」

たて-かぶ　建株　（名）　株式取引所にて、現に定期の賣買取引をなしたる株式の稱。

たて-かへ　建替　（名）　建てかふること。

たて-かへ　立替　（名）　立てかふること。又、其の金品。

たてかへ-さん　立替金　（名）　立て替へたる金。民法（第百七十七・四條四號）「消費物代價並に立替金」

たて-かへる　立替　（他動下二）　たてかふ（立替）の口語。

たて-かへる　建替　（他動下二）　たてかふ（建替）の口語。

たて-かみ　立髮　（名）　髮を久しく剃らで、長く延ばしたるもの。二代男「立髮の小者べんがら縞の風呂敷包に竹のねぢ杖を持ち添へ」

たて-がみ　鬣　（名）　馬又は獅子などの項（ウナジ）に生ひたる長き毛。うなかみ。たちがみ。

たて-がみ　立紙　（名）　禮紙（ライシ）の一。らいし（禮紙）を見よ。

だて-がみ　伊達髮　（名）　伊達風に結ひたる髮。浦島年代記（雜官七）「戀に意氣地を伊達髮や、寛濶指いた長刀」

たてがみ-かづら　立髮鬘　（名）　たてがみのさまに擬したるかづら。一代男「或る時は若衆出立ち、姿をかへて盛染めの長袖、又は立髮かづら」

（らづかみがてた）

吉野忠信「此の御では若衆鬘も似合ふまじ、立髮鬘はなほの事」

たてがみ-をとこ　立髮男　（名）　頭髮を立髮にしたる男。傾城反魂香（上）「片肌脫いだる立髮男」

たて-き　立木　（名）　一立てたる木。二しがらみ（篇）に同じ。名義抄「栿・柎（タテキ）」

たて-ぎ　竪木　（名）　たての木。（横木の對）宇津保（藤原下）「ませのたて木にはしたん、横木にはぢん結ひ」

だて-ぎ　伊達著　（名）　はでやかなる著物。だてなる服裝。

たて-ぎよく　建玉　（名）　取引所にて、現に定期の賣買取引をなしたる物件。

たて-きる　閉切　（他動下一）　門・戸など締めきる。全くとざす。

たて-きる　立切　（他動四）　しきる。支へ止む。くひとむ。

たて-ぐ　建具　（名）　屋内に取り附けたる戸・障子・襖など、すべて引き閉ぢてなどするものの總稱。五人女（二）「座敷の立具さし籠め」俳諧新選（三）「立具皆鳴る夜嵐や神歸り」

だて-くぎ　伊達釘　（名）　かざりくぎ（飾釘）に同じ。

たてぐ-し　建具師　（名）　建具を作る業とする人。

たて-くび　項　（名）　うなじ（項）に同じ。宇治拾遺「童のたてくびを取りて、引きとどめて云ふやう」

たてぐ-や　建具屋　（名）　建具を作る人。又、其れを商ふ家。

たて-くわ　蓼科　（名）　【植】顯花植物、雙子葉類の一科。通常、草本稀に木本。莖は明瞭なる節を有す。葉は通常互生、稀に對生或ひは輪生し、普通、鞘狀に結合せる托葉を有す。花は小形、整齊、兩性又は單性なり。蓼は三箇乃至六箇の萼片より成り、綠色又は花瓣樣なり。花冠は缺如す。雄蕊は通常六箇乃至九箇、稀に之より多數又は小數、雌蕊は通常二箇或ひは三箇の結合せる心皮より成り、稀に四箇より成る。子房は上位一室、一箇の直生せる胚珠を含む。花柱は二裂乃至四裂し、果實は瘦果、通常宿存せる萼によりて被はる。種子は粉狀の胚乳を有す。此の科に屬する植物は、多數は北半球の溫帶地方に產し、少數は熱帶地方及び南半球の溫帶地方に產す。

たて-ぐわい　立會　（名）　遊廓などのおさらひの會。浮世風呂（二）「浮瑠璃（中興）立て會はまだかな」同（二）「浮瑠璃（中興）廿日頃に初會と翠簾開きとどっちやにして、立て會を致しますから」

たて-どかし　（名）　人を敬ひ立つる風をして、其の實は之を侮ること。

だて-ごころ　伊達心　（名）　だてなる心。はでなる心。源氏烏帽子折（二）「おのづからなる伊達心、町には惜しき樂なり」

だて-こしで　伊達小袖　（名）　伊達風に仕立てたる小袖。はでこそで。源氏冷泉節（二）「鐵の上の伊達小袖、兜を脫いで太帶結ひ」

だて-こばや　伊達小早　（名）　漆にて彩色したる小早舟（ヲブネ）。はなこばや。

たて-こみ　立込　（名）　たてこむこと。

たて-こむ　立込　（自動四）　多人數込み合ふ。

たて-こむ　閉込　（他動下二）　戸・障子などをしめこむ。竹取（二）「たてこめたる所の戸、すなはちただあきにあきぬ」

たて-こむ　閉籠　（他動下二）　たてこもらす。しめこめて内にこもらしむ。續猿蓑（春）「寢所や梅の匂ひをたて籠めん」

たて-こもる　立籠　（自動四）　前條の口語。

たて-こもる　閉籠　（他動下二）　前條の口語。

たて-ごもる　立籠　楯籠　（自動四）　一戸・障子などしめて内に籠もる。二城に入りて防ぎ守る。保元（二）「近江の國甲賀山に立て籠もり候ひしを」應永記「宮内少輔打ち負けて、長森に楯籠もる」

たて-さくしや　立作者　（名）　劇場に附屬する、第一の脚本作者。

たて-さま　竪樣　（名）　一びさま（美樣）に同じ。二竪の方向。たて。盛衰記（廿七・横川合戰）「夜廻りの中へ打ち入って、竪樣・横樣に散散に戰ふ」

だて-し　伊達師　（名）　伊達なる技に長じたる俳優。

たて-じとみ　竪蔀　（名）　室内の見すかぬやうに立つるしとみ。板屏の類にて、土居を置き、柱を立て、一間毎に白木の部格子二枚づつ立つるもの。枕「はつかに見いれたれば、たてじとみなどの見ゆるに」源野宮　ひはだ・かはら、所所のたてじとみすいがいやうのもの」

たて-じま　竪縞　（名）　竪に縞り出だしたる縞模樣。一代男（二）「いつぞやの立縞の著物の質の札は、手元に御座るか」

だて-しや　伊達者　（名）　一伊達なる身なり又服裝を好む者。甲陽軍鑑（二）「二番にだて者といふも武道の役にたつ人にて（中略）馬・鞍・武具・諸道具、是れ程陣しげきに、いつも新しうして、しかも諸國の牢人によき者を集め、さざめきわたらるる、此のやうなる人、だて者なり」槍權三（下）「槍の權三は伊達者で御座る」二外見を飾る人。見えを張る人。

たて-しやうぶ　竪菖蒲　（名）　竪の菖蒲形をつけたる模樣。

だて-しゅ　伊達衆　（名）　一伊達を好む連中。だてしやの仲間。天網島（二）「のんこ髮結うて野良らしい、伊達衆自慢と云ひそな男」二けふかく（俠客）をいふ。大阪の方言。（伊達衆）

たて-じ-りぶ　立字立鼓　（名）　紋所の名。

たで-ず　蓼酢　（名）　蓼の葉を擂りて酢に和したるもの。食物の調味に用ふ。東海道名所記「舞坂・あら井・白須賀、みな海近く獵師多し、ある發句に、蓼酢にか但ししらすかの沖鱠」

だて-すがた　伊達姿　（名）　伊達なる姿。寛濶なるふう。

たて-すぢ　縱筋　（名）　縱に通れるすぢ。（よこすぢの對）

たて-ずて　立捨　（名）　立てたるままになして捨ておくこと。聖德太子繪傳記「立花を望めば、立捨にして歸りしは」

たて-ずな　立砂　（名）　車よせの前の左右兩方に、鍋笠の形の如く高く聞く盛りたる砂。康富記（建仁二年十月八日）「立砂下知」條條聞書「正月其の外、きとしたる時は、必ず妻戸の間より出入り候、左樣の時は立砂を兩方に置き候、香ぬきより間半計さき也、あまだれのかからぬ程なるべし」伊勢家禮式書、たてずな二つの間をば、ひずと通らぬものなり」

たて-そなへ　楯備　（名）　楯をつき並べて陣立てをすること。刹井日記（慶州南野合戰）「味方は合樣してかけ引きし、楯備へや槍備へに引きかけ」

だて-そめ　伊達染　（名）　はでに染めたること。又、その小袖など。紫一本（だて染小袖、はば廣帶、尻のとがりに引きかけて、ぜいをやり」岡姓爺後日合戰「裝束脫げば、肌に松浦の伊達染や」

たてそめ-はしら　立初柱　（名）　だいこばしら（大黑柱）を見よ。

たて-たし　建足　（名）　建て足すこと。又、其の建築物。

たて-たす　建足　（他動四）　母屋などに足（タシ）し添へて建つ。

たて-たて-し　立立　（形二）　腹立ちがましし。かどかどし。著聞（二）「世を遁れ身を棄てたれども、心は猶昔にかはらずたてたてしかりけるなり」砂石集（三）「祇候の女房有りけり。腹あしく、たてたてしかりける」

たて-ちや　點茶　（名）　薄茶などを點（タ）つること。又、其の茶。

たて-ちやばん　立茶番　（名）　劇場用の髮及び衣裳を著し、紅粉を粧ひて全く劇場の樣を學び、滑稽を加へてする茶番。（俗語）

たて-つき　楯突　（名）　一戰場にて楯を立つるを事となす者。盛衰記（廿八・笠）「すくやかならん楯突を一人たび候へ」二たてつくこと。はりあふこと。抵抗すること。宇治拾遺（三）「叶はぬまでも、楯つきなどし給へかし」

だて-づきん　伊達頭巾　（名）　はでなる一種の頭巾。大井川集「だてづきんさて又うらは赤いぞの」

たて-つく　楯突　（自動四）　はりあふ。抵抗す。對抗す。聖德太子繪傳記（二）「此の

守屋に楯つくこと、蚯蚓が大蛇に諍ふ如し」

たて-つく 立附 (他動四) 一戸・障子などを閉ぢて柱につかす。二續けざまになす。たてつづける。

だて-づくし 伊達盡 (名) 伊達をつくすこと。生玉心中「貴賤・群集の伊達づくし、人をいきめの藝づくし」

たて-つけ 立附 (名) 一たてつくること。戸・障子など閉さるる工合。俳諧新選「建附の合はぬ障子や山ざくら」二つづけざまにすること。たてつづけ。「たてつけ三杯」

たて-つける 立附 (他動下) たてつく(立附)の口語。

たて-つづく 建續 (自動四) つづけて建ててあり。武家義理物語「所繁昌なれば、人家たてつづきて」

たて-つづけ 立續 (名、副) たてつづけること。絶えず續けざまなること。

たて-つづける 立續 (他動下) 續けざまになす。たてつく。

たて-つぼ 建坪 (名) 建家の坪數。

たて-つぼ 立坪 (名) 土・砂などの立積の稱。即ち、六尺立方。

たて-て 立 (副) むねと。專一に。主として。特に。源氏「いとよしありておはする中に、畫をなんたてて好ませ給へば」同少女「學問をたてて」し給ひければ、調ふたぎには負け給ひしかど、おほやけごとにかしこくなん」

たて-てん 竪點 (名) 漢文の訓點にて、つづけて讀むしるしに用ふる符號。下文を見よ。點例「五には竪點、是れは音にて讀むには、上下の文字の間の右に竪點を引く。訓にて讀み或ひは上か下か一字訓にて讀むには、上下の間の左の旁に竪點を引く。一字音に讀むは字の右の脇に引く。訓にて讀むには上下の間の左の脇に引くを云ふ」

たて-ど 立所 (名) 次條に同じ。甲陽軍鑑「川頭衆の門外に、駒のたてどもなく」曾我五人兄弟「現の海に磨る盤も、瞬ぞ落ちて淚き濃き、輩の立てどぞ哀れなる」

たて-どころ 立所 (名) 物を立つる所。平治上六「六波羅の門前には、馬・くるまの立て所もなく」

たて-どひ 竪樋 (名) 一屋上の雨水を導き流すため、柱の如く竪に屋根より地上に向けて立てたる雨樋(アマヒ)。二埋樋に仕込み、溜池の堤に竪に伏せて用水を引く樋。三四寸程の穴を四つ五つあけ、栓を打ち、水の增減によりて穴栓を上下に抜きさしするもの。地方凡例錄「埋樋・竪樋。竪樋を尺八樋とも云ふ。是れは内法八九寸四方、仕立方常常の丸樋之通り、溜池の堤に伏せ、樋頭溜池の方に而、竪樋内法八九寸四方、埋樋に仕込み、埋樋は土中横に成り、竪樋は竪に成り、竪樋に三四寸程之穴四つ五つ明け、栗木に而栓を打ち、穴數多く彫れば、溜池之水多き時は上の穴栓を抜き、水を引き及湯水程、下の栓を抜く。又水澤山に入用之時は、一同に穴二つも三つも明け、水を取るため水通しの穴四つ五つも明くる事也」

たて-とほす 立通 (他動四) 一終りまで立て籠く。二最終までおしとほす。最後まで主張をかへず。

たで-ながし 蓼流 (名) 鮎などを捕ふるため、蓼の汁を川に流すこと。夫木「み山川のぼる小鮎のたでながし、からくも渇る世に生まれけん」

たて-なほす 立直 (他動四) もとの如くなほす。なほる。甲陽軍鑑「家康なくてはたてなほす事ならずして、あね川合戰信長負けなるべき」

たて-なほる 立直 (自動四) 舊の如く改まる。なほる。保元「今まで命を惜しむも、自然世も立て直らば、父の意趣をも遂げ、我が本望をも達せばやと思へばこそあれ」

たて-なむ 立並 (他動三) 立てならぶ。夫木「里人の大ぬさ小ぬさたてなめて、うまはだ結ぶ野邊になりぬる」

たて-ならぶ 建並 (他動三) つづけて建築してあり。建てつづく。ならべたつ。大鏡「狂言「あれからつっとあれ迄、中よさささうに軒と軒とを建て並べた程に」

たて-ぬき 經緯 (名) 機(ハタ)の經(タテ)絲と緯(ヨコ)絲と。たてよこ。萬「みよし野の青ねが峰のこけむしろ、誰れか織りけむ經緯(タテヨコ)なしに」古今「立田川錦織りかく神無月、しぐれの雨をたてぬきにして」

たて-ぬく 立抜 (他動四) たてとほす(立通)に同じ。天鶴「おさんに立て抜く心の道」

たて-ぬひ 楯作 (名) 楯を作ること。又、其の人。神代紀「作楯者(タテヌヒ)」垂仁紀「楯部(タテヌヒ)」

たて-ねだん 建直段 (名) 取引所の語。うけわたしへうじゆんねだん(受渡標準直段)に同じ。

たて-のし 縦熨斗 (名) 武具。指物の名。

(しのてた)

たて-は 立場 (名) 驛路などに、人夫などの駕籠などを停めて休息する所。浮世風呂「あすこは虎や狼の集で、我は定九郎の立場だす」

たて-はき 帶刀 (名) たちはき(帶刀)に同じ。榮華物語「東宮のたてはきや、瀧口やなどいふものども、夜晝さぶらひ」同本朝「宮司・たてはきなどは、われも我れもときほひ給へど」

たてはき-せんじやう 帶刀先生 (名) たちはきせんじやう(帶刀先生)に同じ。

たてはき-の-いた (名) 兜(カブト)に同じ。かぶと(兜)を見よ。

たてば-ちやや 立場茶屋 (名) 立場にある茶屋。

たてはーでぶ 立羽蝶 (名) 【動】ひを(鰾蝶)の異名。

たてはな 楯鼻 (名) 楯の端。官地論「城中蔵楯鼻調(ヒ)舂台」時、宛如「繫布鼓於雷門」

たて-はな 立花 (名) 一佛前などに立てたる花。謠「面影ばかり亡き跡の、立花の陰に隱けれり」二りっくわ(立花)に同じ。宗五大草紙「色、遠り花の事中略たて花の用には、時により、はず又水草以下をも可遣候」御湯殿の上の日記「七月廿日、今日の遊び、七色詩歌・くわんげん、御揚弓・たてばな・御まり」三花の字に區別して、華の字をいふ稱。

たて-はなし 建放 (名) 建物を建てたるままにて、造作など未だ附かざること。

たて-はら 立腹 (名) 腹だつこと。又、立腹しやすき人。盛衰記「一人立腹なる人の習ひ、心淺くして」

たて-ひき 立引 (名) 一たてひく(立引)こと。浮世床「たてひきのたまりを恨むだらうす」二意氣地にて張り合ふこと。いきはり。たていれ。

たて-ひき-づく 立引盡 (名) 互ひに意氣地を張り合ふこと。いぢづく。いきはりづく。膝栗毛「あの栄の插す物を插さないでもくやしいから、たてひきづくでから廿四文うっちやったあもし」

たて-ひく 立引 (他動四) 人の爲めに費用などを支辨す。人の爲めに金錢を立て替ふ。

たて-ひざ 立膝 (名) 片膝を立てて坐すること。

たて-ひやうご 立兵庫 (名) 女の髮の結ひ方の名。兵庫髷の一。多く遊女などの結ふもの。

(どうやひてた)

たて-ふ 蓼文 (名) 青き斑(ブチ)のある鷹の羽。

たて-ふう 立封 (名) 書狀を立文にすること。たてふうじ。太平記「四、六、鬼山「さも小賢しげなる力者一人、立封したる文を持ちて、赤松筑前殿の御陣はいづくにて候ぞと、問ひ問ひ走りて出で來る」

だて-ふう 伊達風 (名) だてなる樣子。俠氣ある血氣の風。

たて-ふうじ 立封 (名) たてふう(立封)に同じ。

たて-ぶえ 竪笛 縦笛 (名) 縦に吹く笛。尺八の類。(横笛の對)

たてふし-の-まひ 楯節舞 (名) たてふしまひ(楯節舞)に同じ。

たて-ふだ 立札 (名) 法度の箇條などを記して路傍に立て、公衆に掲示する木札。高札。狂言「某が藝を表に、立札の面につき、舞入りを致さうと存ずる」憲教類典「享保七乙卯年二月、評定所前箱之際建札」

たて-ぶみ 立文 竪文 (名) 書狀の形式の一。書狀を包紙にて竪に包みたるもの。正式の書狀に用ふ。其の包み方は書狀を疊紙とて別の白紙にて卷き、其の上を又白紙にて包み、其の狀より餘る上下の部分を筋かひに左へ折り、また右へ折りて後、又うらの方へ折るもの。(用文輯)宇津保「からの紫のしきしに、たて文にて萩につけ給へり」枕「ありつる文の、結びたるも、たてぶみも、いときたなげに持ちなしふくだめて」

たて-へうぐ 竪表具 (名) 書畫の軸物などの、長く竪に表具すること。又、其のもの。

たて-ほ 蓼穂 (名) 蓼の穂。今宮心中「口中のしよりしよりしたる雀鮨、夫れでたてほの何處やらがひりりとする」

たて-ほこ 楯鋒 (名) 楯と鋒と。防禦の堅固なるさまにいふ語。太平記「九、日吉山王、兩六波羅は楯鋒とも頼まれたりける名越尾張守は討たれぬ」

たて-ほし 立干 (名) 遠淺の海中などに簀又は網を設け置き、干潮の後に其の處に止まりたる魚を取ること。

たてほし-あみ 立干網 (名) 立干に用ふる網。

たて-ぼり 立堀 (名) 築城の法にて山城を築くに、麓の傾斜緩にして敵の攻め上るべき所に、幅三四尺、深さ三四尺、長二三間程づつ、竪に畿筋も掘り切り置く堀。其れを横に掘るを横堀(ヨコボリ)といふ。

たて-まい 建米 竪米 (名) 帳合商にて、賣買米の内、當日轉賣・買戻しをなさざるもの。即ち、賣買の當日同業者にて預け合ひをなすか、又は取引先の兩替に預け入れをなすもの。夜越米(ヤゴシ)。八木のはなし「米、毎年四月・十月(四月十七日、十月十七日)兩度竪米を定むることなり、是れは堂島米方年行司を初め總仲買共、入札を以て定むるなり」

だて-まき 伊達卷 (名) 婦人が、帶の下などに卷くもの。單帶の如くにして幅狹し。

たて-まげ (名) 菓子の一種。有平糖の類。(嬉遊笑覽)

たて-まし 建增 (名) 建築にて建て加ふること。建物をつぎたすこと。たてたし。

たて-まだす 奉出 (他動四) 奉らす。奉り出だす。雄略紀「願賜君絵、而後奉遣(タテマツラム)」欽明紀「各宜奏(タテマツル)使、共、我使人往、聽天皇所宣之詔」類聚國史「長門六、天平十一月、遣使天、奉出(タテマツル)正申賜布狀」字津保「御使あしたにたうびなば、まほりものたてまだせん」

たて-まつり-もの 奉物 (名) 奉る品物。獻上の物。みつぐもの。神代紀「天孫之饌(タテマツリ)」名義抄「供給(タテマツリ)」

たて-まつる 奉 (自動四) 次條の轉。枕「みゆきなどに、なぎの花の御輿に奉るなど、いとめでたし」源「帚木」ほうさうじの程までは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける」

たて-まつる 奉 (他動四) 一まるらす。さし上ぐ。獻上す。進上す。記「とよみき多豆麻雅良(タテマツレ)せ」萬「多豆麻豆波(タテマツ)みつき寶は」勢語「人人ささげ物奉りけり」後撰「王、折りつればたぶさにけがるたてながら、三世の佛に花たてまつる」獻紀「賈紀」二召させまるらす。戴せまるとす。著せまるらす。源朝五「夜の明けぬさきに御舟に奉れとて、例の親しき限り四五人ばかりして奉りぬ」三轉じて、召し給ふ。おめしになる。著(キ)給ふ。源「蜻蛉」御袴著の事、一の宮の奉りしに劣らず」同「蜻蛉」したがさね奉り加へて」字治拾遺「落ち給ふすなはち、かぶりを奉らで」

たて-まつる 奉 (助動四) 己れが動作の他へ及ぼす時、添へていふ敬語。竹取「ことら大きさまで斐ひ奉る心ざし、おろかならず」拾遺「王、伊勢の御息所、生み奉りたる御子のなくなりにけるが」枕「ゐてありき奉りて」源「帚木」例の作法にをさめ奉るを」

たて-まつれ 奉 (他動) たてまつらせ(奉)の約。宇津保「俊蔭」「かとりのきぬなど、多く奉れたれば」同「梅花」「貴官の御許に奉れ給ふ」蜻蛉日記「侍らぬ程にものし給へりけるかしこまりなどいひて、奉れて後」源「若紫」又の日、御文を奉れ給へり」

たて-まへ 立前 (名) 一茶道の語。抹茶を點(タ)てて客に進むる作法。てまへ。二家屋の建築にて、柱・梁などを組み立つること。建前。

だて-まへり 伊達參 (名) 伊達に神佛に參詣すること。國姓爺「若上萬葉の伊達參り」

たて-みつびき 立三引 (名) 紋所の名。

たて-むかひ 立向 (名) たてむかふこと。

たて-むかふ 立向 (自動四) たてあふ(立合)に同じ。

たで-むし 蓼蟲 (名) 【動】昆蟲類中、精翅類の一種。體小さく一分位にて、黑

色なるこがねむし。

たてむしろ　立筵（名）　輿の具。横雨を防ぐために、輿の簾の外に置ひ垂る筵。御供古實「雨もふり、路次もあしく候へば、たてむしろをひき出だしてたてられ候ひて、かさに御かけあるべし」

たてむすび　縦結（名）　たてに結ぶこと。上下に長く結ぶこと。（まむすびの對）

たてもくかう　縦木瓜（名）　紋所の名。

たてもくろく　竪目録（名）　貴人より竪紙に書きて下賜に遣はす目録。

たてもの　立物（名）　一古語。はにわ（埴輪）の異稱。垂仁紀「悉に是土物（はにわ）を以て生人（いきひと）に代へ」　二威容を壯んにせんため、兜の鉢の頂上、又は前後・左右に著る裝飾。前立（まえだて）・後立（うしろだて）・脇立（わきだて）・頭立（ずだて）等の種類あり。甲陽軍鑑「一、立物・槍・鞭、并、朱四手等」　三射藝の語。まと（的）の一稱。今川大草紙「雑談に神動を射る、角木を射るなどと談るは恥ぢなるべし」中四半にも九半とも可、談なり」　四芝居の座中にて、勝れたる役者の稱。下文を見よ。戯場年中鑑「立者（たてもの）。立てもの三種あり。大立物、次は名題看板の畫組に乗する、次の立者は役わり番附の奥書にのする中華此の内に一人位は、開中より立物になるべき人、又は年功の人、右の内へ書き加へる事も有り」　五多數の中より、特に人に推し立てらるる者。傾城酒呑童子「餘所の大事の立物の太夫と、揚屋の身でいろ狂ひ」　六得意のもの。おしもの。

たてもの　建物（名）　一宮殿・堂・社・家屋・倉庫等、建造物の總稱。建築物。二取引所の語。定期市場に於ける實買取引の目的の標準。

たてもの　竪物（名）　一竪表具（たてもの）の軸物などの稱。二ちからもち（力持）に同じ。和漢三才圖會「竪物（たてもの）」

だてもの　伊達者（名）　だてしや（伊達者）に同じ。槍權三「槍の權三は伊達者の、どうでも權三は好い男」

たてもの-さきょうどうじんめいぼ　建物共同人名簿（名）　共同人名簿の一。建物の登記事項に關するもの。不動產登記法施行細則第三共同人名簿は土地共同人名簿及び建物共同人名簿の二種とす」同第三建物共同人名簿は附錄第四號雛形に依り地方裁判所に於て之を調製すべし」

たてもの-だい　立物臺（名）　兜の立物を插し込む筒。前立の臺には角本（つのもと）・獻立（けたて）等の種類あり。

たてもの-とうきぼ　建物登記簿（名）　登記簿の一。建物に關する所有權・地役權・先取特權・質權・抵當權及び賃借權の設定・保存・移轉・變更・處分の制限又は消滅を登記するもの。不動產登記法第十四條、第十七條「建物登記簿」

たてもの-ほけん　建物保險（名）【商】　損害保險の一。建物を其の目的とするもの。

たてもの-まい　建物米（名）　へうじゆんまい（標準米）に同じ。

だてもやう　伊達模樣（名）　大形に華奢なる模樣。友禪・刺繍等を應用して作る。御所櫻堀川夜討「下著の衣の紅に、大振袖の伊達模樣」

だてもん-えびらうめ　伊達紋籠梅（名）　紋所の名。

たてや　建家（名）　建てたる家。建物。家作。

たてやく　立役（名）　芝居にて俠客に扮する俳優の稱。大阪の方言。僧言葉集覽

たてやく-しゃ　立役者（名）　重立ちたる役者。たてものたる役者。

たてやの-じ　竪や字（名）　少女の帶の結び方。やの字の形に結ぶもの。

たてやま　立山（名）　とめやま（禁山）に同じ。

たてやま-わらぎ（名）【植】豈（ハ）科、たてやまわらぎ屬の多年生草本。莖の高さ一二尺。葉は羽狀複葉、小葉は長卵形。八月頃、葉腋より長き花梗を出だし、淡黃色の花を開き、後、莢を結ぶ。我が國、中部の濕木帶並びに草本帶に自生す。いはわらぎ。

たてよこ　縦横（名）　一たてとよこと。よこたて。じゆうわう。二たて絲とよこ絲と。百合若大臣野守鏡「長息、槍の照葉をたてよこに、赤いべべ縫りて著せう」

たてよこ-ざた　縦横沙汰（名）　彼れ是れの風說。種種のとりさた。淀鯉出世瀧德「縦横沙汰を聞き觸れて、戀の大和の色好み中華買ふ人餘れど寶の日は足らず」

たてよこ-の-さね　縦横杵（名）　紋所の名。きね（杵）を見よ。

だてら（接尾）　身の分際に不相應なる事をなすにいふ語。狹衣「年頃懸想し給へる人の日頃太樂に籠もり給へるを盜み給ふなり。法師だてらかくあながちなるわざをし給へば、佛のにくみ給ひて、かかるめを見せさせ給ふなりかし」

たてり-ぐさ（名）【植】きく（菊）の異名。

たてる　立（他動下）　たつ（立）他動の口語。狂言「針中華何ぞや、人間が立てる」　一温湯にて鹽物又は痛所などの患部を蒸す。二船底をあぶりて濕氣を去る。和訓栞

たてる（他動下）　一宮殿・堂・社・家屋・倉庫等、建造物の總稱。建築物。二取引所の語。定期市場に於ける實買取引の目的の標準。

たてわ　立役者（名）　重立ちたる役者。たてものたる役者。

たてわく　立涌（名）　前條に同じ。世繼曾我「雲立て蔓（わく）の狩衣」

たてわけ　立涌（名）　前條に同じ。增鏡「あやのをり、すずしの御袴、御紋竹てわけをおる」

たてわけ（名）　わけがら。すぢみち。いはれ、理由。甲陽軍鑑「かやうの事も生れ養りの家には、若き衆其のたてわけを知らねば、武士道無案内のやうに候」

たてわたす　立渡（他動四）　ここかしこに立つ。一面に立つ。夫木「われとせぬもとの谷川やり水に、石たてわたす奥山のいほ」

たてわり　立破（名）　立ちたるままわること。太平記「子武男「太刀中華此の鋒に廻はる者、或ひは甲の鉢を立破に被破」

たてわり　楯破（名）　鎧の一種。鐵製にして、先鑒の如く尖れるもの。すやき。本保元新院御所京各門所門固矢の根は楯破・鳥舌にもあらず」

たてわ-ぐ　立涌（名）　前條に同じ。世繼曾我「雲立て蔓（わく）の狩衣」

たてわ-ぐ　立涌（名）　前條に同じ。增鏡「あやのをり、すずしの御袴、御紋竹てわけをおる」

たてわ-ぐ　立涌（名）　前條に同じ。

たてわ-ぐ　立涌（名）　前條に同じ。

たてわ-ぐ　立涌（名）　前條に同じ。

ことわざ。萬葉字治人の譬(ナリ)のあじろ、われならば今は寄らまし、こづみならずとも」宇津保(田鶴)帝うち笑ひ給ひて、烟のたと(へ)もあれば、さも知らずかし」源(若菜)「古(へ)の世のたと(へ)にも、さこそはうらべには、はぐくみげなれど」榮(初花)「世の中にいふたと(へ)のやうにおぼすにやと、あいなうこそはづかしけれ」

たとへ を とる 取譬　他の事物の例を取りて言ふ。他の例を引く。太平記(十三三浦大多和合戦事見)「泣き歎き愛(へ)悲しむこと、喩(へ)をとるに物なし」

たとへ 縦　假使　假令　(副)　たとひ(縦)に同じ。宇津保(藤原)「たとへ(す)まずといふとも」本朝櫻陰比事(下)「たと(へ)夢物語にせよ」

たとへ-うた (名)　歌の六義の一。詩の六義に於ける興の直譯。きよう(興)を見よ。古今序「四つには、たと(へ)うた」

たとへ-ぐさ 譬種　(名)　譬(へ)にする材料。釋迦如來誕生會「さてこそ末世の譬(へ)種、榮特が愚智も文殊が智慧、終に羅漢の果を得たり」

たとへ-ごと 譬言　(名)　譬(へ)にすることば。譬喩。一代女「貴の山(へ)入りながら空しく歸ると、古い譬言」

たとへ-ごと 譬事　(名)　譬へたる事。たとへとする事柄。ことのたとへ。

たとへ-ば 縦　例　假令　(副)　一物にたとへて言へば。例をあげて言へば。神代紀上「洲壤浮漂、譬(ハ)猶游魚之浮水上」古今序「たとへば繪に書ける女を見て、徒らに心を動かすが如し」譬。二たと(へ)(縦)に同じ。千載長歌「今行く末は稲妻の光の間にも定めなし、たとへば獨りながらへて、過ぎにしばかり過ごすとも、夢に夢見る心ちして、際行く朋に異ならじ」新古今賀「ただ頼めたと(へ)ば人の僞りを、重ねてこそは又も恨み」

たとへばなし 譬話　(名)　或る事物にたとへて言ふ話。

たとへ-もの 譬物　(名)　譬へにするもの。太祇全集「花の色や頭の雪もたとへもの」

たとへる 譬　喩　(他動下)　たとふ(譬)の口語。

たーどほし (形)　(たは接頭)　とほし(遠)に同じ。萬(三)「玉ぼこの道を多騰保美(タドホミ)」、山川の(へ)なりてあれば懇しけく」同(三)「玉ぼこの道を多騰保彌(タドホ)ま使ひもやるよしもなし」

たどり 辿　(名)　一たどること。隆信集「家を出でて見るだに明き夜半の月、入らん山路にたどりあらすな」二すぢみちを探り知ること。穿鑿。研究。源(若菜上)「何ごともまだ淺くて、たどりすくなくこそ侍らめ」同(同下)「そのたどり深き人の、今の世にをさをさなければ」

たーどり 田鳥　(名)　【動】たひばり(田雲雀)の異名。和名抄「鶺鳥(比波利)、又云田鳥」出觀集(冬)「田鳥たつ音ばかりして山里は、しめりぞわたるをのゝしの原」

たどり-がき 辿書　(名)　辛うじて書くこと。拙劣に書くこと。又、其の書きもの。

たどり-つく 辿著　(自動四)　道を辿りて到著す。かかぐりつく。

たどり-ばら 辿腹　(名)　妾腹の子の稱。

たどり-よみ 辿讀　(名)　文字をたどり、辛うじて讀むこと。

たどる 辿　(他動)　一尋ね取る。捜り求む。源(蜻蛉)「など宮より召したるに參り給はぬとて、たどりありくと見るに」同(若菜)「あやし、ひが耳にやとたどるを聞き給ひて」二路に迷ひて尋ね行く。古今(秋上)「天の川淺瀬白なみたどりつつ、渡りはてねばあけざしにける」源(帚木)「わた殿に分け入りて、からうじてたどりきたり」三迷ひ思ふ。勢語「ゆきやらぬ夢ぢをたどる袂には、あまつ空なる露やおくらん」源(橋姫)「しばしは夢かとのみたどられしを」四すぢみちを分け知らんとて尋ね思ふ。其の事をさぐり知る。穿鑿す。源(帚木)「をさな心地に、深くもたどらず」同(若菜)「今はかく、古(へ)の事もたどり知り給ひぬれど」同(朝顔)「物の心を深くおぼしたどるに、いみじう悲しければ」

たどる 辿　(名)　たどりながら。後撰(雜)「墨染のくらまの山に入る人は、たどるたどるもかへりも來ななん」

たどん 炭團　(名)　炭の屑をふのりの汁などにて捏ねて、丸めて乾したるもの。炭の代用とす。一代男「うるみ朱の烟草盆に、炭團の埋火絶えず」新永代藏「三代以前に買ひ置きのたどん」

(誹)炭團に目鼻　色黑くみにくき容貌の譬へ。

たな 棚　(名)　一物を載せ置くため、板を平面にわたしかけたるもの。床の間・書院・納戸等の脇に設くるを化粧棚といふ。通(ナ)棚・違(ヒ)棚・棚(ウ)棚・鳥(ス)棚・冠(カブリ)棚・折上(オリアゲ)棚・袋(フクロ)棚・檜(ヒノキ)棚・二階(カイ)棚・千鳥(チドリ)棚・局(ツボネ)棚・佛守(ブツシ)棚、其の他、種種あり。各條を見よ。記上「御倉板擧(タナ)之神」(創業)「枕上みづしどころのおものだなといふものに香をおきて」大鏡「寢殿の東に、たなをして」庭(園)二船の名所。ふなだな(船棚)の略。萬「いづくにかふなはてすらむ、あれの崎漕ぎたみゆきし棚(タナ)なしを船」榮華(花見)「舟にことごとなるたなといふものをかしく作りて」櫂(子)(航抄)

たな に あげる 上棚　打ちすててお く。さしおく。

(諺)棚から牡丹餅　意外の僥倖を得たる譬へ。

(諺)棚の物を取って來るやう　容易に物の得らるる譬へ。女殺油地獄「法力のあらたなること、棚な物取って來る如く」

たな 店　(名)　一みせだな(店棚)の略。みせ。土佐日記「山崎のたなる小櫂の繪も、まがりのほらのかたちかはらざりけり」宇津保(藤原)「たなに女居りて、物賣る」二貸家。借家。享保集成絲錄(享保九年三月)「棚衆置き候はば、念を入れ、棚の者移り不申前縣に請人を締め、店かし可申事」同(同)「棚の者我が欠落候はば、棚請人に御懸かり可被成との御事に候間」三主人として仕ふる人のみせ。浮世風呂「今つから店へ行きなさるって、おのしが歸るのを待って居なさるはな」

たな (名)　いりたなに同じ。宇鏡集「蒸(ナ)サ(ナ)ナ(ナ)」

たな (名)　【植】たんぽぽ(蒲公英)の異名。本草和名「蒲公草(多奈乎)」

たな-あざなひ 店商　(名)　みせにて商ふこと。みせあきなひ。一代女「兩加賀牛足、紅の片袖、龍門の帶、一筋取って行く、店商に懸けは堅くせぬことなれど」

たないけ 種池　(名)　たなゐ(種井)に同じ。

たないた 棚板　(名)　棚を作るに用ふる板。

たなうけ 店請　(名)　借家人の身元保證。又、其の保證をする人。

たなうけ-しょう 店請證　(名)　次條

の略。

たなうけ-しょうもん 店請證文　(名)　たなうけのために差し出だす證文。

たなうけ-にん 店請人　(名)　店請けをする人。享保集成絲綸錄(世九、豊安、閏四月廿三日)「棚之者致欠落候はば、棚請人に御懸かり可被成との御事に候間」德川禁令考後集(十九、徳川家公、八月)「奉公人出入り並びに諸借金、買ひ懸かり等之儀、本人滯り候得者、家主又者店請人江近來段段申し付け候得共」

たなうし 棚牛　(名)　砂石多き河川工事にて堤防保護に用ふるもの。丸太などを、牛の如き狀に組み立て、其れに蛇籠を重りとしたるもの。堤防橋梁積方大概「棚牛、拾組、但四尺小間、重籠貳間、丸小間拾八本、但壹小間貳本づつ、是れは砂深く石砂利、川堤圍水劍に相用ひ、何組に而も一籠めに結立て遣はし申し候洲を寄せ候器に有之候」地方凡例錄「棚牛。是れは砂石川に用ふる水除也。枝瀨・本瀨共水請け惡しくては破損早し。外の水劍と違ひ、横に水を眞直に請けてよし。よって堤根より川中へ眞直に懸ける。棚牛の益は、能く保てば地形へめり下り、洲を下へ置き、川地形高くなり、自然と川瀨向かへ替る、功者に伏せ込まずしては出來ず」

たなうち 手中　(名)　手の中。たなごころ。神代紀上「左手掌中(タナウチ)」

たなうち 店内　(名)　店の内。のれんうち。

たならら 手裏　(名)　たなごころ(掌)に同じ。神代紀上「右掌(タナウチ)」宇津保(忠こそ)「母君は、いただきの上を蓬萊の山になさんと、たなならの内にこがねの大殿を造らんといふとも、ただこそのいはんことはたがへじと榮ひ給ふほどに」

たなおろし 種下　(名)　穀物の種を田畑に蒔くこと。たねおろし。字鏡集「稼(オロシ)」

たなおろし 棚卸　店卸　(名)　一【商】商人が決算の際、殘存せる商品を實地點檢し、又、これを評價すること。新永代藏「例年店おろしの有物帳に附けかへたるばかりにて」二殘存せる品物を悉皆賣り盡くすこと。雞留「明くる春の四日に棚おろしの勘定して見しに」三物事の缺點を一一數へ立てて言ふこと。冥途飛脚「忠兵衛が身代の店下ししてくれる、添い」浮世風呂「何もそんなに棚卸しをするには及ばねえよ」同「三十二文で、水屋さんのお荷物を棚下しだね」

たなおろし-かんぢゃう 棚卸勘定　店卸勘定　(名)　棚卸をなし、棚卸表を作りて一定の計算をなすこと。

たなおろし-へう 棚卸表　店卸表　(名)　棚卸の結果を示したる表。商品棚卸表。

たなか 田中　(名)　一田の中。詞花(春上)「月清み田中にたてるかりいほの、影ばかりこそ曇りなりけれ」二ゐなか。田舍。堀河百首(雜)「むれてゐる田中の宿のむら雀、我がひくしたに驚くなるかな」永久百首(秋)「はかなしや田中のさとは稲妻の、ほどなきかげをたのめてぞふる」

たなかの ゐど 田中井戸　田に引く料に、水をたたへたるゐど。たゐ。續古今(雜上)「咲きにけりなほしろ水に影見えて、田中のゐどの山吹の花」夫木「かはづなく田中のゐどに日はくれて、おもだかなびく風わたるなり」

たーなが 手長　(名)　(たは接頭)　永く久しきこと。祝詞式(新年)「皇御孫命御世乎、手長(タナ)御世堅磐榮常榮磐坪比奉」

たなかし 店賃　(名)　他人に家屋を貸して住ましむること。生玉心中「此處は出店の店賃し、何事も存ぜぬ」

たなかせ 店賃　(名)　【動】てながえび(手長蝦)の異名。

たなーかた 店方　(名)　あきうどや。商家。

たなかーとり 田中鳥　(名)　【動】ほとときす(子規)の異名。

たなかーぶせ 椹被　(名)　船工の語。にぶみ(荷蹈)を見よ。

たながへ 店替　(名)　店を移すこと。家を移すこと。轉居。浮世風呂「孟子のお袋さまは、三たび轉居(タナガヘ)をさしつたとある」

たながり 店借　(名)　他人の家屋を賃借して住み居ること。しやくかん。しやくや。一代女「それより末末は店借の者と見えて、裏附の上に厩の袴を著るもあり」傾城反魂香「大津のはづれに店がりして、妻は繪のぐ夫は繪かく」享保集成絲綸錄(廿九、明暦三年七月)「町中棚がり之諸商人申し合せ候」

たなぎ (名)　【植】こなぎの異名。後鳥羽院集「袖ぬらす田中の井戸のさみだれに、ひかる田なぎも朽ちやしぬらん」

たなーぎゃう 棚經　(名)　陰暦七月盂蘭盆に菩提寺の僧來たりて、精靈棚の前にて讀經すること。風俗文選(鳥)「家家むかひ火焼き捨てて魂祭る頃、且那寺の小僧棚經とてよみありく」浮世床「むづかしい戒名を付けると、孫子の代には調みやうも知れず、棚經の坊さまに尋ねても」

たなーぎらぶ 棚霧合　(自動四)　たなぐもる(棚曇)に同じ。萬(八)「棚霧合(タナ)ぎ雪もふらぬか、梅の花咲かぬがしろにそへてだに見む」

たなぐ 棚雲　(名)　たなびく雲。くも。記上「押分天之八重多那雲(タナ)而」雲(謡代記)

たなぐも 棚蜘蛛　店蜘蛛　(名)　【動】節足動物中、蜘蛛類の一種。草木の間に水平の網を張り、他蟲の來たり懸かるを待つさま、商人の店を張りて、客を待つに似たるより、店蜘蛛とも書く。

たなぐもる 棚曇　(自動四)　雲たなびきて曇る。萬(三)「棚雲利(タナグモリ)書はふりきぬ、さぐもり雨はふりきぬ」(歌)宇鏡「曇(本來)」本宇鏡「家主に對して其の貸家に住む者の稱。(おほやの對)

たなーご 種子　(名)　たねもの。たね。東鑑(九、文治五年、十一月八日)「自秋田郡、可被下行種子等」

たなーご 店子　(名)　家主に對して其の貸家に住む者の稱。(おほやの對)

たなご 鱮　鄰　(名)　【動】一魚類中、硬骨類の一種。體扁平にして、口小さく、鱗は中庸大なり。側線よく顯はれ、鬢鰭は十二刺あり、體色白し。各地の淡水に產す。かはたなご。きど。二うみたなご(海鱮)の異名。

たなごころ 掌　(名)　手の裏面。手のひら。たなうら。たなそこ。和名「手上(左部)掌(古古路)手心也」考義抄「瑞(サイ)(ヒ)徒然草「あきらかならん人人の、まどへる我れらを見んこと、たなごころの上の物を見んが如し」

たなごころ の うち 掌中　物の掌の中にある如く、自由になること。增鏡「頼朝中將相模國鎌倉の里に居りながら、世をたなごころの中に思ひき」謠(生)「四海の安危は掌の中に照らし、百王の理亂は心の中に懸けたり」

たなごころ の たま 掌玉　しやうちゆうのたま(掌中珠)に同じ。しやうちゆう(掌中)の條を見よ。謠(丹後)「插しの花、掌の玉、袖の上の蓮華」

たなごころ を かへす 反掌　事の極

めて容易きに譬へいふ。漢書枚乘傳於反撃、安於泰山」

たなごころ を さす 指掌　事の極めて明白なる譬へにいふ。鳴門中將物語「文平と申す陰陽師こそ、當世には、たなごころをさして推察ままさしかなれ」

たなごひ 手拭 (名) てぬぐひ(手拭)に同じ。名義抄「帛タナゴヒ」盛衰記世三「未だ、あかさいで白たなごひに取りかへて、頭にしまく小入道かな」

たなごひのはこ 手拭箱 (名) たのごひはこ(手拭箱)に同じ。續後拾遺雜、遠き國にまかりける人に、たなごひの笥つかはすとて」

たなさがし 棚搜 (名) 一棚を搜して物を求むること。二昔時、遊廓の詞。客の揚屋に宿し、夜更け人しづまりて、床より起き出で酒などのみて興ずること。色道大鑑

たなさき 店前 (名) みせの前。みせさき。店頭。狂言鶴聟「あの者めが棚先に居って、退くまいと申すによって」

たなさき 手先 (名) 手のさき。指さき。

たなさき (名) たたさき(徒前)に同じ。西園寺實百首、たなさきの角(ス)の柱にかはりてや、御輿の前に鳥の立つらん」

たなざらし 棚晒 (名) 商品の久しく賣れず、店に晒らしありて古びたること。又、其の物。風羅袖日記「橙や伊勢の白子の棚ざらし」

たなしごと 店仕事 (名) 商店の依賴をうけてする賃仕事。

たなしし 膜 (名) 肉と皮膚との間の薄皮。まく。宇鏡「醸太奈之之」和名三「膜太奈之之肉內薄皮也」名義抄「膜タナシ」

たなしね 稻種 (名) いなだね(稻種)に同じ。天智紀「稻種三千斛」

たなしり 棚尻 (名) 高く出でたる尻。

たなしる (自動ラ) しる(知)を强めていふ。萬「そを取ると騷ぐみ民も家忘れ、身も多奈不知(タナシラ)」同「何すとか身を田名知(タナシラ)て、浪のとのさわぐ湊の」同「あしがきの末かきわけて君こゆと、人になに告げそ事は棚知(タナシ)」

たなすゑ 手末 (名) 手のさき。手の端。又、指のさき。名義抄「手子・指頭タナスエ」

たなすゑ の てびと 手末手人　手先の技藝の巧みなる人。雄略紀「手末才伎(タナスエ)」織物などに巧みなる人。

たなすゑ の みつぎ 手末調 (名) 「手のさきの調ぎの義」上代、女子の手先にて作りたる布帛を、調として上つること。崇神紀「始校(タナスエ)人民、更科調役、此謂男之弭調、女之手末調(タナスエノミツギ)也」

たなすゑ の よしきひもの 手端吉藥物　古語。祓へなどの語。素戔嗚尊が、穢れを去らんため、手の爪を祓へつ物として棄てて清まはりたる故事。神代紀「手端吉藥物(タナスエノヨキクスリモノ)」此云多那須衞能余之岐羅毗」

たなそこ 手底 (名) たなごころ(掌)に同じ。顯宗紀「手掌(タナソコ)僚亮手掌能亮、此云陀那曾古」日本紀略「明帝紀」「掌太那古」日本紀略「手心也」

たなだて 店立 (名) 借家より逐ひ立てらるること。

たなちん 店賃 (名) やちん(屋賃)に同じ。若風俗「賃錢・棚賃」にて世を渡る人めきて」天保集成・絲綸錄「八十三、寛政「此の度、町町地主共、地代・店賃上り高等、書き出し置き候に付」

たなづし 棚廚子 (名) たなのある廚子。宇津保下「御前にぢんのたなづし九よろひ棚一つにろくろひきの御器、金の御器よそへ、ば」枕「たなづし」源「こなたは離れたる方にしなして、高きたなづし一よろひばかりにて」

たなつくり 棚田 (名) 山に棚の如く段をつけて作る田をいふなるべし。夫木「たなつくりのゆきあひのわさ田かり鳴きて、おのがはつきになりぬべきかな」

たなつもの 穀 (名) 田より生ずる物。即ち、稻。轉じて穀類の總稱。神代紀「以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子(タナツモノ)」祝詞式「五穀物(タナツモノ)」和名「五穀伊豆乃太」堀河百首雜「たなつものの園に蒔きついざ子ども、そともの小田にくわねひろはん」

たなしぶね 棚無船 (名) 次條に同じ。二代男「漕ぎ行く棚無し船」若風俗「濱を見渡せば、辰彌は棚無舟に乘り浮かれ」

たなしをぶね 棚無小舟 (名) 船棚の無き小舟。蹈立(ナ)のなき小さき舟。萬「いづくにかふなはてすらん、あれの崎漕ぎたみゆきし棚無小舟(タナナシオブネ)」古今雜體「堀江こぐたななし小舟こぎかへり、同じ人にや戀ひわたるらむ」

たなぬし 店主 (名) たなのぬし。みせのあるじ。てんしゅ。

たなは 手繩 (名) 一馬を繫ぐ繩。さしなは。岡本記「たなはの事。うちまぜ本なり、白・黑・あさぎ三色たるべし」二鵜につけて鵜飼の使ふ繩。夫木「久方の月のかつらの鵜飼舟、川風はやしたなは亂るな」新千載「鵜舟さす夜河のたなは打ちはへて、一すぢならぬ物ぞ悲しき」

たなはし 棚橋 (名) 板にて棚の如く懸け渡したる假橋。萬「あまのかは棚橋(タナハシ)わたせたなばたの、いわたらさむに棚橋(タナハシ)わたせ」同「天なる一つ棚橋(タナハシ)いかでゆかむ、若草のつまがりとへばあゆひすらくを」古今雜「待てといはばねても行かなん、しひて行く駒の足折れ前のたなはし」

たなはた 棚機 七夕 (名) 一機(ハタ)の稱。機の構へに棚あるよりいふ。本居宣長說二たなばたつめ(棚機津女)の略。記「あめなるやおとと多那婆多(タナバタ)のうながせる、玉のみすまるみすまるに」萬「棚機(タナバタ)の五百機立てて織る布の、秋さり衣誰れか取り見む」三七月七夕に祭る織女星の稱。初秋の頃、牽牛・織女の二星、天の河の邊に現る。支那の傳說にて七夕に烏鵲翼を並べて天の河を橋とし、織女渡りて牽牛と交會すといふ。なほ、きこうでん(乞巧奠)を見よ。萬「多奈波多(タナバタ)の舟のりすらし、まそ鏡清き月夜に雲立ち渡る」宇津保俊蔭「琴中第天女下だりまして涙ぬり、たなばた緒よりすげさせて上ぼりぬ」枕「何がしとかや、たなばたの渡る橋にはあらで」四香の名。質は眞南蠻(ハタ)、香古めき涼しくして、稀なる薫りあり。日葡辭書五楊弓・大弓にて、錢を賭物にするとき、七錢の隱語。七騎弓。類聚名物考調度十五「賢貸「所務的今の矢に錢を賭物にする時の辭有り中略七錢七夕或七騎弓」

たなばた の あふせ 七夕逢瀨　牽牛・織女の交會すること。たなばた(棚機)を見よ。諸集「時しも今日は、織女の逢瀨を急ぐ頃なれや」

たなばた の むたけ 七夕手向　きこうでん(乞巧奠)に同じ。諸集「今日七夕の手向けとて」

たなばた の ななくさ 棚機七草　あきのななくさ(秋七草)に同じ。

たなばたかきがけ 七夕笠懸 (名) 射藝の語。陰曆七月七日馬場・七箇所にて笠懸を射ること。一所に射手七人とす。四季草

たなばたつき 棚機月 (名) 〔棚機祭陰曆七月の異名。藏玉「十二月異名中略七。七夕月。鵲のよりはの橋も心せよ、たなばた月のころ待ちえたり」

たなばたつめ 棚機津女 (名) 一古昔、機を織る女の稱。萬「わがためと織る女(タナバタ)の其の屋戸に、織る白布は織りてけむかも」二初秋の頃、天の河邊に現はるる星の名。織女星。猶、たなばた(棚機)を見よ。萬「ひこぼしは織女(タナバタ)と、あめつちの分かれし時ゆ、いなむしろ川にむきたち」同「ひこぼしと織女(タナバタ)とこよひ逢ふ、天の河戸に波立つなゆめ」勢語「狩りくらしたなばたつめに宿からん、天の河原に我れは來にけり」

たなばたつひめ 棚機姫 (名) 前條に同じ。

たなばたまつり 棚機祭 (名) 七月七夕に織女を祭る祭。きこうでん(乞巧奠)を見よ。宇津保下「七月七日中略たなばたまつり、こなたかなたとせさせ給へり」枕「八日ぞかへらせ給へば、七夕まつりなどにて、例より近う見ゆるは程のせばければなめり」

たなばたをどり 棚機踊 (名) 棚機祭の夜、少女どもの集まりてなす踊り。還魂紙料「七夕節」

たなばん 店番 (名) ばんたらう(番太郎)に同じ。

たなびき 棚引 (名) たなびくこと。大代勝事記「孫母・官女は夷の手にしたがひて舊里に歸り、內府の生捕たなびきの雲にいりて、江州の粟津にかへりて首を京にさらす」

たなびく 棚引 (自動カ) 雲・霞など、薄く横に長く引く。神代紀「清陽者薄靡(タナビ)爲天」萬「おくれゐて我れはや戀ひむ、春霞多奈比久(タナビ)山を君が越えいなば」同「夕されば雲る多奈比吉(タナビ)」鏡「輕引三

たなびく あめ 棚引雨　風のために靡きて降る雨。夫木「しらま弓いそへの山の秋風に、たなびく雨や木の葉なるらん」

たなびく 棚引 (他動カ) たなびかしむ。雲霞の如く長く集め連らぬ。平家三法皇「數千騎の軍兵を霞(ビキ)て、都へ歸り入り給ふ由聞こえしかば」

たなひち 手肱 (名) 手のひち。ひち。祝詞式祈年「手肱(タナヒち)」水沫饗垂」

たなぶるまひ 店振舞 (名) 商家にて轉宅したる時などの饗應。

たなまはり 店廻 (名) 職人などの、關係ある店をまはりあるくこと。

たなもの 店者 (名) 商店などに勤め居る番頭、又は手代などの稱。浮世風呂「生が入聲だにの、店者上がりだから、女珍らしいのよ」

たなもり 棚守 (名) 神職の名。京都の祇園、安藝の嚴島、伊豆の三島社等にあり。

たならし 田均 (名) 一田を平らに均(ならす)こと。二農具の一。前後の兩板に跨り乘りて牛に曳かせ、中軸の轉ずるに隨ひ、羽板にて田土を平にならす裝置のもの。成形圖說「碌碡(タナラシ)」

たなり (句) たるなりの約轉。宇津保藤原御門きこしめして、あやしく隱れにし童まうできたなりとの給ひて、めして仰覽するに」同忠仁「うちよりおとど召す、おとどかしこきこときこしめしたなり」

たなる 手馴 (自動下二) 手に馴る。馴る。躬恒集「冬すぎばなれおかれたなん物ゆゑに、君が手にはたたなるべらなり」

たなれ 手馴 (名) 一たなるること。手に馴れたること。持ち馴れたること。萬「ことはぬ木にもありとも、わがせこが多那禮(タナレ)のみ琴つちに置かめやも」夫木「昔聞く君がたなれの琴ならば、夢に知られてねをもたてまし」二馴らしたること。飼ひ馴らしたること。後撰雜三「わが宿の一むらすすき刈りかはん、君が手なれの駒もこねかな」夫木「とやかへるたなれの鷹を手にする丞て、きぎすなくなるかた野へぞ行く」

たなれぐさ 種井 (名) 【植】きく(菊)の異名。

たなね 種井 (名) 秦、苗代を作る時、稻種を漬すために掘る井。たないけ。一說、田な井にて、田の中の井なりと。經濟本草拾遺雜二「我がためはたなるの清水ぬるけれど、猶かきやらん扇は澄むやと」夫木「秋刈りしむろのをしねを思ひ出でて、春ぞたなねに種をかしける」

たなん 一多難　難儀多きこと。災難多きこと。詩經小雅王事多難、維其棘矣」禮記曲禮「國家多難」

たなんぷ 一多男父　五男以上ありて皆正丁たるにより、其の父の課役を免ずること。

たなんぷちやう 一多男父帳 (名) 王朝時代、多男父に關する事項を記入せる帳簿。政事要略「人帳枝文」「男父帳」

たに 谷 (名) 一地・緩父は急なる斜面地が、兩側より來たり會する所の中間の一帶の凹地。鐵砲・斷層等の地體構造の作用、或ひは流水・氷河等の侵蝕作用によりて生ず。記「み多邇(タニ)二わたらす」萬「多爾(タニ)せばみ峰にはひたる玉葛、絕えむの心あがもはなくに」和名「谿、水出山入川曰谿太賀」やつ(谿・特類食下・鹿呼)や江言(谿呼)

たに の 谷片岨　谷の一方の岨(ソバ)。谷の險屋。夫木「何ごとを松の古木の徒らに、谷のかたそに朽ち殘るらん」

たに の こころ 谷心　谷の底。朗詠「群源碎叩谷心寒」新六帖「しづかなる谷の心の深きをも、入らでは人の知らんものかは」

たに の こゑ 谷聲　谷の空虛なる處に反響する聲。諸集「嶺の風や谷の聲、夕べの烟・朝霞」

たに の したいほ 谷下庵　谷の低き處に構へたる庵。諸集「谷の下庵見苦しく共、程經る雪の晴間まで、御身を休め給ふべし」

たに の したみち 谷下道　谷間にある道。新六帖「入るまでも末こそ見えね、かくらくのはつせの山の谷の下道」

たに の したみづ 谷下水　谷間を流るる水。後撰戀二「磐瀨山たにの下水うちしのび、人の見ぬまは流れてぞふる」

てもいへり中略八錢。山、おすか或谷の字をゆつといふ故記人の間に通へる故也」

たに の いはぐみ 谷巖組　谷の巖石の組合せ。谷の巖石の配置。傾城酒呑童子「ひらぎの長が廣庭の、光琳風の築山を中略谷の巖組つづるをり」

たに の いはみち 谷岩路　谷間の、岩石あるけはしき路。夫木「今日よりは谷の岩道雪ふりて、跡たえぬべき山のべの里」

たに の うぐひす 谷鶯　谷間に棲む鶯。文武五人男「廣設「谷の鶯一聲を松が崎」

たに の かげくさ 谷陰草　谷かげに生ふる草。續拾遺「光なき谷のかげ草なかなかに、霜に知られぬ人も有りけり」

たに の かたそ 谷片岨　谷の一方の岨(ソバ)。谷の險屋。夫木「何ごとを松の古木の徒らに、谷のかたそに朽ち殘るらん」

たに の こころ 谷心　谷の底。朗詠「群源碎叩谷心寒」新六帖「しづかなる谷の心の深きをも、入らでは人の知らんものかは」

たに の こゑ 谷聲　谷の空虛なる處に反響する聲。諸集「嶺の風や谷の聲、夕べの烟・朝霞」

たに の したいほ 谷下庵　谷の低き處に構へたる庵。諸集「谷の下庵見苦しく共、程經る雪の晴間まで、御身を休め給ふべし」

たに の したみち 谷下道　谷間にある道。新六帖「入るまでも末こそ見えね、かくらくのはつせの山の谷の下道」

たに の したみづ 谷下水　谷間を流るる水。後撰戀二「磐瀨山たにの下水うちしのび、人の見ぬまは流れてぞふる」

たに の しらいと 谷白絲　谷間に落つる瀧。夫木[三]「山のはもしぐれはまだき朝日影くれなゐにほふ谷の白絲」

たに の と 谷戸　谷の入口。たにぐち。拾遺[雜春]「谷の戸をとぢや果てつる鶯の、待つに音せで春も過ぎぬる」

たに の とぼそ 谷扉　谷間にある家。風雅[雜中]「人訪はぬ谷のとぼそのしづけきに、雲こそかへれ夕暮の山」

たに の のきば 谷軒端　谷間の家の軒端。風雅[雜中]「雲しづむ谷の軒端の雨の暮、閉きなれぬ鳥の聲もさびしき」

たに の ふるさと 谷故里　鶯などの、谷間の故巣。現六帖「みよしのは谷のふるさと近ければ、先づ馴れそむる鶯の聲」

たに の ほら 谷洞　谷間にある石の洞。枕[八]「たにのほら」

たに 商布（名）【手布[タ]の轉なりと】古昔、調庸に用ひずして、自家の服用又は賣品とせる布帛。續紀[六、和銅元年]「以ㇾ商布二丈六尺爲ㇾ段、不ㇾ得ㇾ用ㇾ常」三代實錄[十八、貞觀十二年十二月廿日]「定ㇾ交易商布直稻十束、凡商布直六束」和名[二]「商布多爲」

たに （名）【動】だに（壁蝨）の古名。和名[十]「蝨天竺集」學匠の房近き所に蟻と蟻[ヒル]と有りけり」

だに 駄荷（名）駄送の荷物。源氏十二段長生島臺[三]「今宵の中、駄荷ども數多拵へて」譯肝錄[文政五年、切支丹之內]「駄荷。四拾貫目」

だに 壁蝨（名）【動】節足動物中、蜘蛛類の一目。此の類は何れも寄生生活を營み、主として陸上動物を宿主とし、其の血液を吸收す。頭胸部癒合し、腹部は圓形又は楕圓形、無節なり。口器は刺螫し、血液を吸收するに適す。肢は幼蟲にては三對なれども、後、四對となる。直接に人畜を害する外、他の病毒を媒介するものあり。たに。

だに （助）輕きを擧げて、言外に他の重きを知らしむるに用ふる語。ですら。でも。こればかり。せめて是れなりとも。記[二]「心を陀邇[ヒ]か、あひ思はずあらむ」枕[三]「白樫[中]三位・二位の上の衣染むる折りばかりぞ、藥をだに人の見るめる」源[帚木]「はかなき事だに、かくこそ侍れ」同[同]「かかる心だに失せなば、いと哀れとなん思ふべき」

だに も だにに同じ。神武紀「いま儲而毛[モ]、あどよ」皇極紀「にはのべに小猿米燒く、こめ多爾[ダ]毋[モ]たげて通らせかましして、いき陀爾[ダ]毋[モ]い、だやすめず」

たに-あさ 谷麻（名）【植】やましばの異名。

たに-あひ 谷閒（名）谷と谷との間。たにま。夫木[三]「しげ山のそがひの道のたにあひは、夏とて風の吹かぬまもなし」

たに-あぶひ （名）【植】うすばさいしん（細辛）の異名。

たに-あまちゃ 谷甘茶（名）【植】ばいくわあまちゃの異名。

たに-いし 谷石（名）谷にある石。夫木[三]「わが心くだけ落ちたるたにいしを、ひきあぐる人のなきぞかなしき」

たに-うつぎ 楊梳（名）【植】忍冬[ニンドウ]科、錦帶花[キンタイクワ]屬の落葉灌木。韓の高さ七八尺。葉は對生、卵形にして尖り、鋸齒を有し、下面に毛を具ふ。六月頃、帶赤色の長き合瓣花冠を有する花穀筒を狹生す。我が國、山地に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。あかうつぎ。あかちやうじ。あかつげ。いないうつぎ。うのはな。すくなうつぎ。すくなしば。べにうつぎ。べにさきうつぎ。

たに-うまくば 谷馬鍬（名）農具の一。溝の土くれを割るもの。農具便利論[三]「谷馬鍬[ヤマクワ]溝の塊わる具」

だにえる-でんち （名）【理】硫酸銅の飽和溶液を入れたる器内に、稀硫酸を入れたる素燒筒を立て、硫酸銅中に銅を、稀硫酸中に亞鉛を浸して電極となしたるもの。電動力一・〇八ヴォルトと。電信及び電鈴等に用ひらる。（英 Daniel's cell）（——電池）

（ちんでるえにだ）

だにえる-の-しつどけい （名）【理】露點を測定する裝置。兩端に球を有する硝子曲管の一球に小寒暖計を入れ、更に此の球にえーてるを入れ、管内の空氣を排除して管を封じたるもの。今他の球にえーてるを注げば其の蒸發に要する氣化熱を吸收するにより、球内のえーてる蒸氣は凝縮し、ために管内を減壓するにより、寒暖計の球を浸せるえーてるは盛んに蒸發し、之に要する氣化熱をえーてる自身より取り、ために球の溫度降下して、其の外部に曇り、即ち、露を生ず。此のとき球内の寒暖計の示す溫度は、即ち、其の時の露點なり。露點及び時の氣溫を知れば、因りて大氣の濕度を知ることを得。（英 Daniel's hygrometer）（——濕度計）

（いけどつしのえにだ）

たに-おろし 谷下（名）谷より吹きおろす風。谷の風。夫木[三]「たにおろしの風しやまねば夜とともに、おきつが原にくぬぎ波たつ」

たに-かう 谷行（名）修驗者が峰入の時、同行者に病人あれば谷におとし入るること。謠曲[百]「此の道にて、かやうに違例する者をば、谷行とて、怒ち命を失ふ事、是れ昔よりの大法なり」

たに-がくれ 谷隱（名）谷の閒。谷のかげ。夫木[三]「音もせでたにがくれなる山吹は、ただくちなしの色にぞありける」

たに-かげ 谷影（名）谷の影になり居る所。續千載[雜中]「螢つぎ松の梢を吹きすぎて、あらしもとはぬ谷かげのいほ」謠曲[草木]「草木を分けて、谷陰の梨りを道に足引の」

たに-がし （名）【植】いまめがし（青剛樹）の異名。

たに-かぜ 谷風（名）【地】こくふう（谷風）に同じ。古今[春上]「たにかぜにとくる氷のひまごとに、うち出づる淚や春の初花」

たに-がは 谷川（名）谷閒を流るる川水。萬[十]「おほ君のみかさの山の帶にせる、ほそ谷川[ガハ]の音のさやけさ」金葉[秋]「谷川にしがらみかけよ立田姫、みねのもみぢに風ふくなり」

たにがは-やなぎ （名）【植】ねこやなぎの異名。

たに-ぎきやう （名）【植】桔梗科、たにぎきやう屬の草本。莖の高さ三四寸、柔軟、纖弱なり。葉は卵圓形にして鋸齒を有し、互生す。夏日、梢葉上に花莖を抽ること一寸許り、白色にして微紅紫色を帶びたる五裂の鐘狀花を開く。我が國、山閒の陰濕の地に自生す。ゆきのした。

たに-ぎる 手握（自動）拳[ケン]を握り固む。莖[十]「面忘れだにもえすやと、手握[ヲ]て打てども發りず怒の奴は」

たに-ぎる 手握（他動）手に握[ヲ]る。にぎる。萬[十]「ますらをの男さびすと、

劒たち腰に取りはき、さつ弓を多爾伎利[タニキリ]もちて」同[十]「はじ弓を多爾[タニ]伎利[キリ]たし、まかご矢を手挾み添へて」

たに-にく 一多肉（名）肉の多きこと。

たに-にく-えふ 一多肉葉（名）【植】瀧蘭[ラン]分を貯藏せる葉。百合の地下莖の鱗片の類。

たに-ぐく 谷蟇（名）【動】ひきがへる（蝦蟇）の異名。祝詞式[卷八、祈年]「谷蟆[ヒキ]聞狹度極」萬[十]「天雲のむかふすきはみ、多爾具久[タニグク]のさわたるきはみ」

たに-ぐくわ 一多肉果（名）【植】果皮の肉質なる果實。梅・桃・梨等の果實の類。

たに-ぐち 谷口（名）谷の入口。たにのと。

たに-くば （名）【植】ふさくらの異名。

たに-ごし 谷越（名）谷を隔ててすること。風雅[冬]「谷ごしに草取る麓を目にかけて、行く程おそきしばの下道」義經記[五、兄弟信吉]「惡所もきらはず、たにごしにをめきてぞかかる」

たに-ざく 短冊（名）たんざく（短冊）に同じ。

たに-にし 田螺（名）【動】軟體動物中、腹足類の一種。殼の高さ一寸餘なるもあり。殼口廣く他端狹くして、螺層明かなり。殼は薄くして蒼黃色又は蒼黑色をなす。水田其の他の淡水中に棲息して、胎生す。其の肉は食用に供せられ、又、雞の雛の飼料として佳なり。たつび。つぶ。〔謎〕田螺もなまぐさもの　つまらぬものにても傷るべからざる譬へ。和歌民のかまど「田螺もなまぐさもの」

たに-しあへ 田螺蜜（名）田螺をあへものにしたる料理。燕村句集「なつかしき津守の里や田螺あへ」

たに-すけ （名）【植】かはらすげの異名。

たに-ぜり 谷芹（名）【植】のだけ（前胡）の異名。

たに-そこ 谷底（名）谷のそこ。新六帖[二]「扨も世にくだりはてたる身の程は、すみかもしるし谷底の庵」太平記[十八、弘法]「瓜生は釜ねて案の闕に、敵を谷底へおびき入れて」

たに-そば 谷側（名）谷の傍。谷のほとり。夫木[三]「初瀨山たにそば分けて板びさし、した吹く風に梅の香ぞする」

たに-そば （名）【植】蓼科、たにそば屬の一年生草本。莖の高さ五六寸乃至二尺、分岐密なり。葉は三角形又は槍穗狀、長さ一二寸、裏面に腺狀の小點あり。葉脚は葉柄に沿ひて翼をなし、耳形をなして莖を抱く。花は頭狀に排列し、白又は淡紅にして、花期は夏より秋に至る。我が國、山地に自生す。あかづら。そばたで。

たに-そば-かげ 谷側蔭（名）谷そばの蔭になりたる處。唐船噺今國姓爺[ヒキ]「峨峨たる巖石つづらをり、負うて立つたる谷そば陰も、心いそいそ道急ぐ」

たに-たけ （名）【植】たいせい（慈藍）の異名。

たに-たで （名）【植】柳葉菜科、たにたで屬の多年生草本。莖の高さ一尺許り、稀に二尺を超ゆるものあり。葉は對生、有柄、二寸許り、長卵形にして末端尖り小鋸齒を有す。夏日、莖頂に枝を分かち、總狀花序を生じ、粉紅白色の細花を綴る。果實は長卵形、長柄を有し、鉤毛をつく。我が國、深山に自生す。たかたで。

たに-ぢ 谷路（名）谷閒の路。燕村句集「谷路ゆく人は小さき若葉かな」

たに-つづき 谷續（名）谷より谷に續きたること。夫木[三]「谷つづきそがひに見ゆるまきのやの、うへ白妙に結ぶ初霜」

たに-はぎ （名）【植】よつばはぎの異名。

たに-ふけ 谷深（名）谷の深き處。平家[九、敦盛最期]「谷ふけをも不ㇾ嫌」

たに-ふところ 谷懷（名）谷閒の山と山とに圍まれたる處。新六帖[二]「秋はきぬ衣は薄きうたたねに、たにふところも風ぞ身にしむ」散木集[雜山]「櫻谷ふところに木隱れて、風そよめきて花求むなり」

たに-べ 谷邊（名）谷のほとり。萬[十]「山高み谷邊[ベ]には、へる玉葛、たゆる時なく見るよしもがも」

たに-ま 谷閒（名）たにあひ（谷閒）に同じ。

たに-みづ 谷水（名）谷閒を流るる水。溪水。續後撰[雜中]「影うつす朝な朝なのたに水に、うきよ離れて住むかひもなし」謠曲[草木]「谷水をせく水口に五十串立て、苗代小田の種蒔きにけり」

たに-みつば （名）【植】繖形科、みつばぐさ屬の草本。莖は中空、平滑にして、二三尺の高さに達す。葉は互生し、羽狀複葉にして、下部にあるものは五筒の小葉より成り、上部に位するものは三箇の小葉より成る。小葉は披針形或は廣披針形にして、細鋸齒を具ふ。花は小形、白色にして、複繖形花序をなす。果實は離果なり。我が國、山地に自生す。きそみつば。

たに-りう 谷流（名）【流祖、僧皇慶、比叡山の東塔南谷に住せるよりいふ】佛語。山門眞言派の一派。僧皇慶を流祖とするもの。密門雜抄[山門]「山門、古へは慈覺大師の下、谷流と川流との二流なり、皇慶は東塔南谷と云ふ處に住し玉へば、皇慶の流を谷流と云ひ、慈慧大師は多く横川に住し玉へば川流と云ふ」西山上人傳報恩抄[三]「谷流とは無動寺谷法曼院相實法印の流を云ふ、無動寺谷より起こる故、谷流といふなり」

たに-わたし （名）【植】㊀なんてんはぎの異名。㊁運槲[ウツボ]の枝葉[ヨウ]なるもの。

たに-わたり 谷渡（名）㊀谷にたはること。谷に生えわたること。爲尹千首[雜]「抽河や紅葉の枝の谷わたり、紅くぐる秋の筏し」㊁谷より谷に渡り行くこと。

たに-ん 一他人（名）㊀自身以外の人。ほかの人。狂言[虎寅物]「其の太刀は、他人の目にはくちなはに見えまして」民法[第百九條]「第三者に對して他人に代理權を與へたる旨を表示したる者は其代理權の範圍内に於て其他人と第三者との間に爲したる行爲に付き其責に任ず」詩經[唐風]「誚ㇾ他人父、亦莫ㇾ我顧」史記[蘇秦]「燕王奢、遂詐論ㇾ他人父、殺ㇾ勝家屬」㊁直緣なき人。親族に非ざる人。狂言[末廣]「二世をかねた妻とても、退けば他人ぢや」俳諧新選[冬]「泉岳寺父母・夫・妻・子・孫及び其の配偶者、又は同居の兄弟・姉妹以外の人。刑法[第三百七十二條]「他人共に犯して財物を分ちたる者」㊂其の事に關係なき人。㊃他人がましきこと。他人行儀。疎外する擧動。續留[三]「初めの程こそ日夜に行き見舞ひもすれ、月を重ねて煩ひになれば、いつとなく他人のあらはれける」

たにん に す 他人あつかひにす。疎外す。

〔諺〕他人の食ひ寄り、鯛の泣き寄り 家に衰ある時、他人は愛嬌にありつくために寄り集まり、喪戚は泣哭する至情のために集まるといふこと。

〔諺〕他人の病氣を聞いて病む 直接に我が身に關係なきことを氣にかく。

(誹)他人の空似　血族の關係なくして、容貌などの偶然によく似たること。

(誹)他人の中を履む　世情に通ずるなどのため、他人の中に交はる。

(誹)他人の飯を食ふ　家を離れて他人の處に奉公す。世間の經驗を嘗む。

(誹)他人の弓を挽かざれ　主あるものに手を出だす勿れ。漢語大和故事「他人の弓を挽かざれ」鑑古錄「妙喜曰、他弓莫挽、他馬莫騎」

(誹)他人の別れ棒の蝋　夫婦などの離別せし後は全く他人となりて、木屑の如く顧みざること。

(誹)他人はこはいもの　人の心は測り難く險惡にして恐るべきもの。

(誹)他人は時の花　他人は一時の花の如く、永久には頼むべからざること。釋迦如來一代記「これ見給へや夫婦の人、他人は時の花なれや、親は誠のせんなりとは」

たにん-あつかひ　他人扱　(名)　親族の人を情愛なく他人と同樣に扱ふこと。疎外すること。

たにん-ざやうぎ　一他人行儀　(名)　親密ならざる他人に對する如き待遇。

たにん-にんず　一多人數　(名)　多くの人。多數の人。おほぜい。衆。

たにん-づきあひ　他人附合　(名)　普通の交際にて、親戚間の如き特別の情愛なきこと。

たにん-むき　他人向　(名)　他人同志の如き情愛なきさま。生玉心中「主人が見る目憚りて、他人向きなる折柄に」鶏衣洲「風雅に喰ひ寄りの他人向きを離れ」

たにん-やど　他人宿　(名)　親戚に非ざる、普通の他人の宿屋。浮世風呂「他人宿に雛用を拂ってまどついて居るには増しだから、居てやるんだなんぞと太平樂さ」

たぬ-ぬき　手貫　(名)　て(籠手)に同じ。和名抄「韝太沼岐」

たぬき　狸　(名)　一動)哺乳動物中、食肉類の一種。體形狐に似て小さし。眼邊は白色にて、鼻邊は黑色なり。總身に暗灰色の毛を被り、たまたま黑褐色の長毛を混じ、尾は太くして房狀をなす。夜間出でて食を求む。我が國の各地に產すれども、豆南諸島・沖繩以南には產せずと云ふ。肉は食ふを得べきも臭氣あり。毛は筆を作り、皮は防寒用に供す。和名抄「狸多賀波、鳥獸粮也」平家六「思ふに、狐・たぬきのしわざにてぞあるらん」名義抄「狸ムジナ、タヌキ」二人を欺き　いつはること。又、其のもの。國姓爺後日合戰「やいやい、其處な狸め」三たぬきねいり(狸寢入)の略。假名文章娘節用「且那もし、もう狸で御逃げなさるね」四たぬきじる(狸汁)の略。獲絨輪「寮の窗つまはこがさじ扇なりの句結句狸汁にばける昆蘭」

たぬき　の　さわたり　狸の四足。庭訓往來五月「狸澤渡」註手足事也」天神記「家の燒皮、熊の掌、狸の澤渡、猿の木取り」

たぬき　の　はらづつみ　狸腹鼓　狸が冬・春の際、月の照る處に出で、腹を鼓して樂しむといふこと。夫木「人すまで館も晉せぬ古寺に、狸のみこそ鼓うちけれ」

(誹)狸が人に魅される　人をだまされんとして、却って人にだまされる譬へにいふ。たらしがたらしにたらされる。

(誹)狸の睾丸てまた一杯　股一ばいに、又一杯をいひかけたる酒落。

(誹)狸の睾丸八疊敷　狸の陰囊の大なること。

(誹)狸の念佛　永く續かざること。嘲りいふ語。

たぬき-ぐま　狸隈　(名)　芝居の役者の隈どりの一種。

たぬき-じる　狸汁　(名)　一狸の肉を味噌汁にて煮たるもの。古くは酒の糟などにて燒皮料理にしたるものの稱。料理物語「狸汁。野はしりは皮をはぐ、みたぬきは、やきつぎよし、味噌汁にて仕立て候、妻は大こん・ごぼう其の他色色、すひロにんにく、だし酒鹽」二蒟蒻を味噌汁にて煮たるもの。又、蒟蒻・豆腐・赤小豆を味噌にて煮たるものの稱。

たぬき-ぢい　狸爺　(名)　狡猾なる老人を罵りていふ語。唐船噺今國姓爺「狸爺め、逃さぬ」

たぬき-ねいり　狸寢入　(名)　眠りたる風をよそふこと。空ねむり。そらねいり。浮世物語「たぬきねいりをして居たるものあり」吉野都女楠「はて手の惡い狸寢入り、酒代早うと搖り起こす」

たぬき-ねぶり　狸眠　(名)　前條に同じ。

たぬき-ねむり　狸眠　(名)　前條に同じ。

たぬき-ばば　狸婆　(名)　狡猾なる老婆を罵る語。織留「引く手になびく狸ばば」

たぬき-ばばあ　狸婆　(名)　前條に同じ。

たぬき-ぶえ　狸笛　(名)　玩具の一。狸の形の凞に最も働草なる風琴の裝置ありて、伸縮して鳴らす。

(えぶきぬた)

たぬき-まめ　(名)　【植】豆科、たぬきまめ屬の一年生草本。莖の高さ一二尺。葉は互生、披針形、葉面は深綠色にして毛なく、葉背は淡くして莖と共に銹毛を生ず。夏秋の候、莖頭に淡紫色の多くの花を密生す。我が國、原野に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。ねこまめ。野百合。

たぬき-も　狸藻　(名)　【植】狸藻科、たぬきも屬の水生草本。莖は細長にして絲狀の如く、葉は互生にして、多數の枝を有し、枝の諸所に小囊を具へ、小蟲を捕獲す。夏日、葉腋より高く花梗を抽き、黃色の脣形花冠を有する花數箇をつく。我が國、池澤・水田等の流動少なき淡水中に自生す。ひえも。水豆兒。

(もきぬた)

たぬきも-くわ　狸藻科　(名)　【植】顯花植物、雙子葉類の一科。水中・濕地又は岩石上に生ずる草本。根は往往缺如す。莖は細長、枝を有するか、或ひは甚だ短し。花莖は常に直立す。葉は全邊、分裂せず、或ひは細裂す。花は不整齊にして兩性。蕚は二箇稀に五箇、雌蕚は二心皮の結合せるものにして、一室の上位子房を有す。胚珠は多數あり。果實は蒴、種子には胚乳なし。たぬきも・むしとりすみれの類は之に屬す。此の科の植物は溫熱兩帶に產す。

たぬき-らん　(名)　【植】沙草科、藺屬の冬年生草本。莖の高さ一尺餘に達す。葉は細長、幅二分許りあり。初夏、梢上に三四箇の細梗を出だして花穗を生ず。穗は單性、上方一箇は雄花穗にして、下方の數箇は雌花穗、何れも比較的大形にて、狸の尾に似たり。我が國、深山に自生す。

たぬし　田主　(名)　田の所有主。夫

木。早苗とりおのが作らぬ秋の田を、かりにきぬとや田ぬし咎めん」

たぬし　樂　(形ク)　たのし(樂)に同じ。記「うた陀怒斯、さき」同「山がたに蒔ける青なも、きび人と共にし摘めば多怒斯久もあるか」萬「月たち春の來たらば、かくしこそ梅を折りつつ多努之岐をへめ」

たぬま-がけ　田沼懸　(名)　(田沼主殿頭の工夫せしよりいふ)　淺き口を一つ附けて、楊枝などを入るるやうにしたる鼻紙袋。

たぬま-はり　田沼張　(名)　江戸下谷池の端の住吉屋清兵衛の創製せる烟管の一種の形。

たね　種　(名)　一草木の芽を生ずる基となるもの。神代紀「以御種而下」字津保藤原「はらへすとも、うちまきによねいるべし。籾にてたねなさば多くなるべし」源東屋「兵部卿の宮の萩の、なほことにおもしろくもあるかな、いかでさるたねありけん」二果實の核。三生物の發生する基。「蠶のたね」四血すぢ。系統。子孫。後裔。名義抄「族マヤスハ」枕「さうなしのぬし、尾張うどのたねにぞありける」源常夏「あなめでたの我が親や、かかりけるたねながら、小家に生ひ出でけること」風。五物を作成すべき基。製作の原料。「菓子のたね」神代紀「物根」六物事の發生する基因。事のおとり。萬「かみひむとや多嗣求めけむ」古今序「大和歌は人の心を種として、萬の言の葉とぞなれりける」大和物語「春の野に生ひしとぞ思ふ忘れ草、つらき心のたねしなければ」源東屋「數ならぬ身にも思ひのたねを、やいとどまかせて見侍らん」七技術を施すもと。手段を施す材料。「手品のたね」吉野忠信「此の儀を梶原種にとり、萬端過言せしむるなり」八事の準據すべき基となるもの。「種本」九汁などの實。

たね　かす　種滓　種稻を水に浸す。夫木「賤の男が小田のなは代しめは(つ、室の早わせ種かしつらむ」同「秋刈りしむろのをしねを思ひ出でて、春ぞたな井に種をかしける」

(誹)種のない放下はつかはれぬ　種のなき手づまは出來ぬ。はうか(放下)の條を見よ。

(誹)種ふくべの底をたたく　殘す所なく底を拂ふ。

たね-あかし　種明　(名)　手品師などが、手品のたねをあかして說明すること。

たね-あぶら　種油　(名)　菜種より搾り取りたる油。なたねあぶら。女殺油地獄「とろりとせいも種油、梅花紙こし荏の油」

たね-いた　種板　(名)　寫眞器內にて露出したる乾板に、現像・定著の手續を施して得たる硝子板。物體と黑白相反す。之を感光紙に寫てて燒きつけをなし、以て寫眞を得る原となすもの。

たね-いも　種芋　(名)　種とする芋。芭蕉句集「たね芋や花の盛りに賣りあるく」

たねうし　種牛　(名)　其の種類の改良、又は蕃殖のために飼ひおく牛。

たねうし-ぼくぢやう　種牛牧場　(名)　明治四十一年四月以前、農商務大臣の管理の下に、畜牛の改良蕃殖・育成及び其の試驗並びに練習、畜產物の製造及び其の試驗並びに練習、種牛の配布及び監督、畜牛の飼料の栽培及び其の試驗に關する事務を掌りたる官廳。場長・技師・技手・書記の職員を置く。明治三十三年三月勅令第八十八號種牛牧場官制「種牛牧場」

たねうし-ぢやう　種牛牧場　(名)　種牛牧場の職員。技師を以て長に充て、農商務大臣の指揮・監督を承けて場務を掌理するもの。

たねうま　種馬　(名)　其の種類の改良、又は蕃殖のために飼ひおく馬。

たねうまいくせいじよ　種馬育成所　(名)　馬政局の事務を分掌する地方官廳。幼種馬の育成及び調數、並びに飼料の耕作に關する事務を掌るもの。馬政局官制第三條「種馬育成所」

たねうまいくせいじよ-ちやう　種馬育成所長　(名)　馬政局の職員。上官の指揮を承けて、種馬育成所の事務を掌理するもの。馬政局官制第十條「種馬育成所長」

たねうまじよ　種馬所　(名)　馬政局の事務を分掌する地方官廳。種馬の飼養・管理及び種附に關する事務を掌るもの。馬政局官制第三條「種馬所」

たねうまじよ-ちやう　種馬所長　(名)　馬政局の職員。上官の指揮を承けて種馬所の事務を掌理するもの。馬政局官制第十條「種馬所長」

たねうまぼくぢやう　種馬牧場　(名)　馬政局の事務を分掌する地方官廳。種馬の蕃殖及び飼料の耕作に關する事務を掌るもの。馬政局官制第三條「種馬牧場」

たねうまぼくぢやう-ちやう　種馬牧場長　(名)　馬政局の職員。上官の指揮を承けて種馬牧場の事務を掌理するもの。馬政局官制第十九條「種馬牧場長」

たねおろし　種卸　(名)　たねまき(種蒔)に同じ。名義抄「稼ホカヒハシル」蘆村句集「古川の流れを引きつ種おろし」

たねがき　種柿　(名)　一實の中に核の多き柿。二柿の實の核の奇偶。

たねかし　種子島　(名)　(種子島は大隅國熊毛郡に屬する島。天文十二年八月、葡萄牙人の始めて此の地に鳥銃を持ち來たりしより、いふ)一銃。鳥銃。大友興廢記「鐵炮、倉藏」「種が島を矢倉に仕かけて、兩大將と覺しきを一人打倒す」二短く小さき銃。ひすとる。三香の名。十文字。火來は較若に同じ。

(一せしがねた)

たね-かす　優　(名)　兄弟・姉妹にて、同母異父のもの。たねちがひ。(はらがはりの對)

たね-がはり　胤變　(名)　農具の一。つちわり(槌)に同じ。伊呂波字類「槌カナヅチ也」

たね-がみ　種紙　(名)　さんらん(蘭)卵紙に同じ。

たね-ぎれ　種切　(名)　一種の皆無となりたること。二材料の絕えたること。

たね-ねずみ　田鼠　(名)　【動】哺乳類中、嚙齒類の一種。鼠に比して小なり。背部は暗灰色、腹部は淡色。常に耕地に坑道を穿ちて棲息し、作物を害すること大なり。

たね-せん 種銭 (名) 銭を鑄る時、鑄型(ヒ)を作るために用ふる銭の模型。翁草[十五]。「種銭を蒔く(種銭は上に同じ。好の銭を模して、之を鑄かせ、之を鑄て種銭とす)」

たね-たがご 種卵 (名) 種取りのために残しおく卵。

たね-ちがひ 胤違 (名) たねがはり(胤變)に同じ。(腹違の對)

たね-つけ 種附 (名) 同じ耳き種類の子を生ますため交尾せしむること。馬政局官制[昭三]。「種馬の飼養管理及種附に關する事務」

たねつけ-ばな 碎米薺 (名) 【植】十字花科。碎米薺屬の一二年生草本。莖の高さ六七寸。葉は互生、羽狀複葉にして、多數の小葉より成る。四五月頃、白色の小花を總狀花序に排列す。果實は細長き裂果なり。我が國、到る所の路傍・畦畔等の濕地に自生す。食ふべし。かはからし。かはたかな。げげばな。しづな。たがらし。

たね-とり 種取 (名) 一子を殖やすために業ひおくもの。二新聞に載すべき材料を探り來たること。又、其の人。探訪。

たねーどり 胤鳥 (名) 子を殖やすために飼養する鳥。

たね-なし (名) 【植】うきくさ(水萍)の異名。

たね-なすび 種茄子 (名) 種をとるため摘み取らずに残しおく茄子の實。俳諧古選[蕪]。「秋の野や入日の果ての種茄子」

たねーはら 胤腹 (名) 父と母と。父母。兩親。「心中刃氷朝日[上]。たねはら一つの兄も有り、妹も有れど」津國女夫池[近松]。「元來造酒廻と清藏とは胤腹各別」

たね-ばん 種版 (名) たねいた(種板)に同じ。

たね-ふくべ 種瓢 (名) 種を取るため、もぎ取らずに残しおくふくべ。燕村句集[蕪]。「あだ花にかかる恥ぢなし種ふくべ」太祇全集。「身一つをよせる籬や種ふくべ」

たね-ほん 種本 (名) 著作・講義又は書畫などの據所とする書物。原本。

たね-まき 種蒔 (名) 種を蒔くこと。特に、稻の籾を水に漬し、乾してもやしとしたるを、八十八夜前後に苗代に蒔くこと。たねおろし。運歩色葉「種蒔(マキ)」

たねまき-どり 種時鳥 (名) 【動】くわくこう(郭公)の異名。

たね-むし (名) 【植】くさねむ(合萌)の異名。

たね-もの 種物 (名) 一草木の種。たね。二汁物の實(ミ)。特に蕎麦切などに入るるものの稱。又、其の入れたる蕎麦切。

たねものーや 種物屋 (名) 種物を商ふ家。又、その人。たねや。

たね-や 種屋 (名) 前條に同じ。

たねーわた 種綿 (名) 未だ綿繰にかけずして、種子の存せる儘の綿。

たーねん 一他念 (名) ほかの思念。ほかの心。餘念。平家一[延]。「朝夕佛前に向かひ花香を備へて、他念なく願ひけるが」宇治拾遺[一]。「念佛は、他念なく申して死ぬれば」

たーねん 一他年 (名) ほかの年。將來の年。後年。運歩色葉「他年(ホカノ)」

たーねん 一多年 (名) 久しき年月。多くの年月。運歩色葉「多年(オホ)」諸國噺集[穀生石]。「石となって、人を取ること多年なれど」杜市詩「勞生繫二物、爲客費二多年一」

たねん-こん 一多年根 (名) 【植】植物學上の用語。多年にわたりて生存する根。

たねん-さう 一多年草 (名) 【植】植物學上の用語。たねんせいさうほん(多年生草本)の略。

たねん-せい 一多年生 (名) 【植】植物學上の用語。多年にわたりて生存すること。

たねんせいーさうほん 一多年生草本 (名) 【植】植物學上の用語。多年に亙りて、其の地下部の生存する草本。

たねんせいーしょくぶつ 一多年生植物 (名) 【植】植物學上の用語。多年にわたりて生存する植物。

たねんせいーほん 一多年生本 (名) 【植】たねんせいさうほん(多年生草本)に同じ。

たーのう 一多能 (名) 藝能多きこと。多藝。論語子罕[一]。「固天縱之將聖、又多能也」

だーのう 一惰農 (名) なまけたる農夫。怠惰なる農。書經[蕪]。「惰農自安、不昏作勞」

たのう-だーひと 賴人 (名) 我がたのみとする人。即ち、主人。大鏡[狂言]。「こちの賴うだ人の樣に、物を念に仰せ附けらるる御方は御座らぬ」

たーのかみ 田神 (名) 田を守る神。稻種を田にまき初むるとき、田の畔・水口にしめを張り、柏葉又は桐葉などに飯を盛り、酒を供へて祀る。藝藩通志[一]。「農夫分秧の初め、かならず田の神を祭る」

たーのき (名) 【動】たぬき(狸)の訛り。

たーのくさ 田草 (名) 稻田の中に生ずる雜草。はぐさ。

たのくさ-とり 田草取 (名) 田の草を取り除くこと。又、その人。

たのくさ-びき 田草引 (名) 前條に同じ。

たーのごひ 手拭 (名) てぬぐひ(手拭)に同じ。和名十四。「手巾(タナゴヒ)」靈異記[一]。「拔二敷布巾(タナゴヒ)一、敷・扇(ヒ)」打掃巾式[延喜]。たのごひーはこ 手拭箱 (名) うちみだりのはこ打亂箱に同じ。名義抄「巾箱(タナゴヒバコ)」。

たのし 一多能 (名) 【動】たにし(田螺)の訛り。

たのし 樂 (形シ) 快くよろこばし。心に滿足してうれし。おもしろし。たぬしむ。萬葉[一]。「くがねかも多能之氣久(タノシケク)あらむと思ひおもほして、したなやますに」古今[六]。「新しき年の初めにかくしこそ、千年をかけてたのしきをへめ」拾遺[賀]。「さざ波のながらの山のながらへて、たのしかるべき君が御代かな」

たのしーげ 樂氣 (副) たのしきさま。たのしさう。

たのしーさ 樂 (名) たのしくあるさま。たのしき度合。

たのしび 樂 (名) たのしみ(樂)に同じ。武烈紀。「拔人頭髮、使昇樹巔、斷倒樹木、落死昇者、爲快(タノシビ)」古今[序]。「たとひ時移り事去り、たのしび・かなしび行きかふとも」名義抄「樂・樂(タノシビ)」

たのしぶ 樂 (自動四) たのしむ(樂)に同じ。名義抄「娛(タノシブ)」

たのしぶ 樂 (他動四) たのしむ(樂)に同じ。

たのしみ 樂 (名) たのしむこと。なぐさみ。おもしろみ。きょう。たのしび。快樂。風雅集[上]。「悲くなく樂しみもなし我が心、嘗まぬ世はあるに任せて」夫木竹。「たのしみや實の池に深かられ、玉藻に遊ぶ鴨のむら鳥」

(諺)樂しみあらんよりは憂へなかれ　たのしき事のあるよりは、心に心配のなき方がよし。韓愈文[學生]。「樂於身、就若無憂於其心」

(諺)樂しみ極まりて哀しみ生ず　次條に同じ。史記[孝文]。「樂極則悲」漢武帝詩[歌]。「歡樂極兮哀情多」

(諺)樂しみ盡きて哀しみきたる　樂しみ

が極度になりて哀しみが出でくる。平家二[公]。「樂しみ盡きて哀しみ來たると書かれたる江相公の筆の跡」

たのしみ-させる 樂烟管 (名) 樂しみにのむ烟草。なぐさみにのむ烟草。戀入鉢柱[蕪]。「愛で一ぶく樂しみ烟管、さらば解ひを醒さうか」

たのしみ-ざけ 樂酒 (名) 樂しみに飲む酒。川中島合戰[傳]。「なぐさみに飲む酒。一引き二引き、惜しみ飲んだる樂しみ酒」

たのしみ-なべ 樂鍋 (名) よせなべの類にて、物を煮ながら食ふやうにしたるもの。

たのしむ 樂 (自動四) たのしく思ふ。おもしろく思ふ。愉快に感ず。雄略紀「奥盤于遊田(タノシム)」

たのしむ 樂 (他動四) たのしきものとす。好み喜ぶ。興味を感ず。「詩歌をたのしむ」

たのじ-も (名) 【植】でんじさう(蘭)の異名。

たーのひえ 莠 (名) はぐさ(莠)に同じ。字鏡「莠(田乃比江)」

たーの-へり 畔 (名) 田のさかひ。あぜ。

たのまーう 賴 (感) 人の家を訪問して案内を請ふ時いふ語。

たのみ 賴 (名) 一たのむこと。又、其のもの。たより。舒明紀「うねび山木立うすけど多能彌(タノミ)かも、けつのわくこのこもらせりけむ」竹取「さりともつひに男あはせざらんやはと思ひて、たのみをかけたり」二(鼻とたのみ、妻とたのみ、聟とたのみ、夫とたのむ)祝儀の義。(雄記)婚姻の結納。いひいれ。大機冠二「唐鞆に傳はる花原磬・潮濱石・面向不背の玉、此の三箇の寶を賴みの引出物にて、和國に渡し」

たのみ ある なか　賴有中　互ひに賴みとするに足る間柄。諸國噺[生]。「やたけ心の一つなるつはものの交はり、賴みある中の酒宴かな」

たのみ がた　賴難　賴み難きこと。賴みかねることと。勢語「さくら花けふこそかくも匂ふとも、あなたのみがた明日のよのこと」

たのみ がた な　たのみがたきこと。儀田兵衛名所歌[名所歌]。「恨めしの世の中や、賴み難なの人心や」

たのみ すくな　賴少　次條の語幹。保元[保元物語]。「いよいよ賴み少なになり果てて」

たのみ すくなし　賴少　たのみとするところ少なし。たのむもの少なし。望み少なし。保元[保元物語]。「近衛院御惱みおはせしが、七月下旬にはいとや憑み少なき事にて」

たのみ の いはひ　賴祝　結納の祝ひ。薩摩歌[一]。「なまなか半手問(ハヤ)取らうより、賴みの祝ひに皆進上にさっしやれ」

(諺)たのみも綱も切れはてた　賴みをかけし事も全く絶望に歸す。

たーの-み 田實 (名) 田にて熟したる稻の實。歌に多く賴みの義にかけていふ。古今物名[三]。「のち蒔きの後れて生ふる苗なれど、あだにはならぬたのみとぞ聞く」源明集[五]。「此のよのまうけに秋のたのみを刈り收め」

たのみ-あぐ 賴上 (他動下二) 御たのみ申す。御願ひ申す。狂言[松ゆづ]。「上とうへよろしう御取合せ賴み上げます」

たのみ-いる 賴入 (他動四) 賴む。たのみ込む。

たのみ-こむ 賴込 (他動四) 前條に同じ。

たのみ-だし 賴出 (名) 言ひ出だして賴むこと。二代男[五]。「大物日の賴み出しも、此の上に請け合ふ」

たのみ-だる 賴樽 (名) 婚姻の結納の樽。たのみ(賴)を見よ。一代女[五]。「色色と氣を讓くして樣的を入れて、たのみ樽押し懸けて送られける」五人女[三]。「隱れもなき仲人がたあり、是れを深く賴み樽のこしらへ願ひ首尾して」

たのみ-て 賴手 (名) 賴みに來る人。

たのみ-どころ 賴所 (名) 一たのみとするところ。たよりどころ。源[蕪]。「たのみ所なくならせ給ひにたる事と、嘆く人人多かり」信明集。「世の中のたのみどころにせしものを、長谷をばかくややかんと思ひし」二よるべとする所。通ひすむ所。本妻。源[末]。「つひのたのみ所には、思ひおくべかりけり」

たのーみの (名) 田の草。はぐさ。半饒「莠(田乃)」

たのみ-の いはひ 田實祝 (名) たのむのいはひ(田實祝)に同じ。

たのみ-の せつ 田實節 (名) たのむのせつ(田實節)に同じ。

たのみ-わたる 賴渉 (他動四) 永くたのみに思ふ。たのみつづく。金葉[雜上]。「早くより賴みわたりしすずか川、思ふことなる昔ぞ聞こゆる」續千載[三]。「哀れわが戀に命をかけ橋の、さていつまでか賴みわたらん」

たのみ-をさめ 賴納 (名) 質地の一種。質に取りたる地所を作取りにして、年貢・諸役を質置主に勤めしむるもの。質地格法[質地]。「地方主に而、年貢諸役を勤め、質主作り取り、賴納と云ふ」德川禁令考後集十四(安永八)。「質地質に取り候もの作り取りにして、質置主年貢諸役は勤め候を賴納と唱へ、御法度に候」

たーの-む 田面 (名) たのも(田面)の轉。夫木三[みよし野の里は荒れにし秋の野に、たれをたのむの初雁の聲」

たのむ の かり　田面雁　田に居る雁。歌に多く賴む意にかけていふ。勢語「み吉野のたのむの雁もひたぶるに、君が方にぞよるとなくなる」千載[十二]。「春くればたのむのかりも今はとて、かへる雲路に思ひ立つなり」

たのむ 憑 (名) たのむの祝ひに進獻又は贈答する物。伊勢家記[延永廿九年]。「公家門跡、武家御憑進上」[日記]。「年中定例記」「八月朔日御憑、於裏殿(御進上)」

たーのむ 手飲 (他動四) 手にてすくひ飲む。歌に賴むにかけていふ。勢語「やましろのゐでの玉水てにむすび、たのみしかひもなき世なりけり」

たのむ 賴 恃 憑 (他動四) 一刀としてたよる。助けと思ひてあてにす。神代紀[下]。「我恃之(タノミ)子、既避去矣」萬[五]。「人となり出でて、惡しけくもよけくも見むと、大船の思ひ多能無(タノミ)に」竹取「船に乘りては、かぢとりの申すことをこそ高き山ともたのめ」二詔りてあつらふ。まかす。ゆだね。委託す。委囑す。三身を委ぬ。主人とす。謠曲[上]。「今まで賴まれ申す主君に心を引きかへて、親の遺言背かん事、弓矢取っての恥ぢなるべし」

(諺)たのむ木の下に雨もる　賴みとせしあてがはづる。象盛集。「天の原くもれば悲し、人知れず賴む木の下雨もりしより」平家七[法上]。「かく打ち捨てさせ給ひぬれば、憑む木の本に雨のたまらぬ心地ぞせられける」

たのむ 賴 恃 憑 (他動四) たのみに思はす。あてにせしむ。萬[四]。「遠つあふみいなさ細えのみをつくし、あれを多能米(タノ)てあさましものを」勢語「まつかけ

てたのめしことはなけれども、涙の越ゆるは猶ぞかなしき」枕「何の心ありてあすはひのきとつけけん、あぢきなきかねごとなりや、誰れにたのめたるにかあらんと知らま保しうをかし」

たのむ 頼（感）ものまう（頼）に同じ。

たのむ-そうぶぎやう 憑総奉行（名）室町時代、八月朔日たのむの祝ひに、進獻・贈答の事を掌りたる役。八朔総奉行。宗五大雙紙「公方様御憑の事、総奉行御はからひ方、右筆伊勢七郎左衛門」

たのむ-の-いはひ 田賞祝 頼祝（名）陰暦八月朔日、新穀を互ひに、贈答する祝ひ。たのみは頼みの義に通ずるより、鎌倉時代より此の日家人より物を主君に獻じ、主君よりも物を家人に賜ひて君臣の和合を祝せしが、足利義満の時より重き式目となり、武家より禁中に物を獻じ、禁中より武家に物を賜はり、諸大名より幕府へ物を獻じ、幕府より返し物を賜ふ。江戸時代にては徳川家康の江戸入國が天正十八年八月朔日なりしより、特に此の日を充且と同じき重き式目とし、諸侯みな登城して賀詞を陳べ、太刀獻上の儀あり。たのみのいはひ。たのむのせつ。たのむのせつ。たのものせつ。四季物語「朔日のあしたは、たのむの御祝とて」

たのむ-の-せつ 田賞節（名）たのむの祝ひの日。たのむのせつ。たのものせつ。たのむのひ。空華日工集「應安三年八月一日、泉倉既沈香一塊・砂糖一壺・蠟燭十條、蓋俗所謂恃怙之節也」日次紀事「八朔 朝見 朝日 賀相賀 朝中 朝伊 朝又 朝時 朝公 朝世 朝成 朝出 朝實 朝安 朝重 朝中 朝人 朝家 朝伊 朝家

箭羣に立て、残る三本の矢を手にして三度射ること。三度に九本射る故に三三九手挟といふと。東鑑十文治六年「三尺・手挟・八的等也」庭訓往来五月「三三九・手挟・八的等曲節」

たばさむ 手挟 (他動四) 手に挟みて持つ。又、わきばさみ持つ。萬葉「いちひがもとに、梓弓やつ多婆佐弭(タバサビ)、ひめかぶらやつ多婆左彌(タバサビ)、し持つと我が居る時に」同「はじ弓をたぶりもたし、まかご矢を多波左美(タバさビ)そへて」

たばし (名) 器物をこすり洗ふに用ふるもの。藁又は棧櫚(シュロ)の毛などを束ねて作る。

たばし (形シク) たはれたるさまなり。淫亂なり。武烈紀「設奇体之戲、綽藤藤(タバシ)之解」宇鏡「妖婦也、取也、太綽志、取也」榮華物語「九條の師輔のおとど、いとたはしくおはして、あまたの北の方の御腹に、男十一人女六人ぞおはしける」同巻「かのおとどはいみじうたはしうて、藤北の方うせ給ひし程にも、びんなき事どもきこえし」

たばしる (名) 瘡瘍などのうみしる。

たばしる 戲 (自動四) たはく(戲)に同じ。類字鏡「作劇(タバシル)、本字鏡「作劇(タバシル)、太太多婆天」

たばしる (自動四) 「たは接頭」勢ひ烈しく走りとぶ。ほとばしる。萬「霜の上に霰多婆之里(タバシリ)いやましに、あれはまんこむ年の冬を長く」金槐集「もののふの矢なみつくろふ籠手の上に、霰たばしる那須のしの原」

たばす 賜 (他動四) 賜はす。竹取「此のをうな、もし奉りたるものならば、翁にかうぶりなどかたばせざらん」平家十一、鹿谷「願はくは、あの扇の真中射させてたばせ給へ」

たはた 田畑 (名) 一田とはたと。百合若大臣野守鏡「此の男、身過ぎの種の御駕籠、町人の金蔵、百姓の田畠、武士なれば城廓同前」二(動)すずめ(雀)の異名。

たはた ろくぶ ちがひ 田畑六分遊 田の高六斗は畑の高一石に當たり、取箇は、田の米一斗は畑の米六升と同じといふこと。地方諺

(諺)田畑の肥料は主人の足跡より善きはなし 主人の巡回して監督するは、最も耕作に效力あるにいふ。

たはたげ 田畑 (名) 田とはたけと。たはた。宇津保藤原忠こ「みくしげの物、さてはたはたけかりつくして、散しらずつかひ給へば」源若菜下「御庄の田はたけなど」

たはたつ (名) (動)すずめ(雀)の異名。

たはたつく 東附 (他動四) たばねつく。結びつく。蜻丸集「いつを頼みにたばつけん、我が黒髪のさねかづら」

たはなし 手放 (名) たばなすこと。

たはなす 手放 (他動四) 運歩色葉「手放(タハナシ)」誠兎色葉「手放(タハナシ)」鷹狩の語。

たはなす 手放 (他動四) 鷹をなづけおきて、初めて狩りに立ち向はす。

たはなれ 手放 (名) 手をはなること。別のかなとでに、手婆奈禮(タハナレ)情しみ泣きし子らはも」同「やかたをの吾が大黒に中臣手放(タハナレ)もをちもかやすき」

たはぬ 束 (他動四) 一一つに束ぬ。一つにまとひ結ぶ。たばとなす。名義抄「把(タハヌ)、狂言太郎冠者で束ねても男は男ぢやに」二すべくくる。總括す。

たはね 束 (名) 一たばねること。又、其の物。たば。夫木「春の野をことありがほにかへせども、持てる蕨はたばねだになし」盛衰記「肝のたばね、舌の根」二男の髪の結方の一種。かかあたばね。下文を見よ。浮世床「髪の風は今流行る束ねといふ髪也」たばねとは油を少しもつけず、水髪に結ひて、たぼをふっくりと出し、はけさきをばらりと散らして、まげの一を上の方へそらして結ふなり」三束縛をすること。すべくくること。又、その人。博多小女郎波枕「此の心清町一町のたばねをする年寄、即ち家主、うっかりと見てゐよか」

たばね-あぶひ 束葵 (名) かりそめにたばねたる頭髪。そくはつ。

たばね-がみ 束髪 (名) 紋所の名。

たばねぎ 束木 (名) たばねまき(束薪)に同じ。一代男「束木の當座買ひ、やがて立ち消ゆる烟なるべし」本朝二十不孝「束木も絶えて、今朝よりは雨戸を閉して燒くなど」

たばね-ぐさ 束草 (名) たばねたる草。

(諺)束草を負ひて人の家に入らぬもの 蓑笠を著て人の家に入らぬものに同じ。みのかさ(蓑笠)の條を見よ。

たばねのし 束熨斗 (名) 一熨斗をたばねたるもの。二紋所の名。のし(熨斗)を見よ。

たばね-はぎ 束萩 (名) 紋所の名。はぎ(萩)を見よ。

たばね-まき 束薪 (名) たばねたるたきぎ。たばねぎ。五人女「蓮の葉に包んで、たばねまきの上に置く」

たばねる 束 (他動下) たばぬ(束)の口語。

たばねわた 束綿 (名) 越前國より產する眞綿。色極めて白く、ねばり少しく薄きもの。萬金產業袋「御召綿・獻上綿などいふは越前の束ね綿也、色白く濃にて、誠に雪の如し、昔よりゆひ綿とて、綿などにも書くは是れなるべし」

たばぶ (自動四) たはく(戲)に同じ。字鏡「戲不太波」

たばぶ 庇 (他動四) かばふ(庇)に同じ。盛衰記「甲冑をゆり合はせたばふべき」同「甲冑をゆり合はせゆり合はせ、矢聞をたばひて振る舞へば、鎧は重代の重寶なり、裏かく矢こそ無かりけれ」狂言「鷺」私は内證の者で御座る、左樣の者をばたばはせられて、御客へ使はせられませ」三河物語「然る間此の度は我れ等をば、重ね而乃ためにたばひ給へ、然れ者、我れ等者有馬へ湯治をすべし」

(諺)たばぶ物を犬にが食ふ 貯へおきたる物を、だにが食ふ。毛吹草「たばふ物を蟷(ヒキガエル)が食ふ」

たばふる 戲 (自動四) たはむる(戲)に同じ。萬「しきたへの床のへ去らずたてれども居れどもともに戲(タバフル)」蜻蛉日記「うらもなくたはぶるれば、いとねたさに」宇鏡「諧戲太波留」

たばれ 戲 (名) たはむれ(戲)に同じ。枕「集まりて、たはぶれにねたがりいふめり」源若菜下「遊びたはぶれをも、人よりは心やすく、馴れ馴れしくふるまひたり」

たばれ-あそび 戲遊 (名) たはむれてあそぶこと。ふざけあそぶこと。遊戲。宇津保藤原「ある限りの君達あしを亂れて、たはぶれあそびをし給ふほどに」源少女「たはぶれあそびをし給ふほどに」まなるくわんじゃくにのぼりぬれば」

たばれ-うた 戲歌 (名) たはれうた(戲歌)に同じ。夫木「鵺嶋に住みける頃、たはぶれうた人人よみけるに」通宗女子逢歌合「右の歌あしげ・かげなど思ひよりたるも、たはぶれ歌のやうなり」

たばれ-がたき 戲敵 (名) たはぶれ

相手。あそびともだち。あそびがたき。源若菜「この若君を内にてなど見つけ給ふときは、召しまとはしたはぶれがたきにし給ふ」

たばれ-ごころ 戲心 (名) たはぶる意志。されごころ。宇津保藤原「見せよやと、たはぶれ心にをひつれど、笑ひて出ださず」

たばれ-ごと 戲言 (名) たはぶれていふ言。武烈紀「戲言(タバレゴト)陽遊曰」枕「うちゑみて例のたはぶれごとをせさせ給ふ」源帚木「おしなべたらぬ若人どもに、たはぶれごとなどの給ひつつ」名義抄「戲語(タバレゴト)」

たばれ-ごと 戲事 (名) たはぶれすること。されごと。たはぶれわざ。たはわざ。源椎本「たはぶれごとも、まめごとも、同じ心になぐさめかはして過ぐし給ふ」

たばれ-ごゑ 戲聲 (名) たはぶれること。紫式部日記「聞きにくきたはぶれごゑも、殿のたまはず」

たばれ-にくし (形ク) たはむれがたし。たはぶるるにやすからず。古今傳「ありねやと心見がてら逢ひ見れば、戲れにくきまでぞ戀しき」宇津保藤原上「いと心うくたはぶれにくく、かかる事は猶せらるべしやは」源朝顔「女君はたはぶれにくのみおぼす」

たばれ-びと 戲人 (名) たはれびと。ざれをかしき人。宇津保藤原「この侍從も、あやしきたはぶれ人にて」

たばれる 戲 (自動下) たはぶる(戲)の口語。

たばれる 戲事 (名) たはぶれごと(戲事)に同じ。紫式部日記「はかなかりしたはぶれわざを、いとほしうことごとしうこそ」

たば-みづら (名) 蔓草の名。一説、たまかづら(玉葛)に同じ。類聚萬葉「はをろのをろ田におはる多波美豆良(タバミづら)、ひかばぬるぬるゐをことな斷え」

たはむる 戲 (自動下) 一をかしき言動をなす。遊び興ず。たはる。たはぶる。あざる。おどける。ふざける。だうける。二まじめならざる事をなす。いたづらごとをなす。三遊戲をなす。

たはむれ 戲 (名) 一たはむること。たはぶれ。たはれ。ざれ。おどけ。だうけ。枕「ゆげひのすけ中將嫁疑のものやあると、たはむれにも咎む」二遊戲。遊戲。

たはむれ-うた 戲歌 (名) たはぶれうた(戲歌)に同じ。

たはむれ-がき 戲書 (名) たはむれに書くこと。いたづらがき。らくがき。

たはむれ-ぐち 戲口 (名) たはむれていふこと。されていふ口上。

たはむれ-ごと 戲言 (名) たはむれていふ言。たはぶれごと。されごと。じゃうだん。蜻蛉「色色に戲れごとを申して、面白き者にて候間」

たはむれ-ごと 戲事 (名) たはむれのしわざ。たはぶれごと。されごと。たはこと。たはわざ。

たはむれ-ざけ 戲酒 (名) たはむれて飲む酒。たはむれに飲む酒。三代男「武藏野の大きなといふはよいが、廣いとは祝言に忌む言葉と、たはむれ酒もさめて」

たはむれ-すがた 戲姿 (名) たはむれたるすがた。されたるすがた。三代男「やさしき子持にたはむれ姿」

たはむれる 戲 (自動下) たはむる(戲)の口語。

たはむれ-をんな 戲女 (名) ざれたはむるる女。若風俗「身をそれに馴れて、たはむれ女に替はる事なし」

たはもの (名) たはれたるもの。うつけたるもの。宇鏡「狂虛毛乃」

たはやすげ 容易氣 (副) たはやすきやう。たはやすさう。

たはやす-さ 容易 (名) たはやすきさま。たはやすき度合。

たはやすし 容易 (形ク) たやすし(容易)に同じ。竹取「たはやすく人寄り來まじき家を造りて」同「今の世にも昔の世にも、此の皮はたはやすくなき物なりけり」宇津保藤原「うちの召しならでは、たはやすくまかりありかず」

たはゆ 東 (他動下) たばぬ(束)の訛り。運歩色葉「東・縛・結(タハユ)」

たはら 俵 (名) 一藁などにて編み作りたる袋やうのもの。穀物などを盛り包む。俵(ヒヤウ)。宇津保藤原「米をしけ絲たちに編みて、絹五疋たちに入れて」砂石集「食物のたはら多くうづみて置きたりけるを」宇鏡「俵(タハラ)」二【植】たはらご(俵子)の略。

たはら-かへし 俵返 (名) 俵を擔ぐ時の如く一端を下腹部に當て、他端より廻轉して上ぐること。曾我虎藤「露滑かに苔蒸して、手懸かりもなき野面の石中藤俵返しに差し上げ、づかづかと持って寄り」

たはら-ぐみ (名) 【植】二なっぐみ(木半夏)の異名。

たはらご 俵子 (名) 一ごめ(糊)の異名。雪女五枚羽子板「井戸へ釣られた黒天も、好い客蹈まへ俵子や」二【動】たはら(俵)に同じ。字鏡「俵(タハラ)、廣大和本草「沙曝(タハラ)」

たはらご-し 俵腰 (名) 俵の如きふとき腰。丹波與作「庄野のふとのお米が俵腰に喰ひ附いて、馴染みのおれをすほん抜きに逃はせた」

たはらご-ぢも 俵薦 (名) 米俵にするこも。東海道名所記「澤かたびらの上に、俵薦を重ね」

たはらごろび 俵轉 (名) 演劇にて、ひっくり廻りにする藝の一。

たはら-すぢ 俵理 (名) 足の第二指の紋理の三筋あるもの。親に勝るものなしと。諺言集覽

たはら-っぱぎ (名) こむら(脛)をいふ。信濃國の方言。物類呼稱

たはら-むかへ 俵迎 (名) 下文を見よ。胸算用「漸く夜も明けがたの元日に、俵迎へと寶りけるは、板に押したる大黑殿なり」

たはら-むぎ (名) 【俵の如き穂を有すればいふ】【植】こばんさう(小判草)の異名。

たはらめぬき 俵目貫 (名) 刀劍の柄に穗へる鮫皮(ガワ)の上に打ち附くる鋲釘(ビヤウガン)。けしやうぬき。

たはら-も (名) 【植】ほんだわら(馬尾藻)の異名。

たはら-もの 俵物 (名) 俵に入れたる物。夕霧阿波鳴渡「總じて重たい俵物。材木でも、牛馬が負ふは珍らしからぬ」

たはら-やき 田原燒 (名) 昔時、山城國宇治郡田原郷より產せし燒物。本朝陶

器攷證三山陽雑字治、宇治田原燒之義、田原郷其の外段々承り合せ候得共、一切相分かり申さず候」

たばり 束把 (名) たば(束)に同じ。皇極紀「租稲二束二把(タバ)」天武紀「麻一條(タバ)」

たはる 戯狂 (自動) 一たはむる。たはく。あざる。萬三「うちしなひ寄りてぞ、いもは多波禮(タハ)たりける」源藤「おほやけざまは少したはれて、あざれたる方なりし」二みだりなる行爲をなす。不正なる男女の交りをなす。字鏡「姪(姦也。遊加)婦(姦也。又、不貞)、又、田舞(御タハブル、タハブル、タハブル)」三耽る。溺る。名義抄「姪

たはる 廻 (自動) 〔たは接頭〕廻る。めぐる。本居宣長「もは染めましを、み坂多婆良(タバ)ばまさやかに見むを」

たはる 賜 (他動) たまはる(賜)の約。萬三「玉に貫き消たず賜良(タバ)む、秋萩のうれわわら葉における白露」同四「この川に朝な洗ふ子なれもあれも、よちをぞ持てるいでこ多婆里(タバ)に」

たはれ 戯 (名) たはるること。たはむれ。

たはれ-うた 戯歌 (名) きやうか(狂歌)に同じ。夫木四「たはれ歌とてよみける中に」

たはれ-ぐさ 戯草 (名) 〔植〕よもぎ(艾)の異名。新六帖三「冬しげの霜をいただくつくも髪、見えし筋なきたはれ草かな」

たはれ-ごと 戯言 (名) たはむれごと(戯言)に同じ。右京大夫集「かへしもたはれごとのやうなりしを、程へて忘れぬ」

たはれ-ごま 戯駒 (名) あてどもなく遊びあるく駒。夫木四「草しげみあはづの野邊のたはれ駒、よはに嘶ゆる靡閑こゆ

たはれな 戯名 (名) たはれたる名。みだりがはしき評判。うきな。曾丹集「遠つ山宮城が原の萩見ると、秋ははかなきたはれ名ぞたつ」

たはれ-ね 戯寝 (名) たはれたるかりね。夫木四「わぎも子が衣うすれて見えしより、たはれねせじと思ひそめてき」

たはれ-びと 戯人 (名) たはれたる人。うはきもの。榮華(後)「對の御方いと色めかしう、世のたはれ人にいひ思はれ給へるに」

たはれめ 遊女 (名) うかれめ。あそびめ。いうぢよ。顕政集「ともとりも小舟も見えてたはれめが、靡ばかりこそ霧に隠れれ」六百番歌合「浪の上にうかれて過ぐるたはれめも、顕じ人にはたのまれぬかは」

たはれを 戯男 (名) 遊蕩なる男。放蕩もの。和名二「蕩子(蕩子太綱)」堀河百首「たはれをが袂にかくるあやめぐさ、ねよげなりとや人の見るらん」

たはーわざ 戯事 (名) たはれたる事。たはむれごと。萬三「いさ子ども多波和射(タハ)なせそ、天地のかためし國ぞやまと島ねは」

たひ 納 (名) なふ(納)に同じ。和名三「納(俗云、能不)」

たひ 鯛 (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。體は楕圓形にて側扁。口は水平に開きて小さく、齒は上下顎にのみ生じ、鱗は大にして櫛狀をなす。性肉食にして、小魚・甲殻類・貝類等を食す。かすごだひ・はなをれだひ等の類あり。まだひ。萬三「みづの江の浦島の子が、鰲釣り國(ア)釣り誇り」(ア)けぶりだし(イ)うなもと(ウ)くりから(エ)しよにん(オ)かうにん(カ)もなか(キ)さくら(ク)やそめ(ケ)うなかへし(コ)えきこし(サ)みづはき(シ)しやうよ(ス)みづかけ(セ)うたい(ソ)てんにん(タ)うたい(チ)みづはき(ツ)しやうよ(テ)みづかけ(ト)みづすひ(ナ)みづたたき(ニ)みづかへし(ヌ)みづかきのひれ(ネ)りうじのひれ(ノ)てんにん(ハ)こやすめ(ヒ)さざきのひれ(フ)うたい(ヘ)みづはき(ホ)みづかけ(マ)みづすひ(ミ)みづかへし(ム)みづかきのひれ(メ)みづたたき(モ)みづかけ(ヤ)みづすひ(ユ)みづかへし(ヨ)みづかきのひれ(ラ)みづかけ(リ)みづすひ(ル)みづたたき(レ)みづかへし(ロ)みづかきのひれ(ワ)みづかけ(ヲ)みづすひ(ン)みづたたき　鰭は鯛の名所なり

齊宮寮式「鯛枚乾一百斤」和名三「鯛(太比)」

たひ-の かんざし 鯛簪 鯛の背鰭を串にさしてあぶりたるもの。類聚

たひ-の はまむし 鯛漬蒸 次條に同じ。

たひ-の はまやき 鯛漬焼 鹽漬にて鯛を鹽鹽に入れ、蒸し焼きにしたるもの。

たひ-の みつだらご 鯛三道具 鯛の骨の鋤・鍬・鉾の稱。

(誹)鯛の尾より鯛の頭 雛口となるも牛後となる勿れに同じ。けいこう(雛口)の條を見よ。

たひ 皮 (名) 一をり。とき。續紀三、此多比(ヒ)賜位冠方」宇津保上、姫松「いつも生ふなる宿なれど、蔭涼しげに見ゆるたびかな」枕三「もて來たりしたびには、いかならんと胸つぶれて」二度數。回數。へり。萬三「をかの崎、漕ぎ回(タ)みつつ、多比(ヒ)かへり見しつつ」同四「白波のよそる濱邊に別かれなば、いともすべなみや多比(ヒ)袖振る」行記上、巡禮記、段一、巡禮三

たひ-の かさなる 度重 たび數が積もる。度數がかさなる。勢語「人しげくもあらねどたびかさなりければ、あるじ聞きつけて」源藤「わらはやみに煩ひ侍るを、たびかさなりてた、雛ら侍れば」

たひ-の かさぬ 度重 たび數を重ぬ。回數をかさぬ。續紀三、多比重(カサヒ)ま(ヒ)宣久」

たひ-かへす 度返 薄(ハク)を二反・三反も濃く置くことなるべし。類聚雜部

たひ-ごと 度毎 其の折り毎。其の時いつも。其の都度。枕十「人の顔に取りわきてよしと見ゆる所は、度毎に見れども、あなをかしめづらしとこそおぼゆれ」源藤「見奉るたひごとにめづらしからんを、いかがはせん」

たひ 旅 (名) 家を離れて遠くにあること。家を出でて遠く行く途中にあること。旅中。客旅。萬四「多妣(ヒ)にあれどよるは火ともし居る吾れを、闇にやいもが戀ひつつあるらむ」同三「多妣(ヒ)とへど、ま多妣(ヒ)になりぬ、家のもが著せし衣に垢つきにけり」客一、羇三

たひ-たとく 旅他國 他國に旅行すること。遠く故郷を離れて旅行すること。心中刃氷朔日「親無い者は身を樂に、旅他國致せども」

たひ-の いほり 旅庵 旅中にて宿るいほり。萬十「秋田刈る客乃盧人(イホリ)に時雨ふり、わが袖ぬれぬ干す人なしに」

たひ-の かりほ 旅假庵 旅路に、假りに宿る庵。萬三「たらちねの母を別かれてまこと吾れ、多非乃加里保(カリホ)にやすくねむかも」

たひ-の け 旅中にて日數を經ること。 萬三「くまも落ちず思ひぞ吾がくる、客乃氣(ケ)長み」同三「草枕この羇之氣(ケ)につまさかり、家路思へば生ける甲斐なし」

たひ-の こころ 旅心地 たびごこち(旅心地)に同じ。源藤「ふるき宮は却りてたびのこころし給ふにも、御里ずみたえたる年月のほどおぼしめぐらさるべし」

たひ-の こころ 旅心 旅中の心情。たびごころ。勢語「かきつはたといふ五

(ア)文字を句の上にすゑて、旅の心をよめといひければ」

たひ-の ごしよ 旅御所 旅中に宿泊する貴人の館舍の尊稱。東鑑四十、建仁二年三月廿六日「將軍家於旅御所、有御遊宴等」

たひ-の ころも 旅衣 たびごころも(旅衣)に同じ。萬三「草まくら旅之衣(コロモ)の紐解けぬ、おもほせるかも此の年頃は」

たひ-の しるし 旅標 旅行したるしるし。萬一「ひくまぬに匂ふはり原入り亂り、衣にほはせ多鼻能知師(シルシ)に」

たひ-の そら 旅空 一旅さきの土地。たびどころ。多くたよりなく心細きさまなどにいふ。竹取「旅のそらに助くべき人もなき所に、いろいろの病ひをして」源藤「ましてたびの空は、いかに御心づくしなること多かりけん」二旅先にて眺むるそら。源須磨「初かりは戀しき人のつらなれや、たびの空とふ靡のかなしき」詞花離別「都にてながめし月のもろともに、たびの空にも出でにけるかな」

たひ-の たもと 旅袂 旅中の袂。旅ごろも。大鏡冠藤原師尋「若紫の摺衣、旅の袂に馴ぎかへて、身はいつの間に賤の女と」

たひ-の ひ 旅日 旅中にある間の日。

たひ-の まくら 旅枕 くさまくら(草枕)に同じ。

たひ-の まるね 旅丸寝 旅路にて假寝をすること。萬三「草まくら多妣乃麻流(マルネ)の紐絶えば、我(ア)が手と附けろ此れの針(ハリ)持(モ)し」

たひ-の まろね 旅丸寝 前條に同じ。萬三「わぎもこし我(ア)をしぬぶらし、草まくら旅之丸寝(マロネ)に下紐解けつ」

たひ-の もの 旅者 たびびと(旅人)に同じ。狂言末廣「是れは旅の者で御座る、

一夜の宿を貸して下され」

たひ-の やかた 旅館 たびやかた(旅館)に同じ。拾玉三「雨はれぬ旅のやかたに日數へて、都戀しきうき雲の空」

たひ-の やどり 旅宿 たびやどり(旅宿)に同じ。萬四「沖べよりふな人のぼる呼びよせて、いざ告げやらむ多婢館也登里(タビ)を」

たひ-の よ 旅夜 旅行中の夜。萬三「旅夜(タビ)の久しくなれば、きにづらふ紐ときさけず戀ふる此の頃」

(誹)旅のつかひは有り合せ 旅先にて金子の入用ある時は、有り合せの金を一時流用すべし。太平記忠臣講釋三「旅のつかひは有り合せとやら、親子の中でも金銀の無心は、どうやら言ひにくけれど」

(誹)旅の恥ぢはかき棄て 旅行中の不面目は、さしたる恥辱とならず。箱根草「旅の恥ぢはかき棄てとはいふが、まだここは高輪だぜ」

(誹)旅の恥ぢは辨慶狀 前條に同じ。

(誹)旅は憂いものつらいもの 旅行は心憂くもあり、つらくもあるものなりとの意。出家形氣三「末はてしなき渡海の旅路、あだ易う何でも面白からんと存ぜらるるは甚の相違なるべし。旅はういものつらいものと、諺にさへいはずや」

(誹)旅は情、人は心 旅中は人の情が何より頼みの綱、人は心の持ち方が何より大切なること。狂言呂蓮「誠に旅は情、人は心と申しまするが、此方の樣にいたいけに云うて下さる御方はござりますまい」

(誹)旅は人の情 旅中は人の情が何よりの頼みなること。五人女三「此の方と一所の宿にと申せば、樽屋悦び、旅は人の情とかや申せし、萬事たのみます」

(誹)旅は道づれ世は情 旅行には同伴者あるに限り、世の中を渡るは人情に限ること。東海道名所記「旅は道づれ世はなさけといふことあり」

たひ 足袋 單皮 (名) 防寒などのため、足にはく袋の形したるもの。古くは皮にて作れど、今は多く木綿・絹・ぎやらこ等の類を用ふ。あしぶくろ。和名三「單皮屐(野人以皮爲屐皮底宇津保俊蔭)宇治拾遺三「申の かはのたびに、杏きりはきなして」太平記三、大塔「怪しげなる單皮・脚巾・草鞋を召して」

たひ ごめん 足袋御免 武家時代、足袋をつけて殿中へ出入するを許さるること。蜷川親元記三月廿九日「上池院民部卿殿、足袋御免事」

(誹)足袋は姉をはけ、雪駄は妹をはけ 足袋は足より大なるを穿ち、雪駄は小なるをはくべし。

たひ 手火 (名) 手に携へて、路などを照らす松明の類。神代紀上、秉炬、此云多妣(ヒ)」萬三「すめろぎの神の御子のいでましに、手火(ヒ)の光そここだ照りたる」字鏡「炬(太比)」西國受領歌合「おのがじし手ごとにともすみかり人の、おたびおたびのしるくもあるかな」

たひ 一打碑 碑文を石摺りにすること。張文潛詩「時有遊人打碑賣」

たひ 茶毗 (梵 Jhāpita 焚燒の義) 火葬。盛衰記三、藤原「曉天の程に茶毗し奉りけり」太平記鹿谷法皇「遷化の山陰へ御下りあつて、御茶毗の事共取り營ませ給ひて、後の山に葬し奉る」涅槃經「佛告阿難、佛般涅槃、茶毗既訖、一切四衆、收取舍利」四、七寶瓶」

たひ-あさうど 旅商人 (名) 旅あきなひをする人。行商。

たひ-あさなひ 旅商 (名) 各地を巡りて商賣すること。又、其の人。行商。

たひ-あきんど 旅商人 (名) たびあきうど(旅商人)に同じ。

たひ-あみ 鯛網 (名) 鯛を捕らふるに用ふる網。多くは手繰網を用ふ。日本山海名產圖會「他州鯛網」

たひ-ありき 旅歩 (名) たびをすること。りよかう。榮華玄宗「かかるたびありき見苦しと殿のおまへ申させ給へば」今鏡五、大和の方にたびありき日比するに」

たひ-あるき 旅歩 (名) 前條に同じ。浮世床上「立派にして通るものは旅歩(アルキ)はせずと、江戸に座居(ス)つて事をするはさ」

たひ-いし 礫 (名) つぶて。小石。靈異記中「礫(タヒシ)、崐礫(タヒシ)」

たひ-いでたち 旅出立 (名) 旅の支度。たびてたち。旅裝束。旅裝。傾城島原蛙合戰「旅いで立ち綺羅やかに」

たひ-うど 旅人 (名) たびびと(旅人)の音便。太平記魯佐義興自害「餘人を行きつれたる旅人の樣に見せて」

たひ-がさ 旅徵毒 (名) 旅行中に感染したる徵毒。

たひ-かず 度數 (名) 回數。どすう。

たひ-かせぎ 旅稼 (名) 他郷へ行きてかせぐこと。でかせぎ。

たひ-がらす 旅烏 (名) 他郷より來たりたる人を嘲いふ語。泊船集「旅烏古巣は梅になりにけり」もとの水「旅がらす二百十日も船支度」

たひ-させる 旅烟管 (名) 旅行用の假宿に旅烟管など忘れて、本意なし」

たひ-くせ 旅癖 (名) 旅行をすること。旅行ぐせ。烟霞の癖。もとの水「旅癖や寒冷煩ふ秋の山」

たびくたびれ 旅草臥 (名) たびづかれ旅疲に同じ。五人女「旅くたびれの夢むすびけるに」

たびぐるま 鯛車 (名) 小兒の玩具。ほりこ製の鯛に車をつけて曳くやうにしたるもの。

たびげいしゃ 旅藝者 (名) 旅かせぎをする藝者。

たびげいにん 旅藝人 (名) 旅かせぎをする藝人。

たびこうぎゃう 旅興行 (名) 他郷を巡りありきてする興行。旅先にてする興行。

たびごころ 旅心地 (名) 旅にある心地。たびごころ。旅情。古今秋上「秋の山紅葉をぬさとたむくれば、すむ我れさへぞ旅ごこちする」

たびごころ 旅心 (名) 前條に同じ。拾玉「動きなき君が御幸に馴れ馴れて、旅心せぬうちの山かな」謠曲「旅心筑紫の海の船出して」

たびごとぎ 旅乞食 (名) たびをして人の憐みを乞ひあるく乞食。鶉衣「月一つほしやほしやと旅乞食」

たびごろも 旅衣 (名) 旅にて著る衣服。客衣。萬「多比己呂伊(たびころい)やつ著重ねていぬれども、なほはだ寒しいもにしあらねば」新古今夏「秋ぎりのたつた衣おきて見よ、つゆばかりなるかたみなりとも」

たびさき 旅先 (名) 旅行さき。旅行中。

たびさし 足袋刺 (名) 足袋を刺し作ること。又、其れを業とする人。

たびし 足袋師 (名) 足袋を製造する人。人倫訓蒙圖彙「足袋師」

たびし 一茶毗師 (名) 死體の火葬をする者。おんばう。

たびしかはら 礫瓦 (名) 一小石と瓦と。瓦礫。宇津保「川邊なる石の思ひの消えねばや、岩の中より水のわくらん。たびしかはらといふとても」二數にもあらぬ賤き者。元輔集「みがくらん玉の光をたのむかな、數にもあらぬたびしかはらを」枕「女房のずんざども、その里よりくるものども、をさめ・みかはやうど・たびしかはらといふまで」源氏「たびしかはらなどまで喜び思ふなる、御位改まりなどするを」

たびじたく 旅支度 (名) 旅行の準備。又、旅中の服裝。たびしやうぞく。

たびしばゐ 旅芝居 (名) 旅興行をする芝居。旅にて興行する芝居。一代男「是れは藤村一角が旅芝居と、座立てて呼びぬ」

たびしゃう 旅商 (名) たびしやうにん(旅商人)の略。

たびしゃうにん 旅商人 (名) たびしゃうぞく。

たびしゃうぞく 旅裝束 (名) 旅行する時の衣服。旅のいでたち。旅支度。宇治拾遺「旅裝束しながら手洗ひて、後の堂に參りて」武林往昔日記「旅裝束にて、馬大方に乗る人も」

たびしょ 旅所 (名) おたびしよ(御旅所)を見よ。

たびしょ 「茶毗所」(名) 茶毗をする所。火葬場。東鑑「治承元年十月十日「武衛御哀傷之余、令向其茶毗所給」

たびすがた 旅姿 (名) 旅行に出で立つ姿。旅裝束のすがた。源氏「關屋」より、里はづれ出でたるたびすがたどもの、いろいろのあをのつきづきしきぬひものくりぞめのさまも」謠曲「いまだ霜はぬ旅姿」

たびすずり 旅硯 (名) 旅行用の携帶に便なる小さき硯。

たびずまう 旅相撲 (名) 旅興行をする相撲。

たびずまひ 旅住居 (名) 旅先のすまひ。客舍。

たびずみ 旅住 (名) 前條に同じ。宇津保「かく待りならひて、いかにつれづれにおぼさん、しばしおとづれにもと思ひ給ふれど、たびずみくるしう待ればなん」源氏「年頃ならひ給はぬたびずみに、せばくはしたなくては、いかでかあまたはさぶらはん」

たびせん 旅錢 (名) 旅費の金錢。路用の金。

たびせんべい 鯛煎餅 (名) 鯛の肉を磨り碎き、饂飩粉などを交じへ、煎餅に製したるもの。

たびそう 旅僧 (名) 旅行の僧。客僧。

たびだち 旅立 (名) たびだつこと。かどで。發足。發程。太祇全集「旅だちを人も羨む袷かな」

たびだつ 旅立 (自動) 一旅路に出でたつ。旅に出づ。かどです。發足す。謠曲「江口「都をばまだ夜深きに旅立ちて」同「熊野「旅立つ雲の朝もよひ、紀の路にいざや急がん」二旅さきにあり。旅中にあり。蜻蛉日記「かかるたびだちたるわざどもをしたりしこそ、あやしう忘れがたうをかしかりしか」枕「たびだちたるところ、近きところなどにて、げすどものざれかはしたる」三旅のいでたちをなす。旅裝をなす。蜻蛉日記「なかに立てる人もたびだちて、狩衣なり」

たびたび 度度 (副) しばしば。毎度。毎回。勢語「よろこびて待つに、たびたびすぎぬれば」枕「傍なる人していはすれば、たびたびかたぶきて」さんたい(伊勢物語)さいさい(東鑑物語)

たびたまふ 賜給 (他動) (賜ふ)びとたまふとの重言にて、深く敬意を表はす。たまふ。太平記「其の船是れへ寄せてたびたまへ」

たびぢ 旅路 (名) 一旅行の路。行路。二旅さき。旅中。俳諧新選「見初めると日日に蟬見る旅路かな」

たびづかれ 旅疲 (名) 旅行のつかれ。旅行中の疲勞。たびくたびれ。謠曲「いたはしや旅疲れ、飢ゑにのぞませ給ふかや」狂言「旅疲れに疲れまして、ちと眠りまして」

たびづきん 旅頭巾 (名) 旅裝束にてかぶる頭巾。大井川集「山の委波のながめや旅頭巾」

たびづと 旅裹 (名) 旅行に携帶するつつみもの。夫木「たびづとにもたるかれいひほろほろと、涙ぞおつる都思へば」

たびつり 鯛釣 (名) 小兒の玩具。鯛などのかたちをはりこ又は土にて造り、其の口に鉤をつけ、絲又は毛をつけたる竿にてこれを釣るもの。胸算用「小刀細工に、馬の尾にてしかけたる鯛釣もはやりやめば」

たびで 旅出 (名) 旅行に出で立つこと。もとの水、笠の緒に柳綿ねる旅出かな」

たびてい 旅體 (名) 旅行の風體。旅姿。川中島合戰「御供の旅體、亂れぬ樣に御沙汰肝要」

たびでたち 旅出立 (名) たびいでたち(旅出立)に同じ。傾城島原蛙合戰「旅出立ちせんと座を立てば、結りとめ」

たびと 田人 (名) 田を耕作する人。たど。農夫。榮華「田人どものうたふ歌」

たびと 旅人 (名) たびびと(旅人)の略。推古紀「こやせる其の多比等(たびと)あはれ」萬「家ならば妹が手まかむ、草まくら、旅にこやせる此の旅人(たびと)あはれ」

たびどころ 旅所 (名) 旅ずまひ。旅のやどり。旅舍。源氏「例ならぬたび所なれば、いたうしのび給ふ」同「夕霧」「かかる旅どころともなく、人さわがしけれども」

たびにき 旅日記 (名) 旅行中に記す日記。紀行。俳諧新選「旅日記に雨と紅葉と並べたり」

たびにっき 旅日記 (名) 前條に同じ。

たびね 旅寢 (名) 旅にて寢ること。たびのやどり。旅宿。萬「夕霧に衣は濡れてくさ枕、旅宿(たびね)かもするあはぬ君ゆゑ」後撰「岩の上に旅寢をすればいと寒し、昔の衣を我れに貸さなん」

たびのみや 旅宮 (名) たびしよ(旅所)に同じ。

たびのむこ-けんばち (名) 【動】まつかさうを松毬魚の異名。

たびのゐ 鯛餌 (名) 【動】ゆむし(蟯)の異名。

たびばおり 旅羽織 (名) 旅行する時に著る羽織。傾城反魂香「越前の國氣比の浦へと旅羽織」

たびはこ 旅箱 (名) 旅行に携帶する箱。二代男「其の子は土蹈まず三枚屑、前に旅箱、後に紫の綿入」

たびはじめ 旅始 (名) 旅立ちの始め。若風俗「旅はじめの曙念き、名殘の委を見送り」

たびはだし 足袋跣足 (名) 履物をはかず、足袋だけにて地上を歩み行くこと。

たびはばき 旅脛巾 (名) 旅する時にはく脛巾。又、脛巾をはきて旅行すること。吉野都女補「いつしか馴れぬ旅脛巾、千歳の坂と詠せしも」

たびばり 田雲雀 (名) 【動】鳥類中、燕雀類の一種。體形ひばりに似るも小さし。全身灰黑色にて、胸は黃白色に黑色の斑點を交ふ。いなび。いぬび。いぬひばり。いのひ。たどり。

たびひしほ 鯛醬 (名) 鯛の肉にて製したるひしほ。字鏡「醢(毛比之保)、醢(毛比之保)、又、」

たびびと 旅人 (名) 旅路にある人。旅行し居る人。たびうと。旅人。旅客。萬「客人(たびびと)の宿りせむねに霜ふらば、わが子はぐくめあめの鶴むら」枕「扇」「中務「片つ方は中務旅人のあるところ」和名「旅客(たびびと)」

たびぶし 旅臥 (名) たびね(旅寢)に同じ。千五百番歌合「これやさは都にて見し空の雲、それを片しく峰の旅ぶし」

たびぶね 旅舟 (名) 旅さきにて乗る船。旅客の乗る船。客舟。謠曲「誰れにゆくへを遠江、げに遠き江に旅舟の」

たびま 度間 (名) あひだ。ひま。間斷。榮華「宮宮の御つかひ頻りて、東宮よりはたびまもなけれども」

たびまくら 旅枕 (名) たびね(旅寢)に同じ。新古今「ほととぎす其の神山のたびまくら、ほのかたらひし空ぞ忘れぬ」玉葉「たびまくらふしみの里の朝ぼらけ、かり田の霜にたづぞ鳴くなる」

たびまねし 度遍 (形) 度數多し。間斷なし。續紀「魔魅大逆之事、一二遍(數度)不(ず)在遍麻年久(ながき)浸覺(覺)」萬「いにしへゆ無かりししるし、多婢末麻久(ながき)をし給ひぬ」

たびまはり 旅廻 (名) たびありき(旅歩)に同じ。

たびみそ 鯛味噌 (名) 煮たる鯛の肉を乾し碎きて、砂糖などを加へ、味噌と擂り和ぜたるもの。

たびみち 旅路 (名) たびぢ(旅路)に同じ。和泉式部集「あはれなることをいふには都いでて、ゆくたびみちの遠きなりけり」元眞集「たびみち行く人、美濃の國ときの郡といふ所にやどりて」

たびめん 鯛麵 (名) 煮たる鯛の肉を、茹でたる索麵に交じへて盛りたる料理。八笑人「これが即ち鯛麵でござります」

たびもどり 旅戻 (名) 旅行先より還ること。俳諧新選「初雪や疾くに雪見し旅戻り」

たびや 旅屋 (名) 宿驛の旅舍。盛衰記「(廿七、東國旅)都を出でて、近江國甲賀の驛屋(やど)に著く」

たびや 足袋屋 (名) 足袋を仕立て又は賣る家。又、その人。若風俗「炭賣る聲、踏皮屋の秋」

(謎)足袋屋の看板 足が上がるといふ謎にて、地位の危き譬へ。

たびやう 〔多病〕 身にやまひ多きこと。病氣がちなること。病身。「才子多病」晉書「孫綽傳」「孫多病體羸」

たびやかた 旅館 (名) 旅人の宿る家。旅宿の館舍。りよくわん。旅宿。月詣集「霜がれの草ひき結ぶ旅やかた、しぐれもる夜は臥しぞわづらふ」夫木「うかれめの浮かれてあるべ、たびやかた、すみつきがたきものにぞありける」

たびやくしゃ 旅役者 (名) たびかせぎをする役者。

たびやせ 旅瘦 (名) 旅行の疲れにて瘦せたること。一茶句集「旅瘦をめでたがるなり夏座敷」

たびやつれ 旅窶 (名) 旅行の疲れにて、容貌などのやつれたること。草根集「幾夜さてうきおもかげの旅やつれ、人にはなくて惡ひきぬらん」

たびやど 旅宿 (名) 次條に同じ。夕霧阿波鳴渡「俺か逗留の旅宿へ、今朝から讃者の絶えぬ事」

たびやどり 旅宿 (名) 旅さきの宿泊。りよしゅく。旅舍。萬「あきの大ぬにはたすすきしのをおしたべ、草まくら多日夜取(やどり)せす、いにし(思ひて)夫木「ひまもなく物思ふ時のたびやどり、いかなるまにか月のもるらん」

たびゆき 旅行 (名) たびゆくこと。りよかう。萬「みちのなか國つみ神は多妣由伎(たびゆき)も、し知らぬ君を憑み給はな」同「多妣由伎(たびゆき)にゆくと知らずて、あもししにこと申さずて今ぞ悔しき」

たびゆきどろも 旅行衣 (名) たびごろも(旅衣)に同じ。萬「泉河わたりせ深み、わがせこが旅行衣(たびゆきどろも)ぬれぞ濡れぬかも」

たびゆく 旅行 (自動) 旅へ出で行く。たびだつ。りよかうす。萬「しほはやみ磯まに居れば、いさりするあまとや見らむ多比由久(たびゆく)われを」同「家人は歸りはやこと、いはひ島いはひ待つらむ多妣由久(たびゆく)われを」古今「すがるなく秋の萩原朝たちて、たびゆく人をいつとか待たん」

たびゆたん 旅油單 (名) 旅行用の合羽。宗紙諸國物語「或る年、秋の最中、播州住吉に詣づ中略橋の片ほとりに、旅油單かた敷きて」(羅 Tabula nasa) (名) [拭はれる(nasa)板(tabula)の義にして、

白紙の意。古書、羅馬人、蠟を塗りたる板を書寫に用ひ、印されたる文字不用となれば拭ひ消して、再び書寫に用ひたるよりいふ」【哲】感覺論に於て、精神の自發性を否定して、精神を全然受動的なりとし、外的印象を受くるに先立つ精神狀態の稱。

だひよう 一墮氷 (名) つらら氷柱をいふ。奥州南部の方言。

たひよういー 旅用意 (名) たびじたく(旅支度)に同じ。五人女「濱びさしのかすかなる所に船待ちをして、思ひ思ひの旅用意」

たひよぎ 旅夜著 (名) たびねに著る夜著。若狭俗「旅夜著の下にこがれて」

たひよこれ 旅汚 (名) 旅行にてからだなどの汚れたること。續俳家奇人談「萩萩の中に恥づかし旅よごれ」

たひよそほひ 旅裝 (名) たびしやうぞく(旅裝束)に同じ。運歩色葉「裝ソヒ」

たひら 平 (名、副) 一高低なきこと。傾斜なきこと。たひらかなること。平地。又、其の處。たひらか。神代紀上「立於浮渚在平處」「古語拾遺」「此云阿波辨」「勢語」「おしなべて峰もたひらになりたなん、山のはなくば月もいらじを」 二山間にある平地。

たひら-いめん 平一面 (名、副) おしなべて一つなること。ならして一樣なること。ひらいちめん。浮世風呂「潮煮で飯を食ふ下戸と、唐茄子のあべ川を食ふ上戸は、たひら一面の押し物だ」

たひらか 平 (名、副) 一たひら(平)に同じ。二おだやかなること。やすらかなること。神代紀上「平心」 三平仁紀上「天下大平」宇津保俊蔭「心」

たひらぎ 玉珧 (名) 【動】軟體動物中、蝦蟹類の一種。介は直角三角形にして、殼頂は鋭端にあり。表面には放射狀をなせる鱗片相重なる。介の外面は淡者緑色に黒色を混じ、内部は稍黒し。大さ五寸乃至一尺。我が國、東海・西南海に多し。國姓爺合戰「拾ひし貝は何何ぞ中蟬ちらと見初めし姫貝に、一筆書きて送りたひらぎ」

(ぎらひた)

たひらぎ 平 (名) たひらぐこと。なかなほり。和睦。和親。平和。「たひらぎを行ふ」成。

たひらぎ-がひ 玉珧 (名) 【動】前條の異名。

たひらぐ 平 (他動) 一たひらかになる。治まる。神代紀「還出潮涸瓊則休而平復」 二たひらかにする。しづまる。おだやかにする。「人などの參るにも、勘當の重ければとて逢はせ給はざりしにこそ、世の中の過蓋はたひらぎたりしか」 三平時に復す。なほる。源上「朱雀院の御藥の事、なほたひらぎはて給はぬにより」 四怒みを解きて和親を結ぶ。和睦す。

たひらぐ 平 (他動) 一高低をなほす。たひらにす。ならす。萬「朝庭に出でたちならし、夕庭に蹈み多比良氣」榮華「此の山のいただきをたひらげさせ給ひて」 二討ち鎭む。退治す。萬「たらし姫神のみこと、から國をむけ多比良宜」 三神のみこと、から國をむけ多比良宜「げにいみじかりし事たひらげ給へりし殿ぞかし」

たひらけし 平 (形) おだやかなり。しづかなり。無事なり。平穩なり。續紀「やすみししわどおほ君は、多比良氣久長くいましてとよみまつる」觀詞式「萬千秋五百秋伊久多比良安久聞食」萬「ありめぐり吾がくるまでに多比良氣久親はいまさね、つつみなく妻は待たせと」平安九十

たひらげる 平 (他動) 一たひらぐ(平)の異動の口語。二物事をかたづける。食ひ盡くす。飲み盡くす。

たひらこ 田平子 (名) 【動】たなご(鯊)の異名。

たひらこ (名) 【植】一紫草ムラサキ科、たひらこ鬚の二年生草本。莖の高さ七八寸。葉は互生、倒卵形。少しく粗糙なる面を有す。春季、花莖を抽くこと五六寸許り瑠璃色の小花を叢織花序に排列す。我が國、園圃に自生す。春の七草の一。かはらけな。 二こおにたびらこ(稻梳菜)の異名。

(一こらびた)

たびらこ-せば (名、副) 刀劍の身の幅狹きこと。又其のもの。鶏鶩合戰物語「七尺には餘るらんとおぼしきが、末おくれに三閒さがりて、二寸より太平せばに、はばきもとに突ヒをおいて」

たびらこ-びろ (名、副) 刀劍の身の幅の廣きこと。又、其のもの。だんびらもの。太平記「世二鎌倉一幅開三郎とて世に名を知られたる大力の有りけるが、七尺三寸の太刀だびら廣に作りたるを、錫本三尺計りおいて蛤圖に掻き合はせ」

たびらゆき (名) 幅廣き雪。猿蓑集「鶯の音にだびら雪降る」

たひろかす 飄掌 (他動) 手のひらをかへす。神代紀上「飄掌ヒロガヘシ、此云二陀毗盧箇須一ヒロガヘシ」

たひゐ 旅居 (名) 旅のすまひ。たびずまひ。日本紀竟宴歌「すめみまに八島を去りて、波の上の青ふし垣に多比爲ヒするかな」源蜻蛉「須磨の御旅ゐもはるかに聞きて」

たひゑ 彩畫 (名) だみ繪(彩畫)に同じ。

たふ 一鵜 (名) 【動】とき(朱鷺)の異名。

たふ 一太布 (名) 布の一種。しなの木、又は楮の皮にて織りたるもの。保憲女集「雪にあはぬ島は雪をよきたふと思へり」下學集「太布タフ」 二一代男「太布の縹色羽織に直徑四寸五分ばかりの紋に、鎌と輪とぬの字を附けて、文盲なる服裝」

たふ 一他夫 (名) ほかのをとこ。あだしをとこ。盛衰記「彼の女既に他夫に約せりと謀め申しければ」

たふ 一答 (名) 一こたへ。返事。返答。 二返證。源「下りてたふの拜し給ふ」 三意趣がへし。復讐。枕「いみじう我れはと思ひて、したり顔なる人謀りえたる、女どもよりも男はまさりてうれし。これがたふは必ずせんずらんと、常に心づかひせらるるものをかしきに」宇治拾遺「この僧惡心をおこして、われ此の國の守になりて此の答をせんとて」同「かなしきめを見せしかば、その答にあぶり殺さんずるぞとて、火を山の如くたきけれ」 四たふ(答)の略。歌儀品目「番ヒ、左番ヒ、勝ヒ、曲ヒ、番ヒ、左ヒ、番ヒ、番ヒ、勝ヒ、これを答と云ふ」

たふのはい 答拜 たふはい(答拜)に同じ。源宿木「ひきつくろひておりてたふのはいし給ふ」

たふのや 答矢 敵の射たる矢に應じて、此方より射る矢。保元白河殿落「左の眼を兜の鉢付の板に射附けられながら、答の矢を射返して」東鑑「文治五年六月六日」「心神雖遠、亂則射答矢」太平記「城の中靜まり還って、時の屋をも不ず合、答の矢をも射ざりけり」

たふ 一塔 (名) 【梵、そとば(Stoba)の略なる塔婆(Tobe)の略】 一佛教にて建築の一。佛舍利を藏し、或ひは佛の靈域を表し、或ひは供養などのために建つるもの。土石を積み或ひは木材を組みて、高く層に造る。三重・五重より十三重に至る。又、多寶塔・相輪塔・寶篋印塔などの種種の形もあり。萬「香ヒを塗れる塔ヲにな寄りそ、川ぐまのくそ鮒はめるいたきめやつこ」源蜻蛉「昔物語に、塔こぼちたる人もありけるを」榮華「多寶の御塔を、一尺ばかりに作りみがき建てさせ給ひて」法華經「諸佛滅後起二七寶塔一亦以華香供養舍利」 二後世、細長き板の上部を塔の形にし、經文の句などを記すもの。おもに供養として墓上に立つ。そとば。たふば。 三高く聳えたる細長き建物。「えっふぇる塔」「記念塔」

たふのこし 塔層 塔のかさなり。本宇鏡「層塔乃和名ヒ層塔乃」

(諺塔は下から組め 物事は土臺を固めて後にすべし。井蛙抄「歌をば塔を組むやうに、塔は上より組むことなし、地盤より組みあぐるやうに、下句よりよむなり」

たふ 一榻 (名) こしかけ。又、ねだい。

たふ 一堪耐 (自動) 一こらふ。しのぐ。しのぶ。萬「うつせみし神に勝ヒてねば、離れゐて朝なげく君」同「世の中の苦しきものにありけらく、戀に勝ヒずて死ぬべき思へば」勢語「悅びにたへで」 二當たり得る。爲し能ふ。負擔し得る。あふ。宇津保初秦「とくうけ給はりて、身にたへぬべきことならば、そのよしをこそ奏し侍らめ」源胡蝶「かやうの事は、たへぬにやありけん」

たふ 一支 (他動) 支へ止む。さへぎる。垂仁紀「遮ヒ之於道而奪焉」雄略紀「不意道、逢遮ヒ軍」敏達紀「海裏鯨魚大集、遮ヒ嚮船與檝楫」傲紀

たふ 一髢 (名) 【植】 一たぼ(髢)に同じ。 二やぶにくけい(天竺桂)の異名。

たふ 一賜 (他動) たまふ(賜)に同じ。雄略紀「凡河内直香賜」竹取「此のをうな若し奉りたるものならば、おきなにかうぶりをなどかたばせざらん」同「娘を我れにたべと伏し拜み」

たふ 食 (他動) 食ふ。飲む。宇津保俊蔭「物もえたばで疲れ臥し侍れば」宇治拾遺「大柑子を、これ喉乾くらん、たべと取らせたりければ」

たふ 食 (他動) 前條に同じ。宇津保上總「かのひるくさき御さかなこそ、たべまほしけれ」枕「などかことものもたべざらん」狹衣「苦のむしろを敷き、松の葉をたべて」

たふ 給 (助動) たまふ(給)に同じ。續紀「太政大臣之仕奉勤數數辭申奉天下之仁依受賜事平」同「朝廷助奉事平」萬「わが聞きし耳によく似ばあしかびの、足なへ吾がせっとめ多扶ヒ」「土佐日記」「かかる歌をなん、神代より神もよみたび」

たふ 一懦夫 (名) 氣のよわき男。意氣地なし。聽病者。孟子「聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」

たふあん 一答案 (名) こたへの案文。

たふい 一答意 (名) こたへの意味。

たふいん 一蹈印 なっいん(捺印)に同じ。勘解由式「其奏文、蹈印訖」

たふか 一榻下 (名) こしかけのもと。開見後錄「仁皇帝誕降、章懿后榻下生靈芝」「本四十二葉以應享國四十二年之瑞云」

たふか 一踏歌 (名) たうか(蹈歌)を見よ。

たふかふ 一匐匍 (副) 波などの重疊するさまにいふ語。源氏十二段長生島臺「波匐匍と、橋柱ゆするが如く寄せけるにぞ」木玄虛文「磊匐匍而相蹉」

たふく 一多福 幸福の多きこと。多くの幸福。書經「惟予一人、膺受多福」詩經小雅「神之弔矣、詒爾多福」

たふさ 髻 (名) 髮の毛を頂に集めて束ねたる處。もとどり。宇鏡集「髻ヒフサ」盛衰記「首を捕りて見れば、たふさに物を結び附けたり」

たふさ (名) 手くび。うでくび。又うで。かひな。神代紀上「腕フサ」後撰「折りつればたふさに汚るたてながら三世の佛に花奉る」宇津保俊蔭「おのがたふさの血をさしあやして、ことの名をかきつく」名義抄「肘シヒナフサ、手ヒナフサ」同「腕フサ」

たふさい 一搭載 貨物などを船舶にのせつむこと。

たふさぎ 犢鼻褌 (名) 短き股引の類にて、膚に著けて陰部を掩ふもの。男は其の上に袴、女は裳を著くるより、したのはかま、ものしたのたふさぎといひ、小さき帷布にて製るより、ちひさきもの、又こかたびらといひ、不淨を時時洗ひすますより、すましものといふ。松屋筆記「ふもだし」神代紀下「著犢鼻褌」雄略紀「喚集采女、使脫衣褌而著犢鼻褌」露所相撲」宇鏡「襁褓乃後」和名「褌毛乃之太乃」宇鏡集「褌オシヒナフサ、オシヒナフサ、オシヒナフサ、

たふし 〔答書〕（名）こたへの書面。返書。

たぶじょう 〔搭乗〕 船・車に乗りこむこと。

たぶじょうしょう 〔搭乗證〕（名）其の所持者が船・車等に搭乗する權利ある證票。鐵道船・船舶郵便規則第四條「郵便車室又は郵便船室に搭乗すべき郵務員は制服を著し又は搭乗證を携帶する者に限る」

たぶす 倒（他動）㊀立てるを横にす。伏さす。ねかす。宇津保俊蔭「この林より西に木をたふす斧の聲、遙かに聞こゆ」爲忠集「秋風は何のうらみに野山なる、草木をなべて吹きてたふせる」㊁ころばす。こけさす。應神紀「執横刀以殿仆（たふす）甘美内宿禰、遂欲殺矣」㊂つぶす。滅ぼす。「鷲。㊃他人に金錢上の損害を蒙らす。

たぶせ 田伏（名）田の中のふせや。田の中の假庵。萬八「しかとあらぬ五百しろ小田の中の假庵。萬八「しかとあらぬ五百しろ小田を刈り亂り、田廬（たぶせ）に居れば都しおもほゆ」同「かるうすは田廬（たぶせ）の許に吾が兄子は、にふぶにゑみて立ちませり見ゆ」

たふせい 〔踏青〕（たうせい）（蹈青）に同じ。蘇軾文「有亭樹松竹、下臨大江、毎年月八日、士女相與遊嬉、飲酒於其上、謂之踏青」黄庭堅詩「三三五五踏青來」

たぶたぶ （名、副）㊀水などの滿ちて溢へて動く狀にいふ語。太平記「せんこう、扈に酒をたぶたぶと受けて」狂言「御酌に參り、大將たぶたぶと受け」㊁衣服などの廣すぎて、身に適合せざるさまにいふ語。源氏鳥帽子折「烏帽子に大紋の袖たぶたぶと搖き合はせ」㊂肥えふとりたるさまにいふ語。忍音物語「白くたぶたぶと肥えて、うつくしきまみのほど、母君によく似給へる風の」

たぶたぶ （名、副）㊀前條に同じ。㊁小兒の語。湯又は水などをいふ。浮世風呂「手桶でだぶだぶを汲んで」同「じっとして這入ってお出でよ、ぼちやぼちやをすると、だぶだぶがはねます」

たぶつ 〔他物〕（名）㊀外のもの。他のもの。漢書「復使射他物」連中、轍跡「帛」㊁他人の所有物。

だぶつ 〔駄物〕（名）だもの（駄物）に同じ。

だぶつ 〔陀佛〕（名）あみだぶつ（阿彌陀佛）の略。

だぶつく （自動）㊀水などだぶだぶとす。㊁衣服など、身體に適合せずしてだぶだぶとす。

たぶつけん （名）〔法〕他人の所有物の上に存する物權。即ち、地上權・永小作權・質權・抵當權の類。他物上權。

たぶつじやうけん 〔他物上權〕（名）〔法〕前條に同じ。

たぶつべんさい 〔他物辨濟〕（名）〔法〕たいぶつべんさい（代物辨濟）に同じ。

たぶて 〔礫〕（名）つぶて（礫）に同じ。萬八「多夫手（たぶて）にも投げ越しつべき天の河、隔てればかもあまたすべなき」落窪「中將どのの人人、腹たぶてを投ぐれば、中納言殿の人人腹立ちて中將たぶてを雨のふるやうに車に投げかけて」名義抄「礫たぶて」

たぶて 〔答電〕（名）たふとし（尊）の語幹。

たぶと 尊（名）たふとし（尊）に同じ。

たぶとげ 尊氣（副）たふときさま。たふとさう。榮華物語「哀れに美しうたぶとげにおはす」著聞集「此の山伏、あらたふげにおはするものかなとて、其の日は歸りぬ」

たぶとーとる 猖獗（自動）自ら尊大にす。宇鏡「猖獗自尊乃爾又」

たぶとーさ 尊（名）たふとくあるさま。たふとき度合。萬「さかみづき榮ゆる今日のあやに貴左（たぶとさ）」儀禮「あなたふと、今日のたふとさや」枕「說經師は顏よき、つとまもられたるこそ、その說くことのたふとさもおぼゆれ」

たぶとし 尊貴（形）〔美（たふ）むる辭〕の太（たぶ）に、接頭語たの添はりたるもの〕㊀めでたく好し。たのしくよろこばし。結構なり。記「赤玉はをさへ光れど、白玉の君がよそひし多布斗久（たぶとく）ありけり」萬「言はむすべせむすべ知らに、極まりて、貴（たぶと）物は酒にしあるらし」㊁あがめ重んずべし。品位高くすぐれたり。恐（たぶと）く敬ふべし。萬「父母を見れば多布斗斯（たぶとし）、めこ見ればめぐしうつくし」同「かむからやそこば多敷刀伎（たぶとき）、山かむからや見がほしからむ」勢語「みかどの御屋はいとたふとくて、申し給ふを」㊂すぐれて價値あり。價たっとし。

たふとい ところ 尊處（名）極樂。一代男「出息止まって入り息次第に、たふとい處（まうるばかりになりぬ」

（諺）尊い寺は門から知れる たふとき寺は門に入るより、なんとなく其の樣子がわかる。世話盡「尊い寺は門から見える、尊い寺は門から尊い」

（諺）尊からずして高位に交はるは歌の德 任卿集「得へつつあなたふとともいふ人の、その人どとにしくことぞなき」

たぶとげ 尊氣（副）たふとげ。

たぶとび 尊貴（他動）次條に同じ。宇津保俊蔭「あなたふと、天女の行末の子にこそおはしけれと、たふとびて日はく」源氏「こよなうたふとび給ひて」

たぶとむ 尊貴（他動）あがめ重んず。敬ひて大切にす。たふとぶ。たっとむ。萬「世の人の貴（たぶと）願ふ、七くさの寶も我れは何せむに」同「ここをしもあやに多敷刀美（たぶと）、うれしけくいよよ思ひて」

たぶとむ 尊貴（他動）前條に同じ。新古今「今目をいやしみ、耳をたふとむる餘り」

たぶね 田舟（名）田の中にて用ふる小さき舟。農具便利論「田舟は深田の稻を刈りて積み入れ、田の中を押して岸に至るに運ぶ舟なり。または田面高下あるを、地面よく直す時、高き所の土をのせて、ひくき所へ引きよせ、うつしうつしするに用ふ」

たぶの-さ 〔塔婆〕（名）〔植〕いぬぐすの異名。

たぶは 〔塔婆〕（名）そとば（卒塔婆）の略。盛衰記「十九、關東、樂王菩薩は八萬の塔婆を立てて、罰を妙法に燒く」釋氏要覽「浮屠梵語塔婆、此云高顯、今稱塔」

たぶはい 〔答拜〕 人が已れに拜禮したるに答へて、已れも亦拜禮すること。たふのはい。たっぱい。彈正臺式「凡親王大臣及一位二位、於五位以上答拜」書經「君若迎拜、則還拜不敢答拜」禮記「君若

て、答禮のために發砲すること。

たぶはな （名）〔植〕屑形科、風輪菜（たぶはな）屬の草本。莖の高さ五六寸乃至一尺、始め地上に臥す。五六月頃、短き梗を有する淡紅色の細花を開き、莖を圍みて層をなし、上部は葉を缺き、只花のみにて層をなすこと六七階より十數階に至るを以て此の名あり。我が國、原野に自生す。

たぶ-ぶ 〔答舞〕（名）つがひま（番舞）に同じ。歌儀品目「一番（つがひま）左の舞一曲に、右の舞一曲ずつ奏す」

たぶぶん 〔答文〕（名）こたへのふみ。返答の文章又は文書。

たぶ-べん 〔答辯〕 他の問ひに答へて辯明すること。こたへ。いひひらき。

たぶべん-しゃ 〔答辯者〕（名）答辯する人。

たぶべん-しょ 〔答辯書〕（名）答辯の旨趣を記載したる文書。

たぶほん 〔搨本〕（名）石摺りの碑帖。

たぶみ 田文（名）土地の反別等を檢して、莊園・公領に於ける田畠等の數額、及び本所・領家・地頭の氏名等を注進せしめたる帳簿。檢地帳。水帳。東鑑「九月十四日「二品令求奥州羽州兩國省帳田文已下文書」給」北條九代記「田文、將軍家には諸國の田文を召し出だされ、源姓に仰せて勸定せしめ」

たぶ-もん 〔答問〕 人の問ひに答ふること。又、問ひたり答へたりすること。樂書「毛詩答問春秋答問」並正「先儒之迷闇」「古聖之旨」

たぶやう 〔答揚〕（たいやう）（對揚）に同じ。書經「變和天下、用答揚文武之光訓」

たぶら （接尾）股又は尻などの太くふくれたる部分をいふ語。欲明紀「尻聲（たぶら）」

たぶらかし 誑（名）たぶらかすこと。

たぶらかす 誑（他動）欺き惑はす。だます。迷はす。源氏「日頃もかくなんの給へど、ざけなどの人の心たぶらかして、かかる方にすすむるやうも侍るなるをとて」十訓「行德あるやうなれども無智の閒、終りには魔界のためにたぶらかさるべし」

たぶり-さう 〔塔輪〕（名）〔植〕こしぼがまの異名。

たぶり-りん 〔塔輪〕（名）塔上にある相輪。李洞詩「返照塔輪邊、殘霞滴穆懸」

たぶる 倒（自動）㊀立てるもの横になる。伏す。ねる。枕「大きなる木どもたふれ」源氏「八月野分あらかりし年、廊どももみなたふれし」㊁ころぶ。こける。雄略紀「顛仆（たぶる）於庭」（顛字鏡「踣太不」）枕「心地などやあしからん、たふれぬばかり」源氏「衣の裾を物にひきかけて、よろぼひたふれて」㊂くつがへる。ほろぶ。顛覆す。㊃死ぬ。和名「斃也、死也」㊄折る。屈す。源氏「あながちになどかかづらひまどはば、たふるる方に許し給ひもしつべけれど」㊅損害多くして、立ち行かぬやうになる。

たふれて のち やむ 斃而後止　斃れ死ぬまで勉む。禮記「俛焉日有孳孳、斃而后已」

（諺）倒るる事、必ず傾く方にあり 物事は仕向け次第にて成就するに譬ふ。字治拾遺「常に曰く、たふるることかならずかたぶく方にあり、心を西方にかけんに、なんぞ心ざしを遂げざらん」

（諺）倒るる所に土をつかむ 轉んでもただは起きぬに同じ。ころぶ（轉）の條を見よ。今昔「受領は倒るる所に土をつかめとこそいへ」太平記「降人に出でたる不覺の人どもが、倒るる處に土を咬む風情をしたりけるよ」

（諺）倒れたら土をつかめ 前條に同じ。

（諺）倒れぬ先の杖 轉ばぬ先の杖に同じ。ころぶ（轉）の條を見よ。

たぶる （自動）㊀心くるふ。氣ちがひになる。ものぐるひとなる。萬「多夫（たぶる）たるしこつ翁の」和名「狂、毛乃久流比」名義抄「狂たぶる」

たぶるひ （名）鷹の身振ひすること。

たぶるる-やまひ 癲狂（名）病名。てんかん（癲癇）に同じ。伊呂波字類「癲狂（たぶるるやまひ）」

たぶれ 倒（名）㊀たふること。㊁貸したる金などの取れざること。損失。損害。膝栗毛「もしあがらぬと、あなたのおたふれちやが、ようどざりますか」

たぶれい 〔答禮〕 先方の禮に答へて禮すること。返禮。漢書「於是應聘諸侯、以答禮行、誼」

たぶれ-ごころ 狂心（名）たぶれたる心。くるひたる心。きちがひじみたる心。齊明紀「時人謗曰、狂心（きちがひじみたる心）藥」

たぶれ-じに 斃死（名）ゆきだふれ。倒れて死ぬること。

たぶれ-びと 狂人（名）心のくるひたる人。きちがひ。きやケじん。三代實錄「若狂人（たぶれびと）乃國家平」正謀留事、齊貞皇神達早顯出給比」

たぶれ-ふす 倒臥（自動）たふれて横たはる。謠「よろよろ、扇弱と倒れ臥し柳」

たぶれ-まろぶ 倒轉（自動）ころびたふる。顛倒す。宇治拾遺「女うち見るままに色をたがへて、たぶれまろび走りかへりて」

たぶれ-もの 斃者（名）斃れ死にしたるもの。

たぶれる 倒（自動）たふる（倒）の口語。

たぶろかす 誑（他動）たぶらかす（誑）に同じ。名義抄「誑、誑、欺、妖、詐たぶろかす」宇鏡集「妖、詐たぶろかす」發心集「人をたぶろかして作りしほとけなれば中陰わが苦まさるなり」

たぶわ 〔答和〕 こたふること。返事。返答。平家「これを知らずして、ぬけぬけと取られて、たぶわをせられたるこそ安からね」

たぶん 〔多聞〕㊀博く種種の說を聞くこと。多くの物事を聞き知ること。博聞。書經說命「人求多聞、時惟建事」學于古訓、乃有獲」孟子「爲其多聞也」无量壽經鈔「釋迦阿難同時發心、阿難常樂多聞、故未成佛道」㊁多くの人に漏れ聞こゆること。太平記「中略、中略、事多聞に及ばば、武家に漏れ聞こゆる事や有らん」

たぶん 〔他聞〕 他に聞こゆること。他人の耳に入ること。「他聞を憚る」

たぶん 〔多分〕㊀數の多きこと。量の多きこと。又、其のもの。多數。「多分の賞與」諸經要集「我與汝多分」㊁其の中の多くの部分。保元「多分は內裏へ參りけり」㊂おほかた。多くは。十の八九は。大抵。

たぶん に つく 就多分　多數の說に從ふ。和漢古誡「多分につく」

だ-ふん 〔打扮〕 種種に裝飾すること。種種なる衣裝をつけ容貌をかふること。いでたち。正字通「今俗以裝飾爲打扮」何應龍詩「尋常打扮最相宜」

たへ 栲 (名) 古昔、耕布類の總稱。白栲は穀(カウ)の木などの皮の纖維にて織りたるものにて、純白にして光澤あり。記「しろ多閇(タヘ)の袖きそなふ、たこむらに」雄略紀「おみのこは多倍(タヘ)の袴を七へをし、庭に立たしてあよひなたすも」萬四「伊香保ろのそひのはり原、わがきぬに附きよらしもよ多敞(タヘ)と思へば」

たへ の ほ 栲穂 〔栲は白きものなればいふ〕 白き色の表はれ出づるさまにいふ語。萬二「栲乃穂(タヘノホ)によるの霜ふり、岩とこと川のひとごり」

たへ 妙 (名)(副) あやしく勝れたること。不思議なること。微妙なること。甚妙なること。神代紀上「精妙(クハシタヘ)之合搏易」萬五「神の宮の内のへの細(タヘ)なる殿に」古今五「山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり」源若菜上「萬の物の昔ととのへられたるは、たへに面白くあやしきまで誓く」曲妙(ミヤウ)紀入彌(ヒロ)

たへ なる のり 妙法 〔妙法の字の直譯〕 甚妙なる佛道の法義。又、妙法蓮華經の略。撿拾遺(ケンシウイ)「きえやすき我が身にかへて尋ねみん、たへなるのりの道しべの露」

たへ なる のり の はちすば 妙法蓮華 妙法蓮華經を百ふ。諸問「妙なる法の蓮華を、花の臺を組むなり」

たへ-べ 田部 (名) 古昔、諸國の御領の田を作るために置かれたる部族。景行紀「令諸國興田部(タヘベ)屯倉」播磨風土記「令墾田部」「難波高津宮天皇之世、召筑紫田部(タヘベ)令墾此地之時、常以五月、集聚此岡、飲酒宴」和名「長門國豐浦郡田部(タヘベ)」

たべ-あまり 食餘 (名) 食ひて殘したるもの。くひのこし。

たべ-かけ 食掛 (名) 食ひかけたること。又、其の食物。浮世風呂「これはたべかけで、きたなうござります」

たべ-かす 食滓 (名) 食ひあましたる殘物。

たべ-がた 堪難 (名) たへがたし(堪難)の語幹。竹取「世にあはぬことをば、あなたへがたとはいひはじめける」

たへがたげ 堪難氣 (副) たへがたさう。たへがたきさま。竹取「我れこそ死なめとて泣きのしること、いとたへがたげなり」榮華根合「日頃ふるままに、いと堪へがたげにおはしませば」

たへ-がたし 堪難 (形) しのびがたし。こらへがたし。我慢出來ず。つらし。くるし。竹取「戀しからんことのたへがたく」

たへ-かぬ 堪兼 (自動) こらへきれず。辛抱しかぬ。蟬丸「今は堪へ兼ね心消え、直姫愛にと言はんとすれど」

たへ-ともる 堪籠 (自動)(四) 堪へ忍びて籠り居る。源若菜「たゞ彼のたへこもりにたる山住を思ひやるのみぞ、哀れに疊東なき」同浮舟「かかる山里に今はと思ひたへこもるは、かたきわざなりければ」

たへ-しのぶ 堪忍 (自動)(四) つらきをこらふ。我慢す。忍耐す。

たべ-すぎ 食過 (名) 食を過ごすこと。くひすぎ。

たべ-つける 食附 (他動)(下) 一食ひ馴れて居る。艶狩御本地「鬼に鐵棒、惟茂に牡丹餅、さいさい手並食べつけた」二使ひ慣る。常に使用する。浮世風呂「遊ばせの入らっしやいのと、たべつけねえ言語(ヰヒ)をしても、御里が知れらあ」

たべ-て 食手 (名) くひて(食手)に同じ。

たべ-のこし 食殘 (名) 食ひ盡くさずして殘したるもの。くひのこし。

たべ-もの 食物 (名) くひもの。しよくもつ。拾遺(雜賀)「按察の更衣のつぼねより松をほしにて、たべ物を出だして侍りけるに」

(諺)たべものと念佛は一口づつ 食物と念佛とは一口づつなりとも、一家皆共になさしむべきこと。

たべ-よごし 食汚 (名) たべよごすこと。又、其の物。

たべ-よごす 食汚 (他動) 食物など食ひあらす。又、不體裁なるさまにす。色葉「淀鯉出世瀧德」「尤も初めは惚れて居たけれども今、新七めが喰べ汚して、裏までかやして喰ひ探いた物を、此の方所望に御座らぬ」

たへる 堪 (自動)(下) たふ(堪)の口語。

たべる 食 (他動)(下) たべ(食)の口語。若風俗「今日のつまり看に、酢味噌で食べる」

たべ-ゑふ 食醉 (自動)(四) 酒を多量に飲みて醉ふ。催馬樂「酒をたうべてたべ醉うて、たふとりむぞや、まうでくる、なよろぼひそ、まうでくる」宇津保上歌上「こよなくたべゑひけるなごりに、なほ苦しう侍れ」

た-べん 〔多辯〕 多く物言ふこと。口數の多きこと。くちまめ。饒舌。史記「滑稽多辯、數使諸侯、未嘗屈辱」

(諺)多辯、能なし 多辯なる人は却って藝能なし。

だべん (名) どろ(泥)をいふ、備後國福山の方言。

だ-べん 駄辯 (名) 無駄なる辯舌。役にも立たぬおしやべり。「駄辯を弄す」

たべん-か 多辯家 (名) 多辯なる人。饒舌家。

たへん-けい 多邊形 (名)(數) たかくけい(多角形)に同じ。

たほ 髢 (名) 一結ひ髪の、後方へはりだしたる部分の稱。つと。二婦人の稱。「酌はたほ」膝栗毛「いいたほでもあったら、此の息子をだし抜くめえよ」

だほ 〔拿捕 拏捕〕 とらふること。敵船又は戰時禁制品の輸送を差し押ふること。

たほう 〔多寶〕 (名) 佛語。たほうによらい(多寶如來)の略。榮華鶴「敬ふ禮釋迦多寶妙法大乘、妙光法師普賢菩薩」同鶴「「釋迦・多寶、座をわけてならばせ給へる程など」

たほう の たふ 多寶塔 たほうたふ(多寶塔)に同じ。榮華玉「白銀の塔多寶の塔」

たほう の たふば 多寶塔婆 前條に同じ。盛衰記四十五「一十六丈の多寶の塔婆を建立して」

だほう (名) おろかなるものをいふ、信濃國の方言。

たほう-たふ 〔多寶塔〕 (名) 佛語。釋迦が法華經を說きたる時、多寶如來の全身の舍利を安置したる寶塔の、俄かに空中に出現して釋迦を讚嘆せしといふに擬して作りたる塔。日本紀略天慶八年三皇太后於法性寺供養多寶塔。一切經等」本朝文粹十三藤原在衡「心中發願之後、新結構多寶塔一基」

(ふたうほた)

安置五佛像」宋之問詩「和九月九日」「散花多寶塔、張樂布金田」

たほう-によらい 多寶如來 (名) 佛語。東方の寶淨國にありといふ佛。諸佛の法華經を說く時、出現して讚嘆・證明すといふ。榮華玉「只今、多寶如來出現し給はんかしと疊えて」

たほ-がみ 髢髮 (名) たほ(髢)に同じ。

たほ-きす (名)(動) おきぎす(沖鱚)の異名。

だ-ほく 〔打撲〕 うつこと。たたくこと。うちみ。

だほく-しやう 〔打撲傷〕 (名) 打撲によりて生じたるきず。うちきず。

たほける (自動)(下) とぼけるに同じ。

たほ-さし 髢差 (名) 女の髢を張り出さん爲め、髪の内に入るる具。針がねを綿にて包み、それを紙にて卷き、漆を塗りたるもの。古くは鯨鬚を用ひて作れり。つとさし。つとばり。浮世風呂「髢插だの張龍(ハリ)だのと、調法なことになりました」つとはねばり(ツトハネバリ)調つとばり加賀つとかうがい土産(物種 諺呼)

たほ-どめ 髢留 (名) 髢の毛の散らぬやうに挾みおく又狀の具。

だほ-はぜ (名)(動)魚類中、硬骨類の一種。はぜの類に屬す。體の長さ三四寸、頭は圓大にて、全身汚黑色なり。我が國、各地の沿海、潮線附近の岩礁間に棲息す。

たほ-みの 髢裝 (名) 髢差の一種。毛にて作りたる蓑狀のもの。

たほめかし (形) たをめかしを見よ。

たほめかしう 枕「あしうあくれば、障子などもたほ(を)めかしうこぼめくこそ」

だ-ほら 駄法螺 (名) 拙劣なる誇張の言。

たほらかす 誑 (他動)(四) たぶらかす(誑)の訛り。かた言

たま 玉 珠 (名) 一美麗なる寶石類の總稱。彫琢して裝飾品となすもの。記「赤陀麻(タヘ)は、をさへ光れど」同「弟たなばたのうながせる多麻(タヘ)のみすまるみすまるに、あな陀麻(タヘ)はや」二特に眞珠の稱。武烈紀「琴がみに來居るかげ姫玉ならば、あがほる玉のあはびしら陀麻(タヘ)」萬「底清みしづける玉(タヘ)を見まくほり、千度ぞ告つりし、かづきする海人」三物事を美めていふ語。記「多麻(タヘ)手、多麻(タヘ)手さしまき、もも長にいはなさむを」武烈紀「拖摩(タヘ)げには飯さへ盛り、拖摩(タヘ)もひに水さへ盛り」萬「つく日よはすぐはゆけども、あもしが多麻(タヘ)の姿は忘れせなふも」四圓形をなせるものの總稱。天智紀「橘はおのがえだえだなれども、陀麻(タヘ)に貫さく時おやじをに貫く」萬八「さを鹿の萩にぬきおける露の白珠(タヘ)、あふさわに誰れの人かも手にまかむちふ」和名「弄丸(多利)」五銃砲の彈丸。信長記「(桶狭間)是れは杉谷善住坊と云ひし鐵炮の上手、佐佐木承禎に頼まれて打ちたる也。二つ玉を以て、纔か十間計りにて打ち外し申せし事も」六娼妓又は藝者などの身を指していふ語。「玉がいい」七紋所の名。玉の象に摸したるもの。いつつ玉 たま 玉結 たまきり

(たま)

つたま・たまきやう・たまぎり等種あり。八涙のたま。なみだ。本朝二十不孝「扨も扨も嬉しやと、袖に玉を流しぬ」九策略などの手段に使用せらるるもの。「たまに使ふ」十たまご(卵)の略。十一こんにやく(蒟蒻)をいふ、宮女の詞。享保六年九月廿七日法皇林丘寺宮御幸記「たまとは、こんにやくの事」十二魚の鰭(ヒレ)の名所。うを(魚)を見よ。十三魚をすくひ捕る具。たも。

たま しく 玉敷 玉を敷きたる如く美し。萬「多麻之家(タヘシヤ)る清きなぎさを、しほ滿てば飽かず吾れ行く歸るさに見む」夫木「夕露のたましく小田のいなむしろ、かへす穗ずゑに月ぞ宿れる」

たま しく には 玉敷庭 玉を敷く如く美しき庭。又、禁中の庭。月清集「おく露を拂はで見れば淺茅原、玉敷く庭となりにけるかな」夫木「百敷や玉しく庭の清き瀬に、光をそへて宿る月かな」

たま ちる 玉散 一玉が飛び散る。玉の如くまろび散る。後拾遺「奥山にたぎり落つる瀧つ瀬の、玉ちるばかり物な思ひそ」二刀劍の刃の光りきらめくさまにいふ。樞山姥「父様の御讓りの銘の物中幕鞘口抜き見れば、氷の燒刃玉散るばかり」

たま と あざむく 玉のやうに見せかく。古今眞「はちす葉の濁りにしまぬ心もて、何かは露を玉と欺く」賀古教信七墓廻「五濁の曇り霽れ初めて、玉と欺く萩の露」

たま ぬく あせ 玉貫汗 玉をつづる如く流るる汗。孕常磐「お辱もふるひつったりと、玉抜く汗もいとしらし」

たま の あせ 玉汗 玉の如くはげしく出づる汗。傾城鳥原蛙合戰「ぞっと寒けに中略手足は氷り、額は霰の玉の汗」日本振袖始「娘が苦しむ玉の汗、時雨・村雨・夕立の一度に降り來る如くにて」

たま の あみ 玉網 玉を貫き綴りたる如きうつくしき網。夫木「天の川流れて下だる雨をうけて、玉のあみはるささがにの絲」

たま の いけ 玉池 すずり(硯)をいふ女詞。

たま の いづみ 玉泉 玉の如く清く透徹する泉。拾玉「流れ來る玉の泉のかげなれや、霜ゐて月の有明の空」續古今「釋教「晉に聞く玉の泉のすゑよりや、御法の水の流れそめけん」

たま の うたよみ 玉歌讀 玉の如きうつくしき歌を讀む人。大和物語「あなおもしろの玉の歌讀みやとなんの給ひける」

たま の うてな 玉臺 玉にて飾りたる如くうつくしきうてな。竹取「むぐらはふ下にも年は經ぬる身の、何かは玉のうてなをも見ん」枕「玉のうてな求め給はましかば、出できこえてまし」源若菜「殿中略いとど玉のうてなにみがきしつらひ、よろづをととの〈給へり」

たま の うるき 玉植木 玉の如くうつくしき樹木。玉を貫き綴りたる如き木。夫木「和泉なるしのだの森のちえながら、玉のうるきにかざる白ゆき」

たま の おび 玉帶 一ごくのおび(玉帶)に同じ。二玉の如きおび。うつくしき帶。夫木「白露の玉の帶する垣ごしは、雪かと見ゆる庭の面かげ」

たま の かうぶり 玉冠 ぎよくくわん(玉冠)に同じ。和名「冠(加乃)」

たま の かざし 玉簪 たまのかんざし(玉簪)に同じ。新古今「その かみの玉のかざしをうちかへし、今は衣のうらを翻まん」

たま の かほばせ 玉顏 玉の如き顏。美しき顏。

たま の かむり 玉冠 たまのかんむり(玉冠)に同じ。狂言「鬼共」「鬼魔大王中略たまのかむりに石の帶、あたりも輝く體と聞いたが」

たまのかんざし 玉簪 玉にて飾りたるかんざし。又、玉の如く美しきかんざし。拾遺員外「をみな へしをも惜しまぬしら露の、たまのかんざしいかさまにせん」謠曲「玉の簪羅綾の袂、風に棚引く瑞雲に乗じ」

たまのかんばせ 玉顔 たまのかほばせ(玉顔)に同じ。

たまのかんむり 玉冠 たまのかうぶり(玉冠)に同じ。大鏡冠「忠臣の頭には、紙の頭巾も玉の冠り」

たまのき 玉木 玉にて飾りたる如き美しき木。花林院歌合「玉の木に枠の杜もなりにけり、ふる白雪の消えぬ限りは」

たまのきさはし 玉階 ぎよくかい(玉階)に同じ。謠曲「玉の階の、金銀を磨きて輝けり」

たまのくづ 玉屑 ゆき(雪)の異名。

たまのこし 玉輿 ㊀貴人の乗る輿の美稱。㊁富貴なる身分。「氏なくして玉のこし」

たまのとずゑ 玉梢 玉にて飾りたる如き美しきこずゑ。松風村雨東帯鑑「山は金色、巌は瑠璃、岡には玉の梢を連ね」

たまのとてん 玉御殿 玉にて飾りたる御殿。玉殿。謠曲「月も輝く玉の御殿に、光を添ふる氣色かな」

たまのころも 玉衣 珠玉にて飾りたる衣。うつくしき衣。雲忠百首「もりくなる板を霰のなかりせば、玉の衣をきてねましやは」

たまのこゑ 玉聲 ㊀うるはしき音聲。又うつくしき詞章。月詣集「ひら毎に光さすめることのはは、玉のこゑせしたぐひとぞ見る」夫木「水ぐきの跡に残れるたまのこゑ、いかがも寒き秋の頃かな」㊁すず(鈴)の異名。

たまのさかづき 玉盃 ぎよくはい(玉杯)に同じ。雲忠百首「思ふどちかりばの小野にまと居して、さしこそかはせ玉の盃」徒然草「よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の巵の底なき心地ぞすべき」

たまのさを 玉棹 さを(竿)の美稱。平家女護島「黄金の拂やあ玉の棹、綾錦を帆に上げて」

たまのすがた 玉姿 玉の如くうつくしきすがた。玉容。萬「つく日よはすぐはゆけども、あもししが多麻乃須我各(タマノスガタ)は忘れせなふも」夫木「露ぬける春の柳はさほ姫の、玉のすがたを見するなりけり」

たまのすだれ 玉簾 たますだれ(玉簾)に同じ。盛衰記「玉の簾、錦の茵に勞り奉って、あだにも出で入り給はぬ姫君達」

たまのちり 玉塵 ゆき(雪)の異名。

たまのと 玉戸 と(戸)の美稱。夫木「玉の戸のひらくる今日の桃の花、身のよろこびと成るぞうれしき」

たまのとこ 玉床 玉にて飾りたる床。うつくしき床。千載「我が松が根の枕も何かあだならん、たまの床とて常のとこかは」

たまのとびら 玉扉 玉の如く美しき扉。謠曲「我れ白髭の神ぞとて、玉の扉を押し開き、社壇に入らせ給ひけり」

たまのとぼそ 玉枢 玉の如く美しきとぼそ。うつくしき家居。曾丹集「あしたに通ひしたまのとぼそも、ゆふべには八重むぐらにうづもれて」榮華「月ノ黄金の車ながら寄せて、玉のとぼそをとぢてより此のかた」

たまのにはー 玉庭 うつくしき庭。夫木「卯の花の、しらちに咲けば山かづの、埴根も玉の庭となるなん」

たまのはこ 玉箱 ㊀玉にて飾りたる箱。うつくしき箱。㊁たまてばこ(玉手箱)に同じ。字津保「わび人の涙をひろふ物ならば、扶や、玉のはこにならまし」夫木「島の子が心ゆるさぬ玉の箱、あくれどあけぬ物にぞありける」

たまのふえ 玉笛 玉にて飾りたる笛。美しき笛。謠曲「夕月輝く玉座のあたり、玉の笛のね聲すみて、月宮の昔もかくやとばかり」

たまのまがき 玉籬 まがき(籬)の美稱。夫木「ぬれてほす露も千とせを契りおきて、たまのまがきにうつす白菊」

たまのみぎり 玉砌 美しき庭。壬二集「むかし見ぬ花稱のほふまで、たまの砌の荒れまくも惜し」長秋詠藻「君が代をのどかなりとや水鳥も、たまの砌につばさ敷くらん」

たまのみず 玉簾 珠玉にて飾れるみす。うつくしきすだれ。たますだれ。伊勢集「立ちゐならしし御殿は、玉のみすさへあげてけり」

たまのみとの 玉御殿 玉にて飾りたる如きうつくしき殿。夫木「かたそぎや玉のみとのの初霜に、まがひて咲ける白菊の花」

たまのみや 玉宮 玉にて飾りたる宮殿。うつくしき宮殿。浦島年代記「珠の宮、貝の闕(ハ)て、天上の三光に應じ」

たまのみやこ 玉都 みやこ(都)の美稱。夫木「いさぎよき玉の都を出づる日は、わがたつ袖のひかりなるらん」

たまのみやゐ 玉宮居 玉にて飾りたる如きうつくしき宮居。

たまのむらぎく 玉叢菊 美しく叢がり立てる菊。美しき叢菊。榮華「うつろはで庭おもしろきはつ霜に同じところなる玉のむらぎく」亀山殿七百首「いく秋も植ゑて契りや結ばまし、とき知る露の玉の村ぎく」

たまのもたひ 玉甍 玉にて飾りたるもたひ。

たまのゆか 玉床 ゆか(床)の美稱。謠詞花集「松がねの枕も何かあだならん、玉のゆかとてつねのとこかは」

たまのゐ 玉井 井の美稱。美しき井。新後撰「すみやめし元の心の清ければ、濁りもはてぬ玉の井の水」

たまのをぐし 玉小櫛 玉にて飾りたる櫛。又、くし(櫛)の美稱。源氏「さしながらむかしを今に傳ふれば、玉のをぐしぞ神さびにける」萬代「ゆくへなき玉のをぐしをかたみにて、猶そのかみを忘れわびぬる」

たまのをごと 玉小琴 玉にて飾りたる琴。玉の如く美しき琴。萬「ひざに伏す玉之小琴(タマノヲゴト)の事なくば、いとここばくに吾が戀ひめやも」新千載「忘れずよ手向けの庭の露とおく、玉の小琴の代代のしらべは」

たまのをとこ 玉男 玉の如くうつくしき男。字津保「我が國に見え給はぬ姿のおはするたまのをとこの見え給へるは、いみじうかなしさに」

たまのをのとみこ 玉男御子 玉の如く美しき男の御子。源氏「たまのをのこみこさへ生まれ給へり」

たままく 玉鑑 玉にて鑑(ヲ)き飾る。萬「太刀のしり玉鑑(マク)田井にいつまでか、いもをあひ見ず家ひとをらむ」同「梓弓玉に多麻末吉(マク)かくすすぞ、ねななくにし裏をかぬかぬ」

たままくらず 玉卷葛 葛の若葉の葉先の卷きたるが玉の如きよりいふ語。一説、風吹けば葛の葉の露の亂れこぼるるが、玉を播き散らす如く見ゆるよりいふ語。宇津保「しら蝶に色かはりゆく秋萩は、たままくらずもかひなかりけり」奥儀抄「たままくらとは、くずのかづらとては、玉のやうに卷きすゑたればなり」

たまゐる 玉居 玉がかがやきてある。玉が置きてある。源氏「契りおかん此の世ならでもはちす葉に、たまゐる露の心へだつな」後拾遺「岩間には氷のくさび打ちてけり、玉ゐし水も今はもりこず」

たまをいる たまあみを水に入れて、釣り得たる魚などをすくひ上ぐ。

たまをころばす 韓玉 音聲のうつくしきに譬へいふ。

たまをのぶ 美しきさまに譬へいふ。國姓爺「三月の都の宮人の胤や此の世に降る露の、玉をのべたる御委」

(諺)玉ある淵は岸破れず 知能の人多き國は滅ぶることなき譬へなどにいふ。國姓爺「玉ある淵は岸破れず、龍住む池は水潤れず」

(諺)玉かけし衣の裏 ころも(衣)の裏、ころものうらのたま(衣裏玉)を見よ。

(諺)玉となって碎くるとも、瓦となって全からじ 名譽の死をすとも、不面目なる生存を潔しとはすまじ。北齊書「大丈夫寧可玉碎不能瓦全」

(諺)玉に瑕 物事の十分なる中に、一つの缺點ある譬へ。源「玉あたら御身をいみじう沈みもてなさせ給ふこそくちをしく、玉に疵あらん心地し侍れ」榮華「玉にきずつきたらんやうに見えさせ給ふ」淮南子「明月之珠、不能無瑕」論衡「以不純言之、玉有瑕而珠有毀」

(諺)玉の瑕 前條に同じ。源「いとかうしもおぼえ給へるこそ心うけれと、玉のきずに疵さるるも」

(諺)玉の杯、底なきが如し 玉に瑕の類にて、もの足らぬ譬(にいふ。徒然草「よろづにいみじくとも、色好まざらん男はいとさうざうしく、玉の酒盃のそこなき心ちぞすべき」左思文「且夫玉巵無當、雖貴非用」

(諺)玉琢かざれば器をなさず 玉は彫琢せざれば良き器となり難き如く、人も勉め學ばざれば完全なる人となるを得ざるに譬ふ。禮記「玉不琢、不成器、人不學不知道」

(諺)玉磨かざれば光なし 前條に同じ。實語教「玉不磨無光」

(諺)玉も持つ人による 物事は身分相應なるべし。

(諺)蓮を懷きて罪あり 身分不相應なる物事には、災禍を招き易きに譬ふ。左傳「初虞叔有玉、虞公求、請弗獻、既而惧之曰、固諺有之、匹夫無罪、懷玉其罪、吾焉用此其以買害也、乃獻之」

(諺)玉を還して匱を留む 物の良否の鑑別なきに譬ふ。韓非子「楚人有賣其珠於鄭者、爲木蘭之櫃、薰桂椒之檟、綴以珠玉、飾以玫瑰、輯以翡翠、鄭人買其櫃而還其珠」

(諺)玉を玄び、桂を炊ぐ 生計の困難なるに譬ふ。戰國策「楚國之食貴於玉、薪貴於桂」中庸「今日食玉炊桂、因鬼見帝」

(諺)玉を以て鳥を拋つ 物多ければ貴ばれざるに譬ふ。劉子新論「崑山之下以玉抵鳥、彭蠡之濱以魚食犬」番禺雜記「黎洞之人以香代薪、荆山之下、以玉抵鵲」

たま 靈 魂 (名) たましひ(魂)に同じ。神代紀「倉稻魂、此云宇介能美拖磨(ヲ)」古今序「聲を聞かで、たましひ(ヲ)をだに聞かでわかるるたまよりも、なき床にねん君ぞかなしき」勢語「思ひ餘り出でにしたまのあるならん、夜深く見えばたま結びせよ」

たまあふ 魂合 心よく合ふ。氣が合ふ。萬「鑒合(ナカ)ばあひねむものを、を山田のしし田もるごと母しもらすも」同「筑波ねのをてもこのもにもりべすゑ、母こもれども多麻(タマ)そ阿比(ヒ)ける」

たまのありか 魂在所 死にたる人の靈魂の留まり居る所。源「琴ね行くまぼろしもがな、つてにてもたまのありかをそこと知るべく」

たまのゆくへ 魂行方 靈魂の行きたる方。古今「うつせみのからは木ごとにとどむれど、たまのゆくへを見ぬぞかなしき」

たまのよどこ 靈夜床 たまどこ(靈床)に同じ。右京大夫集「みがきこし玉のよどこに塵つみて、ふるき枕を見るぞかなしき」

たまのよどの 靈夜殿 前條に同じ。榮華「思ひやれ胸やはあくる晉高み、たまのよどのの戸をとぢしより」同「ありとてや人はとふらんおくりおきし、たまのよどのにそひにしものを」

たまふる 魂鎮めの祈りをなす。古義「萬(ヲ)、たましひはあしたゆふべに多麻布禮(ヲ)ど、あが胸いたし戀のしげきに」

たままつる 魂祭 魂祭(ヲ)をなす。詞花「たままつる年の終りになりにけり、今日にや又もあはんとすらん」

たま 適偶 (名、副) たまさか。またまま。まれ。

(諺)たまに出る子は風に逢ふ たまたま事をなすものは失敗がちなるに譬ふ。

(諺)たまに吹く風、物に中たる 稀にある事、却って影響多し。和歌民のかまど「たまに吹く風物に中たる」

だま (名) 風の絲を遣ることを。小兒の語。

だま (名) いしなご(石子)をいふ。出羽國の方言。

だま (名) 欺くこと。だますこと。だまかし。

だまをくはす だましをくはす。だます。遂約す。浮世床「猪を百目買ってやる筈だが、此の中の晩もだまを食はした」

だま (名) 【植】あぶらぎり(油桐)の異名。

だば (名) 駄馬 だば(駄馬)に同じ。

たばあおさゐ (名) 【植】虎耳草科、八仙花屬の落葉灌木。幹の高さ四五尺、通常叢生す。葉は對生、長楕圓形にして先端尖り、鋸細なる鋸齒あり。七八月頃、梢頂に球狀の蕾を生じ、青紫色の花を開く。我が國、山地に自生す。ぎよくだんくわ。きんかさう。ぎんばいさう。

たばあられ 玉霰 (名) ㊀あられ(霰)の美稱。新續古今「み山べを夕越えくれば椎柴の、枯葉に傳ふ玉あられかな」謠曲「小篠の上の玉霰、音もさだかに聞こえず」㊁あられの形に作りたる菓子。

たばいし 玉石 (名) 河川などに產する圓形の石。石垣などを積むに用ふ。

たばいしづみ 玉石積 (名) 石垣などを、たばいしにて積むこと。

たばいと 玉絲 (名) 玉繭(ヲ)より採りて得たる絲。太くして節多く、精良なる織物となし難し。重に節織又は銘仙織に用ふ。

たばうぎ 玉蓋 (名) 美しき蓋(ヲ)。美

しきかづき。記「みへの子がささがせる、みづ多麻宇岐(タマウキ)に浮きしあぶら」

たまうち　毬打　(名)　だきち(打毬)に同じ。

たまうち　魂打　(名)　驚きて肝をつぶすといふ意なるべし。(東海木　東鑑八文治四年　曾我物語)「乾方或響、是若魂打歟、非雷聲」(愚聞不及)

たまえ-さぐさ　玉江草　(名)　次條に同じ。

たまえ-さぐさ　玉江小草　(名)　葦(ヨシ)の若ばえの稱。下文を見よ。祕藏抄「難波江の、たまえさぐさのつのぐめば、駒もいばえて嬉しかるらん。玉江さぐさとは、あしの若ばえ也」

たまおくり　靈送　(名)　盂蘭盆の終りに、亡者の靈を送ること。俳諧新選集「一休のしの字も燈せ玉送り」

たまおくりび　靈送火　(名)　おくりび(送火)に同じ。

たまおち　玉落　(名)　江戸時代、千石以下の旗本に扶持米を交付せる一種の抽籤方法。春秋二期に淺草の藏前にて行ふ。各自の姓名及び受け取るべき高を記したる紙片を丸めて特別の裝置ある箱に入れ、其の中より下に落ちたる紙片の人より追追に交付するもの。

たまか　(名)副　㊀まめやかなること。物事を緻密に處理すること　生玉心中「心もたまかに育て上げ」㊁つづまやか。儉約。二代男「源氏火にて文を讀むなど、たまかな事なり」

たまかがみ　玉鏡　(名)　玉にて作りたる鏡。又、うつくしき鏡。著聞「一切法門その大意を得て、玉鏡をかけて一念の疑ひ滯ることなし」二代男「直徑三尺五寸の水晶の玉鏡を」

たまかき　玉垣　(名)　(たまは美稱)㊀神社の周圍に設くる垣の稱。いがき。みづがき。一說、垣の二三重ある時は、内を瑞垣(ミヅガキ)、外を玉垣といふ。(東雜記)「みもろに築くや多麻加岐(タマカキ)築き餘まし、たにかもよらむ神の宮人」曾丹集「みむろ山木の葉散りにし朝より、あらはに見ゆるよものたまがき」玉葉(建武)㊁こし(腰)に同じ。㊂紋所の名。かき(垣)を見よ。

たまかきの　玉垣之　(枕)　たまがきをみづがきともいふより、みつにかけてくれば、ゆきかふ人の花をたむくる」

たまかきの-うちつくに　玉垣内國　(名)　日本國の異稱。神武紀「玉牆內國(タマカキノウチツクニ)」

たまかきの-うちつみくに　玉垣内御國　(名)　前條に同じ。夫木「たまがきのうちつみ國の朝がすみ、光へだてぬ春はきにけり」

たまかざる　玉限　(枕)　かぎるは輝くこと。玉の輝くといふより、光の殊にきらめく夕日などにかけ、玉は淵にありて輝くより淵などにかけ、又、其の光のほのかにかがやくといふより、ほのかにもかけていふ。萬「さか鳥の朝とえまして、玉限(タマカギリ)ゆふさりくれば」同「朝かげに我が身はなりぬ、玉垣入(タマカキ)ほのかに見えていにし子ゆゑに」同回「まそ鏡見ともいはめや玉限(タマカギリ)岩がき淵のこもりたるつま」

たまかさ　(名)　たまかなるさま。たまかなる度合。新水代藏「皆一心のたまかさを、天知り地知り人知らずと言ふ事なし」五十年忌歌念佛「母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のたまかさ・かうたうさ」

たまかしば　玉堅磐　(名)　堅きいはほの美稱。千載「難波江のもに埋もるる玉がしは、あらはれてだに人を戀ひや」夫木「知らせばや思ひ入江の玉がしは、舟さす棹の下にこたへて」

たまがしば　玉柏　(名)　かしは(柏)の美稱。催馬樂「みの山にしんじに生ひたるたまがしは、とよのあかりにあふが樂しさや、あふが樂しさや」金葉「玉がしは庭も葉びろになりにけり、こやゆふしでて神まつる頃」

だまかす　騙　(他動)　だます(騙)に同じ。

たまかつま　玉籠　(名)　かつま(勝間)の美稱。

たまかつま　玉籠　(枕)　玉かつまは香と身とあふより、あふ・あへにかけ、締め緊むるよりしまにかく。一說、かつまの目の荒きより、透きの釣しにつづく。(冥報記)萬「玉勝間(タマカツマ)あはむといふは難なるか、あへる時さへおもがくしせず」同回「玉勝間(タマカツマ)、安倍島山の夕露に、旅ねはえすや長き此の夜を」同回玉勝間(タマカツマ)島熊山の夕ぐれに、ひとりか君が山路こゆらむ」

たまかつら　玉桂　(名)　月の中にありといふ桂の木。又、月の異稱。新撰萬葉「戀ひわびて影をだに見じ、玉桂(タマカツラ)ことは根さへに掘りて捨ててむ」同回「後つひにいかにせよとか、玉桂(タマカツラ)戀する宿に生ひまさるらむ」

たまかづら　玉蘿　(名)　㊀古昔、多くの玉を緒に貫き、頸に懸けて飾りとせしもの。記下「即爲其妹之禮物、令持押木玉鬘(依未成人不可上髮給歟)」㊁かづら。かもじ。㊂けまん(華鬘)に同じ。

たまかづら　玉葛　(名)　蔓草の總稱。萬「玉葛(タマカツラ)みならぬ木には、ちはやふる神ぞつくとふ、ならぬ木ごとに」同回「玉葛(タマカツラ)花のみ咲きてならざるは、たが戀ならめわは戀ひもふを」

たまかづら　玉蘿　(枕)　たまかづらは頭に懸くるものなるより掛くにつづけ、又轉じて、かげにもつづく。萬「人はよし思ひやむとも玉蘿(タマカツラ)、かげに見えつつ忘らえぬかも」同「玉蘿(タマカツラ)かけぬ時なく戀ふれども、何ぞも妹に逢ふ時もなき」

たまかづら　玉葛　(枕)　玉葛の蔓の長く延びひろがるより、延へ・長く又は絶ゆ・繰(クル)るにつづく。萬「谷せばみ峰べには・へる玉葛(タマカツラ)、は・てしあらば年にこずとも」同「玉葛(タマカツラ)いやとほながく、おやの名もつぎゆくものと」同回「谷せばみ峰にはひたる多麻可豆良(タマカツラ)、たえむの心わがもはなくに」後撰「たかづらたのめくる日の數はあれど、たえだえにてはかひなかりけり」

たまかひ　珠貝　(名)　(動)　あこやがひ(阿古屋貝)の異名。

たまがひ　玉貝　(名)　(動)軟體動物中、腹足類の一種。介殼は球形にして厚し。螺層短く、淡き肉色又は黃褐色なり。卵塊は廣く卷きて、恰も帶の如し。性肉食にして、小さき二枚貝を食ふ。淺海の砂中に產す。つめたがひ。

(ひがきた)

たまがやつり　(名)　(植)莎草(サウ)科、莎草屬の草本。概形みづがやつりに似、只穗は細微なる小穗多數密集して、直徑二三分の小球狀をなすを異なりとす。穗は夏季花莖上につきて、通常淡褐又は黑褐、一莖上に十二箇許りを生ず。我が國、水田・沼澤附近に自生す。

たまがる　(自動)　たまげる(魂消)をいふ。陸奥國の方言。(物類呼稱)

たまき　手鏡　(名)　㊀上古、玉などにて飾り、手に纏ひて裝飾とせしもの。たゆひ。記上「於投棄左御手之手纏(タマキ)所成神」仁德紀「取得田道之手纏(タマキ)與其妻」萬「わたつみの多麻伎(タマキ)の玉を拾ひ取り」字鏡「鈴太風(タマキ)」同「玥(タマキ)」㊁弓を射る時、左の臂を被ふ具。後の弓籠手(ユガケ)に同じ。和名「射鞲(タマキ)也」名義抄「韝(タマキ)」

たまき　環　鐶　(名)　輪狀をなして孔ある玉。古へ、指などにつけて飾りとす。靈異記上「環(タマキ)解一玉授之」名義抄「環(タマキ)」

(たまき)種の端なきが如し　めぐりめぐりて極まる處を知らざる譬へにいふ。推古紀「相共賢愚、如鐶(タマキ)無端」(歌四季物語正月)「小車のとどまる事なく、たまきのはしなきが如し」史記「奇正還相生、如環之無端」

たまきぎょう　玉桔梗　(名)　紋所の名。たま(玉)を見よ。

たまきっちゃう　玉毬打　(名)　ぶりぶりぎっちゃう(振毬打)に同じ。誰身の上「かざりわらべの玉毬打、ぶりぶりふりし佐保姫に」

たまきぬ　珠衣　玉衣　(名)　美しき衣服。夫木「白妙の露の玉ぎぬ上にきて、からなでしこの花やねぬらん」舊俗原「色香を飾る玉衣の袖の白露、起き臥しの御簾の内を立ち去らで」

たまきぬ-の　珠衣之　(枕)　ありぎぬのを見よ。萬「珠衣乃(タマキヌノ)さゐさゐしづみ家のいもに、ものいはずきて思ひかねつも」

たまきはる　(枕)　魂極まる義にて、一生の閒をかけていふより、いのち・世、又は現(ウツ)の義にてうちにかく。一說、たまきは手纏にて、はるは佩(ユ)くに同じく、手纏佩く腕(タ)といふよりうちにかけ、うちは現世の義なるより世にも命にもかく。(古義記)「多麻岐波流(タマキハル)うちのあそ」萬「多摩枳波流(タマキハル)いのち惜しけど、せむすべもなし」同「多末伎波流(タマキハル)いく世へにけむ、立ちて居て見れどもあやし」

たまきぶ　玉黍　(名)　【動】軟體動物中、腹足類の一種。殼は球形、螺頂尖り、數條の肋筋あり。高さ四五分。殼口圓形にして今縁なり。表面は褐色、白色の條帶或ひは點斑を具ふ。海濱の岩礁に群著し、手を觸るれば直ちに離れて海中に落つ。

たまきび　玉蜀黍　(名)　【植】たうもろこし(玉蜀黍)の異名。

たまきり　玉桐　(名)　紋所の名。たま(玉)を見よ。

たまきり-りう　玉置流　(名)　御家流より分かれたる書道の一派。玉置半助を祖とするもの。

たまきる　魂消　(自動)　肝を潰す。驚く。びっくりす。仰天す。平家四「堀河院御在位の御時、主上しかの如く怯え魂極(タマキ)せ給ひけり」盛衰記十六三位「魂と云ふ鳥の音を鳴く時に、必ず振ひたまきらせ給ひけり」

たまくし　玉櫛　(名)　くし(櫛)の美稱。萬「少女が玉くしげなる玉櫛(タマクシ)の、かむさびけむもいもに逢はずあれば」

たまくし　玉串　玉籤　(名)　(たま(玉)は美稱。一說、手(同)串の義)㊀榊の枝に木綿(ユフ)又は紙をつけて、神前に供ふるもの。神代紀上「使山雷者、採五百箇眞坂樹八十玉籤(タマクシ)、野槌者、採五百箇眞坂樹八十玉籤(タマクシ)」玉籤、此云多摩倶之(タマクシ)」㊁轉じて、榊の稱。新古今「神風や玉ぐしの葉を取りかざし、内外の宮に君をこそ祈れ」風雅「春の日も光ことにや照らすらん、たまぐしの葉にかくる白ゆふ」

たまくしげ　玉櫛笥　(名)　くしげ(櫛笥)の美稱。萬「少女こが珠籤(タマクシ)なる玉ぐしの、かむさびけむもいもに逢はずあれば」同「この箱を開きて見てば、もとのごと家はあらむと、玉籤(タマクシ)少し開くに」

たまくしげ　玉櫛笥　(枕)　覆ふ・ひらく・明く・身・蓋(フタ)・奥(オク)など、笥(ケ)に緣ある語にかけていふ。萬「玉匣(タマクシ)おほふをやすみ明けていなば、君が名はあれど吾が名し惜しも」同「はしきやしふかぬ風ゆゑ玉匣(タマクシ)ひらきてさねし我れぞくやしき」同「このごろは戀ひつつもあらむ、多麻久之氣(タマクシケ)、あけてをちよりすべなかるべし」同「玉匣(タマクシ)みむろの山のさなかづら、さねずばつひにありがてしも」同「ぬば玉の夜はふけぬらし、多末久之氣(タマクシケ)ふたかみ山に月かたぶきぬ」同「あきつ羽の袖振るいもを、珠匣(タマクシ)、おくに思ふを見給へ、わぎみ」

たまくしろ　玉釧　(名)　くしろ(釧)の美稱。萬「わが戀ふる子を玉釧(タマクシロ)手にとり持ちて、まそ鏡ただめに見ねば」

たまくしろ　玉釧　(枕)　玉釧は手に纏(マ)くものなればまくにかく。萬「玉釧(タマクシロ)まきぬる妹もあらばこそ、よひの長きもうれしかるべき」

たまぐすく　玉碎　(名)　下文を見よ。

たまぐすり　玉藥　(名)　【植】いぬぐすの異名。

たまぐ-の　珠衣之　(枕)　銃砲の發射に用ふる火藥。彈藥。火藥。甲陽軍鑑「貴賤共分量之外、鐵砲之玉藥支度可爲忠節也」

たまぐ-ぐし　玉串　(名)　たまくし(玉串)に同じ。萬「少女が玉くしげなる玉櫛の、かむさびけむもいもに逢はずあれば」

たまぐる　魂消　(自動)　たまきる(魂消)に同じ。心中曾廣申「長長と書き附けたる半紙讀みさし、大きにたまげ、こりやなんぢや」たまがる(陸奥)「たまぐるちめうした」(物類呼稱)

たまこ　(名)　船具。ねくくり(根括)に同じ。

たまご　卵　玉子　(名)　㊀雌雄動物の生殖器内に生じ、發育して幼動物となり得るもの。概ね球形の細胞にして、内に原形質・核・卵黃・脂肪球等を含む。其の構造は動物によりて異なり。外面には更べ、其の立て並べた桶陰に、松木にて製りたる五貫目彈の木鉄を數十挺並べ備へ、其の大筒の開筒に十匁彈鉄を四五挺づつ組み交ぜて、太鼓の調子を早くし、敵間二町程より小筒を四度路に打ち鳴らし、足を疾くして持楯を押し進ませ、敵間十四五間に詰めたる時に相圖の具を吹き出せば、楯持は楯を捨てて左右に開かせ、即ち彼の大炮に煉玉を裝みたるを順順に打ち放し、其の震動に魂消たる所を、十匁彈の鐵炮を連りに打ちて敵を拔き靡かせ、烟の下より諸士も足輕も無二無三に鋒先を齊へて敵中に亂れ入り縱橫に切り廻り、雌雄を一擧に爭ふ働きなり」

たまくら　手枕　(名)　㊀てまくら(手枕)に同じ。萬「大君のみことかしこみかなし妹が、多麻久良(タマクラ)離れ夜だちきぬかも」新古今「夢とても人に語るな知るといへば、たまくらならぬ枕だにせず」㊁香の名。香古く、珠勝にかびたる所第一なり。少し甘辛く苦し。火末は伽羅にまがひなし。(薬名)

だまくらかす　騙　(他動)　だます(騙)に同じ。

たまけ　玉筥　(名)　け(筥)の美稱。武烈紀「拖摩該(タマケ)には飯さへ盛り」

たまげる　魂消　(自動)　たまぎる(魂消)に同じ。

たまこ　(名)　たまぐる(魂消)をいふ。陸奥國の方言。(物類呼稱)

に卵殻又は卵膜を有す。らん(卵)。㊁特に、けいらん(雞卵)の稱。㊂物事の起こりはじめ。又は、たね。

たまご を わたる 渡卵　危險なる譬へにいふ。五十年忌歌念佛「狂ひ亂れ泣き亂れ、亂れて喇ふ雞の卵を渡る危さの、狂女となるこそ哀れなれ」

(誹)卵に玄翁 卵を玄翁にて割ること。事の容易なる譬へ。

(誹)卵に目鼻 雞卵に目鼻をつけたる如きこと。少女などの餓の白く美しき譬へ。

(誹)卵の殼で海を渡る 危く晃東なき譬へにいふ。

(誹)卵の四角と女郎の誠 有り得べからざる譬へ。根無草「卵の四角と女郎の誠なきのみならず、佛法に方便あれば、軍法に謀あり」

(誹)卵の中にも巣もりあり 同じ兄弟の中にても、役に立たぬ厄介者あるなどに譬ふ。源氏烏帽子「折「玉子の中にも巣もり有るは、尤もかな尤もかな、親兄弟の兵に似たる方なき孫はづれ」

(誹)卵を見て時夜を求む 雞が卵の中にあるうちから時を告ぐることを求む。太早計なる譬へにいふ。莊子雜篇「汝亦太早計、見卵而求時夜、見彈而求鸮炙」

(誹)卵を以て石に投ず 極めてもろきことに譬ふ。荀子「以柴詐堯、若以卵投石」淮南子「人主執正持平、則群臣以邪來者、猶以卵投石、以火投水」

たまご-いろ 玉子色 (名) ㊀雞卵の殼の色。淡黄色。卵黄色。一代男「卵色の縮緬に、思ひ入れの數紋」本朝二十不孝「玉子色の帶を、細き組帶に仕替へて」

たまご-さけ 玉子酒 (名) 雞卵の液を掻きまぜて暖めたる酒。重井筒「どうぞ金の首尾なって、玉子酒飲む樣に仕度い事ぢや」

たまご-こすげ 玉子菅 (名) すげ(菅)の雅稱。萬葉「濱のや蘆か中なる多麻古須氣(たまごすげ)、かりこ我がせこ床のへだしに」千載雜上「鶉なくしづやに生ふる玉こすげ、かりにのみ來てかへる君かな」

たまご-せんべい 玉子煎餅 (名) 雞卵の液を原料にまぜて焼きたる煎餅。

たまご-ちぢみ 玉子縮 (名) 玉子色に染めたる絹布。三代男「玉子縮・紅裏猩猩を縫ひ紋」

たまご-つなぎ 玉子繋 (名) 蕎麥などを製するに、雞卵の液を交ぜてよくつながるやうにしたるもの。

たまご-て 玉子手 (名) 革の名。地は卵色にして之に種種の模樣を鐵印にて打ち出だし、彩色したるもの。

たまご-ごと 玉琴 (名) ㊀玉にて飾れる琴。㊁琴の美稱。藤小雅「玉琴の調べは隱れなきものを」織留「朝夕のもてあそびとて、玉琴・和歌に心をなし」

たまご-どうふ 玉子豆腐 (名) 料理の一種。豆腐に雞卵の液をまぜて蒸したるもの。

たまご-とぢ 玉子綴 (名) 料理の一種。汁物に雞卵の液をかけて、汁の實を雞卵にて綴ぢ包みたるやうに煮たるもの。

(誹)卵縁を打ち附けたやう 面貌の醜怪なる譬へにいふ。

たまご-なり 玉子形 (名) 玉子の如く、一端は狭く他端は廣き楕圓形。

たまご-ぬり 玉子塗 (名) 淡褐色に塗ること。又、其の塗物。

たまご-ふさ 玉子吹 (名) 吹矢にて、玉子を吹き當てたるものに景物を出だすもの。續泰平年表「嘉永元年八月十九日町觸 神田明神の例祭に西廣敷設をなし、鐵砲・弓・玉子吹・矢・的・的場・的場切敷・的場切敷・的場・的場」

たまご-ぢめ 玉子焼 (名) 料理の一種。薄き玉子焼にて他の料理を卷きたるもの。

たまご-こめ 玉込 (名) 銃砲に丸を込むること。

たまご-めし 玉子飯 (名) 料理の名。熱き飯に雞卵の液をかけて、よくまぜたるもの。

たまご-や 玉子屋 (名) 雞卵を商ふ家。又、其の人。

たまご-やき 玉子焼 (名) ㊀料理の一種。雞卵の液に砂糖・醤油を入れて掻きまぜ、鍋に油をひきて炙り焼きたるもの。㊁玉子焼を焼くに用ふる器具。普通、底淺く、形四角なる金屬製のもの。

たまご-ゆ 玉子湯 (名) 雞卵の液に砂糖を加へ、熱湯を注ぎて掻きまぜたるもの。

たまご-ろがし 玉轉 (名) 玉を盤の上にまろばし、その當り方によりて勝敗を決する遊戯。

たまご-ろばし 玉轉 (名) 前條に同じ。

たまご-ろも 玉衣 (名) ㊀たまぎぬ(球衣)に同じ。六條宰相家歌合「雲はれぬさ月きぬらしたま衣、むつかしきまであまじめりけり」㊁ころもの、うらのたま(衣裏玉)に同じ。ころも(衣の條)を見よ。夫木「たまごろも身を離れずと聞けどなほ、光見ねばやありとしもなき」

たまご-をり 玉子折 (名) 雞卵を入れたる折詰の箱。

たまご-さいく 玉細工 (名) 玉の細工をすること。又、其の職人。寶暦集成絲綸錄「世六信解「水晶玉眼摺り立て出來方之儀に付御用有之間、玉細工職之者、明廿日四つ時前、大手御番所後御勘定所立可罷出」候」

たま-さか 偶適 (副) ㊀容易に逢ふことの出來ぬ者が稀に出會ふさま、又、久しく逢はぬ人に偶然出會ふさまにいふ語。たまたま。わくらはに。舒明紀「今臣不賢、而遇(たまさか)當之、人時誤居群臣上耳」萬「玉坂(たまさか)わが見し人を、いかならむよしを持ちてかまた一目見む」靈異記「遇逢(たまさか)」同「偶(たまさか)」適逢」㊁稀なるさまにいふ語。たま。竹取「火鼠の裘(たまさか)なるもまし、かれども、もし天竺にたまさかにもて渡りなば」枕「たまさかには、つぼさうぞくなどばかりして、なまめきさうじてこそありしか」源手習「はしの方に立ち出でて見れば、山へのぼる人なりとも、こなたの道には通ふ人もいとたまさかなり」

たまさか-どり 適鳥 (名) 【動】ほととぎす(子規)の異名。

たまさ-ざさ 玉篠 (名) ささ(篠)の美稱。源氏東屋「拾はば消えなんと見ゆる玉篠の上の露などの」堀河百首「熱散らさじとおくらんものを箱根山、あくれば氷る玉笹の露」

たまざし 球尺 (名) 【理】かりば-に同じ。

たまさて 玉叉手 (名) さて(叉手)の美稱。大磯虎稚物語「相模川のさび鮎として一獻酌まんと、夕露の玉さて・釣竿打ちはへて」

たまざん 珠算 玉算 (名) 算盤を用ひて計算すること。(筆算の對)

たまし 騙 (名) だますこと。あざむき。たくみ。計略。狂言「これ聞からだましぢや物を」

たまし-うち 騙討 (名) 人をだましおきて不意に討ち取ること。鎌田兵衛名所盃「など詰め掛けて腹をも切らせず、騙し討ちは何事ぞ」

たまし-しき 玉敷 (名) 玉を敷きたる如くうつくしきこと。又、其の所。夫木「荒れにける高津の宮のあさぢ原、なほたましきのむらさめの露」

たましき の には 玉敷庭　玉を敷く如く美しき庭。又、禁中の庭。續千載冬「雲の上の有明の月も影さえて、ふるや霰のたましきのには」續撰吟抄「幾千世ぞつかふる袖も白雪の、ふるきにかへる玉しきの庭」

たまし-ぎ 玉鴫 (名) 【動】鳥類中、渉禽類の一種。他の動物と異なりて、雌の羽色却って美なり。頭は暗褐色にして頬は赤色、眼周は白色、背面は帶緑褐色にして黒色斑及び褐色の斑條を交ふ。腹面は白色なり。我が國、各地に産す。

だまし-きり 騙斬 (名) 人をだまして斬り殺すこと。梶苅銅本地「此の氣色を悟られ、仕損じては無念なり、欺し切りに」

だまし-こむ 騙込 (他動四) うまくだます。巧みに欺き入る。全くだます。

たまし-だ (名) 【植】水龍骨(シノブ)科、たましだ屬の多年生草本。莖は細長、匍匐し、地下に塊莖を生ずるを以て此の名あり。葉は細長き羽狀複葉にして多數叢生し、長さ二尺餘に及ぶ。時到れば胥臓形の被膜を有する子囊群を生ず。我が國の暖地に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。

たまし-づめ 鎮魂 (名) たましづめのまつり(鎮魂祭)の略。馬内侍集「たましづめして參らすとて」

たましづめ-の-しき 鎮魂式 (名) 次條に同じ。皇室祭祀令(明治六年)「鎮魂の式」

たましづめ-の-まつり 鎮魂祭 (名) 天子の御魂を鎮安し、御代の長久を祈る祭。毎年新嘗祭の前日禁中にて行ふ。ちんこんさい。たましづめのしき。令集解「人陽氣曰魂、言招離遊運魂、鎮身體令府、故曰鎮魂」舊事本紀「宇麻志麻治命十一月日朝庚寅初、齋瑞寶奉爲帝辰、鎮祭御魂之新請壽祚」「其鎮魂之祭、自此而始者矣」

だまし-とる 騙取 (他動四) 欺きて奪ひ取る。かたりとる。

たましひ 魂 (名) ㊀動物の肉體に、生まれながらに宿りて、精神の作用を掌るもの。古來多く肉體を離れても存在し得るものとせり。精靈。萬「多麻之比(たましひ)はあしたゆふべにたまふれど、あが胸いたし戀のしげきに」竹取「みかど中略たましひを止めたる心地してなん歸りける」源花宴「父みこのうじろめたしと、たゞひ置き給ひけんたましひのしるべなめり」㊁心。精神。氣力。性質。崇神紀「識性(たましひ)聰敏」雄略紀「神色(たましひ)不變」名義抄「性(たましひ)」宇津保俊蔭「一世の源氏の、心たましひ人(たましひ)すぐれ給へりけるを得て」

たましひ うどく 魂動　こころうどく(心動)に同じ。こころ(心)の條を見よ。吉野忠信「居娑氣高き椎ひは中略そぞろにゆかしさ堪へられず、魂動くばかりなるが」

たましひ が すわる 魂据　精神がおちつく。度胸がすわる。

たましひ つく 魂盡　命絶ゆ。死ぬ。字鏡集「死(たましひつきぬ)」

たましひ を あぐ 揚魂　肝を潰す。非常に驚く。

たましひ を いれかふ 入替魂　精神を入れかふ。心を改む。

たましひ を ひやす 冷魂　非常に驚き怖る。肝をひやす。太平記「天王「是れ等をこそ、天下の災難を候ねて知らする處の前相かと、人皆魂を冷やしける」

だまし-や 騙矢 (名) 不意をうかがひて放つ矢。たばかりて射る矢。曾我扇八景「あたら弓取りを、祐經めが欺し矢に失ひしは、ええ腹立ちや無念やな」

だまし-よる 騙寄 (自動四) だまして近寄る。あざむきて接近す。唐船噺今國姓爺「窗の引き縄わな結び、欺し寄って、ばふ官が首に打ちかけ」

たま-しろ 霊代 (名) 神人の靈に代へて祭るもの。れいだい。

だます 騙 (他動四) たぶらかす。あざむく。だまかす。だまくらかす。狂言「是れは佛師が、面を被てだますと見えました」大蔵同子「だますかも知れぬ、見とどけて參らう」

(誹)だますだますてだまされる 人をだまさんとして、却って人にだまさる。

(誹)だますに敵なし 次條に同じ。

(誹)だますに手なし 巧みに欺けば之を防ぐべき手段なし。狂言「手負「山賊」、発角欺すに手なしで御座る」當世誰身の上「戀知りげに聞こえしを、琴の指南申すと、だますに手なき琵琶の海、深き情にあづかり」

(誹)だます前にだまされろ 人をだまさんとすれば、先づ人にだまされよ。

たま-すだれ 珠簾 (名) 玉にて飾りたるすだれ。又、すだれの美稱。たまだれ。勢語「吹く風に我が身をなさば玉すだれ、ひま求めつつ入るべきものを」拾遺「玉すだれ絲のたえまに人を見て、すける心は思ひかけてき」

たまし-ひ 富貴なる貧賤なるとの相違にいふ譬へ。

たま-すだれ (名) 【植】石蒜(ヒガンバナ)科、たますだれ屬の多年生草本。莖の高さ凡そ一尺。葉は細長にして叢生す。夏日、葉間に花莖を抽き、莖頂に白色の一花を著く。觀賞用として庭園に栽培せらる。しきずゐせん。

たま-すり 玉磨 (名) 玉を磨りて細工すること。又、其の職人。たまつくり。神代紀下「作玉者(たまつくり)」祝詞式祭「齋玉作(たまつくり)等我」

たま-すり-べ 玉作部 (名) 古昔、たますりを職とせし部族。垂仁紀「玉作部(たまつくり)」

たませべ 魂 (名) たましひ(魂)の訛り。浮世風呂「たませへの歌と、はき違へた」

たま-だすき 玉襷 (名) たすき(襷)の美稱。著聞「衣にたまだすきして、魚を窺ひ」夫木「袖ぬらす澤べの若菜さりとては、玉だすきにや入れて摘ませし」

たま-だすき 玉襷 (枕) たすきはかくるものなるより かくにかけ、又、采女のたすきをかくるよりうねにかけていふ。後世、萬葉卷の七に玉だすき雲飛山(うねびやま)とあるを誤り訓みたるより、雲にかけてもいふ。萬「珠手次(たまだすき)かけのよろしく」同「玉手次(たまだすき)畝火の山のかし原の、聖の御代ゆ」夫木「たづねきて今ぞしめゆふ玉だすき、雲ゐる山の初櫻花」

たま-だな 霊棚 (名) 除暦七月、又、古くは十二月にも飾り設けて、聖靈をむかへ祭る棚。佛諸古選集「魂棚の奥なつかしや親の顔」四方の硯「七月十四日の夜、家ごとに其の先祖の祀りをなすを、佛とむらふといはずして精靈まつりといひ、佛壇といはずして、たま棚といひ、棚經といふ」

たま-たばこ 玉烟草 (名) たばこ(烟草)の美稱。鷹筑波「玉たばこをやふける

なるらんの句うづらめが浦島までも飛びうつり」

たまたま 適偶 (副) 一柿に。たまに。たまさか。萬三心には忘れぬものを、儻(たまたま)見ざる日まぬく月ぞへにける」宇津保蔵「たまたまあらせ八へと物せしかど、聞き入れられずなりにき」 二折りよく偶然に。ふと。宇津保俊蔭「たまたま聞きつくるけだもの、たぞ此のあたりに集まりて」枕二たまたま此の道にたち入りにければ、かうだにわきまへられ侍る」

たまだれ 玉垂 (名) 次條の枕詞の、小簾(たまだれ)にかけていふよりの轉。一説、たますだれの略。一すだれ。たますだれ。後撰三「玉垂の編みめのまより吹く風の、寒くはそへて入れんおもひを」壬二集「閨の上の板間や荒るる、玉だれの内より出づる秋の夜の月」 二菓子の一。牛皮飴に山葵・砂糖などを包みて作りたるもの。(証)玉たれと蒲(コ)だれ　玉簾と蒲だれに同じ。たますだれ(玉簾)の條を見よ。

菅原傳授手習鑑「玉だれの中の誕生と蒲だれの中で育ったとは、似ても似附かず」

たまだれ-の 玉垂之 (枕) 玉は緒に貫きて掛け垂れて装飾とするものなるより、緒(たま)にかく。萬二「玉垂乃(たまだれの)をちの大ぬの、朝露に玉もはひづち」同三「玉垂之(たまだれの)をすのま通りひとりぬて、見るしるしなき夕づく夜かも」

たま-ちはふ 靈幸 (句) 【霊を幸(ちはふ)へ助くる義】古語。人の靈魂に幸福を與へて助け保つこと。萬二「靈治波布(たまちはふ)神も我れをばうってこそ、しゑやいのちの惜しけくもなし」

たま-つき 玉坏 (名) 玉にて造れる坏。

たま-つき 玉突 (名) 西洋より傳來せる遊戯の一種。普通二人にて之を行ふ。玉突臺の上に象牙の球を置き、各自の持球を定め、玉突棒にて其れを突きて他の球に中て、中たりたる數の多少にて勝負を爭ふもの。

たまつくり 玉造 (名) 【たまつくり部(たまつくりべ)遠祖、豐麻(たまつくり)に同じ。神代紀上「玉作部遠祖、豐玉者」、曾丹集「住吉のならしの岡のたまつくり、數ならぬ身は秋ぞ悲しき」

たまつくり-たい 玉突臺 (名) 玉突に用ふる卓子やうの大なる臺。普通、巾四尺長さ八尺計り、上に羅紗を敷き、球の當たりて反撥するため緣を護謨にて作る。

たまづさ 玉梓 玉章 (名) 【たまづさの(玉梓之)の轉】一ふみ。手紙。街鬼。二風雲「鄙鳥、北州の千年、天上の五衰、身に白髯の玉手箱、明けて悔しき心かな」 二祀して容易に人に開き示さざるもの。 三衙矛(たまづさ)の賞。

たまづさ-じょう 玉章獨樂 (名) 獨樂廻しの語。柚の中へ入るる獨樂。玉章を人に隠し示さぬよりいふ。松風村雨東帶鑑「柚の中なる引獨樂は、餘所に漏らさぬ玉章獨樂」

たまづさ-とうふ 玉章豆腐 (名) 料理の一種。豆腐を封書の如く狭く薄く切りて、鉢の水などに浮かべたるもの。

たまづさ-の 玉梓之 (枕) 玉は美稱、梓は梓弓にて、矢を射遣るといふより、書を遣る使にかけていふと。和訓一説、上代に、梓の木に玉を著けて使のしるしに持ち行きしよりいへるならんと。宣長 又、梓弓は男の祕藏して手に執るものなるより、女に譬へて妹にかけていふと。和訓 人につづけていふも使と同じ。又、事につづくるは使の事をいふ。萬三「いつしかと待つらむいもに、玉梓乃(たまづさの)、ことだに告げずにし君かも」同四「はつせの山にかむさびにいつきいますと、玉梓乃(たまづさの)人ぞいひつる」同三「玉梓能(たまづさの)いもは玉かも、あしびきの清き山べにまけば散りぬる」同七「多麻豆佐能(たまづさの)つかひのければ、うれしみとあが待ちとふに」

たま-づし 玉椿 (名) 【植】はとむぎ(薏苡)の異名。字鏡「薏苡子(玉豆)」同「苡(玉豆)」 【植】一つばき(椿)の美稱。大椿を長壽に譬ふるより、歌に多く枕ひて いふ。たいちゆん(大椿)を見よ。榮華太鼓「ときは山おひつらなれるたまつばき、君がさかゆく杖にとぞ切る」 二しらたまつばき(白玉椿)の異名。

たま-つばき 女貞 (名) 【植】木犀科、水蠟樹(たまつばき)屬の常緑木本。幹の高さ凡そ十尺餘に達す。葉は卵形にして厚く、稍つばきに類す。夏日、白色の花を開き、後、黑色、長楕圓形の實を結ぶ。我が國、山野に自生し、又、觀賞用として栽培せらる。種子を炒りて、こーひ・の代用とす。いはき。からみづき。てらつばき。ねずみもち。

たま-つぼ 玉壺 (名) 玉にて作りたるつぼ。又、美しきつぼ。神代紀上「以玉壺(たまつぼ)汲水」

たま-つ-みやこ 玉津都 (名) たまのみやこ(玉都)に同じ。たま(玉)の條を見よ。萬代集上「月かげの宿りてみがく玉水の、玉つ都に秋風ぞ吹く」

たまで 玉手 (名) 玉の如くうつくしき手。記上「多麻傳(たまでの)多麻傳(たまでの)さしまき、もも長にいはなさむを」

たまてばこ 玉手箱 (名) 一雄略天皇の時、丹後國與謝郡水江の浦島の子が、海宮に入りて神女より得たりといふ箱。神女が必ず開く勿れと戒めしを、開き見しに、風雲立ち上りて、子は遂に海宮に歸ることを得ざりしといふ傳說。丹後風土記逸文「女娘取二玉匣一授二嶼子一曰、慎莫開視(中略)雖二廻二鄕里一不レ會二一親一既逕旬日、乃攘二玉匣一而感思二神女一於是嶼子忘二前日期一、忽開二玉匣一、卽未レ瞰之間、芳蘭之體、率二風雲一翩翩飛蒼天」 二北州の千年、天上の五衰、身に白髯の玉手箱、明けて悔しき心かな」 三祀して容易に人に開き示さざるもの。

たまど 玉戸 (名) うつくしき戸。又、神社の戸の尊稱。廣田社歌合「雪ふかみ朱の玉戸もうづもれて、心あてにぞ手向けをばする」

たま-どこ 玉床 (名) 床(ユ)の美稱。古義一說、靈床(たまどこ)にて、古へ一周年の間、死者の床を其のままに置きたるものなりと。和訓 萬三「家に來てつまやを見れば玉床(たまどこ)の外に向かひけり妹がこ枕」同七「あすよりは吾が玉床(たまどこ)を打ち拂ひ、君といねずて獨かもねむ」

たま-どこ 靈床 (名) 前條を見よ。

たま-どの 靈殿 (名) たまや(靈屋)に同じ。源氏物語、たま殿に置きたりけん人のたとひを思ひ出で」日本紀略 延喜二年四月十四日「皇后宮彰子、敦成親王、玉殿。」

たま-とり 玉取 (名) 數箇の球を空中に投げて手にて受け取り、幾回も上下する技。しなだま。和名「弄丸。梁武帝千字文注云、宜遵者、楚人也、能弄丸、在空中、一在手中、今人之弄鈴是也」

たまな 球菜 (名) 【植】はぼたん(甘藍)の異名。

たまなし 玉無 (名) 所有物などの全く無くなること。資本などの皆無となること。

たま-なづな (名) 【植】一あまなづなの異名。

たまぬき-の-あはび 玉貫鮑 (名) 鰒を薄く小口切にきりて短册の如くしたるを、緒に貫きて干したるもの。和訓参考

たまぬし 玉主 (名) たまもり(玉守)を見よ。萬三「玉主(たまぬしの)部刺に玉は授けてかつがつも、枕と我れといざ二人ねむ」

たまねぎ 玉葱 (名) 【植】百合科、青葱(ねぎ)屬の多年生草本。莖の高さ二三尺に達し、地下に扁圓狀の鱗莖を有す。葉は細長、中空、ねぎに似たれども細し。秋日、圓柱狀の花軸を長く葉間に抽き、白色の小花を多數につく。歐米諸國に廣く栽培せらる。近時、我が國に舶載せられて畑地に栽培せらる。地下莖を食用に供す。

たまのやぐさ (名) 【植】みそはぎ(千屈菜)の異名。莫傳抄「祈る事かなふばかりに花咲けば、たまのやぐさに命頼みつ」

たまのり 球乘 (名) 大なる圓球の上に立ちて、種種の曲藝をなすこと。又、其れを業とするもの。

たまのゐ-うめ 玉井梅 (名) 【植】薔薇科、櫻屬の落葉喬木。梅の一品種。花は白色に稍紅色を帶び、單瓣大輪にて、香氣强し。多くの實を結ぶ。

たま-の-を 玉緒 (名) 一玉を貫ける緒。萬三「はつ春のはつねの今日の玉はばき、手に取るからにゆらぐ多麻能乎(たまのを)」古今春歌「寒く日毎になりゆけば、玉の緒を解けてこき散らし、霰みだれて霜こほり」 二(植)みせばやの異名。

たまのを ばかり 玉緒計 (玉の緒の短きよりいふ) 短き時だけ。しばしの程。僅かの間。萬三「中中に人とあらずば、桑子にもならましものを、玉之緒計(たまのをばかり)」古今戀三「死ぬる命生きもやすると心みに、たまのをばかりあはんといはなん」

たま-の-を 魂緒 (名) いきのを。いのち。生命。萬三「珠緒(たまのを)の惜しきさかりに、たつ霧のうせぬる如く」新古今戀二「たまのをよ絶えなば絶えねながらへば、しのぶることのよわりもぞする」

たまのを-の 玉緒之 (枕) 玉を貫く緒の長きも短きもあれば、長き又短きにつづけ、又玉の緒の絶え・續き又は切るるより、絶ゆ・繼ぐ等につづけ、緒の絶えて玉の亂るるより亂るるにかけ、又、玉と玉との間の繁きより間もおかず等にかく。又、靈(たま)の緒は命をいふより、現(うつつ)しき義のうつつしにかく。萬三「あたら世に共にあらむと、玉緒乃(たまのを)踊えじいいもと結びて」同三「うち日さす宮ぢにあひし人づま故に、玉緒之(たまのを)思ひ亂れてぬる夜しぞ多き」同四「玉緒之(たまのを)間もおかず見まくほり、わが思ふ妹は家遠くありて」同十「玉緒之(たまのを)うつし心ややそかかけ、こぎ出む船に後れてをらむ」同三「玉緒之(たまのを)つぎてはいへど」同四「たはことや人のいひつる、玉緒之(たまのを)長くと君はいひてしものを」古今春歌「玉の緒の短き心思ひあへず」

たまのを-やなぎ 玉緒柳 (名) 柳を玉の緒に見たてていふ語。新古今雜中「山蔭のかた岡かけてしむる野の、さかひに立てるたまのをやなぎ」隆信集「旅ねせし宿の梢やそれならん、霞にもるる玉の緒柳」

たま-はし 玉橋 (名) はし(橋)の美稱。萬九「ひさかたの天の河原に、上つ瀨に珠橋(たまはし)わたし」詞花春「あまの河たまはしいそぎ渡さなん、淺瀨たどるも夜の深け行くに」

たまはす 賜 (他動サ) たまはらす。頂戴せしむ。竹取「たまはせたる物は、おのおの分けつつ取り」源氏梅枝「うつぼにたまはす」榮華若菜「織物も賜はせんをのみ著るべきにもあらず」

たま-はな 玉花 (名) あられ(霰)の異名。篠目集「思ひなせば深山路ながら春めきて、こぞのなごりのたまはなぞ散る」

たま-ははき 玉帚 (名) 一古昔、正月初子の日に、蠶室を掃くため、地廣(ハヒ)を用ひて作りたる帚。萬葉の卷廿にいへるは、玉を枝毎につけ飾れるものならんと。(戰古 略解 伐(ハヒ)) 萬三「初春のはつねの今日の多麻婆波伎(ハヒ)、手に執るからにゆらぐ玉の緒」堀河百首春、玉ばはき春の初子にたをりもて、玉の緒長く榮やべらなり」 二(植)はばきぐさ(地膚)の異名なりとも、又、ねんどぐさ(燃燈草)の異名なりともいふ。帚にするよりの稱。萬三「玉掃(ハヒ)刈りこ鎌麻呂むろの木と、束がもとを掻き掃かむため」 三(植)からやばうきの異名。 四(植)はこねさう(石長生)の異名。

たま-はやす (枕) 椋(ハヒ)の葉は玉を磨きて映(ハヒ)えさすものなるより、椋(ハヒ)の轉むとにかく。一説、玉ともてはやす聲(ハヒ)とつづけたりと。萬三「多麻波夜須(ハヒ)むこの渡りに、あま傳ふ日の暮れゆけば家をしぞ思ふ」

たまはり 賜 (名) たまはること。頂戴。枕「藏人中將からぶりえて、おりんこと近くならんだに、命よりはまさりて惜しかるべきことを、その御たまはりなど申して、まどひけることそ口をしけれ」

たまはり-もの 賜物 (名) たまはりたるもの。かづけもの。頂戴物。拜領物。

たまはる 廻 (自動四) 【たは接頭】まはる。めぐる。萬三「足柄のみさか多麻波理(ハヒ)て、かへりみずあれはくえ行く」

たまはる 賜 (他動四) 受く・受け取る・もらふ等の敬語。いただく。たばる。頂戴す。拜領す。拜受す。神代紀上「奉二承(ハヒ)天照大神之手一、引而奉出」續紀宣「此賜布帶(ハヒ)多麻波利(ハヒ)」竹取「それ一えだ折りて賜はらん」

たまはる 賜 (助動四) 敬意をあらはす語。讃岐集「諸代召し使ひ候家人にて候間、急ぎ追っ返して賜はり候へ」同四「春榮に引き合はせられて賜はり候へ」

たまひ 歐吐 (名) へどをつくこと。へど。たぐり。和名三「歐吐。病源論云、胃氣逆則歐吐(皆出都入反又大禹比也)」同七「犬吠(以犬乃大吐也)」

たま-ひ 田舞 (名) 舞の名。天智紀「天皇御(中略)西小殿、皇太子群臣侍宴、於是再奏二田儛一」續紀(世四、寶龜八)「作二田儛於儛臺一」三代實錄(三、貞觀元年十二月)「多治氏奏二田舞一」

たま-ひかげ 玉蘭 (名) 【植】ひかげのかづら(石松)の美稱。新拾遺雜「曇りなき玉田の野べの玉ひかげ、かざすや豐のあかりなるらん」續詞花集雜「今日かざす神のいがきの玉ひかげ、昔のあとをたづねてぞくる」

たま-ひこ 玉彦 (名) ひ(日)の異稱。堀河百首春、玉彦のかげもさながらおきて見ん、今朝うれしげに咲ける朝がほ」

たま-ひま 適閒 (名・副) 一たまたま。たま。 二あさ(朝)をいふと。下文を見よ。

たまぶち 玉淵 (名) 珠玉の多く產する深き淵。「諸天題「其の磧礫にならって、玉淵をうかがはざるは」左思文選都賦「暫其磧礫一而不」寫玉淵者、未」知」驪龍之所」蟠也」

たまぶちがき 玉緣笠 (名) たまぶち(玉絲)に同じ。若風俗三風流なる美少、玉緣笠に淺黃紐の仕出し」

たまへん 玉偏 (名) 漢字の偏の名。宇書創ち、理・珠・球などの王の字の稱。

たまぶち 玉淵 (名) 珠玉の多く產する深き淵。「諸天題「其の磧礫にならって、玉淵をうかがはざるは」左思文選都賦「暫其磧礫一而不」寫玉淵者、未」知」驪龍之所」蟠也」

たまぶちがき 玉緣笠 (名) たまぶち(玉絲)に同じ。若風俗三風流なる美少、玉緣笠に淺黃紐の仕出し」

たまへん 玉偏 (名) 漢字の偏の名。創ち、理・珠・球などの王の字の稱。宇書にて玉部に屬す。運歩色葉「王偏」雙生隅田川題「其の美しき天人偏の、磨き立てたる玉偏故に、手偏指す人山偏なれど」

たまほ 賜 (助動) たまふ(賜)の訛り。古へ東國の方言。萬三「しほ舟の(こそ白波、にはしくもおほせ他麻保(タマホ)か、おもは(なくに」

たまほこ 玉鉾 (名) 玉にて飾れる鉾。又、鉾の美稱。諸「玉鉾」

たまほこ-の 玉鉾之 (枕) 玉枠の刃(ハ)とかけて道につづけ、道とつづくるよ轉じて里(ヒ)にかけていふ。萬十一「遠かれど君をぞ戀ふる、玉枠乃(タマホコノ)さと入みなに我れ戀ひめやも」同廿「多麻保許能(タマホコノ)みちをたとほみ、山川の(なりてあれば」

たまほさき 玉纏 (名) 玉にて飾りたること。又、その物。雄略紀「拖磨磨枳(タマホコ)のあぐらに立たし」太神宮式「玉纏太刀」

たまままき-の-たち 玉纏太刀 玉にて飾りたるたち。大神宮式「玉纏横刀一柄」

たまほつ 玉松 (名) 松の美稱。諸「松」八少女の袖もかざしの玉かづら、かけてぞ祈る、玉松の光も散るや」

たまほつがえ 玉松枝 (名) 松の枝の美稱。一說、萬葉のは山松が枝の誤りならんと。萬三「三吉野の玉松之枝(タマホツガエ)はは、しきかも、君がみことを持ちて通はく」新勅撰「ときはなる玉松がえも春くれば、千代の光やみがきそふらん」

たまま-まつり 魂祭 (名) 祖先以來の孔者の靈を祭ること。古へは十二月晦日に行ひしが、今は專ら七月中元に行ふ。精靈祭。廻山姥三「御佛に後生を任せて、此の世には忠義を磨く魂祭」俳家奇人談「まざまざと在すが如し魂まつり」

たま-まゆ 玉繭 (名) ㊀まゆ(繭)の美稱。堀河百首鳥「あしぶきのこやの玉まゆいつのまに、いとかく計りくるしかるらん」㊁二頭の蠶兒が共同して營みたる繭。繰絲の際、二繰の絲纏ひ著きて類(ヒ)を生じ易き故に、普通の絲とするを得ず、玉絲として銘仙・節織などに用ふ。

たまより 玉碗 (名) たまもひ(玉盌)に同じ。神代紀三「手持玉碗(タマヨリ)來、將汲」水」

たまみがき 玉磨 (名) たまずり(玉磨)に同じ。太平記廿六「上杉鳥」石中蟲玉磨を召して是れを被」磨に、光更に無かりければ」

たまみ-ぐさ 玉見草 (名) 【植】はぎ(萩)の異名。

たまみそ 玉味噌 (名) 蠶豆を煮て麹と鹽とを混ぜ、よく搗き碎き、團子の大きさにして、藁苞にして竈の邊に置き、二年の後磨りて汁或ひは調理に用ふるもの。久しきに耐へて腐敗することなし。

たまみづ 玉水 (名) ㊀淨く玉の如き水。水又は瀧の美稱。勢語「やましろのゐでの玉水手にむすび、たのみしかひもなき世なりけり」萬代秋上「月かげのやどりてみがく玉水の、玉つ都に秋風ぞ吹く」諸雜三「賞にや玉水の水上すめる御代ぞ」㊁あまだり(雨垂)に同じ。曾丹集「峰に日や今朝はうららにさしっらん、軒のたるひの下のたまみづ」堀河百首春「つれづれとながめてぞふる春雨の、をやまぬそらの軒のたま水」

たまみづざ 玉藻吉 (枕) 讃岐の國の海邊より多く玉藻を產するより、讃岐にかく。下河邊一說、よしのよは呼び出だす詞。しは助辭、さぬきのぬは、ぬえ臥すこと。玉藻の波にぬえふすといふ義にて、さを隔ててつづく。冠辭考萬三「玉藻吉讃岐(タマモヨサヌキ)の國は、國がらか見れどもあかぬ」

たまもり 玉守 (名) 玉を守護する人。古今集「玉主(タマモリ)に玉は授けて、かつがつも枕と誓れといざ二人ねむ」

たまや 玉屋 (名) ㊀玉を賣る家。又、其の人。又、たまます。㊁しやぼんだまを賣る人。

たまや 靈屋 (名) ㊀葬送の前に、暫く遺體を斂めおく所。たまどの。榮華鳥邊野「鳥邊野の南の方に二丁ばかり去りて、たまやといふものをつくりて」㊁おたまや(御靈屋)に同じ。

たまやなぎ 玉柳 (名) 柳の美稱。催馬樂「たかさごの、さいさごの、高さごのをの(へに立てる白たま椿、たま柳」後撰春上「營の絲によるてふ玉柳、吹きな亂りそ春の山風」

たまゆか 玉床 (名) ゆか(床)の美稱。夫木三「玉ゆかのおましのはしにはだふれて、心はなきぬ君なけれども」

たまゆら 玉響 (名・副) 「萬葉の十一に玉響相日のゆふべ見しものを、今日の朝に戀ふべきものかとある玉響を、たまゆらにと訓み、玉の相觸れて鳴る音のかすかなるといふより、かすかなる意とし、轉じて暫しなどの意としたるに起る。萬武紀「定功行賞」名義抄「晃」」玉にて作れるもひ。美くしきもひ。たまもり。武烈紀「玉けには飯さへ盛り、梅摩暮比に水さへ盛り」玉篇「盌」

たまもひ 玉盌 (名) 玉にて作れるもひ。美くしきもひ。たまもり。武烈紀「玉けには飯さへ盛り、梅摩暮比に水さへ盛り」玉篇「盌」

たまより-かぬ 堪兼 (自動) こらへきれず。がまんしきれず。忍耐しきれず。狂言「是れを見て、御前にたまりかね、御幣一本おっ取り、下野國那須野の原へ落ちて行く」一代男二「座に堪りかねて立ち樣に、此の有樣を見て」

たまり 溜 (名) ㊀たまること。集まること。又、其の處。宇津保藤原「夕ぐれに雨うちふりたるころ、中島に水のたまりに、鳥といふ鳥の心すごく鳴きたるを聞き給ひて」㊁人の集合する控所の稱。㊂醬油の一種。製法は大略醬通の醬油に同じ。もろみ成熟したる後、仕込桶の下部の取出口より液汁を抽出せしむるもの。其の他、製法・原料など少差あるもの一二種あり。玉堪へ支ふること。こらへもつこと。甲陽軍鑑「北條衆百に上杉衆二千にて、少しもたまりなく、上杉衆負くると聞く」

たまり-がね 溜金 (名) たまりたる金錢。貯へたる金錢。貯畜金。二代男「溜り金あるを、さる揚屋へ利廻しに貸し」

たまり-ばひ 招魂 (名) 死人のたましひをよび返すこと。又、其の祭。新可笑記「唐土の魂よばひとて、空しきからだを呼び生けたる其の例多し」

たまよばひ 彈丸除 (名) 銃丸を防ぐ具。

たまよけ 玉蟲 (名) 【動】昆蟲類中、鞘翅類の一種。體の長さ一寸二三分許り、長楕圓形をなし、觸角は短く鋸齒狀なり。複眼は大きく稍楕圓形にして、全體金綠色にて光澤あり。翅に黃金色の縱線を有す。幼蟲は松樹の害蟲なり。字鏡集「蟲(タマヨ)」名義抄「蚯(タマヨ)」運歩色葉「玉蟲(タマヨ)」古丁蟲。金花蟲。

たまむし 玉蟲拾 玉蟲を拾ひ取りて裝飾に藏む。少女の初心にて、うらはづかしきさまにいふ。孕常發「玉蟲拾ひ、玉笹の露を飼うてぞおはしま

す」

たまむし-いろ 玉蟲色 (名) むしあを(蟲青)に同じ。二代男「十八九なる大振袖の娘、肌には黃うこんのひっかへし、中に玉蟲色の綸子」

たまむし-さう 玉蟲草 (名) 【植】まつむしさう(山蘿蔔)の異名。

たまむすび 魂結 (名) 魂の浮かれ出づるを鎭め止むること。又、人魂を見たる時は、下文のたまは見つの歌を誦みて、衣のつまを結ぶべしといふ故事。勢語「思ひ餘り出でにしたまのあるならん、夜ふかく見えばたまむすびせよ」源氏なげきわびそらに颯るる我がたまを、むすびとどめよ下がひのつま」袋草紙「見人魂歌。たまは見つ主は誰れとも知らねども、結びとどめよ下がひのつま。三返誦之、男左、女右のつまを結びて、三日を經て解く之」

たまむすび 玉結 (名) 緒の結び方の名。こまむすび。

(びすむすたま)

たまむ-むらさき 玉紫 (名) 【植】こむらさき(小紫)の異名。㊁ちっきよう(蕭)の異名。

たまも 玉藻 (名) も(藻)の美稱。萬三「少女らが多麻毛(タマモ)裾ひく此の庭に、秋風吹きて花は散りつつ」

たまも 玉藻 (名) も(藻)の美稱。萬四「常陸なるなさかの海の多麻毛(タマモ)こそ、引けば斷えれあどか斷えせむ」宇津保初秋「うらなるやみるめは知らで須磨のあまは、底にやかづくかみのたまもを」夫木「池水のよよに久しくすみぬれば、底の玉藻もひかり見えけり」玉藻集「神」

たまも-の-とこ 玉藻床 水鳥の宿る藻の床。千載「羅波がた入江をめぐるあし鴨の、たまものとこに浮きねすらしも」

たまも-の-まくら 玉藻枕 玉藻を枕とすること。又、其の枕。夫木「あまの刈る玉もの枕和とぢて、われから冴ゆる片しきの袖」

たまも-の-やど 玉藻宿 たまものとこ(玉藻床)に同じ。拾遺雜秋「鴨鳥の氷のせきにとぢられて、玉もの宿をかれやしぬらん」

たまもかる 玉藻刈 (枕) 玉藻は沖にあるよりおきにかけ、又いづくにても玉藻のある海・川などにかけていひ、蜑を略してをとめにかく。一說、萬葉十五のをとめは敏馬(ビンバ)の誤りなりと。冠辭考萬「玉藻刈(タマモカル)おきへは澄かし、しきた(への枕のあたり忘れかねつも」同「珠藻刈(タマモカル)みぬめを過ぎて、夏草のねじまが崎に船近づきぬ」同「玉藻刈(タマモカル)からにの島にあさりする、鵜にしもあれや家もはざらむ」同「玉藻刈(タマモカル)るでのしがらみうすきかも、戀の淀める我が心かも」同多麻藻可流(タマモカル)をとめをすぎて、夏草のねじまが崎にいほりす吾れは」

たまもく 玉目 (名) 細かく密に渦卷の狀をなす木目(モク)。

たまもくなす 玉藻成 (枕) 玉藻の如く水に浮かび又なびきよるといふより、浮かび・依り又はなびくにかけていふ。萬「もののふの八十宇治川に、玉藻成(タマモナス)浮かべ流せれ」同「玉藻成(タマモナス)なびきねし子を、ふかみるの深めても(へど」同「波のむた、か寄りかく寄り、玉藻成(タマモナス)依りねし妹を」

たまもの 賜物 (名) たまはりたるもの。たまはりもの。くだされもの。神

たまり-かねる 堪兼（自動下）たまりかぬ（堪兼）の口語。

だまり-さる 默切（自動四）全くだまる。だまりて少しも口をきかず。

だまり-だまり 默默（名、副）常にだまりて居ること。沈默。寡言。浮世風呂「此の番頭もだまりだまりしてゐて、もう林でも買ったらう」

たまり-ち 溜血（名）腐り汚れたる血のたまりたること。又、其の血。

たまり-づめ 溜詰（名）江戸幕府の制、黒書院溜の間に詰めて、老中と政事を議するもの。德川氏の支族及び重臣の中より補す。

たまりの-ま 溜閒（名）德川氏の頃、江戸城中にありて、親族及び老功の諸代大名の詰めたる間。

たまり-みづ 溜水（名）一所にたまりたる水。みづたまり。字鏡集「汪 タマリ」

爲忠千首喜「そこ濁るなはしろ小田のたまり水、獨すみえて見ゆる月かな」藻水 タマリ

たまりんど （名）【植】てうせんもだま（羅望子）の異名。

たまる 溜（自動四）一正まる。とどこほる。保元 白河院義矢の溜まらん所」玉葉「たまらぬ冬はきにけり」續千載秋「紅葉の葉における白つゆ玉かとて、袖につつめどたまらざりけり」二つもる。集まる。寄り集まる。古今雜「沫雪のたまればかてにくだけつつ、わが物思ひのしげき頃かな」蜻蛉日記「三日になりぬる夜、雪三四すばかりたまりて、今もふる」源末摘花「髮中 うちきの裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかり餘りたらんと見ゆ」三水一處に止まる。流れ集まる。たふ。記「みづ多麻流 タマラ よさみの池の」宇津保「底清く流るる水にすむいをの、たまれる沼をいかが見るらん」四金などふゆ。貯蓄多くなる。五堪へ支ふ。こらへたもつ。たふ。こらふ。拾遺秋「霧の峰にも尾にもたつ山は、もみぢのにしきたまらざりけり」宇治拾遺「男あはせければ男もたまらざりければ、これやこれやと、四五人まではあはせければ、なほたまらざりければ」平家十三「伊賀・伊勢兩國の官兵等、しばしも也 タマラ ず攻め落とさる」

（諺）溜まる程ならたないは金と塵　慾には際限なき譬へ。

たまる 賜（他動四）たまはる（賜）に同じ。狂言 鬼馬「某も御禊をたまったわ」

たまる 默（自動四）一ものいふことを止む。無言になる。もだす。沈默す。著聞「大嚴が聞きとがめて、や、だまれ平六、此の犬の吠えやうは聞き咎めぬか」二意見をのべずに止む。

（諺）だまって居る者に油斷すな　寡默なる者は恐るべし。

たまわた 玉綿（名）未だ繰らざる利のつきたるままの綿。織留「今まで玉綿を繰って、覺えずうたた寢しました」吉野都女楠「三日がな一日たま綿繰って、錢廿取るや取らぬもの」

たまゐ 玉井（名）たまのゐ（玉井）に同じ。たま（玉）の井を見よ。續拾遺「涼しさに千とせをかねてむすぶかな、玉井の水の松の下かげ」

だまを-のほし （名）二十八宿の一。きい（鬼）に同じ。

だ-まん 一惰慢　たいまん（怠慢）に同じ。禮記 樂「惰慢邪辟之氣、不設於身體」

たみ 民（名）百姓。兆民。黎庶。蒼生。萬「そを取ると疑ぐみ民 タミ も家忘れ、身もたな知らず」日本紀 竟宴歌「おほさざき高つの宮の雨もるを、ふかせぬことを多美 タミ はよろこぶ」枕「九の重の内を初めて、言ひ知らぬ民の住みかまで」

たみ の かまど 民竈　人民の、飯を炊ぐ竈。新古今 雜「高き屋にのぼりて見れば烟たつ、民のかまどはにぎはひにけり」

たみ の くさば 民草葉　たみぐさ（民草）に同じ。續千載 風「わたる民の草葉も年あれば、君にぞなびく千代の秋まで」

たみ の けぶり 民烟　人民のかまどにたつ烟。新勅撰 雜「今日たつる民の烟の絶えざらば、消えてはかなき跡を問はなん」

たみ の と 民戸　人民の家。人家。民家。新勅撰 初春「花の都に松を植ゑて、民の戸とめる千代ぞ知らるる」

たみ の とざし 民扉　民家の戸じまり。諸小町 「四方の國國も民の戸ざしもささぬ御代こそ、堯舜の嘉禮なれ」

たみ ひゃくしやう 民百姓　〔民と百姓との重言〕たみ。人民。百姓。家長日記「院中は更にもいはず、たみ百しやうに至るまで、いわけなき子の母を失へるが如く」

（諺）民の口を防ぐは水を防ぐよりも甚だし　民論を壓制するは危險なり。史記 周紀「防民之口、甚於防水、水壅潰傷人必多、民亦如之、是故爲水者、決之使導、爲民者宣之使言」

たみ-うるし 彩漆（名）蒔繪にて、金粉の彩色などに用ふる漆。

だみ-かへす 彩返（他動四）幾度もおしかへし色どる。有房集 霞立つ五島の花を見渡せば、だみかへしたる心ちこそすれ」增鏡「紅の打衣を、輝くばかりだみかへして」

たみ-ぐさ 民草（名）たみ（民）に同じ。四季物語「此の神、民草のえやみをつかさどらしめ、又いやし給はんの御誓ひしるければ」

だみ-ごゑ 訛聲（名）だみたる音聲。なまりたる語調。

た-みぞ 田溝（名）田の間にあるみぞ。和名「默 タミ」

た-みち 田路（名）田の間の道路。あぜみち。なはて。

た-みづ 田水（名）田にある水。夫木「苗代の田水にかげをやどしつつ、家路にかへる雁をしぞ思ふ」

た-みの 田蓑（名）田などに出でて働く農夫の著るみの。寛平菊合「田蓑をも今は求めじ、立ちかへり花の雫に濡れんと思へば」山家五番歌合「五月雨もする限りあり今日はやめ、田蓑をだにもしばしさぼさん」

たみ-の-つかさ 民部省（名）みんぶしやう（民部省）に同じ。和名「民部省 多美乃都加佐」

たみのつかさ-の-かみ 民部卿（名）みんぶきやう（民部卿）に同じ。

たみやう 一他名（名）一ほかの名。別名。二他の家の名跡。

たみやーりう 田宮流（名）關東の人、田宮重正の創めたる抜刀居合術の一派。

だみ-ゑ 彩畫（名）彩色畫。運歩色葉「濃畫 エダミ」

だみ-をけ （名）造酒屋にて用ふる片手桶の大いなるもの。肥前國の方言。物類 呼稱

だ-みん 一惰眠　一なまけねむること。二遊惰にして活動せざること。活氣立たぬこと。

たむ 訛（自動四）言葉つきなまる。音聲濁る。拾遺 物名「あづまにて養はれたる人の子は、したたみてこそ物はいひけれ」源 螢「けはひいやしく、ことばたみて」同 玉鬘「をかしく書きたりと思ひたる詞ぞ、いとたみたりける」

たむ 回（自動四）一めぐる。くねる。まはる。廻回する。萬「武庫の浦を漕ぎ轉 タム 小舟、栗島をそがひに見つつと、もしき小舟」同「沖つ島鴨とふ舟は也良の崎、多米 タム て漕ぎ來と聞かれこぬかも」名義抄「廻 タムル タムル」二延びおくる。遷延す。一說、ばかりの義と。古義 萬「近くあらば今ふつか太未 タム、遠くあらば七日の内は過ぎめやも」

たみ たる みち 回道　折れ曲がれる路。萬「をかのさき多未足道 タミタリミチ を人な通ひそ、ありつつも君が來ますよき道にせむ」

たむ 回（自動下）　たゑ（回）に同じ。萬「漕ぎ多武流 タム 浦のことこと、行き隱る島の崎崎」同「い多牟流 タム 毎に、よろづたび顧みしつつ」

たむ （自動）古語。飛ぶ。記「あま陀牟 タム、かるの少女」

たむ 揉矯（他動下）一曲がれるを伸べ、伸びたるを屈めて形を直す。たわめなほす。六帖「みちのくのあだちのま弓たむれども、心にはさにやまずぎける」和名「揉太元以火屈申木也」後拾遺「みちのくのあだちのま弓君にこそ、思ひためたる事は語らめ」二改め正す。つとめて直す。矯正す。「俗をたむ」「風をたむ」三偽る。曲ぐ。附會す。「詔を矯む」四本心をおさへて表面にあらはさず。五窺ひ見る。狙ひ見る。續無名抄 撓脫 タムワツ 六支へ持ちて狙ひをつく。ねらひをつけて未だ放たず。「鳥銃をたむ」「弓をたむ」

ため すがめ ため見たり、すがめをしたりして、谷方面より熟視すること。ためつすがめつすること。鷹筑波「ためすがめ花を見る夜の腦月の句 櫻の枝の寢鳥さし竿」

ため つ すがめ つ ためたりすがめたり。あちこちとよく改め窺ひ見る。吉野都女楠「ためつすがめつ、見れば見る程疑ひもなき我が子の高家」

たむ 溜　留（他動下）一とどむ。とむ。萬「あすかの川のみをはやみ、おひ多米 タム がたきいは枕、昔むすまでに」太平記 八 山崎落ち行きしを、嬉て追っ懸けて、討手をだに下だしたらば、敵足をたむまじかりしを」二集む。積む。拾遺 雜上「みたむることの難きは營する野べの若菜なりけり」後拾遺 雜上「掬のかをよはのあらしの吹きためて、まきの板戸のあくる待ちけり」夫木「山人のゆくてのわらび手にためて、しばしぞ休む岩のほとりに」三塞き止む。集め淤ぶ。後撰 秋中「朝毎におく露そでに受けためて、世のうき時の涙にぞ借る」夫木「水たれる春の山田に流れきて、いほ白たへに散る櫻かな」四たくはふ。貯蓄す。蓄積す。

だむ 訛（自動四）　た む（訛）に同じ。國姓爺後日合戰「邊土は訛だみたるに」

だむ-彩（他動四）いろどる。彩色す。正治百首「色そふる紅葉が浦の月を又、うすだみわたる夕がすみかな」著聞「源氏繪十卷、だみたるれう紙に書きて」增鏡「赤地の錦の色ももんも目馴れぬさまにこのましきを、なさけなきまでさながらだみて」

た-むかひ 手向（名）てむかひ（手向）に同じ。神武紀「えみしをひたりももなる人、人は いへども多牟伽毗 タムカヒ もせず」

たむき （名）【植】とねりこ（梣）の異名。本草和名「秦皮 多牟岐 」名義抄「石檀 タムキ トネリコ」

た-むぎ 田麥（名）稻を刈り取りたる跡の田に蒔きたる麥。新編追加 雜「諸國百姓廻「取田稻之後、其跡蒔麥、號田麥」」

たむく 手向（他動四）一神又は佛に幣物など奉る。萬「さしすみのくるすのをぬの蔡が花、散らむ時にし行きて手向 タムケ む」古今 秋下「立田山たむくる神のあればこそ、秋のこの葉のぬさと散るらめ」撰集抄「觀音堂にまゐりて、法施など手向け侍りて」供養十講「幣帛奉一切十」二「行旅中、神に手向くる料に贈る義」旅行せんとする人にはなむけす。餞別す。新古今 雜上「老いぬとも亦もあはんと行く年に、涙の玉をたむけつるかな」

たむくゆ （自動四）（たは接頭）むくゆ。復歸す。雄略紀「報 タムクユ 讎殺」

たむけ 手向（名）一たむくること。神また佛に幣物を捧ぐること。又、其の幣物。萬「もも足らずやそすみ坂に手向 タムケ せば、すぎにし人にけだしあはむかも」土佐日記「こぐくるみちに手向けする所あり。かぢとりして、ぬさたいまつらするに」古今 雜「たむけにはつづりの袖もきるべきに、もみぢにあける神やかへさん」二旅のはなむけ。餞別。後撰 離別「あた人のたむけに折れる櫻花、あふ坂までは散らずもあらなん」源夕 伊勢介、神無月のついたち頃に下だる。女房の下だらんにとて、たむけ心ことにせさせ給ふ」三越え行く山の坂路の頂上。其處にて神に手向けをするよりいふ。たうげ。萬「かしこみとのらずありしを、み越路の多武氣 タムケ に立ちて妹が名のりつ」拾遺 愚草上「都出でて朝たつ山のたむけより、露おきとめぬ秋風ぞ吹く」

たむけ の かみ 手向神　行く道の坂上などにありて、旅人の幣を手向け、旅中の安全を祈る神。道祖神 サヘノカミ。萬「と

たむけ の やま 手向山　たむけの神（手向神）に同じ。萬「ゆふだたみ手向乃山 タムケノヤマ を今日こえて、いづれのぬべにいほりせむ子ら」千載 秋下「今日ぞ知る手向けの山はもみぢ葉の、幣と散り交ふ名にこそありけれ」

たむけ の やま の かみ 手向山神　たむけのかみ（手向神）に同じ。貫之集 雜「もみぢ葉も花をもをれる心をば、手向けの山の神ぞ知るらん」

たむけ-うた 手向歌（名）神の手向けによむ歌。草根集「手向歌天つ國つの社より、數をつくして神やうくらん」

たむけ-ぐさ 手向草（名）一神に手向くる物の稱。松・櫻・薑等をもいへり。萬「白波の瀕松が枝の手向草 タムケグサ、いく代までにか年のへぬらむ」夫木「あらましの心のうちのたむけぐさ、まつとは知

るや住吉の神」㊁【植】さくら(櫻)の異名。藏玉「他夢化草。櫻　雲は猶立田の山の手同草、夢の昔のあとの夕ぐれ」㊂【植】すみれ(菫)の異名。莫傳抄「花さかばこれを宮居に手向草、一夜のうちに二葉とぞなる」㊃【植】まつ(松)の異名。藏玉「手向草。松。山里の古き軒端の手向草、花はよそなる名殘とぞ見る」

たむけ-みづ　手向水　(名)　亡(なき)人の精靈に手向くる水。武家義理物語「憂世の夢を松風に覺まし、涙を子供の手向水となし」

たむけ-やま　手向山　(名)　㊀たむけ(手向)に同じ。古今集「此のたびは幣もとりあへずたむけ山、紅葉の錦神のまにまに」㊁【植】ちりめんもみぢの異名。

たむける　手向　(他動下一)　たむく(手向)の口語。

たむさけ　甜酒　(名)　古語。味旨き酒。神代紀「醸天甜酒(たむさけ)」和名抄「醇酒(たむさけ)　酒味長也」名義抄「甜酒(たむさけ)」

たむし　田蟲　(名)　一種の微菌の、皮膚に寄生して發する皮膚病。多く股間などに發し、錢形大より次第に暗赤色なる輪狀をなして甚だ痒し。周邊に蔓延し又傳染す。ぜにだむし。二代男「いま歴歴の太夫達に中興田蟲もあり」

たむし-ぐさ　田蟲草　(名)　(たむしを治すればいふ)【植】くさのわう(白屈菜)の異名。

たむだく　拱　(自動四)　古語。兩手を組む。こまぬく。萬五「平らけく我れは遊ばむ、手抱(たむだ)て我れはいまさむ」同「手拱(たむだ)て事無き御代と」名義抄「拱　たむだく　たムだく　たムだく」

だむだむ-だん　(英 Dum dum bullet)　〔——彈〕(名)　尖端の中心軸に沿ひて圓孔を穿ちたる鉛製の彈丸。人體内等に入れば先端開きて傷を大ならしむ。

た-むなで　徒手　(名)　(たは接頭)　むなで。からて。としゆ。素手。景行紀「解之劍置於宮簀媛家、而徒(たむで)行之」名義抄「徒博(たむで)」

たむ-の-さ　屯　(名)　古語。たむろ(屯)に同じ。神武紀「十數群(たむのさ)」推古紀「人皆有黨(たむのさ)」

たむら　屯　(名)　【植】とねりこ(梣)の異名。

たむらかす　誑　(他動四)　たぶらかす(誑)に同じ。字鏡集「枉(たむらかす)」

たむら-さう　(名)　【植】㊀菊科、たむらさう屬の草本。莖の高さ三尺乃至五尺。根葉は分裂缺刻、略と羽狀複葉の觀を呈す。八九月頃、莖は枝を分かち、箒梢、淡紅紫色の頭狀花をつく。我が國、山地に自生す。しらたまばうき。㊁あきのたむらさう(鼠尾草)の異名。

たむら-たてひき　田村立引　(名)　紋所の名。

たむら-めうが　田村茗荷　(名)　紋所の名。めうが(茗荷)を見よ。

たむろ　屯　(名)　㊀人の群。集合せる隊。部隊。欽明紀「別の報越(たむろ)群」崇峻紀「部隊(たむろ)」字鏡集「隊(たむろ)」㊁人の集合する處。兵士の駐屯する處。陣處。太平記「廿八、季清軍、敵國に赴いて陣(たむろ)を張り、旅を調へて軍手と戰ひを決せんとしけるに」㊂特に巡査の詰所。

たむろ-じょ　屯所　(名)　たむろする處。巡査の駐在所。

ため　爲　(名)　㊀わけ。ゆゑ。萬一「龍の馬(こま)も今も得てしが、青によし奈良の都に行きてこむ丹米(ため)」同「少女らがかざしの多米(ため)に、みやびをがかつらの多米(ため)と中興咲きにける櫻の花の」拾遺一「こひ死なん後は何せん、生ける日のためこそ人は見まくほしけれ」㊁たすけ。たより。續紀「凡人子乃蒙福與久爲良事者、於夜乃多米(ためと)聞行(きく)」勢語「世の中にさらぬ別れの無くもがな、千代もと祈る人の子のため」㊂其の身の上に關はること。關係上。枕「これは身のためにも人のためにも、さていみじき喜びには侍らずや」㊃利益。利得。「ためになる」源「花宴「かの翁のためまで、かみしもおぼしやりて奉り給ふ」狂言「鬼瓦「此方の爲めを思うて、爲りを申した事で御座る」

ため　溜　(名)　㊀溜める。むること。塵芥などを溜めおくところ。㊁犯罪人の病者及び十五歳未滿の犯罪人をおく牢屋。御定書百箇條「牢舍申し付け候者、最初より溜め江遣し、閒敷く候、乍併、入牢之上重病之者は、御仕置き伺ひ置き候者も、溜め江遣し可申事」㊂そのため(屎溜)の略。

ため　一多米　(名)　龜トにて、割れ目の名。龜トには五兆ありて、龜甲の正中に附くる縱筋の下の方を、と、上の方を、は、其の筋の中央より少し上の方、中より右へ横筋を附くるを、かみ、中央より少し下の方、中より左へ横筋をつくるを、ゑみ、其のかみとゑみとの中の縱筋を、ためといふ。この五兆を、朱櫻の木に火を燃やし燒きて、ひびきわれたる形を見て判斷す。「曾我」師時歌「思ひかね龜のまうすに事とへば、ためあひたりと聞くぞ嬉しき」「遠藤」

だめ　駄目　(名、副)　㊀圍碁にて、雙方の境界にあり。けち。太閤記十四、「本能寺の事」「碁」案じ入りて中興それをもえ知らで、だめをもさしすまし、勝負して」㊁爲して効なきこと。何の益もなきこと。むだ。無益。

だめ　ます　駄目差　圍碁にて、駄目を詰め塞ぐ。

だめ　を　おす　押駄目　㊀圍碁の語。㊁物事の、萬一の場合を慮りて、念をおす。たしかめおく。

ため-あづけ　溜預　(名)　囚人を溜めにあづけおくこと。御定書百箇條「引取人無之ものは、門前拂。但病人は快氣まで溜預け」同「溜預け之事」

ため-あひ　爲合　(名)　ためになること。

ため-あひ　多米合　(名)　ためのあふこと。ため(多米)を見よ。

ため-いき　溜息　(名)　憂ひ、嘆きなどする時、ためて後に長くつく息。大息。長大息。義經記「七、不信の事」「引取人無之ものは、門前拂。但病人は快氣まで溜預け」同「溜預け之事」

ため-いけ　溜池　(名)　用水を溜めて置く池。川川御普請定法帳、紀州流新溜池築立之事」「堤防溝渠志」「溜池」溜池は土地高くして、川水を用水に引き上げ難き所にて之を設く」

ため-おく　溜置　(他動四)　ためてたくはへおく。集めて蔵めおく。

ため-かぎやく　溜鍵役　(名)　江戸時代、溜めに詰め居りて、囚人の出入・錠口のしまり等を注意する役。德川禁令考後集「二、品川溜囚人取扱方」「溜鍵役之者五人、是れ者晝夜一人宛相詰め、囚人出入錠口ノ〻り心附け候」

ため-こみ　溜込　(名)　ためこむこと。

ため-こむ　溜込　(他動四)　ためて蔵めおく。貯へおく。貯蓄す。

ためし　試驗　(名)　ためすこと。こころみること。試驗。

ためし　例　樣　(名)　㊀嘗てためしたりし事例。例(れい)。先例。前例。酒飯經「やうやうあめの下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしもひき出でつべうなりゆくに」同「本朝文粹」「これその給ひつる、はかなきためしなめれ」㊁てほん。かた。ひきごと。引例。欽明紀「曆本(たかのしり)」源「桐壺」世のためしにもなりぬべき御もてなしなり」㊂次條の略。公裁秘錄「死罪人在之節、町「死罪人在之節、二三日以前に町奉行より爲知可申候、是れは樣(ため)のため、町奉行より若年寄衆へ被申上」候由、大久保佐渡守殿被仰聞「候旨」刑罰大秘錄「御樣(ため)之事」㊃つぼがり(坪刈)に同じ。地方要集錄「手代小檜見「步刈(坪刈)(歩刈)(歩刈)」

ためし-ざり　試斬　樣斬　(名)　昔時、刀劍の利鈍をためさんとて、罪人などを斬ること。又は暗夜、行人などを斬殺せしつじぎりの稱。ためし。

ためし-ぐそく　試具足　樣具足　(名)　簡の射貫かぬやう、ためし鍛へて作りたる具足。甲陽軍鑑「「佛胴のためし具足なる故、疵になる程うち〻抜けず」

ためし-ざね　試札　(名)　矢にて鎧の札を射て貫き得るや否や試すこと。又、其の試したる札。

ためし-は　試場　樣場　(名)　將軍の刀劍の利鈍をためすために、罪人を斬る式場。

ためし-もの　試物　(名)　㊀ためしに用ふる物。㊁ためしぎりにするもの。甲陽軍鑑「今編滑閑、若き時分より、ためし物をよく斬る人にて、しかも上手なれば、既にすゑものを切って」昔物語「成敗者・ためしものにて中興產料の刀・わきざしの刃をためす。近年、成敗もの・ためしもの世間にまれなり」

ため-しょうもん　溜證文　(名)　溜預けの證文。法曹後鑑「牢屋類燒之承糺し候處、溜め江請取人差し遣し候儀無之由に而、牢證文・溜證文等之寫し被差越」

ため-す　溜簀　(名)　川の中などに簀を立て、魚を溜めて養ひおく所。

ため-す　試　(他動四)　役に立つや否やを試みる。實際にあたりて眞僞をたしかむ。こころみる。調べ見る。平家五、「文覺、修行と云ふはいか程の大事やらん、樣(ため)て見ん」狂言「三、智慧をためさうと思うて、言ひつけられたものであらう」

ため-すぢ　爲筋　(名)　ためになるみちすぢ。利益になる方法。利益になる客人。

ため-だし　撓出　(名)　てうながけ(手斧掛)に同じ。

ため-たす　溜出　(他動四)　ためはじむ。貯蓄し始む。

ため-づく　爲盡　(名、副)　何事も其の人の爲めを思ひてする事。

ためつ-もの　多米都物　(名)　大嘗祭の時、神に供ふる獻物といふに對し、諸臣に賜ふ料の物。「大嘗會儀」「大嘗祭式「次雜魚並菜二百缶(樂云、可已上名各魚菜等)」「貞觀儀式「悠紀(主基)供奉官國官姓名(略)」「延喜式」「雜物合若干荷、就中獻物黑木白酒若干缶(中興多米都物(ためつもの))雜果子若干輿」

ためつ-よね　多米都米　(名)　ためつものにする米。大嘗祭式「各令下食郡辨備多明米(ためつよね)卅斛(中興袋五十枚)」

ためと-もゆり　(名)　【植】てっぱうゆりの異名。

ため-ぬけ　溜拔　(名)　囚人が溜めを破りて抜け出づること。御仕置例類集「三、寛政元年」「於肥前國長崎、捕候無宿共、溜拔致し候一件」

ため-ぬり　溜塗　(名)　漆の塗方の一。中塗面に朱漆を塗りて、乾きたる後、木炭にて研ぎて艷消なしたるに、透(すき)漆又は梨子地漆を塗りて仕上げたるもの。その下地に朱漆を塗りたるを朱溜、辨柄(ベン)漆を塗りたるを黑溜といふ。一說、色を附けず、漆ばかりにて塗ること。赤うるし。

ため-べ　〔多米部〕(名)　古(への世職にて食饌を奉仕するもの。

ため-ます　溜桝　(名)　下水の管より排出する汚水を受け入れて、汚水を取り去る便に供する溜。

ため-みづ　溜水　(名)　消火用に備へおく水。和訓栞

ため-みる　矯見　(他動上一)　窺ひ見る。ためし見る。盛衰記「六、內侍」「入道を矯め見んとてこそ」同「十九、「義仲」「兩目にては睨み、片目にては睨み、立ち上がっては睨み、さしうつぶきては睨み中興遙かに加樣にためめ見て」

ためらふ　躊躇　(自動四)　㊀迷ひて心に決せず。はきはきせず。ぐづぐづす。謠曲「某太刀抜き持って、少しためらひ候處に」㊁進退に迷ひて一つ所に徘徊す。さまよふ。盛衰記「「度詞」「五六度まで引き返し引き返し、踉蹌(ためら)ひ居たり」風雅集「梓弓ためらふほどに月かげの、いるをのみ見て歸りぬるかな」㊂心落ちつく。やすまる。しづまる。宇津保「國譲」「みだり心地東西しらず侍り、いまためらひてただ今おほせごと傳へ聞こゆ」源「藤袴「やがてためらひて、ときこえ給ふ」

ためらふ　躊躇　(他動四)　心を落ちつかす。やすます。しづむ。源「藤袴」「心地のかきみだりなやましう侍るをためらひて」發心集「くるしげなるを、ためらひつつ聞こえ給ふ」

ためる　溜　(他動下一)　たむ(溜)の口語。

ためる　揉　矯　(他動下一)　たむ(揉)の口語。

ため-ゐ　溜井　(名)　用水を溜め置くために掘りたる井。續農家貫行「「溜井は山を片取りて、堤を築き、水氣薄き所は、中に井を掘りて、水を吹きあげさせ、溜り水の水勢を增さざれば、水乾きて保ち難し」

ため-ゐ　爲ゐ　(名)　〔字の出所によりていふ〕ゐの字の稱。秋本「假名遣」「猶猶はしのい・ためゐ・よこ」「中興此の分かち、むかしはさたなく候を」

ため-をけ　溜桶　(名)　㊀肥料を入れ置く桶。父、糞尿を入れて運ぶ桶。ため。排稼奉秋「「溜桶」こえを入れ置く桶也」㊁酒・醬油等の釀造場にて、液體を納れて運搬するに用ふる小桶。

た-めん　他面　(名)　ほかの方面。

た-めん　多面　(名)　方面又は平面のおはきこと。

ため-かく　一多面角　(名)　【數】一點を共有し、且つ二つづつ順次に交はる三つ以上の平面より成る圖形。其の平面の數の三・四・五などなるに從ひて、三面角・四面角・五面角などと云ふ。

だめん-き　一打綿機　(名)　紡績機械の一。開綿機より送られたる綿より、更に塵芥を除去し、捲綿をつくる裝置。

だめん-どころも　打眠衣　(名)　常に著る衣。下學集「「打眠衣(ごろも)」「髮衣」

ためん-たい　一多面體　(名)　【數】四つ以上の平面によりて圍まれたる立體。立體を圍む平面の數の四・五・六などなるに從ひて、四面體・五面體・六面體などと云

ふ。

たも　擬網（名）網地の周圍に竹又は木を添へて造りたる小形のすくひあみ。魚をすくひ捕るに用ふ。たま。すくひだま。たもあみ。

たも　袂（名）たもと(袂)の略。小兒の語。

たも（名）【植】とろろあふひ(黄蜀葵)の異名。二やぶにくけい(天竺桂)の異名。

たも　給（自動）たもる(給)の活用。たもれの約。たまはれ。薩摩歌「聞きともない、置いてたも」丹波與作「頻はねやうにしてたも」

だも（助）「だにともとの重言の約」ですらも。でさへも。でも。和泉式部集「夢にだもあふと見るこそ嬉しけれ、殘りの額み少なけれども」

たも-あみ　擬網（名）たも(擬網)に同じ。

たも-じた文字（名）たこ(館)をいふ、宮女の詞。雅語記

たもたる　保（自動ラ下二）たもつことを得。保持す。存續す。源氏「さてたもたるる女のためも、心にくくおしはからるるなり」散木集「津の國のなにはのことともたもたれず、あしからぬ身とならましものを」

たもち　保（名）たもつこと。もち。保持。百合若大臣野守鏡「鏡ふっつと切りければ、風のたもちに彈かれて、船は沖へ十町ばかり、帆びらき打って走りしは」

たもつ　保（自動四）永くつづく。永く支へもつ。永く存在す。榮華玉ノ露「かくて御門は猶心ち苦しう、久しうたもつまじきなり」

たもつ　保（他動四）一守りて失はず。永く持ちこたふ。護持す。保持す。神代紀「各自(ノオノ)其境」繼體紀「獲來(コウモツ)宗廟不危社稷」持統紀「持(タモ)、戒」宇津保俊蔭「うへも宮も御ぐしおろしてんとし給ふなり。世たもち給ふべき事近くなりぬるを」源明石「おや大臣の位をたもち侍りき、みづからゐなかの民となり侍り」二つづく。もつ。存續す。永續す。源蜻「飽足らで、つかさ・くらゐ高くのぼり、世にぬけぬる人の長くはえたもたぬわざなりけり」榮華月宴「位につかせ給ひて、三十三年をたもたせ給ひて」同「命だにたもたせ給はば、何事をか御覽ぜざらん」三もつ。所有す。所持す。「金をたもつ」「家をたもつ」四安んじまもる。保持す。徒然草「世をたもたん道もかくや侍らん」

たも-と　袂（名）〔手本の義〕一衣服の袖の下に、袋の狀をなして垂たる部分の稱。萬「少女さびすると、から玉を多母等(タモト)とほりて澤れぬとも、戀忘れ貝探らずば行かじ」古今「うれしさを何につつまんから衣、たもとゆたかにたてといはましを」二轉して、袖の稱。三ふもと。「山のたもと」四きは。かたはら。そば。「橋のたもと」

たもと　の　くだり　袂行　袂の上より下までを通してといふこと。萬「風の音の遠きわぎもがきせしきぬ、多母登乃久太利(タモトノクダリ)まよひきにけり」

たもと　の　たま　袂玉　くすだま(藥玉)の異名。袖にかくるよりいふなるべし。赤染衛門集「五月五日左大將殿より菖浦合したる扇に藥玉を置きて、是れが勝ち負け定めさせ給へと有りしに、殿は左大臣におはしましし かば。左にや袂の玉も結ぶらん、右はあやめの根こそ淺けれ」

たもと　の　つゆ　袂露　袂にかかる涙の露。後拾遺「君のみや花の色にも たちかへで、袂のつゆは同じ秋なる」

たもと　はりひぢ　袂張肱　肱を張りて威儀をつくろふ狀にいふ語。雪女五枚羽子板「袂張肱、のしのしと歩むとすれど」

たもと　を　わかつ　分袂　人に別かる。離別す。

たもと-おとし　袂落（名）烟草入・汗拭などを插む小さき袋。其の二箇を紐につけ、懷中を通して雙方の袂の中に落としおくもの。

たもと-くそ　袂糞（名）袂の底に溜まる塵埃。

たもとこ（名）【植】いね(稻)の異名。散木集「山里はいていこのへるたもとこに、風そよめきて袖しをるなり」

たもと-すり　袂摺（名）鷹の翼の名所。たか(鷹)を見よ。

たもと-どけい　袂時計（名）くわいちゆうどけい(懷中時計)に同じ。

たもとほる　徘徊（自動四）〔たは接頭〕もとほる(回)に同じ。萬「みどり子のはひ多毛登保里(タモトホリ)、朝よひにねのみぞ我が泣く君なしにして」同「をみなへし咲きたるぬ邊を行きめぐり、君を思ひて多母登保里(タモトホリ)きぬ」

たもと-ゆり（名）【植】ささゆり(百合)の異名。生玉心中「眺めらるるも眺むるも同じ色なる袂百合、扇かざして神神詣で」

だもの　駄物（名）取るに足らぬもの。つまらぬもの。

たもり　田守（名）田を守護すること。又、田の番をすること。又、其の人の。基佐集「あしの田の稻刈り初めて引きむすび、田守の神にまつりおくなり」

たもる　賜（他動四）たまはる(賜)の約轉。狂言「ようお留守をしてたもれ」同「人馬、馬中語必ず重い物を負ふせてたもるな」同「遠路の處をばおぢやってたもり中略 ぢ」

たもろ　賜（他動）たもらんの約轉。たまはらん。「馬樂「くぼの名をば何とかいふ、つぼたり、けふくなうたもろ、ひのなかのひつきめな、けふくなうたもろ」

たもん　他門（名）一他の宗門。ほかの宗派。盛衰記「自門・他門に被免たる惡僧なり」二ほかの一門。ほかの一族。謠「我れ等他門へ參らばこそ、世の人口もあるべけれ」當流小栗判官「一門の恨み他門の仇、沙漠塞げの似せ者」

たもん　多門（名）一「永祿十年、松永久秀が大和國奈良坂の西方佐保山の上に多聞山城を築きたるに倣ふ一種の築城法」城の周圍を長屋造りにしたるものなりと。一說、城の櫓の異名と。又、渡り櫓のある城門なりともいふ。和事始「松永彈正久秀中略多門の城を築き長屋を立てしを、後世是れを法として多門と號く」二佛語。たもん(多門天)の略。謠「多門は鉾を横たへて、惡魔を降伏し、災難を拂ひ給へり」

だもん-がん　蛇紋岩（名）【地】じゃもんがん(蛇紋岩)の異名。

だもん-せき　蛇紋石（名）【鑛】じゃもんせき(蛇紋石)の異名。

たもん-てん　多聞天（名）次條の略。盛衰記「三人法師「佛法護持多門天、眷屬神等」謠「天鼓「浮世に遠き鞍馬寺、本尊は大悲多門天」

たもんてん-わう　多聞天王（名）佛語。びしやもんてん(毘沙門天)に同じ。太平記「公卿會議「山門惡、多聞天王、身には金色の冑を著し、手に降伏の鋒をつき」

たもん-の-よろひ　多門鎧（名）鎧の一種。下文を見よ。木朝軍器考「近代のものに多門の鎧といふものの見えたれど、其の制もさだかならず、またふるき物にかかるものは見えず」

たーや　田屋（名）田の番をするために建てたる小屋。萬「かみなびの清きみ田屋(ヤ)の、かきつ田の池のつつみの」

たーや　他屋（名）〔婦人の月經中、他の屋に別居するよりいふと。物類呼稱〕月經。さはり。美濃屋雜・伊勢邊の方言。物類呼稱「寛永發句帳」たや色の紅葉は月の障り哉」

たーやく　田役（名）昔時、社寺の修繕などのために田地に課せし役。信濃國諏訪神社文書「九頭井之瑞籬鳥居、諏方郡上原南北之田役を以て建立之旨、露彼本帳之上者、彼處之田役、七年に一度宛令催促、其員相當に可修理旨成下知者也」同「彼庄之田役を割三分、三社之修補可相勤者也」

たーやす　絶（他動四）一絶ゆるやうにす。斷つ。つくす。千載「かつは道をたやさざらんがために」流罪狂言「武「後日に知ると、黨類を絶やすぞよ」二打つ。どやす。京都の方言。膝栗毛「ねのれ、腸天たやいてこまそかい」

たやす-げ　容易氣（副）たやすきさま。たやすさう。

たやす-さ　容易（名）たやすきこと。たやすき度合。

たーやすし　容易（形ク）〔たは接頭〕一やすし。難からず。容易なり。續紀「許貴太斯後意保天下乃事平夷多夜須久(タヤスク)行無止所念坐而」萬「ことにいへば耳に田八酢四(タヤスク)、すくなくも心の内に吾がもはなくに」續紀「易(タヤスク)」二かろがろし。輕忽なり。古今「今此の事をいふに、つかさ・位たかき人をば、たやすきやうなれば入れず」輕微

たゆ　絶斷（自動）一きれてつづかず。きれはなる。萬「谷せばみ峰にはひたる玉かづら、多延(タヱ)むの心我がもはなくに」竹取「綱たゆるすなはち、や局のかなへの上に、のけざまに落ち給へり」二止む。とどまる。源玉鬘「涙たゆる時なく」三氣絶す。死ぬ。たえいる。萬「たまきはるいのち多延(タヱ)ぬれ」竹取「たえ入りにけり、親あわてにけり」源桐壺「夜中打ち過ぐるほどになん、たえはて給ひぬるとて泣き騷げば」四ほろぶ。きゆ。萬「萬代に年はきふとも梅の花、多由流(タユ)ことなく咲きわたるべし」五交り止む。緣離る。離絲す。源東屋「まことに憂しなども思ひて、たえぬべきけしきならば」同夕「たえぬすぐせの淺からで、やがてあひそひて」詞花「たえにける男の、五月ばかりに思ひかけずまうで來たりければ、よめる」六交通やむ。往來なくなる。堀河百首「道たゆといとひし物を山里に、消ゆるは惜しきこぞの雪かな」七かけはなる。懸絶す。源若紫「此の御文畫き給ひて三日といふになん、かの絶えたる峰に移ろひ給ひにし」

たえ　と　たゆ　絶絕　重れ言ひて、絶えたることを強めいふ語。續後撰「思ふせかなくにたえとたえにし山水の、誰れしのべとか屏を聞かせん」

たゆ-げ　弛氣（副）たゆきやう。たゆさう。

たゆ-さ　弛（名）たゆきさま。たゆき度合。

たゆし　弛（形ク）一疲れ弛む(タユ)みて力なし。だるし。宇治拾遺「經をしばしが程も濡らし奉らじと思ひて捧げ奉りしに、かひなたゆくしあらず」二心進まず。たゆむ。紫式部日記「たゆき心どもは、たゆ

たひて」

たゆたひ（名）たゆたふこと。萬「大船のはつるとまりの絶多日(タユタヒ)に、物思ひ侵せぬ人の子ゆゑに」同「白妙の吾が衣手に露はおけど、妹にはあはず猶殘(タユタヒ)にして」

たゆたふ（自動四）一搖きただよふ。ただよひて定まらず。又、ためらひて進まず。萬「天雲の多由多比(タユタヒ)來れば、なが月の紅葉の山もうつろひにけり」二心動きて定まらず。いさよふ。ためらふ。躊躇す。萬「天雲の絶多比(タユタヒ)易き心あらば、われをば頼め待てば苦しも」源須磨「琴の音に引きとめらるる綱手繩、たゆたふ心君知るらめや」榮華鶴鳴「内には、若宮の御うつくしさを、いかにいかにと女院も聞こえさせ給へど、つつましき世の有樣なれば、思したゆたふべし」

たゆ-ひ　手結（名）たまき(手纏)に同じ。(足結(アユ)ひの對)萬「ますらをの手結(タユ)が浦に、あまをとめ鹽焼く烟」

たゆ-ま　絶間（名）たえま(絶間)に同じ。仁德紀「うま人のたつる言立て、うさゆづる多由麻(タユマ)つがむにならべてもがも」

たゆみ　弛（名）たゆむこと。ゆるむ。ゆるみ。油斷。源若紫「思はずに憂きすぐせなりと思ひ入り給へるさまのたゆみなきを、いみじうつらしと思へば」

たゆむ（自動四）心倦む。ゆるむ。怠る。油斷す。枕「たゆまるるもの。精進の日の行ひ、日遠きいそぎ、寺に久しく籠もりたる」同「かくしすゑたれば中略畫など も、たゆまず心づかひせらるる」源明石「供養法たゆみて、いそぎまゐれり」

たゆむ　弛（他動四）たゆむやうにす。油斷せしむ。枕「いとつれなく何とも思ひたらぬやうにて、たゆめすごすもをかし」源夕顏「何のおぼつかなき心も侍りしなど、たゆめ聞こえ給ふべし」

たゆら（副）たよたよに同じ。萬「筑波根の岩もとどろに落つる水、よにも多由良(タユラ)に吾が思はなくに」

たゆらく　絶（自動）たゆ(絶)の活用、たゆる(絶)の延。萬「世の中は常かくのみか、結びてし白玉の緒の絶樂(タユラク)思へば」

たよう　多事。

たーよう-じ　他用　一他人の使用に供すること。他人の使用に供すること。

たよう-じほん　他用資本（名）他人の使用に供する資本。(自用資本の對)

たーよく　一多欲　欲の多きこと。慾心深きこと。文武五人男「愚鈍多欲の侍ばら、時の威勢に理を忘れ」史記「毋多欲、以驚信」韓詩外傳「福生于無爲、而患生于多欲」

たーよせ　手寄（名）たより。ついで。便宜。天武紀「於朝郡迹太川邊、望拜(タヲガミタテマツリ)天照大神」夫木「忍びかねつみしらするを女郎花、たよせに折ると思ひ疏むな」同「この森のもみぢの錦たてながら、みちのたよせにぬさ奉る」

たよ-たよ（副）一ただただに同じ。謠曲「通力自在の勢ひ絶えて、力もたよたよと、足弱車の」二なよなよに同じ。若風俗「殊更一座客のこなし。たはぶれ、しめやかにたよたよとして弱からず、うちまかせ身にも心を置くぞかし」釋迦如來誕生會「風に順ふ青柳の、編綱(タヨタヨ)として起き給へば」

たよら（副）動搖して漂ひ定まらざること。又、水などの十分に滿ち溢ふること。古義「萬「足がりのとひのかふちに出づる

湯の、よにも多欲良(ヤタ)に子ろがいはなくに」

たより 便 (名) 一たよること。たのみ。よるべ。てづる。夢語「女、おやなくなりて、たよりなくなるままに」同「此の男なま宮づかへしければ、それをたよりにて、ふぶのすけども集まり来にけり」 二都合よき時。ついで。機會。夢語「言ひ出でんたよりなさに、まことならぬ夢がたりをす」宇津保吹上「此のあたりにたよりあらば、おはしまさせ給へ」源氏「此のついでにさるべき事ども構へ出でん」、「よきたよりなり」 三おとづれ。音信。李花集「誰れかはと思ふものから、ふるさとのたより待たるる初かりの聲」狂言土産「久しく便りも無かったによって、ことの外氣遣ひをしたが」 四ゆかり。縁。新古今集三「逐ふ事の空しき空の浮雲は、身を知る根の雨のたよりなりけり」元眞集「霞たつ野べの若菜を今日よりぞ、松のたよりに千代はつむべき」

たより-の-かぜ 便風 順ふ方より吹きおくる風。おとづれをもたらす風。又、おとづれ。かぜのたより。高光集「年をへて思ふ心のしるしにぞ、空にたよりの風も吹きける」

たより-の-とも 便友 たのみとする友。手づるとする友。謠花筐「君が住む都とやらんも其方なれば、聟をしるべの便りの友と、我れも田の面の雁がねこそ、つれて越路のしるべなれ」

たより-どころ 便所 (名) たよりとするところ。たのみどころ。

たよりなげ 便無氣 (副) たよりなささう。たよりなきさま。榮華本紀「旅鞍のかりの、たよりなげなる聟も耳にとまりて」同玉鬘「世の中いとたよりなげに思したるも、いと心苦しくおぼされて」

たよりなさ 便無 (名) たよりなきさま。たよりなき度合。

たより-なし 便無 (形ク) たよるものなし。たよるところなし。孤立せり。

たより-や 便屋 (名) 江戸時代、書簡・荷物を配達して賃錢をとる業とするもの。

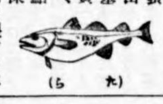
たよる 便 (自動ラ四) 縁を求む。たよりとす。よるべとす。たのみよる。すがる。赤染衛門集「笛の音に神の心もたよるらん、森のこ風も吹きまさるなり」

たよわ-げ 手弱氣 (副) たよわきさま。たよわさう。

たよわ-さ 手弱 (名) たよわきさま。たよわき度合。

たよわ-し 手弱 (形ク) よわし。かよわし。萬「岩と割るたぢからもがも、手弱寸(ヤワ)をみなにしあればすべの知らなく」

たら 鱈 (名) 【動】魚類中、硬骨類の一種。體の長さ三尺餘。腹部は膨起し、尾部は狹小にて。口は濶大、顎下に太き鬚ありて、吻は突出に分かる。體色は背部は稍淡く、頭部及び腹部に微小なる黑點を散布す。我が國、寒冷の深海に產ず。食用とし、又、肝油を製するに用ふ。まだら。延喜式節用「鱈」大口魚。


(た ら)

たら-の-あぶら 鱈油 鱈の肝臟より採りたる油。藥用とす。

たら 桜 (名) 【植】たらのき(楤木)の略。なるべし。和名抄「桜木小木叢生有刺也」名義抄「桜」

たら-の-ひ 楤火 たらの木の炭を粉にして竹筒に入れ、火を點けたるもの。下文を見よ。安齋隨筆「火を持つ樣。六寸廻り程の竹の節を一つこめて切りて、たらの木を炭に燒き、粉にして右の竹の筒に入れ、投竹を上皮けづり薄くして、節の方に緒を附け、木口に火を附け持つ也。たらの火と云ふは是れ也」

たら 蔘 (名) 【植】たて(蔘)の異名。字鏡「蔘(又太良)」

たら 一多羅 (名) 【植】たらじゅ(多羅樹)の略。

だら (名) きんちゃく(巾著)をいふ、長崎の方言。

だら 一陀螺 (名) ばいごま(陀螺)に同じ。

だら 弗 (英 Dollar) (名) 一どるらる。の訛。 二轉じて、明治の初年、西洋の貨幣の形に法りて鑄造せる貨幣の俗稱。

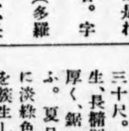
たらう 一太郎 (名) 一國つねの大納言。源氏「わらはなる八郎君はむかひ腹にて、中將殿大將殿の太郎君と立ちならびたるを」 二物事の始めをいふ語。「太郎月」「堀河太郎百首」 三他より最もすぐれたるもの。又、最も大なる物事にいふ語。「坂東太郎」清獨眼抄「七條北東洞院東中許洞院面燒亡、中將世人號二次郎燒亡也、太郎は去年四月廿八日至于大極殿燒亡」 四ばかたらう(馬鹿太郎)の略。

だ-**らう** (句) 〔であらうの約〕さうであらう。「だらうと思った」

たらう-**くわじゃ** 太郎冠者 (名) 冠者(クワジャ)三の中にて、最も先輩なる者。其の次を次郎冠者・三郎冠者などいふに對す。狂言長塚「太郎冠者・次郎冠者を山田へ遣はして御座る」

たらう-**づさ** 太郎月 (名) 〔先に生まれたる子を太郎といふに擬へていふ〕しやうがつ(正月)の異名。書言節用「太郎月(タラウ)・太朝月(タラウ)・正月(シヤウ)・孟」

たら-**えぶ** 一波羅樹 (名) 【植】冬青(ヒイラギ)科、鐵木(ハガキ)屬の常緑喬木。幹の高さ二三十尺。葉は互生、長楕圓形、質厚く、鋸齒を具ふ。夏日、葉腋に淡紫色の細花を簇生し、後、赤色楕圓形の實を結ぶ。我が國、庭園に栽培せらる。材を提物細工に用ひ、樹皮よりもちを製し、葉を茶の代用とす。


(ふえもた)

たら-**えぶ** 一多羅葉 (名) 多羅樹の葉。平治物語「天竺の多羅葉」盛衰記「多羅葉に作り著せき、今の葉早黃色(モヤヅ)と云ふは是れ也」

たらえぶ-**を**-**かく** 書多羅葉 扇筆を なす。

たらかし (他動サ四) たらかすこと。たらし。

たらかす (他動サ四) たぶらかす。たらす。だます。すかす。膝栗毛「吉彌めにたらかされくさって、きりもん貸したまでのこっちやあろぞいな」

だらく 一墮落 一落つること。墜落。詩經「標有梅。傳盛極則墮落」曹松詩「天竺欲知便是銀河水、墮落人間合却廻」 二おちぶるること。失敗すること。零落。荀子「毀壞墮落、必反無功。注謹荀求功利、旋即毀壞墮落、必反無成功也」 三佛語。惡道に陷りて脫出する能はざること。道心を失ひて俗惡に陷ること。狂言「出家と申す者は中略事むづかしいもので御座るによって、ふと墮落致いて御座れば」法華經「或當墮落爲火所燒」 四品性が下劣となること。品行

の修まらざること。 五たくさん(澤山)。いふ。常陸國の方言。

だらく-**もの** 墮落者 (名) 墮落したるもの。

だら-**け** (名) おろか(愚)をいふ、越中國の方言。

だらけ (接尾) 一或る語に屬つきて、全(ヒ)く汚れたるさま、又、滿ち布けるさまなどにいふ語。「ごみだらけ」「血だらけ」「灰だらけ」 二其の事のみ多きさまにいふ語。曾根崎心中「惡口だらけ言ひ散らし、喚いて外へ出でけるを」生玉心中「行く先が借金だらけ、人に疎まれ指さされる」浮世風呂三「諸國の言語うかめだての謬誤だらけ」

だらける (自動ラ下一) 一しまりなく緩む。ゆるみ垂る。「飴がだらける」 二身體倦み勉みて、しまりなくなる。 三心緩み怠る。なまける。

だらこ (名) きんちゃく(巾著)をいふ、津輕の方言。

たら-**こぶ** 鱈昆布 (名) 鹽鱈の肉と昆布とを混ぜ煮たる汲物。

だら-**さうば** 弗相場 (名) どるさうば。弗相場に同じ。

たらし (名) 一(合)乘の義か) おび(帶)の古稱。記上「遠津山御多良斯(タラシ)神中略遠津山御帶(タラシ)神」 二執らしにて、手に執る義」ゆみ(弓)の古稱。祝詞式春日「御弓(タラシ)」雄略紀「弓(タラシ)」

たらし 滴 (名) たらすこと。たれ。したたり。てき。

たらし 誑 (名) たらすこと。すかし。だまし。狂言入鹿「最前のやつは、たらしめちや」若風俗「これ皆わらべたらしの樣に拵へて」

(諺)**たらしがたらしにたらされる** 狸が人に魅されるに同じ。たぬき(狸)の條を見よ。東見記「侯白侯黑共盖人也。淮海集にあり、日本に云ふ、たらしがたらしにたらされたと同意」

だらし (名) しだら。しまり。檢束。浮世床「なんの、だらしもねえくせに」

たらし-**こむ** 垂込 (他動マ四) 液體を滴らし入る。

たらし-**こむ** 誑込 (他動マ四) 十分にたらす。深くだましこむ。槍權三「色の上にてたらし込み、眞の寒子傳授の卷物してやり」平家女護島「色に迷ふは男のならひ、欺ましすかしたらし込み」

だらし-**なし** (名) だらしなきこと。又、そのもの。

だらしなし (形ク) しだらなし。しまりなし。檢束なし。假名文章娯節用「黑の紋天に緋のごろふくりんの腹合せの帶を、だらしなく結び」

たらしみよ 足御世 (名) 何事も滿ち調ひたる御世。一說、皇威の遍く天下に滿ち及ぼす御世。祝詞式春日「足御世(タラシミヨ)乃度御世(ヨ)」齊衆本紀「

たらしわす 誑鵰 (名) 囮(ヤ)を欺く鵰(ボウ)。信言集覽

たら-**じゅ** 一多羅樹 (梵 Tāla) (名) 【植】椶櫚科に屬する木本。幹の高さ六七丈。葉は大きくして掌狀をなす。花は單性にして大形の肉穗花序をなし、雌花と雄花とは異株に生ず。果實は褐色の核果なり。印度に產する植物。其の葉に筆にて書し、又は錐にて刻みて經文を寫して梵夾を作り、之を多羅或ひは貝多羅の梵夾といふ。日本振袖始「恐れて虛空に飛び上がり、其の高さ七多羅樹」

たらす 足 (自動) たる(足)の敬語。萬三「あまの原振りさけ見れば、おほ君の、み命は長くあま足(タラ)たり」

たらす 垂 (他動サ四) 一垂るるやうにする。垂れ下(サ)げる。「紐をたらす」 二したたらす。流し落とす。「涙をたらす」「涙をたらす」

たらす 誑 (他動サ四) 一情欲などを以て人を欺く。すかす。だます。たらかす。狂言鈴鹿「古狐か伯藏主に化けて參って、某をたらいたと見えた」新永代藏三「人をたらし、本意にあらぬ銀まうけは、積く管はなし」 二小兒などをすかしなだむ。あやかす。一代男三「一文寶りの長刀を創りて、泣く子をたらし」賀古教信七墓廻三「ひもじうないか、ままいやかと愛したらして、表まで送り出でつつ」

だらず (名) おろか(愚)をいふ、因幡國の方言。

だらず-**すけ** 陀羅助 (名) だらにすけ(陀羅尼助)に同じ。

だらすけ-**の**-**き** (名) 【植】ささげ(梓)の異名。

たらず-**さへ** 不足前 (名) 不足なる分。補足する分。たしまへ。

たら-**たら** (名、副) 一しづくなどの滴るさまにいふ語。鷹筑波「たらたらと朽木によだれ垂水かな」日本武尊吾妻鑑「汗たらたら」 二好ましからぬことを續けざまにするさまにいふ語。「小言たらたら」「あくびたらたら」天網島「口合ひたらたら立ちち歸る」傾城反魂香「退從たらたら見苦しし」

だら-**だら** (名、副) 一たらたらを强めていふ語。「汗がだらだら流れる」 二傾斜の緩なるさまにいふ語。「だらだら下り」 三帶のきまりなく長びくさまにいふ語。堀河狂歌集「丑の日に思ひそめてやだらだらと、あはで長びく懇もするかな」平家女護島「だらだらと、だらつき聟にて通り行く」

だら-**おり** (名) 坂などの傾斜の緩やかなる下だり。源氏十二段長生島臺「岩間を傳ふ苔清水、だらだら下りの田の畦に」

だらだら-**さぶ** (名) 初めゆるやかにして、徐かに急なること。

たらち-し 垂乳 (名) 〔しは助辭〕たらちね(垂乳根)に同じ。萬三「うち日さす宮へのぼると、多羅知斯(タラチシ)や母が手離れ」同四「みどり兒のわくごが身には、垂乳爲(タラチシ)母にいだかえ、たすきかく這ふ子が身には、木綿かた衣ひつりに縫ひき」

たらちしの 垂乳之 (枕) たらちねの(垂乳根之)に同じ。萬五「多良知迦能(タラチカノ)母が目見ずておほほしく、いづち向きてかあが別かるらむ」

たらちね 垂乳根 (名) 〔次條の轉〕母又は父。おや。續古今「たらちねの心の闇を知るものは、子を思ふときの涙なりけり」拾玉「たらちねも又たらちめもうせはてて、たのむ蔭なきなげきをぞする」

たらちねの 垂乳根之 (枕) 〔たらちはたらし(足)に通じて讃むる辭、ねは根)も祭稱。古義〕母は親しく尊きものなるより母にかけていひ、後には轉じて、おや即ち父母にもかけていふ。たらちしの。萬三「帶乳根乃(タラチネノ)母の命は」同五「秋さらば歸りまさむと、多良知禰能(タラチネノ)母にまをして、時も過ぎ月もへぬれば」同五「多良知禰乃(タラチネノ)母がめかれて、若草の妻をもまかず」新撰萬葉「足子種之(タラチネノ)おやもつらしな、かくばかり思ひに迷ふ世にとどめたる」

たらちめ 垂乳女 (名) 生みの母。母おや。千載哀傷「母の身まかりける時よめる。たらちめやとまりて我れを惜しまましし、代ふるにかふる命なりせば」拾玉「たらちねも又たらちめもうせはてて、

たのむ蔭なきなげきをぞする」

たらちを 垂乳男 (名) 生みの父。父おや。貫之集「世の中に誰れか名たかきたらちをと、我れとか中を人は知らなんん」元輔集「たらちをの歸る程をも知らずして、いかで捨てしかりのかひこそ」

たらつきどり (名) だらつきたる音聲。平家女護島「だらだらと、だらつき聲に通り行く」

だら-つく (自動) だらだらす。ぐづぐづす。不活潑なり。長町女腹切「建仁寺、だらりが鳴るぞ、だらつくまいぞ」

だらに 陀羅尼 (名) 佛語。「梵Dhāraṇī」總持また能持能遮と譯す。能く善法を持して散失せず、惡法を遮して生ぜしめざる義。〔佛菩薩の說きたる呪文。枕「だらには曉」源「だらによみたり」智度論「陀羅尼者、秦曰能持、或曰能遮、能持集種種善法令不散不失、能遮惡不善心生能遮不令生」〔次條の略。

だらに-じゅ 陀羅尼呪 (名) 佛語。呪文。又、經文の題目。

だらに-すけ 陀羅尼助 (名) 「昔時、僧の陀羅尼を誦する時、口に含みて睡眠を防ぎたるより起こると」黃蘗(キハダ)の皮、又はせんぶりの根を煮つめて製したる藥。主として大和國吉野大峰の產。味極めて苦く、腹痛に用ひて効ありといふ。だらすけ。

たらのき 楤木 (名) 【植】五加(ウコギ)科、土當歸(ウド)屬の落葉亞喬木。幹の高さ一丈餘。莖及び葉に鋭き刺あり。葉は通常大なる二回羽狀複葉をなし、多數卵形の小葉より成る。初秋の候、白色、小形の花を開き、圓錐花序に排列す。果實は黑色、小球狀なり。我が國、山野に自生す。若き葉を食用に供し、材を小器具及び下駄の料とす。うどめ。うどもどき。きうど。ことりとまらず。

(きのらた)

たらば-がに 鱈場蟹 (名) 【動】節足動物中、甲殼類の一種。かにの一種。大なるは背甲の徑一尺、步脚の長きもの二尺に達す。背甲は寶珠狀にして淡赤褐色を呈し、低き刺狀の突起多し。鋏は割合に短く、步脚は稍扁平なり。我が國、北海に多く產す。肉を食用とし、又、盛んに鑵詰として北米に輸出せられ、大に米人の嗜好に適すといふ。まつばがに。

たらはす 足 (他動) 足(タラ)ふやうにす。濕ち足るやうにす。十分にす。濕足に行き屆かす。萬「霞立つ長き春日を、天地に思ひ足椅(タラ)と」同「から國にゆき多良波之(タラ)て歸りとむ、ますらたけをにみき奉る」

たらひ 盥 (名) 〔手洗(タラ)の約〕〔水又は湯を盛りて手又は面などを洗ふに用ふる扁(ヒラ)き器。てうづたらひ。勢語「女の手洗ふ所に、ぬきすを打ちやりて、たらひのかげに見えけるを」枕「はんざふに手水など入れて、たらひの手もなきなどあり」和名抄「盥、藤原佐世、倭名類聚抄云、洗手多澡手也」たい(ヘ)。〔湯又は水を盛りて物を洗ふに用ふる器の總稱。洗濯盥。〔はだらひ(馬盥)に同じ。三好義長亭御成記「御馳三閑新造に立三閑の厩の面の脇也、馬船新調、たらひ同前」

(諺)**風はんきりを洒ふ** 目糞、鼻糞を笑ふに同じ。めくそ(目糞)の條を見よ。

たらひ-ぐち 盥口 (名) たらひの如き大いなる口。日本振袖始「盥口に運切鼻、猿眼に鉢類中略彼の樣な惡女と夫婦に、なる男は、よくよくの運の盡き」

たらひ-むすび 盥結 (名) いとまき(絲卷)に同じ。

たらふ 足 (自動) 【足(タラ)るの延】十分なり。滿足なり。不足なくあり。顯宗紀「俊崇賜邨、使、無乏少(タラ)」萬「八十伴の男を、まつろへのむけのまにまに、老い人も、めのわらは子も、しが願ふ心太良比(タラ)に撫で給ひ」源「いとしうとくに、おももち・あゆまひなど、大臣といはんにたらひ給へり」

たら-ふく (名・副) 腹一杯。飽き足る程。膝栗毛「吉田の酒場で、たらふく酒を振舞はしやった」鱈腹。

たらふく まこざかもん 鱈腹孫左衛門 たらふく飲食したるを、人名にとりなしていふ語。

たらほう (名) 【植】うどめ(土當歸芽)の異名。

だらむ (英 Drum) (名) 【數】英國の衡の名稱。一おんす・の八分の一。我が國の四分七厘餘に相當す。

たらら-こ 多良雜鼓 (名) 〔搭鼓(タラ)の一名なる答臘鼓の音ならんと〕すりつづみ(搭鼓)の異稱。兵庫寮式「凡鼓吹雜生、習業所須中略多良雜鼓四面、答鼓一面中略並待官符充之」

たらり (名・副) 〔垂れ下がるさま、又、流り落つるさまにいふ語。〔しまりなきさま、又、なまけたるさまにいふ語。

だらり (名・副) 前條に同じ。著聞「さまざまの勸めに、身もくたびれけるにや、其の夜はだらりとして寢たりけり」唐船噺今國姓爺「何時を目あてに便使だらり」

だらり-だらり (名・副) 前條の重言。浮世風呂「小さい柄杓で、だらりだらりと汲むやつさ」

だらり-むすび (名) 江戸時代、行はれたる女の帶の結び方の名。

(だらりむすび)

たり 罈 (名) 酒を盛りて杯に注ぎ入るる器。記「みなそそぐおみの少女、ほ陀理(タリ)とらすも、ほ陀理(タリ)とり、かたく取らせ下がたく、やかたく取らせ、ほ陀理(タリ)足らす子」

たり 足 (名) たし(足)に同じ。浮世風呂「只今の錢なども、三十二文で薪か味噌の足りにでもなりたいと心がけた所を」

たり 疣 (名) 古語。いぼ(疣)に同じ。宇鏡「疣伊比波反、久太利」

たり 鷙 (名) 馬の脚の風まり重くなる病。和名「鷙太利馬脚�重也」名義抄「鷙馬脚肥」

たり 撓 (名) 横にわたしたる木などにくるひの出づること。

たり (助動) 〔てありの約〕過去の意を表はす語。萬「我れはもややすみこ得たり、君人の得がてにすとふやすみ兒え多利(タリ)」同「雪こそは春び消ゆらめ、心さへ消えうせ多列(タリ)や、ともも通はぬ」同「つね人の戀ふといふよりは餘りにて、吾れは死ぬべくなりに多良(タラ)ずや」

たり (助動) 〔とありの約〕名詞又は漢語に屬(ツ)きて、物事を指定する意を表はす語。平家「君君たらずといふとも臣以て臣たらずんばあるべからず、父父たらずといふとも子以て子たらずんばあるべからず」本朝平家「中略新院、長承、上皇は法皇の離宮の故亭、幽閑の寂寞たる御すまひを、御心苦しく見奴きまゐらせ給へば、

同同六巻、十訓抄、下萬の身にて大將たる者を誅しつるは、奚加のなき時に」

たり 人 (接尾) 人を數ふるに用ふる語。記「吾がふ多理(タリ)ねし」神武紀「えみしを、ひ儀利(タリ)、ももな人」仁德紀「夏蟲のひむしのころも二重きて、かくみや儀利(タリ)ほ豈よくもあらず」

だり (助動) 過去の助動詞、たりの音便。浮世風呂「厚ぼってえ紺頭巾は、血氣盛んの壯夫が襟へ卷いたり、天窓を包んだりする」

たりう 他流 (名) 他の流儀。ほかの流儀。

たりう-じあひ 他流試合 (名) 武藝などにて、他流の人と試合ひをすること。

たりうむ (英 Thallium) (名) 【化】赤有元素の一。鉛に類する銀白色の金屬。自然界に於ける配布廣きも、其の量は極めて微なり。鉛よりも軟く、且つ空氣中にて酸化して銹を生じ易し。

たり-かた (名) たたりがた(柔箭)に同じ。宇鏡「柔箭太利加太」

だりがてい (形) 膝栗毛「ああだりがてい、だりがてい、こんがい醇ひくらひをって、わいどものしゅんすめに、がらりうはあてや」

たり-き 垂木 (名) たるき(垂木)に同じ。宇鏡「椽比佐乎乃」同「薄垂木、太利木」

たりき 他力 (名) 〔他人の力。他の助力。〔佛語。阿彌陀如來の本願の力。(自力の對)御文草「極樂に往生せんと思はん人は、まづ他力の信心といふことを存知すべきなり」叢林集「三心二力自力、他力之事」毘婆娑論「唯是自力无他力持、如斯等觸目皆是」敎行信證「言他力者、如來本願力也」

たりき ぬんぶつ 〔他力念佛 佛語。阿彌陀如來の名號を稱念し、佛の本願力に賴りて淨土に往生せんとすること。大原問答青葉笛「他力念佛に、無量の罪障悉く滅し、決定往生何の疑ひかあらん」

たりき-の ふね 他力船 阿彌陀如來の本願の力をたよりと賴む事を船に譬へていふ語。諸讃行「超世の悲願に身を任せて、他力の船に法の道」

たりき ほふめん 〔他力本願 佛語。他力を宗旨とする法門。

たりき ほんがん 〔他力本願 佛語。自己の智力を用ひず、專ら他力即ち阿彌陀如來の力によりて涅槃の眞果を得んことを願ふこと。盛衰記「四十八、之氣、悉くも彌陀他力本願を信ず、韋提の得悟無疑」同「是れを他力の本願と名づく」

たりき-しゅう 〔他力宗 (名) 佛語。凡夫の涅槃の眞果を得るは自力にあらずして、他力即ち彌陀本願の力を賴むにあらずば得べからずとて、專ら他力にたよる宗派。淨土宗・一向宗の如き是れなり。

たりき-ほふ 〔他力法 (名) いぎやうだう(易行道)に同じ。

だりさる (自動) だりむくれきるに同じ。浮世風呂「大酒となって、だり切ったはなだり(けくれの力元だりと略し、)」

たり-くち 垂口 (名) 口わきを垂れたるさまをいふなるべし。宇鏡「崖久知」字鏡集「誹タリ」

たり-くび 垂頷 (名) 直垂・素襖などの領(クビ)の、方形に仕立てたるもの。方領(ハウリヤウ)。(盤領の對)

たり-こ 熕蠶 (名) おしやり(御舍利)に同じ。

たり-こと (名) かまびすしきこと。さわがしきこと。類宇鏡、讀佛、佛法、二合強也、囂也、又本宇鏡、讀佛、佛法、耳砂、囂也、太利止止

たりつ 他律 〔ほかの規定。他の規律。〔(英 Hetoronomy) 【哲】他より律せらるること。即ち、自己の眞本質に基かざる法則により支配せらるること。他則。(自律の對)

たり-ひずみ (名) 搗み又歪むこと。たるみゆがみ。非難すべき點。松風村雨東帶鑑「二人が中の挨拶は、たりひずみない釣(ツリ)瓶けの枡で量る懸路でも、心で憊れたは氣の毒な」

たり-ほ 垂穗 (名) 實熟しなどして、垂れたる穗。神代紀「其秋垂穗(ホリ)、八握莫莫然、甚快也」

たり-ほふ (自動) 忘りがちなり。一說、犢紀の利は知の誤りならんと。本居宣長 續紀「多利麻比(マヒ)ほ夜夜彌賜賜」

だりむくれ-さる (自動) まるで締まりなくなる。浮世風呂「だりむくれ切って、呂律も廻らねえ癖に」

たりやう 他領 (名) 他人の領分。他人の支配地。丹波與作「殊に道中、他領もの、是れ式の事評議に及ばず、お助けなさるる、立ち歸れ」

たりやう 多量 分量の多きこと。

たり-やか 足 (名・副) 十分。滿足。懷竹抄「たりやかにならぬ笛のある故なり」

たり-よ 足夜 (名) 終夜。全夜。萬「うつつには君にはあはず、いめにだに逢ふと見えこそ、あまの足夜(ヨ)に」

たりよく 多力 (名) 力の多くあること。太平記「中略、依山門、」「肥壯多力の鐵牛一頭出で來て、地を踏うて吼え慾る」韓非子「其多力者樹其黨、寡力者借外權」

だりよく 惰力 (名) だせい(惰性)に同じ。

たりる 足 (自動上) たる(足)の口語。

たり-を 垂尾 (名) 長く垂れたる尾。萬「庭つ鳥かけの垂尾(ヲ)の亂り尾の、ながき心も思ほえぬかも」

たり-をつける (句) 人の過失をいふ。

たる 樽 (名) 流動物などを入れて貯ふる木製の器。形、桶の如くにて蓋あるもの。宇津保「貴宮」「一石いるたる十に、酒いれて」宗長手記「樽五荷、代五百疋、炭六箇、薪柑二籠」

たる 足 (自動) 〔十分にてあり。滿ちぬふ。缺けたることなし。不足なし。たらふ。記「ももち陀流(タル)やには見ゆ」萬「梅の花た折りかざして遊べども、あき太良(タル)ぬ日は今日にしありけり」古今「北へゆく雁ぞなくなる、つれてこし數はたらでぞ歸るべらなる」源「やうやう御よはひたりおはしまして、何どもわきまへさせ給ふべき時に至りて」〔分限に相應す。任に堪ふ。「用ふるに足る」源「たをやぎたるけはひ、御子たちといはんにも足りぬべし」〔滿足す。安心す。

たらぬかほ 不足顏 不滿なる顏つき。不足がほ。一代男「足らぬ顏して、かぶり掉る」

(諺)**足らず餘らず子三人** 過不及なき適度なる子持ち。

(諺)**足るることを知れ** 身分相應にて滿足せよ。老子「知足者富」同「鵲莫大於不知足、咎莫大於欲得、故知足之足常足」

たる 垂 (自動) 〔物の末端、下方へさがる。ぶらさがる。萬「くれなゐのおもての上に、いづくゆか鐵かき多利(タ)し」源「かたはと見ゆる物は、御鼻なりけり中略さきの方すとしたりて、色つきたる」〔滴る。萬「父のみことは、たくづ

紅色帶を見る。我が國、東海より西海に產す。しまをこぜ。

たるみ 垂水（名）垂れ落つる水。たき。姓氏錄「孝元天皇御世、天下旱魃、河井潤乾、于時阿利眞公造二作高樋一、以垂水（ヲヒ）四山基之、令通二水宮內一」萬三命をさきくあらむと、いは走る垂水（ヲヒ）の水を結びて飲みつ」

たるみ 弛（名）たるむこと。ゆるみ。他狩劍本地「賀茂川の深みにだんぶと浸つたり中略裾に雫のたるみなく、心ばかりはせきのぼり」

たるむ 弛（自動ヨ）たゆむ。たわむ。ゆるむ。拾玉三「梅がえは弾まざりけり」大機冠三「たるめばかかり、かかれば白眼み」

たるむ 弛（他動ヨ）たるむやうになす。ゆるます。

たるらむし 堕涙（名）【動】（蛇）をいふ、薩摩國の女詞。物類呼稱

だるぬ 一堕涙（ダルヌイ）をおとすこと。落涙。晉書羊祜「襄陽百姓、於二峴山一祜平生遊憩之所一建碑立廟、歲時饗祭焉、望二其碑一者、莫二不一流涕一、杜預因名爲二堕涙碑一」

たれ 垂（名）一垂るること。又、其の物。二平緒につけて垂るるもの。ひらを（平緒）を見よ。三垂駕籠の席戸（ハヒ）。四たれみそ（垂味噌）の略。五滿燒につくる汁。醬油に味醂を加へ、白胡麻を擂り入れて煮つめたるもの。六味噌に醬油と味醂などとを加へて擂りたる液。肉を煮る時、味をつくるに用ふ。

たれ 誰（代）一それと指さぬ人、又は、しかと名を知らぬ人に用ふる人代名詞。だれ。記二七行く少女ども、多禮（ヨ）をしまかむ」仁德紀「おみの少女を多倒（ヨ）饗はむ」萬三卷柳かつらに折りし梅の花、多禮（ヨ）か浮かべしさかつきの上に」勢語「後はたれと知りにけり」二その人の姓名を知らずして問ふに用ふる疑問の代名詞。何人。源東屋「とらへ給ひて、たれぞ、名のりこそゆかしけれ」

たれかある 誰有　誰れか居るか。人を召す語。諸國話「如何に、誰れかある」狂言聟「誰れかある。御前に」

たれしのひと 誰人（しは助辭）次條に同じ。萬二一いにしへのさ織りの帶を結び垂れ、誰之能人（ヲヒレシ）も君にはまさじ」

たれのひと 誰人　いかなる人。何といふ人。たれびと。なんびと。萬三「さを鹿の萩にぬきおける露の白玉、あふさわは誰人（ヲヒレ）かも手にまかむちふ」榮華見果「わが君をば、たれの人か、おろかに思ひきこゆる事あらん」

たれやしひと 誰人　前條に同じ。武烈紀「大君の御帶のしづはた結びたれ、陀鑒耶始比登（ヲヒレヒト）も相思はなくに」

たれやのひと 誰人　前條に同じ。狂言地蔵「走り廻はり候へ共、誰れやの人が慌みて、茶の一服も吳れざれば」

（諺）誰れか烏の雌雄を知らん 烏の雌雄の區別し難き如く、人の心また物事の是非・善惡は容易に判斷し難し。詩經小雅「具曰予聖、誰知烏之雌雄」

だれ （名）一たれること。二相場などの下落に傾くこと。「だれ氣味」

だれ 誰（代）たれ（誰）の訛り。

だれあさ 垂尼（名）剃髮する前に、髮をそきて垂れたる尼。古記別記「於二法成寺西北院一有二御出家事一、先度垂尼獄」女院小傳「皇嘉門院崇德后保元元十一、垂尼（ヲヒ）長寬元十二廿六、爲尼」

たれかく 垂角（名）紋所の名。かく（角）を見よ。

たれかご 垂駕籠（名）乘物の一種。形小さく、左右の戸を鬼などにて垂れかけたる駕籠。

たれがし 誰某（代）たしかに其の人と指さずしていふ人代名詞。だれそれ。辨內侍日記「たれがしは、何色何色と、少少萩の戸にてしるし侍りしに」今物語「うへ童多く具せられたりける中に、たれがしとかやいひけるちごを」著聞三「その年、その頃、たれがしを御使にて召されて候ひしは、よも御あらがひは候まじ」

たれがみ 垂髮（名）幼童などの、結び上げずして垂れたる髮。著聞三「長大の垂髮にて、皮の沓をはきたる」宇餘集「髮（ハツ）、伯青之卷「基長弟乙童丸、生年十四歲、いまだ垂髮なり」

たれかれ 誰彼（代）誰れといふ人、彼れといふ人。なにがしくれがし。彼の人此の人。宇津保藤原「たれかれ見給ひて、いみじう笑ひ給ふ」同下吹三「たれかれも、しか奏せしかど、いかでかはかしこまてはものせん」

たれかれなし 誰彼無　誰れ彼れを問はず。一般に。すべて。

たれぎぬ 垂絹（名）【動】せぐろいわし（脊黑鰯）の異名。

たれくち 垂籠（名）【動】（自動ヨ）簾又は帳帷などおろして垂れて內に籠もる。六帖三「たれこめて春の行くへも知らぬまに、待ちし櫻もうつろひにけり」榮華花山「內にもたれこめておはしまして、御聲も惜しませ給はず、いとさま惡しきまで泣かせ給ふ」

たれこむ 垂籠（自動ヨ）ひどくだる。

たれさがる 垂下（自動ヨ）下方に向ひてたる。さがる。

たれす 垂簾（名）垂れたるすだれ。萬二十玉だれのをすの垂簾（ヲヒ）を行きがちに、いはなさずとも君は通はせ」

たれす 垂簀（名）船具。いきす（生簀）を見よ。

だれそれ 誰某（代）たれがし（誰某）に同じ。

たれつ 一多裂【植】植物學上の用語。葉などの數回分裂して、多數の裂片となること。

たれとさほし 誰時星（名）かはたれぼし（彼者誰星）に同じ。秘藏抄「あかつきのたれとき星も山の端に、まだ出でなくに歸るせなかな。たれとさほしとは明星を云ふ也」廻國雜記「曉のたれとき ほしもきよすみの、うなばら遠くのぼる山かな」

たれぬの 垂布（名）垂れたる布。宇治拾遺「湯殿のたれぬのを解きおろして中略たれぬのにつつみたる窠をば」著聞三「何とは見えわかず、たれ布のやうなる物の打ちおほふと見えける程に」

たれびと 誰人（名）いかなる人。たれの人。なんびと。

たれまく 垂幕（名）垂れさげたる幕。

たれみそ 垂味噌（名）煮物に用ふる汁。味噌一升に水三升五合を合はせ、三升に煮つめ、袋に入れて滴らしたるもの。料理物語「垂味噌。赤味噌一升に水三升五合入れせんじ、三升ほどになりたる時、袋に入れたれ申し候也」

たれみみ 垂耳（名）耳たぶの垂れさがりたる耳。

たれむし 垂蒸（名）麻の布衾（ヲヒ）。若風俗「たれむしの數くぐりて、絹張りの障子引きあけて」

たれゆみぐさ （名）【植】こかきつばた（しへがまるだ）

ぬの白髭の上ゆ涙多利（ヲヒ）」宇鏡「鬚（須奈太利）」

たる 垂（自動ヨ）前條に同じ。「帶垂れながる」「水垂る」大鏡狂言佛詣「左へひつ通れば、荒藺が垂れてある」

たる 垂（他動ヨ）一垂らす。さぐ。ぶらさぐ。記二「まよがき濃にかき多禮（ヨ）逢はししをみな」武烈紀「大君のみ帶のしづはた結び陀鑒（ヲヒ）、誰れやし人もあひ思はなくに」宇治拾遺「深く恨みたるけしきにて、涙をたれて泣く」二つる。懸け釣る。三遣す。とどむ。「範を後世に垂る」四現はし示す。加ふ。源明「住吉の神、近き境ひを鎭め守り給ひ、誠に跡を垂れ給ふ神ならば助け給へと、多くの大願を立て給ふ」濱松「佛などの哀れみを垂れ給はんやうに」五そる（剃）に同じ。忌みていふ語。重井筒「あんまりよい月影に、額たれうと思うて」

たるかかみ 樽鏡（名）酒の空樽に入れ置き、酒氣にて澁味を除きたる柿の實。

たるがき 樽柿（名）樽の蓋。

たるさ 垂木（名）屋根の裏板又は木舞（マヒ）などを支へて、棟より樽先へ瓦（ヲヒ）す長き材。たりき。記「其室毎椽（ヲヒ）結著而」和名「宮殿（太微宮）、椽（太微宮）、桷（太微宮）、在二程旁一下垂也」榮雜「宮殿、十餘間の瓦ぶきの御堂あり、たるきのはしばしは金の色なり」樣・椽・桷・杣（和名）

たるざかた 樋形（名）【建築】片流（ヲヒ）又は兩流（ヲヒ）の屋根の端に一樋と平行して附けたる板。うでき（腕木）を見よ。

たるざしり 樋尻（名）えんばな（緣端）に同じ。

たるざわり 樋割（名）【建築】樋の割方、即ち、配置。樋と樋との間の割り方の廣狹によりて種種の名あり。廣き割り方をあばらわり、一箇所に二本づつ一組となるやうにしたるを吹寄割（ヲヒ）といふ類。

たるさ 忿（名）たるきさま。たるき度合。

だるさ 忿（名）だるきさま。だるき度合。

たるざかな 樽肴（名）酒樽と肴と。川中島合戰「三荷・三種の樽肴」

たるざけ 樽酒（名）木樽に入れたるままの酒。浮世風呂「酒は相かはらず樽酒だから、ちっとばかり迎へるがいい」

たるし 忿（形）たゆし（弛）に同じ。「かひたるし」「ひだるし」室町千疊敷「連れ三味線の手もたるく、本歌・投げ節・流行唄」

だるし 忿（形）前條に同じ。浦島年代記「拍子にかかって御恥しい長噺、顏がだるい」

たるだい 樽代（名）一樽を買ふ代金。二酒を買ふべき料金。贈物などにいふ。酒代。伊勢家諸禮式書「樽代披露之事」壽門松「其禮として目腐り金、樽代としてよこした」

だるとんのていりつ （英 Dalton's law）〔——定律〕（名）【理】しゃーる・の定律に同じ。

たるにんぎゃう 樽人形（名）酒宴の席などの餘興に、柄樽に衣裳を著せ、編笠をかぶらせ、人形にまねて使ひたるもの。嬉遊笑覽「沙金袋、かげうつせ人形樽の鏡餅」

たるぬぎ 樽拔（名）一樽の蓋を開くこと。二澁柿を新しき酒のあき樽にいれ、さはして澁味を去ること。又、其の柿の實。

たるぬぎがき 樽拔柿（名）樽拔にしたる柿の實。

たるひ 垂氷（名）雨雪などの、軒先などより滴りながら凍りて垂れ下りたるもの。つらら。枕三「風などのいたう吹きつれば、たるひのいみじうしだり中略水晶の簾などいはまほしきやうにて」源花鬘「朝日さす軒のたるひはとけながら、などかつらのむすぼほるらん」堀河百首冬「浪かくる岩まひまなくたるひして、氷とぢたる山川の水」かな氷越後しがま產地越後・隱岐氷（ヲヒ）產地信濃・たるひ（信濃）信州・信州はだれ近江・とろろ下野ぼうがね下野かなご伊勢ほんだら出羽物類品稱呼

たるひ 足日（名）物事の滿ち足る日。よき日。祝詞式「鎮魂祭」「八十日日波在二生毛一、今日日生日波足日（ヲヒ）」

たるひろひ 樽拾（名）酒店の小僧が、得意先より樽を集めあるくこと。又、その人。續俳家奇人談「雪の日やあれも人の子樽拾ひ」

たるぶね 樽船（名）酒・油等を積む大運送船。ひがき。

だるま 達磨（梵 Dharma）（名）一天竺の僧達磨の、赭衣を著て面壁・坐禪したるさまに似せて作りたる玩具。おきあがりこぼふし（起上小法師）を見よ。二ちどく。淫賣婦。

（諺）達磨の目を灰汁（ヲヒ）で洗ふ さっぱりとしたる譬へにいふ。世話盡「達磨の眼を灰汁で洗ふ」

だるまいんこ 達磨鸚哥（名）【動】鳥類中、攀木類の一種。鸚鵡の一種。

だるまがくし 達磨隱（名）昔時、葉子の一種。博遊笑覽

だるまかす （他動ヨ）だます。欺く。國語雜覽「大繼官物語「さしもかしこき萬子とは申せども、やがてたるまかされ」

だるまがへし 達磨返（名）女の髮の結ひ方の名。

（しへがまるだ）

だるまざく （名）【植】次條に同じ。

だるまさう （名）【植】ざぜんさう（地湧金蓮）の異名。

だるましゅう 達磨宗（名）一【達磨を宗祖とするよりいふ】佛語。ぜんしゅう（禪宗）の異稱。二新古今集の頃の和歌の姿をそしりていふ語。下文を見よ。無名秘抄「此の頃の人の歌のさま、二面に分かれたり、中頃の人の歌の體を執する人は、今の世の歌をばすずろごとのやうに思ひて、やや達磨宗などいふ異名を附けてそしりあざける、又この頃のやうを好む人は、中比の體をば俗に近し、見所なしときらふ」

だるまたう 達磨糖（名）安永頃、流行せし駄菓子の一種。圓きあるへいたう。

だるまだひ 達磨鯛（名）【動】きんときだひ（金時鯛）の異名。

だるまはがし 達磨剝（名）人の著て居る羽織を脫がせ取ること。又、其の盜賊。

だるまひあふぎ （名）【植】萬尾（バヒ）科、射干（ヲヒ）屬の草本。射干の一品種。丈低きもの。

たるまへさう （名）【植】玄參（ヲヒ）科、つりがねやなぎ屬の多年生草本。莖の高さ數寸。葉は平滑、長さ一寸乃至二寸五分、幅五分乃至八分許り、長橢圓形にして、基部に向かひて漸く細く、鋸齒あり。莖頂に三箇乃至九箇の花を簇生す。我が國、陸中國岩手山、島海山及北海道等に產す。いはぶくろ。

だるまをとぜ 達磨鱂（名）【動】魚類中、硬鱗類の一種。體の長さ四寸許り。頭大にして、兩眼の間廣く、口も亦甚だ斜めなり。脊は一般に淡褐色、頭頂及び鰭は白く、體側に二條の

（紫石蒲）の異名。

たれる　垂（自動下）たる（垂）の口語。

たれる　放（他動下）一放屁す。こく。

だれる　二脱糞す。

だれる（自動下）一たゆむ。たるむ。よわる。おとろふ。二興らすらぐ。

たれを　垂尾（名）たり尾（垂尾）に同じ。

だろう　一舵樓（名）舵（だ）の差圖する者の居る小高きところ。ふねのやぐら。杜甫詩「翻疑柁樓底、晚飯越中行」范成大詩「縱窗褰蓬席、輕上生倚柁樓」

たろ-しろ　太郎四郎（名）ばかもの（馬鹿者）をいふ語。浮世風呂「むごく太郎四郎とされるはい、可哀さうに太郎四郎とはばかもの事」

たろ-つぐ（名）【植】つぐ（桄榔子）の異名。

たろ-べゑ　太郎兵衛（名）事を爲して効果なき人を嘲りいふ語。「太郎兵衛の仕業」

たわ　撓（名）一山の頂上などの撓（たわ）みたるやうなる處。和名抄「山多和（たわ）」引「越御船、逃上行也」二枕などに壓（たわ）されて髮につきたる癖。宇津保物語「中中「ただおほとのどもりなば、御ぐしにたわ附きなんとす」順集「忘れずもおもほゆるかな朝な朝な、ねし黑髮のねくたれのたわ」

たわ　撓（名、副）たわむさま、しなふさまにいふ語。後撰夏「時わかずふれる雪かと見るまでに、瓦根もたわに咲ける卯の花」詞花冬「み山ぢに嵐やいたく吹きぬらん、あじろもたわに紅葉積もれり」散木集「露をおもみいとどたわなる萩がえに、心をさへもかくる今日かな」

たわい（名）一正體。思慮・分別。鎌田兵衛名所記「名所記「こな樣酒が過ぎると、寝所でたわいがない」二夭條の略。假名手本忠臣藏「御免候へ、たわいたわい」正體なし。二分狂言「たわいなく寝入る」三手ごたへなし。張合ひなし。弱くして取るに足らず。四とりとめなし。

たわい-なし（形）

たわけ-けみ　田別檢見（名）上野國高崎城附の村村に行はれたる一種の檢見。下文を見よ。地方凡例錄「上州之内、高崎城附村村檢見之法は、前前引付に而、田別檢見と唱へ、一二五之法四六之延と申し、餘國になき七合三勺脩、五公五民之仕方、至つ而强き取筒也」

たわけ-わする　忘（自動サ）（たは接頭）わする（忘）に同じ。萬二ぬば玉の其の夜の梅を手忘れて、折らずきにけり思ひしものを」

たわ-たわ　撓撓（副）たわみにたわむさまにいふ語。たわみしなふさま。萬二あしびきの山ぢも知らず、白かしの枝も多和多和（たわたわ）雪のふれれば」

たわみ　撓（名）たわむこと。たわむ度合。

たわむ　撓（自動四）一壓（たわ）されてまがる。しなふ。ゆがむ。源若菜下「花は中柳枝もたわむばかり咲き亂れたり」詞花春二「秋はみな思ふことなき萩の葉も、末たわむまで露はおきけり」類本宇鏡「剮屈曲也。又、太和平」二倦み疲る。よわる。たゆむ。萬二「手わやめの思ひ多和美（たわみ）てたもとほり、われはぞ戀ふる」源蜻「若き御心も亂れ給くも物し給はず」

たわむ　撓（他動下）たわます。たわむやうにす。宇治拾遺「走りかかりて蹴倒さんと足をいたくもたげたるを、此の衆は目をかけて、背をたわめてちがひければ、蹴はづして」

たわ-やか（副）たをやかに同じ。盛衰記「五成親上」諒闇の直衣、ことに内淨くたわやかにして」

たわや-かひな　手弱肘（名）たわやかなるかひな。たをやかなるかひな。記「ひはぼそ多和夜賀比那（たわやかひな）を、まかむとはあれはすれど」

たわやし　手弱（形）よわし。たよわし。萬三「岩と割るたぢからもがも、手弱寸（たわや）の古鄙めにしあれば、すべの知らなく」

たわや-め　手弱女（名）たわやき女。たよわき女。萬四「逢はむ日の形見にせよと、多和也女（たわや）の思ひ亂れて縫へる衣ぞ」

たわ-らは　手童（名）母の手に抱き育てらるる嬰兒。萬二「ふりにしおむなにしてや戀をだに、しぬびかねてむ多和良波（たわら）のごと」

たわわ　撓（副）（たわの重言、たわたわの約）たわむまで。とをを。古今秋「折りて見ば落ちぞしぬべき、秋萩の枝もたわわにおける白露」

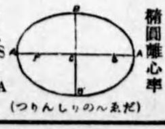
たわ-ね　田井（名）田に引く水をたたへたる所。又、田。

たわ-ね　田居（名）（ゐは添へ辭。古語）田。又、田の中。田の面。萬十「春霞たなびく田居（たわ）にいほりして、秋田刈るまで思はしむらく」同四「大君は神にしませば赤駒の腹ばふ田爲（たわ）を都となしつ」

たゐなか　田居中（名）田舍。田舍の中。

だゑん（名）一橢圓　楕圓（名）【數】圓の如き平面曲線にして、其の曲線内の二定點より其の曲線上の何れの點に至る距離の和も一定なる點の稱。其の二定點を焦點と云ひ、焦點を連結する徑を長徑、長徑の中點に於て之に直交する徑を短徑と云ふ。

だゑん　の　りしんりつ　橢圓離心率【數】橢圓の長軸の長さを以て焦點間の距離を除したる商。圖に於てAA′とBB′とを、それぞれに橢圓の長軸及び短軸とし、Cを其の交點、FとSとを焦點とするときは、CSをCAにて除したる商、或ひは$\sqrt{CA^2-CB^2}/CA$は離心率なり。



（つりんしりのんゑだ）

だゑん-けい　橢圓形（名）橢圓をなせる形。

だゑん-ともゑ　橢圓巴（名）紋所の名。

だゑん-びし　橢圓菱（名）紋所の名。

だゑん-りつ　橢圓率（名）【數】だゑんのりしんりつ（橢圓離心率）に同じ。だゑん（橢圓）の條を見よ。

たを　髢（名）（たわ（撓）の轉）たぼ（髢）に同じ。

たを（名）（たをりの略）たうげ（峠）をいふ、中國の方言。

たをさ　田長（名）田のぬし。古今春「いくばくの田をつくればか子規、しでのたをさを朝な朝な呼ぶ」

たをさ-どり　田長鳥（名）【動】ほとときす（子規）の異名。

たをさ-たを（副）たをやかに同じ。源夕顔「細やかに、たをたをとして」同浮舟「こめき、おほどかに、たをたをと見ゆれど」狭衣「さしぬきのすそまで、たをたをとあてになまめかしう著ない給へり」

たをめかし　撓（名）たをめかすこと。たぼめかし。

たをめかす　撓（他動四）たをめくやうにす。たわむやうにす。枕「惡しう開くれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ」

たをめく　撓（自動四）たわむやうなり。

たをやか　撓（副）たをたをしたるさまにいふ語。しなやか。しとやか。おだやか。たわやか。枕「萩はいと色深く、枝たをやかに咲きたるが」源若菜上「此の方のたをやかならましかばと見ゆかし」名義抄「嫋（たをやか）ナヨヤカ」同「蟬娟（たをやか）ナヨヤカ」

たをやぐ（自動四）たをやかなるさまなり。源若菜上「人がらのたをやぎたるに、つよき心を强ひて加へたれば」同花宴「女も若うたをやぎて、つよき心も知らぬなるべし」

たをやめ　手弱女（名）たわやめ（手弱女）に同じ。神代紀上「吾是男子、理當先唱、如何婦人（たをやめ）反先言乎」和名「婦人、日本紀云、手弱女人（たをやめ）」名義抄「女人（たをやめ）」

たをり（名）たわ（撓）に同じ。萬四「あしひきの多乎理（たをり）に、この見ゆる天の白雲」同四「あしひきの山の多乎里（たをり）にたつ雲を」嶺・寝・堺字鏡

たゐをる（自動四）折り廻る。萬四「なせの子やとりの岡ぢしなか太乎禮（たをり）、あをねしなくよ、いくつくまでに」

たゐをる　手折（他動四）手にて折る。折る。萬八「梅の花多乎利（たをり）かざして遊べども、あきたらぬ日は今日にしありけり」同十「秋の野に露おへる萩を多乎良（たをら）ずて、あたら盛りをすぐしてむかも」

たん　一丹（名）一あか。あか色。二辰砂。丹砂。三えんたん（鉛丹）の略。謠「舞鶴「身には赤き衣を著、顔には丹を塗り」四ねりぐすり。ねりやく。丹藥。

（諺）丹を藏するものは赤し　朱に雜はれば赤くなるに同じ。しゅ（朱）の條を見よ。

たん　一段　反（名）一古昔、六間の稱。宇治拾遺「二三段許り投げられて倒れ伏しにけり」平家十一「海の中一たんばかり打ち入れたりけれども、なほ扇のあはひは七段ばかりもありつらんとこそ見えたりけれ」二地積の名稱。古代は三百六十歩、桃山時代以後は三百歩の稱。仲勢國渡邊文書「武伊勢郡郡内足郡郡田畝屋敷、六尺三寸棹を以て、五間に六拾間三百歩を壹反に可致檢地事」同「一長六拾間、廣五間、此歩三百坪、壹反也」度量衡法第三段「三百歩」三普通一人分の衣服の料とする布帛。即ち、鯨尺にて二丈六尺乃至二丈八尺、幅九寸。絹物は三丈乃至三丈二尺。四帆の幅にて、三尺とす。枚。俗謠「三十五たんの帆をはり上げて、行くよ仙臺石の卷」端。

たん　一炭（名）一すみ。氷・炭相容れず。二せきたん（石炭）の略。「炭價」

たん　一端（名）一はし。こぐち。くち。きさし。はじめ。さき。孟子公孫丑「惻隱之心、仁之端也」二たん（段）に同じ。持統紀「布二十端」四時祭式「曝布一端八尺」

たん　一膽（名）一きも。い。肝臟。「膽、斗の如し」和漢三才圖會十一「膽」。足少陽膽和名抄「多」。二きもだま。たましひ。膽力。勇氣。氣力。蜀志趙雲「子龍一身都是膽也」

たん　が　すわる　膽坐　物事に動ぜぬやうになる。大膽になる。

たん　たい　に　こころ　せう　膽大心小　大膽にして細心。

たん　と　の　ごとし　膽如斗　きもだまの極めて大いなるにいふ。蜀志「膽如斗大」

たん　を　うばふ　奪膽　驚かして氣を失はしむ。驚かして意氣を沮喪せしむ。

たん　を　ぬる　練膽　膽力を養ふ。

（諺）膽は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲す　大膽にして細心なることを望む。遜思逸文「膽欲大、心欲小」

たん　一淡（名）一うすきこと。あはきこと。「濃・淡」二さっぱりとしてゐること。淡泊。莊子山木「君子之交、淡如水」禮記表記「君子接如水、小人接如醴、君子淡以成、小人甘以壞」三たんぐわ（淡畫）の略。山樵記「淡、藤原行安」新猿樂記「六郎冠者鱒所長也、淡畫・彩色・淡作繪・丹調中務等上手也」

たん　一痰（名）氣管より出づる粘液。又、其の粘液になやむ病。狂言「痰を切らいて、御辭の出で候」丹波與作「姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて」

たん　一毯（名）五色の毛織の敷物。けむしろ。段通。造酒司式「造酒雜式」八尺毯二領」和名「毯、薄勘切韻云、毯氈類名毛席、以五色絲爲之」伊呂波字類「毯」毛部」白居易詩「紅茵織作披香殿上毯」

たん　一短（名）一みじかきこと。（長の對）戰國策「今秦地、絕長續短、方數千里」二缺點。弱點。短所。史記「武帝」丞相短」三足らぬこと。あさきこと。太平記「甘六上杉鳥」才短にして、官位人よりも高からん事を望み」

たん　を　すて　ちゃう　を　とる　舍短取長　短所をすてて長所をとる。是非をかんがへて取捨す。漢書「禽」短取長、則可」以通萬方之略」矣」

たん　一坦（名）一たひらかなること。平坦。二「坦、砥の如し」三支那にて重量の單位。百斤にして、我が國の十六貫百三十匁に當たる。

たん　一獺　嘆（名）一なげくこと。なげき。うめき。歎息。呻吟。二いたく ほ行ること。歎美。歎稱。稱美。

たん　一單（名）一ひとへ。（複の對）吳美詩「江南霜雪重、相如衣服單」高適詩「不知邊地別、祇許容衣單」二ひとり。單獨。三ひとつ。單一。四こみいらぬこと。複雜又は多端ならぬこと。簡單。

たん　一擔（助數）一人にてになふべき分量の荷物を數ふるにいふ語。荷。大膳司式「蔬子一擔」木工寮式「白土赤土各三斗、沙二斗五升並爲一擔」若應准積者、大六十斤爲一擔」

だん　一駄（名）だ（駄）の訛り。

だん　一男（名）一をとこ。男子。丈夫。易經「乾道成男、坤道成女」二むすこ。せがれ。易經「震一索而得男、故謂之長男」三わかもの。壯丁。四五等爵の最下級。華族令第三「爵を分て公侯伯子男の五等とす」五支那の古代に於ける諸侯の五等爵の最下級。禮記「王制」王者之制祿爵「公侯伯子男、凡五等」

だん　一段（名）一きざはし。きだ。級。階段。二石の段。三しな。品等。階級。「段が違ふ」四わかち。區分。五柔術・圍碁・將棋などにて、或る程度以上に達したるものの品等を數ふるにいふ語。初段より九段に至る。六文章中の大なるきれめ。きり。きれめ。段落。七醫條。かど。くだり。「此の段」「右の段」八ところ。場合。狂言「彼れ是れ致いて無音の段は、おこうに免ぜられて下されい」曾根崎心中「はて、輕口の段かいの」

だん　きり　うつ　段切打　芝居にて狂言の一段が切りになる。別れをうつ。

だん　一談（名）はなし。ものがたり。談話。漢書「東方朔傳」「談何容易」

だん　一緞（名）一からくみにしたる紐。即ち、捻りたる絲にて眞田打ちの如く組み、色絲にて種種の模樣を刺繍にし

たるもの。宇津保(ウツホ)上「ゆひ緒にはだんの組して結ひて」源(ゲン)氏古今和歌集(ヒ)玉の軸「だんのからくみの紐など、なまめかしうて」〔三〕平緒の種類にいふ語。紫綾・青綾・蘇芳綾など色によりて種種の稱あり。ひらを〈平緒〉を見よ。玉葉(ギヨクヨウ)「其色任意裝束中(ヒ)同螺鈿(ラデン)劒、共付平緒」其色任意大(ヒ)鏡(ヒ)「家(ヒ)鏡」雅亮裝束抄「むらさきだんのひらをならには、むらさきかはにてしかへよ」〔四〕練貫の一種。肩より裾まで、横筋を一寸餘りの幅に織りたるもの。地は黒く、筋は白し。貞丈雜記「女房内内記「十二月何にても白くれなゐのだんの袷は、裏も表の如く染めわけ候」

だん 〔暖・煖〕(名) あたたかなること。溫暖。暖氣。禮記(ライキ)玉藻「凡居民、必因天地寒・煖・燥・濕」

だん を とる 取煖 身體のあたたまるやうにす。からだをあたたむ。

だん 〔旦〕(名) だんな(旦那)の略。浮世風呂(フロ)「わっちらが旦とやれたとこと」

だん 〔壇〕(名) 〔一〕土を盛りあげて築きたる祭場又は式場。論語(ロンゴ)雍也(ヨウヤ)「壇に五色の幣帛を立て、玉藻に御幣を持たせつつ、肝膽を碎き祈りしかば」史記(シキ)封禪(フウゼン)書「立五帝壇」漢書(カンショ)高祖(コウソ)紀「設壇具」禮記(レイキ)拜(ハイ)韓信(カンシン)爲大將」だんこぼちて歸り入らん事のめいぼくなく」〔二〕他より一段高くしたる場所。源氏(ゲンジ)「他と區別ある特殊の社會なることを表はす語。「文壇」「詩壇」

だん 〔團〕(名) 〔一〕まるきこと。まんまる。崔湜詩「玉寨朔風起、金河秋月團」〔二〕あつまり。かたまり。集合。傳燈錄(デントウロク)「疑團猶在」〔三〕くみ。なかま。黨。團體。

だん 〔斷〕 〔一〕たつこと。たちきること。易經(エキキヤウ)繫辭(ケイジ)「其利斷金」〔二〕おしきりて事をなすこと。斷行。決行。〔三〕さばき。きりもり。裁決。決定。判斷。易經(エキキヤウ)「以斷天下之疑」圓壓く執りて變ぜざること。又、專一なること。易經(エキキヤウ)繫辭(ケイジ)「介如石焉、寧用終日」斷可識矣」

だん 〔段〕(助數) 兵家にて、身方の陣立を數ふる語。

だんあい 〔淡靄〕(名) ほんのりとかかれるかすみ。うすがすみ。うすきもや。陸游詩「淡靄輕鷗入夏初」

だんあい 〔暖靄〕(名) あたたかなる春のかすみ。

だんあく 〔丹堊・丹雘〕(名) あかきかべ土。又、あかく塗りたる壁。書經(シキケイ)「若作梓材、既勤樸斲、惟其塗丹雘」蘇轍文「臺觀飛湧、丹堊炳煥」

だんあく 〔斷惡〕 惡業を斷じ除くこと。

だんあく しぜん 〔斷惡修善〕 惡業を斷ち、善業を修めて善道に入ること。榮華(エイクワ)玉葉「見我心者發菩提心」聞我名者斷惡修善」勝軍明王四十八使者祕密成就儀軌「明王四弘願云、見我身者發菩提心」聞我名者斷惡修善」聞我說者得大智慧」知我心者即成佛」

だんあつ 〔單一閥〕(名) 太歲卯の方にある年の稱。うどし。平治(ヘイヂ)物語(モノガタリ)「三人共に單閥の年の人なり」淮南子(エナンシ)「單閥之歲」

だんあつ 〔彈壓〕 罪惡をただしおさふること。唐書(トウショ)郭(カクヒ)子儀(シギ)「先、郡邑之治、惠愛爲本」

だんあて 〔反當〕(名) 一反に就き何程と田租を割り當てて徵收すること。地方要集錄(ヨウシフロク)「反に何升取り、郷帳には反當を記すなり」

だんあん 〔斷案〕(名) 〔一〕終結の判斷。斷定。斷決。決論。〔二〕英 Conclusion) 【論】三段論法に於て、前提より引き出だされたる斷定。結論。(前提の對)

だんい 〔單衣〕(名) 〔一〕ひとへの著物。ひとへもの。ひとへ。後漢書(ゴカンシヨ)輿服(ヨフク)志「組父閎、喜著越布單衣、光武見而好之」〔二〕一枚の衣服。

だんい 〔短衣〕(名) 丈のみじかき衣裳。史記(シキ)張耳(チヤウジ)傳「短衣楚製」

だんい 〔坦夷〕 たひらかなること。高低なきこと。平坦。平夷。韓愈文「箕山坦而夷」

だんい 〔暖衣・煖衣〕(名) あたたかき衣服のかさねぎ。又、あたたかき衣服。孟子(モウシ)公孫丑(コウソンチウ)「人之有道也、飽食暖衣、逸居而無教、則近於禽獸」戰國策(センゴクサク)「力田疾作、不得煖衣餘食」

だんいつ 〔單一〕 〔一〕ひとり。ひとつ。ひとへ。〔二〕複雜又は多端ならざること。〔三〕それのみにて、他にまじれるものなきこと。單純。

だんいつ-がぶりよく 〔單一合力〕(英 Single supply of many forces. 獨 Einziger Beitrag der vielen Kräfte) (名) 【經】合力の一。多數の人の力を、同時に同一の事業に供給するもの。

だんいつ-かんせつがはせ 單一閒接爲替(英 Simple arbitration of exchange) (名) 【商】たんいつさいていがはせ(單一裁定爲替)に同じ。

だんいつ-きふふ 〔單一給付〕(名) 【法】きふふ(給付)を見よ。

だんいつ-くみあひ 單一組合(英 Sole partner) (名) 組合の一。組合の名にて種種の事業を經營し、其の計算も危險も亦組合にて負擔するもの。

だんいつ-けいざい 〔單一經濟〕(獨 Einzelwirtschaft oder Individualwirtschaft) (名) 【經】一人一家の經濟欲望を充たすを目的として營む經濟の稱。(共同經濟の對)

だんいつ-げんうんどう 〔單一弦運動〕(名) 【理】等遠の圓運動をなせる點を、其の直徑上に投射せるとき、其の直徑上に生ずる振動。長き絲の端に錘を釣り下げ、絲の長さに比して振幅の極めて小なる振動をなさしむるときの錘の運動の如き是れなり。

だんいつ-こく 〔單一國〕(英 Single state. 獨 Einfacher Staat) (名) 【法】國際法上にても國内法上にても、一國として獨立に生存する國家。即ち、我が國・英吉利國・佛蘭西國・伊太利國の類。單獨國。單一國家。(複雜國の對)

だんいつ-こくか 〔單一國家〕(英 Single state. 獨 Einfacher Staat) (名) 【法】前條に同じ。

だんいつ-さいていがはせ 單一裁定爲替(英 Simple arbitration of exchange) (名) 【商】たいていがはせ(裁定爲替)を見よ。

だんいつ-はぶくせい 〔單一法貨制〕(名) 【經】じゅんぽんゐせい(純本位制)に同じ。

だんいつ-ぶつ 〔單一物〕(名) 其の物一つにて一體をなすもの。ただ其のもののみにて一の名稱を有するもの。

だんいつ-ぶりかへ 單一振替(名) 簿記にて、一取引を單に一回のみ振り替ふることの稱。(重複振替の對)

だんいつ-ほんゐせい 〔單一本位制〕(英 Single legal-tender system) (名) 【經】じゅんぽんゐせい(純本位制)に同じ。(合本位制の對)

だん-いん 〔單音〕(名) なんおん(單音)に同じ。

だん-いん 〔痰飲〕(名) 痰の類りに出て、氣の塞ぐ病氣。痰積。牛山活套「痰

飲。痰飲の病は明らめ難し」療治夜話「痰熱風邪に感冒し、宿本の痰飲と心氣病と共に發動し」

だんう 〔彈雨〕(名) 彈丸が雨のふる如く烈しく飛びくること。「砲烟彈雨」

だんうじやう 〔單羽狀〕(名) 【植】植物學上の用語。只一回のみ羽狀をなせる形。

だんうん 〔淡雲〕(名) うすきくも。うすぐも。

だんうん 〔暖雲〕(名) あたたかきくも。雜體詩「吸雲傳瓊柳垂條」

だんうん 〔斷雲〕(名) きれぎれのくも。ちぎれちぎれのくも。朱超詩「孤生如斷雲」

だんえう 〔單徭〕(名) 一日限りの夫役。三代實錄(ジツロク)「事力立丁爲民兼役、點首不堪其苦、流離他境、雖加撫育、去多歸少、望請准畿内例、差充單丁」

だんえき 〔丹液〕(名) 不老不死の藥。長生の藥。仙藥。神仙傳(シンセンデン)「葛元(カツゲン)受丹液仙經」

だんえき 〔痰液〕(名) たん(痰)に同じ。

だんえき 〔膽液〕(名) たんじふ(膽汁)に同じ。

たんえふ 〔單葉〕(名) 〔一〕【植】植物學上の用語。分裂せざる葉。或ひは分裂するも、全裂するに至らざる葉。姚途文(ヤウトブン)「皆單葉參差」〔二〕すべて、二枚以上ならざるものの稱。「單葉の飛行機」

たんえん 〔淡烟〕(名) うすけむり。うすもや。

だんえん 〔斷烟〕(名) ちぎれちぎれのけむり。きれぎれのもや。賈島詩「斷烟生石松」

だんえん 〔暖烟〕(名) あたたかきけむり。あたたかきもや。吳融詩「煖烟輕淡草霏霏」

だんおち 〔段落〕(名) 段階の數等下なること。遠く及ばざること。

だんおん 〔短音〕(名) みじかき音。(長音の對)

だんおん 〔單音〕(名) 其のもののみにて一音をなす音。即ち、五十音圖のあ・い・う・え・おなどの音。(複音・綴音の對) 漢字三音考(ダイコウ)「單音とはあいう・かきく等の如く、單にして餘響なき音にして」

だんおん 〔斷音〕(名) 子音の一。氣息が發音と共に斷絶するもの。破裂音と促音とに分かつ。各條を見よ。(續音の對)

だんか 〔短歌〕(名) 〔一〕三十一文字の歌。みじかうた。(長歌の對) 庭訓往來(テイキンオウライ)「和歌雜仰(ヒ)人丸、赤人之古風、未究長歌・短歌・旋頭・混本・折句・香冠之風情」謠曲(ウタヒ)「長歌・短歌・旋頭歌・混本の類ひ是れなり」〔二〕中世以後、長歌(ナガウタ)の誤稱。古今(コキン)「短歌」俊頼口傳「短歌といへる物あり、それはいつ文字なる文字とつづけて、わがいはまほしき事のある限りは、いくらとも定めずいひつづけて、はてになくもじを例の歌のやうに二つつづくるなり」

だんか 〔丹霞〕(名) 〔一〕日の旁に立つあかき雲氣。江淹詩「丹霞蔽陽景」〔二〕名香の名。質は伽羅(キヤラ)、古めかしく閑なりと。(名香日錄)

だんか 〔單舸〕(名) はしけ。こぶね。蟬蛻(センエイ)「耶律楚材詩「兩岸清風單舸穩、滿江明月一釣沉」三國志(サンゴクシ)江表傳(コウヒヤウデン)「單舸往見瑜」

たんか 〔單價〕(英 Simple price; Unit price) (名) 單位の價格。

たんか 〔擔架〕(名) 〔一〕病者・負傷者などを載せて運搬する具。竹にて棍を作り、これにづつく等を張りたるもの。〔二〕といた(戸板)に同じ。日本俗語(ニホンゾクゴ)

たんか 〔擔荷〕 になふこと。又、になふ荷物。管子(クワンシ)「負任擔荷、服牛輅馬、以周四方」

たんが 〔端雅〕 ただしくみやびなること。晉書(シンシヨ)「邀委性端雅、勤行勵學、博涉多聞」

だんか 〔檀家〕(名) 其の寺院に附屬する檀那の家。だんけ。

たんがい 〔歎慨〕 いたくなげきかなしむこと。慨嘆。史記(シキ)屈原賈生傳(クツゲンカセイデン)「曾唫恆悲兮、永歎慨兮」

だんかい 〔段階〕(名) 〔一〕だんばしご。きだはし。だん。きだ。階段。〔二〕しなくらゐの差等。〔三〕順序。等級。階級。等次。順次。

だんがい 〔斷崖〕(名) 切りたちたる如くにけはしく嶮えたるがけ。きりぎし。がけ。斷岸。周賀詩「斷崖會向壁中禪」

だんがい 〔彈劾〕 罪過をしらべあばくこと。罪狀をあばき訴ふること。北史(ホクシ)魏(ギ)「南臺將加彈劾」

だんがい-じやうそうあん 〔彈劾上奏案〕(名) 議會が政府當局者を彈劾して上奏する議案。

だんがい-しゆぎ 〔彈劾主義〕(名) 【法】刑事訴訟の手續に關する主義の一。裁判所が、「起訴を待ちて始めて犯罪人を逮捕・審理・裁判するもの。(糾問主義の對)

たんかい-とう 〔探海燈〕(名) 孤光電燈の一。燭力大なるものを用ひ、反射鏡及びれんずにより光の分布を整調す。燈臺及び軍艦に使用す。さーちらいと。

たんかい-はふ 〔探海法〕(名) 軍事上の語。爆發物を附けたる小さき錨に索を附けて水中を曳き行き、沈設水雷の電纜を拘捉し、且つ爆發物を發火せしめてこれを切ること。

たんかう 〔炭坑〕(名) せきたんかう(石炭坑)の略。

たんかう 〔淡交〕(名) あっさりとしたる交際。餘り馴れ馴れしからぬつきあひ。莊子(シウシ)「君子之交、淡如水」路賓王詩「終當揖上蔡屬、憲淡交人」

たんかう 〔單行〕 〔一〕單獨の旅行。ひとりにてゆくこと。ひとりたび。後漢書(ゴカンシヨ)李郃(リカフ)「分遣使者、皆微服單行」〔二〕ただ其のもののみを別に發行すること。〔三〕唯だ一回の行爲、又は單獨にて行はるる事物を表はす語。「單行犯」「單行法」「單行律」

たんかう 〔端行〕 端正なる行爲又は歩行。禮記(ライキ)「端行頭視如矢」

だんかう 〔男校〕(名) 男生徒のみを教授する學校。(女校の對)

だんかう 〔煖坑〕(名) 土牀の下に爐火を通じ、席を暖むる裝置。舊唐書(キウトウシヨ)冬月皆作長坑、下燃爐火、以取煖」通俗編「此蓋煖坑也、則中華已自北魏前有之」

だんかう 〔暖香〕(名) あたたかき薫香。雲仙雜記(ウンセンザツキ)「盛冬若客至、則然薪火、暖香一炷」

だんかう 〔檀香〕(名) 香の名。せんだん(栴檀)に同じ。本草(ホンザウ)「檀香有數種、黃白紫之異」

だんかう 〔斷港〕(名) かけはなれたる港。韓愈文(カンユブン)「猶就斷港絕潢以窺、至於海也」

だん-かう 〔斷行〕 決斷して事を行ふこと。おしきって行ふこと。決行。史記(シキ)酷吏傳(コクリデン)「斷而敢行、鬼神避之、後有成功」

だん-かう 一斷交　交際をたつこと。絶交。

たんかう-しき 一單項式 (名)【數】ただ一つの項より成る式。例へば a、$5b$、等の如し。

だん-かうばい (名)【植】樟科、鈎樟(カウヂ)の異名。葉は互生、廣楕圓形、又は卵狀圓形にして往往三裂し、裏面に淡褐色の長き毛茸を生ず。二三月頃、葉に先だちて黃色の小花を開き、圍繖花序を綴る。果實は六七分の柄を有する球形果なり。我が國、山地に自生す。あかぢしや。いはづさ。うこんばな。

たんかうはぶ 一單行法 (名)【法】單一なる事項のために特に設けたる法律。單行律。

たんかうはん 一單行犯 (名)【法】運犯に對して、一回の所爲のみにて成立すべき性質の犯罪の稱。

たんかうほん 一單行本 (名) 叢書などの中に編入せられたるものに對して單獨に刊行せられたる本の稱。

たんかうりつ 一單行律 (名)【法】たんかうはぶ(單行法)に同じ。

たんかーかう 一短歌行 (名) 俳諧の語。二十四句を以て一聯とするもの。俳諧獨樂古今、短歌行。表四句・裏八句(初句月、七句目花、表八句七句目月、裏四句三句目月)

だんがきかんばん 段書看板 (名) 大阪の劇場にて、大序より大切までの筋の有樣を繪又は文字にかきて、其の櫓の左右兩脇に掲ぐる看板。段看板。

たんかく 一蛋殼 (名) たまごのから。

たんかく 一端慤 編正にして誠實なること。淮南子(訓)「其民樸直端慤」

たんーがく (名)【動】あまがへる(雨蛙)

だん-かく 一談客 (名)【國】 ㊀話し相手。晉書(謝鯤傳)「與王澤並爲談客」 ㊁話しずきの人。

だん-かた 檀方　旦方 (名) 丈の短き布子。だんぱう。檀家。檀徒。

たん-かつ 一短褐 (名) 太平記(巻十一金剛山)「短褐に貌を窶して、緣を尋ねし旅人の縛捕て死せしは、誰が親也」 韓非子(五蠹)「短褐不完者、不待文繡」

だん-かつ 一斷割　きりさくこと。たちわること。太平記(十四、新田義貞)「虽望請、乾臨明照、中正、加斷割於昆吾劍、可令誅罰尊氏・直義以下之逆黨等之由、下賜宣旨」 書經(大禹謨)「金能斷割、木能興作」

だんかつ のけい 罪人の身體を斷割する刑。盛衰記(十三、義貞)「猥取斷割之刑所、惡滅三族」

たん-かひ 淡貝 (名)【動】からすがひ(烏貝)の異名。

だん-がふ 一談合　(かたりあふに當てたる字の音讀) 談じ合ふこと。かたらひ。はなしあひ。評議。相談。保元(新院御所)「近習の人人に、いかにせんずるぞと召問ふ。近習の人人、常に御談合あり」 東鑑(五、文治元年十月三日)「其間事、令談合左馬頭給」

だんがふ の はしら 談合柱　だんがふばしら(談合柱)に同じ。清水物語「すぐなる師匠こそ、談合の柱なるべけれ」

だんがふ-しようしよ 一談合證書 (英 Deed of arrangement) (名)【商】破產に先だちて、債權者の團體と債務者とが一致して、債務者の負債を更改する契約證書。

だんがふ-づく 談合壺 (名、副) 何もかも談合の上にてすること。さうだんづく。一代女「愛が談合づく、女の好し惡しはともあれかし、心立ての善きと今の間に戀の叶ふが御德」

だんかふばしら 談合柱 (名) 談合の相手としてたよるもの。相談相手。寶藏「戀路の談合柱」

たん-がら 丹殼 (名) 染料の一種。交趾より舶來する丹殼樹の皮。內面は褐色にて外面は灰色を帶ぶ。其の煮汁に木綿又は絹を漬し、絞りて石灰水に通ずれば赤茶色となる。御當家令條(十六、織物類)「たんがら」 紅樹皮。

たん-がら (名)【植】たがらし(石龍芮)の異名。

たん-かん 一單簡　かんたん(簡單)に同じ。

たん-かん 一單眼 (名)【動】昆蟲及び其の幼蟲又は蜘蛛等に見る小さき眼。構造、複眼よりは甚だ簡單なり。高等動物の眼球と同じく、物像は內部の網膜上に倒まに寫る。其の性質は遠視に適せずといふ。

たん-がん 一赧顏　はぢいりて顏を赤くすること。赤面。

だん-かん 一男監 (名) 男囚を拘禁する監獄。女監の對。(監獄法(第三))「監獄に男監及び女監を設け之を分隔す」

だん-かん 一斷簡 (名) きれぎれになりたる書きもの。斷編。李紳詩「故篋殘深閉斷簡、秋堂月曙掩遺題」

だん-がん 一斷岸 (名) 切りたちたる如きけはしききし。きりぎし。がけ。斷崖。譚(月)「乘り越え乘り越え、斷岸に寄せつけて、をめき叫んで攻めたりけり」 鮑照文「絳若斷岸、蘊似長雲」

たんかん-えいさう 一探竿影草 (名) 漁具の一種。探竿は鵜の羽を束ねて竿頭につけ、水中を探りて魚を一處に追ひ集め、網にてすくひとるもの。影草は刈りたる草を水に浸し、魚の其の影に集まり寄るをすくひとるもの。太平記(廿八、高崎)「探竿影草に身を隱し、鼓が崎の切岸の下、岩尾の陰にぞ臥したりける」 人天眼目註「探竿者漁具也、東(韓羽)探水中、葉群魚於一處、然後以網漉之謂也、影草刈草焚水中、則群魚潛影、然後以網漉之」

だん-かんばん 一段看板 (名) だんかきかんばん(段書看板)に同じ。

たん-ぎ 一單騎 (名) ㊀ただ一人馬にのり行くこと。後漢書(馬援傳)「異部大人、抄取其外家牛羊、檀石槐單騎追擊之、所向無前、悉還得所亡者」 ㊁一人の騎者。一人の騎兵。一騎。隻騎。

たん-ぎ 一膽氣 (名) 物事に動ぜざる氣力。敢爲の意氣。きもだましひ。膽力。膽勇。勇氣。晉書(周處)「大軍卒至、奪其膽氣」 杜甫詩「將軍膽氣雄」

たん-ぎ 一短期 (名) みじかき期間。みじかき期限。わづかのま。刑法(第十條)「長期若くは多額及び短期若くは寡額の同しき同種の刑」

たん-ぎ 一短暑 (名) 短きひかげ。短き日。短日。潘岳文「何微陽之短暑、覺涼夜之方永」

たん-ぎ 一丹祈　丹誠をこめて祈ること。盛衰記(廿九、三條殿)「若酬丹祈、感應速通者、上件大願無怠慢可果遂也」

たんぎ 一憚忌　きたん(忌憚)に同じ。

たんぎ 一單記　㊀箇箇別別に記載すること。㊁ただ其れのみを記載すること。

たん-き 一短氣　きみじかなること。きばや。せっかち。性急。短慮。運歩色葉「短氣」 狂言(河原市)「それは短氣な、打ち割らうよりは、先づ飲ましませ」 王義之文「當今人物睥睨、如此、令人短氣」

(誹)短氣は損氣　短氣は損害を招く基となること。短氣は功を成さざること。冥途飛脚(上)「短氣は損氣の忠兵衛(中)」 懷中の三百兩・五十兩、引き抜いて面へぶちつけ存分言ひ」

(誹)短氣は未練　次條の略。

(誹)短氣は未練のもと　短氣に事を決行せば、後悔して未練の振舞をなす基となる。和歌民のかまど「短氣は未練のもと」 門出八島(二)「短氣は未練の始めと知れ、君に不忠存ずるな、傍輩達に慮外をすな」

(誹)短氣は身を亡ぼす腹切刀　短氣は自滅を招くものなることを、腹切刀に譬へたるもの

(誹)短氣も我れ、後悔も我れ　短氣を起こすも、後日に其れを悔ゆるも、皆己れ自身より出でたる咎なること。

たん-ぎ 一赧愧　顏を赤くして愧ぢ入ること。世說(雅量)「人言鬼可憎、果然、鬼赧愧而退」

だん-き 一暖氣　煖氣 (名) ㊀あたたかき氣候。禮記(月令)「行夏令、則乃大旱、煖氣早來」 ㊁あたたかきけはひ。あたたかみ。張華詩「車衾無暖氣、挾纊如懷氷」

だん-き 一彈機 (名) はじき。ばね。

だんき の いましめ 斷機　はた絲を斷つこと。孟子が學業半ばにして師の許より歸りたる時、其の母偶ま機(ハタ)を織りたりしが、刀にて機の絲を中斷し、學成らずして歸るは恰もこの機の如しとて、いたく孟子を教戒せしといふ故事。斷機の教へ。劉向文列(傳)「孟子稍長、就學而歸、孟母方績、問曰、學何所至與。孟子曰自若也。母以刀斷其織、曰、子之廢學、若吾斷斯織矣。孟子懼、旦夕勤學」

だんき の をしへ 斷機教　前條に同じ。

だん-ぎ 一彈碁 (名) 遊戲の一種。中高の盤の兩側に、雙方各六箇若しくは八箇の黑白の碁子を並べ、指もて互ひに彈(ハジ)きて、相手の碁子に中たれば其の碁子を取り、中たらざれば相手に取らる。かくて碁子の早く盡きたる方を負けとす。たぎ。和名抄(世說云、彈碁(ハジキ)名、始自魏宮、文帝於此伎、亦好矣)、後漢書(馬融傳)「能挽滿・彈棊・格五・六博・蹴鞠・意錢之戲」

だんぎ の ばん 彈碁盤　彈碁に用ふる中高の盤。東宮年中行事(四月)「春宮の殿上には、だんぎのばんを置かざるなり」

だん-ぎ 一團喜 (名) くわんぎだん(歡喜團)に同じ。和名抄「歡喜團(ハ名、クワンギダン)」

だん-ぎ 一談義　㊀事理をとききかすること。寧義をとくこと。太平記(二、玄蕃)「談義飲酒、喧呼不已」 ㊁說法。說教。徒然草「盛親僧都(中略)談義の座にても」 伊呂波字類「談義」 ㊂意見すること。こごと。訓戒。

(誹)談義・說法するは出家の生計　出家は談義・說法にて糊口す。

(誹)談義の場の媳そしり　慈悲の說法を聞きながら、媳の惡口をすること。矛盾なる行爲にいふ語。

だん-ぎ 一談議　㊀はなしあふこと。相談。談合。盛衰記(四、島々)「日比談議申し侍りつる事、大將軍には一向に憑み奉る」 晉書(王羲之傳)「嘗與客談議」 ㊁前條に同じ。盛衰記(八、法皇三)「佛の功能を知り聖教の談議する僧法もなかりしかば、三寶を供發し佛教を隨喜せず」

たん-きう 一探究　事理を深くさぐりきはむること。研究。元行冲文(雜)「雖存探究、咨謀群所」

たん-きう 一探求　さぐりもとむること。探索。孫賚別傳「且於探求、爲廣」

だん-きう 一段丘 (名)【地】河岸・海岸に於て、低き臺地の、階段狀に二三段打ちつづきて河又は海に向かひ、次第に低下せるもの。河水又は海水の水準が數回急激に降下せし爲めに生ぜしなり。

たんきうてき-きようみ 一探究的興味 (名) すゐりてきようみ(推理的興味)に同じ。

たんき-かしつけ 一短期貸附 (名) 返濟期限の短き貸附金。短期貸附金。(長期貸附の對)

たんき-かしつけきん 短期貸附金 (名) 前條に同じ。

だん-きく 一段菊 (名) 一段一段に花をつけたる菊。

だん-きく (名)【植】馬鞭草(ウマヅラ)科、蔓(カヤ)屬の多年生草本。莖の高さ三四尺。葉は對生、卵形にして尖り、鋸齒を有す。夏日、枝梢上に青紫色の小花を簇生す。觀賞用として庭園に栽培せらる。らんぎく。蘭草。

たんき-しんよう 一短期信用 (名)【經】信用の一。信用期間の短きもの。(長期信用の對)

たんき-せいめいほけん 一短期生命保險 (名)【商】生命保險の一。一定の期限を定め、其の期限間のみの生命を保險するもの。定期生命保險。

だんぎ-そう 一談義僧 (名) 談義する僧。說法する僧。

たんき-たかへきん 短期立替金 (英 Short loan) (名) 返濟期限の短き立替金。

たんき-てがた 短期手形 (英 Short dated bill; Short bill) (名)【商】支拂期限の短き手形。即ち、振出日附後、通例十日以內に支拂はるる手形。一覽拂手形ノ一覽後三日拂手形の如きこれなり。(長期手形の對)

たんき-とうへう 一單記投票 (名)【法】投票方法の一。一枚の投票用紙に一名の被選人のみを記載するもの。

だんぎ-ば 談義場 (名) 談義する場所。說法する所。說教所。

だんぎ-ばう 一談議坊 (名) 次條に同じ。

だんぎ-ばうず 一談議坊主 (名) ㊀談義をなす僧。說教師。 ㊁(動)めだかの異名。

たん-きふ 一單級 (名) ㊀ただ一つの階級。 ㊁たんきふせい(單級制)の略。

たんきふがくかう 一單級學校 (名) たんきふせいがくかう(單級小學校)に同じ。(多級學校の對)

たんきふ-せい 一單級制 (名) ㊀一事物につき單に一箇の等級を設くる制度。 ㊁學童全般に付き、ただ一箇の學級のみを設くる制度。單級。(多級制の對)

たんきふ-せうがくかう 一單級小學校 (英 Ungraded school. 獨 Einklassige Volksschule) (名) 全校の兒童を一學級に編制する小學校。(多級小學校の對) 小學校令施行規則(第三十九條)「全校兒童を一學級に編制する學校を單級小學校とし二學級以上に編制する學校を多級小學校とす」

たんきふ-はふ 一單級法 (英 Ungraded system) (名) 學力不同の學生を一級に編制して教授する法。(多級法の對)

たんき-ほけん 一短期保險 (英 Short period insurance) (名)【商】保險の一。一定の期限を定め、其の期限間のみの生命又は火災などを保險するもの。

だんぎ-まわり 談義詣 (名) 寺院に参詣して説法を聴聞すること。持統天皇歌軍法「談義参りに穿かせます紫の革足袋一足、跳へて過ぜたい」浮世親仁形気「よろづの事を御子息にまかせて、ちとだんぎまわりでもなされ」

たんぎ-むさめいどうへう 名投票 (名)【法】無記名の単記投票。即ち、選挙人の氏名を記載せざる単記投票。

たんぎ-もの 短氣者 (名) 短氣なる人。きみじかなる人。唐船噺今國姓爺「短氣者、また事を出かしはせずか、何故遅きと氣遣ふ迄へ」

たんぎやく 一短脚 (名) みじかきあし。朗詠「床嫌短脚蒙塵閣、壁厭空心鼠孔穿」

たんぎやく 一擔脚 (名) うんきやく(運脚)に同じ。續紀十九、天平勝宝八年十一月丁巳「出二納官物一諸司人等、荷食前分、巧作二逗留一、稍延二旬日一、不二肯収納一、由此擔脚辛苦、競爲二逃歸一」

たんぎやく-ぶつ 一端脚類 (名)【動】節足動物中、甲殻類節甲類の一類。體は小さく側扁にして、胸肢に鰓板及び鰓嚢を有し、心臓は腹部に位す。とびむし・われから等の類。(等脚類の對)

だんぎゆう 一彈弓 (名) 絲綿を彈き打ってやはらかにする弓の如き器具。たうゆみ。わたゆみ。三才圏会「木綿彈弓、以竹爲之、長可四尺許」

だんぎよ 一鬪魚 (名)【動】すっぽん(鼈)に同じ。瓦礫雜考「鼈は土鼈にて、今すっぽんといふものも、鬪魚といへるもこの物の一名也」

たんきよう 一端拱 端然として両手をこまぬくこと。南史王瑩「球終日端拱、未嘗相往來」周叢詩「妖氣不起瑠璃輕、端拱垂衣日月明」

たん-きよく 一丹棘 (名) (棘の心(芯)丹(赤)きよりかりていふ) まごころ。丹心。丹誠。赤心。太平記十七、山門廻廊南部「抽二丹棘於中庭一、專二新寶祚之長久一」

だんきよく-しよ 斷獄署 (名) しうごく(囚獄司)の唐名。職原抄「囚獄司(囚名、獄囚、獄官、獄官)の唐名。職原抄

だんきよく-じよう 斷獄丞 (名) 囚獄司の判官、囚獄佑(ノジヨウ)の唐名。職原抄「囚獄司中務佑(相當正七位下)、(囚名、獄官、獄官)」

だんきよく-れい 斷獄令 (名) 囚獄司の長官、囚獄正(ノカミ)の唐名。職原抄「囚獄司中務正一人(相當正六位上、囚名、獄官、獄官)」

だんぎよくわい 一團魚會 (名) 鬪魚を食ひ、其の多寡によりて勝負を爭ふ會。瓦礫雜考「鬪魚會(クワイ)」括異志「今時食鼈之人、心既好食、又招賓友、聚會而食、號二鬪魚會一、彼此以所食多寡爲勝負」

たん-きり 一短距離 (名) みじかき距離。

たん-きり 一痰切 (名) ■痰を止むること。又、痰を止むる藥。持統天皇獣軍法「それは母様の痰切り、黒大豆・陳皮・生姜を入れた藥茶で御座んす」■次條の略。柳亭記「ちぢら糖は痰切といふ物の類歟」

たんきり-あめ 痰切飴 (名) ひらたく薄く引き延べて、長さ七分程に切りたる固飴。痰をとどむる効能ありといふ。痰切。

たんきり-しやうが 痰切生薑 (名) 痰を止め、音聲を立たしむる爲めの藥用の生姜。聖德太子繪傳記「寒晒の痰切生薑、蓼の藥は身に相應」

たんきり-まめ 痰切豆 (名) 鹿藿(植)豆科、鹿藿屬の多年生草本。莖は細長、他物に卷絡す。葉は三箇の小葉より成る複葉にして、莖葉共に褐色の毛を有す。夏日、一葉脇に淡紫色の花、數箇を開き、後、莢果を結ぶ。我が國、山野に自生す。往時、痰を去る藥として用ひたり。うるらうまめ。きんちやくまめ。くわしんまめ。

だん-きん 一段金 (名) 段子(ダンス)と金襴と。貞文記「書札條條「殊段金一端巻上給候、祝著候」」

だん-きん 一斷金 (名) (易經の繫辭傳に二人同心、其利斷金とあるより出づ) ■交情の厚きこと。交際の親密なること。推古紀「今太子既発之、我雖異國、心在斷金、其獨生之有何益矣」奥志「朱藤吾欲破之於前、足下乘之於後、宜同斷金之義」菅書「協契斷金」■たんきんてう(斷金調)の略。大日本史「十二律、舊謂之調(中略)其它、斷金、勝絶、鬼鐸、鸞鏡、絶無所考」

だんきん の ちぎり 斷金契 極めて親密なる契り。斷金の交り。下學集「斷金之契」

だんきん の まじはり 斷金交 前條に同じ。

だん-きん 一彈琴 ことをひくこと。禮記「孔子既詳五日、彈琴而不成聲」同書「彈琴而后食之」

だんきん-てう 一斷金調 (名) 十二律の一。じふにりつ(十二律)を見よ。斷金。斷吟調。拾芥抄「上夷、十一月、斷金調」遺響抄「壹越調・斷金調(中略)以上十二調子也」

だんきん-てう 一斷吟調 (名) 前條に同じ。樂家錄「(本朝律名、唐越調・斷吟調・平調・中調)上無調也」

たん-く 一單句 (名) 單一なる文句。ただ一つの句。

たん-く 一短句 (名) みじかき句。字數の少なき句。鐘繇詩品「許瑤之長二于短句詠物」

たん-く 一短軀 (名) たけのひくきからだ

たんく (英 Tank) (名) 石油・瓦斯などを貯へ置く大いなる槽。

だん-ぐう 彈弓 (名) 古昔、矢の代りに、彈丸を放射する弓なりと。だんどゆみ。和名抄「彈弓(唐書、放丸弓也、文字集略云、竹弦弓也」

たんぐすてん (英 Tungsten) (名)【化】硬くして熔け難く、鋼に類する外觀を有し、比重一九・一三なる金屬。炭素の少量を含むものは其の硬さ殆ど金剛石に匹敵す。窒氣並びに普通の藥品に對しては安定なり。其の化合物には媒染劑として用ひらるるものあり。金屬たんぐすてんの細線は電球の發光線として用ひらる。

たんぐすてん-らんぷ (英 Tungsten lamp) (名)【理】白熱燈の一種。其の炭素線の代りに、たんぐすてんの細線を以てせるもの。

たん-くわ 一丹花 (名) ■紅色の花。張華詩「白礬開素樂、朱草茂丹花」梁簡文帝詩「梁綉簡烟碧、丹花共日紅」■たんくわ(丹果)の誤用。美人の脣の紅く美しきに譬へていふ語。

たんくわ の くちびる 丹花脣 丹花の如く紅く美しき脣。美人の脣に譬へていふ。朱脣。太平記「(唐渤)美脣の眸、丹(紅)花の脣、如何なる笑の岩屋の聖なりとも、心迷はでやあらじ」謠曲考「かつらの黛、丹花の脣、柔和の委引きかへて」

たん-くわ 一丹果 (名) 赤き果實。特に頌瓔(ヒン)の果實の稱。盛衰記十九、「青黛

の眉のわたり、たんくわの口附愛愛しく」

たんくわ の くちびる 丹果脣 佛語。佛の相好の一。丹果に似たる脣。十調「青蓮の眸、丹果のくちびる、卍字の胸、千輻輪の跌、三十二相・八十種好、一も缺けたることなし」

たん-くわ 一痰火 (名) 痰のはげしく出づること。はげしき痰の病。百合若大臣野守鏡「せきのぼる痰くわは胸に滯り、病症重くぞ見えにける」

たん-くわ 一炭火 (名) すみび。韓詩外傳「加二於炭火之上一」

たん-くわ 一炭化 (名)【化】有機物の分解して、揮發性分は去り、其の成分たる炭素のみを止むること。例へば、植物の分解して徐徐に炭素のみとなりて、石炭を化成する類。

たん-ぐわ 一淡畫 (名) 淡彩を施したる畫。本朝畫史「(中略)畫、大雷會悠基屏風、爲二淡畫一、所謂淡畫者謂二淡彩一」

たん-ぐわ 一旦過 (名) (夕に來たりて旦に過ぎ去る義) 佛語。旅僧の一夜を過ごすために建ておく所。旦過寮。太平記「世(世間)話(話題)人「僧を(に)旦過に置きて、山伏は内へ入りぬ」諸本「我れ等が私宅は旦過にて候、一夜を明かして御通り候へ」

たんぐわ の そう 旦過僧 旦過寮に投宿する行脚僧。庭訓往來十月「旦過之僧」蘇軾詩「身是雲霓旦過僧」

たんくわい 一坦懷 (名) 胸にわだかまりなきこと。虚心平氣なること。宋書「(列傳)(奥)思話費(費)勤(奥)永坦懷」

たん-くわう 一蛋黄 (名) 卵のきみ。きみ。卵黄。

たん-くわう 一淡黄 (名) うすき黄色。

たん-くわう 一炭礦 (名) せきたん(石炭)に同じ。

たん-くわう 一探鑛 鑛床を探索し、又採掘し得べき鑛物の存否を探知すること。

たんくわ-かるしうむ (英 Calcium carbide) (名)【化】CaC_2 石灰とこゝくすとを電氣爐にて熟して得らるる灰黑色の塊狀物。水に逢ひてあせちれんを發生す。

たんくわ-けいそ 一炭化珪素 (名)【化】かるぼらんだむ・に同じ。

たん-くわざん 一單火山 (名)【地】山體が簡單なる圓錐をなせる火山。(複火山の對)

たんくわ-すゐそ 一炭化水素 (名)【化】炭素と水素との化合物の總稱。

たんくわ-せい 一單貨制 (名)【經】たんぽんゐせい(單本位制)に同じ。

たんくわ-はふ 一單貨法 (名)【經】前條に同じ。

たんぐわ-れう 一旦過寮 (名) 佛語。禪宗にて行脚僧の宿泊する處。

たんくわ-をさる (句) 人に對して語調を改めて荒たて言ふ。

たん-くわん 一丹款 (名) まごころ。赤心。丹心。丹誠。誠意。晉書「(列傳)陳丹款」

たん-ぐわん 一歎願 情實をあかしてねがふこと。なげきうったふること。哀訴。哀願。

だん-くわん 一彈冠 (冠の塵をはじき拂ふ義) 仕官の支度をなすにいふ語。漢書「王吉(王陽在)位、貢公彈冠」

だん-ぐわん 一彈丸 (名) ■はじき弓のたま。又、鐵砲のたま。太平記「(中略)附(讃)尾超(陵)雲、控二彈丸一、殺二鵠鳥一、大功所二建一、孰與倫言所二最矣一」禮記「日似二彈丸一」■極めて小なる譬へにいふ語。

たん-ぐわん 一端倪 (たん(端)は山巔、げい(倪)は水涯の義) ■かぎり。きは。はし。莊子「(大宗師)反覆終始、不知二端倪一」■推しはかること。はかり知ること。推測。李商隱詩「畫得不二端倪一」

だん-けい 一男系 (名) 男子の系統。(女系の對) 皇室典範「男系の男子」

だん-けい 一斷系 (名) 斷絶せる系統。

だんけい-ぼん 一單經本 (名) 素本(スボン)の經書。正書書籍考「五經白文。白文中庸注疏本に對して單經本とも云ふ」

たんけい-りう 一丹溪流 (名) 醫術の後世方の一流。支那、元の朱丹溪を流祖とし、我が國にては永祿頃、醫師紫竹院道三の傳へて過く廣めたるもの。本朝醫談「永祿以來出來初事の記に云、信長公御代、丹溪流醫師紫竹院道三、此の流を傳へて、あまねくひろめしなり」

だん-けう 一斷橋 (名) 中のたえたるはし。やぶれたるはし。杜甫詩「斷橋無二復板一、臥柳自生枝」陳游詩「斷橋烟雨梅花瘦」

だん-けち 一斷結 佛語。煩惱のわだかまりをたつこと。法華經科注「斷結成佛」

たん-けつ 一丹穴 (名) 丹砂の出づる穴。金の出づる穴。史記「其先得二丹穴一、而擅二其利一數世」

たん-けつ 一淡月 (名) 薄月 (名) 光のあはき月。おぼろづき。揮麈餘話「疎星澹月」

たん-けつ 一端月 (名) 正月の異稱。支那、秦の時、始皇帝の名、政を諱みてかくいふ。史記「(秦始皇)之(二)年、(中略)端月、索隱、秦避二正字諱一、故曰二端月一」歳華紀麗「氣和二端月一」

だん-けつ 一斷決 裁斷して決定すること。さばくこと。決斷。判決。禮記「斷二薄刑一、決二小罪一」後漢書「無二時以私心一斷決、未嘗不有悔

だん-けつ 〔團結〕 團體を結ぶこと。又、其の團體。治安警察法第十七條 勞務の條件又は報酬に關し協同の行爲を爲すべき團結に加入せしめ又は其の加入を妨くること」唐代紀「諸州兵給衣糧者、謂之官健、點差士人、謂之團結」

だん-つき 〔團月〕 (名) まどかなるつき。圓月。歳華紀麗「扇摇團月」

だんけつ-りょく 〔團結力〕 (名) 團結して他に對する力。團結の維持力。

たん-けん 〔短劍〕 (名) 〔一〕みじかきつるぎ。あひくち。短刀。劇談錄「抽短劍、踏子鞍上」 〔二〕時計の短き方の針。短針。

たん-けん 〔短見〕 (名) あさはかなる見識。目先の考へ。淺見。淺慮。張融文「區區短見、深有恨然」

たん-けん 〔丹瞼〕 (名) うすあかきまぶた。徐賓文「波淺丹瞼、鴉深綠鬢」

たん-けん 〔端硯〕 (名) たんけい(端溪)に同じ。

たん-けん 〔探險〕 危險を冒して實地を探(たん)ること。

たん-げん 〔單言〕 (名) いちげん(一言)に同じ。唐書李蒐「單言暫謀、有所寤合、皆付以政」

たん-けん 〔端嚴〕 正しくして威嚴あること。嚴正。舊唐書李蒐「端嚴綽整」風俗通「舊俗常以衣冠子孫、容止端嚴、學問通覽、任顯問者、以爲御史」

だん-けん 〔斷見〕 (名) 佛語。諸法の本性は常住不滅なるに、我が身一度死ずれば、其のまま斷滅して再び生ずる事なしと執著する妄見。(常見の對) 謝故上人「生死を離れば斷見の科」

だん-げん 〔斷言〕 〔一〕斷じて言ふこと。明言。 〔二〕いふところを斷行すること。

だん-げん 〔斷弦〕 斷絃 つる又は絲をきりはなすこと。又、きりはなしたるつる又は絲。元稹詩「孤琴在匣匣、時進斷絃聲」

たん-げんうんどう 〔單弦運動〕 (名) 〔理〕たんいっげんうんどう(單一弦運動)に同じ。

たん-けん-たい 〔探險隊〕 (名) 探險に赴く隊伍。

だんげん-てきめいだい 〔斷言的命題〕 (名) 〔論〕いげんてきめいだい(定言的命題)に同じ。

たんげん-ろん 〔單元論〕 (英 Singularism) (名) 〔哲〕いちげんろん(一元論)に同じ。多元論の對)

たんこ 〔鬼〕 (名) 鬼ごっこなどの遊戯をするとき、鬼に捕らへられるを防ぐ合圖に、拇指と食指とにて環形をつくり、暫く休息すること。

たん-こ 〔炭庫〕 (名) 石炭を入れおく倉。石炭庫。

たん-こ 〔短古〕 (名) 短き古詩。句數の少なき古詩。

たん-こ 〔短袴〕 (名) たけのみじかきはかま。陸都剌詩「催」組縣吏夜打門、剌叙布裙夫短袴」

たん-こ 〔蜑戶〕 (名) あまの住家。漁戶。漁家。貢師泰詩「蜑戶齊分牡蠣田」

たん-こ 〔鍛戶〕 (名) 古昔、鍛冶司(ハラツ)の下に屬し、毎年十月より三月まで、銅鐵雜器の製造の夫役にあたりたる戶。職員令(職員令)「鍛戶」

たん-こ 〔淡湖〕 (名) 〔地〕たんすゐこ(淡水湖)の略。(鹹湖の對)

たん-こ 〔單孤〕 ただひとりなること。ひとり身。たよりなき身。孤獨。東鑑十三、建久四年「單孤之今此勞者、可必報謝之由被思食」

たん-ご 〔端午〕 端五 (名) 〔たんご〕は始めにて、月の初めの義) 〔一〕陰暦五月五日の節句。菖蒲及び蓬を軒に插みて祝ひ、殊に男子の節句として幟(のぼり)・甲冑・刀・軍人形などを飾り、柏餅を食ふ。あやめの節句。重五。續紀「天平元年三月、但毎臨端五(中略)永停此節」太平記「年中行事」「五月中略五日は端午の祭」風土記「仲夏端午、菖蒲角黍」 〔二〕香の名。質は羅國、香はしめやかにして、白檀の香あるを上品とす。(名香目錄)

たんご の せち 端午節 端午の節句。陰暦五月五日の節句。さつきのせち。

たん-ご 〔單語〕 (名) 〔一〕一語にて一品詞たるもの。單一のことば。例へば、絲・犬の類。 〔二〕ただ一つの語。

たん-ご 〔丹後〕 (名) 男の帶地などにする織物。萬金產葉袋「男帶に(中略)博多・薩摩・丹後」

だん-ご 〔斷乎〕 固く執りて變らざるさま、又は斷行して他を顧みざるさまにいふ語。きっぱりと。斷斷乎。斷然。

だん-ご 〔團子〕 (名) 〔一〕米の粉を水にこねて蒸し又はゆでて、小さく丸めたるもの。醬油にて附け燒にし又は餡・きなこ等をつけて食ふ。いしいし。(陽明節用「團子(ダン)」雍州府志「團子。粉團或謂團子」おまり伊勢物語) 〔二〕彈丸。鉄丸。

だん-ご 〔段碁〕 (名) 圍碁にて已に何段といふ名の付く階級に進みたる技倆。又、其の技倆ある碁打。

だんご-いし 〔團子石〕 (名) 團子の如く圓く小さき石。

だん-こう 〔丹紅〕 (名) あか。べに。くれなゐ。梁簡文帝詩「劉檎映丹紅」

たん-こう 〔淡紅〕 (名) うすあか。うすくれなゐ。桃色。章莊詩「淡紅香白一群群」

たん-こう 〔單功〕 (名) 一日一人として其の功を計ること。例へば、一人を十日役すれば單功十人と數ふる類。內匠寮式「八尺塗壁臺一脚料(中略)單功廿五人」內膳司式「鹽鹽(中略)大麥一段種子一斗五升、總單功十四人半」

たん-こう 〔短功〕 (名) 大寶令にて、丁匠などの功程を區別したる一。短日の功。營繕令「凡計功程者、四月・五月・六月・七月爲長功(中略)十月・十一月・十二月・正月爲短功(六功)」內匠寮式「御飯筍一合(五寸七分)料(中略)短功日」

たん-こう 〔單鉤〕 (名) 手跡の執筆法の一。(雙鉤の對) 撥鐙神詮「弘法(中略)淺唐の前、歸朝の後も、其の宿習の單鉤を變ぜずして、常にも傳へ奉られたるなり(中略)十二點畫の末、執筆の法ありて單鉤・雙鉤の圖あり。單鉤に左袒して雙鉤を欲せず」

たん-こう 〔鍛工〕 (名) 金屬をきたふる職工。かぢ。南史「(傍)語、東冶鍛工、欲更營造」

だん-こう 〔男工〕 (名) をとこの職工。(女工の對) 曇子「女工作、文采、男工作、剌鏤」

だん-こう 〔斷口〕 (名) 〔一〕きりくち。 〔二〕(鑄)鑄物學上の用語。鑄物の不規則に割れたる割口。其の模樣は平坦・不平坦・貝殼狀・鋸齒狀等、鑄物によりて異なり。

だん-こう 〔彈孔〕 (名) 砲彈にてうちぬきたる孔(アナ)。

たん-こうしょく 〔淡紅色〕 (名) 淡紅なる色。退紅。

たんこう-るゐ 〔單孔類〕 (名) 〔動〕哺乳類の一目。最下級の哺乳類。口吻延長し、齒を有せず。眼小さく、耳に外殼を具へず。卵生にして、其の卵は土中にて孵化す。鳥類及び爬蟲類に近きものなり。

たんご-さぬ 〔丹後絹〕 (名) 丹後國より產出する生絹。加賀絹よりも下品とす。東鑑(文暦二年九月廿日)「丹後絹三十疋」萬金產葉袋「丹後絹、かが絹に同じ」

だん-ご 〔暖國〕 (名) 氣候の暖(ダン)なる國。

だん-こく 〔斷穀〕 穀類を食せざること。穀物をたちものとすること。斷食。

だん-ごく 〔斷獄〕 罪狀を裁斷すること。斷罪。周禮(秋官)「斷獄弊訟、致邦令」漢書(文帝紀)「每歲斷獄止四百」

だんごく-しょ 〔斷獄署〕 (名) しうごく(囚獄司)の唐名。

たん-ご-さば 〔丹後鯖〕 (名) 丹後國より產するさば。味、ことに美なり。

たん-ご-じま 〔丹後縞〕 (名) 丹後國與謝郡地方より產出する縞の織物。多くは紬なり。萬金產葉袋「丹後島、京織幅九寸五分、丈五丈六尺位(但一疋物屋物は黑地多し)、あるひはちや地にして、鳥絲おほくは朽葉色也、もえぎ絲なども入る、又夜著地あり」幕朝故事談(公方)「右大將樣の御召しは丹後縞なり」

たん-ご-ちぢみ 〔丹後縮〕 (名) 丹後國與謝郡地方より產出する縮。

たん-ご-ちりめん 〔丹後縮緬〕 (名) 丹後國より產出する縮緬。佳品とす。丹縮緬。たんちり。絹布重寶記「丹後縮緬。全體絲のよりわかく、絞(シボ)ひくし、絹の性も柔かなり、萬事唐屋形縮緬に似たる所多し、地性餘り强くはなし、中にも不二勝絹は著用して毛むく立也」

たん-こつ 〔短骨〕 (名) 【醫】數多の面を有する小骨。脊柱・手根・足根など小運動をなす部位にあり。

たん-ご-つむぎ 〔丹後紬〕 (名) 丹後縞の紬。嬉川記「つむぎの事、紋を附け候うて染めたるは、御前へも不二苦候、丹後紬とて變事有る間敷く候」

たん-こ-な 〔丹後菜〕 (名) 【植】だいこんさう(水楊梅)の異名。

だん-ご-はな 〔團子鼻〕 (名) 先の圓き鼻。

だん-ご-ばな (名) 【植】たまあぢさゐの異名。

だん-ご-びや 〔團子火矢〕 (名) 【彈丸が團子の如きよりいふ】昔時、鳥銃の異名。

たん-ごぶ (名) こぶ(瘤)に同じ。

たん-ごぶり 〔丹後鰤〕 (名) 丹後國の沿海に產する鰤。殊に美味とす。

だん-ごゆみ 〔彈弓弓〕 (名) だんぐう(彈弓)に同じ。

たん-こん 〔丹懇〕 (名) まごころ。丹誠。赤誠。丹心。唐則天樂章「懇丹懇、今荷休徵」

たん-ごん 〔端巖〕 たんげん(端巖)に同じ。盛衰記「心操柔和にして、形容端巖なりしかば」

だん-こん 〔男根〕 (名) なんこん(男根)に同じ。

だん-こん 〔斷魂〕 (名) 魂の根のたちきるる程いたましきこと。かなしみにたへぬこと。斷腸。韋莊詩「自是春愁正斷魂」

たん-さ 〔丹砂〕 (名) 〔一〕あかき色のすな。史記「西北丹砂有數百里」 〔二〕しんしや(辰砂)に同じ。枹朴子(內篇)「丹砂燒之成水銀、積變又還成丹砂、故能令人長生」史記(封禪書)「丹砂可化爲黃金」

たん-さ 〔嘆嗟〕 さたん(嗟嘆)に同じ。何遜詩「撫絃乏歡娛、臨觴獨嘆嗟」

たん-さ 〔探査〕 さぐりしらぶること。

たんさ 〔旦座〕 (名) 茶道の七事の一。花・炭・香・濃茶・薄茶を用ひ、花・炭・香を客方に所望し、濃茶・薄茶を亭主と副亭主とにて勤むるもの。茶道七字要書「日舊、且座之式」茶道筌蹄「七、且座。超州の語に、且座喫茶去の語をかり用ゆ」

たん-ざ 〔端坐〕 端座 (名) 〔一〕行儀正しくすわること。論語「必有二盛服一、威儀を亂さず座すること。正坐。靈異記「有二風流女一、中略淨家爲心、探調盛唱子、端坐含咲、馴言致食」伊呂波字類「端坐」北史(高昌)「誰能端坐讀書、作老博士也」 〔二〕何事もせずに日を暮らすこと。ぼんやりとして日を暮らすこと。諸葛亮文「彼高當分、裂其地、以爲後規、下當略民廣、塡示武於內、非端坐者也」

たん-ざ 〔單坐〕 (名) ただひとり坐しること。孤坐。

だん-ざ 〔團坐〕 多人數、圓形に坐を占むること。まとゐ。文獻通考(經籍考)「團坐飲酒以樂」

たん-さい 〔短才〕 (名) 才の足らぬこと。智慧の劣れること。長じたる働きのなきこと。又、その人。太平記(廿四、依山門「禪宗(中略)此の宗を好む世は、必ず不二短才一と云ふ事なし」と申す條、愚案・短才の第一なり」雍陶詩「每憶雲山羨二短才一」

たん-さい 〔淡彩〕 (名) あっさりした彩色。本朝畫史(光信)「所謂淡畫者謂淡彩」李嶧文(秋興賦)「烟澹彩而的的、月籠華而晶晶」

たん-さい 〔淡菜〕 (名) 【動】いがひ(貽貝)の異名。

だん-さい 〔斷罪〕 〔一〕罪狀を裁斷すること。斷獄。獄令「凡國斷罪應二申覆一者、太政官量、差二使人一、取二强明解一法律者、分二道巡覆見囚一」儀式「奏二年終斷罪儀」晉書(刑法)「律法斷罪」 〔二〕斬首の罪。くびきり。うちくび。斬罪。東鑑(文治三年十一月廿六日)「依二餘殃一、可有二斷罪一」太平記(廿一、依二餘殃一、斬官流刑)「あはれ斷罪・流刑にも行はせばや」

たんさいはう-どうぶつ 〔單細胞動物〕 (名) 【動】唯一の細胞にて體を構成する動物の總稱。されば其の體制最も簡單にして、動物界中、最下等に位す。卽ち、原始動物是れなり。

だんざいぶん 〔斷罪文〕 (名) 斷罪の解文(ゲブン)。三代實錄(貞觀十六年十月廿六日)「刑部省斷罪文云」太政官式「凡刑部省所申斷罪文者、造二通一」

たん-さう 〔淡粧〕 (名) あっさりしたるつくり。うすげしやう。たんしやう。蘇軾詩「若把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜」梅妃傳「淡粧雅服、而姿態明秀」

たん-さう 〔短槍〕 (名) 柄の短き槍。手槍。

たん-さう 〔單雙〕 (名) 單と雙と。一つとつゐと。

たん-さう 〔丹竈〕 (名) 古昔、支那にて方士が丹砂を煉りたりといふかまど。江淹文(別賦)「守二丹竈一而不顧」

たん-さう 〔端莊〕 端正にして莊嚴なること。ただしく立派なること。端嚴。韓維詩「端莊九鼎重」

だん-さう 〔男裝〕 女が男のよそほひをすること。男子のいでたち。(女裝の對)

たん-さく 〔短作〕 (名) りっし(律詩)の異稱。短篇。短章。短逸。詩轍(六)「古詩、文字句數の定則無ければ、短古も有りといへども、大半長篇なる故、律のことを短作・短逸・短篇(社)短章などともいへり」

たん-さく 〔探索〕 〔一〕さぐりもとむること。たづねさがすこと。易經(繫辭)「探賾索隱、鉤深致遠」 〔二〕罪人の踪跡・事情なり。うちくび。斬罪。東鑑(文治三年十一月廿六日)「依二餘殃一、可有二斷罪一」太平記(廿一、依二餘殃一、斬官流刑)「あはれ斷罪・流刑にも行はせばや」

たんさいはう-どうぶつ 〔單細胞動物〕 (名) 【動】唯一の細胞にて體を構成する動物の總稱。されば其の體制最も簡單にして、動物界中、最下等に位す。卽ち、原始動物是れなり。

だんざいぶん 〔斷罪文〕 (名) 斷罪の解文(ゲブン)。三代實錄(貞觀十六年十月廿六日)「刑部省斷罪文云」太政官式「凡刑部省所申斷罪文者、造二通一」

たん-さう 〔淡粧〕 (名) あっさりしたるつくり。うすげしやう。たんしやう。蘇軾詩「若把西湖比西子、淡粧濃抹兩相宜」梅妃傳「淡粧雅服、而姿態明秀」

たん-さう 〔短槍〕 (名) 柄の短き槍。手槍。

たん-さう 〔單雙〕 (名) 單と雙と。一つとつゐと。

たん-さう 〔丹竈〕 (名) 古昔、支那にて方士が丹砂を煉りたりといふかまど。江淹文(別賦)「守二丹竈一而不顧」

たん-さう 〔端莊〕 端正にして莊嚴なること。ただしく立派なること。端嚴。韓維詩「端莊九鼎重」

だん-さう 〔男裝〕 女が男のよそほひをすること。男子のいでたち。(女裝の對)

たん-さく 〔短作〕 (名) りっし(律詩)の異稱。短篇。短章。短逸。詩轍(六)「古詩、文字句數の定則無ければ、短古も有りといへども、大半長篇なる故、律のことを短作・短逸・短篇(社)短章などともいへり」

たん-さく 〔探索〕 〔一〕さぐりもとむること。たづねさがすこと。易經(繫辭)「探賾索隱、鉤深致遠」 〔二〕罪人の踪跡・事情な

どをひそかにさぐり調ぶること。又、その役の人。探偵。

たん-ざく 【短籍 短尺 短冊】(名) ㊀細く切りて字を書き、物の標に附けなどする紙。三代實錄[貞觀九]「式兵部兩省奏〜文武官擬階短籍」太政官式「凡太政官考選文者中務就〜曹司〜考選、史持〜短冊筥」枕冊「何の御短ざくにか侍らん、物いくらばかりにといへば、まづよめかしといふ」㊁ひねりぶみ(捻文)に同じ。續紀七[天平]「賜酒食、令探短籍書以仁義禮智信五字、隨其字而賜物」㊂和歌などを書く細長き料紙。寸法は歌道の家家にて異なり、或ひは幅一寸八分、長さ一尺又は一尺二寸、若しくは一尺二寸二分、普通は竪一尺一寸五分、幅一寸八分とす。たにざく。南方記傳「建德二年三月十一日、先帝の三回忌について、宸翰の短冊を集め、その裏に法華經を書き供養す」謠[俊成]「御最期の後、尻籠を見奉れば、短冊の御座候」㊃同上の如き形。又、其の形のもの。㊄てがな(手形)に同じ。狂言[萬蹊]「ちっとよう御ざりまするが、たんざくの幅ほど、あいたあいた中間御手前のてがたでおぢやる」

たんざく を なす 爲短冊 詩歌などを作りて短冊に書く。狂言[蝸牛]「いづれもが短冊をなされまする程に、花につけて御歌をよまっしやれい」

たんざく-いし 【短冊石】(名) 短冊形に切りたる石。庭の敷石などとす。

だんざく-いちぶ 【短冊一歩 丹尺一歩】(名) 〔短冊形なるよりいふ〕いちぶばんきん(一分判金)の異稱。金銀圖錄[慶長]「一分判、世に丹尺一歩とも云ふ」永松堂金譜「是れを世に短冊壹分ともいひ」

たんざく-がかり 探索掛 (名) 探索の事に當たる人。探偵掛。

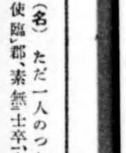
たんざく-かけ 【短冊懸】(名) 當のかけ物の如くに表具し、中に和歌などを書きたる短冊を、かけはづしの出來るやうにして、かけ置く具。

たんざく-がた 短冊形 (名) 短冊の如き細長き形。

たんざく-さり 【短冊切】(名) ㊀短冊形に切ること。㊁古昔、京都五山の僧徒の催したる大詩會を短冊切と稱す。南禪話「五山の大詩會を短冊切と稱す。南禪寺傳長老の時、短冊切の會あり中間引き合せの紙を撰げ短冊に切りて、三枚重ね、面面の前に置く。硯・筆架・水滴など盡くして面面に供す。詩成りて草稿を一座の衆廻し見て後、淨書して座心の文臺にのせ、其の後五拾より一人づつ出でて吟ず。五山の吟聲各殊なり。詩事畢って大饗あり、亂舞・酒宴、夜に入るとぞ」

たんざく-だけ 【短冊竹】(名) 七夕に、短冊、即ち細く裁ぎちて和歌などを書きたる色紙を枝に結び附けて立つる竹。千紅萬紫「かどなみにたんざくだけをおし立てて、いろ紙に書くかな釘の折れ」

たんざく-つつみ 【短冊包】(名) 折形の名目。



(みつつ(ざんた)

たんざく-どうふ 【短冊豆腐】(名) 短冊形に切りたる豆腐。

たんざく-ばこ 【短冊箱】(名) 短冊を納むる箱。永享九年十月二十一日行幸記「御短冊箱[蒔繪]」正廣日記[文明五年十二月十九日]「此のあらがき短冊箱になどおぼえて、所望にありしかども」

たんざく-ばさみ 【短冊挾】(名) ㊀短冊をはさむもの。短冊ほどの太さの板など二枚にて短冊をはさみおくもの。㊁たんざくかけ(短冊懸)に同じ。

たんざく-もの 【短冊物】(名) 花あはせの語。短冊の懸きある花札。價格は五にて、其の數、十枚あり。

たんさつ 【短札】(名) ㊀みじかき書札。㊁しよさつ(書札)の謙稱。諸葛亮碑「願借〜短札、以排〜群議」

たんさつ 【探察】さぐり考ふること。さがししらぶること。

たんさん 【炭酸】(名) 【化】炭酸瓦斯の水に溶くるとき、化合して成生する弱酸。其の鹽類は安定なれども、酸は水と炭酸瓦斯とに分解し易し。普通には炭酸瓦斯のことを單に炭酸といふこともあり。

たんざん 【炭山】(名) 石炭の出づる山。炭坑のある山。

たんざん 【貪殘】(名) 食婪にして殘酷なること。漢書[朝鼂]「王嘉責性邪僻、所舉皆貪殘吏」

たんさん-えん 【炭酸鹽】(名) 【化】炭酸の水素原子を金屬にて置換したる化合物。炭酸曹達・炭酸かるしうむ・の類。

たんさん-がす 【炭酸瓦斯】(名) 【化】無色にして微臭を有し、微かに酸味を呈する氣體。空氣より重く、他物の燃燒を支へず、可なり水に溶解して炭酸水となり、强壓によりて液狀となる。液狀炭酸瓦斯は工業上多量に製造し、鐵製の瓶に入れて販賣せらる。これを空氣中に出だせば忽ち蒸發し、其のために寒冷を生じ、液の一部は凝固す。炭酸瓦斯は腐敗・燃燒、動物の呼吸等によりて成生せらるるにより、空氣は常に其の少量を含有す。此の瓦斯を單に炭酸と呼ぶことあれども、化學上にては正しき呼び方にあらず。たんさん(炭酸)を見よ。

たんさん-かり 【炭酸加里】(名) 【化】次條に同じ。

たんさん-かりうむ 【炭酸——】(英 Potassium carbonate) (名) 【化】潮解性の白色の塊。極めて水に溶け易く、水溶液は苦味を有し、あるかり性反應を呈す。其の粗製品をぽったーす・といふ。硝子及び苛性加里製造の原料となす。

たんさん-かるしうむ 【炭酸——】(英 Calcium carbonate) (名) 【化】$CaCO_3$ かるしうむ・の炭酸鹽。大理石・石灰石等の主成分をなし、熱すれば炭酸瓦斯を放出して生石灰となり、酸を注げば炭酸瓦斯を發出して酸に溶解す。水に溶け難けれども、炭酸を含める水にはよく溶解す。

だんさん-くわじょ 【團繖花序】(名) 【植】植物學上の用語。花序の一。密繖花序に似て、各花無梗、全花序が圓き頭狀をなすもの。

たんさん-こう 【炭酸孔】(名) 【地】炭酸瓦斯を噴出する孔。

たんさん-し 【炭酸紙】(名) 【化】文書の複寫に用ふる紙。油烟及び脂油等の混合物を羅皮紙等に塗りたるもの。

たんさん-すとろんちうむ 【炭酸 Strontium carbonate) (名) 【化】百色の結晶。水に溶け難く、强熱すれば分解して酸化すとろんちうむ・を生ず。天然にも產出し、すとろんちうむ鑛と稱し、すとろんちうむ化合物の原料となる。

たんさん-すゐ 【炭酸水】(名) 【化】多量の炭酸瓦斯を溶含せる水。天然に產出するものあり、人工になれるものあり。醫療及び飲料に供す。人工にては液狀炭酸瓦斯を水に溶かし、或ひは炭酸曹達に硫酸を注ぎて發生する瓦斯を、壓力を加へて水に溶かして製す。

たんさんすゐそ-なとりうむ 【炭酸水素——】(英 Natrium bicarbonate) (名)

【化】白色粉末狀の結晶をなし、炭酸曹達に炭酸瓦斯を作用せしめて得らるるもの。工業上にてはあんもにあ曹達法にて造る。炭酸曹達よりも水に溶け難く、熱すれば分解して炭酸曹達となる。藥用及び消火器用に供し、又、清涼飲料の原料となす。重曹。

たんさん-せきくわい 【炭酸石灰】(名) 【化】$CaCO_3$ 炭素・酸素及びかるしうむ・を成分とする一種の鹽。熱すれば炭酸瓦斯を發出して生石灰を生じ、酸を注げば溶けて炭酸瓦斯を出だす。多少の不純物を混じて天然に多量に產出す。

たんさん-せん 【炭酸泉】(名) 炭酸を多量に含有する鑛泉。

たんさん-そーだ 炭酸曹達 (名) 【化】次條に同じ。

たんさん-なとりうむ 【炭酸——】(英 Natrium carbonate) (名) 【化】無色可溶性の結晶。水溶液はあるかり性反應を呈す。洗濯用として用ひられ、又、苛性曹達製造の原料となる。食鹽を原料とし、硫酸・石灰・こーくす等を作用せしめて製す。猶、るぶらん法を見よ。又、炭酸水素なとりうむ・を熱しても得らる。曹達。

たんさん-なまり 【炭酸鉛】(名) 【化】鉛鹽の溶液に炭酸あんもにうむ・を加ふるとき成生する白色の粉末。水に溶け難きも、炭酸を含める水には少しく溶解す。鉛白は此のものと水酸化鉛との化合物と見るべきものなり。

たん-し 【丹師】(名) ゑし(繪師)に同じ。盛衰記[昭和版]「八、殿上人、容顏美麗の氣色、馬鞍錦繡の有樣は、丹師が筆も及び難し」

たん-し 【短視】(名) きんがん(近眼)に同じ。

たん-し 【單師】(名) こぐん(孤軍)に同じ。唐書[紀傳]「王、道宗以單師」

たん-し 【單使】(名) ただ一人のつかひ。陳書[世祖]「乾草使臨郡、素無士卒、力不能守」

たん-し 【單絲 線とならず】(名) ただ一本の絲。完全なるものは出來ず。多くの力を合はせて初めて物事は成立す。

たん-し 【箪食】(名) 竹器に盛りたる飯。辨當。

たんし こしゃう 【箪食瓢漿 箪食壺漿】(たん(箪)は竹器、ひ(瓢)はひさご、こ(壺)はつぼ) ㊀竹器に入れたる食物と、つぼなどに入れたる飲みもの。即ち、少量の飲食物。日本武尊吾妻鑑[元]「降參の者共はっと箪食壺漿して、大御酒・菜物御前に列ね」孟子[梁惠王下]「箪食壺漿、以迎王師」㊁旅行に携帶する飲食物。太平記[神田本]「箪食・瓢漿を持ちて、士卒の疲れをぞ勞りける」

たんし とうかう 【箪食豆羹】竹器に入れたる飯と椀に盛りたる汁と。即ち、少量の飲食物。孟子[告子上]「一箪食一豆羹、得之則生、不得則死」同書[上]「箪食豆羹見於色」

たんし へういん 【箪食瓢飲】竹器に入れたるめしと、ひさごに容れたる飲料と。即ち、少量の飲食物。又、貧しき生活。論語[雍也]「賢哉回也、一箪食、一瓢飲」漢書[貨殖]「顏淵箪食瓢飲、在〜於陋巷」

たん-し 【箪笥】(名) はこ。かたみ。禮記[曲禮上]「凡以弓劍苞苴箪笥、問人者、操以受、命」公羊傳[哀公五年]「圓曰、箪、方曰笥」

たん-し 【單子】(英 Monad) (名) 【哲】精神的原子。即ち、宇宙構成の要素をなす單純・不可分、且つ獨立・自存なる精神的原理。

たん-し 【單思】思考をつくすこと。深く考ふること。孔安國文[序]「研深考究」

たん-し 【單字】(名) ただ一つの文字。一字。劉克莊文「單字半句、必穿〜穴其所、本」

たん-じ 【單辭】(名) ただひとこと。一言。盛衰記[世佐慶本]「魯連辯言以退燕、包胥單辭以存楚」

たん-じ 【嘆辭】(名) ㊀感嘆のことば。㊁【文法】かんたんし(感嘆詞)に同じ。

たん-じ 【短時】(名) 短き時間。短時間。

たん-し 【檀紙】(名) 古昔は檀(まゆみ)、今は楮(かうぞ)の樹皮の纖維にて抄きたる上品なる紙。厚くして色白く、面に縮緬の如きしわあるもの。其のたけの大小と皺の細疎とによりて、大高・小高等の數種に分かつ。今物語「紅梅の檀紙に、心も及ばずして、あしでをかきて」著聞「檀紙に書きて、櫻の枝に付けられたり」

だん-し 【男子】(名) ㊀をとこのこ。なんし。詩經[小雅]「維熊維羆、男子之祥」禮記[樂記]「男子附於王父、則配」㊁をとこ。をのこ。禮記[檀弓上]「男子不死於婦人之手」㊂ますらを。大丈夫。ますらたけを。後漢書[孔融]「孔融魯國男子」

(諺)男子家を出づれば七人の敵あり 男は世の事にたづさはるによりて、敵をつくりやすし。

だん-し 【團子 糰子】(名) だんご(團子)に同じ。白氏鑑[賣團子者]「乾膩子、賣又餅・造照餅糰子、召小兒・搗瓦礫」擊櫻、中者、以煎餅糰子、啗之」

だん-し 【彈子】(名) ㊀銃砲のたま。たま。彈丸。㊁檀叢彈、又は叢彈の中に裝塡する小さき彈丸。

だん-し 【彈絲】㊀絃器をかなづること。㊁【植】植物學上の用語。螺旋狀に卷縮せる彈性絲狀のもの。苔類・木賊類の胞子は大抵之を有し、其の彈力によりて胞子を飛散せしむ。

だん し するちく 【彈絲吹竹 琴瑟など】をひき笙笛などをふくこと。晉曲を弄ぶこと。江總詩「彈絲命琴瑟、吹竹動笙簧」

だん-し 【彈指】㊀つまはじきすること。著聞[武士]「上人聞きて、な泣きそとこしらへて、彈指して、の給ひける」舊唐書[音樂]「或彈指出血」法華經「俱共彈指」㊁極めて短き時間。維摩經「度百千劫、猶如彈指」

だん-じ 【談】(名) 談ずること。はなし。かけあひ。談判。「だんじに行く」

だん-じ 【男兒】(名) だんし(男子)に同じ。(女兒の對) 陶潛詩「雖有五男兒、總不好紙筆」杜甫詩「男兒生不成名頭皓白」

たん-しう 【短袖】(名) みじかきそで。又、その衣服。

だん-しう 【男囚】(名) 男子の囚人。(女囚の對)

たん-しえふ 【單子葉】(名) 【植】植物學上の用語。一枚の子葉。

たんしえふ-しょくぶつ 【單子葉植物】(名) 【植】植物學上の用語。種子の胚に一枚の子葉を有する植物の總稱。莖は散在せる維管束を有し、葉は通常並行脈ありて、花の諸部は普通三の數より成る。禾本科・莎草科・百合科等之に屬す。(雙子葉植物の對)

たん-じかん 【短時間】(名) みじかき時間。短時。

たん-じき 【單式】(名) 簿記の一。貸借の意義を唯だ人名勘定にのみ用ひ、且つ一取引につき貸借何れか一方のみの記入に止まるもの。(複式の對)

だん-じき 【斷食】食をたつこと。食

物をとらざること。新願などするとき、日數を限り、穀類をたちて行を修すること。絕食。斷穀。著聞集「月の十五日には必ず斷食をなんしける」平家「盛衰記十八「斷食七日、則生身菩薩形現」佛本行經「若因斷食、或る時は持齋せり」西域遊方記「斷食七日、則生身菩薩形現」佛本行經「若因斷食、常に得る大福」

たんしきーぼき 〔単式簿記〕（名）単式による簿記法。

だんしーさや 〔弾指頃〕（名）弾指の間。極めて短き時間。弾指。太平記「弾指去來今とも、三過門間老病死、一弾指頃去來今とも、加様の事をや申すべき」曽學佺詩「半百已過弾指頃」

たんしーさん 〔擔子〕（名）【植】次條に同じ。

たんしーさんーるい 〔擔子菌類〕（名）【植】隱花植物、菌類の一。擔子細胞を有するもの。まつたけ・はつたけ・しひたけの類。基菌類。

だんーしげどう 〔段重籐〕（名）重籐の一。段段に籐を卷きたるもの。

たんしーさいほう 〔擔子細胞〕（名）【植】高等菌類の胞子を生ずる細胞。まつたけ・はつたけ等は菌褶の表面に生じ、さのこしかけ・あみたけ等は凹孔の内面に生じ、かうたけ・はりたけ等は針狀突起の表面に生ず。

たんーじつ 〔短時日〕（名）短き日數。わづかの時。すこしのひま。

たんーしーしょく 〔淡紫色〕（名）薄き紫色。すみれいろ。

たんーしつ 〔炭質〕（名）炭又は石炭などの性質。

たんーしつ 〔丹漆〕（名）丹色を雜へる漆。「あかうるし。後漢書祭祀「欲以丹漆書之」

たんーじつ 〔旦日〕（名）あす。あした。明旦。明朝。明日。史記項羽本紀「且日饗士卒、爲擊破沛公軍」

たんーじつ 〔短日〕（名）冬のみじかき日。書開の短き日。

たんーじつ 〔誕日〕（名）たんじやうび（誕生日）に同じ。舊唐書德宗紀「上誕日不納中外之賀」

だんーしつ 〔煖室〕（名）暖室（名）をんしつ（溫室）に同じ。金鰲退食筆記「子煖室、烘出芍藥牡丹諸花」

たんーじつげつ 〔短日月〕（名）短き月日の開。わづかの月日。

だんしつーろ 〔暖室爐〕（名）〔室を暖むる爲めに設くる爐の義〕すとーぶに同じ。

だんじて 〔斷〕（副）決して。必ず。きつと。しかと。

たんーじふ 〔丹汁〕（名）朱を研きりたる汁。洞冥記「有朱鼻色如丹汁」

たんーじふ 〔膽汁〕（名）【醫】肝臟より分泌する液。黄色にして苦味・異臭あり。脂肪を乳化して腸管の吸收作用を容易ならしめ、腸内に於ける腐敗作用を制す。孔平仲詩「倉皇面深蹙、嘔噦皆膽汁」

たんじふーしつ 〔膽汁質〕（名）【心】四氣質の一。はれる（一七〇八—一七七七）は、外的刺戟を感受すること迅かならざるも、之を保留する力強きもの、即ち、情緒の興奮は迅かならざるも、激昂盲動することなく、沈著・冷靜にして、意志强健、物事に倦怠することなく耐久性に富めるものを言ひ、ヴんとは、情緒の變化の遲速及び其の强弱より氣質を分類して、速かにして强きものをいへり。

だんじふらう 〔團十郎〕（名）〔俳優市川團十郎の家は、ねばる藝を得意とするよりいふか〕ねばること。ねばり。おほたば。花見車「酒が過ぎると氣隨になりんして、團十郎が出る。樑でかけ回らんとしたる事もあり」

だんじふらうーがうし 〔團十郎格子〕（名）〔俳優市川團十郎の家の紋は三枡（ますな）なるよりいふ〕ますがうし（三枡格子）に同じ。

だんじふらうーじま 〔團十郎縞〕（名）團十郎格子の縞。

だんじふらうーに 〔團十郎煮〕（名）皮をむきたる薩摩芋を輪切りにしてふかし、鹽と砂糖とにて味をつけたるもの。だんじふらうぶかし。成田屋煮。

だんじふらうーぶかし 〔團十郎蒸〕（名）前條に同じ。

たんーしゃ 〔丹砂〕（名）たんさ（丹砂）に同じ。

たんーしゃ 〔單舍〕（名）【化】たんしゃりべつ（單舍利別）の略。

たんーしゃ 〔單車〕（名）一ただ一臺の車。二ただひとり車にのること。史記信陵君「今單車來代之」

だんーしゃ 〔團社〕（名）くみ。なかま。團體。結社。

だんーしゃ 〔彈射〕一彈丸を發射すること。又、はじき射ること。賈島詩「太液無彈射、饗禽翅不垂」二物事を指しあつること。過失などを指摘すること。南史劉勰「互相彈射」蜀志董允「每彈射利病」爲世人譏嫌」

たんーしゃ 〔短章〕（名）一詩文などの短きもの。二りつし律詩の異稱。詩轍「古詩、文字・句數の定則無ければ、短古も有りといへども、大半長篇なる故、律のことを短作・短述・短篇・短章などともいへり」

たんーしゃ 〔歎賞〕感心してほめたたふること。いたくほむること。歎稱。感賞。唐書「仁願至京師、帝勞曰、若本武將、軍中奏請、皆有文理、何道而然、對曰、仁軌之餘、非臣所能、帝歎賞之」

たんーしゃ 〔歎傷〕なげきいたむこと。うれひおもふこと。歎悼。溫庭筠詩「恨昔樓遊集、今來倍歎傷」

たんーしゃ 〔淡粧〕たんさう（淡粧）に同じ。

たんーしゃ 〔端莊〕たんさう（端莊）に同じ。

たんーしゃ 〔誕生〕うまること。出生。出産。平家「皇子御誕生有て、皇太子に立ち」後漢書人「誕生聖皇」

たんーしゃ 〔端正〕たんせい（端正）に同じ。盛衰記「才幹拔粹にして、容貌端正に御座しましし上」

だんーしゃ 〔男娼〕（名）かげま。男色。

だんーしゃ 〔壇上〕（名）壇のうへ。保元「將門弓箭を帶して壇上に現じけるが」諸藝集「しるしの札を取り出だし、壇上に立て置き歸らんとするに」史記「既聞于壇上」

だんーじゃ 〔彈正〕（名）彈正臺の職員。即ち、彈正尹・彈正弼・彈正忠・彈正疏などの總稱。公式令「凡彈正、別勅令檢校餘官者、不得仍知彈正事」考課令「訪察姦明、糾東必當、爲彈正之最」

だんじゃうーだい 〔彈正臺〕（名）一古昔、內外の非違を糾彈し、風俗を肅清することを掌りたる司。其の糾彈は太政官を經ずして直ちに奏聞する權を得るもの。尹・弼・忠・疏などの職員あり。後には其の職掌檢非違使に移りて、洛中の巡檢を掌るのみとなれり。ただすつかさ。續紀「大寶元年、令彈正臺巡察畿內」職員令「彈正臺。尹一人、從三位。弼一人、從五位下。大忠一人、從六位上。少疏一人、從七位上。巡察彈正十人」二明治二年五月二十二日に置き、非違を糾彈することを掌らしめたる中央官廳。尹・弼・大少忠・大少疏・巡察彈正・史生の職員を置く。同年六月十八日及び其の翌日臺掌・巡察屬を置き、七月八日巡察彈正を廢して權・大・少忠・大・少巡察使部を置き、翌月二十日更に弼を大・少に區別し、同三年四月二十九日、同四年正月二十三日に巡察及び疏の權官を置き、同四年七月九日廢して其の事務を司法省に移せり。法令全書「明治二年閏十月二十三日、今廢彈正臺被置候事」

たんじゃうーにち 〔誕生日〕（名）たんじやうび（誕生日）に同じ。

だんじゃうーのーかみ 〔彈正尹〕（名）一古昔、彈正臺の長官。だんじやうだい（彈正臺）を見よ。續紀「正五位下大石王爲彈正尹」同「淮令、彈正尹者、從四位上官」二明治二年五月二十二日に置かれたる彈正臺の長官。勅任官とす。同四年七月九日彈正臺と共に廢せられたり。

だんじゃうーのーさくもん 〔彈正疏〕（名）彈正臺の主典。

だんじゃうーのーせうちゅう 〔彈正少忠〕（名）だんじやうのちゆう（彈正忠）を見よ。官位令「正六位、彈正大忠。彈正少忠」

だんじゃうーのーせうひつ 〔彈正少弼〕（名）だんじやうのひつ（彈正弼）を見よ。

だんじゃうーのーたいちゅう 〔彈正大忠〕（名）だんじやうのちゆう（彈正忠）を見よ。官位令「正六位、彈正大忠」

だんじゃうーのーたいひつ 〔彈正大弼〕（名）だんじやうのひつ（彈正弼）を見よ。三代實錄「貞觀二年、從四位上行文章博士菅原朝臣是善、爲彈正大弼」

だんじゃうーのーちゅう 〔彈正忠〕（名）一古昔、彈正臺の判官。だんじやうだい（彈正臺）を見よ。儀式「大元帥法」「彈正忠以下、出自朱雀門西掖門」二明治二年五月二十二日に置かれたる彈正臺の職員。大・少あり、大忠は勅任、少忠は奏任とす。同年七月八日權官を置き、同四年七月九日彈正臺と共に廢せられたり。忠。

だんじゃうーのーひつ 〔彈正弼〕（名）一古昔、彈正臺の次官。だんじやうだい（彈正臺）を見よ。續紀「天平五年、外從五位下紀朝臣男楫、爲彈正弼」二明治二年五月二十二日に置かれたる彈正臺の次官。彈正尹の職掌を輔佐する勅任官。同年八月二十日大と少とに分かち、同四年七月九日彈正臺と共に廢せられたり。

たんじゃうび 〔誕生日〕（名）其の人の生まれたる當日。誕日。誕辰。檜權三「三人の子の誕生日、一家寄り合ふ祝ひ日の座敷は座敷にかはらねど」大江俊光記「元暦二年四月二日、俊光誕生日、諸神組拜」

たんじゃく 〔短冊〕（名）一たんざく（短籍）の訛り。狂言「是れなる松を見れば、札を打ち短尺を附け、尺八の樣なる物を數多かけられて候」二たんざく（短籍）に同じ。狂言「玉の冠何もかも、たん尺のかはりにやって、一色ない」三武具。指物の名。

たんじゃく 〔單弱〕一手うすなること。唐書「諸道兵、羸旅單弱」二孤獨にてかよわきもの。宋書「老病單弱者、皆加贍恤」

だんしゃく 〔男爵〕（名）五等爵の最下級。貴族院令「伯子男爵各舍其の同爵中より選擧せられたる者」

たんじゃくーいちぶ 〔短冊一歩〕（名）たんざくいちぶ（短冊一歩）に同じ。

たんじゃくーえつる 〔短尺柄〕（名）武具。馬標又は指物の名。

（るつえくやじんた）

（まるぐくやじんた）

（ほくやじんた）

たんじゃくーかけ 〔短冊懸〕（名）たんざくかけ（短冊懸）に同じ。

だんしゃくーざえん 〔男爵議員〕（名）華族議員の一。男爵を有する者にて滿二十五歳に達し、同爵の互選により議員となりたるもの。貴族院議員資格及選擧爭訟判決規則「三、伯子男爵議員の各選擧人」

たんじゃくーぐるま 〔短冊車〕（名）武具。指物の名。

たんじゃくーばさみ 〔短冊夾〕（名）たんざくばさみ（短冊夾）に同じ。

たんしゃりべつ 〔單舍利別〕（名）【化】砂糖の中に約半量の水を加へて溶解・沸騰せしめ、且つ、砂糖中の不白分を除去して得らるる水飴狀のもの。强き甘味あり。味附けの劑として用ふ。

たんしゅ 〔丹朱〕（名）一あかきいろ。あか。禮記「丹朱中衣、大夫之僭禮也」二丹砂。辰砂。朱。博物志「燒丹朱、成水銀、則不ー類」

たんじゅ 〔短綬〕（名）短きくみを。中務內侍日記「左右の御ひしろの御脇の通りに、たんじゆとて二すぢ、よぼろの程にさげられたり」

だんしゅ 〔斷酒〕酒をたつこと。禁酒。著聞「酒中顯りに是れをすすむ。師酒のよしをいひて飲まねば」南史「以旱故、都下二縣朱方姑熟、權斷酒」

たんじゅう 〔短銃〕（名）たねがしま。拳銃。

たんじゅうおん 〔單縱陣〕（名）艦隊などが一縱づつ縱に長く一列をなす陣列。

たんしゅく 〔短縮〕みじかくちぢまること。みじかくちぢむること。

たんしゅく 〔端肅〕ただしくおごそかなること。端正にして嚴肅なること。北史「威儀端肅、擬機明辨」

たんじゅつ 〔短述〕（名）りつし（律詩）の異稱。詩轍「古詩、文字・句數の定則無ければ、短古も有りといへども、大半長篇なる故、律のことを短作・短述・短篇・短章などともいへり」

たんしゅど 〔單首奴〕（名）古昔の奴の一。綰首奴に對して、單身にて奴婢籍帳に記入せられたるものなるべし。東南院文書「單首奴廣津」「左正奴」同「單首奴眞立」

たんしゅん 〔探春〕（名）初春の郊外の遊び。天寶遺事「正月、各乘車馬郊宴、爲探春之遊」

たんじゅん 〔單純〕一單一にしてまじりものなきこと。純一。二多端又は複雜なること。

ならざること。單一。㊁條件又は制限のなきこと。商法第四百四十五條ノ五號「單純なる支拂の委託」。

たんじゅん-しゅけんこく 國 (名) 【法】たんいつこく(單一國)に同じ。

たんじゅん-しょうにん (羅 Unbeschränkte Annahme. 佛 Acceptation pur et simple) (名) 【法】相續人が無限に被相續人の權利・義務を承繼すべきことを確認する單獨の意思表示。民法第九百二十一條第三項・第九百二十六條第一項「單純承認」

たんじゅん-せいほん 認證抄本に對して、官公吏の證認なき戸籍などの抄本の稱。

たんじゅん-せん 鐵物を含む量少なき溫泉。

たんじゅん-の-さくご 【法】法律行爲の重要なる內容以外の事項に關する錯誤。

たんしょ ㊀はがき。

たんしょ ㊀端書 (名) ㊀はしがき。

たんしょ ㊀端緒 (名) いとぐち。はし。こぐち。てがかり。「淮南子「一晦一明、誰知其端緒」末「見其發、固已至矣」謝靈運文「接物之機、端緒不一」」

たんしょ ㊀短所 (名) ㊀劣りたる箇所。不得意なる箇所。㊁非難すべき箇所。指摘すべき箇所。

たんしょ ㊀潭渚 (名) 水の深き處と水の淺きところと。水經注「白波奮流、自成潭渚」

たんじょ ㊀淡如 (副) さっぱりとしたるさま、又、執著なきさまにいふ語。たんによ。淡淡。儒光義詩「何以知君子、交情復淡如」南史「人爲之恨、澹如也」

だんしょ ㊀暖處 (名) あたたかき場所。暖地。

だんしょ ㊀壇所 談所 (名) 佛語。だんりん(檀林)に同じ。權僧正良運傳「當寺本東關三談場之一、而爲僧正室」盛衰記「無宗旨、無智の僧に近付きて甚深の佛法をも聽聞し、壇處行法の花香をも手づから自ら營まんと思し召さるる故なり」

たんしょう ㊀探勝 勝地をさぐりて、其の風景を見あるくこと。韓愈詩「日携雲客探勝窮崖頂」

たんしょう 嘆稱 感心してほめそやすこと。いたく稱美すること。嘆奚。

たんしょう ㊀單稱 ㊁簡單なる名稱。複雜ならざる稱呼。詩經「宰夫等、經傳之中、未有單稱宰處」㊂ただ一箇の事物のみをいひあらはすこと。(複稱の對)

たんしょうぎ 單證義 (名) 佛語。講師を務めず、證義のみをなす僧。(參講師の對)

たんしょう-めいだい (英 Singular proposition) (名) 【論】單一なる主辭につき判斷する命題。此の鳥は白し、又は此の花は美しからずの類。

たんしょく ㊀貪食 過度に食すること。家語「大雀善驚而難得、小雀食食而易得」柳宗元文「夫豈貪食而盈名兮」

だんしょく ㊀男色 (名) 男が男の容色を愛すること。なんしょく。(女色の對)戰國策「男色破老」漢書「宰夫等、經傳曰、柔曼之類、意、非獨女德、蓋亦有男色」

だんじり 樂車 山車 (名) 〔臺

(りじんだ)

尻の轅なりと。(婦遊)だし(山車)に同じ。雪女五枚羽子板「樂車うって囃した、樂車うった見なさいな」膝栗毛「あの、もていきをるやつのつら見いやい、檀尻(だんじり)の印持ちと障子もていくやつに、賢いつらはないもんぢやはい」檀尻。車輿。

だんじり-だいこ 樂車太鼓 (名) 樂車(だんじり)の囃しに用ふる太鼓。雪女五枚羽子板「樂車太鼓の曲撥見よ」

だんじり-まひ 樂車舞 (名) 山車(だんじり)の上にて踊る踊をいふなるべし。正章千句「祇園會の山はめきめき興出だしの句だんじり舞ひは上手さう也」

だんじる 談 (自動サ) だんず(談)の訛り。

たんし-ろん ㊀單子論 (獨 Monadologie) (名) 【哲】單子を世界觀の原理となす哲學說。

たんしん ㊀丹心 (名) あかきこころ。まごころ。赤心。丹誠。太平記「四海爲一家、是れ偏に臣が丹心の功と云ひつべし」阮籍詩「丹心失思澤」

たんしん ㊀丹脣 (名) あかきくちびる。朱脣。盧照鄰詩「丹脣開玉齒、妙奪入雲涯」

たんしん ㊀誕辰 (名) 誕生日。誕日。生辰。御書付留元治元年六月「朝廷御誕辰及御忌日・除刑日、御書付」全唐詩話「中宗誕辰、內殿宴聯句」

たんしん ㊀單身 (名) ひとりみ。ただひとり。單獨。後漢書「單身謝病」王建詩「王建詩「單身」」

たんしん ㊀潭心 (名) 水ふかき淵のそこ。みなそこ。水底。朗詠「潭心月泛交枝桂」劉禹錫詩「潭心澄晚鏡、渠口起晴雷」

たんしん ㊀貪心 (名) 貪欲なる心。むさぼる心。慾深き心。

たんしん 炭薪 (名) しんたん(薪炭)に同じ。唐書「以漕炭薪」

たんしん 鍼 (名) たんけん(短針)に同じ。

たんしん 短人 (名) たけの短き人。せのひくき人。矮人。蔡邕文「侏儒短人、憔悴之後」

たんじん 端人 (名) ただしき人。端正なる人。孟子「夫尹公之他端人也、其取友必端矣」

たんじん 丹參 (名) 【植】くはがたさうの異名。本草綱目啓蒙「丹參。にこたぐさ」

たんじん 探訊 さぐりたづぬること。さがししらぶること。

たんしん-こしゅ ㊀單身戶主 (名) 家族なき家の戶主。戶籍法第十三條「單身戶主の死亡又は失踪」

たんしん-ししょ ㊀振子 (名) 【理】しんし(振子)を見よ。

たんす ㊀簞笥 (名) 横にひきだし又はひらき戶ありて、衣類・書物・茶器などを入れ置く匣の稱。天網島「立つて簞笥の小ひきだし明けて」書言字考節用「簞笥、字考節用「簞笥」」

だんず 歎嘆 (自動サ) ㊀なげく。憂へかこつ。うめく。呻吟す。禮記曲禮「當食不歎」嘆、臨樂不歎」同書「威斯歎」㊁いきどほる。憤慨す。史記「子胥仰天歎曰、讒臣誣爲亂」㊂ほむ。感心す。稱美す。禮記樂記「壹倡而三歎」同郊特牲「卒爵而樂閔、孔子屢歎之」

たんず 彈 (他動サ) 樂器の絃をかきならす。かなづ。ひく。奏す。盛衰記「舞彈五絃之琴」

だんす (英 Dance) (名) ふたう(舞蹈)に同じ。

だんず 談 (他動サ) ㊀かたる。とく。說き聞かす。莊子「三日不談」南史「談義飲酒、喧嘩不絕」㊁はなす。かたらふ。相談す。論語「少し談ずべき事の候間、御出であれと申し候へ」㊂かけあふ。談判す。㊃詰り問ふ。詰責す。なじる。

だんず 斷 (他動サ) ㊀きむ。さだむ。決定す。易經「以斷天下之疑」㊁とりさばく。裁定す。周禮「聽而斷之」鹽鐵論「今斷獄、歲以萬計」㊂おしきりてなす。決斷す。史記「斷而敢行、鬼神避之」

(誡)**斷じて行へば鬼神も之を避く** 決心して斷行すれば、成功せざることなし。史記「願小忘大、後必有害、狐疑猶豫、後必有悔、斷而敢行、鬼神避之、後有成功」

(誡)**斷ずべくして斷ぜずんば却つて其の亂を受く** 處斷すべき時に躊躇して處斷せざれば、反つて其の災害を招くに至る。史記「當斷不斷、反受其亂」

たんすう ㊀單數 (名) 【數】單位の數。即ち、一。

たんす-とうしん 簞笥同心 (名) 江戶幕府の職名。作事奉行の配下に屬し、殿中にて御用簞笥の持ち運び等の雜務に從事するもの。京兆尹府記「御簞笥同心にて、三拾俵に貳人扶持の者」抑御簞笥同心とは御作事奉行の手附にて、御殿中において御用簞笥等持ち運び其の外左樣の類を扱ふ役也」

たんす-ぶぎょう 簞笥奉行 (名) てっぱうたんすぶぎょう(鐵砲簞笥奉行)の略。雲州武鑑「御簞笥奉行。燒火、御役料十人扶持、同心廿人宛、內組頭二人宛」

たんす-や 簞笥屋 (名) 簞笥を製造又は販賣する家。元禄萬買物調方記「鏡五面、人形付五句」

たんせ ㊀丹精 前條に同じ。盛衰記「百合若大臣野守鏡八段「殊に丹精悲しく、渴仰の志などか納受なからんや」

たんせい むに 【丹精無二】丹精ならびなきこと。丹精たぐひなきこと。國姓爺九「丹精無二の志、天も感應、地も納受」

たんせい ㊀端正 ただしきこと。きちんとしてあること。たんじゃう。方正。史記「儀狀端正者、補博士弟子」

たんせい ㊀端整 ただしく整(ト)ひたること。きちんと整ふこと。

たんせい ㊀單稅 (名) ただ一箇の租稅。(複稅の對)

だんせ ㊀檀施 (名) 檀家の布施。太平記「僧三人、公家・武家・地下、供佛・施僧の檀施にも非ず」

だんせい ㊀男生 (名) 男子の生徒。男生徒。(女生の對)

だんせい ㊀男性 (名) ㊁をとこのたち。をとこの氣質。㊂をとこ。男子。丈夫。(女性の對)㊃西洋の文法にて、各名詞に就き各固有の性を定めたる中、男の性とするもの。

だんせい ㊀男星 (名) 男を牽牛星に譬へていふ語。をとこぼし。本朝櫻陰比事「こなたも歷歷の男星ながら、年に一度逢ふ方もなく、七夕殿には劣り給ふ」

だんせい ㊀彈性 (名) 【理】外力のために物體が體積又は形狀を變ずるも、外力を去れば再び以前の狀態に復する性。これに形の彈性と體積の彈性とあり。

だんせい の げんど 彈性限度 【理】彈性に起こりたる歪みが、外力を去りたるとき舊態に復し得る極限の力。

たんせいくわ ㊀單性花 (名) 【植】植物學上の用語。一花中に雄蕊か雌蕊かの一方のみを有する花。

だんせいごむ ㊀彈性護謨 (英 Caoutchouc) (名) 【化】熱帶地方に產するごむのきより得る液の凝固したるもの。彈性に富み、水に溶けず、且つ種種の藥品に侵されざるにより、ごむ管・ごむ栓等及び、自轉車・自働車其の他種種の用に供せらる。

だんせいごむのき 彈性護謨樹 (名) 【植】ごむのき(護謨樹)の異名。

だんせいしゅう ㊀單稅制 (英 Single tax) (名) 【經】租稅の制度の一。單稅を以て一國政府の經費全般を支辨する制度。(複稅制の對)

たんせいしょく ㊀單性生殖 (名) 【動】たんゐせいしょく(單爲生殖)の異名。

たんせいせいど ㊀單稅制度 (英 Single tax) (名) 【經】たんせいしゅう(單稅制)に同じ。

だんせいたい ㊀彈性體 (名) 【理】彈性を有する物體。象牙・ごむ等は其の著

しきものなり。

だん-せいと 〔男生徒〕（名）男子の生徒。男生。（女生徒の對）

たんせいろん 〔單稅論〕（名）【經】單稅制を主張する學說。（英 Single tax theory）

たん-せう 〔單少〕すくなきこと。殺漢書南匈奴傳「兵衆單少」

たん-せう 〔短小〕みじかくちひさきこと。又、丈ひくく痩せてあること。矮小。史記趙世家「郭偃軹人也中略爲人短小」

だん-せう 〔談笑〕一打ち解けて談話すること。史記樊噲傳「優孟長八尺、多辯、常以談笑諫諫」二笑ひながら平氣で物語ること。孟子盡心下「越人關弓而射之、則已談笑而道之」

たん-せき 痰咳（名）一痰と咳と。二痰の出づる咳。

たん-せき 〔痰積〕（名）たんいん（痰飲）に同じ。柳春陽舊例的三文化四年十二「私儀久久痰積に而、氣分差塞、相勝不申候に付」

たん-せき 〔儋石〕（名）〔たん（儋）は二石、せき（石）は一石〕僅かばかりの米穀の量。轉じて、いささかなること。

たんせきのたくはへ 儋石儲 僅かばかりの米穀の貯蓄。轉じて、いささかなる貯へ。漢書蕭望之傳「家産不過十金、家無儋石之儲、晏如也」

たんせきのろく 儋石祿 いささかなる俸祿。漢書蕭望之傳「守儋石之祿」

たん-せき 〔歎惜〕なげきをしむこと。

たん-せき 〔袒裼〕はだぬぐこと。詩經豳風「憂裼暴虎、獻于公所」孟子萬章下「惡乎、袒裼裸裎於我側」

たん-せき 〔旦夕〕一あさぼん。あけくれ。あさゆふ。旦暮。朝夕。朝暮。白居易詩「旦夕秋風多、衰荷半傾倒」二つねづね。しじゅう。ふだん。しょっちゅう。書經冏命「旦夕承弼厥辟、出入起居、罔有不順、欽」漢書孔光傳「與帝旦夕相近」三時機の切迫して、今夕か明日かといふほどなるにいふ語。且暮。

たんせきにせまる 迫旦夕 今夕か明日かといふほどに時機切迫す。「病、旦夕に迫る」

たんせき-しゃう 〔膽石症〕（名）【醫】膽嚢などに石を生ずる病。石灰質多き食物、美食・逸居等によりて起こる。右上腹部に發作性の劇痛を發し、惡心・嘔吐・發熱・筋肉痙攣等を催し、往往人事不省に陷る。老齢の婦人に多し。

たんせき-りう 〔丹石流〕（名）劍道の一流。衣斐丹石人道を流祖とするもの。武術流祖錄刀劍丹石流。衣斐丹石人道」

たん-せつ 〔短折〕わか死にすること。はやじに。短命。夭折。夭死。早世。禮記曲禮「短折曰不祿」書經洪範「未冠曰短、未昏曰折」

だん-せつ 〔斷截〕たちきること。截斷。謝靈運文「斷截衢巷」

だん-せつ 〔斷絶〕一たゆること。きること。繼續せぬこと。盛衰記「三十餘代の節會なり、數百年の吉例なり、何ぞ今年始めて斷絶するや」後漢書王哀傳「不能使其斷絶」二たちきること。きりはなすこと。戰國策趙策「斷絶人之交」

だんせつのあふぎ 團雪扇（句）〔班婕妤の詩に新裂齊紈素、鮮絜如霜雪、裁成合歡扇、團團似明月」とある故事より出づ）まろく地の白き扇。本朝文粹八月三日班婕妤團雪扇、代鼎風（今長忘）「謠短文」「憲の秋風冷かに吹き落ちて、團雪の扇もゆきなれば、名を聞くもすさまじくて秋風恨みあり」

だん-せつ 〔斷絶〕一たゆること。きること。盛衰記「三十餘代の節會なり、數百年の吉例なり、何ぞ今年始めて斷絶するや」後漢書王哀傳「不能使其斷絶」二たちきること。きりはなすこと。戰國策趙策「斷絶人之交」

だんせつめん 〔斷切面〕（名）切斷したる面。きりくち。切斷面。

だん-せふ 〔男妾〕（名）をとこめかけ（男妾）に同じ。

たん-せん 〔段錢〕（名）古昔、天下に重事あるに當たり、其の費用に充つるため、田租の外に、田地の段別高に應じて賦課したる錢。室町時代より始まる。たかわり。建武式目追加「應永二十九年中略役夫工米以下段錢京濟事」親元日記寛正六年八月「後小松院三十三年忌御佛事料、禁裏御所美濃國伊自良段錢事、一段別拾疋宛令支配之」

たん-せん 〔單線〕（名）一一條の線路。（複線の對）二一條の線。

たん-せん 〔短錢〕（名）（省略）に同じ。（長錢の對）

たん-せん 〔短箋〕（名）一みじかき料紙。二隨短なる書簡。劉禹錫詩「因君達短箋」

たん-せん 〔短淺〕みじかくあさきこと。あさはかなること。漢書孔光傳「智謀短淺」

たん-ぜん 〔丹前〕（名）一たんぜんすがた（丹前委）の略。二どてらの異稱。三たんぜんぶし（丹前節）の略。東海道名所記「比丘尼中略歌をうたふ、頌歌は聞きも分けられず、たんぜんとかやいふ曲節なりとて、ただあああと長たらしく引きずりたるばかりなり」圓雪蹈の鼻緒の一種。丹前委したる人の用ひたるもの。色芝居草子「つめ袖に後帶、もみの丹前をはきものにあてがひ」五芝居にて、役者が舞臺より花道を經て揚幕に入るとき歩む一種の足の踏み方。六法。六芝居にて、吉原通ひの丹前委の出でまた六法などに用ふる三味線入の合方なり。津島丹前・あばれ丹前等あり。佐渡島日記「六法といふ風俗は中略江戸さんちや通ひの風俗をして見せけるより起こりけるとなん、江戸にては丹前といひ、大阪にては出端といふ」役者全書「丹前」

たん-ぜん 〔端然〕（副）正しくととのひてあるさまにいふ語。きちんと。

たん-ぜん 〔赧然〕（副）恥ぢ入りて赤面するさまにいふ語。

たん-ぜん 〔坦然〕（副）平坦なるさまにいふ語。坦坦。

たん-ぜん 〔湛然〕（副）一十分に湛へたるさまにいふ語。二靜にして動かざるさまにいふ語。王維文殊師利問疾「湛然不動」

たん-ぜん 〔澹然 淡然〕（副）さっぱりとしたるさまにいふ語。楊雄文選「使海內澹然、永無邊城之警、命革之悲」李白詩「天地皆得一、澹然四海清」

だん-ぜん 〔團扇〕（名）一ぐんばいうちは。晉書樂廣傳「捉白團扇」二遠平團扇持ち」國姓爺九番「大將團扇おっ取って中略日本流の軍の下知」

だん-ぜん 〔斷箭〕（名）折れたる矢。をれや。

だん-ぜん 〔斷線〕一線のきれること。又、きれたる線。孟郊詩「敝服斷線多」二電線・線路などの不通となること。

だん-ぜん 〔斷然〕（副）一おしきりてなすさま、又は固く執りて動ぜぬさまにいふ語。二舉動のきっぱりとしたるさま、又は決心したるさまにいふ語。

たんぜん-あたま 丹前頭（名）丹前委したる人の頭。男色不芽淵「浪人なれば氣隨の病氣分、中がり撫でての丹前頭」

たんぜん-おび 丹前帶（名）丹前委の人の用ひたる幅の廣き帶。天和笑委集五「腰に餘れる丹前帶、うしろへきりりと引き廻し、吉彌やうに結ぶもあり」

だんぜん-がさ 丹前笠（名）丹前委の人のかぶりたる一種の編笠。風流なる編笠。よだれかけ「丹前笠に丸ぐけの紐つけてかぶるもあり」

だんぜん-がた 團扇形（名）梨の實を兩斷したる如き形。即ち、支那の團扇の形。だんせんなり。

たんせん-きだう 〔單線軌道〕（名）一條にて其の上に上行車・下行車を運轉する軌道。

たんせん-くにわけ-ぶぎやう 段錢國分奉行（名）室町幕府の職名。國國を奉行人に分附して、段錢を收納せしむるもの。發、たんせんぶぎやう（段錢奉行）を見よ。常照愚草二「諸國へ段錢被相懸一時は、奉行衆圖をとりて、其の國は誰れ誰れと被分之、是れを國分の奉行と申す也」

たんせん-じきや 丹前縞（名）丹前委の人のきる著物の縞柄。風流なる縞柄。正月攝津名所圖會「龜屋島・丹前島・金時羽織」

たんせん-すがた 丹前委（名）〔丹後殿の前の委の略〕江戸神田堀丹後守の邸前にありたる風呂屋の湯女勝山の風をまねて起こりたる一種の風俗にて、江戸の遊冶郎、又は俠客などの間に流行したるもの。

たんせん-せきだ 丹前雪蹈（名）丹前委の人の用ふる雪蹈。風流なる雪蹈。團扇會我座鉢狂言「あさぎ緒の丹前せきだ」

たんせん-そうぶぎやう 〔段錢總奉行〕（名）たんせんぶぎやう（段錢奉行）に同じ。日記文明十年廿日「諸國段錢總奉行事、松田丹後守秀興被仰附之」

だんせん-たちばな 〔たちばな（橘）を見よ。

たんぜん-たてがみ 丹前立髮（名）月代を剃らずに長くはやしたる丹前頭。猶、下文を見よ。居龍工隨筆「今歌舞伎狂言にする丹前立髮六方は、其の比丹後殿前の風呂屋へ通ふ若侍どもの、病氣分にして引き籠もり居たるが、長髮にてかしこへ通ひたるが、ふと伊達に見えければ、月代剃りて能き人も皆長髮にて通ひしより發りしとなり」

だんせん-ちゃうはん 〔だんせんぶぎやう〕（名）紋所の名。ちやうはん（打板）を見よ。

だんせん-なり 團扇形（名）だんせんがた（團扇形）に同じ。

たんせん-はふ 〔單選法〕（名）【法】ちよくせつせんきよ（直接選舉）に同じ。

たんぜん-ふう 〔丹前風〕（名）たんぜんすがた（丹前委）に同じ。一代男「丹前風と申すは、江戸にて丹後殿前に風呂ありし時、勝山と云へる女、すぐれて情深く、髮容・とりなり、袖口廣く、つま高く、萬に付けて世の人にかはりて、一流是れより始めて、後はもてはやして、吉原に出世して、不思議の御方までそひふし、例なき女の侍り」

たんせん-ぶぎやう 〔段錢奉行〕（名）室町時代の職名。段錢のことを掌るもの。

たんぜん-ぶし 丹前節（名）寛文頃、江戸に行はれたる一種の小唄節。芝がき節の唱歌に、湯女勝山が事を作り入れたるものなるべし。丹前。東海道名所記「此の頃のたんぜんぶしを、道中にも謠ひつれて」

たんぜん-ぶろ 丹前風呂（名）〔丹後殿の前の風呂の略〕江戸神田堀丹後守の邸前にありて、湯女をかかへ、遊里の委をなさしめたる町屋風呂。寛永の頃より榮えしが、明暦三年禁止せらる。浮世風呂三上「丹前風呂の風流は古へに廢たれども」

たんせん-ぎす 反錢升（名）昔時の升の一種。大和國奈良藥師寺に傳ふるものは天文十五年（略）の造る所にて、徑四寸六分廣、深さ二寸五分餘にて、今の八合五勺を容るるといふ。好古小錄「反錢升（略）天文十五」古今要覽稿「藥師寺反錢升」

たんぜん-もとゆひ 丹前元結（名）なみより太き元結。天和笑委集「よしや風俗つかみざし中略たんぜんもとゆひ・四角まげ」

たんぜん-もやう 丹前模樣（名）風流なる模樣。

たんぜん-もん 丹前紋（名）風流なる紋。戀といふ字に櫻の折枝、袖といふ字に菊の花の類。

たんそ 〔炭素〕（名）【化】動植物體を構成する主たる元素。結晶狀のもの（金剛石・石墨）と無定形のもの（油煙・木炭・石炭等）とあり。頗る安定なる元素にして、酸・あるかり等諸種の藥品に侵されず難し。酸素と化合して炭酸瓦斯となる。其の符號はCにして、原子量は一二なり。

たんそ 〔歎訴〕なげき訴ふること。事情を打ちあけてあはれみを乞ふこと。愁訴。

だんそ 〔斷礎〕（名）われたる礎石。于石詩「荒丘奔狐兎、斷礎悲蛩蟲」

たんそう 〔炭層〕（名）地中に於ける石炭の層。岩石の間に存在し、恰も廣大なる黑板を疊の間に挾みたる如き狀をなす。

だんそう 〔斷層〕（名）【地】地熱が放散して地殼の收縮する結果として、裂罅生じ、地殼の一部之に沿ひて上り落ち、其の連絡の斷絶せること。地すべり。

だん-そう 〔彈奏〕一絃樂器をかきならすこと。ひきかなづること。二彈劾・上奏すること。職員令彈正「尹一人掌彈糾諸違失事」齊書謝朓「隗之彈奏不畏」張說「皆此類也」

だんそう-さんがく 〔斷層山岳〕（名）【地】地殼の裂罅に沿ひ、一方の地盤が陷落したるため、殘りたる部分が他に比して高く聳え、山岳の狀をなすに至りたるもの。

だんそう-ぢしん 〔斷層地震〕（名）【地】斷層に沿ひて一方の地盤が上り落つるより生ずる地震。山脈と並行する斷層によりて起こるものと、山脈を横斷する斷層によりて起こるものとあり。我が國にて平常感ずる地震は多く是れなり。地上地震。

だんそう-めん 〔斷層面〕（名）【地】斷層したる地層の面。

たん-そく 〔歎息〕なげきてためいきすること。いたくなげくこと。太平記十七、隱岐三論「其積惡、誰不歎息」禮記奏議「愾然必有聞乎其歎息之聲」

たん-そく 〔探測〕さぐり且つはかること。敵狀などを探知し、又は風位などを測ること。

だん-そく 〔斷續〕或ひはたえ或ひはつづくこと。きれたりつづきたりすること。唐太宗詩「哀笳時斷續」

たんそく-ざきう 〔探測氣球〕（名）軍用氣球の一。夜間の信號、風位の測知又は通信の用に供するもの。

だんそん-ぢよひ 〔男尊女卑〕（句）社會に於ける男女の地位・權力が不平等にして、男は女よりも高く、女は男に屈從すること。列子天瑞「男女之別、男尊女卑」

たんだ 唯（副）ただ（唯）の訛り。

譬喩尋「たんだ弱りに弱って、終に空しくなる」槍權三下「たんだ振れ振れ、な、愛で切れさ。踊る姿の懐かしや」

たん-たい 【單體】（名）一單一なる物體又は體質。二【化】二種以上の物質に分解すべからざるもの。

たん-たい 【毯代】（名）布帛を染めて毯に代用したる敷物。造酒司式「布畫毯代一領」江次第「小朱敷二色綾毯代」伊呂波字類抄「毯ノ代用ル」

たん-だい 【探題】一詩歌などの會にて、各人別別に題を探り取りて詩歌を作ること。名目抄「探題ハ内宴・賀茂・相撲等時ノ作文節ノ事也」散木集「同じ殿下にて、探題の歌よませ給ひけるに、櫻をとりてよめる」王建詩「探題得二幽名一」二經典論議のとき、題を出だして其の答辯の可否を判ずる役僧。江次第「五月五日宴等ノ次探題參」釋家官班記「勅會探題事」三鎌倉・室町時代、重要なる地方に置き、其の地方の政務・訴訟を掌り、且つ外寇に當たりたる職名。六波羅・探題・長門探題・九州探題・奥州探題の類。各條を見よ。

たん-だい 【膽大】（名）膽の大なること。大膽。

だん-たい 【男體】（名）男子のすがた。男子のなり。なんたい。女體の對）

だん-たい 【團體】（名）一くみ。むれ。二多數人が協同一致して組織したる一體。著作權法第五「官公衙學校社寺協會會社其の他團體に於て」

だん-たい 【暖帶】（名）をんたい（温帶）に同じ。

だんたい-さくわん 【團體機關】（名）【法】團體のために其の意思を形成し、其の行爲を行ふ機關。即ち、法人の理事・監事、自治團體の府縣會・府縣參事會の類。

だんたいさやうせい 【團體行政】（名）【法】府・縣・郡市・町・村、其の他の公共團體の自治行政。

だんたい-しょうけん 【團體證券】（名）【法】團體の社員權を表彰する證券。即ち、株券の類。Korporationspapier）

たん-たいせき 【端堆石】（名）【地】しゆうたいせき（終堆石）に同じ。

だんたい-せんきょ 【團體選擧】（名）【法】或る者の選擧につき、箇人が直接に選擧人となることなく、其の箇人の組織せる團體が選擧人の地位に立ちて行ふ選擧。

たん-たう 【短刀】（名）みじかき刀。あひくち。短劍。刀劍記「短刀を耳くじりと唱へ候事、古くより有之候哉」南史「景命ハ戰士被短甲、短刀、但低視、斫人脛馬足、遂敗紹宗軍」

たん-たう 【單刀】（名）ただ一本の刀。又、ただ一人刀を執ること。陳書「僧朗、單刀步授」

たんたう ちょくにふ 【單刀直入】ただ一人刀を執りて、直ちに敵陣に斬り入ること。轉じて、手みじかに其の物事につきこむこと。傳燈錄「單刀直入、則凡聖盡露眞」

たん-たう 【歎悼】なげきいたむこと。歎傷。

たん-たう 【探討】さぐりたづねること。しらべきはむること。探究。沈佺期詩「陰壑已永閉、雲寶絕探討」

たん-たう 【探湯】一熱湯の中に手を入るること。二くがたち（探湯）に同じ。

たん-たう 【探湯】一あつきに苦しむ譬へにいふ語。列子「及其日中如探湯」回おそれ戒めて、手を出だざる譬へにいふ語。論語季氏「見善如不及、見不善如探湯」

たん-たう 【擔當】うけもつこと。ひきうけ。擔任。

たん-だう 【坦道】（名）平坦なる道路。坦途。坦路。吳船錄「更上六十里、有一夷坦道」曰「美容坪」

だん-だう 【彈道】（名）發射せられた彈丸の通過する道。通常、拋物線の狀をなす。

たん-たう-にん 【擔當人】（名）擔當する人。受持人。擔任者。

たんたう-るゐ 【單糖類】（名）【化】自己よりも更に簡單なる糖類に變ずべき加水分解を受けざる糖類。

たんだえる 【紕する】（自動）（名）一説、拱（タンダエル）の轉訛なりと。北夢琑言「村田了阿」考ふ。又、紕す。吟味す。尋問す。

たん-だか 段高 反高（名）江戸時代、新開の地にして地質粗惡又は收穫不定なるものに限り、其の段別のみを檢定して輕き稅を課したること。地方要集錄「新田等惡地之場所は高を不附、反高と申し候う両、町分計り記し候う両、相應之取り箇を附け置き候所、關東には數多有之事に候」

たんだかば 段高場（名）段高としたる田地。地方凡例錄「反高新田取り立つるといへども、芝地等にて至つ両惡地又は池沼等之植ゑ出し堤外不定地、田水之度毎押し流す樣成る場所、反別計り至檢地取箇を附け、高に不入田地を反高場と云ふ」

たんだく 【拱】（自動）たむだく（拱）に同じ。譚子「人間の水は南に流れ、星は北にたんだく」

だんだ-どう 【檀茶幢】（名）【だんだは梵Dandaの轉訛なりとて、上に人頭の形を載せたる幡。罪人を治罰する幾なりと。砂石集「幡の上に人の頭あるをば人頭幢とも檀茶幢ともいふ、これは善惡の業を見て閻王に奏する冥衆なり」

だん-だら 段段（名）一だんだん（段段）に同じ。波動。二だんだらじま（段段縞）、又はだんだらぞめ（段段染）の略。

だんだら-じま 段段縞（名）段段の次第に高き坂路。

だんだら-ざか 段段坂（名）階段の段段縞（名）異なりたる色絲にて織りたる横縞。段段筋（ダンダンザ）に織りたる縞物。

だんだら-すぢ 段段筋（名）横筋が異なりたる色にて段段になりをる模樣。竹齋物語「船歌中お若い衆のお女郎衆達のなりふりは、肩にかのこのだんだら筋、袖にうきよのぬめり筋」小町踊「雲の袖のだんだら筋か横がすみ」

だんだら-ぞめ 段段染（名）段段筋（ダンダンザ）に染むること。又、其の染物。手綱染。

たんたらむ （英Tantalum）（名）【化】極めて融熔し難き金屬。比重一六・六、酸・王水・あるかり等に對しても極めて安定なるを以て、白金の代用とせらる。又、たんたらむらんぷ・の製造にも用ひらる。

たんたらむ-らんぷ （英Tantalum lamp）（名）【理】白熱燈の一種。其の炭素線の代りにたんたらむ・の細線を以てしたるものにして、八百時間乃至千時間の壽命を有し、一燭光につきて約一・五わっと・の電力を費す。

たん-たん 【副】舌鼓などを打つ音。堀河波鼓「舌鼓たんたんと打ち」

たん-たん 【眈眈】（副）虎などの物をねらひ見るさまにいふ語。易經上經、虎視眈眈、其欲逐逐」

たん-たん 【淡淡 澹澹】（副）一物事にあはさまに、又、執著のなきさまにいふ語。淡如。劉向文九思「情澹澹其若淵」二水の靜に動くさまにいふ語。張衡文「東京賦」「淥水澹澹」

たん-たん 【坦坦】（副）平坦なるさまにいふ語。坦然。易經上經「履道坦坦、幽人貞吉」

たんたん 【湛湛】（副）一水などの滿ちたたふるさまにいふ語。宋玉文「湛湛江水兮」杜甫詩「長江滾滾去」二露の繁きさまにいふ語。詩經小雅「湛湛露斯、匪陽不晞」

たん-たん 【潭潭】（副）水などの深くたたふるさまにいふ語。盛衰記「義經人、深淵たんたんとして、巨海の波に浮かべるが如し」

だん-だん 【段段】一きだ。だん。階段。二きだきだ。きれぎれ。諸藝久「經文あらたに疊りなき、鉤段段に折れにけり」三次第。條條。かどかど。くだりくだり。狂言「只今の段段、申し上げたれば」同「是れで、段段聞きわけました」四順序を追ひて進むさまにいふ語。次第次第。漸漸。漸次。大鑑「狂言綺語「是れは段段面白う御座る」

だんだん の はた 段段旗 旗の地色、段を爲して いろいろ染め分けたるもの。北條五代記「笠原新六郎、松田が旗は、白地に黑筋のだんだんなり」

だん-だん 【團團】（副）一まどかなるさま、丸きさまにいふ語。賈島詩「團團藥海蟾、冉冉出雲衢」班婕妤詩「團團如明月」二露しげきさまにいふ語。謝惠連詩「團團滿葉露」

だんだん-こ 【斷斷乎】（副）極めて斷乎たるさまにいふ語。斷斷然。斷斷。

たん-たん-ぜん 【赧赧然】（副）いたく赤面したるさまにいふ語。孟子「公孫丑」「其色赧赧然」

だん-だん-ぜん 【斷斷然】（副）極めて斷乎たるさまにいふ語。斷斷乎。

だんだん-づけ 段段付（名）【だんだんに付け句する義】前句の終りの五文字を、次の句の初めの五文字に用ひて句を作ること。もぢり。

だんだん-をどし 段段縅（名）いろいろをどし色色縅に同じ。

たん-ち 【丹墀】（名）【支那、漢の時代に皇宮の階下の地を一面に丹朱にて塗り固めたるよりいふ】宮殿の階下。轉じて、宮殿の稱。太平記「四美、冠佩璫、丹墀月、堂上堂下如再開花」漢書「百官公卿表」「以丹朱塗地、謂之丹墀」張衡文「西京賦」「青瑣丹墀」

たん-ち 【膽智】（名）膽力と智慧と。勇氣とちゑと。勇智。後漢書「鄧禹傳」「其膽智」

たん-ち 【短智】（名）智慧のすくなきこと。

たん-ち 【探知】さぐり知ること。かぎつくること。偵知。

たん-ち 【暖地】（名）氣候の暖き土地。吳融詩「自是孤根非暖地、莫教他木耐秋風」

だん-ちがひ 段違（名）いく段も懸けはなれをりて、及びもつかぬこと。

だん-ちぢみ 檀縮（名）檀紙の類。「檀紙」

だん-ちゃ 【磚茶】（名）紅茶若しくは綠茶の粉末にて製したる薄板狀の支那茶。創りて飲料に供す。

たん-ちゃう 【丹頂】（名）一頂（チヤウ）のあかきこと。陳游詩「鶴雛日長丹砂頂、巖溜時聞玉佩聲」二【動】鳥類中、涉禽類の一種。體の高さ三四尺餘。脚・頸・嘴共に甚だ長し。體の主部は純白にして、頭上は赤色、額・眼先・頤・頰及び喉部より下頸背部に亙る部と尾端に垂たる羽とは黑色なり。此の尾端の黑羽は翼に屬するものにして尾羽にあらず。尾羽は白色なり。嘴は綠色を帶び、脚は黑色。西比利亞地方に產し、冬季我が國北地に渡來することあり。たんちやうづる。

（二うやちんた）

たん-ちゃう 【短長】（名）一みじかきとながきと。一代女「此の二人生死格別の思はく違ひ、人命短長の間今に見果てぬ夢に歩み」左傳「文公十三年」「死之短長時也」二短所と長所と。優劣。史記「扁鵲傳」「朱公長男見莊生、以爲殊無短長」

だん-ちゃう 【團長】（名）團の稱ある團體又は機關などの主宰者。即ち、海兵團長の類。海兵團條例「第四條」「團長」

だん-ちゃう 【斷腸】はらわたのちぎるるほどのかなしみ。かなしみに堪へかねること。萬葉「獨流斷腸之泣」朗詠「江從巴峽初成字、猿過巫陽始斷腸」魏文帝詩「念君客遊思斷腸」

だんちゃう の おもひ 斷腸思 腸（ハラワタ）のちぎるるほどかなしき思ひ。悲哀の切なる思ひ。

だん-ちゃう 【壇場】（名）壇を設けたる場所。國語「魯語」「壇場之所」史記「孟荀傳」「齊戒設壇場具禮乃可耳」

だん-ちゃう 【談場】（名）佛語。だんりん（檀林）に同じ。禪僧正良運傳「東關三談場之一」同「東關八談場學徒、受菊定戒之處」

だんちゃうらくわ 【斷腸花】（名）【植】しうかいだう（秋海棠）の異名。

たんちゃう-づる 丹頂鶴（名）【動】たんちゃう（丹頂）に同じ。

たんちゃう-の-つる 丹頂鶴（名）【動】前條に同じ。諸禽鳥「丹頂の鶴も、一千年の齡を君に授け奉り」

たんちゃく-さより 【彈著距離】（名）彈丸の發射せられたる地點より、其の到著したる地點までの距離。

だん-ちゅう 【檀中】（名）檀家の中。檀家ぢゆう。廢合寺院跡地並建物處分規則「第五」「建物は檀中等の私費を以て造營せしもの及び境内地田畑山林等檀中の私費を以て買得して地租を納めしもの」

たんちゅう-るゐ 【單柱類】（名）【動】動物學上の用語。軟體動物、鰒類の一亞目。二枚貝は通常前後二箇の肉柱を有するも、或るものに限りて、前方のものを缺くものあり、此の類の稱。かき・ほたてがひの類。（異柱類・同柱類の對）

たん-ちょ 【端緒】（名）たんしよ（端緒）を見よ。

だん-ちょ 【男女】（名）をとことをんなと。なんにょ。易經上經「男女正、天地之大義也」禮記「雜記」「男女不雜坐」

だんぢょ どうけん 【男女同權 男子と女子とは社會に於て同等の權利をもつべくして、高下あるべからずといふこと。

（條）男女七歳にして席を同じうせず 支那に於ける男女間の禮として、男と女とは七歳以上は互ひに室を異にして慎むべしとの意。禮記「内則」「七年男女、不同席、不共食」

たん-ちょく 【端直】ただしきこと。

正直。端正。

たん-ちり 丹縮（名）次條の略。絹布重寶記「丹縮（柔弱中軟丹縮）中の佳品なり」

たん-ちりめん 丹縮緬（名）たんどちりめん（丹後縮緬）の略。絹布重寶記「丹縮緬は」

だん-つう 毯子 段通（名）〔毯子の字の唐音〕麻を原料とし、羊毛・牛毛又は絹絲などをまじへて織りたる織物。もと支那より舶來し、おもに敷物に用ふ。

だん-つぼ 痰壺（名）痰を吐き入るる壺。たんはきつぼ。

たん-てい 単丁（名）ただひとりの壯丁。齊書「凡單丁之身、及孤獨而秩羸羸孤者」

たん-てい 単艇（名）ただ一艘の小舟。酒鑑「單艇逃去」

たん-てい 端艇 短艇（名）一はしけぶね。こぶね。陸游詩「短艇湘湖自采菱」二ぼーと・に同じ。

たん-てい 探偵（名）一ひそかに事情を探りしらぶること。二ひそかに諜人及び諜狀をさぐりしらぶること。又、その役のもの。おんみつ。三敵の事情を探りしらぶるもの。まはしもの。しのびのもの。

だん-てい 男丁（名）夫役に出づる男子。隋書食貨志「其男丁、每歲役不過二十日」

だん-てい 断定（名）一判斷して決定すること。さばきむること。袁宏直詩「斷定今年不看花」二〔論〕はんだん（判斷）に同じ。

たん-てい-がかり 探偵掛（名）探偵の事に當たる人。

たん-てい-げき 探偵劇（名）探偵ものの演劇。

たん-てい-せつ 探偵小說（名）犯罪者の探偵を筋としたる小說。

たん-てい-ちん 探偵陣（名）ていぢん（偵陣）を見よ。

たん-てい-ぶ 探偵物（名）犯罪の探偵を筋としたる脚本・小說・講談などの稱。

たん-てい-り 探偵吏（名）探偵の事に當たる警察吏。

たん-てう 丹鳥（名）〔動〕ほたる（螢）の異名。

たん-てう 単調（名）一單一なる調子。一本調子。二ものに變化なきこと。單一なる趣向。

だん-てう 暖潮（名）あたたかき潮流。

たん-てき 端的（副）まのあたり。古節用「端的」用明天皇職人鑑「たんてきの法を以て帝位に登り」朱子語錄「卓然自信、無所汚染、此其所見、必有端的處」「楊萬里詩「酒香端的似梅無」

たん-てき 耽溺 酖溺 酒色にふけりおぼれること。酖湎。

だん-てき 談敵（名）はなしあひて。ことばがたき。

たん-てつ 鍛鐵（名）一鐵をきたふること。又、きたへたる鐵。白居易詩「彈琴復鍛鐵、比我未爲慵」二〔化〕鐵の諸種類中、炭素の含量最も少なき鐵。銑鐵を精製して得。銑鐵及び鋼鐵に比し强靭にして熔融難く、赤熱に於ては互ひに鍛接することを得るより、諸種の鐵器を造るに用ひらる。

たん-てつ-ぢやう 鍛鐵場（名）鍛鐵の工場。

たん-てぶ 短帖（名）半帖の數物。掃部寮式「供奉式料、短帖一枚（長四尺五寸、廣三尺二寸）」

だん-でら 檀寺（名）だんなでら（檀那寺）の略。

たん-でん 丹田（名）たんれん（鍛鍊）の訛り。

たん-でん 丹田（名）臍より下一寸半許りの所。身心の精氣の集まるところといふ。したはら。和漢三才圖會「石門（丹田、命門在臍下氣海下五分、三才圖會下三焦募也）夜船閑話「人に眞一の氣あり、丹田の中に降下する則は一陽また復す」黃庭經「丹田之中精氣發、玉池清水上生肥」

たん-でん 炭田（名）炭層のある地。

たん-でん-でん 単傳（名）一ただ其の人にのみ傳ふること。二文字・言語の媒介によらずして、心より直ちに心に教へ傳ふること。以心傳心。祖庭事苑「達磨西來、不立文字、單傳心印、直指人心、見性成佛」

だん-てん-もん 談天門（名）大內裏の外郭にある十二門の一。西面にあり、藻壁門の南、南端の第一門なり。

たん-と 坦途（名）平坦なる道路。坦道。韓愈詩「近來自說尋坦途、猶上虛空跨駑駘」

たん-と 副 たくさん。どっさり。多く。たぶん。多量。綫留「折り折り打ち惱む有樣見せて、たんと氣の毒がらせ」曾根崎心中「何やらわけの惡い事ありて、たんと撲たれさんしたと聞いたが」

だん-と 檀徒（名）檀家のなかま。檀方。狂言「檀徒は是れ萬行の宗門、是れに依て親疎を殘さず、佛も布施を取れとこそ說き給ふ程に」

だん-と 檀度（名）佛語。だんはらみつ（檀波羅密）の稱。太平記「末葉永く當社の檀度と成って、靈神の威光を輝かし奉るべし」

たん-とう 段頭（名）田積の名。一枚（長三尺五寸、廣三尺二寸）

だん-とう 檀頭（名）たんれん（鍛鍊）の訛。

たん-とう 段通（名）〔毯子の字の唐音〕麻を原料とし、羊毛・牛毛又は絹絲などをまじへて織りたる織物。もと支那より舶來し、おもに敷物に用ふ。

だん-つう 毯子 段通（名）〔毯子の字の唐音〕麻を原料とし、羊毛・牛毛又は絹絲などをまじへて織りたる織物。もと支那より舶來し、おもに敷物に用ふ。

だん-つぼ 痰壺（名）痰を吐き入るる壺。たんはきつぼ。

たん-てい 単丁（名）ただひとりの壯丁。齊書「凡單丁之身、及孤獨而秩羸羸孤者」

たん-てい 単艇（名）ただ一艘の小舟。酒鑑「單艇逃去」

たん-てい 端艇 短艇（名）一はしけぶね。こぶね。陸游詩「短艇湘湖自采菱」二ぼーと・に同じ。

たん-てい 探偵（名）一ひそかに事情を探りしらぶること。二ひそかに諜人及び諜狀をさぐりしらぶること。又、その役のもの。おんみつ。三敵の事情を探りしらぶるもの。まはしもの。しのびのもの。

だん-てい 男丁（名）夫役に出づる男子。隋書食貨志「其男丁、每歲役不過二十日」

だん-てい 断定（名）一判斷して決定すること。さばきむること。袁宏直詩「斷定今年不看花」二〔論〕はんだん（判斷）に同じ。

たん-てい-がかり 探偵掛（名）探偵の事に當たる人。

たん-てい-げき 探偵劇（名）探偵ものの演劇。

たん-てい-せつ 探偵小說（名）犯罪者の探偵を筋としたる小說。

たん-てい-ちん 探偵陣（名）ていぢん（偵陣）を見よ。

たん-てい-ぶ 探偵物（名）犯罪の探偵を筋としたる脚本・小說・講談などの稱。

たん-てい-り 探偵吏（名）探偵の事に當たる警察吏。

たん-てう 丹鳥（名）〔動〕ほたる（螢）の異名。

たん-てう 単調（名）一單一なる調子。一本調子。二ものに變化なきこと。單一なる趣向。

だん-てう 暖潮（名）あたたかき潮流。

たん-てき 端的（副）まのあたり。古節用「端的」用明天皇職人鑑「たんてきの法を以て帝位に登り」朱子語錄「卓然自信、無所汚染、此其所見、必有端的處」「楊萬里詩「酒香端的似梅無」

たん-てき 耽溺 酖溺 酒色にふけりおぼれること。酖湎。

だん-てき 談敵（名）はなしあひて。ことばがたき。

たん-てつ 鍛鐵（名）一鐵をきたふること。又、きたへたる鐵。白居易詩「彈琴復鍛鐵、比我未爲慵」二〔化〕鐵の諸種類中、炭素の含量最も少なき鐵。銑鐵を精製して得。銑鐵及び鋼鐵に比し强靭にして熔融難く、赤熱に於ては互ひに鍛接することを得るより、諸種の鐵器を造るに用ひらる。

たん-てつ-ぢやう 鍛鐵場（名）鍛鐵の工場。

たん-てぶ 短帖（名）半帖の數物。掃部寮式「供奉式料、短帖一枚（長四尺五寸、廣三尺二寸）」

だん-でら 檀寺（名）だんなでら（檀那寺）の略。

たん-でん 丹田（名）たんれん（鍛鍊）の訛。

たん-でん 丹田（名）臍より下一寸半許りの所。身心の精氣の集まるところといふ。したはら。和漢三才圖會「石門（丹田、命門在臍下氣海下五分、三才圖會下三焦募也）夜船閑話「人に眞一の氣あり、丹田の中に降下する則は一陽また復す」黃庭經「丹田之中精氣發、玉池清水上生肥」

たん-でん 炭田（名）炭層のある地。

たん-でん 単傳（名）一ただ其の人にのみ傳ふること。二文字・言語の媒介によらずして、心より直ちに心に教へ傳ふること。以心傳心。祖庭事苑「達磨西來、不立文字、單傳心印、直指人心、見性成佛」

だん-てん-もん 談天門（名）大內裏の外郭にある十二門の一。西面にあり、藻壁門の南、南端の第一門なり。

たん-と 坦途（名）平坦なる道路。坦道。韓愈詩「近來自說尋坦途、猶上虛空跨駑駘」

たん-と 副 たくさん。どっさり。多く。たぶん。多量。綫留「折り折り打ち惱む有樣見せて、たんと氣の毒がらせ」曾根崎心中「何やらわけの惡い事ありて、たんと撲たれさんしたと聞いたが」

だん-と 檀徒（名）檀家のなかま。檀方。狂言「檀徒は是れ萬行の宗門、是れに依て親疎を殘さず、佛も布施を取れとこそ說き給ふ程に」

だん-と 檀度（名）佛語。だんはらみつ（檀波羅密）の稱。太平記「末葉永く當社の檀度と成って、靈神の威光を輝かし奉るべし」

たん-とう 段頭（名）田積の名。一段の十分の一。即ち、三十六歩。拾芥抄「凡田、以方六尺爲一歩、百歩爲一畝、百畝爲一段、百段爲一町」

たん-とう 段頭（名）一段頭」

たん-とう 擔頭（名）頭上に載せになふこと。諸書「擔頭の柴には、不香の花を手折りつつ」

だん-とう 團頭（名）殺多・非人の頭（ヲサ）。名物六帖「宋時杭丐者之長曰團頭、雖富而丐者之名不除」燕石雜志「團頭（ヲサ）」水滸傳「地方上團頭何九叔他是箇精細的人」

たんとう-さくわん 単筒機關（名）蒸氣機關の一種。蒸氣を一箇の汽筒にのみ使用し、直ちに之を外部に排泄するもの。

だんとう-だい 斷頭臺（名）斬罪に處せらるる人を登らしめて、其の首を斬る臺。くびきりだい。

だんとう-ぢやう 斷頭場（名）斬首の刑を行ふ場所。くびきりば。

たん-どく 短牘（名）みじかき手がみ。簡短なる書牘。鄭環記「張芸叟臨江而居、其妻遣一素綾鯉魚首尾宛然、腹藏短牘、但未賣鱗甲耳」

たん-どく 丹毒（名）〔醫〕創傷等に黴菌の入りて起こる傳染病。多くは頭部・耳輪・顏面等に發す。皮膚鮮紅色となり、腫脹・疼痛あり。多く一・二週間にて治するも、頭部にありて精神症狀を呈する時、及び初生兒のものは危險なり。醫載萬安方「丹毒」

たん-どく 単獨（名）一ひとりにて賴りなきもの。ひとりもの。孤獨。後漢齊武紀「賜三民尤貧困、孤弱單獨穀人三斛」二そればかりにて、あひてのなきこと。ただひとり。趙師秀詩「單獨一身常不定」

だん-どく 曇華（名）〔植〕一曇華科。曇華屬の多年生草本。莖の高

き四五尺に達す。葉は長卵形にして尖り、平行脈を有し、長さ凡そ一尺に及ぶ。夏秋の候、紅色不整齊の美麗なる花を開く。觀賞用として庭園に栽培せらる。かんな。二きばなだんどく（黃花曇華）の異名。

（くどんだ）

たん-どく-えいげふ 単獨營業（名）〔商〕他人と合同せず、單獨にて行ふ營業。

たん-どく-かいそん 単獨海損（英 Particular average. 獨 Besondere Havarie）（名）〔商〕共同海損に對して、共同海損に屬せざる海損。即ち、其の損害及び費用を船舶又は積荷の所有者が各別に負擔するものの稱。其の損害が船舶又は積荷の全部なるを全損といひ、其の一部分のみなるを一部損害といふ。

たん-どく-かいそん-たんぽ 単獨海損擔保（英 With average）（名）〔商〕保險者が單獨海損をも保險に付すること。分損。

たん-どく-かいそん-ふたんぽ 単獨海損不擔保（英 Free from particular average）（名）〔商〕保險者が單獨海損を引き受けざること。特擔分損不擔保。

たん-どく-がうね 単獨行爲（名）〔法〕いっぱうがうね（一方行爲）に同じ。民法第百十「單獨行爲に付ては其行爲の當時相手方か代理人と稱する者の代理權なくして之を爲すことに同意し又は其代理權を爭はさりしときに限り前五條の規定を準用す代理權を有せさる者に對し其同意を得て單獨行爲を爲したるとき亦同し」

たんどく-かにぷ 単獨加入（名）電話加入の一。一加入に就き一回線を有するもの。電話規則第一條「單獨加入 一加入に付一回線を有するもの」

たんどく-さくわん 単獨機關（名）〔法〕單獨制の機關。即ち、各省大臣・府縣知事の類。

たんどく-さげふ 単獨企業（名）他人と共同せず、單獨にて行ふ企業。

だんどく-くわ 曇華科（名）〔植〕顯花植物、單子葉類の一科。多年生草本。羽狀平行脈を供へたる大形の葉を互生す。花は兩性、萼及び花冠を有し、不齊整なり。萼は三箇の萼片より成り、花瓣は三箇あり。花粉を生ずる雄蕊は一箇乃至五箇ありて、其の中の一箇は一室の葯を有し、其の半部は花瓣樣をなす。他の雄蕊は全部花瓣樣をなして花粉を生ぜず。子房は下位、三室、多數の胚珠を含む。果實は蒴なり。種子は角質の胚乳を有す。だんどくは之に屬す。此の科の植物は熱帶亞米利加の原產にして、觀賞用に供するもの多し。

たんどく-くわんちやう 単獨官廳（名）〔法〕單獨制の官廳。即ち、各省大臣・府縣知事の類。

たんどく-くわんふ 単獨官府（名）〔法〕單獨制の官府。即ち、各省大臣・府縣知事の類。

たんどく-ひく 単獨國（獨 Einheitsstaat）（名）〔法〕たんいっこく（單一國）に同じ。

たんどく-さいばん 単獨裁判（名）〔法〕單獨判事又は單獨判官の行ふ裁判。

たんどく-さいばんしよ 単獨裁判所（名）〔法〕單獨判事又は單獨判官を以て組織する裁判所。即ち、區裁判所・地方法院の類。

たんどく-さう 単獨判官（名）〔法〕一人の判官が單獨にて裁判權を行ふ場合の稱。臺灣總督府法院條例第七「地方法院は單獨判官を以て總ての事件を審問裁判す」

たんどく-はんじ 単獨判事（名）〔法〕一人の判事が單獨にて裁判權を行ふ場合の稱。裁判所構成法第十「區裁判所の裁判權は單獨判事之を行ふ」

たんどの 反殿（名）昔時、手紙などの宛名の下に書く殿の字の書體によりて尊卑の等差を分かち、其の極めて簡略にくづして、殆と反の字の如く見ゆるものの稱。

たん-とり 段取 反取（名）斗代（ヤイ）の法を以て田租を徵收すること。地方要集錄「反取と申し候は、たとへば田方は上田壹反に付き七斗取り、中田六斗、下田五斗、下下田四斗取りと極め候うて取り申し候。畑方は縱令ば上畑一反に付き永貳百五十文、中畑貳百三拾文、下田貳百文取り、屋敷は上畑に大方准じ候」地方落穗集「田方地「反取と云ふは上は壹反に何斗取り、中・下は壹反に何斗取りと、上・中・下の位に臨ひ、段を付けて取りを極むる也」

だん-どり 段取（名）一こころがまへすること。工夫すること。二手段を定むること。順序をとりきむること。てくばり。てじゅん。

たん-とん 短噸（英 Short ton）（名）〔商〕運賃の計算上、英吉利國の一噸、即ち、二千二百四十封度より少なき封度數を以て一噸となすもの。我が國及び東洋諸國に行はる。輕噸。

たん-どん 炭團（名）たどん（炭團）に同じ。古節用「炭團（手綱の誤）」

たん-な 炭團（名）〔手綱（タヅナ）の訛り〕したおび。たふさぎ。ふどし。似勢物語「ちりめんのたんなを締め、とどろ足ふみ出でてとりぬ」犬筑波「たんなもかかぬ高砂の浦の旬無風にふらめきわたる松ふぐり」

だんな 檀那 旦那（梵 Dāna）（名）一財物を施與する信者を僧より呼ぶ語。檀越。施主。檀家。宇治拾遺「佛師ども、だんなを失ひて空を仰ぎて」徒然草「法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべし」江談文「堅固善本、具足檀那」二翻譯名義集「秦言布施、若內有信心、外有福田、有財物、三事和合、心生捨法、能破慳貪、是爲檀那」三ふせ（布施）の稱。法苑珠林「所有衣服、悉用檀那」四家人・婢僕より、其の主人をさしていふ語。あるじ。主公。主人。家長。淺鯉出世瀧德「且那の身上で、一年に千兩・二千

兩はつつおでも有る」曾根崎心中「さては御前は旦那様か」㊁婦人が其の夫をさしていふ語。をっと。良人。㊂妾(めかけ)を圏ひ置く男子の稱。㊃商人などの、其の顧客に對して用ふる敬稱。狂言居長「算置きと侮っても、方方に旦那があるぞ」㊄賤人の、貴人に對して用ふる敬稱。

(諺)檀那の喧嘩は槍持から　主人と主人との喧嘩は、多く從者より起こるといふこと。

(諺)檀那のすきな赤烏帽子　亭主のすきな赤烏帽子に同じ。ていしゅ(亭主)の條を見よ。

だんな-あしらひ 檀那待遇 (名) 俗侶の檀那に對するあしらひ方。又、主人の如くに尊敬して、鄭重にあしらふこと。狂言鐘馗「出家と申す者も、だんなあしらひのなんのかのと申して、とっとむづかしい物ぢやによって」

だん-ない (形口語) (大事ないの訛り) 差し支へなし。苦しからず。意とするに足らず。狂言樋口「かやうの物は、あがりましても苦しう御ざりませぬ。だんないか、一つ食はうに」今宮心中上「門を明けたは誰そ、だんない者」浮世床中「又あしたになりますぜ。やあ、だんない」

だん-なう (名) 膽囊。【醫】膽汁を貯留する囊。肝臓の下面に附著す。

だん-なぐ-ぢ 檀那藝 (名) ㊀商店の檀那などの、慰みに習ひ覺えたる藝。㊁(昔時は江戸藏前の富家、今は東京日本橋魚河岸あたりの物ずきなるものに藝ばるるよりいふ)俗曲中の、一中節と河東節との特稱。これに對して、常盤津節と清元節とを職人藝といふ。

たんなし-の-じばん 無端襦袢 (名) 近江國の佐佐木家にて、具足の下に著たる一種の補袢。風俗文選(服部)「端無のじばん(佐佐木家の具足屬也、其の子孫の家にても于今著之)」

だんな-しゅう 檀那衆 (名) 檀那の人人。檀那がた。狂言水鶏「檀那衆を四五人申し入れ、相談致す事が御座る」

だんな-でら 檀那寺 (名) わが家の歸依する寺。香華院。菩提寺。檀寺(だんでら)。狂言長鳥「此方の御檀那寺も御座らう程に、夫れへ頼ませられい」二代男五「先づ檀那寺に身を隱し」

だんな-どり 檀那取 (名) ㊀その仕ふべき主人にありつくこと。㊁めかけ奉公すること。

だんな-ばう 檀那坊 (名) 次條の略。二代男五「只今檀那坊の詫言、親方聞き分け」

だんな-ばうず 檀那坊主 (名) 檀那寺の坊主。きのふはけふの物語「誰れか彼れかとひしめくところへ、だんなばうず來たる」天網島上「旦那坊主に御問ひなされ」

だんな-びより 旦那日和 (名) 夜間のみ雨降りて、晝間は晴るる天氣。

だんな-ぶる 檀那振 (自動四) 檀那らしく振る舞ふ。檀那のそぶりをなす。曾我虎磨「檀那振った顔附は、いやぢやぞや」

だんな-ぼん 檀那坊 (名) だんなばうず(檀那坊主)の訛り。狂言鳥帽子「こなたをばだんなぼんと頼むからは、この世・あの世までも頼みまするぞ」

だんな-まはり 旦那廻 (名) 得意先を訪ね廻ること。狂言(和泉)「これは洛中をまはる猿引でござる、今日もだんなまはりを致す」

だんなん 檀那 旦那 (名) だんな(檀那)の訛り。狂言

たん-ぱく 澹泊 淡泊 ㊀あっさりしたること。さっぱりとしたること。飾り又てらはぬこと。楊雄文長篇「人君以玄默爲神、澹泊爲德」諸葛亮文「非澹泊無以明志、非寧靜無以致遠」㊁執著心のうすきこと。執拗ならざること。食欲ならざること。㊂味の濃厚ならざること。又、趣向の複雜ならざること。范仲淹詩「宦情須淡泊」

たん-ぱく 淡薄 ㊀うすきこと。あはきこと。㊁前條に同じ。

たんぱく-しつ 蛋白質 (名) 【化】動物體の主要部を形成する物質。其の化學組成極めて複雜に、種類も亦多かれども、何れも炭・酸・水・窒及び硫黄の五元素より成り、又、燐の少量を含むものあり。多くは硝酸と共に温むれば黄色に變じ、硫酸銅と苛性加里液とによりて紫色を呈し、硝酸第二水銀液と共に煮れば桃赤色に變ずる等の反應あり。

たんぱく-せき 蛋白石 (名) 【鑛】成分は含水硅酸。非晶質・塊狀・腎臓狀・房狀等をなす。硬度は水晶より稍低く、玻璃光澤あり。美なるを裝飾用とす。

たんぱく-ねう 蛋白尿 (名) 病氣により、多量の蛋白質の混じて出づる尿。

たんぱ-ぐり 丹波栗 (名) 【植】殼斗科、栗屬の落葉喬木。栗の一品種。實の大なるもの。てってちぐり。

だんぱ-こ 段箱 (名) 數臺にのぼる箱の段。丹波與作謠「式代の段箱に、身を投げ伏して歎きしが」

たんば-ごえ 丹波越 (名) (京都より山越しに丹波國に行く義)かけおち。亡命。逃亡。野良蟲「後には親に勘當せられ、たんばごえにおもむくか、さらずば心よりおこらぬなま道心をおこして」大阪雪千句「借錢をすまさじやうの謀の旁所を去りてゆく丹波越」

だん-はし 段梯子 (名) 樓上などに登るために廣き板にて段をとりつけたる梯子。假名手本忠臣藏「段梯子へ下りたらば、伸居が見つけて酒にせう」

たんば-たばこ 丹波烟草 (名) 丹波國の名產なる烟草。屬知山・篠山・山本を最とす。色晉論草子「丹波たばこに肥後ぎせる」

たんば-たらう 丹波太郎 (名) 陰曆六月の頃、丹波國の方面に當たる山より出づる雲。この雲出づるときは夕立ありといふ。京都また大阪邊の方言。

だん-はつ 短髮 (名) ㊀毛髮をきりて結ばざること。ざんぎり。いがぐり。斬髮。

だん-ばつ 斷髮 (名) 左傳(哀公七年)「仲雍嗣之、斷髮文身、羸以爲飾」史記(周本)「太伯虞仲皆亡如荆蠻、文身斷髮、以讓季歷」㊁きりがみ(切髮)に同じ。

だん-はな 段鼻 (名) 鼻柱に段のつきたる鼻。

だん-ぬの 丹波布 (名) 丹波國より織り出だす布。小町踊「栗の木の落葉衣や丹波布」萬金產業袋「丹波布」

たんはふくわ-せい 單法貨制 (名) 【經】Simple legal tender system (英) 貨幣制度の一。一種の貨幣のみを法貨とするもの。

たんば-ほほづき 丹波酸漿 (名) 〔丹波の國の種を求めて植ゑたるよりいふと。嬉遊笑覽〕【植】ほほづき(酸漿)の異名。

たんば-めゆひ 丹波目結 (名) 丹波國より出づる奪にて染めたる目結。素襖の紐に用ふ。曾我物語

たんば-やき 丹波燒 (名) 丹波國より產する陶器。陶器樂草(陶器出「丹波燒」萬寶全書)「丹波燒」

だん-はらみつ 檀波羅密 (名) 佛語。六波羅密の一。布施をなすによりて彼岸に到達すること。檀度。太平記(巻七、聞一角仙人)「昔、天竺に身子と申しける聲聞、佛果を證せんために六波羅密を行じけるに、已に五波羅密をば成就しぬ、檀波羅密を修するに至りて」

たん-ばん 膽礬 (名) 【化】りうさんどう(硫酸銅)の別名。本草「石膽。一名、膽礬」夢溪筆談「鹽礬則成銅」

だん-ぱん 團飯 (名) むすび。にぎりめし。說岳全傳「那些軍士長長帶了團飯走路」

だん-ばん 談判 或る關係事件に就きて雙方互ひに議しあふこと。かけあひ。交渉。

だんばん-かん 擔板漢 (名) 板をかつぐ男の、其の板に妨げられて一方の見えざる如く、事の一面のみを見て全局を見渡すこと能はざるものにいふ語。碧巖「這擔板漢」

たんばん-ちゅうにふ-ちゅう 膽礬注入柱 (名) 膽礬銅の溶液を纖維間に浸入せしめて、腐敗を防ぎたる電柱。

たん-び 貪鄙 食欲にして鄙吝なること。慾深くしてけちなること。史記(貨殖)「身食鄙者、餘財不顧恥辱」

たん-ぴ 單比 (名) 【數】複比に對して、比の稱。

たん-び 度 (名) たび(度)の訛り。

たん-び 嘆美 (名) 感心してほむること。嘆賞。嘆稱。

だん-び 團匪 (名) 團結せる匪徒。ひとむれのわるもの。

だん-び 斷碑 (名) われたる石碑。

術飲是單方」姑洗題跋「古之人多用單方、蓋議病知藥、乃如是」

たん-ばう 探訪 出來事の樣子をさぐりたづぬること。又は聞きとること。又、其の人。

たん-ばう 貪冒 慾深く物をむさぼること。左傳(昭公三年)「食冒之民」

たん-ぱう 誕妄 ばうたん(妄誕)に同じ。王令詩「仙書虛荒宮誕妄」

だん-ぱう 檀方 (名) だんと(檀徒)に同じ。

だん-ばう 暖飽 (名) 暖衣と飽食と。衣食に飽き足ること。

だん-ばう 暖房 煖房 (名) 居ようつりのふるまひ。わたましの祝ひ。ひきこしいはひ。韓宅いはひ。暖屋。王建詩「太僕前日暖房來」

だん-ばう 男房 (名) 宮仕へする男。(女房の對)侍中群要(四)「家主水司供御手水」中臣祓事多女房所供也、男房希有」盛衰記(四十二)「男、平家は敕を叩いて、女房も男房も、あ射たり射たりと惑じけり」

たんば-がかり 探訪掛 (名) 探訪の任務に當たる人。

たんば-しゃ 探訪者 (名) 探訪を職とするもの。新聞のたねとり。

たんば-どうぶつ 單胞動物 (名) 【動】たんさいはうどうぶつ(單細胞動物)の略。

たん-はき 痰吐 (名) 痰を吐き入るる具。唾壺。

たんはき-つぼ 痰吐壺 (名) 痰を吐き入るる壺。痰壺。唾壺。

たん-ばく 蛋白 (名) ㊀卵の白味。蛋白質より成れるもの。

たん-ばく 淡泊 ㊀あっさりしたること。さっぱりとしたること。飾り又てらはぬこと。楊雄文長篇「人君以玄默爲神、澹泊爲德」諸葛亮文「非澹泊無以明志、非寧靜無以致遠」㊁執著心のうすきこと。執拗ならざること。食欲ならざること。㊂味の濃厚ならざること。又、趣向の複雜ならざること。范仲淹詩「宦情須淡泊」

たん-ばく 淡薄 ㊀うすきこと。あはきこと。㊁前條に同じ。

たんぱく-しつ 蛋白質 (名) 【化】動物體の主要部を形成する物質。其の化學組成極めて複雜に、種類も亦多かれども、何れも炭・酸・水・窒及び硫黄の五元素より成り、又、燐の少量を含むものあり。多くは硝酸と共に温むれば黄色に變じ、硫酸銅と苛性加里液とによりて紫色を呈し、硝酸第二水銀液と共に煮れば桃赤色に變ずる等の反應あり。

たんぱく-せき 蛋白石 (名) 【鑛】成分は含水硅酸。非晶質・塊狀・腎臓狀・房狀等をなす。硬度は水晶より稍低く、玻璃光澤あり。美なるを裝飾用とす。

たんぱく-ねう 蛋白尿 (名) 病氣により、多量の蛋白質の混じて出づる尿。

たんば-ぐり 丹波栗 (名) 【植】殼斗科、栗屬の落葉喬木。栗の一品種。實の大なるもの。てってちぐり。

だんば-こ 段箱 (名) 數臺にのぼる箱の段。丹波與作謠「式代の段箱に、身を投げ伏して歎きしが」

たんば-ごえ 丹波越 (名) 〔京都より山越しに丹波國に行く義〕かけおち。亡命。逃亡。野良蟲「後には親に勘當せられ、たんばごえにおもむくか、さらずば心よりおこらぬなま道心をおこして」大阪雪千句「借錢をすまさじやうの謀の旁所を去りてゆく丹波越」

だん-はし 段梯子 (名) 樓上などに登るために廣き板にて段をとりつけたる梯子。假名手本忠臣藏「段梯子へ下りたらば、伸居が見つけて酒にせう」

たんば-たばこ 丹波烟草 (名) 丹波國の名產なる烟草。屬知山・篠山・山本を最とす。色晉論草子「丹波たばこに肥後ぎせる」

たんば-たらう 丹波太郎 (名) 陰曆六月の頃、丹波國の方面に當たる山より出づる雲。この雲出づるときは夕立ありといふ。京都また大阪邊の方言。

だん-はつ 短髮 (名) ㊀毛髮をきりて結ばざること。ざんぎり。いがぐり。斬髮。

だん-ばつ 斷髮 (名) 左傳(哀公七年)「仲雍嗣之、斷髮文身、羸以爲飾」史記(周本)「太伯虞仲皆亡如荆蠻、文身斷髮、以讓季歷」㊁きりがみ(切髮)に同じ。

だん-はな 段鼻 (名) 鼻柱に段のつきたる鼻。

だん-ぬの 丹波布 (名) 丹波國より織り出だす布。小町踊「栗の木の落葉衣や丹波布」萬金產業袋「丹波布」

たんはふくわ-せい 單法貨制 (名) 【經】Simple legal tender system (英) 貨幣制度の一。一種の貨幣のみを法貨とするもの。

たんば-ほほづき 丹波酸漿 (名) 〔丹波の國の種を求めて植ゑたるよりいふと。嬉遊笑覽〕【植】ほほづき(酸漿)の異名。

たんば-めゆひ 丹波目結 (名) 丹波國より出づる奪にて染めたる目結。素襖の紐に用ふ。曾我物語

たんば-やき 丹波燒 (名) 丹波國より產する陶器。陶器樂草(陶器出「丹波燒」萬寶全書)「丹波燒」

だん-はらみつ 檀波羅密 (名) 佛語。六波羅密の一。布施をなすによりて彼岸に到達すること。檀度。太平記(巻七、聞一角仙人)「昔、天竺に身子と申しける聲聞、佛果を證せんために六波羅密を行じけるに、已に五波羅密をば成就しぬ、檀波羅密を修するに至りて」

たん-ばん 膽礬 (名) 【化】りうさんどう(硫酸銅)の別名。本草「石膽。一名、膽礬」夢溪筆談「鹽礬則成銅」

だん-ぱん 團飯 (名) むすび。にぎりめし。說岳全傳「那些軍士長長帶了團飯走路」

だん-ばん 談判 或る關係事件に就きて雙方互ひに議しあふこと。かけあひ。交渉。

だんばん-かん 擔板漢 (名) 板をかつぐ男の、其の板に妨げられて一方の見えざる如く、事の一面のみを見て全局を見渡すこと能はざるものにいふ語。碧巖「這擔板漢」

たんばん-ちゅうにふ-ちゅう 膽礬注入柱 (名) 膽礬銅の溶液を纖維間に浸入せしめて、腐敗を防ぎたる電柱。

たん-び 貪鄙 食欲にして鄙吝なること。慾深くしてけちなること。史記(貨殖)「身食鄙者、餘財不顧恥辱」

たん-び 單比 (名) 【數】複比に對して、比の稱。

たん-び 度 (名) たび(度)の訛り。

たん-び 嘆美 (名) 感心してほむること。嘆賞。嘆稱。

だん-び 團匪 (名) 團結せる匪徒。ひとむれのわるもの。

だん-び 斷碑 (名) われたる石碑。

たん-に 單 (副) ㊀ただに。ただ。(證記)「唯單有一聲」㊁ひとへに。まるで。

たん-によ 淡如 澹如 (副) たんじょ(淡如)に同じ。

たん-にん 單寧 (英 Tannin) (名) 【化】柳の皮、五倍子(ふし)の粉中に多量に存し、水に溶け易き淡黄色の粉末。弱き酸性ありて滋味を有す。膠質・蛋白質を不溶性の物質となすにより、鞣皮を製するに用ひらる。其の他、いんき・の製造、黑染及び媒染劑等として用ひらる。鞣酸。

たん-にん 擔任 任務を擔當すること。その事をひきうけること。うけもち。民事訴訟法(第五十)「原告若くは被告に代り訴訟を擔任すること」

たんにん-さん 單寧酸 (名) 【化】たんにん(單寧)の異名。

たんにん-しゃ 擔任者 (名) 物事を擔任する人。擔當人。

だん-ねつ 暖熱 (名) 暖(アタタ)く熱(ツ)きこと。韓愈詩「寧依暖熱敵、不異寒涼井」

だんねつてき-あっしゅく 斷熱的壓縮 (名) 【理】熱の出入なきやうにして物體を壓縮すること。多くは氣體に就きいふ。熱を取り去ることなくして氣體を壓縮すれば、氣體の温度は上昇す。

だんねつてき-ばうちゃう 斷熱的膨脹 (名) 【理】熱の出入なくして行ふ膨脹。多くは氣體につきていふ。氣體が他の熱を受けずして膨脹するときは、自己の有する熱によりて膨脹するにより、氣體の温度は降下す。

たん-ねん 丹念 〔丹誠の念の義〕誠心をこめて取り扱ふこと。物事に極めて細心に注意すること。

だん-ねん 斷念 思ひきること。あきらむること。絕念。

たん-のう 堪能 (名、副) 〔かんのうの訛り〕㊀飽き足ること。滿足。淀鯉出世瀧徳「乞食・非人の身となっても、二人一所に居る上は、堪能ではあるまいか」浦島年代記「年寄った親二人、口先でなりとも小優しうものいへば堪能すると知りながら、犬猫を飼ふ樣に思ひ居る不孝者」㊁氣を晴らすこと。氣の濟むこと。心やり。雪女五枚羽子板「せめての事に樣子を語り、堪能させて給べかし」㊂其の物事・技藝に上達すること。上手。練達。熟練。

たん-のう 淡濃 (名) あはきとこきと。うすきとこきと。濃淡。

たん-は 丹葩 (名) 赤き花びら。又、赤き花。鮑照詩「輕步逐芳風、言笑弄丹葩」

たん-ば 丹波 (名) たんばやき(丹波燒)の略。茶道筌蹄(四、鑑)「丹波。古丹波は太閤時代なり」本朝陶器考證「本邦の高取・あが野・肥後・丹波・膳所・朝日・赤はだは上作なれば、諸器器用なり」

たん-ばい 探梅 觀賞せんため、梅花をさぐりあるくこと。觀梅。

だん-ばい 斷梅 (名) 梅雨の斷ゆること。つゆばれ。陸游詩「輕雷驚蟄斷梅初。自注鄉人謂梅雨有雷、曰斷梅」

たんば-いし 丹波石 (名) 大和國より產する一種の石。庭石などに用ふ。

たんば-いろ 膽礬色 (名) 蒼きて顏色の青くなること。びっくりして青ざむること。

たん-ぱう 端方 (名) ただしく方正なること。宋書(王弘)「形狀短小、而坐臥端方」韓愈文「持議端方」

たん-ぱう 單方 (名) 簡單なる方法。又、複雜ならざる方劑。黃庭堅詩「不如

太平記「或ひは平平たる斷碑の上、雨に消えたる名もあり」黃庭堅詩「斷碑零落臥秋風」

だん-び 〔一斷臂〕 臂(ヒジ)をたちきること。

たん-び-くわ 〔一單被花〕 (名) 【植】植物學上の用語。花被が花冠及び萼の何れかの一方のみより成りたるもの。どくだみの類。

たんび-ごっと 度毎 (副) たびごと。(度毎の訛り。百姓)

だん-びら 段平 (名) だびらびろの略轉。

だんびら-ずね 〔一段平脚〕 (名) 幅廣のすね。門出八島「見事なだんびら脚、此の足にて逃げたらば、天竺までも一飛びならん」

だんびら-もの 段平物 (名) だんびら段平に同じ。持統天皇歌軍法「そっと指いたるだんびら物、鮫尾作り引ん抜いて、逆手に引っ提げ」壽門松「腰の字多の國行、二尺許りのだんびら物」

だんびら-ゆき 段平雪 (名) 大片の雪。はだらゆき。はだれゆき。だびらゆき。出雲國の方言。(物類稱呼)

たんぴ-るね 〔一短尾類〕 (名) 【動】節足動物中、甲殼類・十脚類分類の一。體は概扁平にて幅廣く、腹部小さくして、頭胸部の腹面に彎曲し、尾を缺く。(長尾類の對)

だんぴ-るね 〔一彈尾類〕 (名) 【動】昆蟲類の一目。多くは小形の下等なる昆蟲。口は咀嚼及び吸收に適し、眼は單眼のみにて、複眼を有するは極めて稀なり。全體に細かき鱗狀物又は細毛を生じ、尾端に鞭狀若しくは鉤狀の附屬物ありて、よく跳躍するものあり。變態せずして成長す。性日光を嫌ひ、夜に至りて出づ。しみの類。

たん-びれい 〔一單比例〕 (名) 【數】二つの單比より成る比例の稱。例へば3:7=6:14の如し。(複比例の對)

たん-ぷ 〔一丹府〕 (名) 〔一〕赤心。丹心。丹誠。本朝文粹「仮丹府而自約」陸機文賦「接士壹盛德之容、獻仁馨丹府之愛」〔二〕こころ(心)に同じ。東鑑「四月以來、丹府動中者也」

たん-ぷ 〔一擔夫〕 (名) 〔一〕荷物をになふ人夫。にかつぎ。唐書李亘「張旭見公主擔夫爭道」〔二〕うんきゃく(運脚)に同じ。續紀「天寶元年、免従駕諸國騎士、當年調庸及擔夫田租」本朝文粹「令類聚三代格六大同五年二月一應し給雲向京擔夫食料事」

たん-ぷ 〔一擔負〕 (名、副) かつぎ荷負ふこと。かつぐこと。負擔。漢書貨殖傳「小家擔負」

たん-ぷ (名、副) なみなみ。たっぷり。堀川波鼓「盃取り中盃たんぷと請けて一息飲み」

だん-ぷ (名、副) 物の水中に落ち入るさまにいふ語。どんぶり。ざんぶり。盛衰記「河中に歩ませ寄り、馬と馬とを打ち並べて、組んでだんぶと落ちにけり」津國女夫池「庭の古井へ二四連れ、だんぶと落ちたる水の音」

たん-ぷう 〔一紅楓〕 (名) 紅葉したる楓(ふう)。紅樹。杜甫詩「丹楓風霜急、青梧日夜凋」

だん-ぷう 〔一暖風〕 (名) あたたかなるかぜ。朗詠「斜脚暖風先扇處」謠曲「花は斜脚の暖風に開けて、同じく暮春の風に散り」禮記月令「行春令、則煖風來至」

たん-ぷく 〔一單複〕 (名) 〔一〕簡單と複雜と。〔二〕單一と重複と。〔三〕單獨と重獨と。〔四〕ひとへとあはせと。魏志管寧「布襠袴布裙、隨時單複」〔五〕單數と複數と。

たん-ぷく 〔一歎伏〕 感心して屈伏すること。世說中「左賦出、士衡絕歎伏、以爲不能加」

だん-ぷくろ 駄荷袋 段袋 (名) 〔だんぷくろの訛りか〕〔一〕布製の大なる袋。物を入れて運ぶに用ふ。荷物袋。雪女五枚羽子板「天の戸袋・だんぷくろ、くわっと開けた初日の色」〔二〕すぼんの異稱。嘉永明治年間錄「十五年五月「だんぷくろは袴腰有り之分、不苦候事」

だんぷ-だんぷ (副) だぶだぶに同じ。釋迦如來誕生會「だんぷだんぷと汲めば」

だんぷり (名) 【動】とんぼう(蜻蛉)をいふ。津輕地方の方言。(物類稱呼)

たん-ぷん 〔一歎憤〕 なげきいきどほること。なげきて意氣の興奮すること。悲憤。

たん-ぶん 〔一短文〕 (名) みじかき文章。

たん-ぶん 〔一單文〕 (名) 〔一〕簡單なる文面。宋書謝惠連「今說者、據周官單文、爲緯國大璧」〔二〕〔文法〕一つの主語と一つの述語との關係より成り立つ文。例へば、孔子は聖人なり、小兒犬を逐ふの類。(複文の對)

たんぶん 〔一探聞〕 さぐりきくこと。

だんぶん 〔一彈文〕 (名) 彈劾の上奏文。名臣言行錄「袖中彈文乃新參也」

だんぺ 團兵衛 (名) 〔一〕だんぺぶね(團兵衛船)の略。〔二〕石を積む船。だんぺい。いしぶね。風俗文選「杰段平(ヒラ)に大石を積み」

たん-ぺい 〔一短兵〕 (名) 〔一〕短き武器。即ち、刀劍の類。法言至要鈔「天曆八年十一月三日宣旨云、中將攻偷盜短兵插其懷」世說「之橫行路頭」楚辭「車錯毂兮短兵接」史記「持短兵接戰」〔二〕てやり(手槍)に同じ。國朝獻徵錄「江檢討(鶴年)公傳「倭擬短兵、譟呼、出突率夫數人」

たんぺい きふ 短兵急 にはか。やに。咄嗟。迅速。早速。急遽。太平記「敵三千餘騎の眞中に取り籠めて、短兵急に拉がんとす」

たん-ぺい 〔一單兵〕 (名) 應援又は後繼なき孤立の兵隊。單軍。孤軍。後漢書「以單兵、固守孤城」

たん-ぺい 〔一端平〕 ただしーたひらなること。

たん-ぺい 〔一坦平〕 たひらかなること。平坦。劉象賢「獨路新修盡坦平」

だん-ぺい 〔一談柄〕 (名) 談話の際に手に執る拂子。轉じて、はなしのたね。かたりぐさ。庾信詩「玉匣揮談柄」悪河常「辯鋒」天祿志餘「近人以口實爲談柄」或云「笑柄」非也。古人清談多執麈尾、故有談柄之名」

だんぺい 團兵衛 〔一段平〕 (名) 石を積む船。いしぶね。だんぺぶね。

たんぺい-ぎょ 〔一段平魚〕 (名) 【動】軟體動物中、腹足類の一種。きさごの一類。大形なるもの。殼の表面は平滑なり。我が國、東海・南海・瀨戸內海・日本海等に產す。

だんぺい-ぶね 團兵衛船 (名) だんぺぶね(團兵衛船)に同じ。

たん-ぺう 〔一簞瓢〕 (名) 〔めしいれと水いれと〕たんし(簞食瓢飲)の略。たんし(簞食)の條を見よ。班固文「類淵樂於簞瓢」

たん-ぺうし 〔一丹標紙〕 (名) 丹色の標紙。近世物之本江戶作者部類「享保よりして後は、丹標紙をかけたるもの年年出でしかば、世俗これを赤本と喚び做したり」

たん-ぺき 〔一丹碧〕 (名) 赤き色と青き色と。丹青。陳泰詩「晶瑩丹碧飛憲閒」

たん-ぺき 〔一淡碧〕 (名) うすきあを色。

うすあを。

たん-べつ 〔一段別〕 反別 (名) 〔一〕田畠を一段毎に別かつこと。〔二〕地積の名稱。即ち、町・段・畝・歩などの類。畝歩(セ)。

たんべつ-くわやく 〔一段別課役〕 (名) 田畠一段毎に何程と課役を申し付くること。式目新編追加「西國京都大番役事、新補地頭等、被充段別課役之條、不可然」

たんべつ-わり 段別割 (名) 〔一〕租稅など、段別を標準として割り宛つること。又、その割り宛てたるもの。〔二〕北海道地方稅の稅目の一。地租附加稅を賦課せざる土地の所有者に賦課するもの。北海道地方費法(第二條、明治四十四年法律第一號)「反別割」

だんべ-ぶね 團兵衛船 (名) くわしよぶね(過書船)を見よ。

だん-べる (英 Dumb-bell) (名) あれいを(啞鈴)に同じ。

たん-ぺん 〔一短篇〕 (名) 〔一〕篇章の短きこと。又、其のもの。文心雕龍「士龍朗練、故能布采鮮浮、敏于短篇」杜甫文「豈意頭白之後、竟以短篇隻字、一動人主」〔二〕りっし(律詩)の異稱。詩轍「文古詩・文字句數の定則無ければ、短古も有りといへども、大半長篇なる故、律のことを短作・短述・短篇などともいへり」

たん-ぺん 〔一單瓣〕 (名) 【植】ひとへの花びら。(重瓣の對)

だん-ぺん 〔一斷片〕 (名) ちぎれたる一ひら。きれはし。破片。

だん-ぺん 〔一斷編〕 (名) きれぎれの文書。斷簡。零編。劉因詩「依舊西窗理斷編」

たんべん-くわ 〔一單瓣花〕 (名) 【植】單瓣より成れる花。

たんべん-せうせつ 〔一短篇小說〕 (名) 篇章の短き小說。

たんべん-もの 短篇物 (名) 短き著作物。

たん-ぽ (名) ちろり(銚釐)をいふ、大阪の方言。(俚言集覽)

たん-ぽ 〔一綿〕 (名) 〔一〕綿をまろめて革又は布などに包み、稽古槍の先に附けたるもの。〔二〕石摺を摺るとき、墨を打つに用ふる具。

たんぽ (名) 【植】たんぽぽ(蒲公英)の異名。

たん-ぽ 〔一湯婆〕 (名) 〔湯婆の字の唐音〕金屬又は陶器等にて造り、湯を中に入れ、腰・脚などをあたたむるに用ふる器。ゆたんぽ。(書言節用「湯婆、今所謂湯婆、俗稱湯婆、一名湯婆、又曰文蛤、呼爲湯婆、一名湯婆、又曰文蛤、呼爲湯婆、一名湯婆、又曰文蛤、呼爲

たんぽん 〔単本〕（名）重複せざる本。北史「重雜三萬餘卷、所録舊書五千而已、今御出單本、合一萬五千餘卷」

たんぽんね 〔単本位〕（名）㊀単一のものを本位とすること。㊁〔經〕次條の略。

たんぽんね-せい 〔単本位制〕（英 Monometallism. 獨 Monometallismus）（名）〔經〕貨幣制度の一。一種の貨幣を本位貨幣として、その他の貨幣を總て補助貨幣とするもの。金貨單本位制・銀貨單本位制等あり。我が國は金貨單本位制とす。單本位。單貨制。單貨法。一硬貨制度。

たんまい 〔段米〕（名）田租の附加稅として、段別に應じ臨時に賦課する米。蠹簡集「段米之事、彙而如定、一日も無相違相沒み候哉」英俊日記十一月「御造替段錢並寺門段米寺社領等事各无相違可被相渡」

たん-まう 〔誕妄〕たんぱう（誕妄）に同じ。

だん-まく 〔段幕〕（名）紅白などの布を、横に段段に縫ひあはせたる幕。

だんまつ-ま 〔斷末魔〕（名）佛語。だんまつま（斷末魔）に同じ。

たん-まつ 〔端末〕（名）㊀はし。する。をはり。韓非子「莫見其端末」㊁終端と結末と。はじめとをはりと。

だんまつ-ま 〔斷末魔〕斷末摩（名）佛語。息をひきとるまぎは。しにぎは。いまは。だんまちま。臨終。曾根崎心中「斷末魔の四苦八苦」倶舍論「臨命終時、多爲斷末摩苦所逼」顯宗論「傷害人心者、臨終受斷末磨苦」

たんまり （副）㊀ゆっくり。しみじみ。浮世風呂「二度・三度のお迎ひだ、ほんにほんに、たんまりと湯へも這入れませんぬ」㊁十分多きさまにいふ語。どっさり。

だんまり-ばう 〔默坊〕（名）口かずを多くきかぬ人。浮世風呂「おめえん所の旦那殿は、苦蟲を食ひ潰した樣な貌をして、だんまり坊だに」

たんみ 〔淡味〕澹味（名）㊀あっさりしたるあぢ。（滋味の對）論衡「大奏必有澹味」㊁あっさりしたる趣味。

たん-み 〔單味〕（名）ただひとへのあぢ。ひとあぢ。謝朓詩「列俎餚單味、連駕正容膝」

たんめい 〔短命〕（名）壽命の短きこと。年若くて死ぬること。わかじに。はやじに。早世。古記（建治三年五月廿四日）「雅仁親王夫人藤、產後疱瘡、余冥傷、以不幸短命死矣」論語「有顏回者、不幸短命死矣」

たんめい 〔旦明〕（名）よあけ。あけがた。儀禮「士人旦明行事」

たんめい 〔單明〕簡單にして明瞭なること。令義解「巡檢規則「單明にして平易の語」」

たんめいすう 〔單名數〕（名）〔數〕一つの單位によりて表はされたる名數。例へば、二十五圓又は十五間等の如し。

たんめい-とうぺう 〔單名投票〕（名）〔法〕たんめいとう（單記投票）に同じ。北海道區制「第五十二條「單名投票」」

だんめつ 〔斷滅〕たえほろぶること。滅亡。太平記「先代一流斷滅しぬ」

たん-めり （句）「てありの約なるたりの活用、たるに、めりの添はりたる、たるめりの約、ためりの音便。

たんめん 〔段免〕（名）檢地の際、上・中・下などの位附けをしたる田地の内にて、其の位附けの年貢より作毛の劣れるものは、其の位附けの年貢より一段若しくは二段、租率を下げて徵收すること。地方凡例錄「段免之事。是れは縱へば田地上・中・下三段之位有り之處、下の位之内、至って而惡地有之、年年外外下之地所より作毛劣り、下之年貢に而は不引合儀無相違ば、下之年貢より一段も二段も免を下げ、取箇附くる儀也」

たんめん 〔端面〕（名）〔數〕角壔の底面の稱。

たん-めん 〔赧面〕はぢらひて顏を赤らむること。赤面。赧顏。

たんめん 〔耽湎〕酣酣（名）酒色にふけりすさむこと。耽溺。晉書「孔愉「性嗜酒、嘗與親友書云、今年田得七百石秫米、不足了麴糵事」」其耽湎如此」

だんめん 〔斷面〕（名）截斷したる其の平面。きりくちの面。截斷面。

たんも 〔袂〕（名）たもと（袂）をいふ、幼兒の語。

たんもち 〔痰持〕（名）痰の出づる持病ある人。ぜんそくもち。

たんもの 〔段物〕反物（名）段になりてある布帛。韓愈「轉運使、織物の總稱。

だん-もの 〔段物〕（名）琴曲・淨瑠璃などにて、序を過ひて幾段も續く語り物。

たんもの-や 〔段物屋〕（名）呉服屋。

だん-もやう 〔段模樣〕（名）段段に染めたる模樣。だんだら染のもやう。領城酒呑童子「段模樣の染裾、供の女が頻かぶり、御所のひんぬき」

たんもん 〔端門〕（名）王城の正門。史記「天官書」南四星執法、中端門」漢書「周亞夫傳」「者持戟守端門」

たんもん 〔探問〕さぐりとぶこと。探訊。さぐりたづぬること。

だん-もん 〔斷文〕（名）だんざいぶん（斷罪文）の略。小野宮年中行事「十月「四日死刑斷文、申官事」

たん-や 〔短夜〕（名）夏のみじかき夜。夜中の時間の短きこと。みじかよ。楚辭「望蜀夏之短夜」

たんや 〔鍛冶〕（名）かぢ。かぬち。和名「鍛冶、四聲字苑云、鍛良反冶直反打金鍛爲器也」下學集「鍛冶（かぢ）打金鍛也」

たん-やう 〔端陽〕（名）たんご（端午）に同じ。月令廣義「五月五日爲端陽」

たん-やく 〔丹藥〕（名）㊀丹をねりて調製せるくすり。唐書「柳泌有道士獻丹藥」㊁ねりやく。ねりぐすり。續後紀「和名抄三、虔奉勅旨、服丹藥、果得效驗」

だん-やく 〔彈藥〕（名）彈丸と火藥。たまぐすり。

だんやくこ 〔彈藥庫〕（名）彈藥を入れおく倉。

だんやくじゅうれつ 〔彈藥縱列〕（名）彈藥の供給をする縱列隊。

たんや-じちゃう 〔鍛冶次長〕（名）鍛冶長の次位にありて其の職務を補佐する下士。明治十五年六月七日廢せられたり。明治五年八月海軍省乙達第百號「軍艦乘組員等」

たんや-ちゃう 〔鍛冶長〕（名）明治五年八月二十五日に置かれたる軍艦乘組員の一。鍛冶を指揮・監督する下士。一等より二等に至る。同十九年七月十四日廢せられたり。明治五年八月海軍省達乙第百號「鍛冶長」

たんやちゃう-ぞく 〔鍛冶長屬〕（名）鍛冶長に從屬して其の職掌を補助する下士。明治十七年九月二日一等・二等に分かち、同十九年七月十四日廢せられたり。明治五年八月海軍省達乙第百號「軍艦乘組員等」鍛冶長屬」

たんゆう 〔膽勇〕（名）大膽にして勇氣あること。又、物事に動ぜぬ勇氣。南史「景宗以膽勇聞」

だんよ 〔談餘〕（名）はなしのついで。はなしのあまり。

たん-よく 〔貪欲〕どんよく（貪欲）に同じ。張衡文「遵明德而崇業、滌饕餮之貪慾」法華經「諸苦所因、貪欲爲本」

たん-らく 〔耽樂〕酒色にふけりてたのしむこと。書經「惟耽樂之從」

だん-らく 〔斷落〕段落（名）㊀一文章中の大いなる切れ目。品字箋「篇章斷落亦曰節」㊁事のきりめ。くぎり。きり。きれめ。かぎり。

たん-らん 〔貪婪〕貪惏（名）極めて慾のふかきこと。どんらん。強欲。左傳「昭公廿八年」「貪婪無厭」屈原文「惜誓」「衆皆競進而貪婪兮。注愛財曰貪愛食曰婪」

だんらん 〔團欒〕（名）㊀相聚まりて車坐（ゐざ）に坐を占むること。まとゐ。陸游詩「却嫌兒女話團欒」㊁親密なる同志の集合。うちとけたる會合。㊂まろやか。まどか。陸羽詩「扱」書寓直月團欒」

たんり 〔單利〕（名）〔數〕元金と利率と貸借の時日とに比例するものとして計算して得る利息を、複利に對して單利といふ。

たんり 〔短籬〕（名）たけひくきまがき。

たん-り 〔貪吏〕（名）人民の財物を貪り取る官吏。貪婪なる役人。狼吏。史記「投傳「食史安可以爲也」」

たんり 〔貪利〕利を貪ること。飽くまで利益を收むること。

たんり 〔擔理〕擔當して處理すること。北海道水產稅則「第九、納稅の事を擔理せしむ」

たんりう 〔湍流〕（名）水勢の急なる流れ。はやせ。急流。急湍。

だんりう 〔暖流〕（名）㊀〔地〕海流の溫度が、附近の水溫より常に高きもの。赤潮流。（寒流の對）㊁あたたかき流れ。唐越王貞詩「坎德疎・溫流」山陰派「暖流」

たんりう 〔端良〕端正にして善良なること。ただしくよきこと。

たんりゃく 〔膽略〕（名）大膽にして智略あること。肝太く思慮深きこと。梁書「陸瑤傳「膽略有膽略」」

たん-りょ 〔短慮〕㊀思慮の淺きこと。思慮の足らざること。短見。淺慮。東鑑「廿二、建保四年」「愚昧短慮」論衡「只今はちと九月十八日」心にかかる事の候ひて短慮を申して候、御免有らうずるにて候」後漢書「袁紹」「愚俄短慮、輕進易退」㊁きみじか。きばや。せっかち。短氣。嵯山姥「世に便りなき憂きふしに、若し御短慮の事もやと」假名手本忠臣藏「三「主人は生得、御短慮なる御生まれつき」

たんりょ せんばん 〔短慮千萬〕甚だ短慮なること。いたって短慮なること。大磯虎稚物語「「重忠殿には似合はず、短慮千萬」

（諺）短慮、功を成さず 短慮の者は事をなし遂げ得ず。短氣は損氣。慧景集「細川勝元朝臣より、短慮不成功といふ心ばへを問ひ給ひしかば。いそがずば濁れざらましを、旅人のあとより晴るる野路の村雨」

たんりょく 〔膽力〕（名）物事に動ぜざる氣力。肝の太きこと。度胸のすわりてゐること。呉志「魯肅傳「以膽力稱」」

だんりょく 〔彈力〕（名）㊀彈丸の勢力。㊁理〔彈性體に形狀・體積等の變化を生ぜしむるとき、此の變化を起こしたる外力に抗する、物體内に表はるる内力。㊂壓迫をうけたるものの復舊する力。西陽雜俎「張芬中書常于龕感寺趨鞠、高及半塔、彈力五斗」

だんりょく-ごむ 〔彈力護謨〕（名）だんせいごむ（彈性護謨）に同じ。

たんりん 〔貪婪〕貪吝（名）貪欲にして吝嗇なること。財を貪ることりて、出だすに吝なること。ものをしみ。けち。南史「何胤傳「晉宋以來、宰相以文義自逸、敬容獨勤吏務、貪惜爲時所嗤鄙」」

だんりん 〔檀林〕（名）佛語。㊀檀越の布施によりて衆僧の住居する所。即ち、寺の稱。李紳詩「世人遙禮二檀林」㊁寺院にて僧侶の修學する所。學寮。檀所。檀場。元亨釋書「山門・檀林凡叢門當有者、具體而成」「言節用「檀林（ゼンゴ）義云、林也」」法華經「塵此如來之座、清淨道德者之所集、猶如旃檀之林」

だんりん 〔談林〕（名）次條、又だんりんふう（談林風）の略。歷代滑稽傳「此の時、談林の俳諧滅亡のしるし也」はいかい袋「みづから談林の一流を起こし」

だんりんは 〔談林派〕（名）〔田代松意の號、談林軒に基く。一說には江戸神田鍛冶町に雪柴以下八九人の者、時時會合して俳諧の交りをなし、この席は我れらの俳諧談林なりといひをり、西山宗因の江戸下向の時、乞ひて十百韻を巢行せしに感服すといふ」俳諧の一派。西山宗因を宗とし、田代談林軒松意等の主張によりて創まり、漢語を交へ字餘りを好み、飄逸・滑稽を主とするもの。

だんりん-ふう 〔談林風〕（名）談林派の俳諧のよみぶり。歷代滑稽傳「此の時俳諧天下一統して、談林風をせぬ人なし」

たん-れい 〔端麗〕端正にして壯麗なること。ただしく立派なること。南史「風儀端麗、眉目如畫」

たん-れう 〔單寮〕（名）禪宗の僧官の名。西堂に次ぐもの。撮壤集「「單寮」」

たんれつ 〔單列〕（名）ひとならび。ひとつら。一列。武備志日本考「每戰必單列緩步」

たんれん 〔鍛錬〕㊀金屬を鍛へ錬ること。唐船噺今國姓爺「汝が鍛錬系圖にはよらず、所詮鋼の切れ次第」論衡「良工鍛錬、成爲銛利」㊁陷吏が巧みに構成して罪に陷ること。漢書「上奏長卿、則鍛錬而周内之」後漢書「鍛錬之吏」㊂錬磨。推敲。研究。杜甫詩「顯深慚鍛錬、才少愛提携」六一詩話「如周朴者、構思尤艱、時人稱、朴詩、月鍛季錬、未及成篇、已播人口」回修行を積むこと。修養を重ねること。國姓爺「元より日本弓矢に長じ、武道鍛錬隱れなく」

たんろ 〔坦路〕（名）平坦なる道路。たひらなるみち。坦途。坦道。

たんろ 〔湛露〕（名）たまりたるつゆ。しげくおきたるつゆ。楚辭「吸湛露之浮源」「谷」潘岳文「若湛露之晞朝陽」

だんろ 〔暖爐〕（名）火をたきて室内を暖むる爐。すとーぶ。白居易詩「煖爐生火早」歲時記「十月朔、有司進暖爐炭」

だんろん 〔談論〕談話また議論すること。言論。論談。後漢書「郭太「三年業畢、博通墳籍、善談論」」

だん-わ 〔談話〕ものがたること。はなし。㊁話。話談。伊呂波字類「談話」北

齊書[南]、趙郡李渾、嘗謔[冗]衆名類、詩酒正讓課、慢後到、一坐無復談話者」

だんわ 暖和　氣候のあたたかにしてうららかなること。のどかにあたたかなること。

だんわくゐい 談話會　(名)　互ひに談話するために催す會合。

たんね 單位　(名)　[一](數)量を測るときの目當て。量を測るために選ばれた、其れと同種の一定量。或る量と其の單位との比は、其の量の數値なり。[二]すべて物事の比較計算の本位となるもの。

たんねんせいしょく 單爲生殖　(名)　生物學上の用語。有性生殖の一變態。雌性細胞の受精によらずして發育し、終には成長體となるもの。適例は昆蟲類のありまきの雌のみ雄なくして仔を生み、或ひはどくだみの花の、花粉無くして結實する類。

たんねん 端尹　(名)　とうぐうだいぶ[東宮大夫]の唐名。

たんねん 探韻　韻字を探(さぐ)りとりて詩・賦を作ること。西宮記[九九]「王朝[九]文者探韵、輕下文人次第探之」源氏[玉]「御子たち・上達部よりはじめて、其の道のは皆探韻給はりてふみ作り給ふ。宰相中將、春といふ文字給はれりとの給ふ聲さへ、例の人にことなり」

たんね 丹繪　(名)　筆にて紅の彩色のみを施したる錦繪。享保の初め頃、江戸逸草同朋町和泉屋權四郎の創意して賣り始めたるものと。べに五。紅摺。燕石雜志「明和以前はみな筆にて彩色したり。これを丹畫といひ、又、紅畫といへり」

たんねん 團圓　[一]まろきこと。まどか。[二]をはり。終末。結末。終局。[三]一家の和合すること。白居易詩「家居團

養[養]、春屬幸團圓」

だんをく 暖屋　(名)　だんばう(暖房)に同じ。陰餘叢考「新遷居者、隣里贈酒食、過飲曰暖屋」輟耕錄「今之入宅與遷居者、隣里醵金治具、過主人飲、謂之曰煖屋、又曰煖房」

だんをち 檀越　(名)　(梵 Dāna-pati)　だんな(檀那)に同じ。三代實錄[七、貞觀五年五月]「爲寺檀越(アテ)」萬[十]「檀越(アテ)やしかもないひそ、てこら我がえだちはたらば、なれもなからかむ」翻譯名義集「「稱檀越者即施也、此人行施、越貧窮海」

だんをつ 檀越　(名)　前條に同じ。盛衰記[廿四、八]「代代の國王を以て、我が寺の檀越とせん」樂陶文帝文[三]「竹籃形齋、永爲檀越」王維詩「上人飛錫杖、檀越施金錢」

だんをどし 段絨　檀絨　(名)　いろいろをどし(色色縅)に同じ。

だんをん 暖溫　(名)　あたたかい。あたたかみ。溫暖。

ち

五十音圖にて第十七、即ち、多行・伊列の假名。伊呂波歌にて第八の假名。

字體 【萬葉假名】知・智・致・撥・池・馳・笹・恥・治・遲・峙・値・陳・鎭・珍・至・道・路・千・乳・茅・父・血・市。【平假名】ち・ち。ち・ち(知より出づ)。ち(遲より)。ち(千より)。【片假名】チ・千(千より)。チ・チ・天・ち・ち(知より)。

表はす音 知・智・致・撥・池・馳・笹・恥は漢呉音ヂ、治・遲・峙・値は漢音チ、陳は漢音チン、鎭・珍は漢呉音チン、至は漢呉音シ・古音チ、道・路・千・乳・茅・父・血には何れもチの訓あり、市は訓イチなり。又、地は漢音チなり。此れ等を假りてチの音を表はせり。今ちの表はす音は

一、表音的假名遣にては　(イ)子音tと母音イとより成る音節。羅馬字にては之をchiと書す。(子音tとshとの說明は**た**及**し**の條を見よ)。此の音、加行・佐行・多行の淸音、又は各種の促音の前にありて、且つ音變(ヘンピン)なき時は、母音イ脫落して子音tshのみとなるを常とす。「ちかし」(近)・「ちそう」(馳走)・「ちち」(父)・「ちっそく」(窒息)・「ちっぷく」(蟄伏)の類。こは母音イの前にある音がtsh、次に來たる音がk・s・sh・tなればなり、イも之に同化せられて無聲音となり、遂にその前に在るsh音と融合して消失するに至るなり。方言によりては之を普通のチと發音するもあり、又、東北地方の方言にてはチ音はツに似たる音となり、チとツとの間に發音上の區別なし。チは奈良朝にては子音tと母音イとより成る音節即ちtiなりしが、いつしか變じて現今の如き音となれるなり。現今も外國語のti音をチと轉じ呼ぶこと多し。「ちべっと」(西藏 Tibet)の如し。(ロ)一語中にあるちい又はちーはイ音tとshと母音イの長音とより成る音節を表はす。「ちいてん」(八名・「ちーむ」(組)の如し。(ハ)ちゃ・ちゅ・ちょ・ちえ・ちぃ・ちぇ・ちぁ・ちぉ・ちゅ・ちょ・ちぇ・ちぃ又はちぁ・ちぉ・ちゅ・ちょ・ちぇ・ちぃは、それぞれイ子音tとshとに母音ア・ウ・エ・オの添ひて成れる音節を表はす。「ちゃんぴおん」(選手)・「ちゃ」(茶)・「ちゅっちょく」(蟄謹)・「ちぃえりー」(櫻實)の如し。ちゅは又外國語のtyu又はti音を表はすに用ひたるものあれど、これ等も普通はチュと發音す。「ちゅにす」(國名 Tunis)の類これなり。(ニ)ちゃー・ちゅー・ちぇー・ちょー・ちぃあ・ちゅう・ちぇい・ちょう又はちぁー・ちぅー・ちぇー・ちぉーは、それぞれ子音tとshとに母音ア・ウ・エ・オの長音の添ひて成れる音節をあらはす。「ちゃーち」(教會)・「ちゅうい」(注意)・「ちぇーん」(鎖)・「ちょーく」(白墨)・「ちぃあい」(寵愛)・「ちぅーびんげん」(地名)の如し。

二、歷史的假名遣にては　(イ)一のイに同じ。(ロ)ちひは通常チーと發音す。「ちひさし」(小)の如し。(ハ)漢字音に於てちゃ・ちゅ・ちょはチャ・チュ・チョと發音す。(ニ)漢字音に於てちう・ちふ・ちゆうはチューと發音す。「うちう」(宇宙)・「ちふ」(蟄)・「ちゅう」(忠臣)の如し。國語の「ちふ」と云ふの約も亦チューと發音す。(ホ)漢字音に於てちやう・ちようはチョーと發音す。「ちやう」(町)・「ちんちよう」(珍重)の如し。ちの濁音の假名。

字體 【萬葉假名】遲・治・地・持・馳・尼・旎・泥。其の他、知・智・道など、淸音の假名をも用ふ。【平假名】及び【片假名】共に淸音の假名に濁音符を附したるものを用ふ。但し古くは濁音符なきもあり。

表はす音 遲・治・地・持は呉音ヂ、馳・尼・旅は漢音ヂ、泥は漢音デイ又はヂなれば、此れ等を假りてヂの音を表はせり。今ぢの表はす音は

一、表音的假名遣にては　本來子音dとj(ジ)と母音イとより成る音節を表はすべきものなれど、この音は九州及び四國の一部分を除く外、我が國には存在せず(d音の說明は**だ**の條に、j音の說明はじの條にあり)又、外國語のdiをぢに

て(dyu又はdū)をぢゅにて(dja・dji・dju・djo・djoをぢゃ・ぢ・ぢゅ・ぢょにて表はせるものあれども、これらも通常ジ及びジュ・ジャ・ジ・ジュ・ジェ・ジョと發音す。「ぢうむ」(Radium)・「ぢっまー」(人名 Dumas)・「ぢゃんぴ」(河名 Djanbi)・「ぢぶち」(地名 Djibuti)・「ぢぇんど」(人種名 Djend)の類、是れなり。

二、歷史的假名遣にては　(イ)ぢはすべてジと發音す。「ふぢ」(藤)・「ぢん」(陣)の如し。ぢは奈良朝に於ては子音dと母音イとより成る音節、即ちdi音を表はせるものなりしが、この音變じて、恐らく子音dとjと母音イとより成る音節となり、更にd音を脫落してジとなりしものなるべし。(ロ)ぢいはジーと發音す。「ぢいさん」(爺樣)の如し。(ハ)漢字音に於てぢゃ・ぢゅ・ぢょはジャ・ジュ・ジョと發音す。「しふぢゃく」(執著)・「びゃくぢゅつ」(白朮)・「ぢょや」(除夜)の如し。(ニ)漢字音に於て、ぢう・ぢふ・ぢゆうはジューと發音す。「ざつぢう」(雜重)・「ぢふ」(衆)・「ぢゅうばこ」(重箱)の類。(ホ)漢字音に於てぢやう・ぢようはジョーと發音す。「ぢやうぶ」(丈夫)・「ぢよう」(穰・嬢)などの字音の如し。

ち 乳　(名)　[一]哺乳動物の分娩後、其の乳房より分泌する白色の汁。生兒はこれを飲みて成育す。ちし。ち。乳汁。萬[十]「みどり兒の知(チ)こふが如く、あまつ水あふぎてぞ待つ」宇津保[俊蔭]「ただ乳のまするをりばかりゐて來て、負ひかづき葉ふ」和名[三]「乳智母所以飲子之汁也」[二]ちぶさ。ちくび。神代紀[下]「露其胸乳(チ)」源[蜻蛉]「ふところに入れて、うつくしげなる御ちをくくめ給ひつつ、たはぶれる給へる御さま、み所多かり」狹衣[三]「ひとへの御ぞの胸すこし明きたるより、御乳の例ならず黑う見ゆるに」[三]旗・幟・幕・帆又は羽織・草鞋などの緣(ヘリ)に附けて、竿・帆桁又は紐・繩などを通す用となすもの。其の形、乳首に似たるよりいふ。みみ。つり。ちがた。耳。

ちのおん 乳恩　乳を飲ませて育てくれたるものに對する恩。母の恩。盛衰記[廿八、敎訓]「思ふ事とては老いたる母が事計り、其れは迚も乳の恩忘れ給はじなれば、よく育み給へ」

ちをあます 餘乳　赤子の、飲みたる乳を吐く。

ち 血　(名)　[一]ちしほ。血液。神代紀[上]「劍刃垂血(チ)」祝詞式[大祓]「天乃血(チ)乘、飛鳥乃瀨無久」和名[三]「血即肉中赤汁也」[二]ちのみち。血道の略。「血がおこる」

ちになく 鳴血　血をはきて鳴く。多く杜鵑の鳴くにいふ。猿、きふけつ(泣血)を見よ。禮記[檀弓]「高子皐執親之喪、泣血三年。注言、泣無聲如血出」

ちのあまり 血餘　末の子。別(ハ)天皇職人鑑「子におろかはなけれ共、わけて御身は血のあまり」

ちのあめ 血雨　刃傷の爲めに、多數の死傷を生じて、流血の夥しき樣にいふ語。

ちのすぢ 血筋　ちすぢ(血筋)に同じ。冥途飛脚[下]「血の筋は悲しい、中の好い他人より、久離切った親子の親しみは世の慣ひ」

ちのなみだ 血淚　血のまじりて出づる淚。極めて悲しき時にこぼす淚。竹取「翁・おうな、ちのなみだを流してまどへど、かひなし」古今[哀傷]「血の淚おちてぞたぎつ白川は、君が世までの名にこそありけれ」

ちのゆかり 血緣　血筋の關係。血緣のちなみ。心中萬年草[下]「臨終の暇請ひをする樣で、心細うて悲しやと、物が知らする血の由緣」

ちのわかれ 血分　血筋をわけたること。同じ血統をひくこと。蟻山姥[三]「血の分れとて、顏は親光に似たれども」

ちをあやす 血を注ぐ。はづかしむるに譬へていふ。盛衰記[石橋]「權五郎景政が末葉と名乘りながら、先祖の首に血をあやす、欲心の程こそ不當なれ」

ちをすゝる 啜血　誓ひをなす。ちかふ。運歩色葉「啜血 戰爭のありしことにいふ。史記[淮陰侯]「新噬血閼與」

ちをわける 分血　血族の關係あり。骨肉の關係あり。

(誹)**血て血を洗ふ** [一]拳を以て拳を止め、惡を以て惡を制する譬へにいふ。發心集「ある經に、出世の名聞は、たとへば血をもって血を洗ふが如しと說けり」唐書[黃巢]「汝國已殺突董等、吾又殺汝、猶以血洗血、汚益甚爾」雜阿含經[廿]「以血洗血、捨惡受惡」[二]親族の惡事をあばく。血族同士が相爭ふ。

(誹)**血の筋は七代** 父祖の遺傳は七代に及ぶといふこと。

(誹)**血の出るやうな金** 非常に辛苦して調へたる金。血の涙のやうな金。

(誹)**血は血だけ** 血族は血族だけに、他人より信賴が出來る。

ちゝ 父　(名)　ちち。かぞ。記[下]「うまらに聞としもちをせ、麻呂が知(チ)」

ちゝ 鈎　(名)　つりばり(釣針)に同じ。神代紀[下]「瘦駮鈎、此云手捷鈎(チ)」同「賣其故鈎(チ)」

ち 市　(名)　いち(市)に同じ。記[下]「やまとのこのたけ知(チ)に、こ高る市のつかさ」

神代紀[上]「吾湯市(チ)村」

ち 路　道　(名)　みち。ちまた。道路。記[上]「伊都能知(チ)和岐知(チ)和岐豆」神代紀[上]「道(チ)返」字鏡「岐知(チ)太」

ち 風　(名)　かぜ(風)に同じ。熟語にのみ用ふ。神代紀[下]「疾風(チ)」和名「暴風知波夜」萬[十]「秋風の千(チ)えの浦まのこづみなす、心はよりぬ後は知らねど」

ち 茅　(名)　【植】ちがや(白茅)の異名。神代紀[上]「茅(チ)纏」萬[三]「あさ茅(チ)はら茅(チ)ふに足踏み心ぐみ、吾がもふこころが家のあたり見つ」和名「茅。大淸經云、茅、一名、白豹草智」字鏡集「茅(チ)」

ち 地　(名)　[一]つち。大地。地球。(天の對)字津保[吹上]「琴少しねたうつかうまつるに、雲の上より響き、地の下よりどよみ」易經[上]「本乎天者親上、本乎地者親下」[二]地面。地所。[三]くが。をか。陸地。[四]ところ。場所。地方。孟子[公孫丑下]「地利不如人和」[五]領土。領地。邦土。狂言[附子]「蓬萊の島をば後に見なし、中略足に任せて行く程に、行く程に、日本の地にも著きにけり」[六]たちば。をりば。立脚地。[七]境遇。境涯。[八]しも。下方。(天の對)[九]地球を主宰する神。地神。[十]もとゐ。したぢ。基礎。根源。

ちする くゐふう 地水火風　佛語。物質の四大元素、即ち地と水と火と風と。四大。砂石集[四]「よしもなく地水火風をかりあつめ、われと思ふぞ苦しかりける」天網島[下]「此のからだは地水火風、死ぬれば空に歸る」

ちにおつ 墜地　[一]地上に落つ。[二]此の世に生まれ出づ。[三]全くすたる。「名塵地に落つ」論語子罕「文武之道、未墜於地」

ちにまみる 塗地　失敗して再び立ち得ざるに至る。二度と世間に出られ

がたくなる。史記高祖紀「一敗塗地」

ちの さんぢゃう 地三形　地面につきて高・低・平の三つの形。

ちの ししゃう 地四象　地にある水・火・土・石の四つの物象。

ちの り 地利　一土地の便利。地勢の自然の便利。用明天皇職人鑑「野づらの石がき・菱瀾堀・要害うとしと申せ共、地の利、防戰堅固なれば」孟子公孫丑下「天時不如地利」二土地より生産する物。管子「地利不可以錫、民力不可以殫」

ち ひさし 地久　地の永久につきざるをいふ。老子「天長地久、天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生」

ちを かへす 反地　大地を翻すが如く暴ぎたつ。盛衰記世六遺「八條の亭には謀叛の輩打ち入って、火を懸けたりと云ひければ、京中地を反へし、上下心を迷はす事夥し」

ちを はらふ 掃地　何物も殘らず。皆無となる。漢書賈誼傳「秦滅六國、上古遺烈、掃地盡矣」

(諺)地が傾いて舞が舞はれぬ　あまりに物事に勿體をつけ、言ひ草多くて、はかどらぬ譬へにいふ。授業編「田舍・遠國などは、書の乏しきに、師の得がたき、學友のなき、作業のせはしき、何のかのと、車誘地が傾いて舞がまはれぬと」吾吟我集「地がかたぶきて舞はれぬ舞やこれならん、岸根にとけて行くかたつぶり」

(諺)地にぬきあしず　肩身せまく恐れ憚る。天に跼り地に蹐す。小町踊春上「雪せぬは地にぬきあしか春の雨」

(諺)地の利は人の和に如かず　地勢の利便は人の一致・和合には及ばず。太平記四「人和」「天の時は不如地利、地の利は不如人和」孟子公孫丑「天時不如地利、地利不如人和」

(諺)地を打つ樋ははづるとも　うつつちはは づるともに同じ。うつ(打)の條を見よ。

(諺)地を易ふれば皆然り　位置・境遇を交換すれば、何れも皆同一なり。孟子離婁「曾子子思同道、曾子師也、父兄也、子思臣也、微也、曾子子思易地則皆然」

ち 知 (名) 一知覺。知識。二しりあひ。なじみ。ちかづき。知人。左傳昭公廿八年「叔向適鄭、觀萇弘、一言而善、執手逐如故知」三其の人となりを知られて優遇せらるること。知遇。岑參文「受國士知」四つかさどること。知事。五ち(智)に同じ。易經繫辭「知小而謀大」荀子「是是非非、謂之知」

ち じん ゆう 知仁勇　知と仁と勇と。中庸「知仁勇三者、天下達德也」

ち 智 知 (名) 一物事を理解し、是非を辨別する心の作用。ちゑ。智能。智力。徒然草「我が智を取り出でて人に爭ふは、角有る物の角を傾け、牙有る物の牙を噛み出だすたぐひなり」二かしこきこと。さかしきこと。智計。智謀。智略。智慮。戰國策「將智以武」

ち 痴 (名) 一世の中のよくをさまること。善政の行きわたること。治世。太平。書經堯典「咨、嘗不同、同歸于治」二まつりごと。政治。蜀志諸葛亮「芝所在清殷有治績」三官廳の所在地。劉禹錫文「孟秋至治所、首冬遷、賓、拜章入覲」四治療。療治。ち。「治を托す」

(諺)治に居て亂を忘れず　治世にも戰亂の時を忘れずに、武を練りて怠らず。易經繫辭「居治而不忘亂」

ち 治 (名) 一世の中のよくをさまること。治世。太平。書經堯典「咨、嘗不同、同歸于治」二

ち 致 (名) おもむき。さま。風致。風情。「致あり」「致を異にす」一しもと。むち。二笞罪。笞刑。たたき。

ち 徵 (名) 五音の一。じふにりつ(十二律)を見よ。史記樂書「聲音之道、與政通矣、中略微爲事」

ち 雉 (名) 一蜘蛛(名)(動)きじ(雉子)に同じ。二(動)くも(蜘蛛)に同じ。

ち 千 (數) 一百の十倍。せん。神代紀「千引磐石」「千箭之報」「千人所引」萬葉「たらちしの母が目見ずておほほしく、いつ知る向きてかあが別かるらん」

ち 柱 (名) 絃樂器の絃の下に插み、絃をもたげて張りを强くして、爪・撥などを觸るるに便にし、又、音の高低を定むるもの。雙脚あり、曲がりて開き、頭に刻みありて絃を受く。こま。和名「柱古度」

ち 地 (名) 一ち(地)に同じ。二其の土地。其の地方。本土。鄉土。「地の人」「地の產」一代女「世間は娘といはれ、內證は地の御客を勤めける」三ちかま。近傍。「地まはり」四うまれつき。風情。「致あり」「致を異にす」

ち 笞 (名) 一しもと。むち。二笞罪。笞刑。たたき。

ち 徵 (名) 五音の一。じふにりつ(十二律)を見よ。史記樂書「聲音之道、與政通矣、中略微爲事」

ち 雉 (名) 一蜘蛛(名)(動)きじ(雉子)に同じ。二(動)くも(蜘蛛)に同じ。

ち 千 (數) 一百の十倍。せん。神代紀「千引磐石」「千箭之報」「千人所引」萬葉「あしびきの山のこぬれのほよ取りて、かざしつらくは知らとせほぐとぞ」和名「千人所引磐石知比波」二數多きこと。多數。記上「やち知らほこの神のみこと」推古紀「よろづよにかくしもがも、知る世にもかくしもがも」萬葉「はらばらにおもほゆるかも、白雲の智らへに隔てる筑紫の國は」

ち 箇 (助數) 數をかぞふるとき、數詞に添ふる語。記上「かな働も、いほ知らもがも」欽明紀「良馬七十四匹」勢語「比叡の山を、はたちばかり重ね上げたらん程して」

(接尾) 方角・場所等を示すに用ふる語。記下「くぐりの山の、ち知らど知らの山のかひに」神功紀「を智らの方のあらら松原」萬葉「たらちしの母が目見ずておほほしく、いつ知る向きてかあが別かるらん」

ち 地 (名) 一ち(地)に同じ。二其の土地。其の地方。本土。鄉土。「地の人」「地の產」一代女「世間は娘といはれ、內證は地の御客を勤めける」三ちかま。近傍。「地まはり」四うまれつき。風情。「致あり」「致を異にす」

ち 知 (名) 一知覺。知識。二しりあひ。なじみ。ちかづき。知人。左傳昭公廿八年「叔向適鄭、觀萇弘、一言而善、執手逐如故知」三其の人となりを知られて優遇せらるること。知遇。岑參文「受國士知」四つかさどること。知事。五ち(智)に同じ。易經繫辭「知小而謀大」荀子「是是非非、謂之知」

ち じん ゆう 知仁勇　知と仁と勇と。中庸「知仁勇三者、天下達德也」

ち 智 知 (名) 一物事を理解し、是非を辨別する心の作用。ちゑ。智能。智力。徒然草「我が智を取り出でて人に爭ふは、角有る物の角を傾け、牙有る物の牙を噛み出だすたぐひなり」二かしこきこと。さかしきこと。智計。智謀。智略。智慮。戰國策「將智以武」

ち 痴 (名) おろか。ばか。しれもの。「痴愚」

ち 治 (名) 一世の中のよくをさまること。善政の行きわたること。治世。太平。書經堯典「咨、嘗不同、同歸于治」二まつりごと。政治。蜀志諸葛亮「芝所在清殷有治績」三官廳の所在地。劉禹錫文「孟秋至治所、首冬遷、賓、拜章入覲」四治療。療治。ち。「治を托す」

(諺)治に居て亂を忘れず　治世にも戰亂の時を忘れずに、武を練りて怠らず。易經繫辭「居治而不忘亂」

ち 致 (名) おもむき。さま。風致。風情。「致あり」「致を異にす」一しもと。むち。二笞罪。笞刑。たたき。

ち 徵 (名) 五音の一。じふにりつ(十二律)を見よ。史記樂書「聲音之道、與政通矣、中略微爲事」

ち 雉 (名) 一蜘蛛(名)(動)きじ(雉子)に同じ。二(動)くも(蜘蛛)に同じ。

ち 千 (數) 一百の十倍。せん。神代紀「千引磐石」「千箭之報」「千人所引」萬葉「あしびきの山のこぬれのほよ取りて、かざしつらくは知らとせほぐとぞ」和名「千人所引磐石知比波」二數多きこと。多數。記上「やち知らほこの神のみこと」推古紀「よろづよにかくしもがも、知る世にもかくしもがも」萬葉「はらばらにおもほゆるかも、白雲の智らへに隔てる筑紫の國は」

ち 箇 (助數) 數をかぞふるとき、數詞に添ふる語。記上「かな働も、いほ知らもがも」欽明紀「良馬七十四匹」勢語「比叡の山を、はたちばかり重ね上げたらん程して」

(接尾) 方角・場所等を示すに用ふる語。記下「くぐりの山の、ち知らど知らの山のかひに」神功紀「を智らの方のあらら松原」萬葉「たらちしの母が目見ずておほほしく、いつ知る向きてかあが別かるらん」

ち 柱 (名) 絃樂器の絃の下に插み、絃をもたげて張りを强くして、爪・撥などを觸るるに便にし、又、音の高低を定むるもの。雙脚あり、曲がりて開き、頭に刻みありて絃を受く。こま。和名「柱古度」

ち 地 (名) 一ち(地)に同じ。二其の土地。其の地方。本土。鄉土。「地の人」「地の產」一代女「世間は娘といはれ、內證は地の御客を勤めける」三ちかま。近傍。「地まはり」四うまれつき。風情。「致あり」「致を異にす」

もちまへ。本性。「地どる」五もと。したたち。素質。「地がね」無名抄「面に證得がほなる氣色どもは甚しけれど、地に歌のさまを知りて、ほめも誹りする人は無し」六ぢあひ。おりぢ。地質。「織物の地」「紺地」七きめ。はだへ。はだ。「地がこまか」「地が荒れる」八下地の染色。おいろ。源氏「まばゆき色にはあらで、くれなゐ・紫・山吹の ぢの限り織れる御こうちきなど」榮華根合「地は白くて、紋は青きざらがんの二へ紋の唐衣」九圍碁にて、盤面に碁石の圍みて占めたる空際。其の空際の相手より廣きを勝ちとす。源氏「碁打ちはてて中略待ち給へや、そこは ぢにこそあらめ。此のわたりのこふをこそ」十文章中の人の詞に對して、作者の說明の文の稱。十一ちうたひ(地謠)の略。十二俳諧の詞。下文を見よ。「ひとりごと」十三俳諧に地・自句・やり句・格外といふ事侍り。地といへるは、さのみ面白き事にもかかはらずして、前句によくつけて、とほるをいふべし」蕉門俳諧語錄「作法、體格にまづ優美にして一曲あるは上品なり、また巧を取り、めづらしき物になるは其の次なり、中品にして多くは地の句なり」十四楊弓・大弓にて錢を賭物にする時の二錢の隱語。一語一言「賭的・矢代の笹掛錢の異名中略二を ぢ」一時軒屋筆「一、かけものは中略錢のときは、壹錢を餓鬼、二錢を地といひ」十五ちがひ(地具)の略。十六ちがみ(地紙)の略。一代男「扇屋の女に、今はやる地などを拵て參れの由、宿に呼び寄せ」十七しろうと。平人。十八實地。實際。浮世風呂「地と狂言との差別は、そこだは」

ぢ 治 (名) 一ち(治)に同じ。二療治。治療。療法。榮華玉村「此の殿はちひさくより風おもくおはしますとて、風の ぢどもをせさせ給ふ」三病氣のなほること。平愈。快愈。

ぢ 一痔 (名) 肛門の瘤れ又は痛みて、血或ひは粘液を出だす病氣。痔漏・穴痔・蓮痔・疣痔等あり。痔疾。和名「痔智之夜萬比」「下學集「痔病疾之」

ぢ 一持 (名) 「持ちの音、持ち合ふ義」歌合せ・圍碁などにて、雙方に優劣なきこと。もち。あひもち。あひこ。亭子院歌合「左はらん二つあり、右は山ざくら又ありとて ぢにす」宇津保祭使「此の御文は今めきたり、すぢなどの勝りたりけり、ぢなりと定められて」「運歩色葉「持碁」左傳正義「奕棋、謂不能相害爲持」

ぢ 箇 (接尾) 「ち(箇)に同じ。竹取「翁とし七そぢに餘りぬ」同「翁ことしは、いそぢばかりなりけれども」

ぢ 路 (接尾) 「ち(路)を連聲にて濁るもの」一みち。街道。「山 ぢ」「あづまぢ」記「さざなみ遲々を、すくすくと我がいませばや」萬「君が行きけ長くなりぬ奈良遲々なる、しまのこだちもかむさびにけり」二一日にて行くべき道のり。「三日ぢ」

ちー 一尺 (名) 支那にて長さの基本單位の稱。我が國の一・一八二尺に相當す。

ちーく (英Teak) (名) 【植】次條の略。

ちーくの-き 麻栗樹 (名) 【植】馬鞭草(クマツヅラ)科・麻栗樹屬の常綠喬木。幹の高さ十丈に達し、眞直にして樹皮灰白なり。葉は對生、倒卵形、長さ一・二尺、葉裏に白毛を帶ぶ。花は小形白色にして、香氣を有す。東印度の原產。材は造船材として最も貴重なり。ちーく。

ちーず (英Cheese) (名) かんらく(乾酪)に同じ。

ちーはー (名) 【支那語一八(ci-pa)の訛り】官職に類する一種の賭事。

ちーあき 千秋 (名) ちとせ。せんしう。千年。永遠。記「豐葦原之千秋」「天五百秋之水穗國者」

ちーあし 地足 (名) 馬術の語。地乘(ヂノリ)の歩み。小笠原記

ぢあすたーぜ (英Diastase) (名) 酵母の一。帶黃白色の粉末にして、乾燥・粉碎せる麥芽(ムギ)より採集す。醱酵して、澱粉を麥芽糖に變ずる作用あり。胃腸病の藥劑として用ひらる。

ちーあなぎ (名) 馬の一種の病氣。此の病に罹る馬は、喧嘶し、前足重くして行くこと能はずと。和名十二月「白樂相馬經云、腦病阿奈知馬有此病、則喧嘶、衣毛焦折、前足重不能行」

ちーあはせ 血合 (名) 血筋をためすために、器に水を入れて血と血とを合はせ、其の混じたるを血筋と定むること。言葉寄「ちあはせ。血合、わが子・ひとの子定めがたきとき、器に水を入れて血をあはする事なり」

ちーあひ 血合 (名) 魚肉の、紫黑色をなせるところ。本朝食鑑八「集解、鰆中略肉中有紫血色一條、內有細刺、如鮐鯉之紫血肉、俱鯵曰血合也」紫血肉。

ぢーあひ 地合 (名) 布帛の地質。ぢ。おりぢ。

ちあへーの-まつり 道饗祭 (名) みちあへのまつり(道饗祭)に同じ。

ぢーあみ 地網 (名) 漁具。ひきあみ(曳網)を見よ。

ぢーあゆ (名) 東北の風をいふ、北國の方言。物類稱呼

ぢーあらし 地嵐 (名) 其の地方の山より、沖の方に吹き出だす風。

ちーあれ 血荒 (名) 未だ形を成さざる胎兒の墮ちて、姙婦の身體の穢れたること。御改正服忌令「血荒。夫七日、婦十日中略形體有之者可爲流產、形體無之者可爲血荒」

ちーあん 一治安 (名) 一世の中の治まりて安寧なること。國家・社會の安寧・秩序の保持せらるること。爆發物取締罰則第一「治安を妨げ」史記孝文本紀「古者、殷周治安、皆千餘歲」二世の中を治めて安寧ならしむること。國家・社會の安寧・秩序を保持すること。漢書賈誼「因陳治安之策」「ちあん ぼうがい」治安妨害　國家・社會の安寧・秩序を妨害すること。

ちあん-けいさつ 治安警察 (名) 【法】警察の一。國家・社會の安寧・秩序に對する危害の豫防又は排除を直接の目的とするもの。通常警察と高等警察とに分かつ。保安警察。(行政警察の對)

ちあん-さいばんしょ 治安裁判所 (名) 明治二十三年十月三十一日以前に於ける區裁判所の稱。明治十九年五月五日勅令第四十號裁判所官制第一「本令中裁判所とあるは治安裁判所中略を總稱す」裁判所構成法施行條例第二「從來の治安裁判所は裁判所構成法に定めたる區裁判所とし」

ちあん-さく 治安策 (名) 國家を治めて安寧ならしむる方策。

ちい 一絺衣 (名) うば(姥)に同じ。かたびら(帷子)に同じ。布の衣。太平記三「太平記「蕘賜中略絺衣與琴、爲蕘倉廩予牛羊」

ちーい 一地異 (名) 地上に起こる異變。卽ち、地震・海嘯・噴火・洪水等の類。地變。「天變・地異」

ちーい 一地衣 (名) 【植】ちえ(地衣)に同じ。

ちい 祖父 (名) ぢぢ(祖父)の音便。小兒の語。釋親考「父之考爲王父、中略父之妣爲王母、中略丘氏曰、今稱祖父祖母、大明會典曰、卽公婆」

ちい 爺 (名) 老年の男子。おやぢ。老翁。老爺。小兒の語。醒睡笑「孫の七つ八つなるを近づけ、元日に我が額を見、日本のかなとこは皆ぢいのかなとこと云へと、ねんどろに教へし」

ちーいう 一知友 (名) 心を知りあひたる朋友。親友。史記伯夷「公卿相造請、禹禹終不報謝、務在絕知友賓客之請」漢書江充「宗族知友、多得其力者」

ちーいう 一置郵 (名) しゅくば。宿驛。うまつぎ。置驛。孟子公孫丑上「德之流行、速於置郵而傳命」韻會「馬傳曰置、步傳曰郵」

ぢいーがーせ 石鼈 (名) 【動】軟體動物中、腹足類の一種。體は稍圓形にして、長さ七八分許り。背面には縱に八枚の石灰板を有し、腹面に存する幅廣き足底を以て海岸の岩石に附著し、これを剝離すれば體を捲く。ひざらがひ。(せがいぢ)

ぢいーがーひげ (名) 【植】おきなぐさ(白頭翁)の異名。

ぢいーがーひざ (名) 【植】あまどころ(萎蕤)の異名。

ぢーいき 地息 (名) 地面より蒸發する水氣。

ちーいく 一智育 (名) 智能を啓發するために施す教育。智能の發達を主たる目的とする教育。智識を授くるを目的とする教育。(德育・體育の對)

ぢいさん-ばあさん (名) 【植】しゅんら(春蘭)の異名。

ぢーいた 地板 (名) 一いたじき(板敷)